

地区	遺構名	時期	形態	張り出し	規模1(m)	規模2(m)	面積(m ²)	主柱穴	炉	竈	遺物
G区	SH0001	弥生終末期中段階	方形	-	3.5	4.5	15.8	4	楕円形		
G区	SH0003	弥生後期前半中段階	円形	-	4	-	12.6	4	楕円形		搬入土器1(備中)
H区	SH1001	弥生後期後半新段階	円形	-	5.6	-	17.6	(5)	-		搬入土器1(備中) 棒状鉄器1
H区	SH1002	弥生後期前半古段階	円形	-	4.5	-	14.1	4	楕円形		ガラス玉20
H区	SH1004	弥生後期前半新段階	円形	有0.5×4m	4.8	-	15.1	4	楕円形	-	
H区	SH1005	弥生後期後半古段階	方形	有0.7×1.5m	4	(3.5)	(14.7)	2	円形+長楕円形		ガラス玉1鉄器片2
H区	SH1006	古墳前期前半古段階	方形	-	4.7	3.9	18.3	2	長楕円形		搬入土器(吉備型甕)
H区	SH1007	弥生後期終末期中段階	方形	-	6	-	-	4	円形	-	
H区	SH1008	弥生後期前半新段階	方形	-	4.5	3.3	14.9	2	地床炉	-	大型勾玉1
H区	SH1011	弥生後期前半中段階	円形	-	7.5	-	23.6	(4)	-	-	
H区	SH1013	弥生終末期新段階	方形	-	3.8	-	-	-	-	-	
I区	SH2002	古墳前期前半古段階	隅丸方形		(4.5)			(4)	隅丸方形		仿製鏡1
J区	SH4001	古墳前期前半新段階	長方形		4.2			2	長楕円形		焼成破裂土器
J区	SH4002	古墳前期前半新段階	方形?	?							
J区	SH4003	古墳前期前半古段階	長方形		3.3	4.0	13.2	2			
L区	SH5003	古墳前期前半古段階	方形					(4)			石鍾
L区	SH5005	弥生後期前半中段階	円形					4	円形+隅丸方形		ガラス玉2勾玉1(ガラス製)
L区	SH5010	古墳前期前半古段階	方形?					(4)	隅丸方形(土手有)		ガラス玉1
L区	SH5016	弥生後期後半古段階	円形?					(7)	楕円形		
L区	SH5017	弥生後期後半新段階	方形					(4)	楕円形		
L区	SH5020	弥生終末期	方形?					(4)			
L区	SH5021	弥生終末期	円形?					(4)			
M区	SH6004	弥生後期前半中段階	円形					(6)	方形?		
M区	SH6006	弥生後期前半中段階	長方形?						無		
M区	SH6007	古墳前期前半新段階	方形		4.5	4.5	20.3	(2)			
M区	SH6009	弥生後期前半新段階	円形					(4)			
M区	SH6020	弥生後期後半新段階	方形					(4)	円形		
M区	SH6032	弥生終末期中段階	隅丸方形					(4)	円形(土手有)		
M区	SH6033	弥生終末期中段階	円形					(4)			
N区	SH7001	弥生後期後半新段階	長方形		4.1	3.6	14.8	2	楕円形		
N区	SH7003	弥生終末期中段階	長方形					(2)	楕円形		
N区	SH7004	弥生終末期中段階	長方形					2	方形+小ビット		ガラス玉1勾玉1土玉2
N区	SH7005	弥生後期終末期古段階	長方形		4.1	3.6	14.8	2	方形+小ビット		焼成破裂土器
N区	SH7305	弥生後期後半古段階	円形	有(方形)							搬入土器1(吉備)
N区	SH7306	弥生終末期古段階	隅丸方形					(4)			
N区	SH7310	弥生後期前半古段階	円形		(6.6)		(20.7)	(5)			
O区	SH8005	弥生後期後半古段階	多角形	有(2)							
O区	SH8007	弥生終末期新段階	方形								棒状鉄器1
O区	SH8009	弥生後期前半古段階	円形		(6.0)			(6)	円形		
O区	SH8203	弥生後期前半中段階	円形	有(1)	6.1		19.2		円形+隅丸方形		ガラス玉1
O区	SH8206	弥生後期前半新段階	円形		(6.0)						
P区	SH9003	弥生後期後半新段階	方形					(4)			勾玉1
P区	SH9004	弥生後期後半古段階	方形					(4)			
P区	SH9005	古墳前期前半古段階	方形		4.2			(4)	方形		
P区	SH9006	古墳前期前半古段階	方形								
P区	SH9301	弥生後期後半古段階	方形		5.2	5.0	26.0	4	円形		
P区	SH9302	弥生終末期新段階	長方形		4.5			2	楕円形		ガラス玉1
P区	SH9306	弥生終末期新段階	方形					(4)			
Q区	SH0007	古墳前期前半新段階	長方形						無	楕円形	
Q区	SH0016	古墳前期前半古段階	方形		3.2				無		
R区	SH3006	弥生終末期新段階	長方形		3.9	3.0	11.7		無		銅鏃1
R区	SH3010	弥生後期後半古段階	長方形		4.6	4.3	19.8		無	円形	
R区	SH3012	古墳前期前半古段階	方形		4.6	4.5	20.7	4	隅丸方形		ガラス玉1
R区	SH3305	弥生後期後半新段階	円形		(5.5)		(17.3)				
R区	SH3307	弥生後期前半中段階	長方形					(2)			
S区	SH1038	弥生終末期新段階	円形		5.8		18.2	(5)	楕円形		焼成破裂土器5
S区	SH1040	弥生後期後半新段階	長方形		4.3	3.2	13.8	2	長楕円形+楕円形		焼成破裂土器1
S区	SH1044	弥生後期前半中段階	円形	有1.5×0.6m	6.2		19.5	5	円形+楕円形		管玉2
S区	SH1047	古墳前期前半古段階	長方形		5.2	3.3	17.2	2	不明		

表9 竪穴住居跡一覧 その1

地区	遺構名	時期	形態	張り出し	規模1(m)	規模2(m)	面積(m ²)	主柱穴	炉	竈	遺物
S区	SH1052	弥生終末期中段階	長方形		3.7	2.9	10.7	無			焼成破裂土器1 滑石製勾玉1
S区	SH1057	弥生終末期新段階	円形		6.1		19.2	(5)	円形		ガラス玉2 銅鏃1
S区	SH1058	弥生終末期古段階	円形		5.1		16.0	4	円形		ガラス玉4 銅鏃2 鏡片1
S区	SH1060	古墳前期前半古段階	長方形		5.0	4.8		2	楕円形(周堤有)		焼成破裂土器1 銅鏃1
S区	SH1061	弥生後期後半古段階	方形		5.2	5.1	26.5	4	円形+長方形		銅鏃(武器形転用)1
S区	SH1063	弥生終末期古段階	方形		5.7	5.1	29.1	4	楕円形(小ビット)		焼成破裂土器2 搬入土器(西部瀬戸内)
S区	SH1065	弥生後期前半新段階	多角形		(5.6)		17.6		不明		
S区	SH1066	弥生後期後半新段階	長方形		4.4	3.9	17.2	2	円形		ヒスイ製勾玉1 ガラス玉1 鉄鏃1
S区	SH1068	弥生終末期古段階	方形		4.5	(4.0)	(18.0)	(4)	楕円形(小)+円形(小)+隅丸方形		焼成破裂土器1
S区	SH1069	弥生後期後半古段階	多角形(六角形)				18.4	6	円形		絵画土器(舟)
S区	SH1070	弥生終末期	長方形?								
S区	SH1072	弥生後期前半古段階	円形		(5.0)		(15.7)				
S区	SH1076	弥生終末期中段階	隅丸方形								
S区	SH1077	弥生後期前半中段階	長方形		3.8	3.5	13.3	無	楕円形		ガラス玉1
S区	SH1078	弥生後期後半新段階	方形					(4)			
S区	SH1083	弥生後期前半古段階	円形?					(8)	不明		
S区	SH1089	弥生後期前半古段階	円形?					(6)	楕円形		
S区	SH1090	弥生後期前半中段階	円形					(4)			
T区	SH1008	弥生終末期新段階	方形		4.5	4.3	19.4	4	楕円形		緑色凝灰岩製管玉1
T区	SH1019	古墳前期前半古段階	方形		4.0	3.9	15.6	(4)	隅丸長方形		
T区	SH1022	弥生終末期中段階	方形		4.6	4.5	20.7	2	隅丸長方形		
T区	SH1023	弥生後期前半中段階	円形					(4)			
T区	SH1024	古墳前期前半古段階	方形		-	-	15.0以上	(4)	隅丸長方形		
T区	SH1028	弥生終末期新段階	方形		4.3	-	19.0以上	(4)	地床炉		焼成破裂土器2
T区	SH1030	弥生後期前半古段階	円形		(7.0)		22.0	(5)			搬入土器1(河内)
U区	SH5002	弥生後期前半新段階	長方形		5.4	5	27.0	2			
U区	SH5006	弥生後期前半新段階	円形		3.6		(11.3)	無	楕円形		
U区	SH5007	弥生後期後半古段階	長方形		5.4	4.2	22.7				
U区	SH5009	弥生後期前半古段階	円形		4.5		14.1	4	円形+隅丸長方形		焼成破裂土器4
U区	SH5011	弥生後期前半中段階	円形		8.6		27.0		円形+隅丸方形		
U区	SH5017	弥生後期前半古段階	円形					(6)	円形		
V区	SH6013	弥生後期前半古段階	長方形?		3.6			無			
V区	SH6020	弥生終末期新段階	方形?					(4)			
W区	SH4005	弥生後期前半新段階	長方形?		2.7			無?			
W区	SH4010	古墳前期前半新段階	方形?					(4)			
W区	SH4012	弥生後期前半古段階	長方形?								
W区	SH4013	弥生後期前半中段階	円形								
I-1区	SH1001	古墳前期前半古段階	方形					2	楕円形		
I-1区	SH1002	弥生終末期古段階	?					(4)			
I-2区	SH2002	弥生後期前半中段階	円形?					5	円形+楕円形		
I-2区	SH2005	古墳前期前半古段階	長方形?					2	隅丸長方形		
I-2区	SH2009	弥生後期後半古段階	方形?					4			
I-2区	SH2010	弥生後期前半新段階	円形?					(7)			
I-3区	SH3002	弥生後期後半新段階	方形	有?				(4)	円形+隅丸方形		
I-3区	SH3007	弥生終末期中段階	長方形		2.9			2	楕円形		ガラス玉2
I-3区	SH3008	弥生後期後半古段階	長方形		3.5	4.8	16.8	2			
I-3区	SH3009	弥生後期後半新段階	円形		(5.0)		15.7	4	円形+隅丸方形		
I-3区	SH3010	弥生終末期古段階	方形					(4)			
I-3区	SH3017	弥生後期前半古段階	円形		(5.2)		(16.3)		円形		
I-4区	SH4002	弥生後期前半中段階	円形		5.8		18.2	(5)	円形+楕円形		ガラス玉2 ガラス管玉1
I-4区	SH4003	弥生後期前半新段階	円形		5.7		18.2	5	円形		
I-4区	SH4004	弥生後期後半古段階	多角形	有・方形				(5)	円形		ガラス玉7 ガラス管玉1

表9 竪穴住居跡一覧 その2

地区	遺構名	時期	形態	張り出し	規模1(m)	規模2(m)	面積(m ²)	主柱穴	炉	竈	遺物
I -4 区	SH4007	弥生終末期新段階	方形		4.4	4.6	20.2		小楕円形 + 隅丸方形		
II -1 区	SH1001	弥生終末期中段階	多角形?					(8)	円形		管玉 2 焼成 破裂土器 1
II -1 区	SH1005	弥生終末期古段階	隅丸方形		3.7	3.8	14.1	2	円形 + 隅丸方形		銅鏃 1 焼成 破裂土器 1
II -1 区	SH1006	弥生後期後半新段階	方形					4	楕円形		焼成破裂土器 4
II -1 区	SH1007	弥生終末期中段階	長方形		3.2	3.6	11.5	2	楕円形		
II -1 区	SH1008	弥生後期後半新段階	方形					4	小さな 焼土面		
II -1 区	SH1009	古墳前期前半古段階	方形		4.6	4.4	20.2		楕円形		
II -1 区	SH1010	弥生後期前半中段階	円形		7.5		23.6	5	楕円形		
II -1 区	SH1017	弥生後期後半古段階	円形					4	楕円形		
II -1 区	SH1024	弥生後期前半古段階	方形?					2			
II -1 区	SH1026	弥生後期前半古段階	円形?					6			
II -2 区	SH2001	弥生後期後半古段階	方形					4	円形 + 楕 円形		勾玉 1
II -2 区	SH2002	弥生終末期	多角形								
II -2 区	SH2005	弥生後期後半古段階	円形?								
II -4 区	SH4001	弥生終末期中段階	多角形		6.4(南 北)	6.3(東 西)		6	隅丸長方形		管玉 1 ガラス玉 1 勾玉 1 銅鏃 2 鉄器 2 焼成破裂土器 3
II -4 区	SH4002	古墳前期前半古段階	方形		6.3	6.3	39.7	(4)	隅丸長方形		
II -4 区	SH4003	弥生終末期古段階	方形					(4)	隅丸長方形		破鏡(連弧紋鏡)1
II -4 区	SH4004	弥生終末期新段階	方形								
II -4 区	SH4005	古墳前期前半新段階	方形					(4)			
II -4 区	SH4006	弥生後期後半古段階	多角形	有(南側)				(4)	円形 + 楕円形		鉄器(ヤリ ガンナ)1
II -4 区	SH4012	弥生終末期新段階	多角形					(6)	楕円形		
II -4 区	SH4017	弥生終末期中段階	多角形					(6)	隅丸方形		
II -4 区	SH4019	弥生終末期	多角形?								
II -4 区	SH4020	古墳前期前半古段階	方形								
II -4 区	SH4021	弥生後期後半古段階	多角形					(6)	楕円形		ガラス小玉 1
II -4 区	SH4025	弥生後期後半古段階	方形					(4)	円形		
II -4 区	SH4026	弥生後期前半新段階	円形?					(5)	円形 + 隅 丸長方形		
II -4 区	SH4027	弥生後期後半新段階	方形		4.7	5	23.5	4	円形		
II -4 区	SH4029	古墳前期前半新段階	方形		4.8			(4)			
II -4 区	SH4033	弥生後期後半古段階	円形?					5	円形		
II -4 区	SH4036	弥生終末期古段階	円形?						隅丸方形?		

表9 竪穴住居跡一覧 その3

G 区 SH0003 (図 120)

G 区及び H 区東部に跨って検出した住居である。住居掘り方は住居北東部に相当する G 区側のみ確認にとどまり、南東部は H 区 SH1008 によって切られるなど残存状況は良好でないものの、直径約 4m の円形住居に復元できる。住居中央には、中央土坑とみられる SK05 が存在し、4 基の主柱穴が確認できる。ただし、北東隅の G 区 SP38 は後世の掘立柱建物 H 区 SB1010 と重複するため、平面形と出土遺物に混乱が生じているが、SP38 底面には柱穴掘り方の形状が残る。

出土遺物は、弥生中期後半期の資料を含んでいるが、炉 SK05 から出土した甕(図 120-8)の口縁形態から、本住居は弥生後期前半新段階に帰属するものと推定しておきたい。細頸壺胴部(図 120-7)は外面にベンガラを塗布し、胎土中に雲母・角閃石を多く含む備中西部からの搬入品である。

H 区 SH1001 (図 121 ~ 123)

H 区西部で検出した住居であり、弥生後期前半期の SH1004 を切り込む。壁面の立ち上がりは低く残存状態が良好ではないが直径約 5.6m の円形住居に復元できる。主柱穴は現存で 3 基であり、位置関係

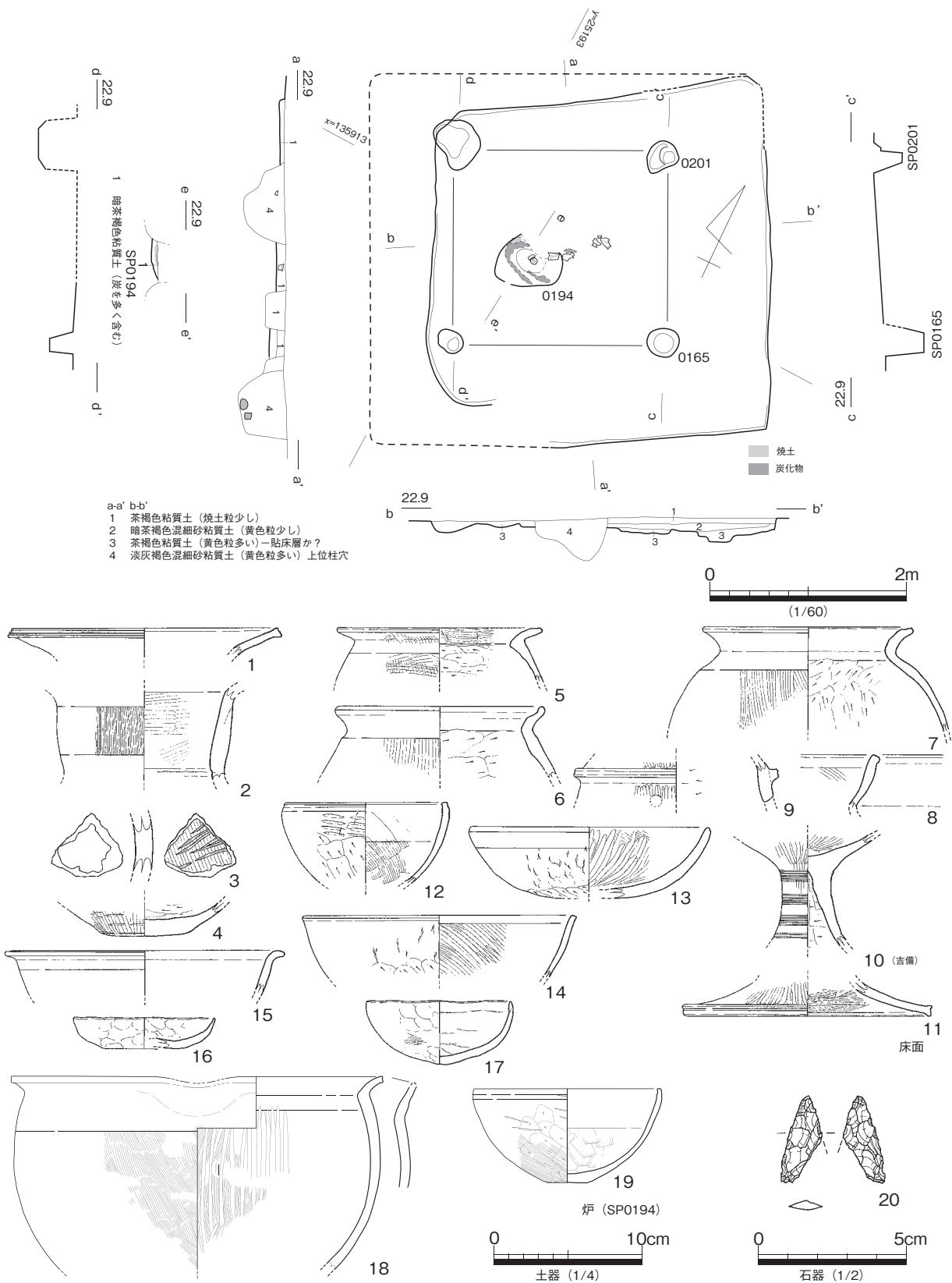


図 118 G区 SH0001 平・断面・出土遺物



图 119 G·H·J·K区 平面

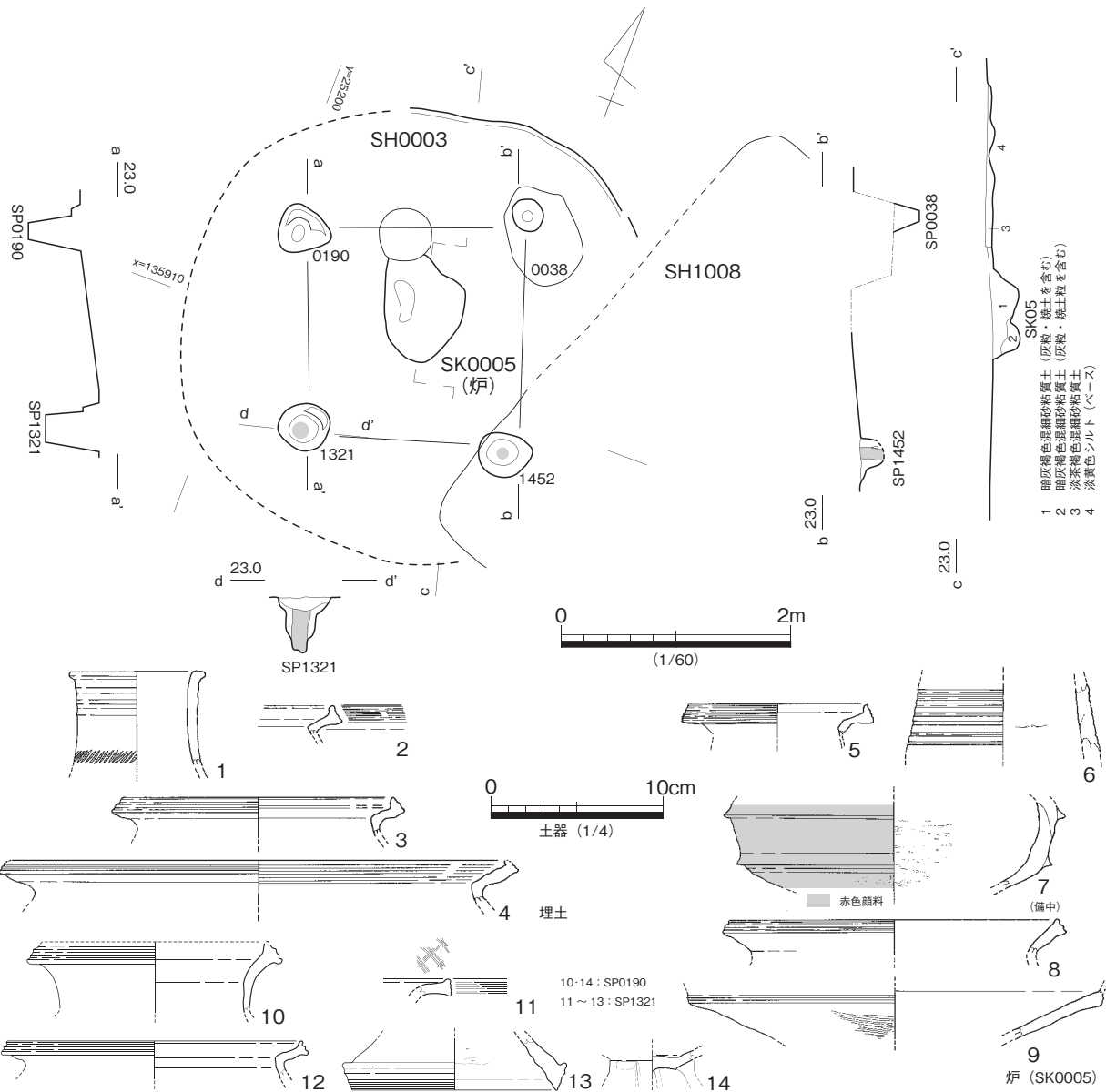


図 120 G 区 SH0003 平・断面・出土遺物

から5基と推定できる。床面北西部に壁際より内側に伸びる小溝が見られ、中央土坑から伸びる排水溝の可能性はあるが明確にはできなかった。中央炉は未確認であるが、SH1011の主柱穴であるSP1395の周囲に炭化物が集中することから、住居床面中央にその存在が推定できる。

出土遺物(図122.123)は、中期後半から後期前半期の資料を多く含むものであるが、床面出土の鉢(図122.50)や台付鉢(図122.52)、大形鉢(図123.2.3)の形態から、本住居は弥生後期後半新段階に帰属するものと推定しておく。器台脚(図123.5)は形態や雲母・角閃石を多く含む胎土からみて、備中西部からの搬入品と考えられる。図123.8は棒状鉄器。

H 区 SH1002 (図 124・125)

H 区東部と I 区に跨って検出した直径約 4.5m を測る円形住居であり、南側の一部を SH1005 によっ

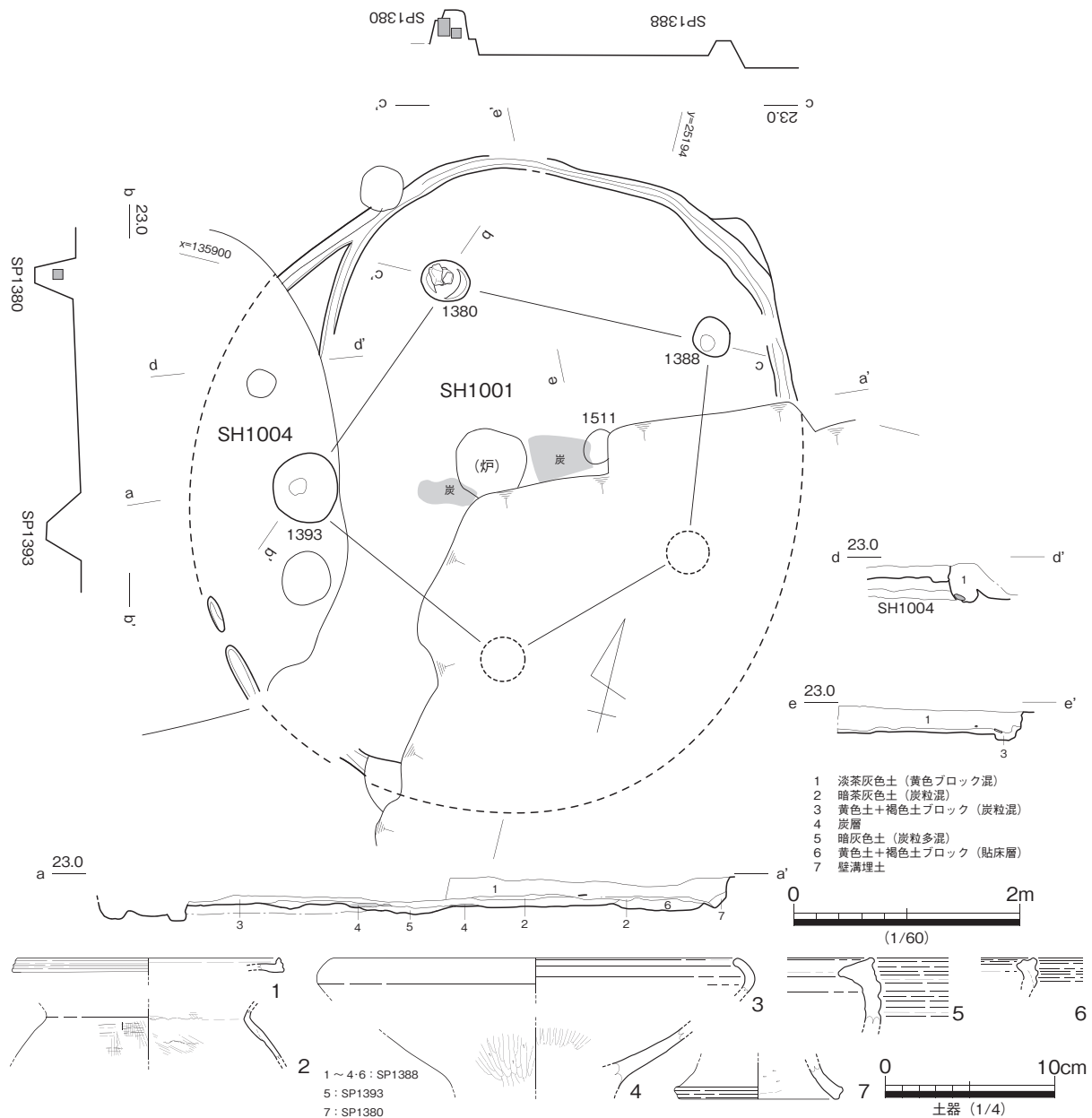


図 121 H区 SH1001 平・断面・出土遺物 (1)

て切られる。支柱穴は4基であり、平面検出に失敗したが断面観察より支柱穴と壁溝との間にベッド状遺構を想定できる。中央土坑はK1とした楕円形炉1基であり、東側を中心に炭化物層が広がる窪地がある。床面南西部にはサヌカイトの集中範囲を検出した。また、覆土はすべて埋め戻し土であり、南東部を中心に動物遺存体、全域から疎らな状態でガラス製小玉(図 125-1~20)が含まれていた。これらは、埋め戻しの際に一括廃棄されたものと考えられる。

出土土器(図 124)は弥生中期後半期の資料を含むが、床面出土の高杯(図 124-31.32)の形態からみて、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものと推定しておく。

H区 SH1004 (図 126・127)

H区西部で検出した住居であり、SH1001に切られる。SH1011と切り合う部分が古代の条里型地

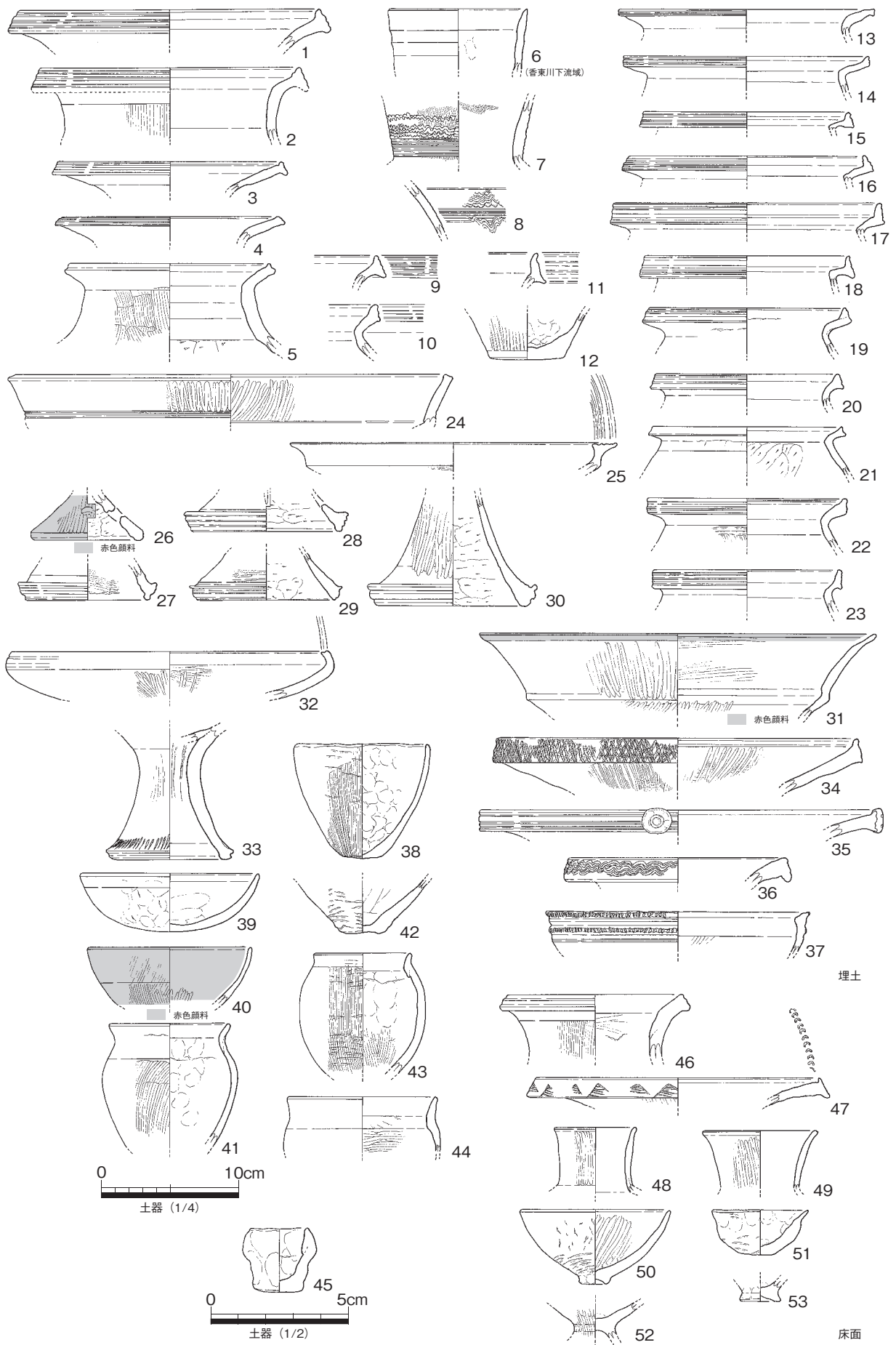


图 122 H区 SH1001 出土遺物 (2)

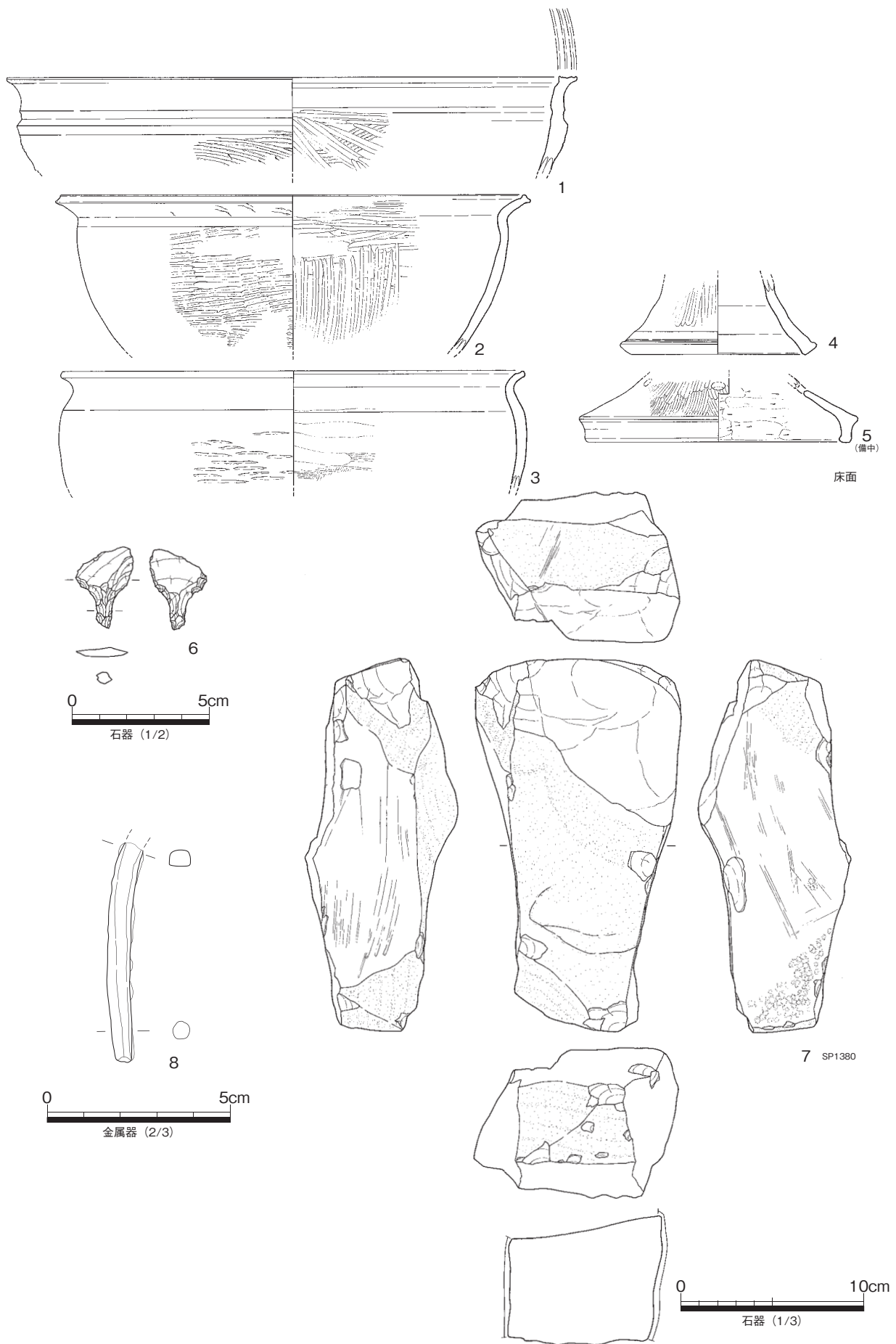


图 123 H区 SH1001 出土遺物 (3)

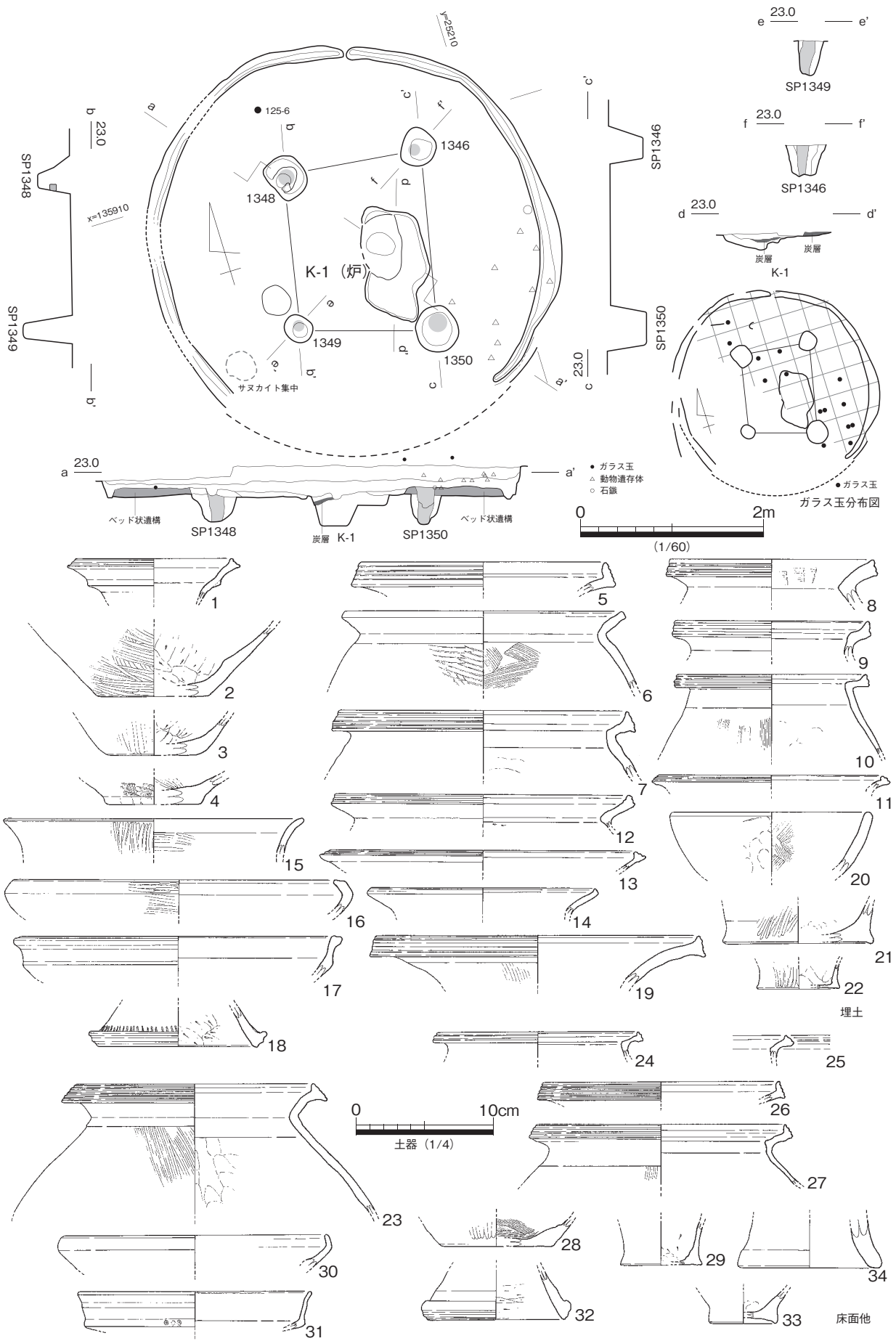


図 124 H 区 SH1002 平・断面・出土遺物 (1)

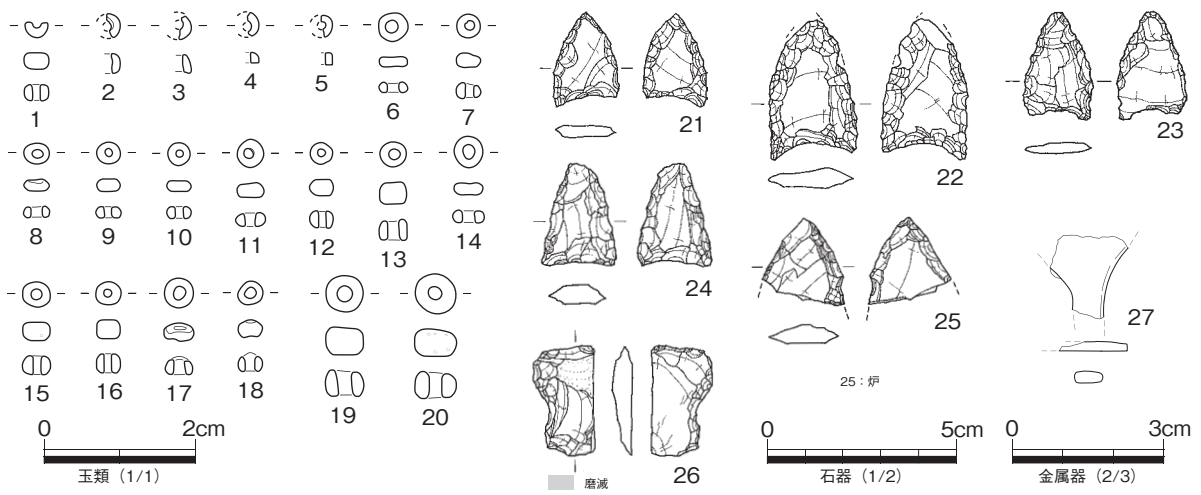


图 125 H区 SH1002 出土遺物 (2)

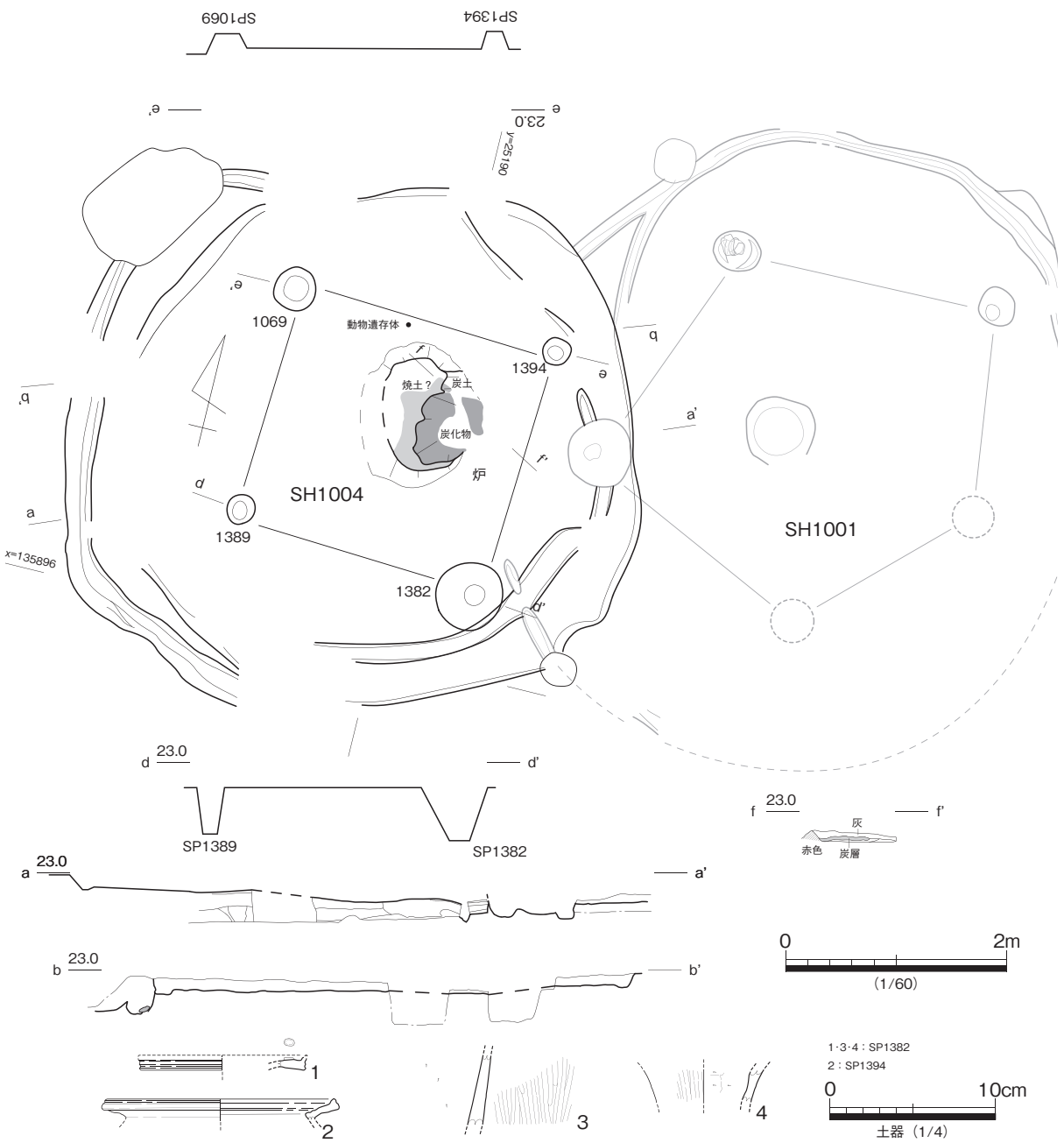


图 126 H区 SH1004 平·断面·出土遺物 (1)

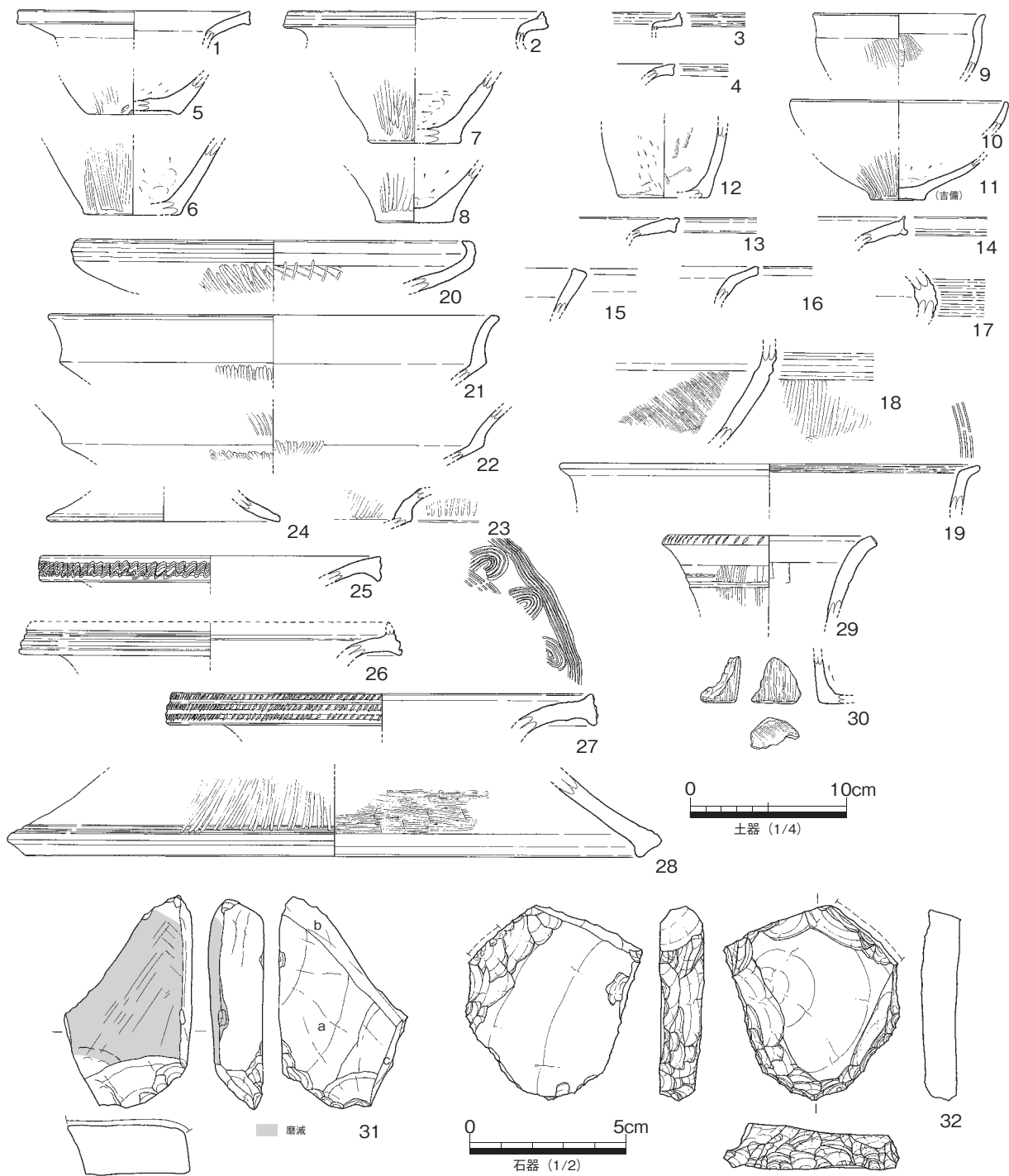


図 127 H区 SH1004 出土遺物 (2)

割溝によって消失しているが、本住居が後出する可能性が高い。住居下位には、弥生時代前期の流路SD0007が存在しているため、平面形態や床面の認定にやや不安が残るものの、直径約4.8mの円形住居の西側に長さ0.5m幅4mの張り出し部が付くものと判断した。支柱穴は4基であり、そのほぼ中央に炉を確認した。

炉は炭化物が集中する東側の落ち込み部の外側に焼土粒・塊が広がる。焼土の状況は、硬化したものではなく弱い被熱が観察されるものが多く、二次的な投棄ではなく原位置から崩落などによって若干の

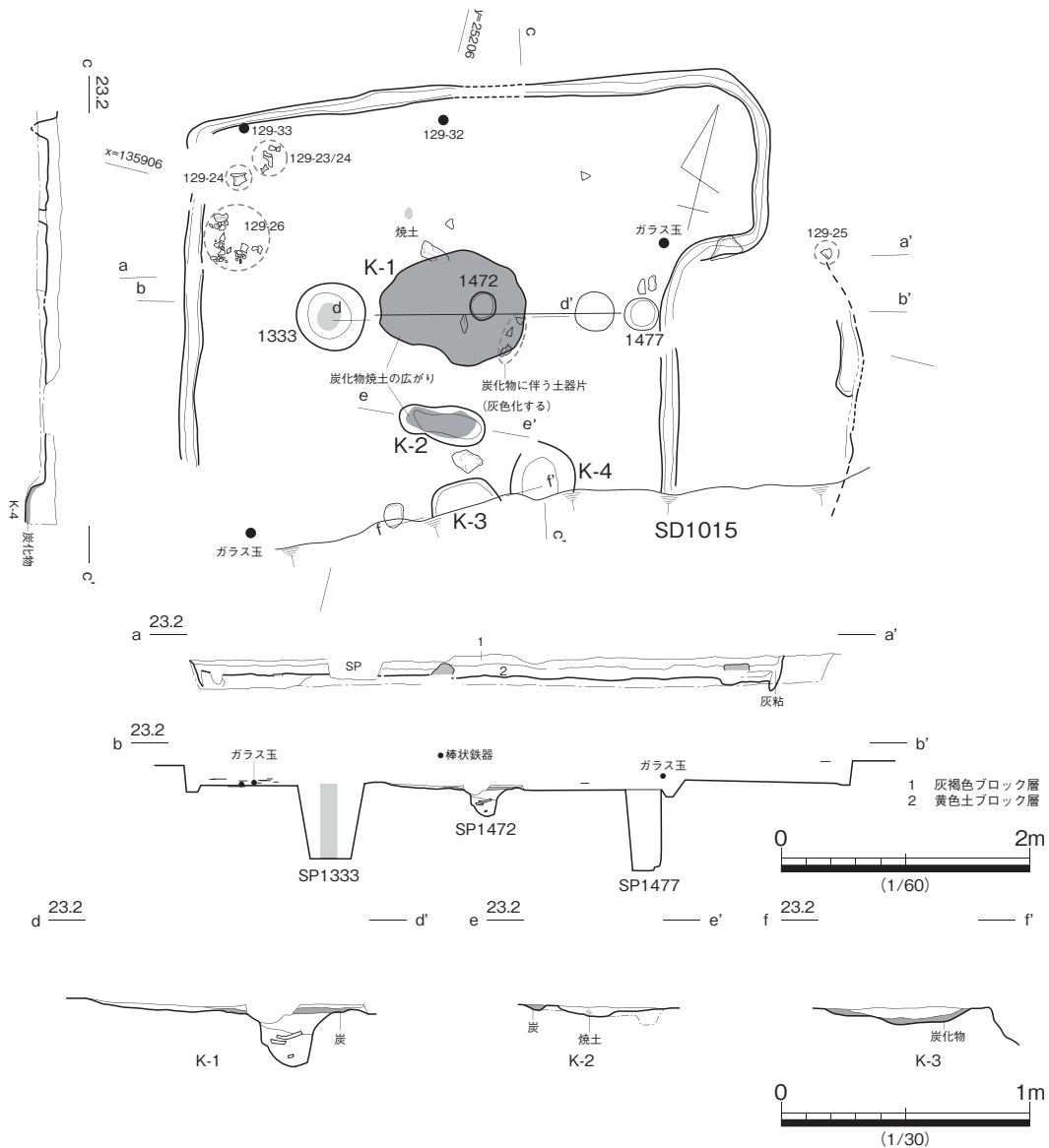


図 128 H 区 SH1005 平・断面

移動を受けていると考えられる。炉の壁体や天井部の存在を示唆するものかもしれない。また、炉の北側の床面上より動物遺存体が出土している。

甕 (図 127-2) や高杯 (図 127-21) の形態から、本住居は弥生後期前半新段階に帰属するものと推定しておきたい。

H 区 SH1005 (図 128・129)

H 区東部で検出した方形住居である。南辺を攪乱によって消失するが、約 4m の東西方向の長辺に南北方向約 3.5m の方形を想定することができ、北東隅部に長さ約 0.7m 幅約 1m の張り出し部を付設する。主柱穴は 2 基であり、主柱穴間の中央に K1(SP1472) とした小ピットと炭化物の広がりがあり、その南側に K2 とした小溝状の炉跡がある。また、床面南部に K3・4 とした炭化物を多く含む炉が 2 基見られることや、住居東側に弧状を描き壁溝と考えられる小溝を検出していることから、本住居に先行する住

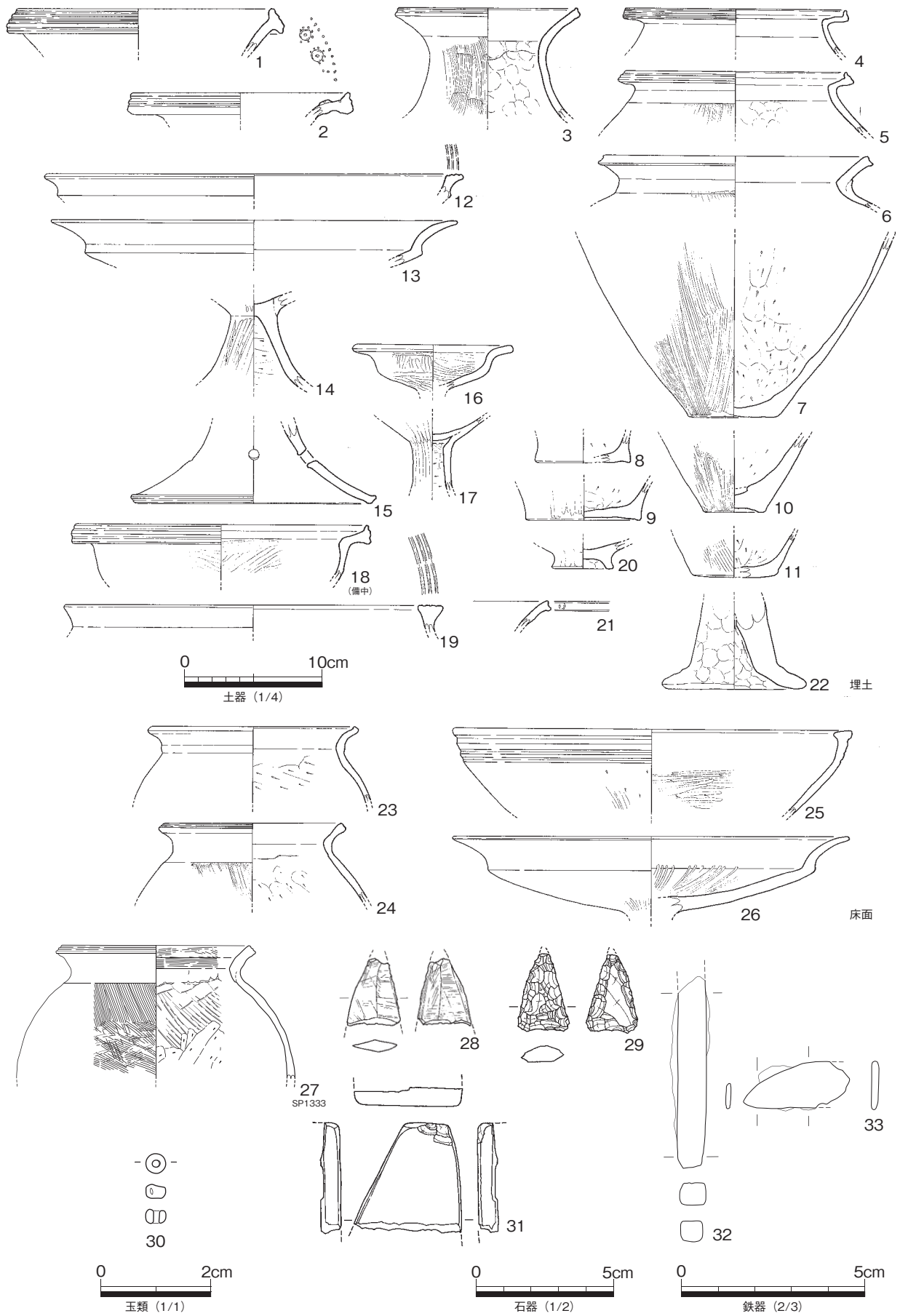


图 129 H区 SH1005 出土遺物

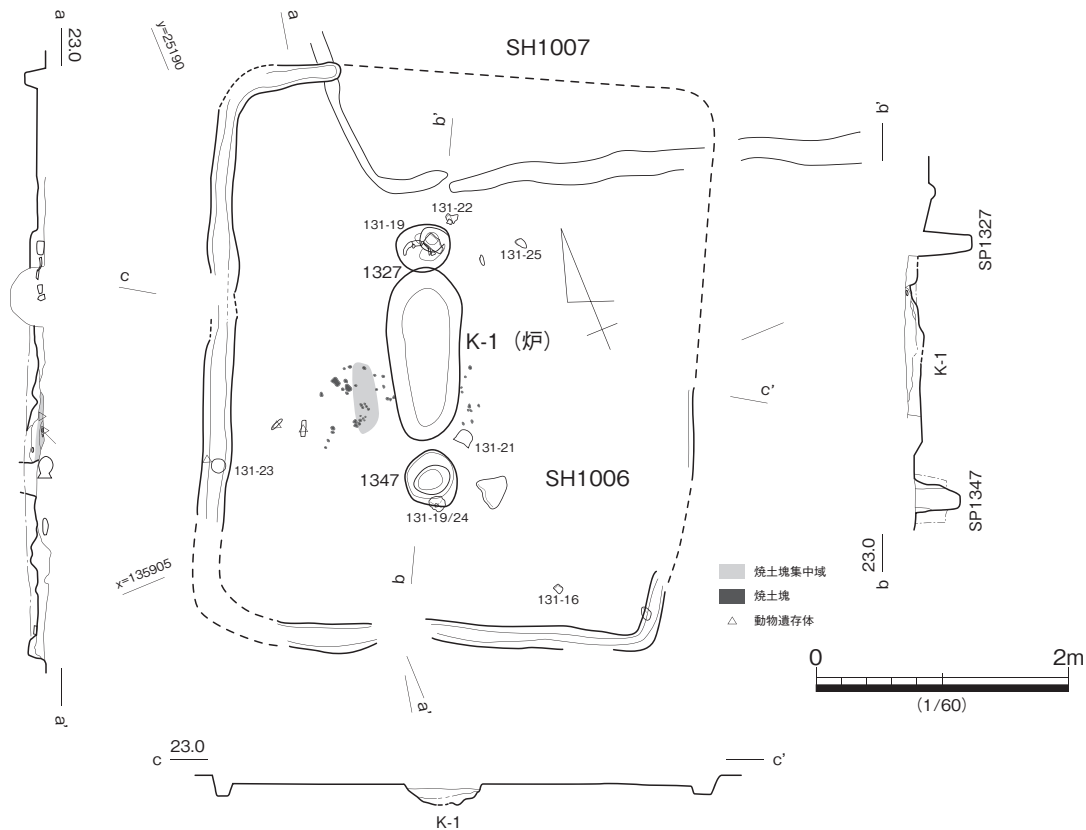


図 130 H区 SH1006 平・断面

居が存在していた可能性が高い。覆土はすべてブロックの混入が多くみられる埋め戻し土であり、土器片やガラス製小玉、鉄片などを含む。

床面上の遺物の出土状況は、住居北西部を中心にみられ、土器片に加えて断面方形の棒状鉄器(図 129-32) 刀子(図 129-33) やガラス小玉(図 129-30)がある。床面出土の甕(図 129-23,24) や高杯(図 129-26)の形態からみて、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものと考えられる。図 129-28 は頁岩製の磨製石剣の切先部の破片とみられる。図 129-31 は流紋岩製の砥石である。

H区 SH1006 (図 130・131)

H区西部で検出した方形住居である。住居北辺部の一部において弥生終末期のSH1007を切り込むことは確認したが、北東部での壁面の検出が行えていない。現状から長辺約4.7m×短辺3.9mの方形住居と復元できる。支柱穴は2基であり、その間にK1とした楕円形の炉跡がある。また、炉周辺の床面上には焼土粒がややかたまって見られ、動物遺存体も数点確認された。

床面出土の甕(図 131-21) 鉢(図 131-25) や、支柱穴出土の甕(図 131-26)の形態から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておく。図 131-11 は埋め戻し土から出土した吉備型甕である。

H区 SH1007 (図 132～136)

H区及びG区西部で検出した方形住居であり、SH1006に切られる。当初、2棟の住居が切りあうものとして調査を進めたが、連続する床面を検出したことや壁溝の連続する状況から、同一の住居として

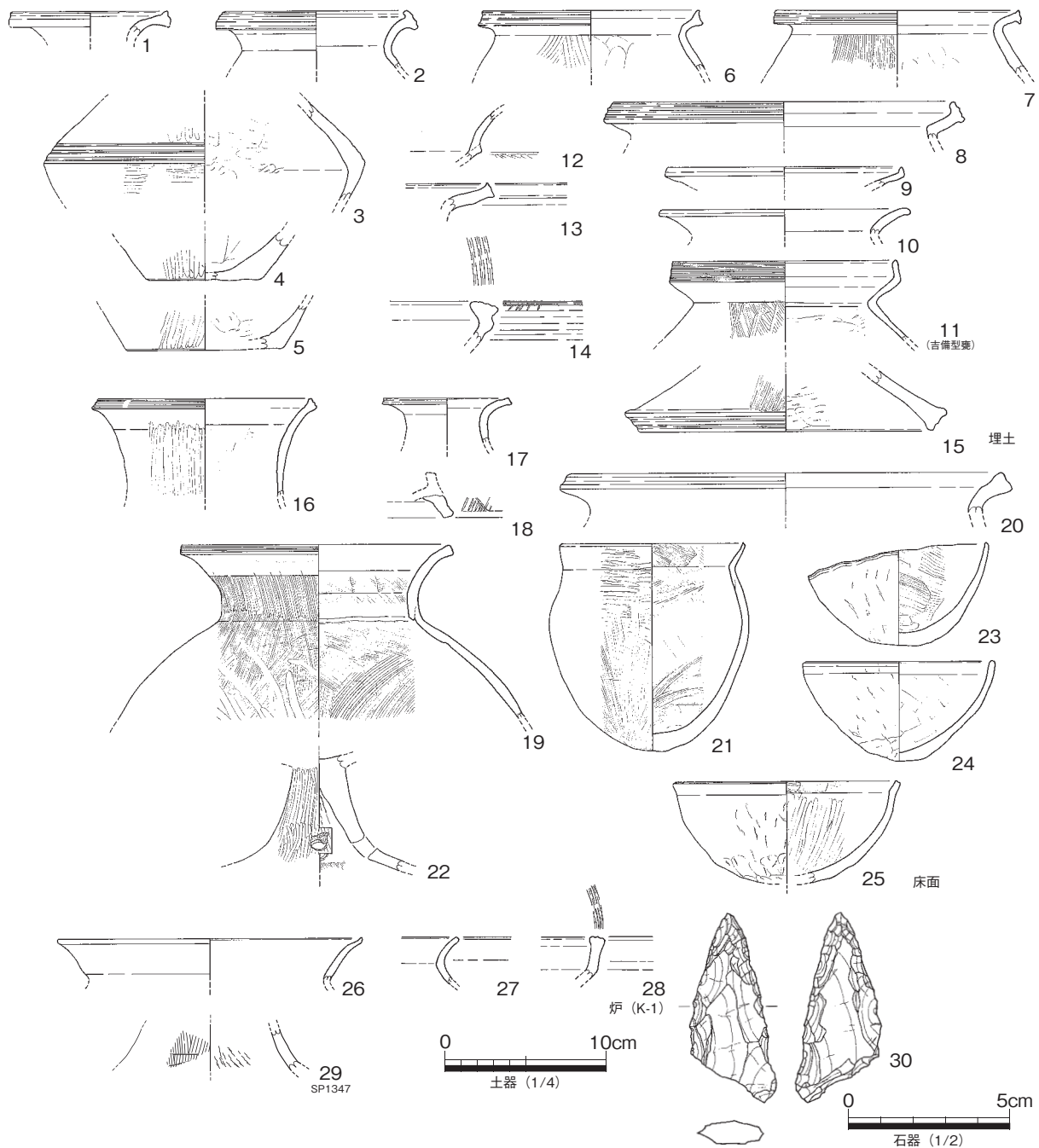


図 131 H区 SH1006 出土遺物

報告する。住居北側となるG区側では壁溝等の平面形に関係した遺構は確認できなかった。住居東西ラインでの計測では、一辺が約6mを測ることから、方形の中形住居となるものとみられる。主柱穴は図示した4基であり、明確な炉は確認できなかったが、中央に位置する小ピットが該当する可能性が高い。住居東側の床面上には動物遺存体が、中央西寄りには土器片が集中する。また、覆土中位には焼土塊の集中部分や、花崗岩風化土がまとまってみられた。

出土土器(図133.134)には時間幅が認められるが、床面出土の甕(図133-57)や大形鉢(図134-9)の形態から、本住居は弥生終末期中段階に帰属するものと考えておく。図134-23は敲石に転用された結晶片岩製の柱状片刃石斧である。図134-19は結晶片岩製の打製石庖丁であり、刃部以外にも摩滅痕が確

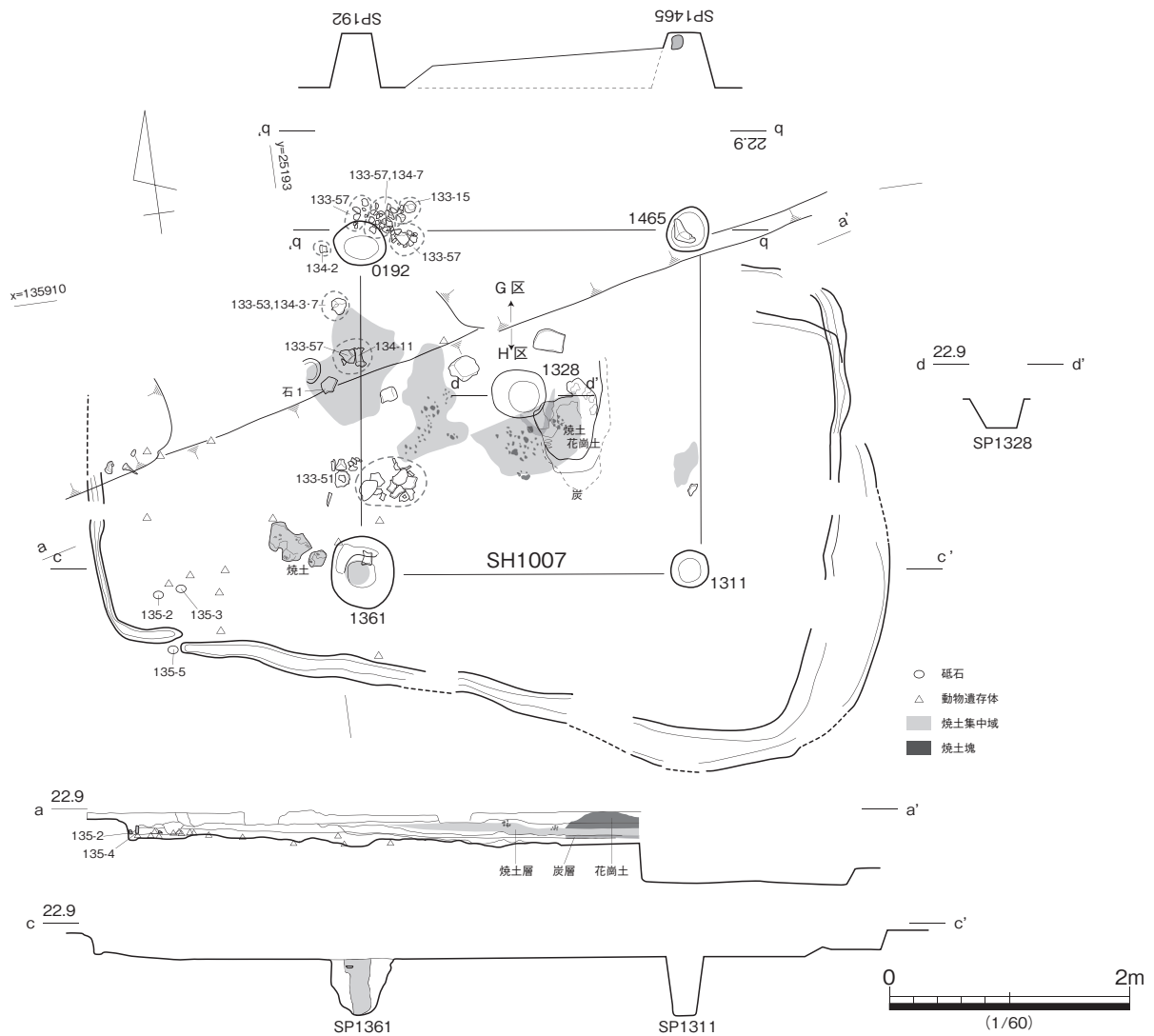


図 132 H 区 SH1007 平・断面

認できる。図 135-3.5 は流紋岩製の砥石であり、分割に伴う擦り切り溝がみられる。図 136-1 は流紋岩製の置砥石である。

H 区 SH1008 (図 137 ~ 139)

H 区東部で検出した方形住居であり、G 区 SH0003 を切る。南北約 4.5m 東西約 3.3m を測る隅丸長方形を呈し、北側を中心に幅約 0.3m のベッド状遺構が敷設される。明確な掘り込みを伴う炉は確認できなかったが、床面中央には図示した範囲に炭化物が広がるが、それ以外に住居東側へ床面の凹凸とともに炭化物層が広がる。覆土はすべて埋め戻し土であり、土器は覆土中からややまとまって出土した。蛇紋岩製大型勾玉 (図 139-2) は覆土上位から検出された。

覆土出土の長頸壺 (図 138-1) や甕 (図 138-9)、床面出土の大形鉢 (図 138-29) の形態から、本住居は弥生後期前半新段階に帰属するものと考えられる。図 138-32 は結晶片岩製の小型方柱状石斧片。蛇紋岩製の大型勾玉 (図 139-2) は、長さ 5.3cm を測る完形品であり、弥生時代では最大級の法量をもつ資料となる。

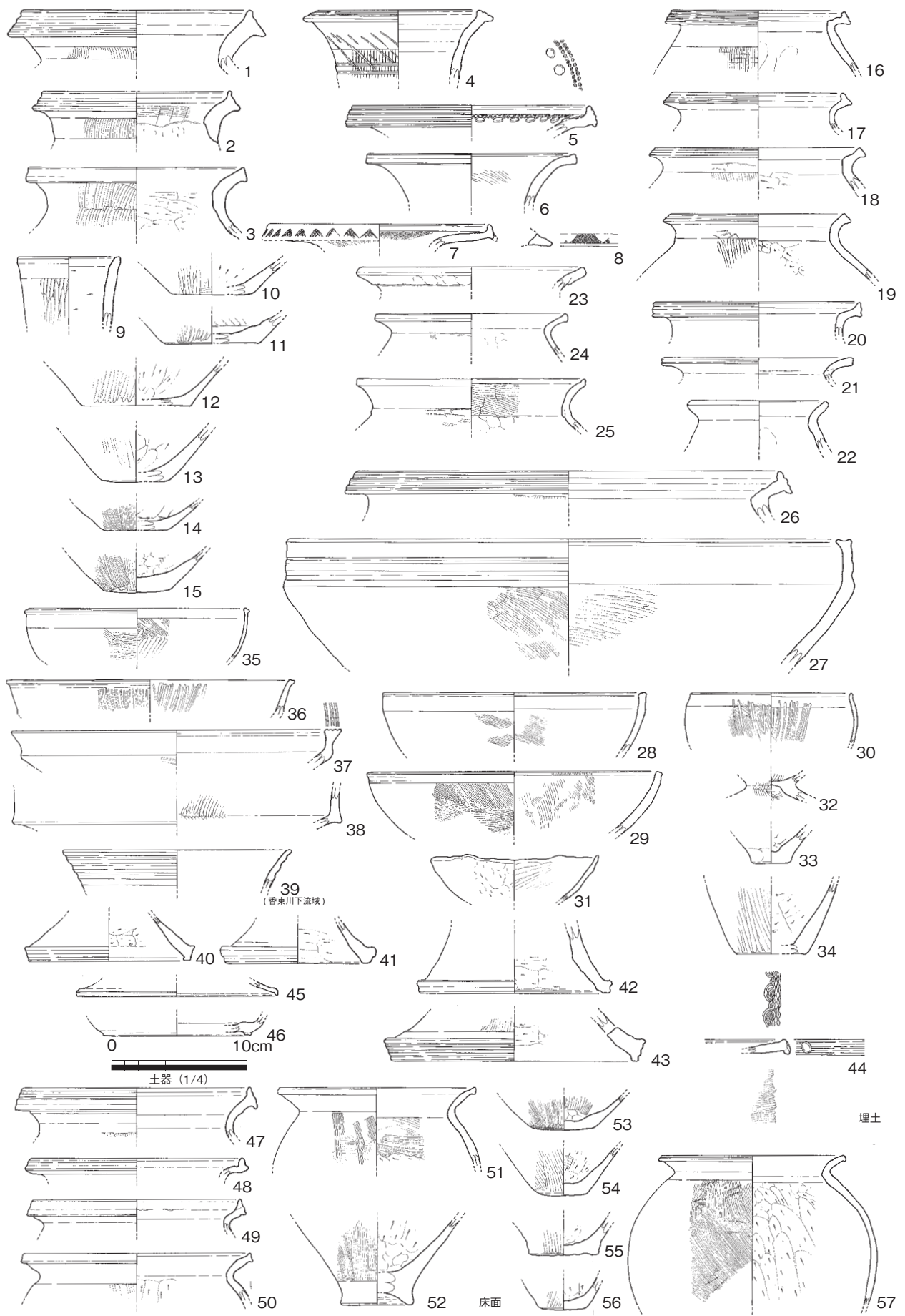


图 133 H区 SH1007 出土遺物 (1)

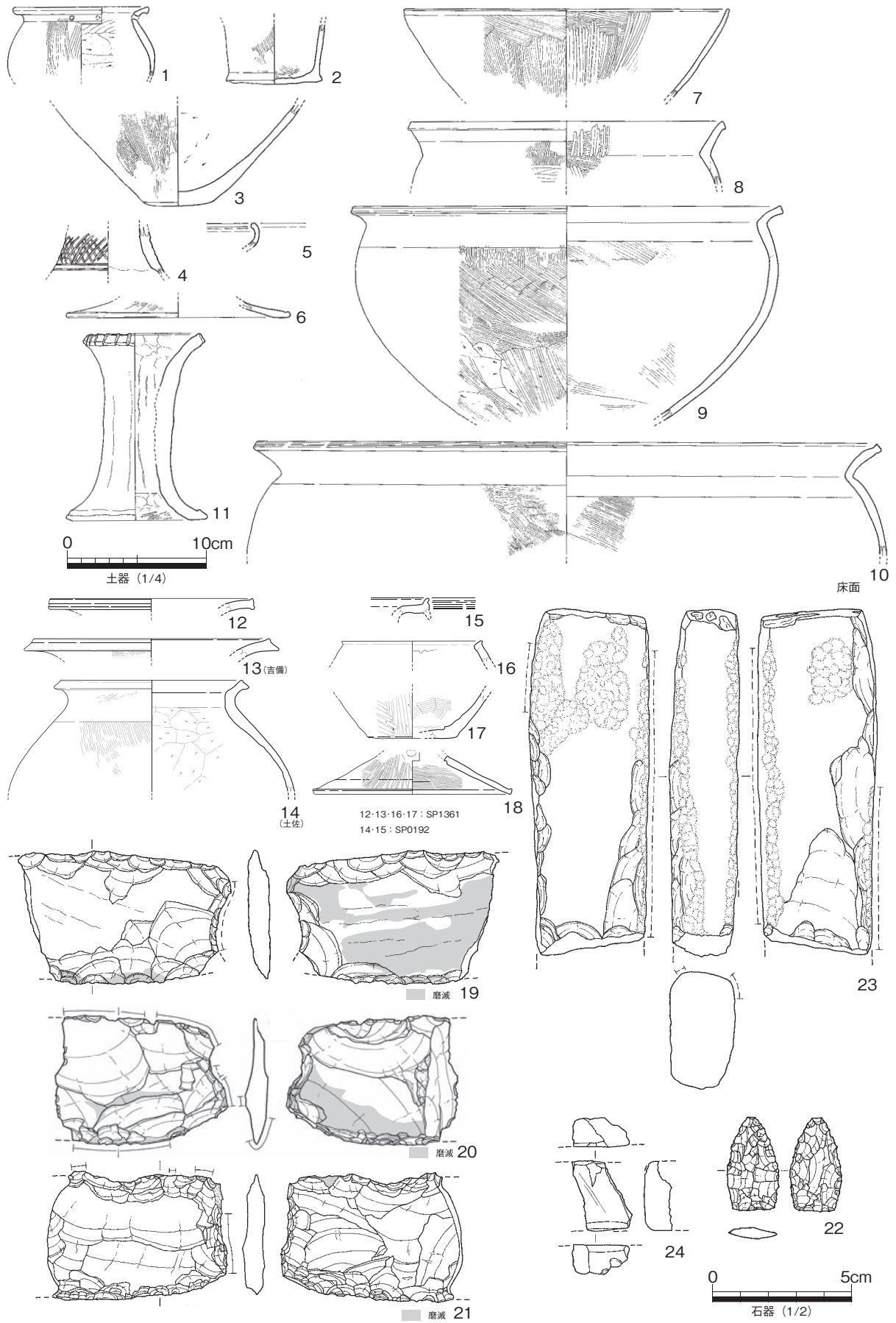


图 134 H区 SH1007 出土遺物 (2)

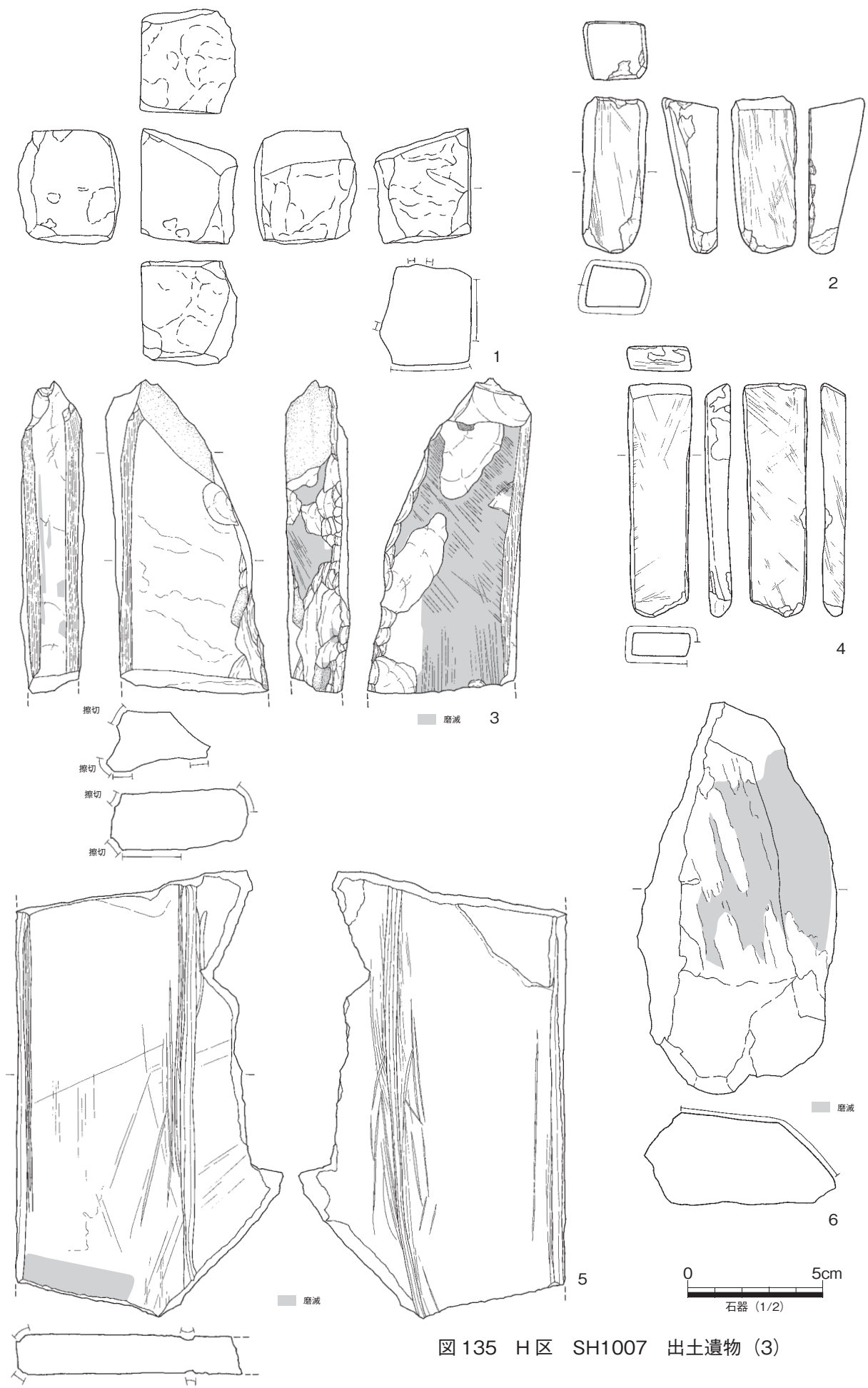


图 135 H区 SH1007 出土遺物 (3)

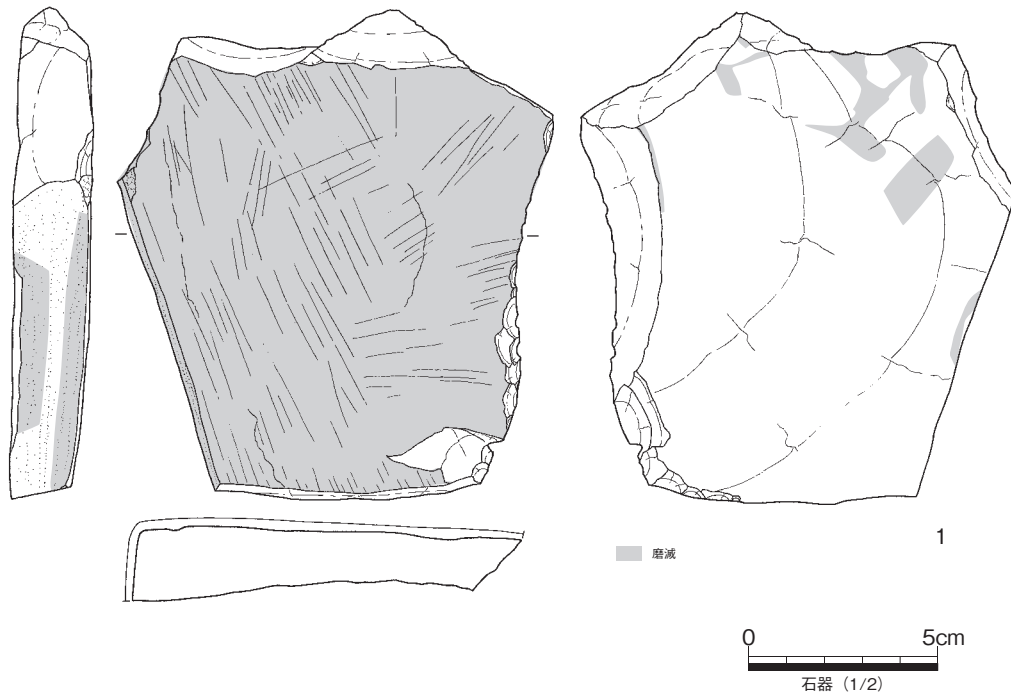


図 136 H区 SH1007 出土遺物 (4)

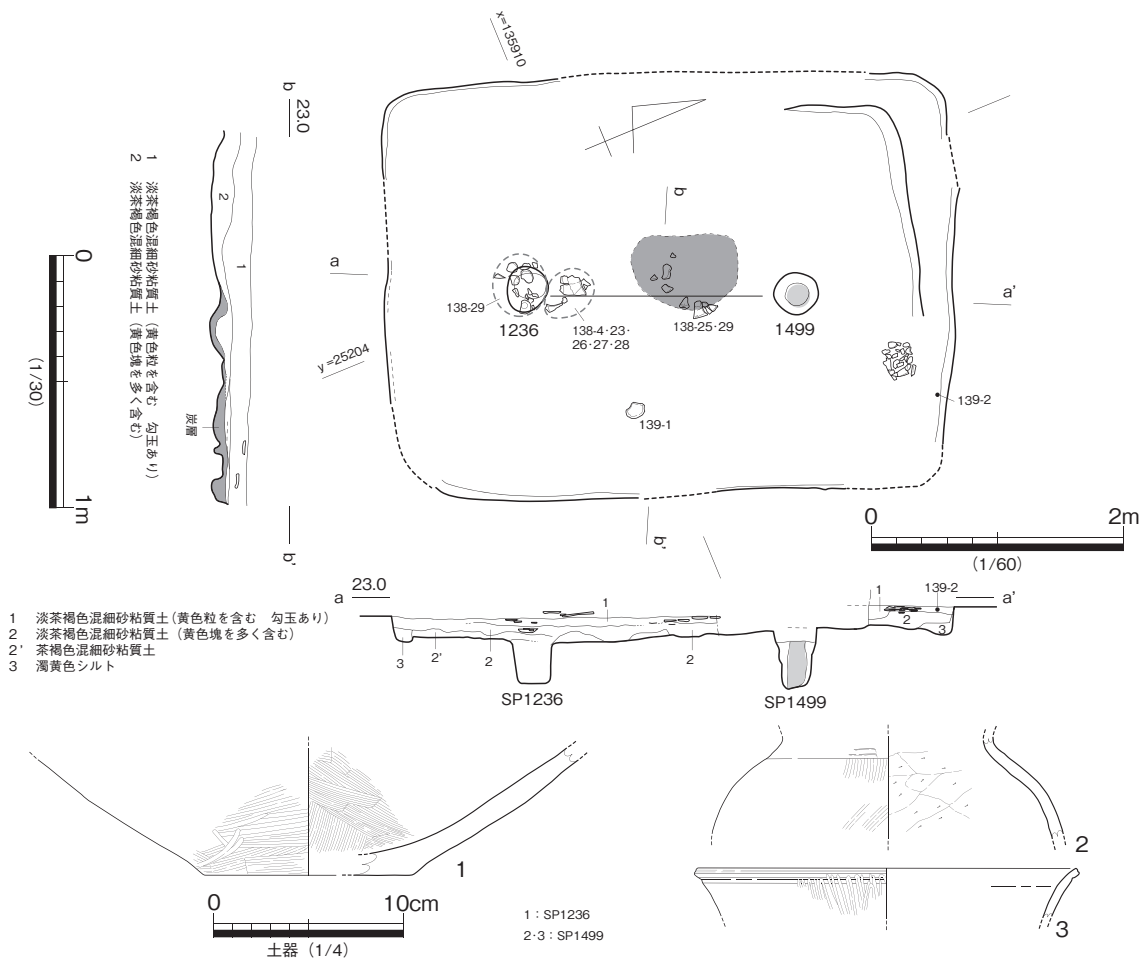


図 137 H区 SH1008 平・断面・出土遺物 (1)

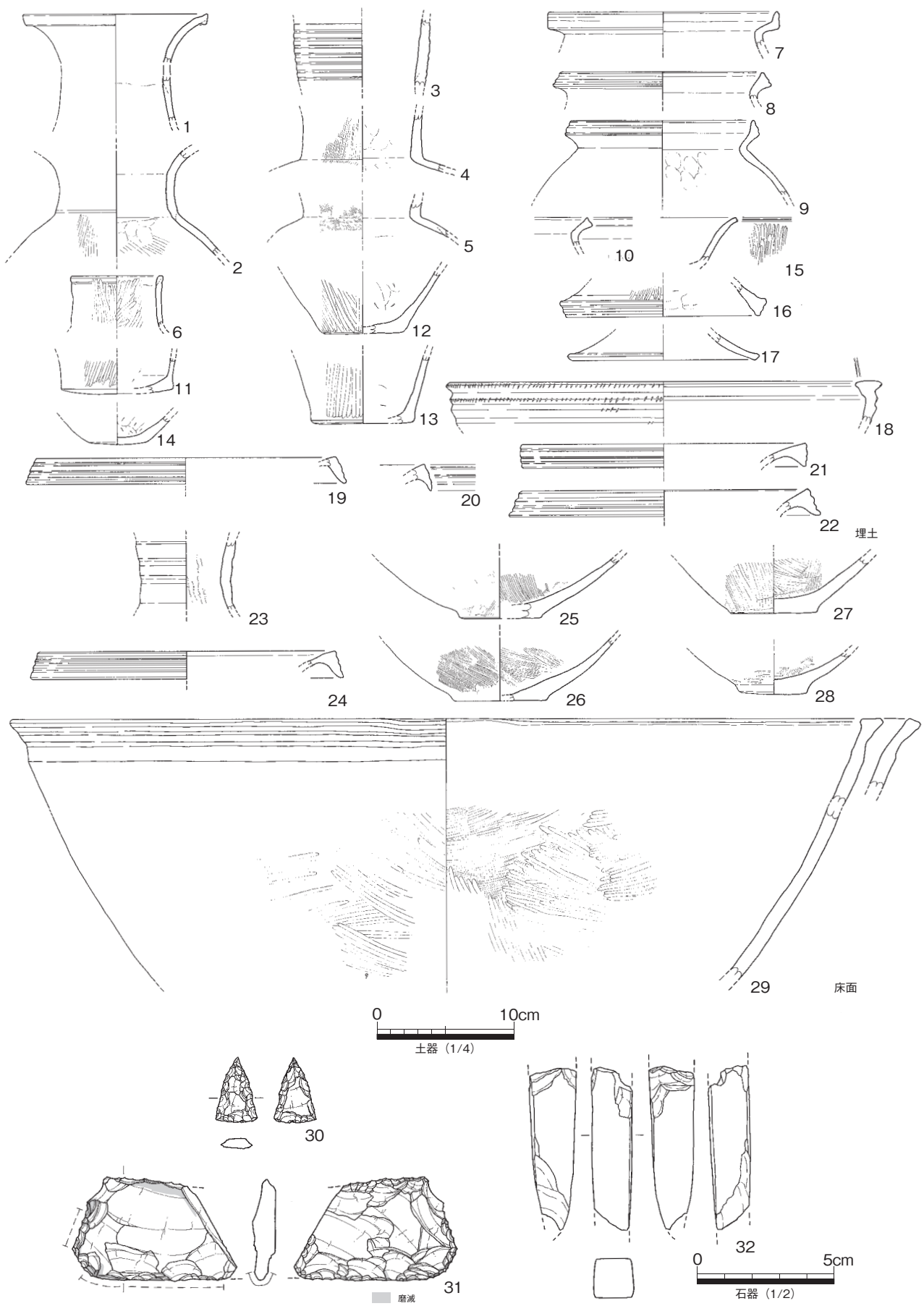


图 138 H区 SH1008 出土遺物 (2)

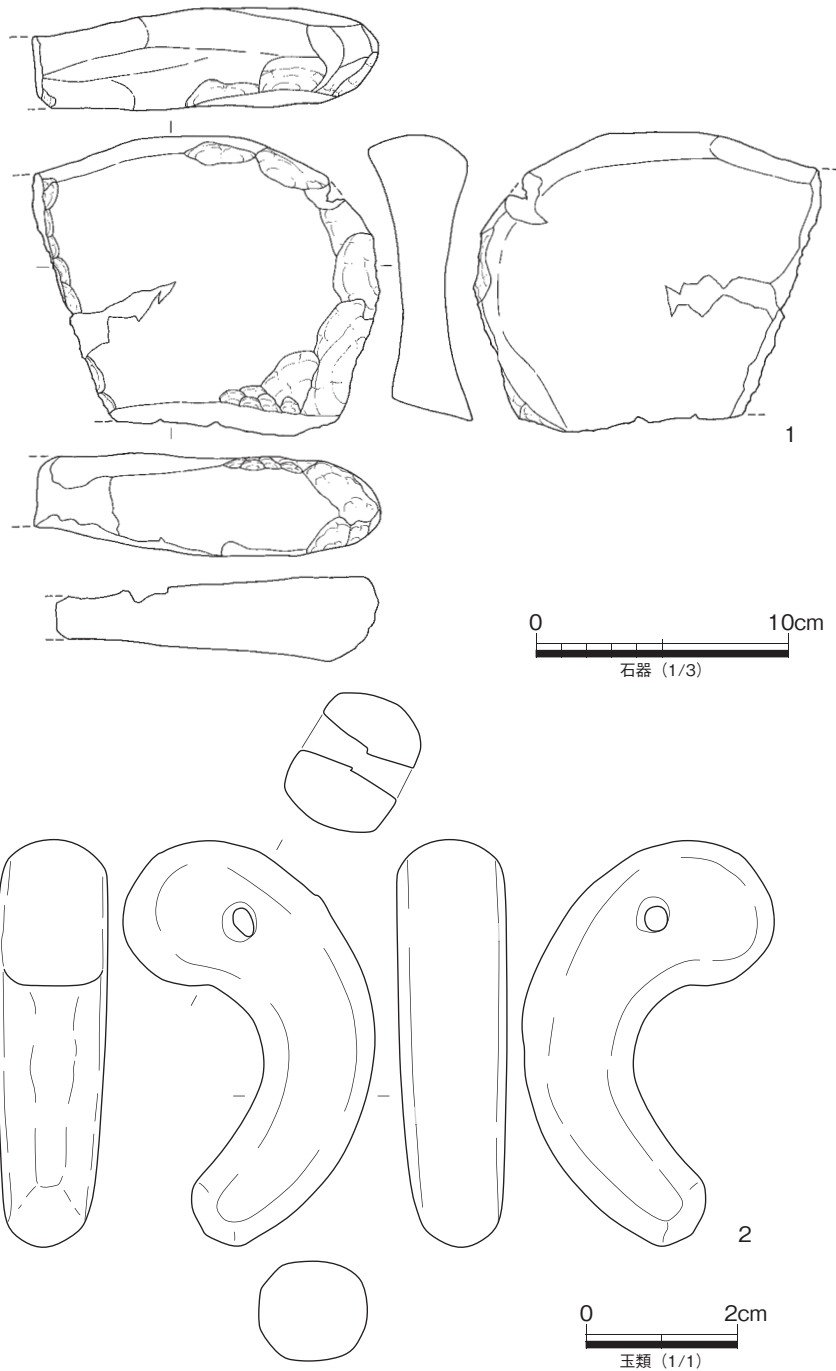


図 139 H区 SH1008 出土遺物 (3)

H区 SH1011 (図 140・141)

H区南西部で検出した円形住居である。H区SH1001、1004と重複するが、遺構による切り合い関係は未確認で、出土遺物からは本住居が時期的に先行するものと推定できる。住居南西部に弧状を描く小溝と中央に現状で3基の支柱穴がある。支柱穴の配置から、攪乱によって滅失した南西部にもう一基の支柱穴を想定し、4基の支柱穴を想定する。

南西部小溝は、支柱穴の位置関係が離れすぎていることから、壁溝ではなく周溝と捉えるべきであろう。支柱穴SP1249hの西側から焼土塊と炭化物が集中する箇所があり、周溝とした南西部の小溝上面

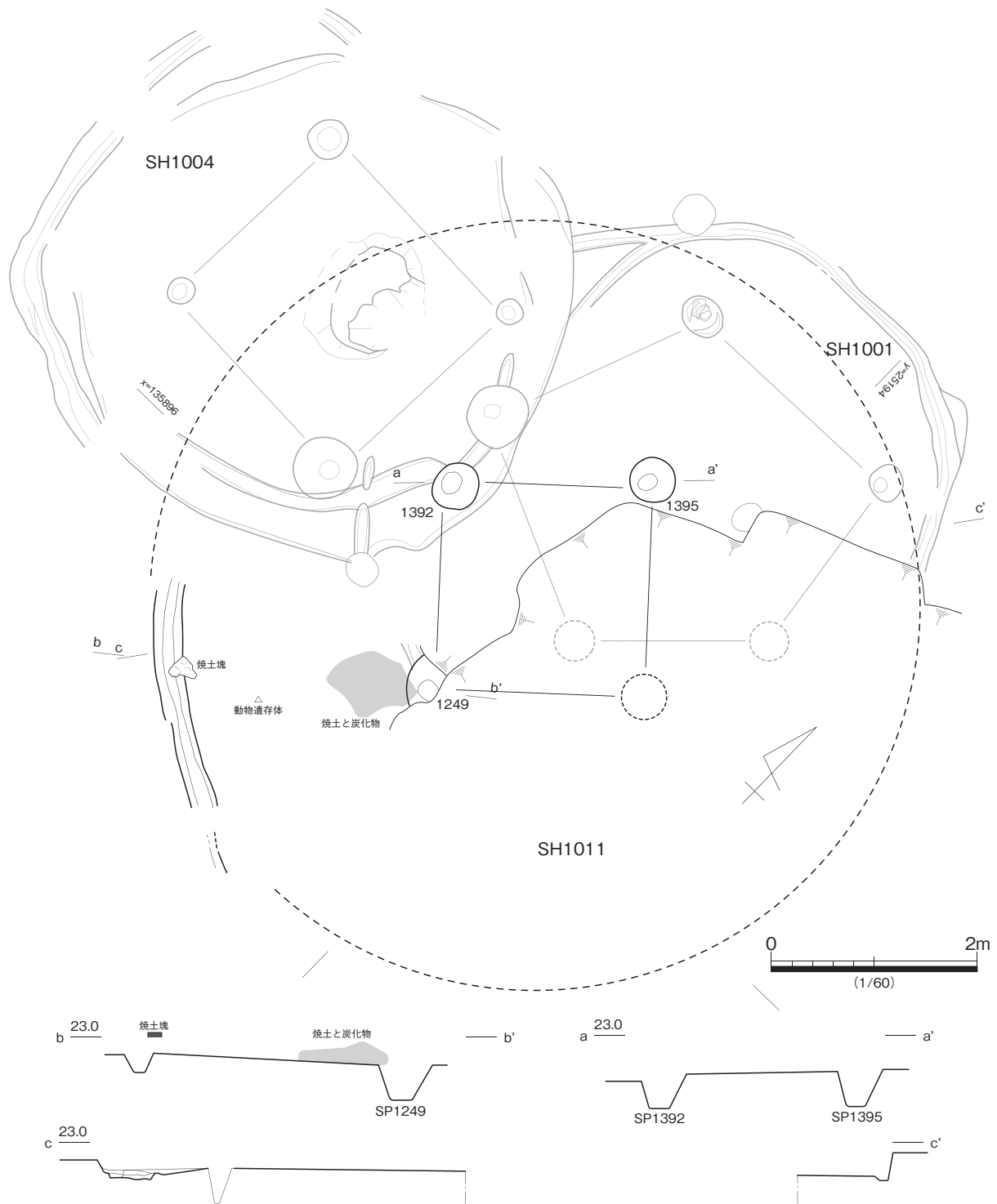


図 140 H区 SH1011 平・断面

の焼土塊は検出面よりレベルが高いことから、本住居に伴わない可能性もある。

床面出土の長頸壺 (図 141-12) 甕 (図 141-13) 高杯 (図 141-14 ~ 15) の形態から、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものと考ええる。

H区 SH1013 (図 142)

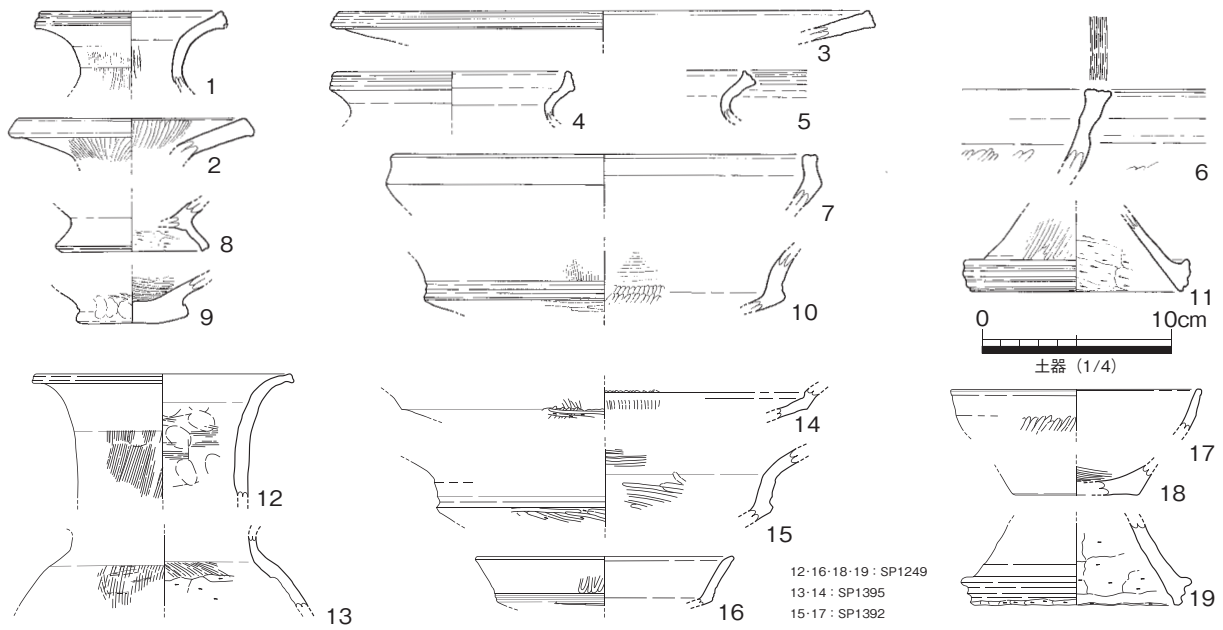


図 141 H区 SH1011 出土遺物

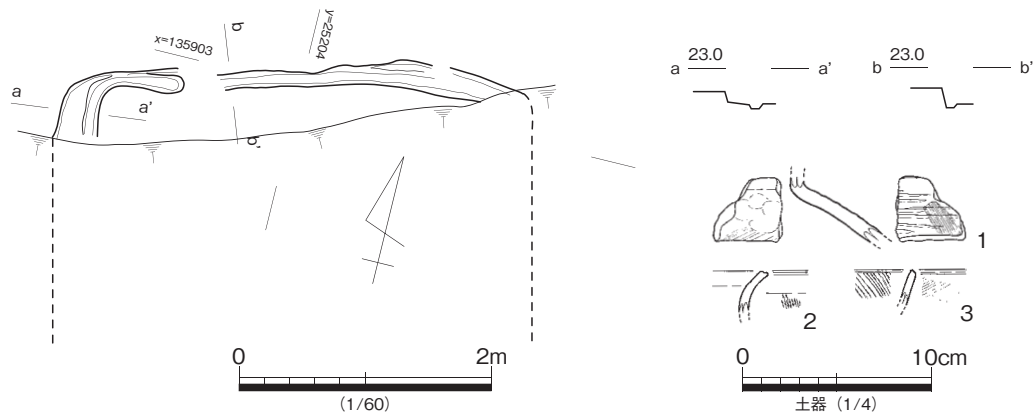


図 142 H区 SH1013 平・断面・出土遺物

H区中央南側で検出した方形住居であり、古代の溝 SD1009 に切られる。住居の大半は攪乱によって滅失しており、住居北辺の壁溝を検出したのみである。出土遺物は少量に止まるが、図 142-1 の肩の張った甕の形態から、弥生終末期新段階の所産と推定しておきたい。

I区 SH2002 (図 143・144)

I区中央部で検出した竪穴住居である。住居北部及び東部を中世の条里型地割坪界溝 SD2001.2002 によって切られ、南西部を古墳後期の SH2003 によって切られる。南辺を中心に残存する壁溝及び4基と推定する支柱穴の配置から、一辺が約 4.5m の隅丸方形住居に復元できる。床面の中央部から南寄りの部分で炉跡と見られる隅丸長方形の土坑 SK2004 を検出し、炉内部及びその周囲に焼土塊・炭化物を多く認めた。

炉 SK2004 は、上位に細かな焼土塊の集中が部分的に認められ、下位は炭化物層となる。焼土塊は古墳中期以降の竈の崩落した袖部・天井部を想起させる状態であり、炉に伴う土手などの構築材の一部か

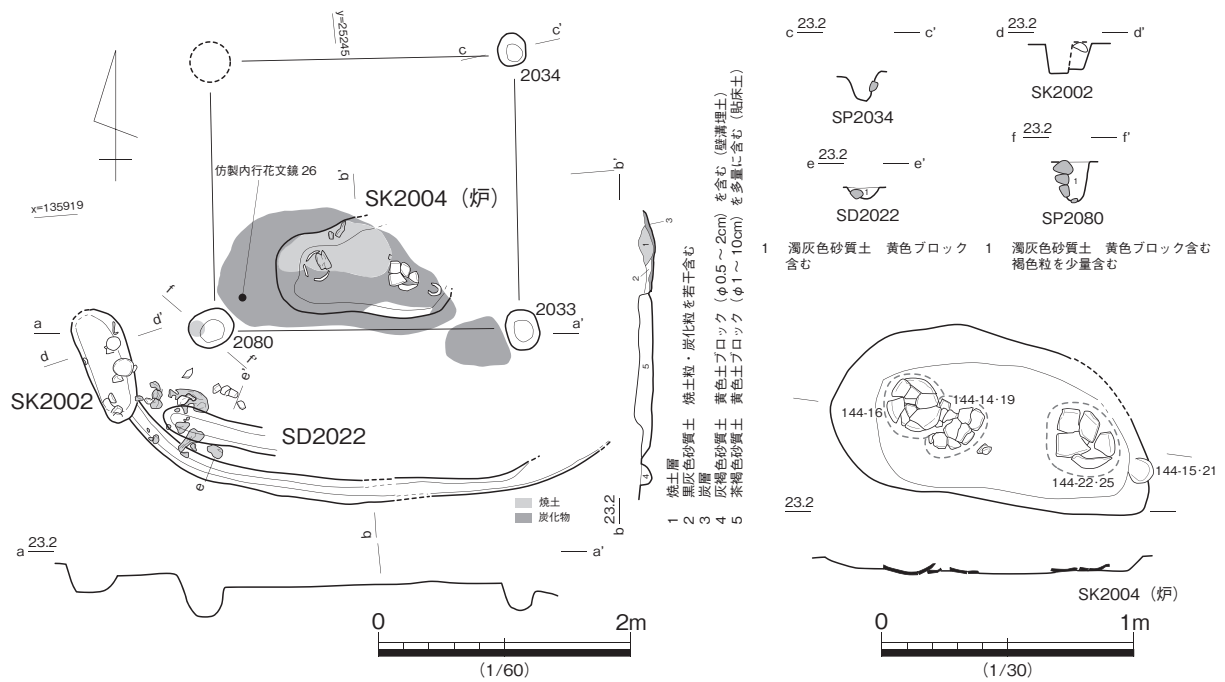


図 143 I 区 SH2002 平・断面

もしれない。炭化物層は、SK2004 の掘り方を越えて広がり、南西隅の主柱穴 SP2080 付近で仿製鏡片が出土した。住居南辺の壁溝はやや弧状を描きながら北東方向に伸び、SK2002 に接続する。SK2002 は、SH2003 の竈煙道部として切り合い関係を想定し、別遺構として調査したが、掘り下げ後に前後関係は認められず、土器等の遺物も壁溝の延長上で出土したことから、本住居の壁溝に含めて報告する。

南側の 2 基の主柱穴 SP2080.2033 と壁溝の間にはベッド状遺構が残存しており、その下位において小溝 SD2022 を検出した。本住居の建替えを示す壁溝、あるいはベッド状遺構の敷設に伴う土留を意図した小溝の可能性はある。

仿製鏡片（図 144-26）は内区から平縁までの破片であり、高倉洋彰の第 II 型 b 類、田尻義了の第 III 型 a 類に相当する。内区には弧線による内行花文帯から、斜行櫛歯文帯を経て平縁に至るもので、背文は朦朧としている。推定面径は 7.2cm であり、破断面には分割後の研磨は行われておらず、穿孔も認められない。また、変形が著しく鏡縁側からの側面は波打つ状態であり、内区側の断面 a 付近のエッジには鏡背側から、破片上部の平縁から内区にかけての断面 b の部分のエッジは鏡面側からの加撃が行われることにより捲れ上がっており、鑿などによる分割の痕跡を示すものかもしれない。

出土土器には、一部須恵器片（図 144-23 ~ 26）が混入するものの、壁溝から出土した小型鉢（図 144-11 ~ 14）や炉から出土した中型鉢（図 144-22）の形態から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと捉える。

J 区 SH4001（図 145 ~ 147）

J 区北東部で確認した竪穴住居である。住居東辺が調査区外となるが、図示した 2 基の主柱穴の配置から、約 4.2 × 5m の長方形住居が復元できる。壁面の立ち上がりは約 0.3m 遺存しており、埋没土は全て基本層序 IV 層に由来するブロック土を多く含む埋め戻し土である。炉は、床面中央からやや北寄り

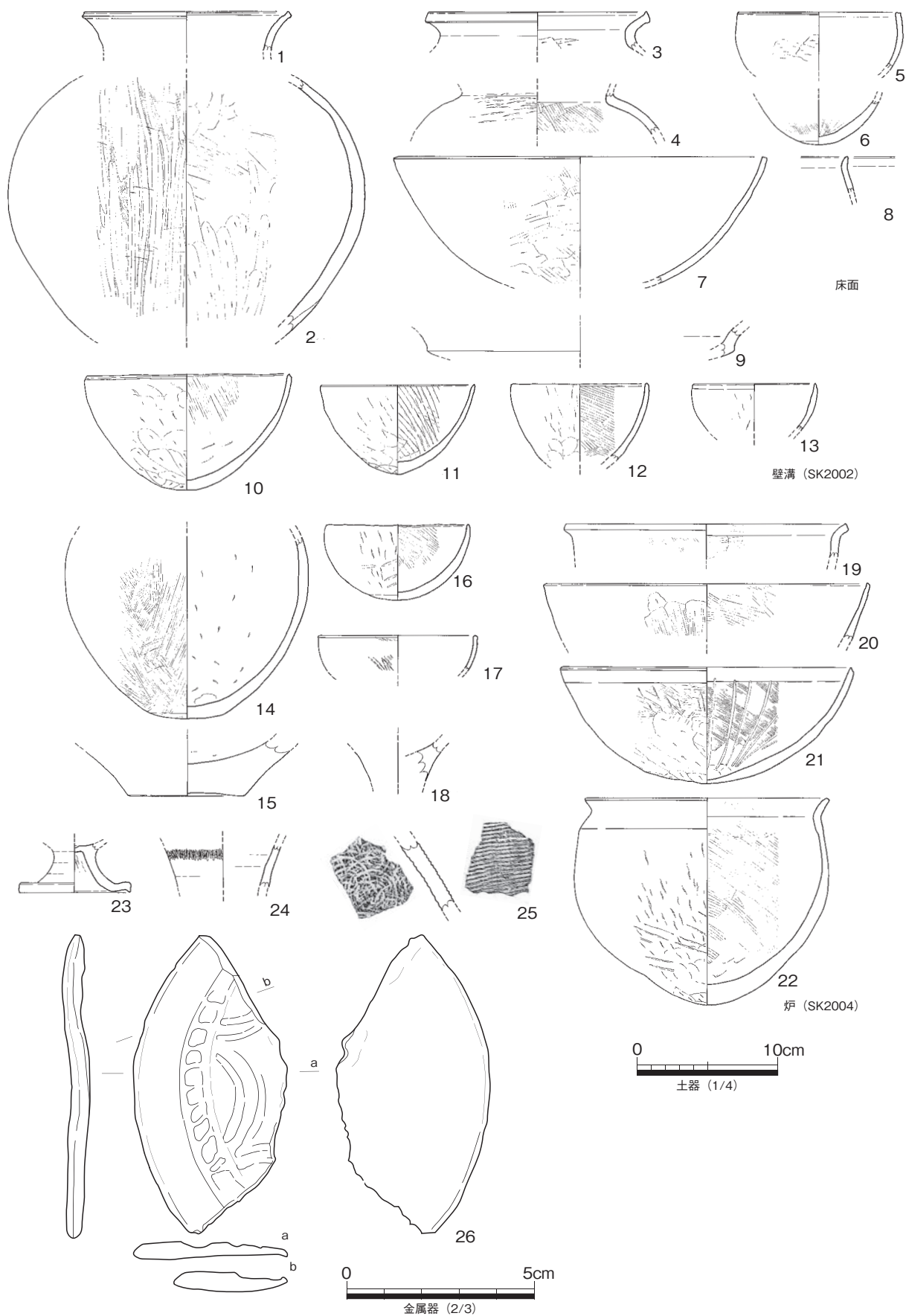


图 144 I 区 SH2002 出土遺物

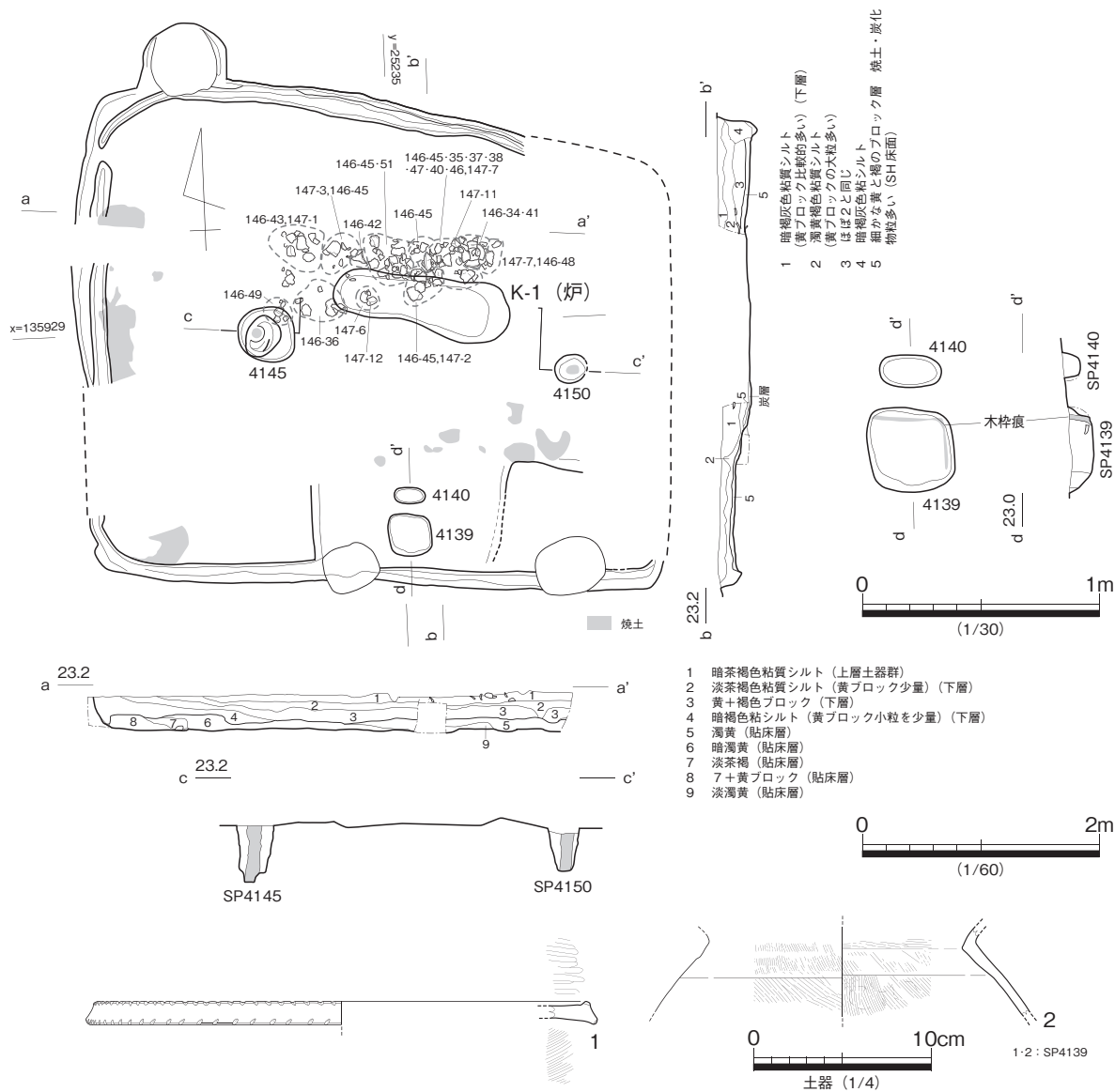


図 145 J区 SH4001 平・断面・出土遺物 (1)

に存在し K-1 とした長楕円形の土坑であり、埋没土は炭化物で満たされ灰穴炉となっている。住居南辺中央で途切れるベッド状遺構を確認しているが、断面観察からベッド状遺構は全周していたものと推定される。

ベッド状遺構が途切れる住居南辺中央の部分では、SP4139.4140 とした 2 基の小ピットを確認した。いずれも柱痕はもたず、SP4139 では一部の壁際に木柱状の痕跡が確認された。床面から掘り込まれている可能性が高く、検出位置から見て住居入り口等に関係した遺構と見られるが、SP4139 に見られた木柱の機能は不明とせざるを得ない。また、床面及び壁際から、細かな焼土塊が数箇所にとまって検出されているが、いずれも焼土面のような検出位置での生成を想定できるものではなく、2 次的に移動・廃棄された状況を想起させるものである。炉北側の床面上には、古式土師器の土器群が検出されている。前述した埋め戻し土の状況や重複する遺構が見られないことなどから、これらの土器群は良好一括資料と判断できる。

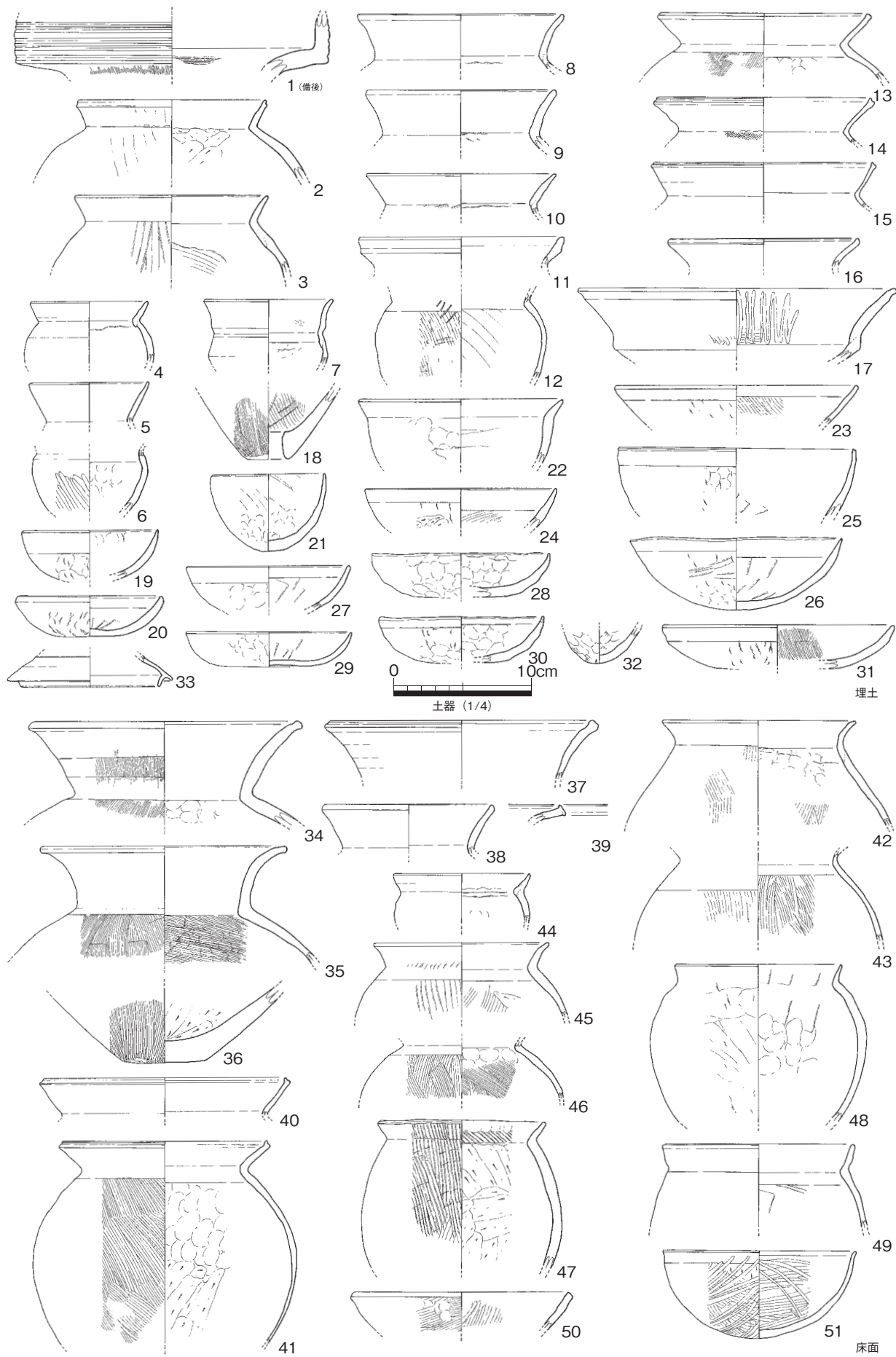


图 146 J区 SH4001 出土遺物 (2)

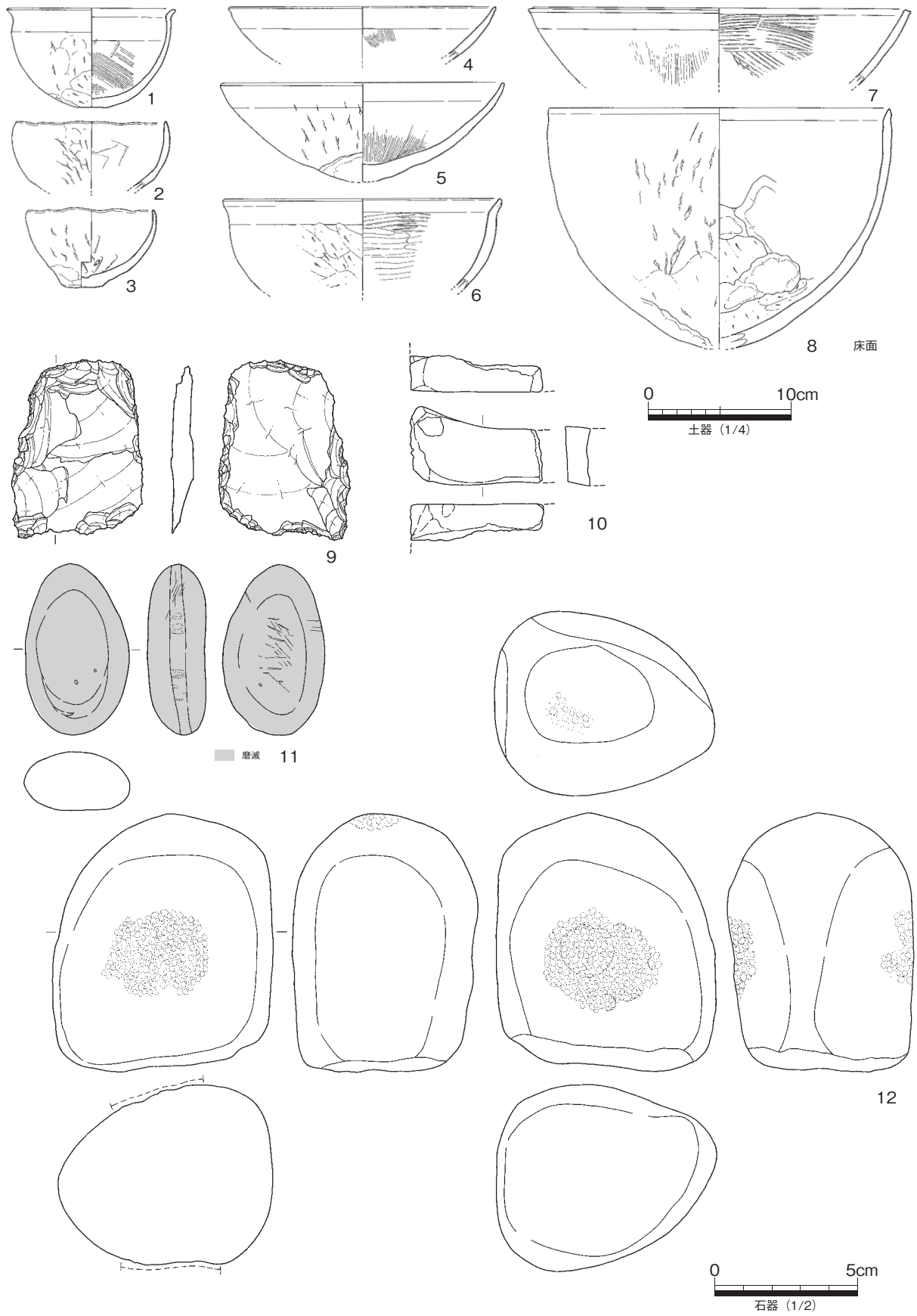


图 147 J区 SH4001 出土遺物 (3)

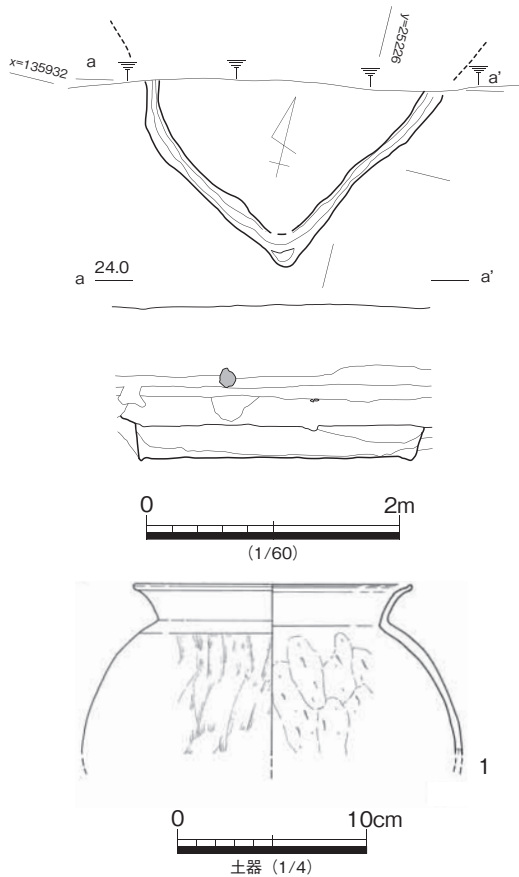


図 148 J区 SH4002 平・断面・出土遺物

い。

J区 SH4003 (図 149・150)

J区中央部で検出した長方形住居である。古代埋没のSD4002によって切られ、弥生前期埋没のSR4001を切り込む。平面形は、3.3×4mの長方形を呈し、良好な箇所では約0.5mの壁面立ち上がりが残存する。主柱穴は、住居長軸に沿った2基であり、炉は明確な掘り込みを持たず、床面中央やや南よりの炭化物の集中部として確認された。北辺を除く壁際には高さ0.2m程のベッド状遺構を検出している。ベッド遺構内側のラインが弧状を描くが、本住居をSR4001上面で検出しているため正確に捉えきれていない可能性が高い。住居床面よりやや浮いた位置で、複数の焼土塊の集中を確認しているが、SH4001と同様に被熱に伴う硬化面を伴うようなものではなく、二次的に投棄された状態で出土している。

甕(図149-14)は、口縁部形態や内面削りの範囲、肩部外面の列点など布留系甕の属性を備える。出土遺物には時間幅がみられるが、床面から出土し完形に復元された甕(図149-26)の形態から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておく。

甕(図146-13～16.40.41)は口縁端部内面を肥厚ないし摘み出す形態をもつ。一見、布留系にみえるけれども、図146-41は内面調整が異なっており、在来系統の甕と区別が困難である。出土遺物の特徴から、本住居は古墳前期前半新段階に廃絶したものと推定しておきたい。

J区 SH4002 (図 148)

J区北部の調査区壁際で検出した竪穴住居である。検出範囲は住居南東隅と見られる小規模なものにとどまる。方形住居と推定されるが、規模は明らかでない。また、住居南辺の壁面が調査区際で僅かに屈曲することから、張り出し部を検出している可能性がある。壁面の土層観察では、約0.3mの立ち上がりが確認されており、周辺に存在する古墳前期前半期のSH4001.4003と同様にやや深いことがわかる。

甕(図148-1)の形態から、本住居は古墳前期前半新段階に帰属するものと考えておきた

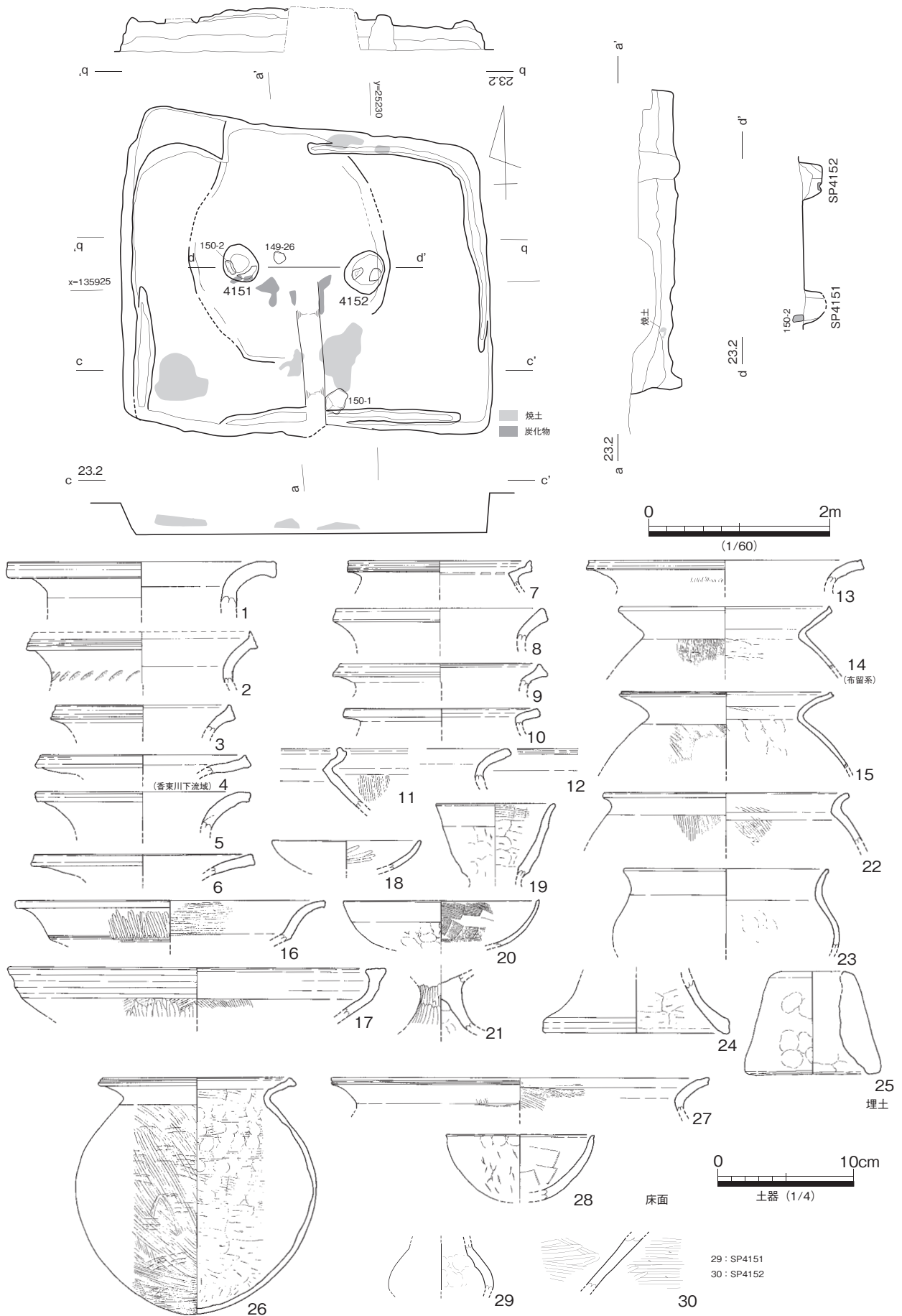


図149 J区 SH4003 平・断面・出土遺物(1)

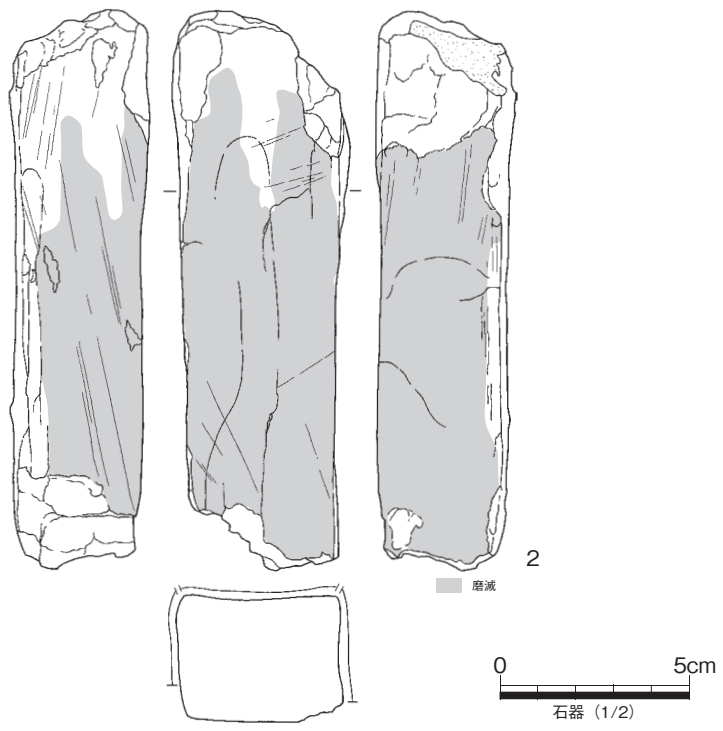
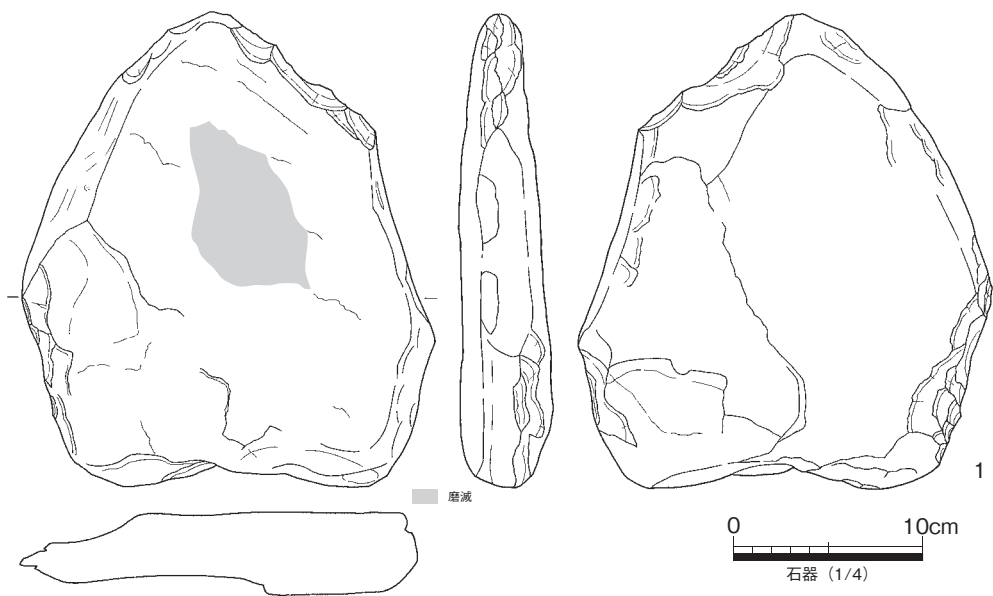


图 150 J区 SH4003 出土遺物 (2)

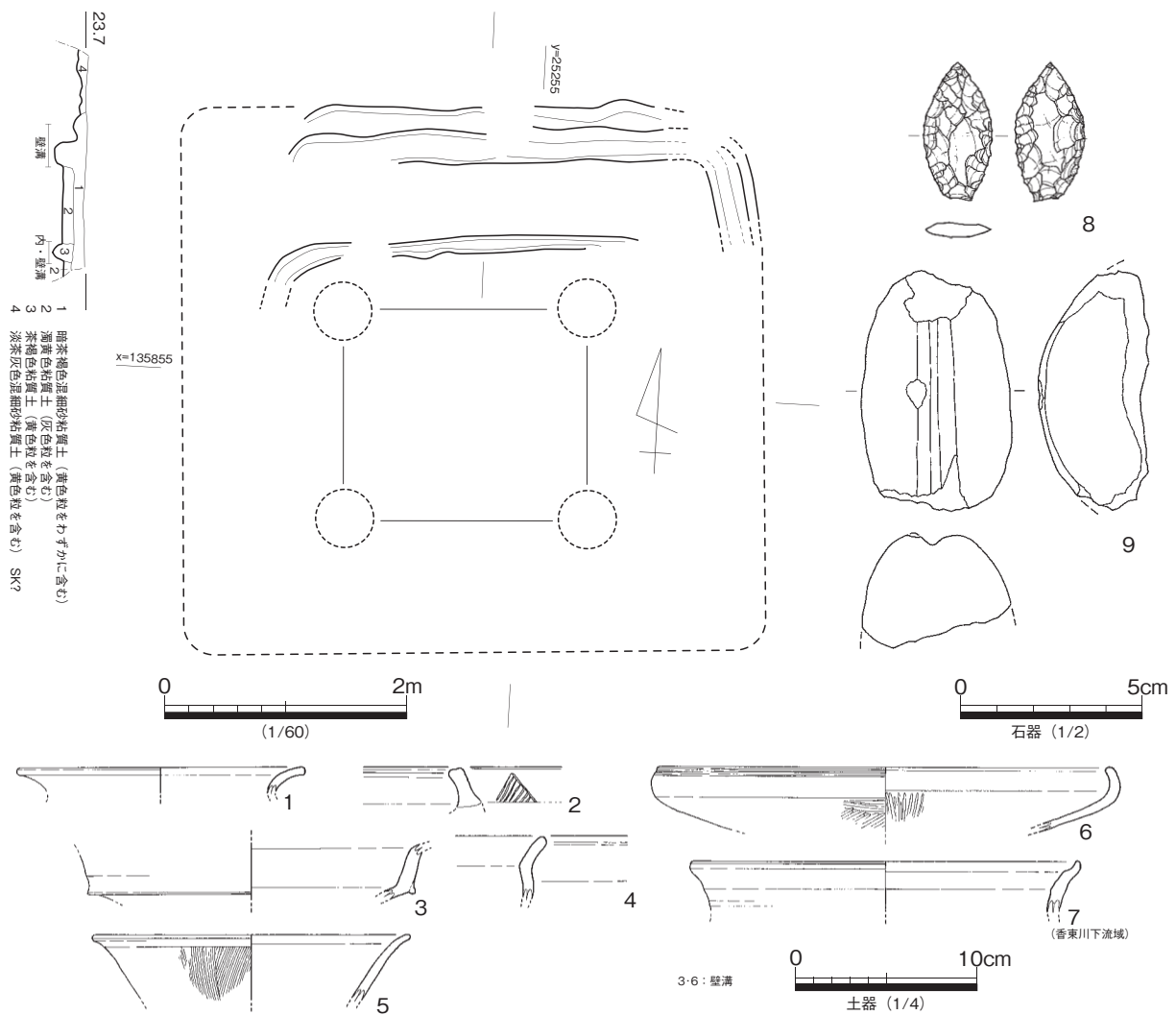


図 151 L区 SH5003 平・断面・出土遺物

L区 SH5003 (図 151)

L区南部で検出した竪穴住居である。攪乱を免れた住居北辺及びベッド状遺構のみ残存する。主柱穴の確認はできないが、残存部分からの推定で、一辺が約5mの方形住居と推定できる。ベッド状遺構は、基盤層の削り出しで成形されており、内側に壁溝状の小溝を伴う。

出土遺物は時間幅がみられるが、住居形態や高杯(図151-5)の形態から見て、本住居は古墳時代前期前半期に属するものと判断できよう。図151-9は花崗岩製の有溝石錘である。

L区 SH5005 (図 153)

L区南部で検出した竪穴住居である。床面中央と北側の壁溝及び壁面が残存するが、大半の外周部分は攪乱坑によって滅失する。主柱穴と壁面との位置関係から、直径約4.5mの円形住居に復元できる。主柱穴は図示した4基であり、床面中央にはSK5005とする円形と隅丸方形がセットとなる炉跡が存在している。西側の円形炉の方がやや深く、東側の方形炉は中位に炭化物の薄層が広がり灰穴炉に近い状況を呈している。また、炉周辺の床面には焼土・炭化物の集中箇所が見られ、床面北部ではガラス小玉



图 152 L·M·O·P区 平面

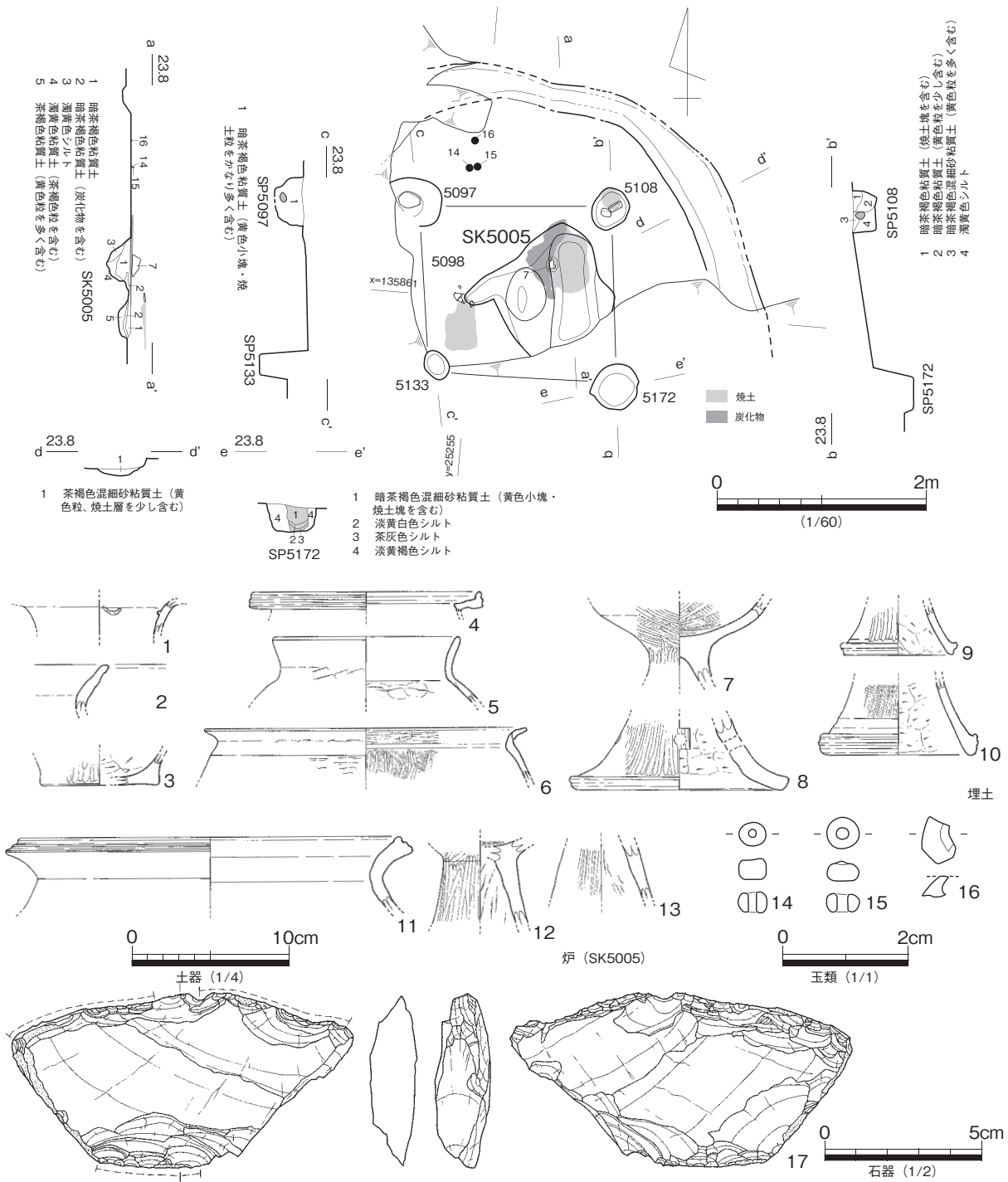


図 153 L区 SH5005 平・断面・出土遺物

がまとまって出土している。

出土遺物には一部古墳時代の土師器甕が見られるが、住居形態や炉跡構造を考慮すると、炉跡SK5005から出土した土器(図153-11～13)の特徴を優先し、本住居の帰属年代を弥生後期前半中段階と推定しておく。

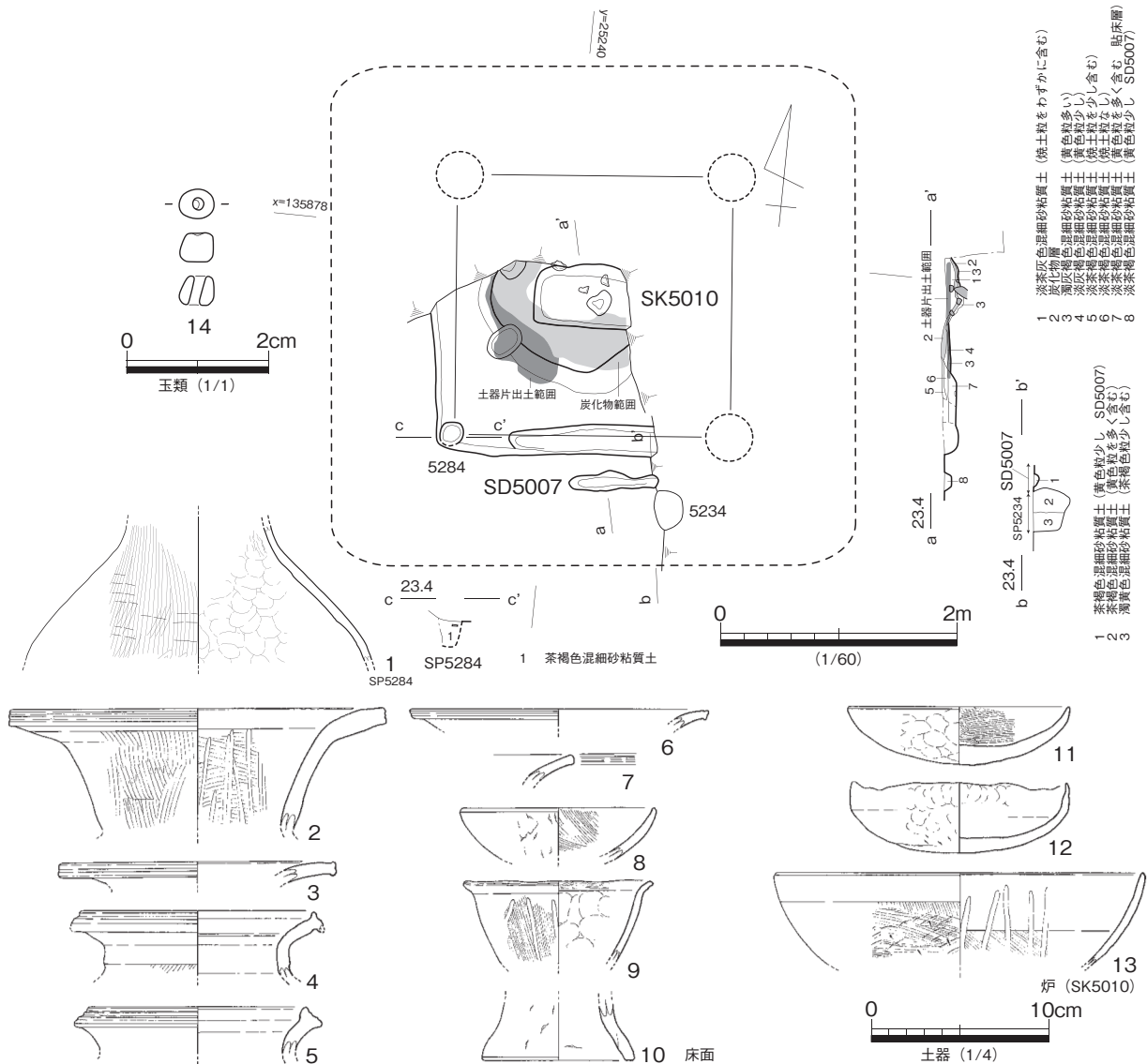


図 154 L区 SH5010 平・断面・出土遺物

L区 SH5010 (図 154)

L区北西部で検出した竪穴住居である。南北方向で帯状に残る遺構面で確認しており、攪乱坑によって南側を除いた方向の壁溝及び壁面を滅失する。遺構面北端で中央土坑と見られるSK5010とその南西側でL字状の小溝とその隅部で支柱穴SP5284を検出した。SP5284との位置関係からみて、L字状の小溝はベッド状遺構内側の壁材敷設に伴うものであり、支柱穴は4基と推定できる。更に南側で小溝SD5007を確認しているが、この間をベッド状遺構と捉えた場合には狭すぎであり、SD5007を壁溝とは捉えられない。更に南側を精査したが壁溝を検出することができなかったので、ベッド状遺構上部とともにかなりの削平を受けていると考えられる。ベッド状遺構を通有の幅で想定した場合、一辺が約4.5mの方形住居が復元できる。中央土坑SK5010は、隅丸方形を呈しており、支柱穴SP5284との位置関係から床面中央に配されたものと考えられる。南側には炭化物の広がりが確認できるが、この部分が高さ10cm程の土手状の高まりとなっている。本来的には全周していたものであろう。残存状況から判断して、出土遺物は、床面と貼床土、炉に伴う資料と考えられる。

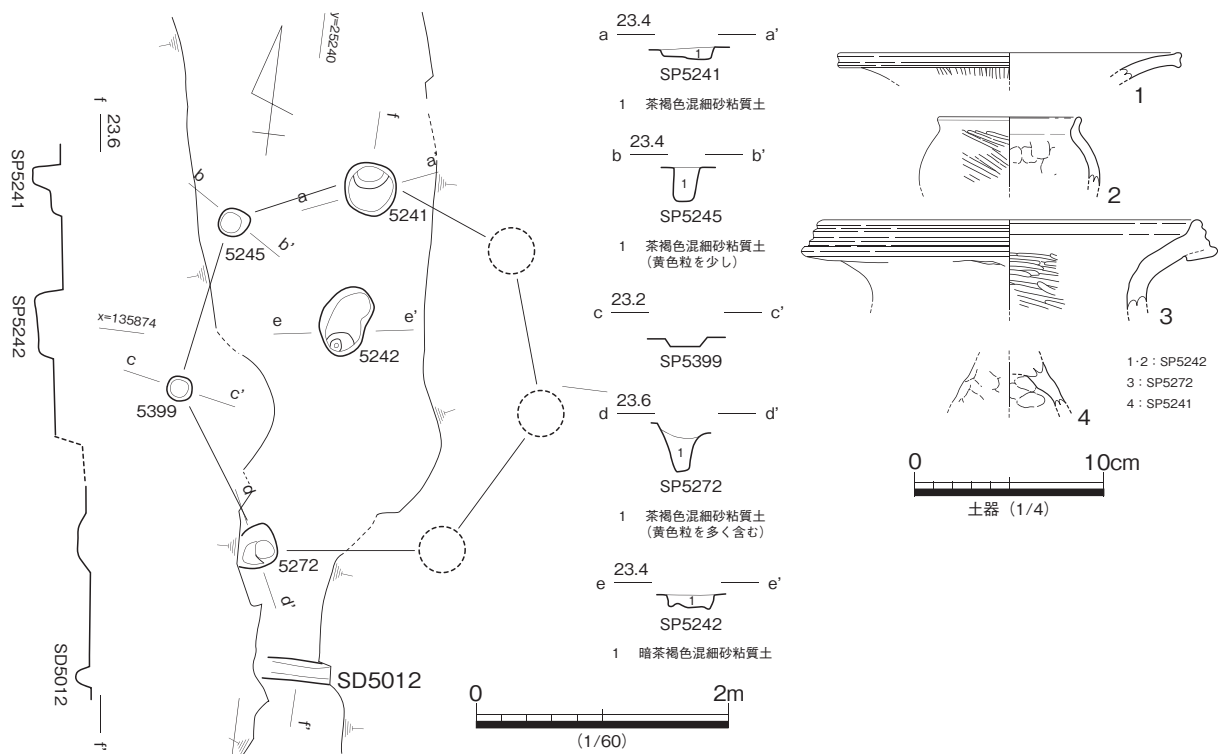


図 155 L 区 SH5016 平・断面・出土遺物

出土遺物の帰属時期に時間幅が見られるが、炉 SK5010 から出土した鉢 (図 154-11 ~ 13) を中心とした土器から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。ガラス小玉 (図 154-14) は緑みのあるブルーガラスを素材とし、床面直上から出土した。

L 区 SH5016 (図 155)

L 区北西部で検出した竪穴住居である。SH5010 と重複関係にあるが、切り合いを判断する土層等の材料がない。南北に伸びた帯状の遺構面で検出しており、SP5241 などの柱穴が円弧状に廻ることから主柱穴として採り上げ、南部の SD5012 を壁溝として復元した。位置関係から見て主柱穴は 7 基と見られ、多角形住居の可能性も考えられる。SP5242 は炭化物を顕著に含まないものの、深度や形態から見て炉跡の可能性が考えられることから、本住居と伴うものとして採り上げた。

SP5241 の出土遺物に、古墳中期と考えられる土師器杯が見られるが、主柱穴配置などの形態から、弥生後期後半期の所産として捉える。

L 区 SH5017 (図 156)

L 区北部で検出した竪穴住居である。攪乱によって削平された遺構面に 3 基の柱穴が組み合うことから主柱穴として採り上げた。またその北東部側に SD5009 として壁溝と考えられ L 字状にクランクする小溝があり、これらを組み合わせることで一辺が約 6m の方形住居として復元した。主柱穴と SD5009 との位置関係がやや離れることから、両者は別遺構である可能性も考えられるが、他に SD5009 と組み合う柱穴が存在してないことから、ここでは同一遺構として提示することとしたい。SP5132 は、中央

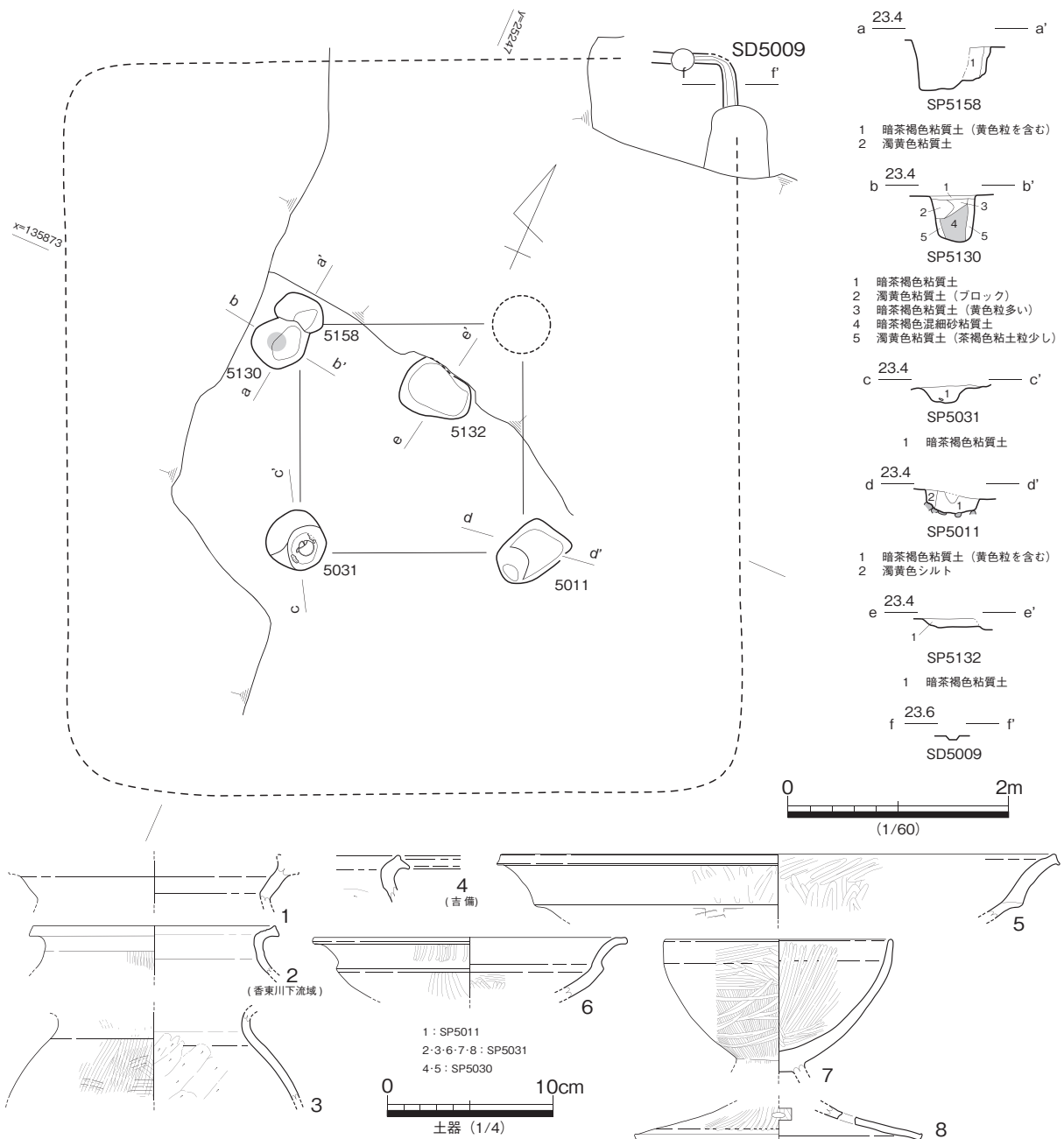


図 156 L 区 SH5017 平・断面・出土遺物

からやや北へ逸れるが柱痕をもたず埋没土中に炭化物を疎らに含むことから、炉跡として採り上げる。

出土遺物は主柱穴からのものに限られるが、SP5031 から出土した台付鉢（図 156-7.8）の形態から、本住居は弥生後期後半期に帰属するものとして考えておきたい。

L 区 SH5020 (図 157)

L 区南西部で検出した竪穴住居である。SH5002 に重複する形で柱穴が 4 角形に組み合う箇所があり、竪穴住居として提示する。柱穴配置から復元しているため、住居覆土出土遺物が提示できない。また、主柱穴からの出土遺物に須恵器・土師器片は見られず、弥生土器小片のみ確認された。

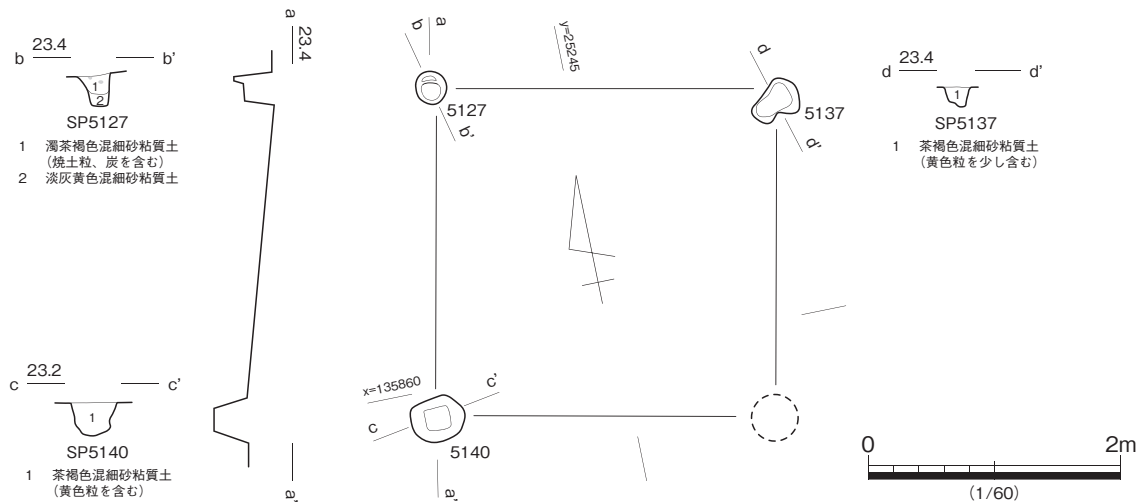


図 157 L区 SH5020 平・断面

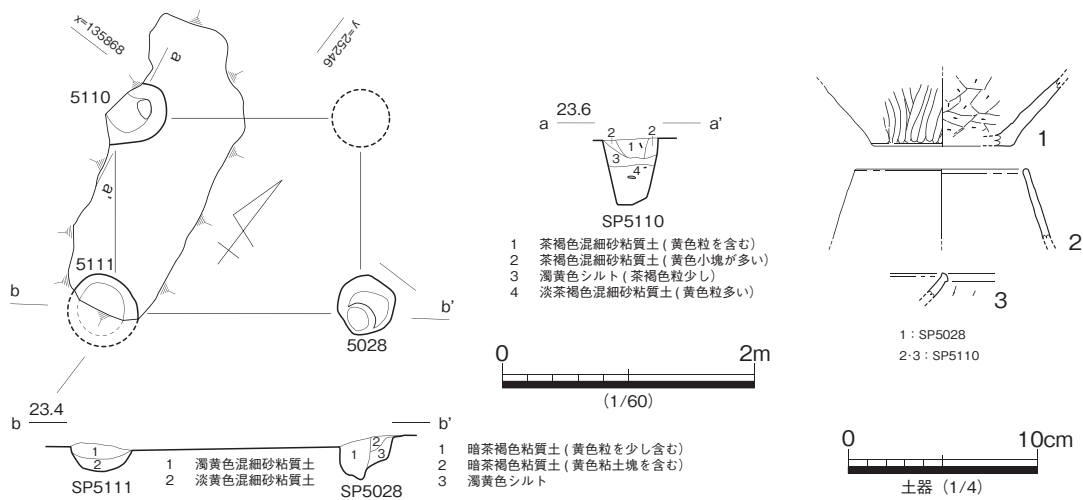


図 158 L区 SH5021 平・断面・出土遺物

詳細な時期決定に課題を残すが、主柱穴の方位が弥生終末期に多く見られる住居に類似していることから、本住居の帰属時期を同時期に想定しておきたい。

L区 SH5021 (図 158)

L区中央部で検出した竪穴住居である。攪乱が顕著に及ぶ箇所において、柱穴がL字状に検出されており、もう一基推定することにより竪穴住居主柱穴として復元することにした。柱穴からの出土遺物は弥生中期後半期が主体となり、若干量の終末期の遺物が含まれる。4基の主柱穴と捉えた場合、通有規模の住居より柱間が短く復元に否定的な要素も見られるが、深度のある柱穴配置を重視し、4基の主柱穴をもつ竪穴住居として提示する。

主柱穴 SP5110 から出土した鉢 (図 158-3) の形態から、本住居は弥生終末期に帰属するものと推定しておきたい。

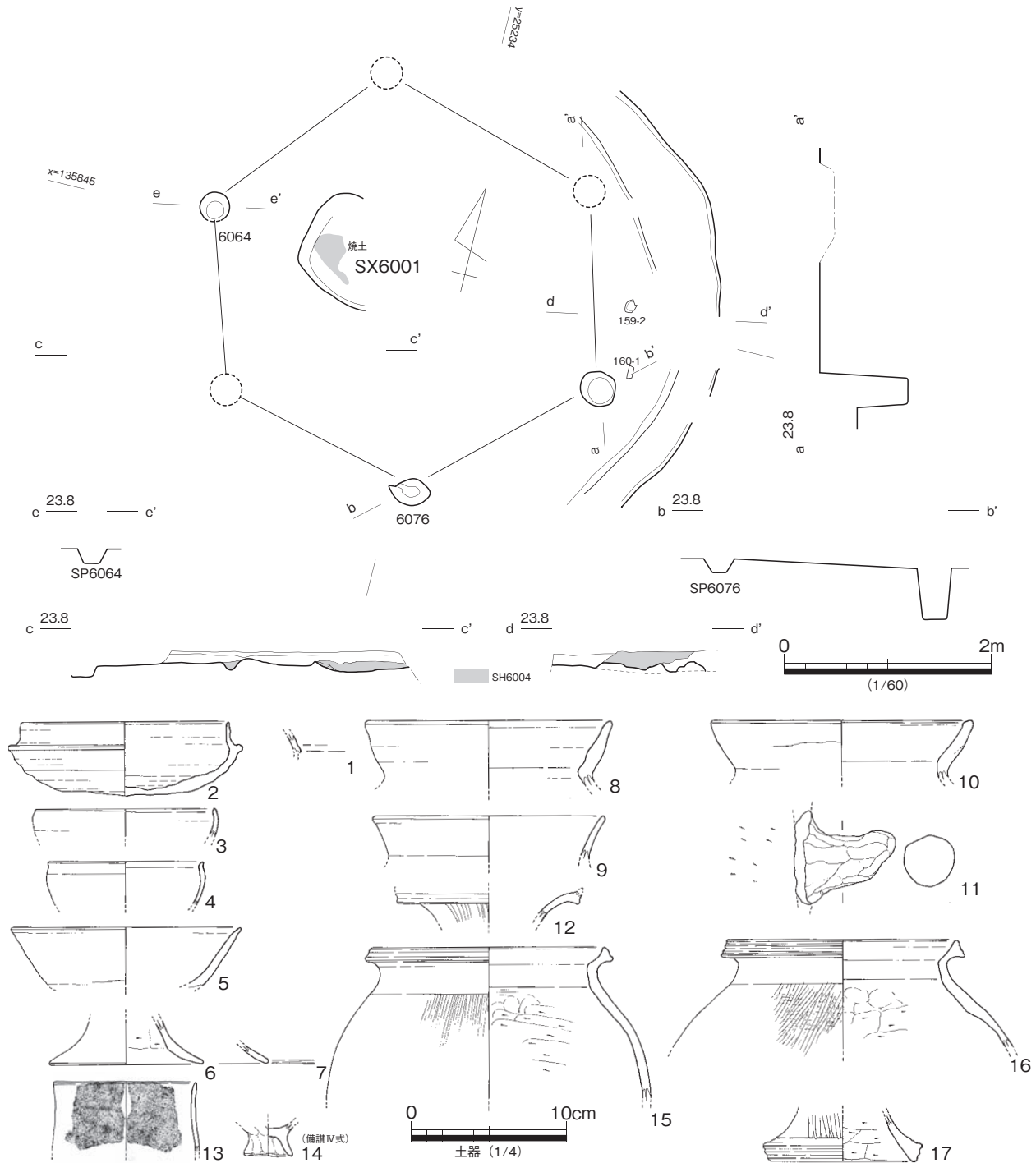


図159 M区 SH6004 平・断面・出土遺物(1)

M区 SH6004 (図159・160)

M区南部で検出した竪穴住居である。古墳後期のSH6003に切られ、弥生後期前半期のSH6006を切り込む。また、住居中央部は攪乱坑で滅失しており遺存状態が悪いが、東側では壁面の立ち上がりを辛うじて確認している。図示した3基の主柱穴と壁面との関係から直径約6mの円形乃至多角形住居に復元できる。東壁面から約0.6m程内側に小段が巡るが、ベッド状遺構に対応したものかどうかは判断できない。床面中央やや北西寄りには焼土が伴う方形の落ち込みがあり、炉跡の可能性はある。

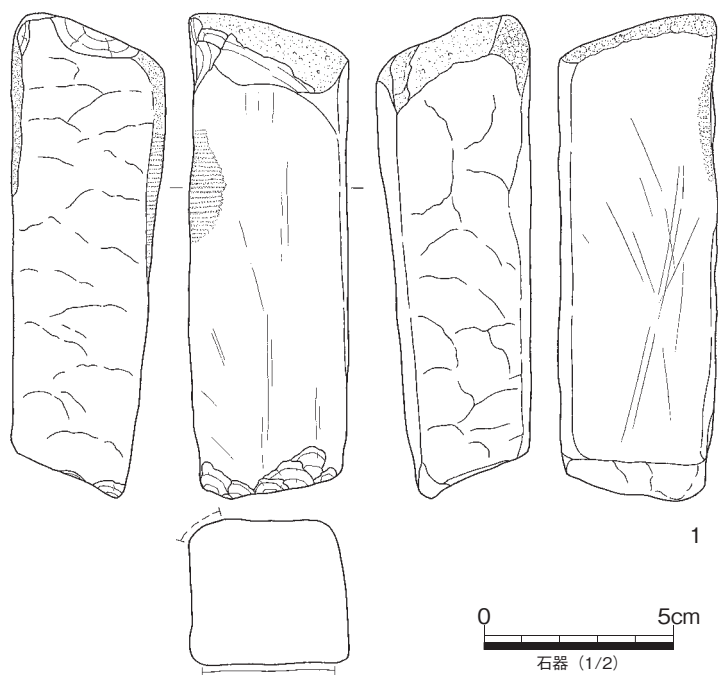


図 160 M区 SH6004 出土遺物 (2)

出土遺物は須恵器・土師器類(図 159-1～11.13.14)が多く見られるが、これらは上層のSH6003からの混入遺物と見做すことができる。弥生土器甕(図 159-15.16)の形態などから、本住居の帰属時期を弥生後期前半中段階と推定しておく。図 160-1 は安山岩製の砥石である。

M区 SH6006 (図 161)

M区南部のSH6004の下位において検出した竪穴住居である。住居北東部のコーナー部分を中心に確認しているが、大半を攪乱及び後世遺構で滅失する。住居北東部の壁溝上面において、弥生後期前半期の甕を中心とした土器群がまとまって出土している。検出範囲は限られるものの、

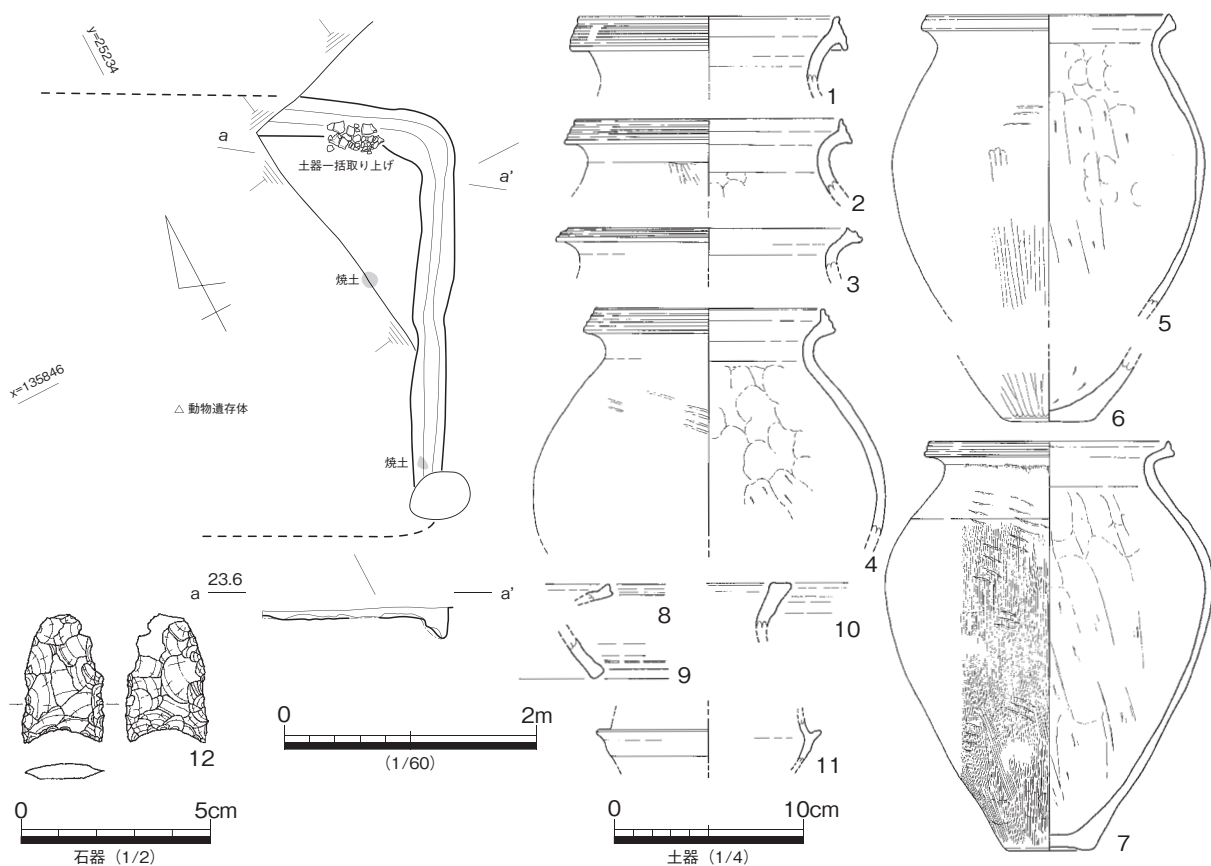


図 161 M区 SH6006 平・断面・出土遺物

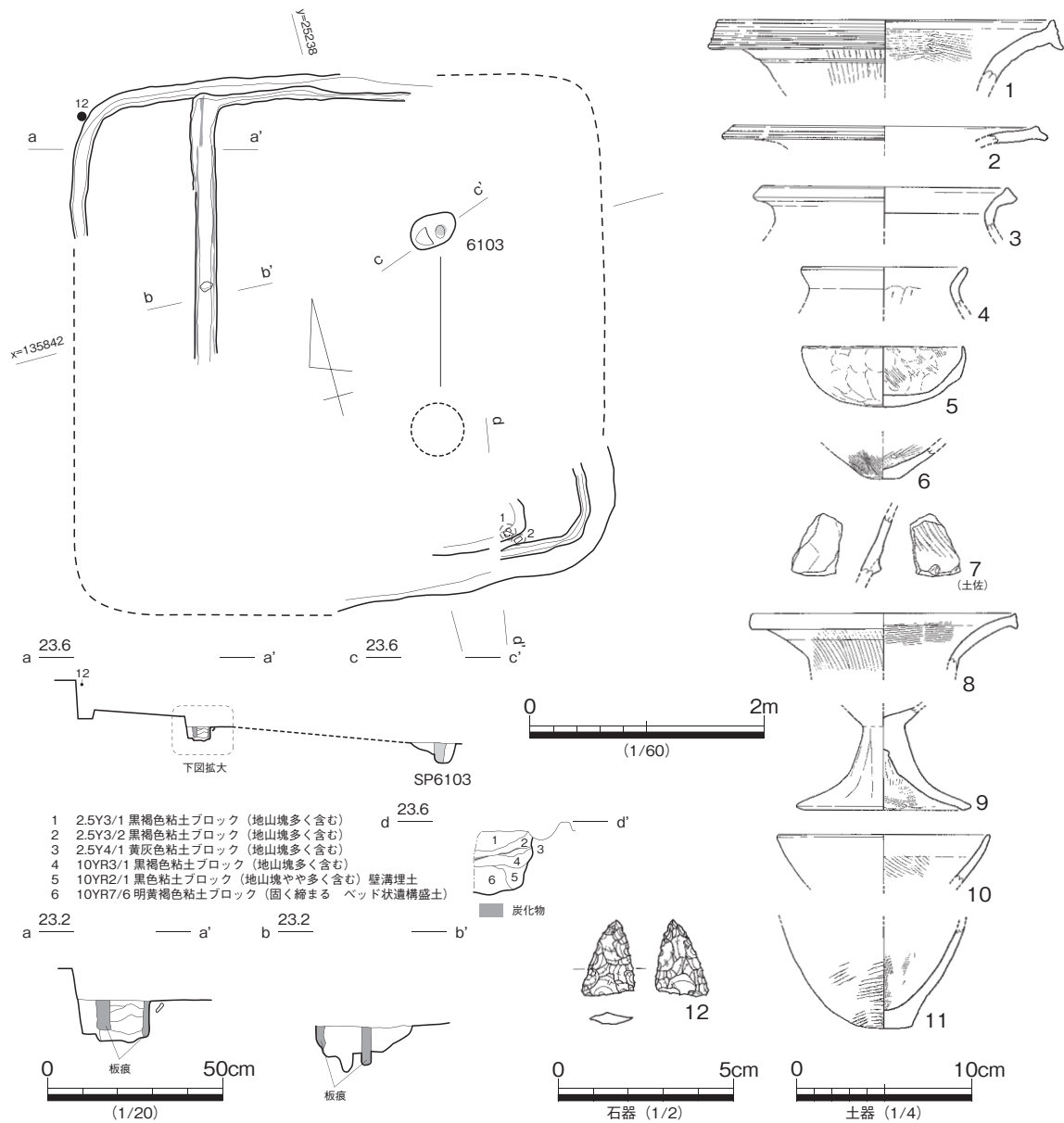


図 162 M 区 SH6007 平・断面・出土遺物

平面形態や時期的な点を考慮すると、小型長方形住居と考えられる。

出土遺物の中で須恵器蓋杯 (図 161-11) が見られるが、混入品と考える。比較的残存率の高い甕 (図 162-4.5.7) の形態から、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものと推定しておきたい。

M 区 SH6007 (図 162)

M 区南部と II -3 区に跨って検出した竪穴住居であり、弥生前期に埋没する SD6003 を切り込む。住居北西部と南西部の間には攪乱が存在するが、約 4.5 × 4.5m の方形住居と考えられる。壁の立ち上がりは良好に遺存しており、約 0.4 ~ 0.5m の残存を測る。削平を考慮したとしても、元々深度のある掘り込みをもつ住居であったと考えられる。主柱穴は北東よりで SP6103 とした 1 基を確認しており、検出位置から南北で 2 基と推定できる。主柱穴から西側の一边にのみ地山削り出しによるベッド状遺構が設けられており、下段部との境に壁溝状の小溝が確認された。小溝内には、2 条併行の変色部が平・断

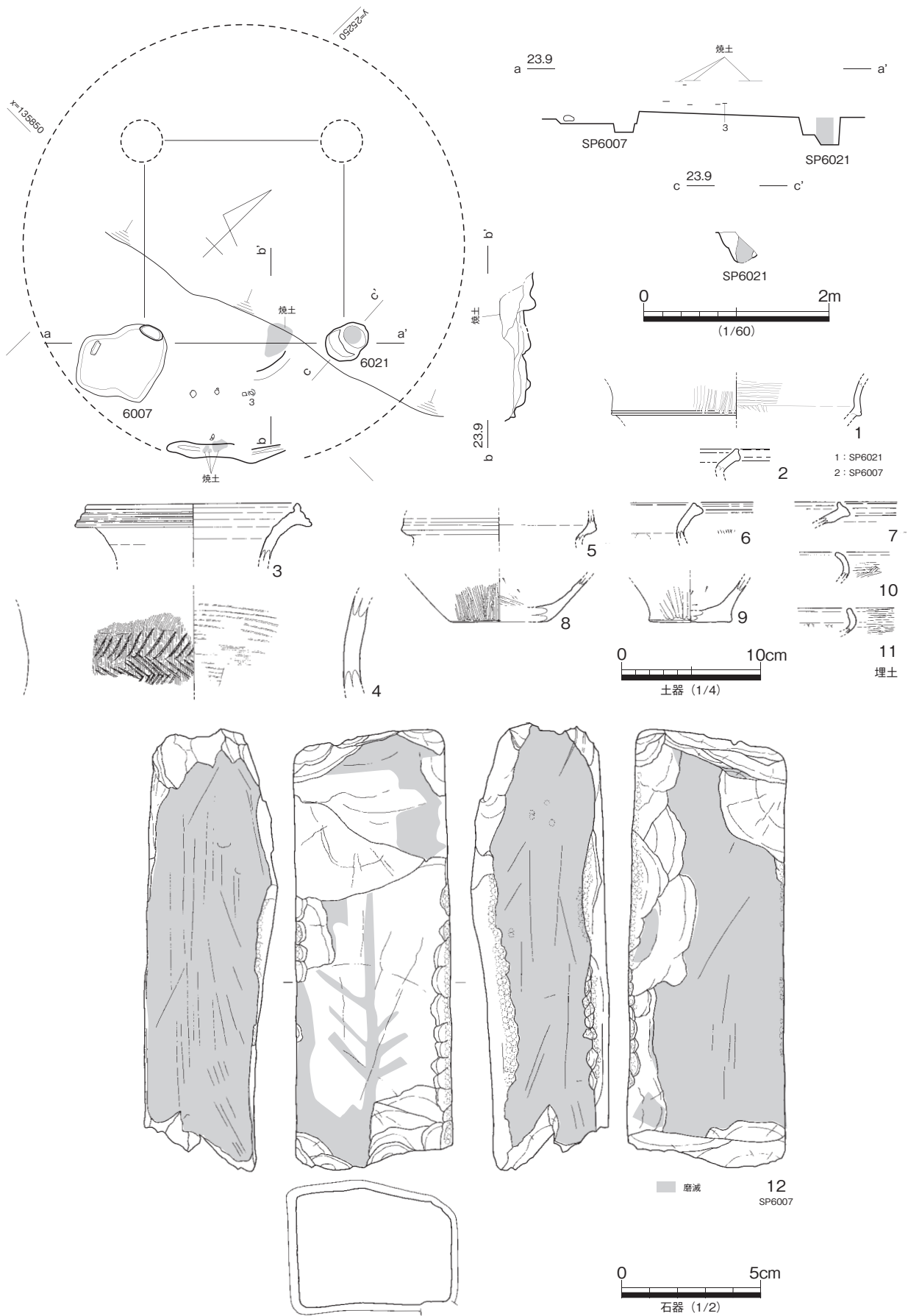


图 163 M区 SH6009 平·断面·出土遺物

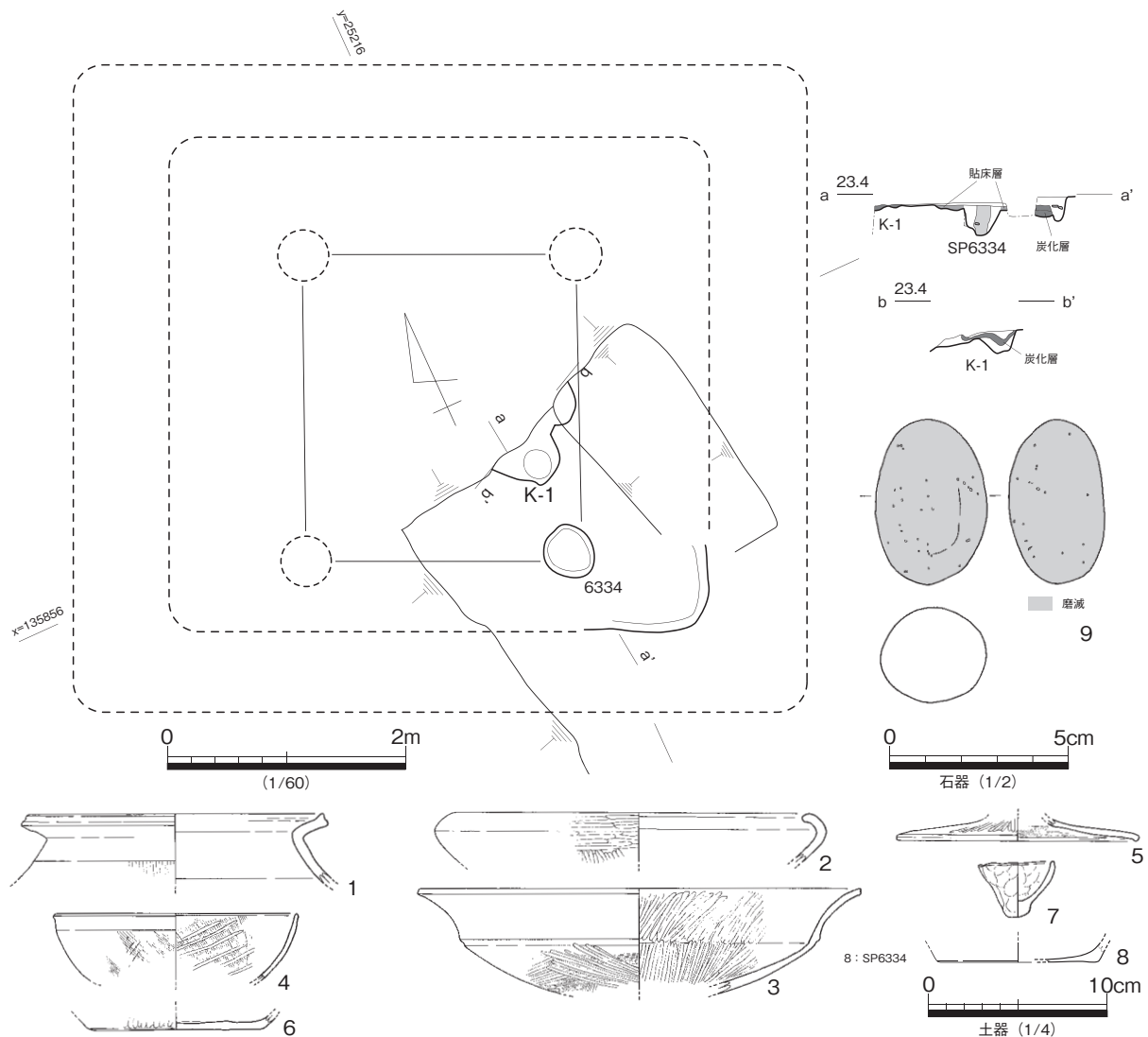


図 164 M 区 SH6020 平・断面・出土遺物

面で確認でき、壁材敷設の痕跡である可能性が高い。

出土遺物に時間幅が認められるが、高杯 (図 162-9) 及び鉢 (図 162-10) の形態から古墳前期前半新段階の所産と考える。

M 区 SH6009 (図 163)

M 区南東部で検出した竪穴住居である。住居南部の壁面と壁溝を部分的に検出し、2 基の主柱穴に推定の 2 基を加えて、4 主柱穴をもつ直径約 4.7m の円形住居を復元する。壁面の立ち上がりは約 0.2m 程残存しており、埋没土中位から上位にかけて、土器片と焼土の集中が確認された。明確な形で炉跡の確認はできていないが、SP6007 と 6021 の間で土手状の高まりを確認しており、その北側の床面中央部にその存在が推定できる。また、主柱穴 SP6007 の平面形が乱れるのは、柱穴掘り方の埋土と貼床土を誤認して掘り下げたことによる。

出土遺物は時間幅がみられるが、甕 (図 163-5.6) の形態から、弥生後期前半新段階に属する竪穴住居と考えられる。図 163-12 は安山岩製の砥石であり、磨滅痕以外にも敲打痕が確認されることから、敲打石に転用を受けている。

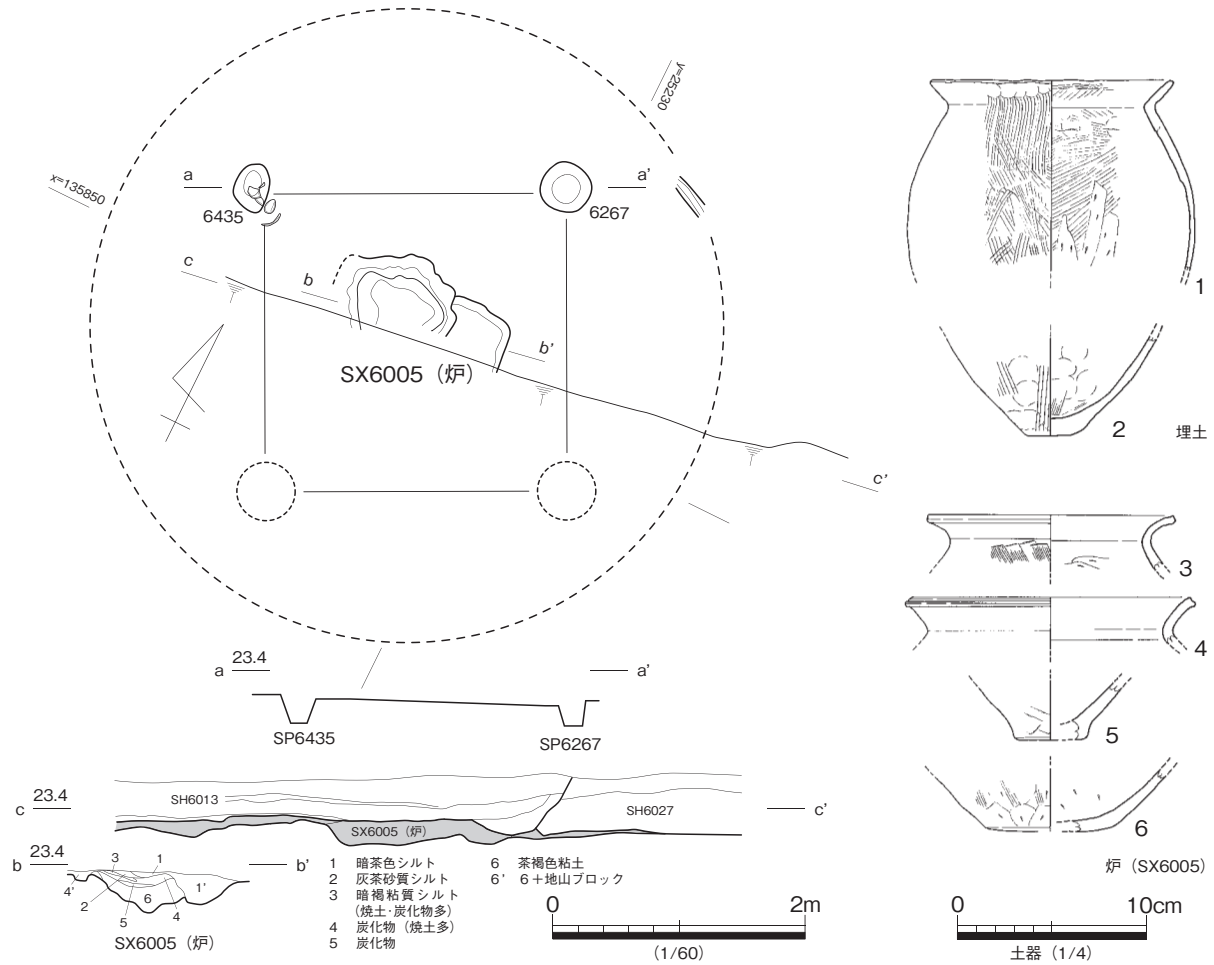


図 165 M 区 SH6032 平・断面・出土遺物

M 区 SH6020 (図 164)

M 区北西隅で検出した竪穴住居である。住居南東隅部と主柱穴を中心とした部分を確認しており、大半は攪乱坑で滅失する。SP6334 は掘り込み面から判断して、主柱穴の可能性が高いと考えられ、住居規模を推定する材料は見られないが、壁面プランとの関係から 4 基の主柱穴をもつ方形住居の南東隅の主柱穴とした場合、壁面と距離が接近しすぎることから、現状で残る壁面はベッド状遺構の落ちとも考えられる。SP6334 の北側には、K-1 とした炉が存在する。K-1 は埋没土中位に炭化物層が見られ、周囲に浅い落ち込みを伴う。

出土遺物は弥生中期後半から後期後半期までの時間幅が見られるが、高杯(図 164-3)、台付鉢(図 164-5)の形態から、本住居は弥生後期後半新段階に帰属する可能性が高い。図 164-9 は安山岩製の磨石であり、全体が均一的に摩滅している。

M 区 SH6032 (図 165)

M 区中央部で検出した竪穴住居である。古墳後期の SH6013.6027 に切られるため、壁溝の一部と貼床土が部分的に残存する。SX6005 は周囲に土手状の高まりをもつ中央土坑であり、それを手懸りにして図示した SP6435.6267 は主柱穴と判断した。主柱穴と北東部に僅かに残存する壁溝との位置関係から、

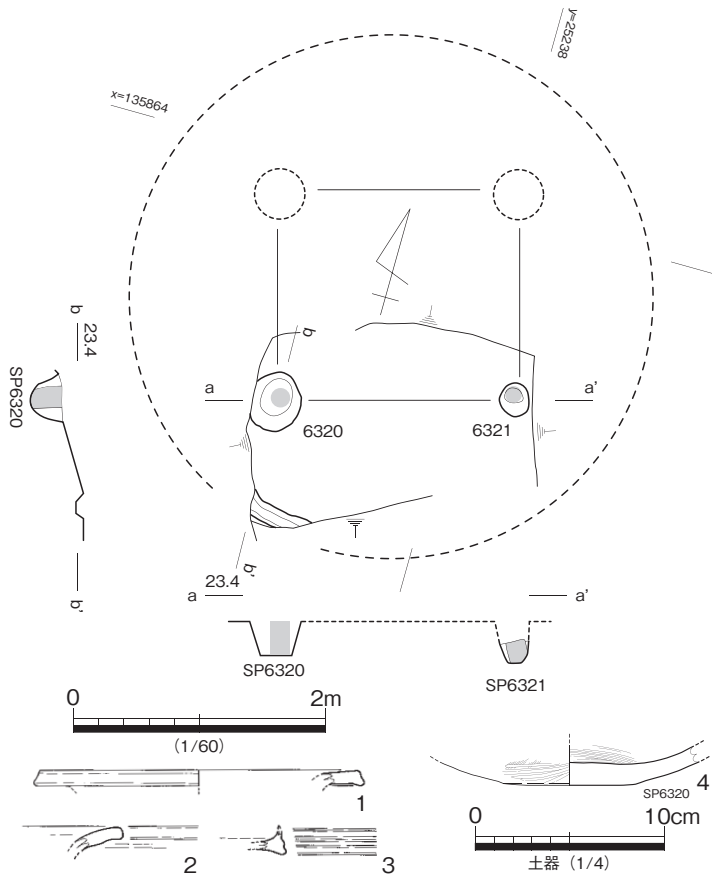


図 166 M区 SH6033 平・断面・出土遺物

直径約 5m の円形住居となる可能性が高い。炉 SX6005 は一端 0.3m 程掘削した後、土手状の高まりを作り出しながら中位まで埋め戻し、その上部を炉として使用する。土手内側及び底面に被熱により硬化・変色を広く認めるが、硬化の度合いは微弱であり、他の住居で確認されるものと相違点はない。

主柱穴出土遺物に若干の混入品が見られるが、床面及び炉内出土遺物の様相から、本住居は弥生終末期中段階に帰属するものと考えられる。

M 区 SH6033 (図 166)

M 区北東部の島状に残された小規模な範囲で確認した竪穴住居である。上面は既に削平されており、南西部の壁溝の一部と図示した 2 基の

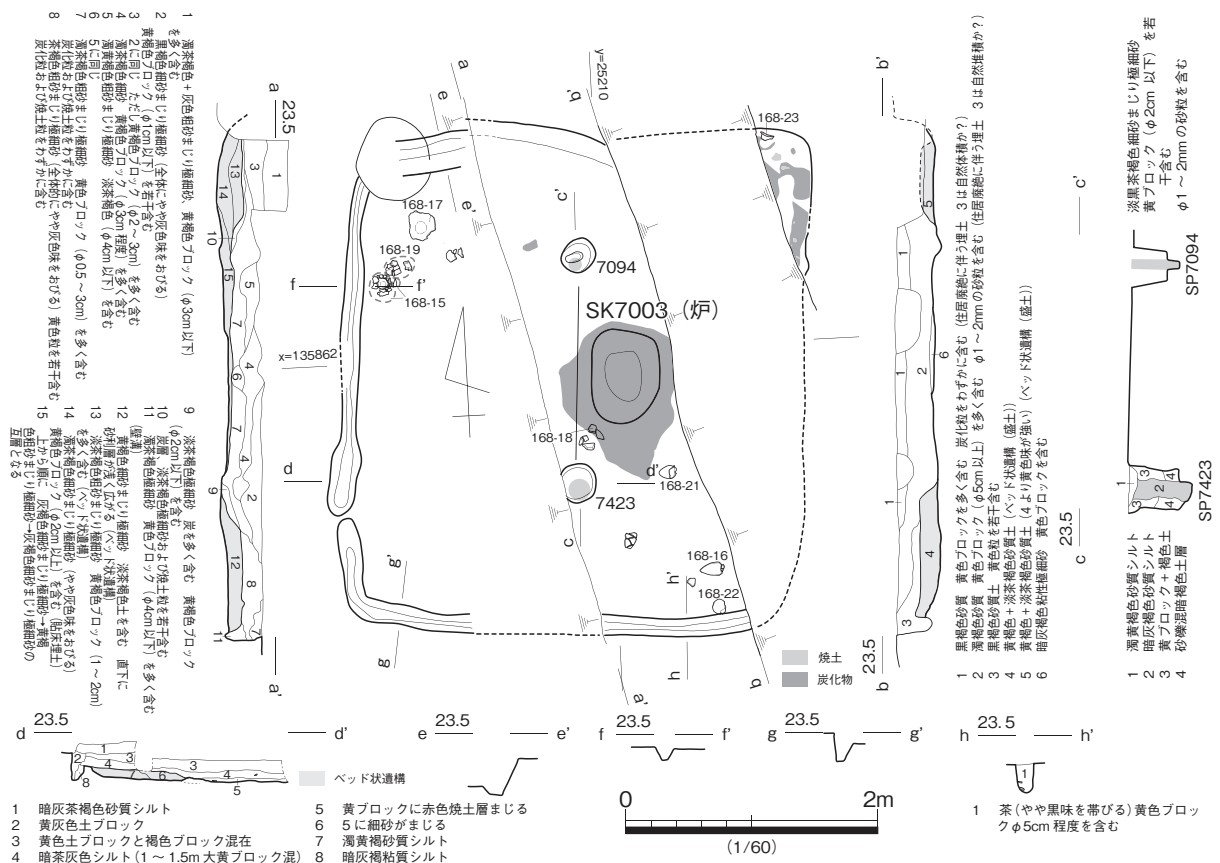


図 167 N区 SH7001 平・断面

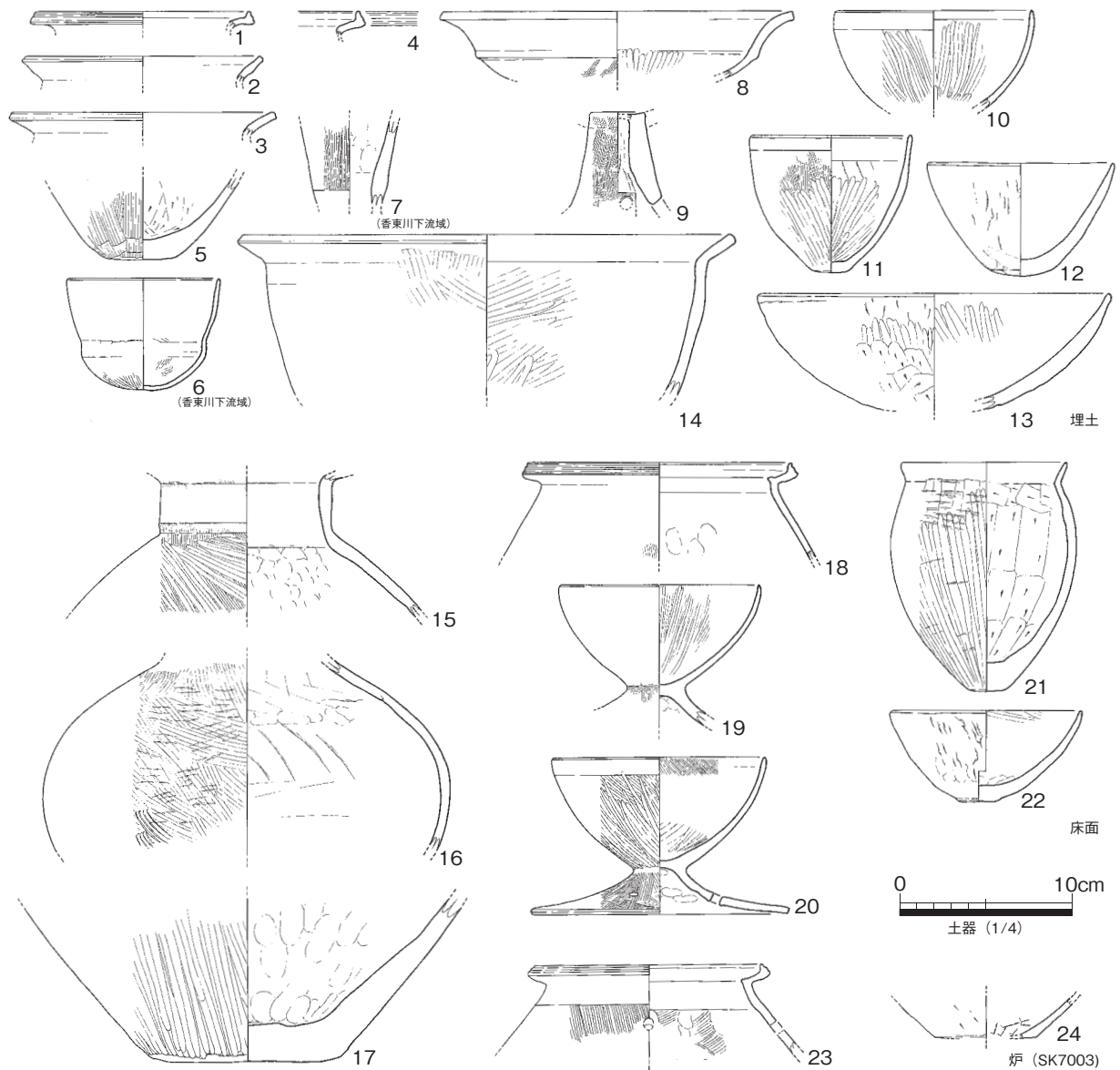


図 168 N 区 SH7001 出土遺物

主柱穴を確認したのみであり、大部分は攪乱坑で滅失する。主柱穴を 4 基と推定し壁溝の平面プランを考慮すると直径約 4m の円形住居に復元できる。

出土遺物は少量に止まるが、図 166-1.2.4 などは概ね弥生終末期に収まるものであり、本住居の年代を同時代に推定しておく。

N 区 SH7001 (図 167・168)

N 区南部で検出した竪穴住居である。位置的に見て SH7310 と重複関係にあるが、現地調査で確認できなかった。攪乱坑によって住居東部の大半を滅失するが、 4.1×3.6 の小形長方形住居と見られ、図示した 2 基の主柱穴を擁している。炉は主柱穴の柱間より東へややずれた位置に床面が楕円形に落ち込む箇所と考えられ、炭化物が掘り方を越えて床面に広がる。壁面の立ち上がりは 0.3m 程残存しており、平面的に検出できなかったが断面より南北に盛土によるベッド状遺構の敷設が推定できる。住居埋土は、

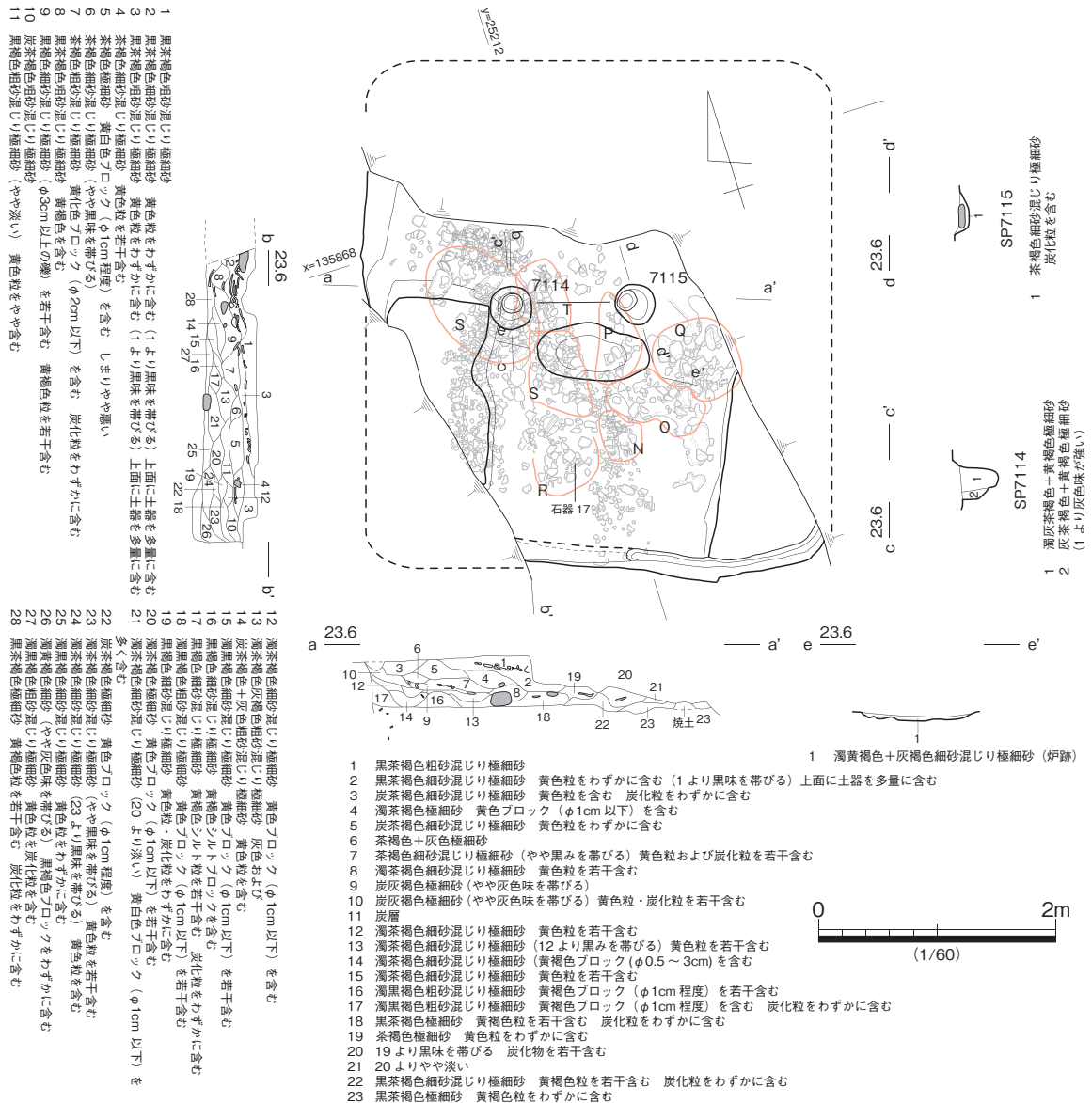


図 169 N区 SH7003 平・断面

拳大程度の黄色粘土ブロックを多く含むもので、極めて短期間に埋め戻された状況が推定できる。床面上には完形に近い土器群が3か所程度に分かれて廃棄されており、埋め戻し土の状況から時間幅の短い資料群と評価できる。

床面から出土した完形の台付鉢 (図 168-20) の形態から、本住居は弥生後期後半新段階に帰属するものと推定しておきたい。

N区 SH7003 (図 169 ~ 174)

N区中央部で検出した竪穴住居である。弥生中期後半のSB7001を切り込む。住居北西部及び南西部を攪乱坑で滅失するが、周辺の同時期の住居との比較から、長辺・短辺ともに4m前後の小形長方形住居と考えられる。住居床面中央に楕円形の炉があり、炉跡長軸に直交する方向で2基の支柱穴を想定する。住居長辺の両側には、盛土によるベッド状遺構を敷設するが、西側を見る限り南へ偏った部分的な

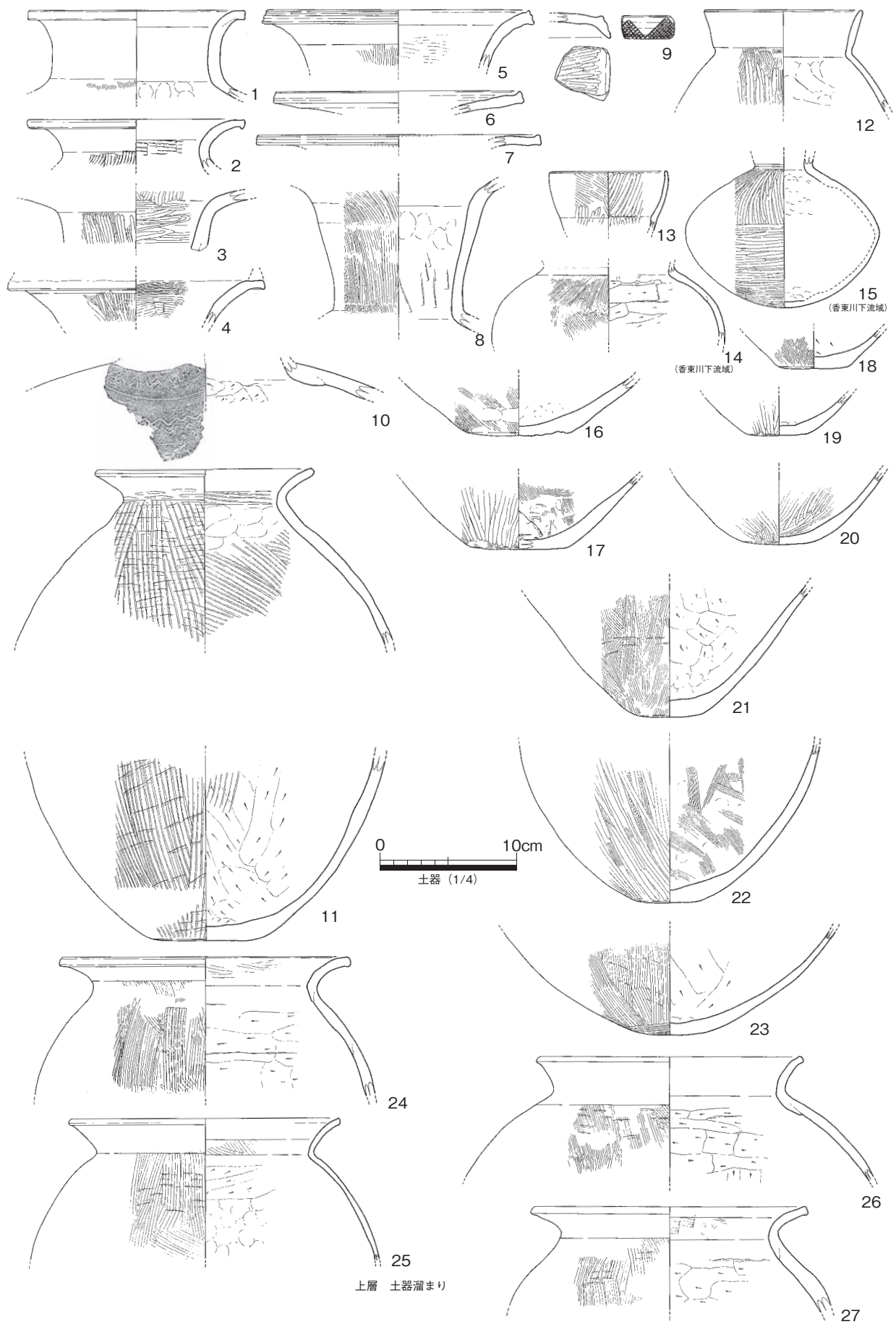


図 170 N区 SH7003 出土遺物 (1)

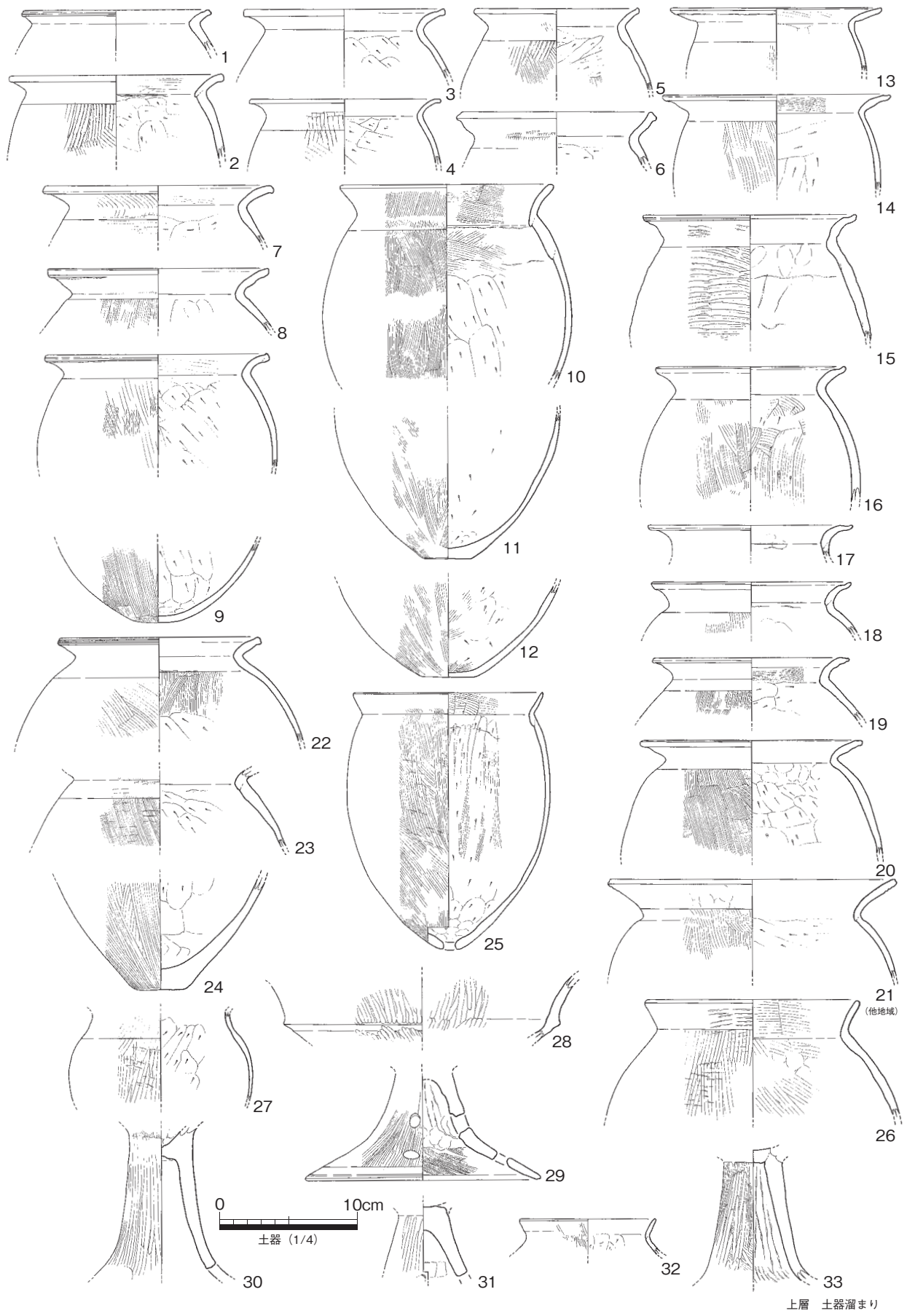


图 171 N区 SH7003 出土遺物 (2)

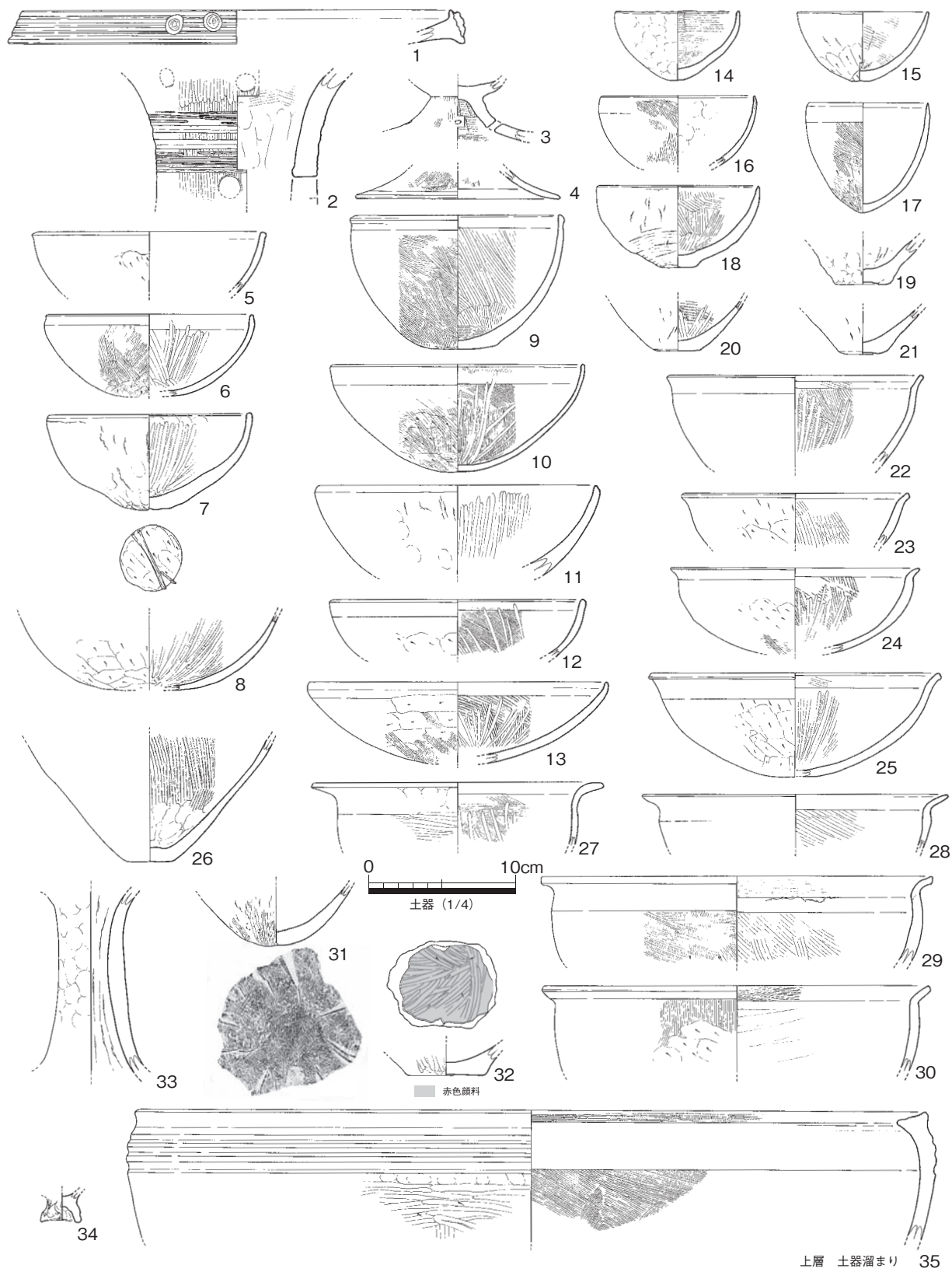


図172 N区 SH7003 出土遺物(3)

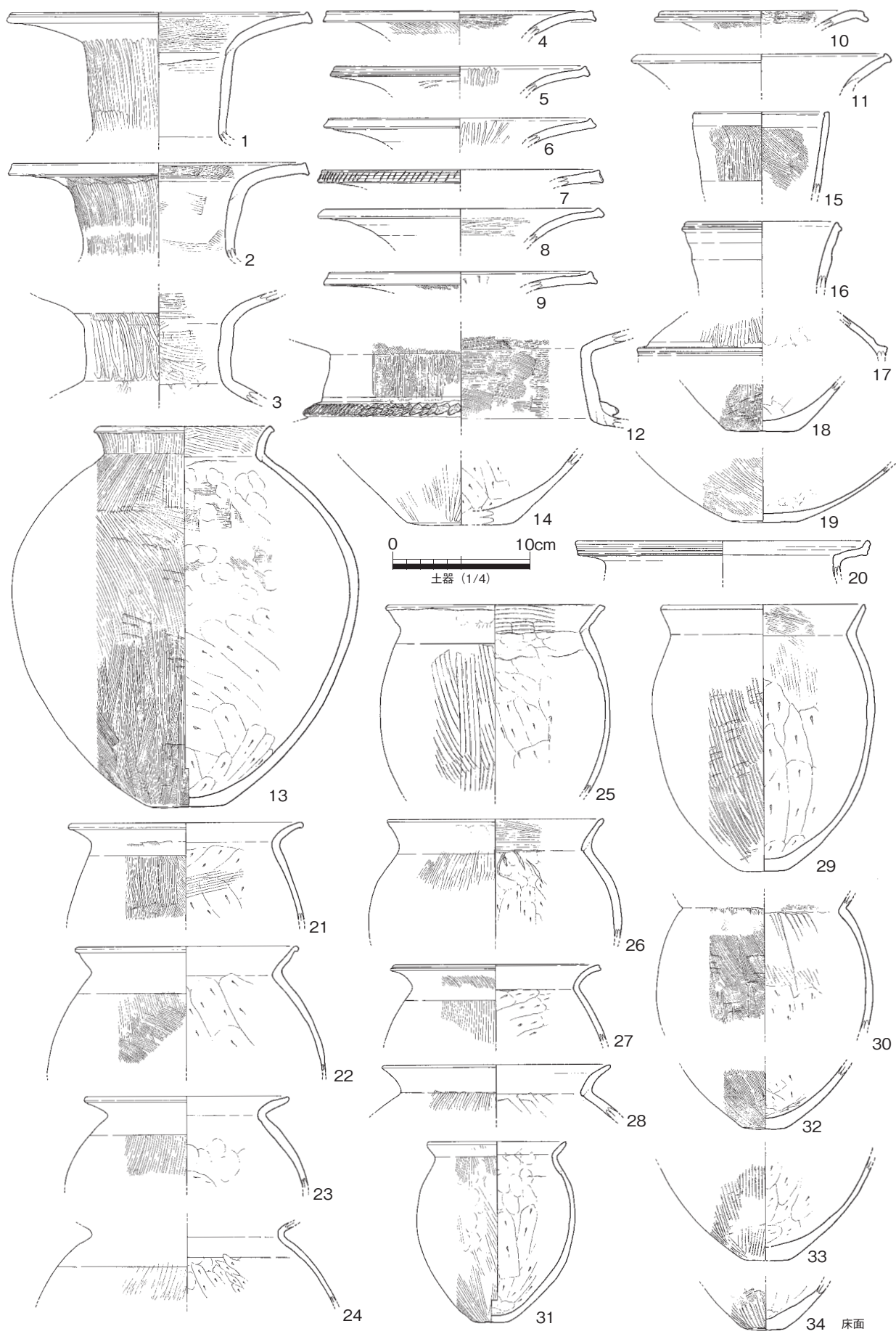


图 173 N区 SH7003 出土遺物 (4)

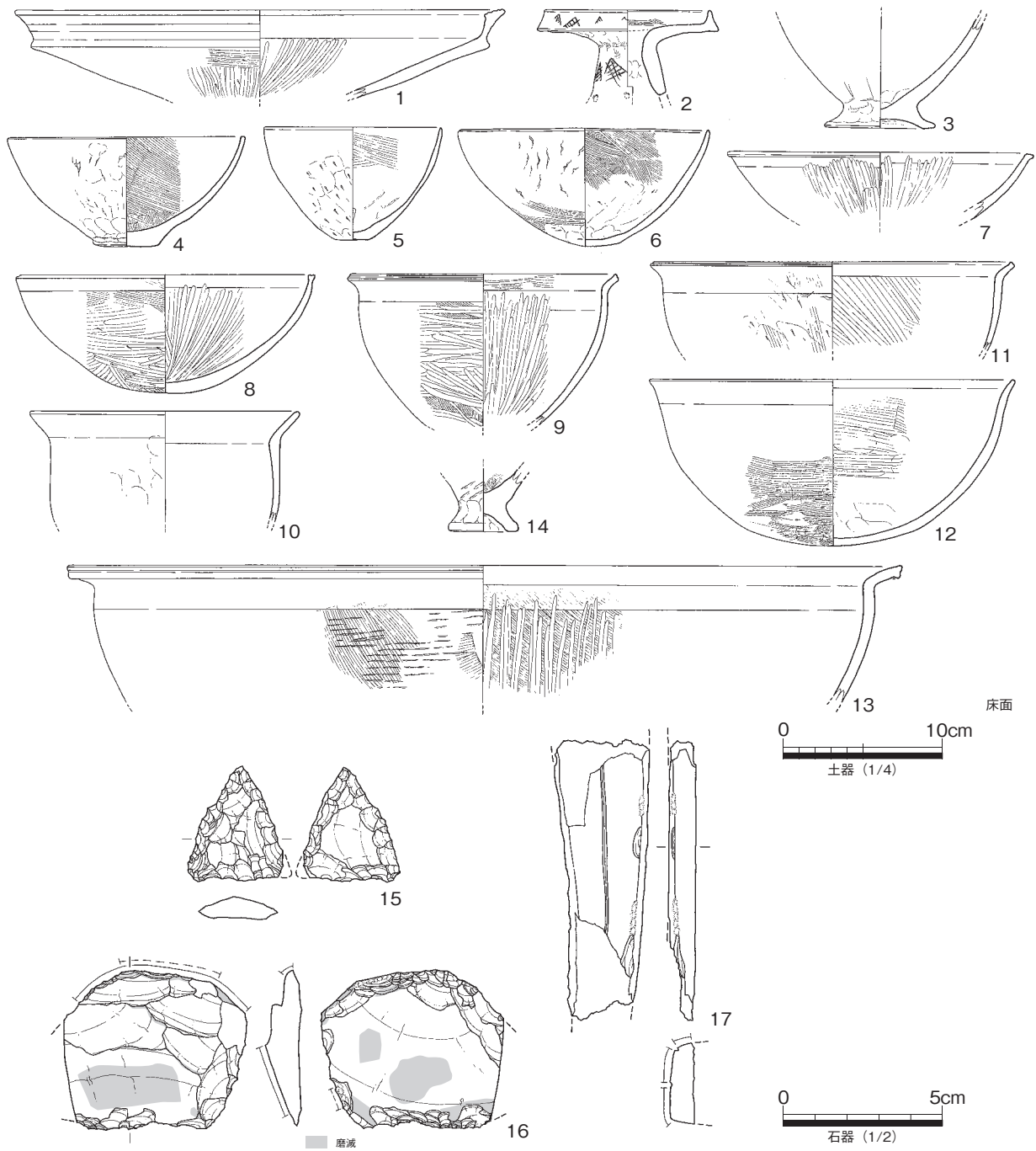


図174 N区 SH7003 出土遺物 (5)

配置となる。住居壁立は約0.4m残存しており、南側にあるSH7001と同様、小形方形住居同士で掘り込みが深いという共通性が指摘できる。

埋没土は全て基盤となる基本層序IV層起源のブロックを多く含む埋め戻し土であり、中位に完形土器から構成される土器溜りが形成される。土器溜り形成層の下面は、平坦ではなく中央に向かって窪みを見せることから、床面から一定程度の埋め戻しが行われた後土器廃棄が行われたと考えられる。また、土器溜り形成層の下場が若干土壌化していることから、最初期の埋め戻しから土器溜りの形成までに、一定期間の時間差を見積もる必要がある。

また、住居中央部の最上位付近には、中位とは別の小規模な土器溜りが形成される状況が確認できることから、土器廃棄は最低2回に分けて行われたと考えられる。従って、床面と中位から上位にかけての土器溜りから出土した遺物は、一定程度の時間差を想定しなければならない。

遺物は、床面と前述した土器溜りに大別して取り上げた。土器溜りの土器群は、層位より平面分布を優先して取り上げてしまい、上位と中位のそれを区別することができない。ここでは、床面資料と土器溜り資料の二つに区分して提示することとしたい。

上層土器溜り出土遺物(図170～172)は概ね弥生終末期中段階から新段階の時間幅がみられ、断面で確認したように土器廃棄が複数回に分けて行われた可能性が高い。甕底部(図172-32)は、時期的に後期前半期に遡る形態をもち、内面に水銀朱が付着している。床面出土遺物(図173,174)は、土器溜り出土資料よりも時期的に先行する弥生終末期中段階の所産と推定され、本住居の帰属時期を示すものと考ええる。図174-17は上層土器溜りから出土した結晶片岩製の柱状片刃石斧片であり、時期的にみて混入品と考えられる。

N区 SH7004 (図175～178)

N区北部で検出した竪穴住居である。SH7306を切り込む。現地調査では4棟の住居として調査を行っている。特に南東部に付属し、張り出し状の部分との切り合い関係を把握できないまま掘り下げてしまう調査ミスを犯している。その為、個別に提示することも叶わず、同一住居として報告せざるを得ない結果となった。また、攪乱坑を挟んだ北東隅の壁際出土遺物と、後述する炉周辺の床面出土遺物との間には明確な時期差があり、支柱穴と炉が北側に偏るなど資料的に不備があることを承知の上で一辺が約5mの単一の方形住居として報告することを断っておきたい。

現状で支柱穴と認定できるものは図示した2基であり、その中間に炉とする方形の落ち込みがあり、炉内及びその周辺の床面に炭化物が広がる。炉内中央には、同様の埋没土をもつ小ピットSP2085があり、具体的な機能は不明ながらSH7005の炉跡と共通したものとなっている。支柱穴の南北にはベッド状遺構が確認できるが、住居の平面形の正確な把握に至っていないため、長辺あるいは短辺側に敷設されるものなのかは明らかにできない。前述したように、南東隅部の箇所は、張り出し部であった可能性も考えられるが、確定できない状況にある。

覆土出土遺物には、須恵器が数点確認されるなど若干混在した状況がみられるが、床面出土遺物(図176)は、弥生終末期の資料ではほぼ占められる。ここでは、甕(図176-5)や鉢(図176-12～26)の形態からみて、本住居は弥生終末期中段階に帰属するものと考えておきたい。広口壺(図176-1)は弥生後期前半期の資料であるが、垂下口縁をもち、内外面に竹管文を施すもので、河内地域に類似した特徴をもち、生駒西麓産の胎土をもたないことから、同地域の模倣土器と考える。図177-39のガラス小玉は、貼床土内から出土した。蛇紋岩製勾玉(図177-40)はベッド状遺構内側の床面から出土したものであり、頭・尾ともに丸みをもつ。ガラス丸玉(図177-41)は炉直上から出土していることから、本住居に伴うものと考えてよい。弥生終末期の九州島以外の資料としては希少な事例となる。土玉(図177-42)は覆土出土のため、帰属時期の確定はできない。

N区 SH7005 (図179～182)

N区中央部で検出した竪穴住居である。弥生後期前半期のSH7305. 同後半期のSH7001を切る。平面

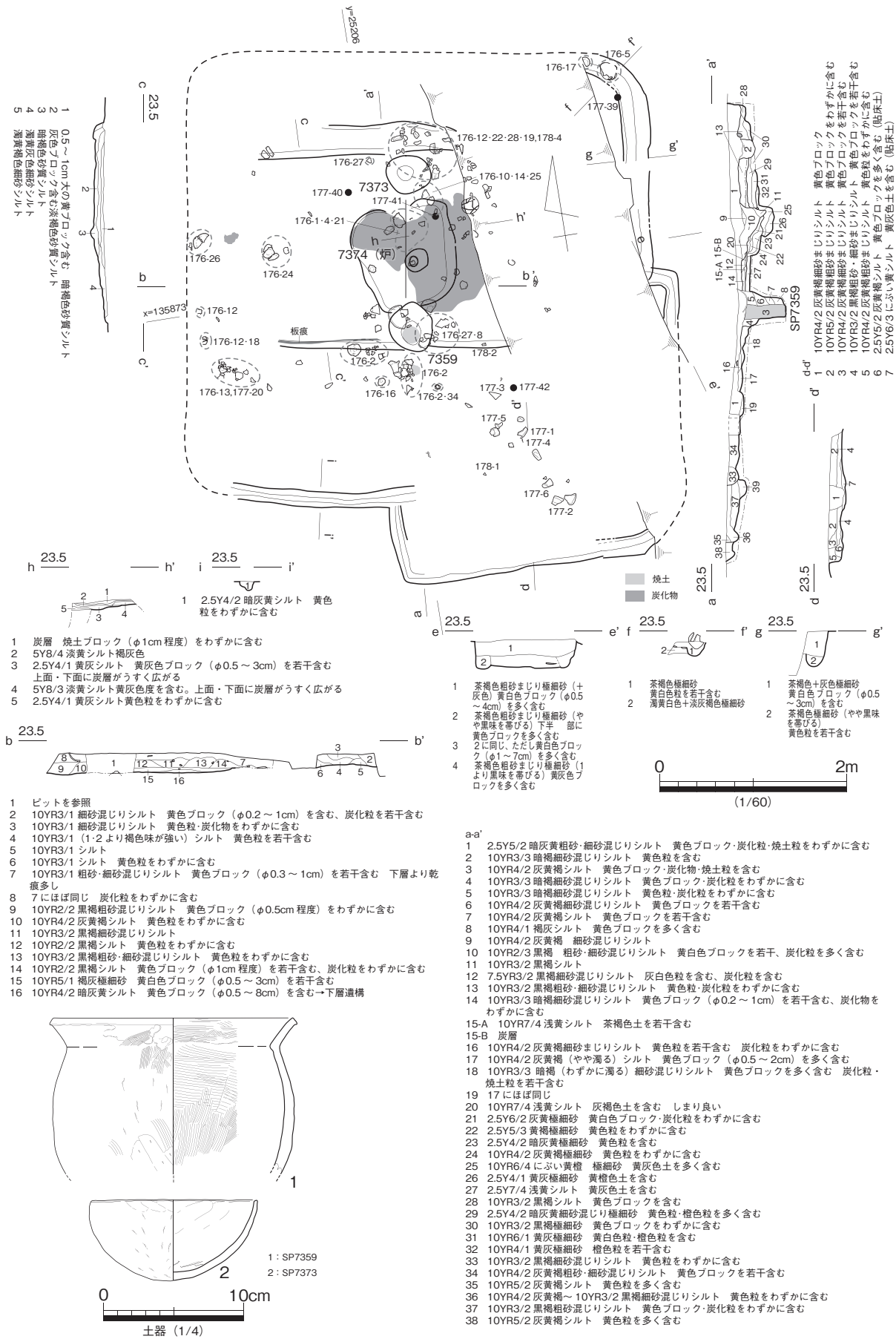


図 175 N区 SH7004 平・断面・出土遺物 (1)

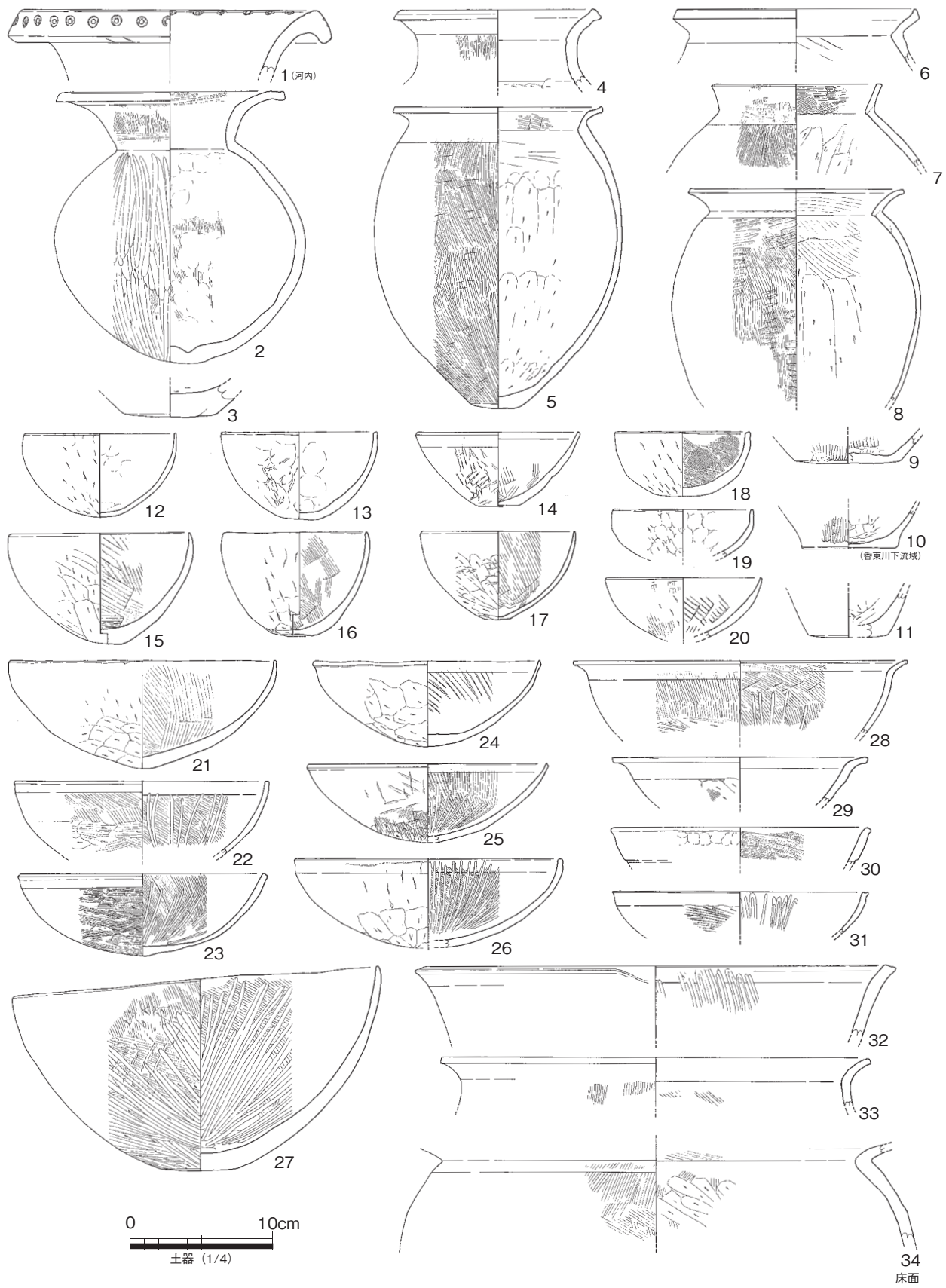


图 176 N区 SH7004 出土遺物 (2)

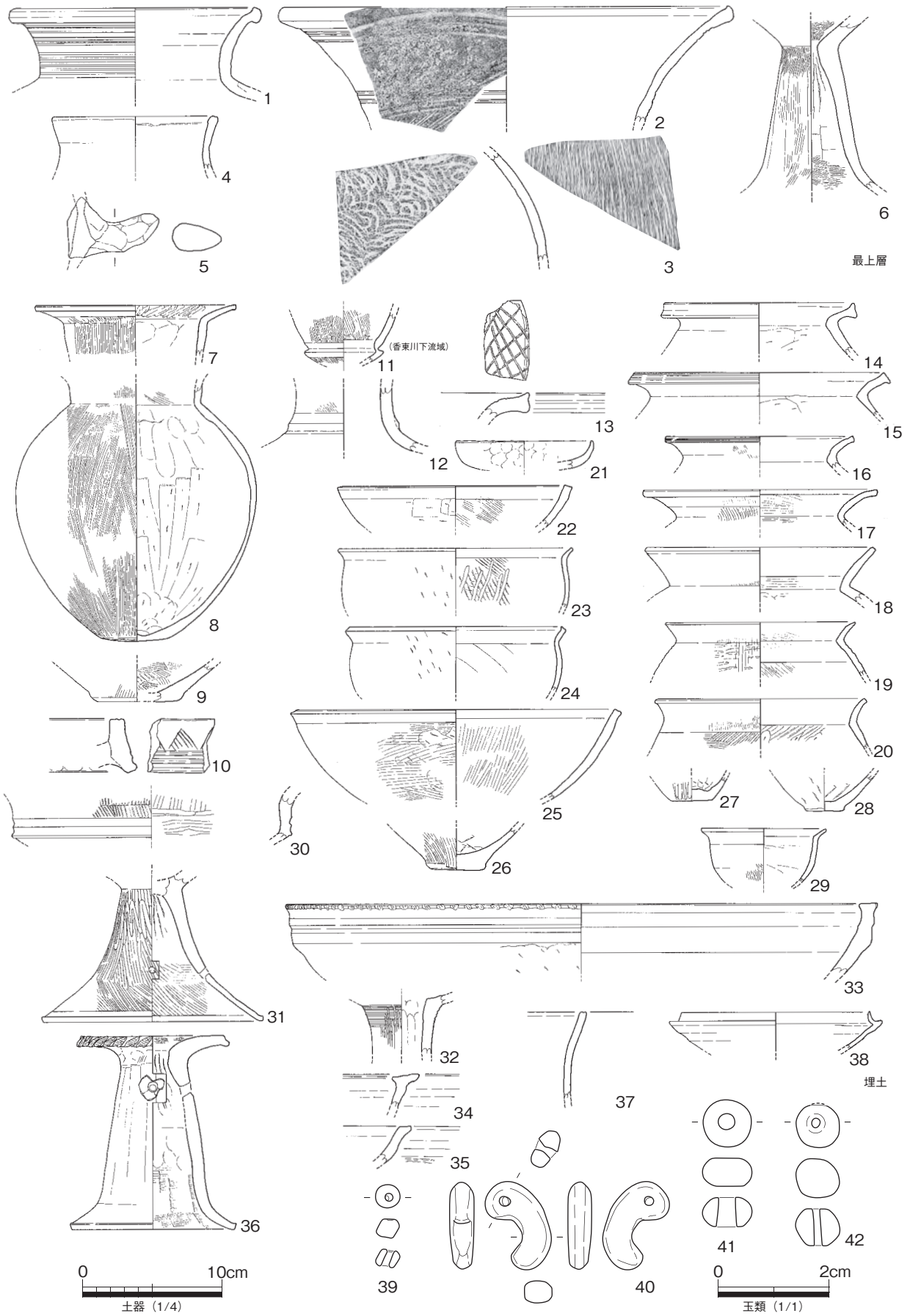


图 177 N 区 SH7004 出土遺物 (3)

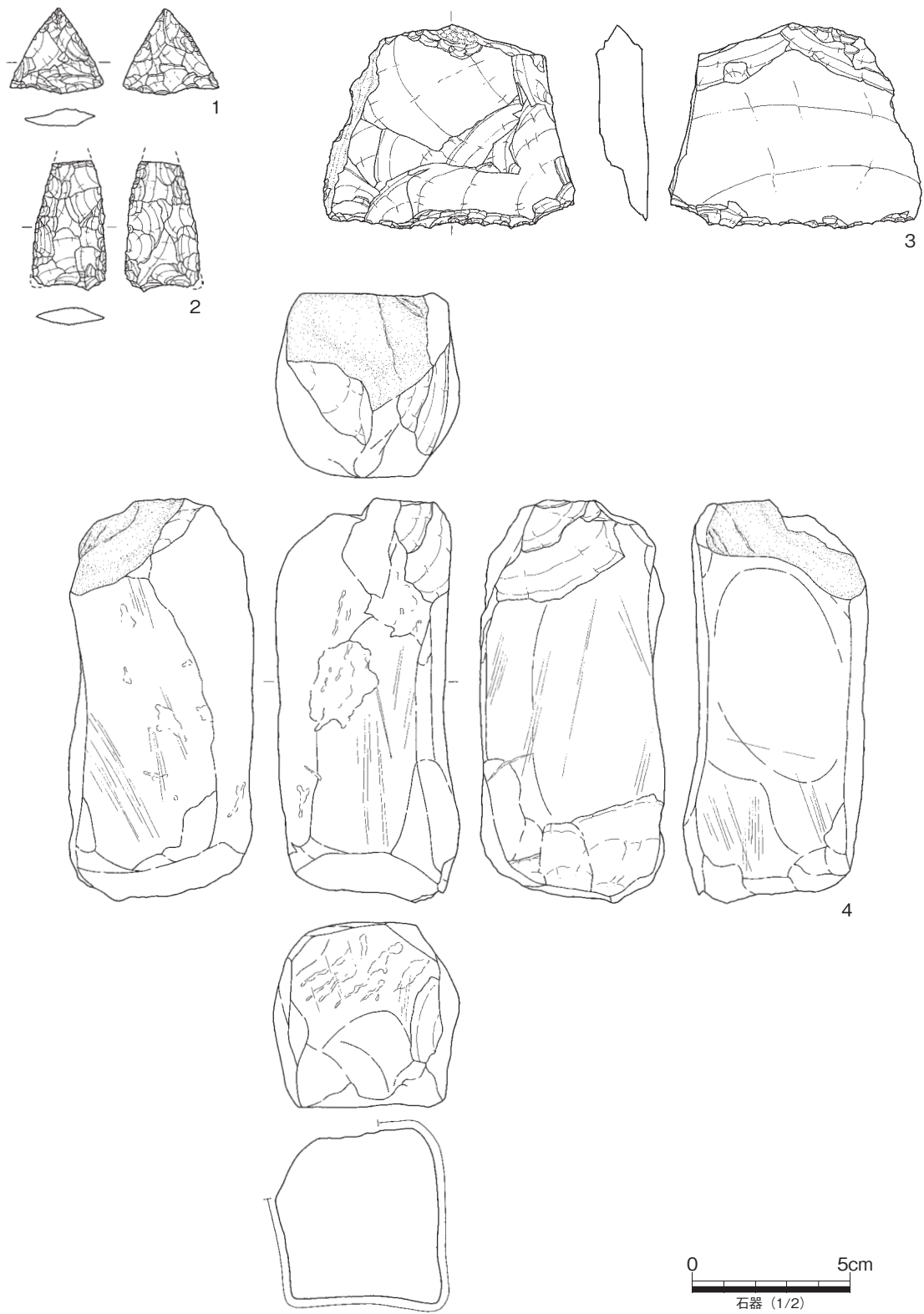


图 178 N区 SH7004 出土遺物 (4)

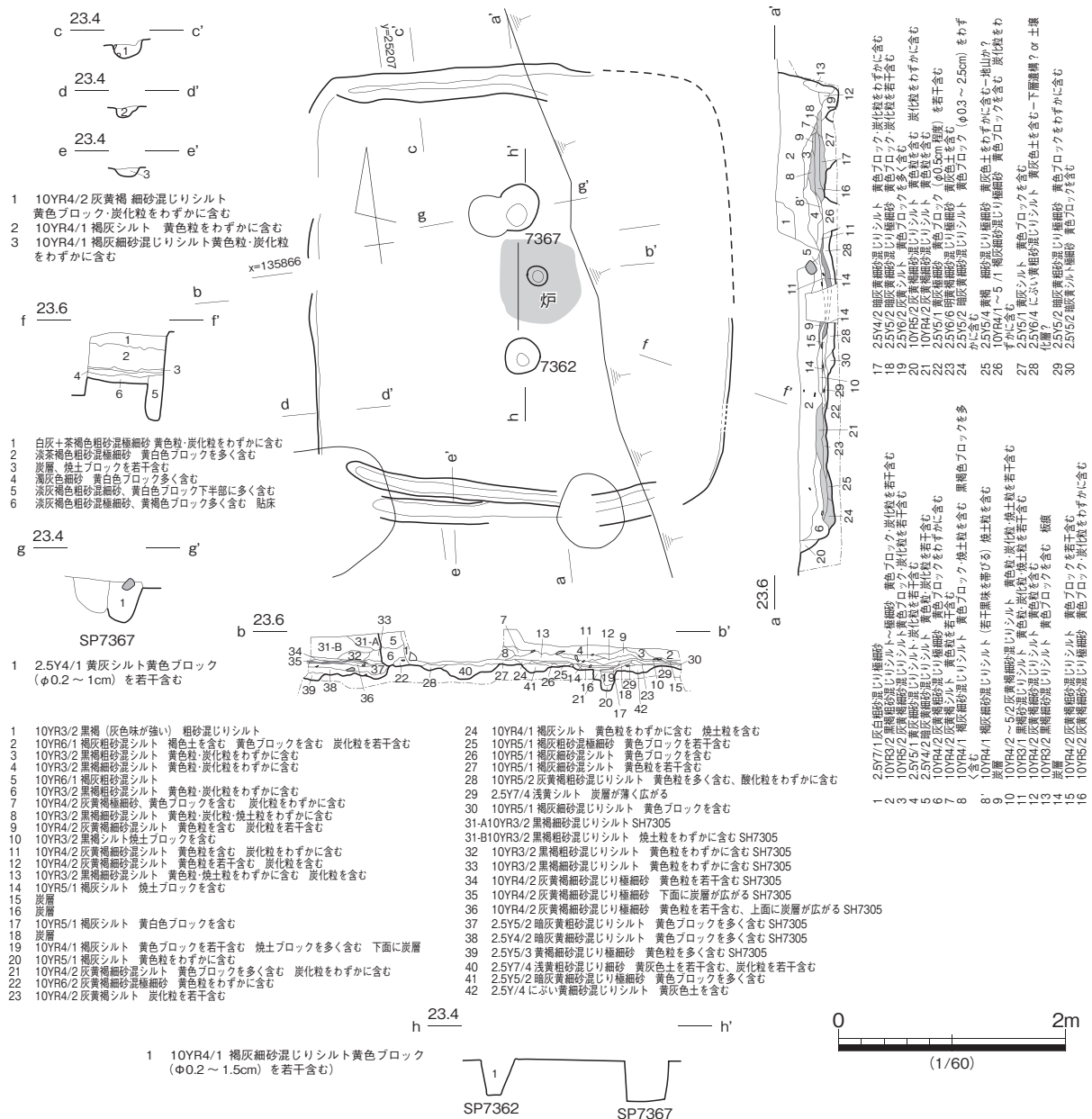


図 179 N 区 SH7005 平・断面

形は 4.1 × 3.6m の長方形を呈し、周辺が分布する小形長方形住居と規模が類似する。住居壁面の残存深度は約 0.5m と深く、平面的に検出できなかったが、断面観察から南北の 2 辺に盛土によるベッド状遺構が推定できる。

主柱穴は中央に図示した 2 基であり、その間の方形の浅い落ち込みに炭化物が集中し炉跡となる。炉中央には、焼土塊を多く含む小穴が見られる。炉跡を構成する小穴と見られ、SH7004 の炉と類似したものとなっている。床面には、北部を中心に土器廃棄がされており、その上層は埋め戻し土となることから、土器群は一括性が高いものと判断される。最大限図化した、胴部片が主体となり、完形に復元される個体は少ない。完形の個体のまま廃棄されず、二次的に選別・移動をうけた土器群が廃棄された可能性も考えられる。

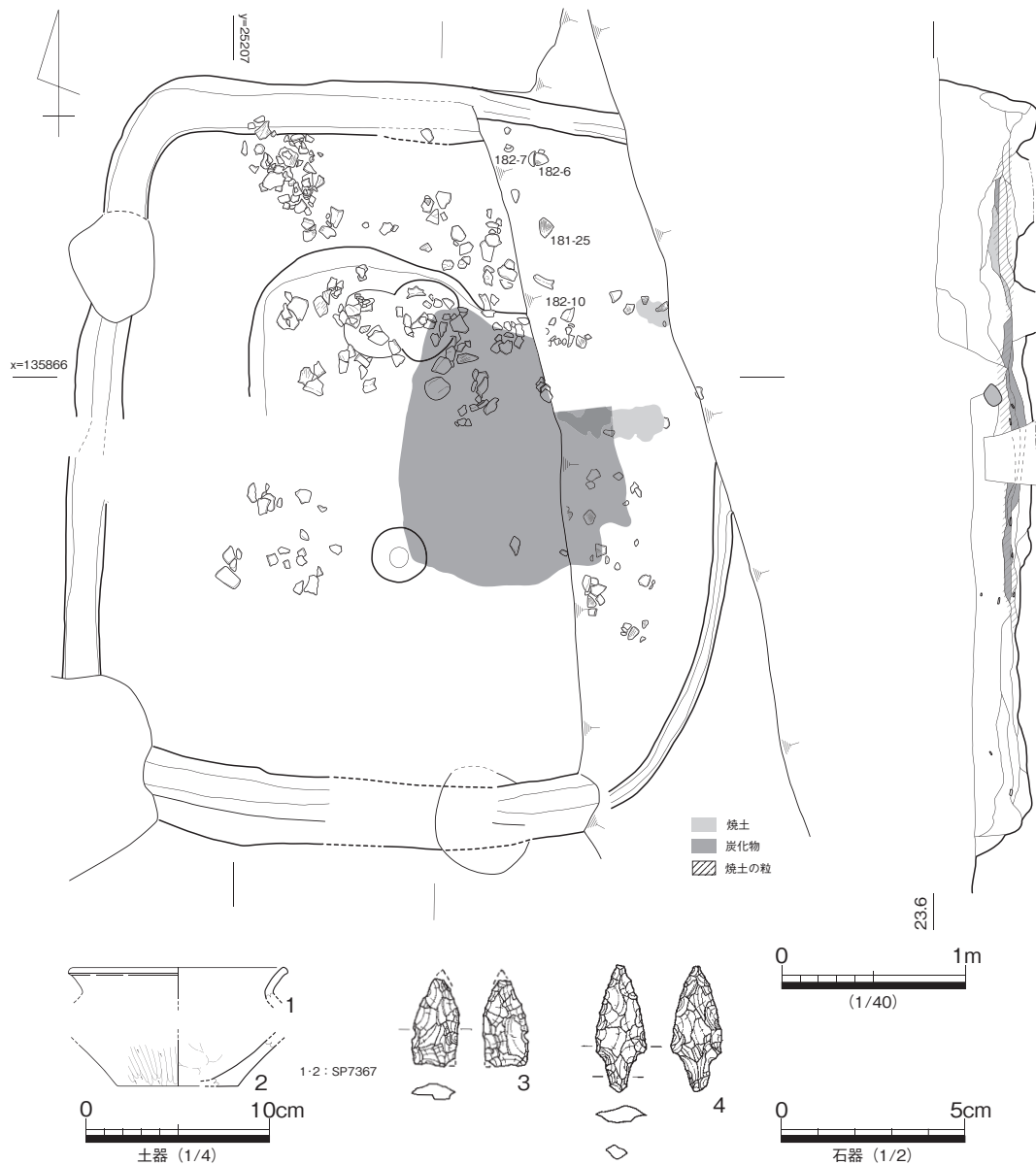


図 180 N区 SH7005 遺物出土状況・出土遺物 (1)

床面出土資料の甕 (図 181-30.31 図 182-1) の形態から、本住居は弥生終末期古段階に帰属するものと推定しておきたい。広口壺 (図 181-25) は、破片間で色調が異なり、黒斑部も途切れる状況が確認されることから焼成破裂土器と考えられる。

N区 SH7305 (図 183・184)

N区中央部で検出した竪穴住居であり、弥生後期後半期のSH7005に切られる。大半の部分を攪乱坑によって滅失するが、ベッド状遺構と支柱穴の一部、張り出し部が残存している。残存する壁溝やベッド状遺構との関係から、5基の支柱穴が想定できる。支柱穴SP5108には、柱材抜き取りに伴って完形土器を主体とした土器群が廃棄されていた。張り出し部は、住居北側に敷設されるもので、現状で1.8×0.8mを測る長方形を呈する。ベッド状遺構は内側に壁材敷設痕と思われる変色土層を伴うが、幅0.5m

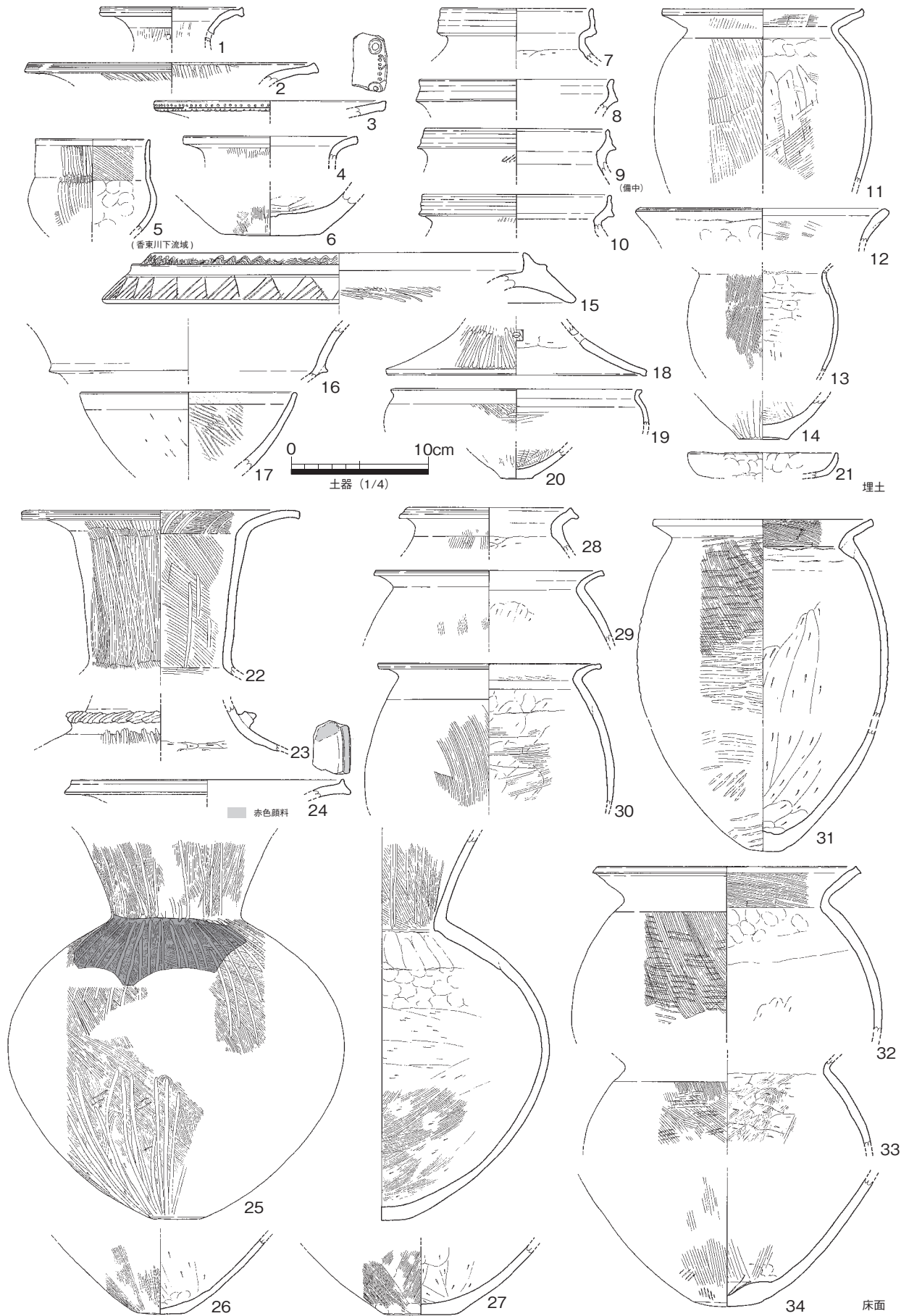


图 181 N区 SH7005 出土遺物 (2)

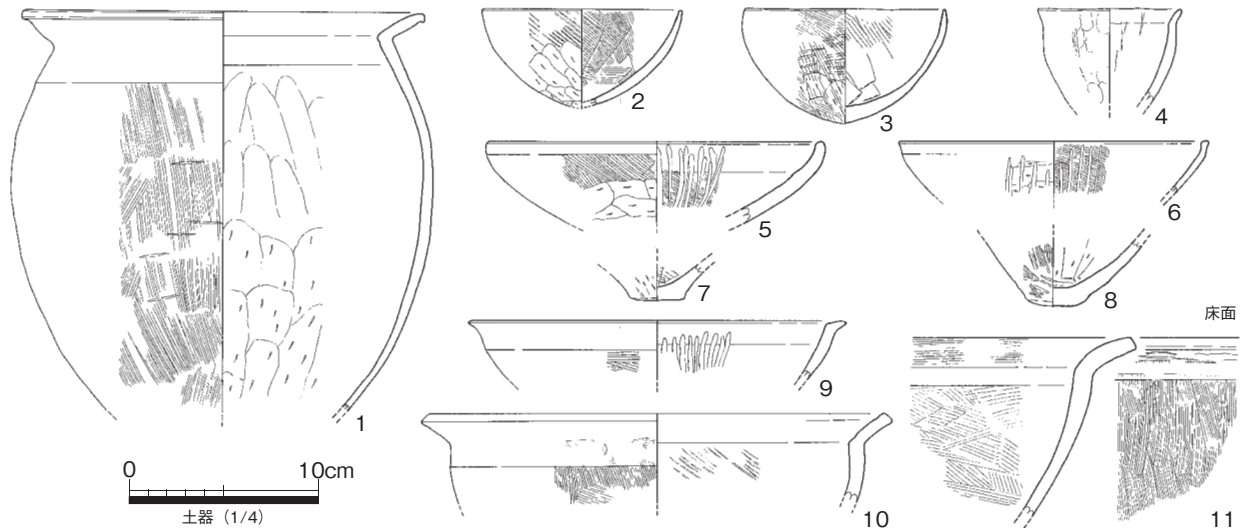


図 182 N区 SH7005 出土遺物 (3)

とやや狭いものである。北側に残存する住居床面からは、備中地域からの搬入品を含む土器群が少数廃棄された状態で確認されている。

高杯脚 (図 184-19) は、端部を下方に拡張する形態をもち、備後地域からの搬入品の可能性が高い。広口壺 (図 184-26) はベンガラで加飾する備中西部からの搬入品である。主柱穴 SP5108 出土の甕 (図 184-38) は、口縁部形態から備後地域からの搬入とみられる。高杯 (図 184-19)、甕 (図 184-38) は備後地域の V-2 様式に比定される資料であるが、備中西部からの広口壺 (図 184-26) との共時性は躊躇せざるをえない。本住居の時期比定については、主柱穴 SP5108 出土の甕 (図 184-39) の形態から、弥生後期後半古段階の時期を与えておく。

N 区 SH7306 (図 185・186)

N 区北部で検出した竪穴住居である。弥生終末期の SH7004 と攪乱坑に切られ、住居南部及び東部の壁面を滅失する。北西隅の主柱穴を失うが、図示した 4 基の主柱穴をもつと推定される。北東部の壁面で壁溝は確認されず、残存する範囲では貼床土のみが確認された。炉などの諸施設の情報は見られない。従って、出土遺物はほぼ貼床土及び床面からの出土遺物とみてよいだろう。

広口壺 (図 185-7) や甕 (図 185-15) の形態から、本住居は弥生終末期古段階に帰属すると考えておきたい。図 186-3 は結晶片岩製の柱状片刃石斧の身から基部片であり、明瞭な抉りがみられる。形態からみて、付近に存在する SD5002 等弥生前期埋没の遺構からの混入品と考えられる。

N 区 SH7310 (図 187)

N 区南端部と U 区に跨って検出した竪穴住居である。大部分を弥生後期前半期の U 区 SH5011 によって削平されている。現地調査で南東部の壁溝のみ確認し、報告書作成段階で主柱穴を確定した。主柱穴は図示した 5 基を想定しており、北東部と北部の 2 基は後世遺構及び攪乱坑で滅失する。炉跡が想定される中央部には帯状の攪乱坑があり、明確にはできない。現存する南東部の壁溝上には SX7301 とした溝状の掘り込みが存在するが、切り合いと見るには主軸が壁溝と合致することから、付設土坑や壁溝の一部として含めて捉えた。また、南東部壁溝の内側には、SX7302 とした落ち込みが存在する。必ずし

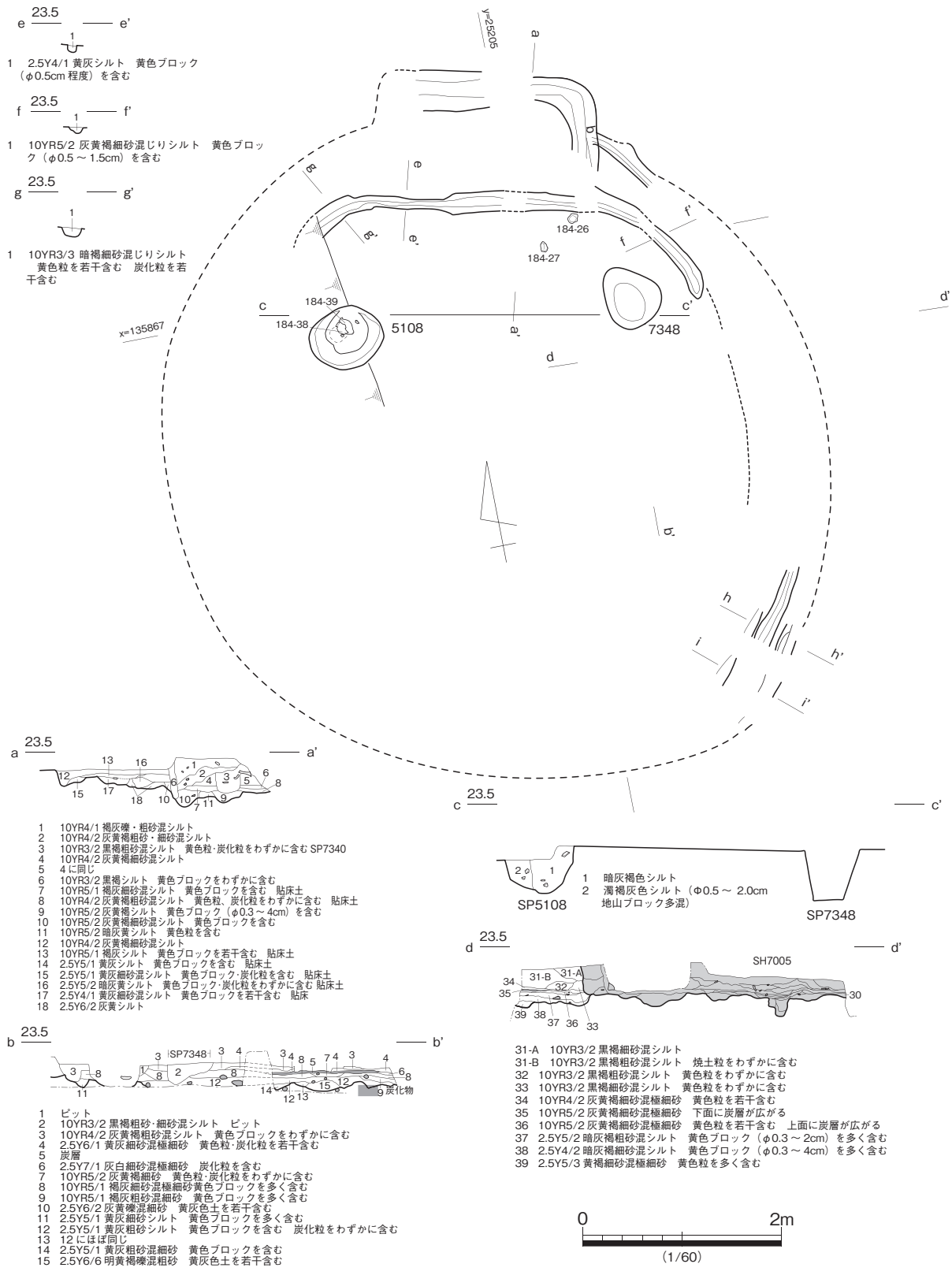


図 183 N区 SH7305 平・断面

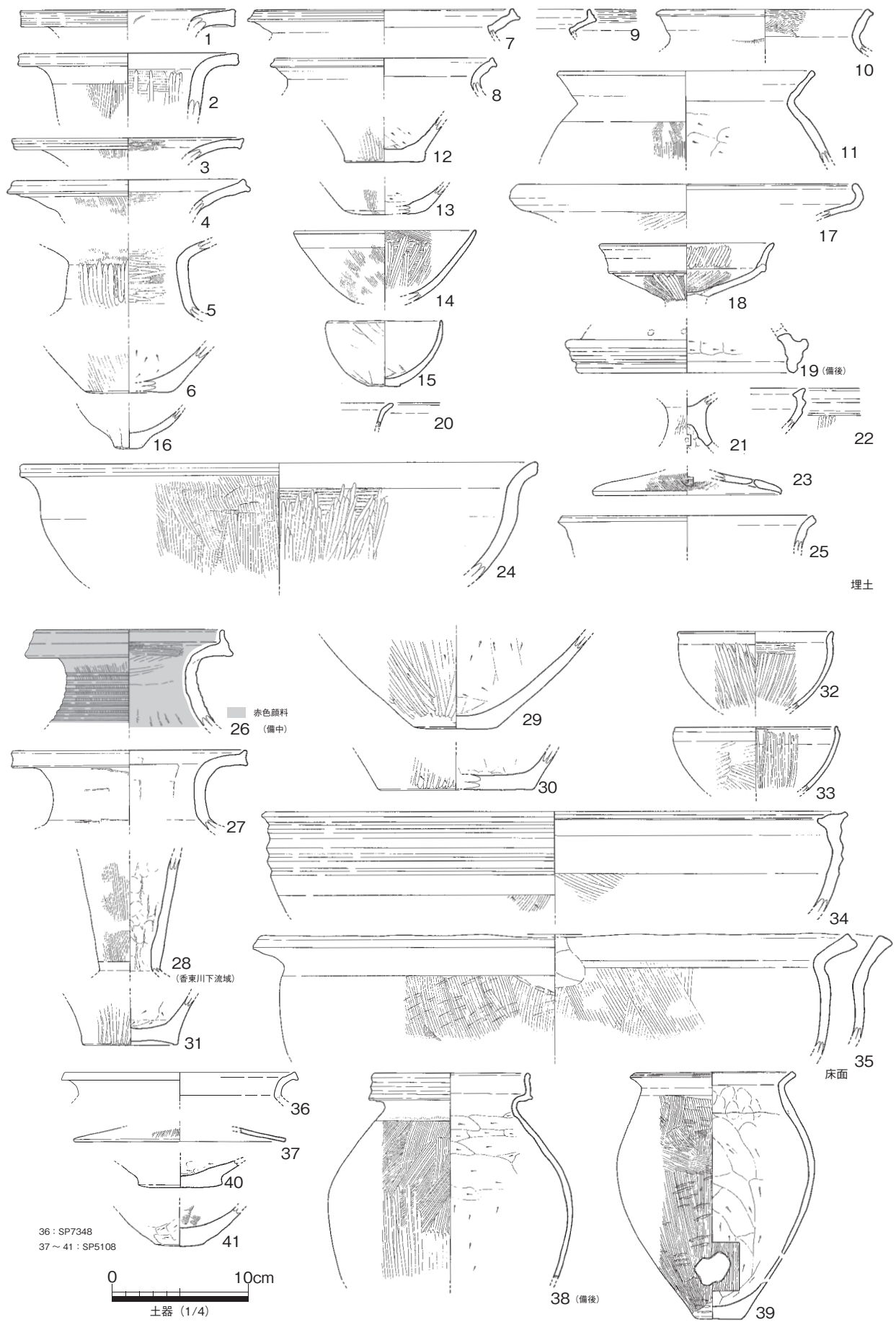


図 184 N区 SH7305 出土遺物 (1)

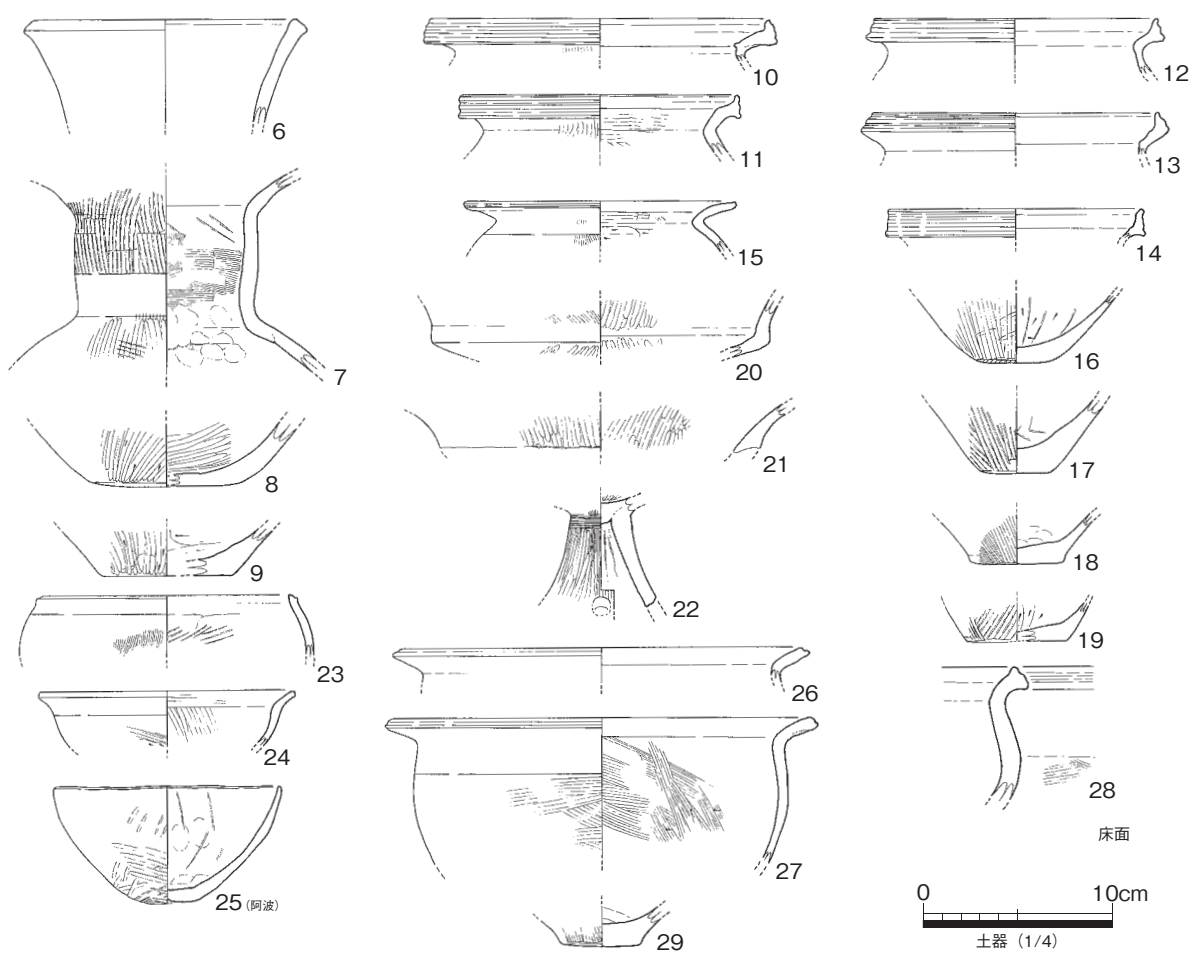
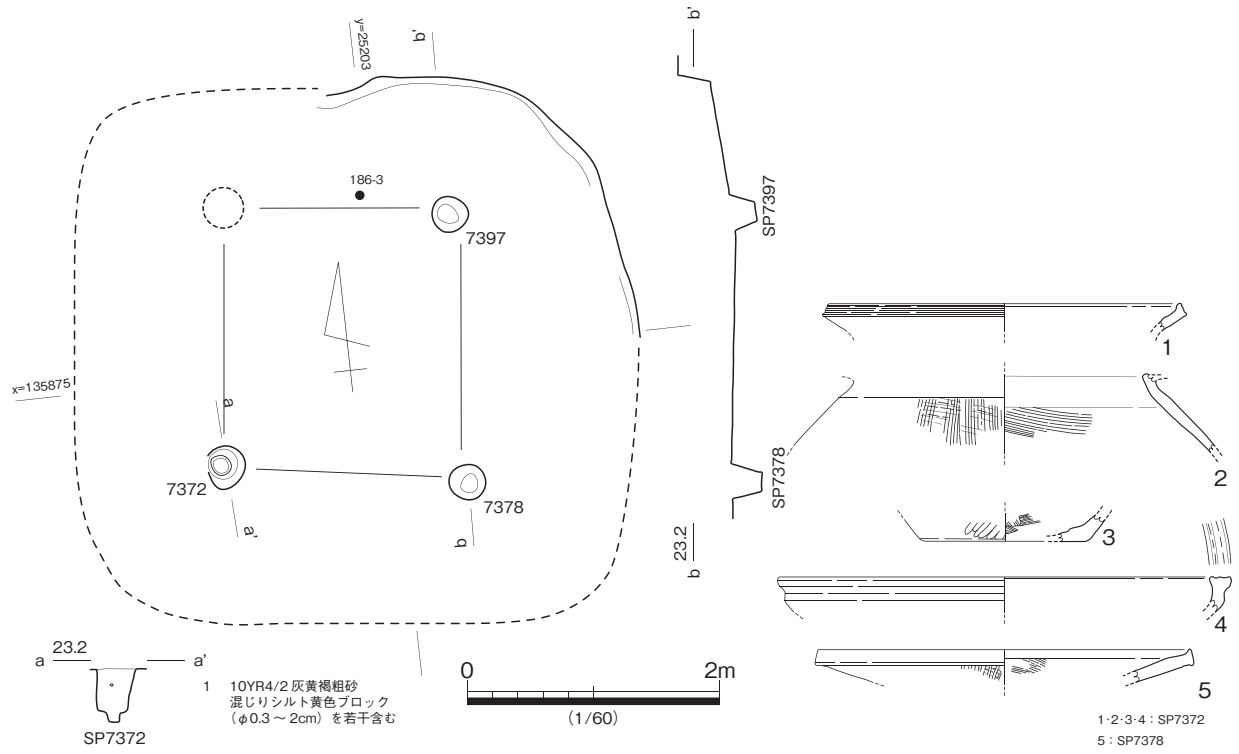


図 185 N区 SH7306 平・断面・出土遺物 (1)

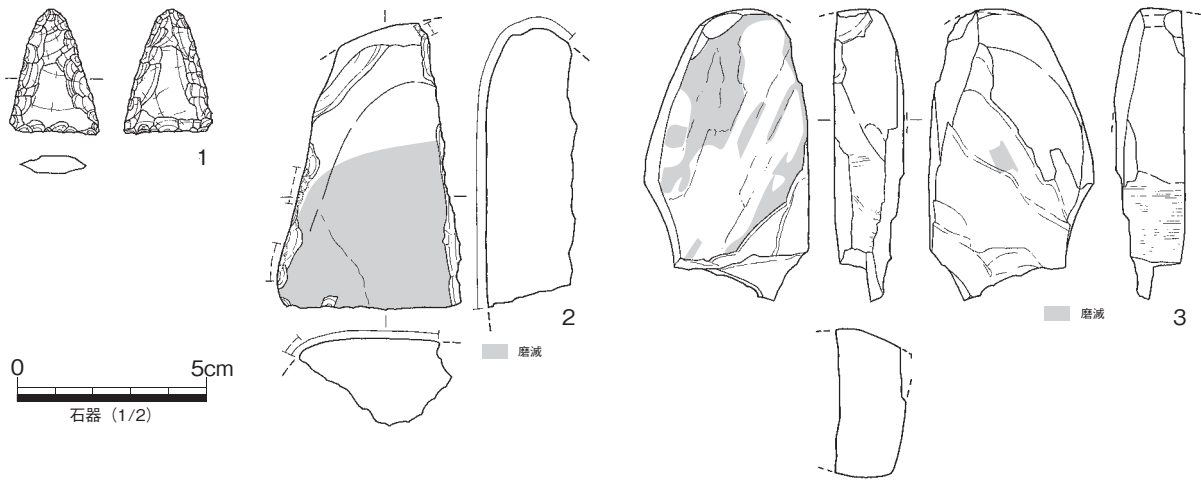


図 186 N区 SH7306 出土遺物 (2)

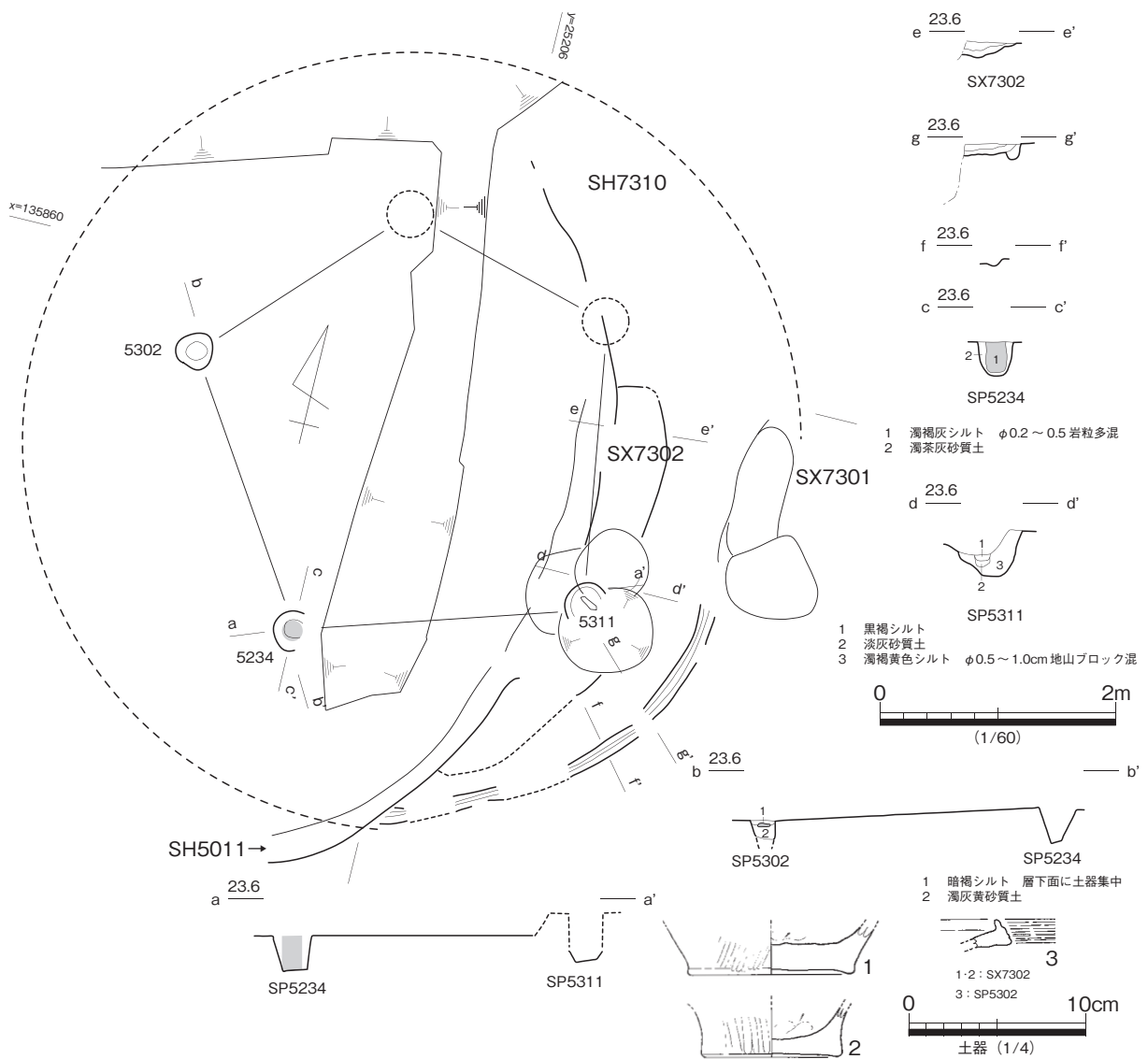


図 187 N区 SH7310 平・断面・出土遺物

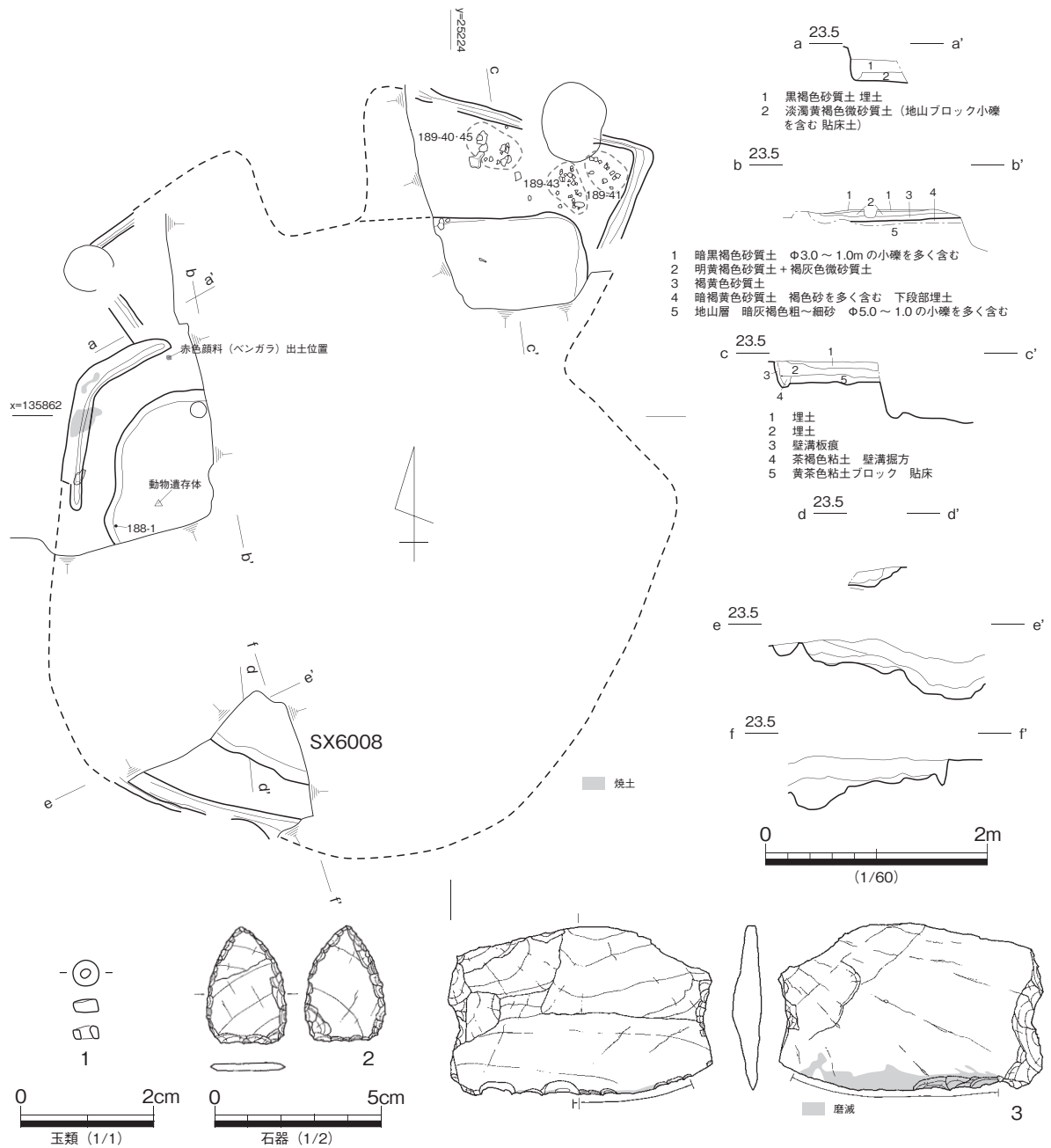


図 188 O区 SH8005 平・断面・出土遺物 (1)

も壁溝に沿ったものではないが、ベッド状遺構の落ち込みとして、本住居に伴うものとして取り扱いたい。弥生後期前半中段階のSH5011に切られることや壁溝から出土した甕底部 (図 187-1) の形態から、本住居は弥生後期前半古段階に属するものと捉える。

O区 SH8005 (図 188・189)

O区南部から攪乱坑を挟んでM区で検出した竪穴住居である。後述する北張り出し部が弥生後期前半期のSH8206を切り込む。住居南辺から西辺の連絡状況から六角形の多角形住居と見られる。北西及び北側に張り出し部が付設される。両者ともに現地調査の段階では個別の遺構名を与え調査を行ったが、

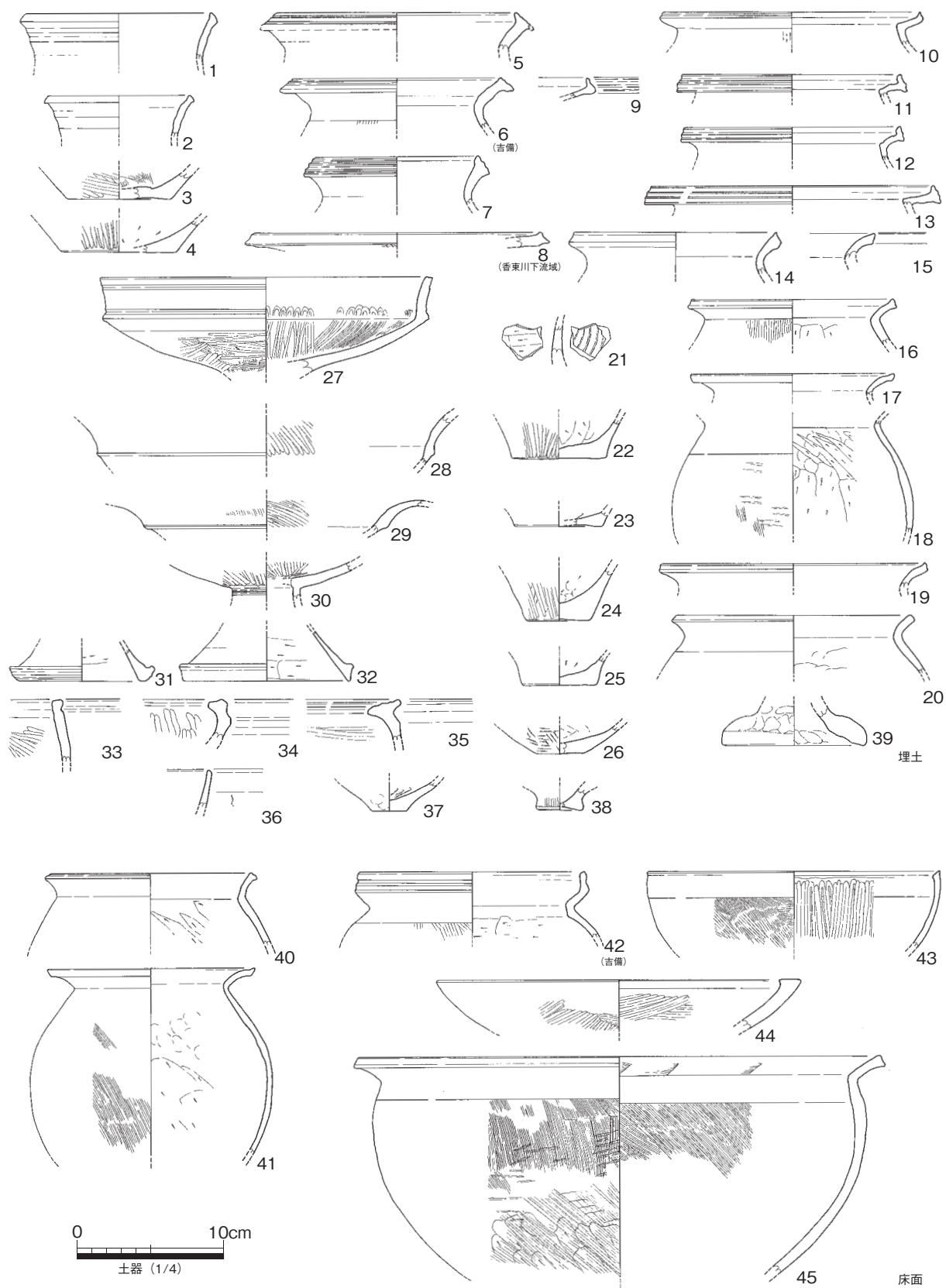


図 189 O 区 SH8005 出土遺物 (2)

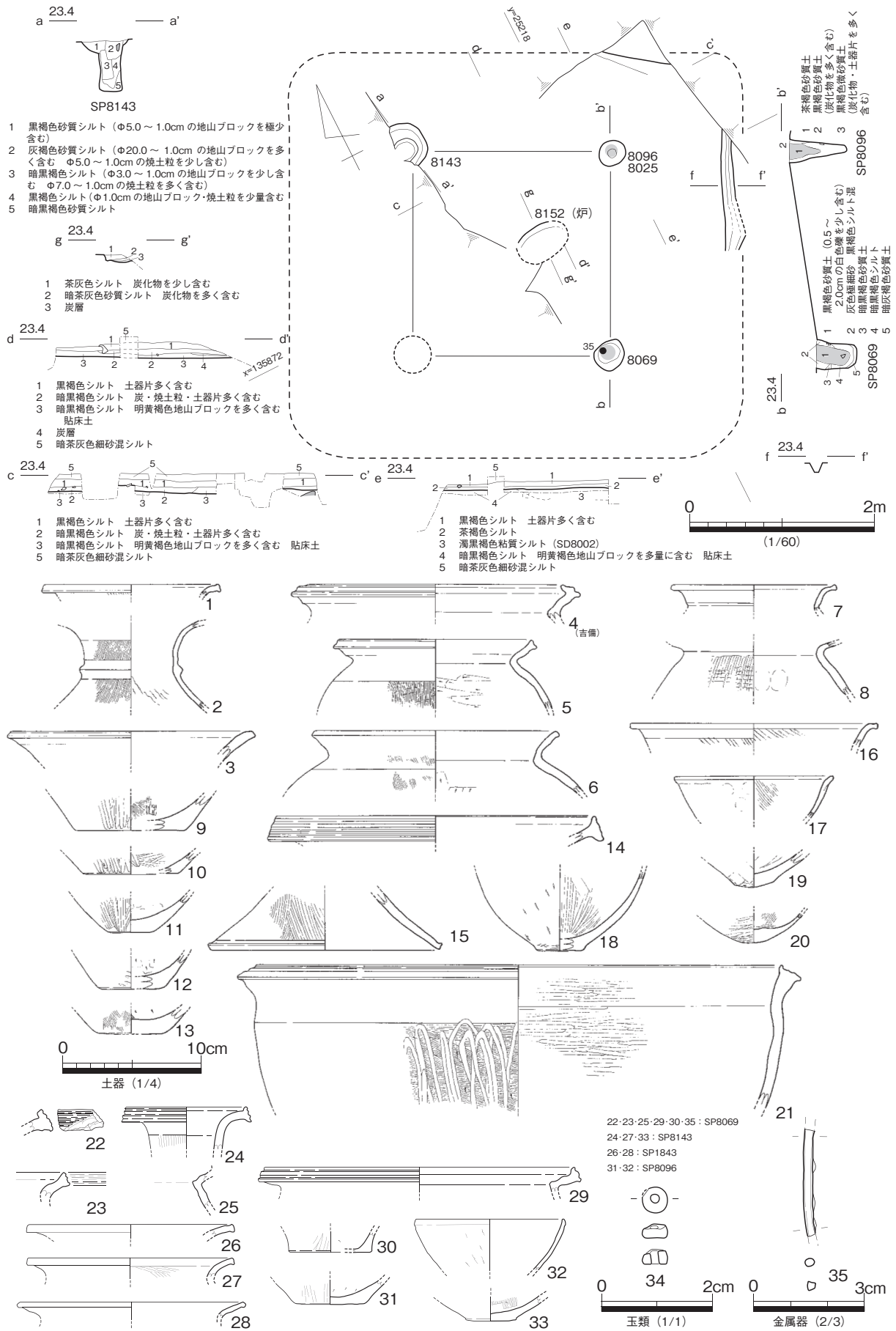


図 190 O 区 SH8007 平・断面・出土遺物

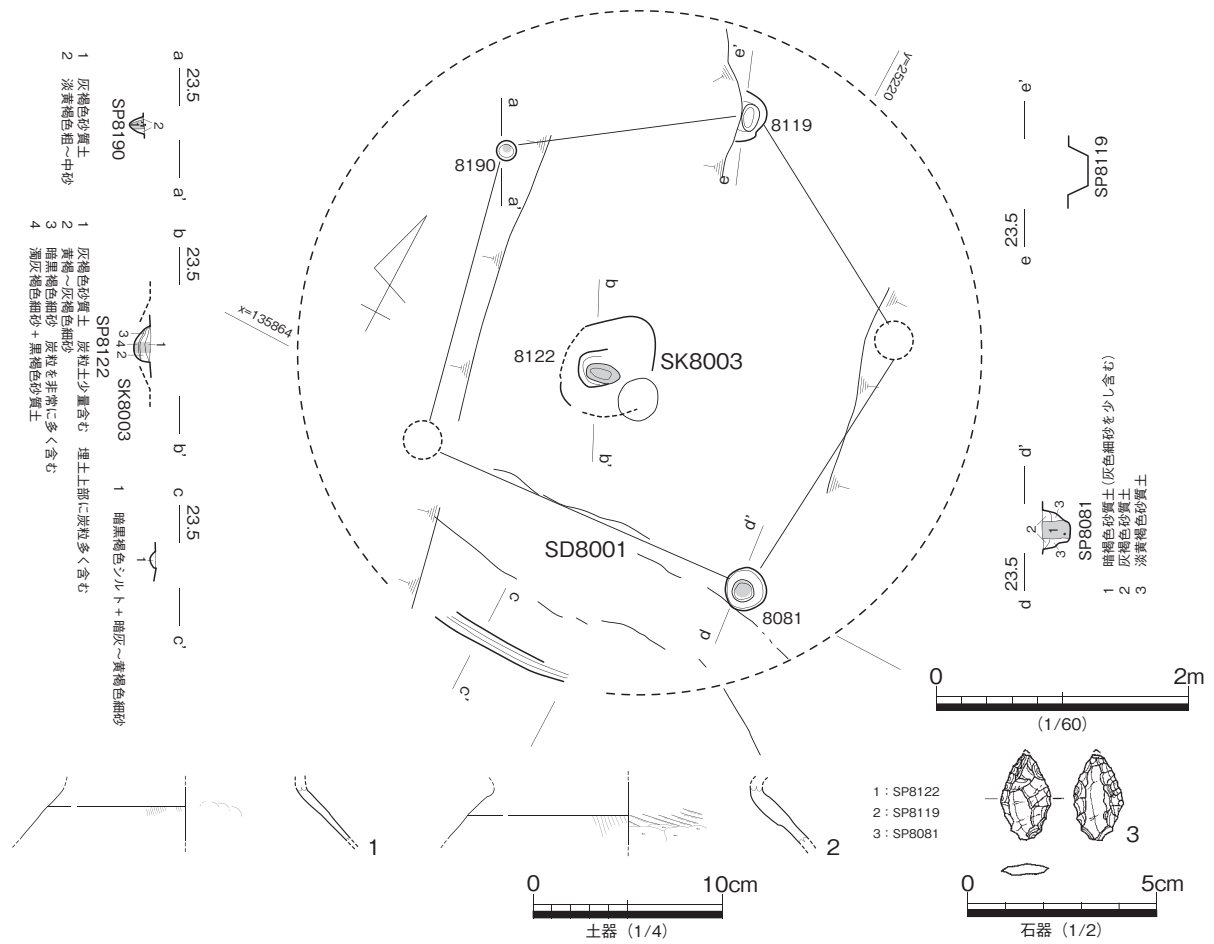


図 191 O区 SH8009 平・断面・出土遺物

位置関係や撥形を志向した平面形から、張り出し部として捉える。また、支柱穴は確認できていない。必ずしも壁溝に沿うものではないが、幅が狭いベッド状遺構を敷設しており、住居北西側の張り出し部と境付近の床面には赤色顔料が付着した粘土塊の集積が確認できる。分析の結果、赤色顔料はベンガラと判明している。平面形態や張り出し部の付設状況などは明らかに異系統の住居と考えられるが、出土遺物に顕著な搬入土器は認められない。

床面出土遺物は、吉備系甕（図 189-42）が時期的に下る可能性があるなど、一定程度の時間幅が認められる。そのような中でも、北側張り出部からまとまって出土した一群（図 189-40.41.43.45）は形態的に後期後半古段階に限定されることから、本住居の廃絶年代を示す遺物として捉えたい。図 188-2 は、安山岩製の打製石庖丁である。図 188-1 は滑石製白玉で上位からの混入品である。

O区 SH8007（図 190）

O区北西部で検出した竪穴住居である。古墳後期のSH8001に切られ、弥生中期後半のSH8008、SD8002を切り込む。壁面の立ち上がりは北辺と東辺の一部で約20cm残存しているが、大半を後世遺構の掘り込みや攪乱坑で失う。図示した支柱穴との位置関係から、一辺が約5mの方形住居と推定できる。床面中央からやや東寄りにSP8152とした炉がある。SP8152の底面は炭化物層の薄層が見られることから灰穴炉となる可能性が高い。

出土遺物にはかなりの時間幅がみられる。その中でも床面出土の甕（図 190-5.6）や支柱穴 SP8096 出土の鉢（図 190-32）は、形態から弥生終末期に下るものである。下限を示すことらの遺物の年代観から、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと推定しておきたい。

O 区 SH8009（図 191）

O 区南西部で検出した竪穴住居である。現地調査で古墳後期の SH8002 の下層において壁溝状の溝 SD8004 と SH8001 下層で炉 SP8122 を確認しており、報告書作成段階で支柱穴を推定し、竪穴住居として報告する。炉 SP8122 と壁溝 SD8004 との距離から推定して、5～6 基の支柱穴をもつ直径 6m 程の円形住居と捉える。炉 SP8122 は炭化物の互層を埋没土にもつ小ピットである。本住居の帰属時期から推定して、もう 1 基の方形炉が付属していた可能性が高い。

支柱穴出土の甕（図 191-1.2）の形態から、本住居は弥生後期前半古段階に帰属するものとする。

O 区 SH8203（図 192・193）

O 区北東部で検出した竪穴住居である。古墳中期の SH8207 に切られ、明確な接点は確認していないが、本住居東部に存在する弥生後期後半期の P 区 SH9302 に切られると考えられる。住居南部及び東部を攪乱によって滅失するが、直径約 6m の円形住居と推定することができ、北西部に張り出し部を付設する。支柱穴は図示する 5 基であり、中央部に 2 基の炉跡を付設する。中央部の炉 1 は、古墳後期の柱穴 SP8230 によって破壊され一部の掘り方を留めるに過ぎないが、炉 2 とした SX8206 は隅丸方形を呈する浅いもので、埋没土に炭化物を少量含む。また、炉 2(SX8206) の主軸方向は張り出し部とほぼ併行する形で設定されている。炉周辺の床面には、部材状を呈する炭化物の集中が確認されたが焼失家屋を想定できる量ではない。平面形や支柱穴配置、炉跡の組み合わせ等は、弥生後期前半期の特徴を良好に示している。時期的に見て、張り出し部の付設は本遺跡を含め周辺遺跡における初期の事例となるだろう。

出土遺物は弥生中期後半期から後期前半中段階までの資料を含むが、床面から出土した甕（図 193-16.17.37）の形態からみて、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものとする。図 192-12 は流紋岩製砥石。カラス小玉（図 192-10）は、薄いブルーを呈する素材をもち、北東部床面から出土した。

O 区 SH8206（図 194）

O 区南東部で検出した竪穴住居である。弥生後期後半の SH8005 に切られるが、攪乱坑によって住居の大半を滅失し、現状は北東部の壁面及び床面を残すのみであり、炉などの諸施設を推定する材料は見られない。壁溝からの推定では、直径約 6m の円形住居に復元され、図示した 2 基の柱穴に攪乱部分にもう 4 基推定し、6 基の支柱穴を想定する。支柱穴である SP8265.8264 を境にしてベッド状遺構が確認され、ベッド状遺構上面から壁際には、土器片がややまとまって出土している。

出土土器の内、北東部床面から出土した甕（図 194-17）鉢（図 194-18）の形態から、本住居は弥生後期前半新段階に帰属すると考える。

P 区 SH9003（図 195）

P 区南東部で検出した竪穴住居であり、中世の SD9002、古墳前期の SH9005 に切られ、弥生後期後

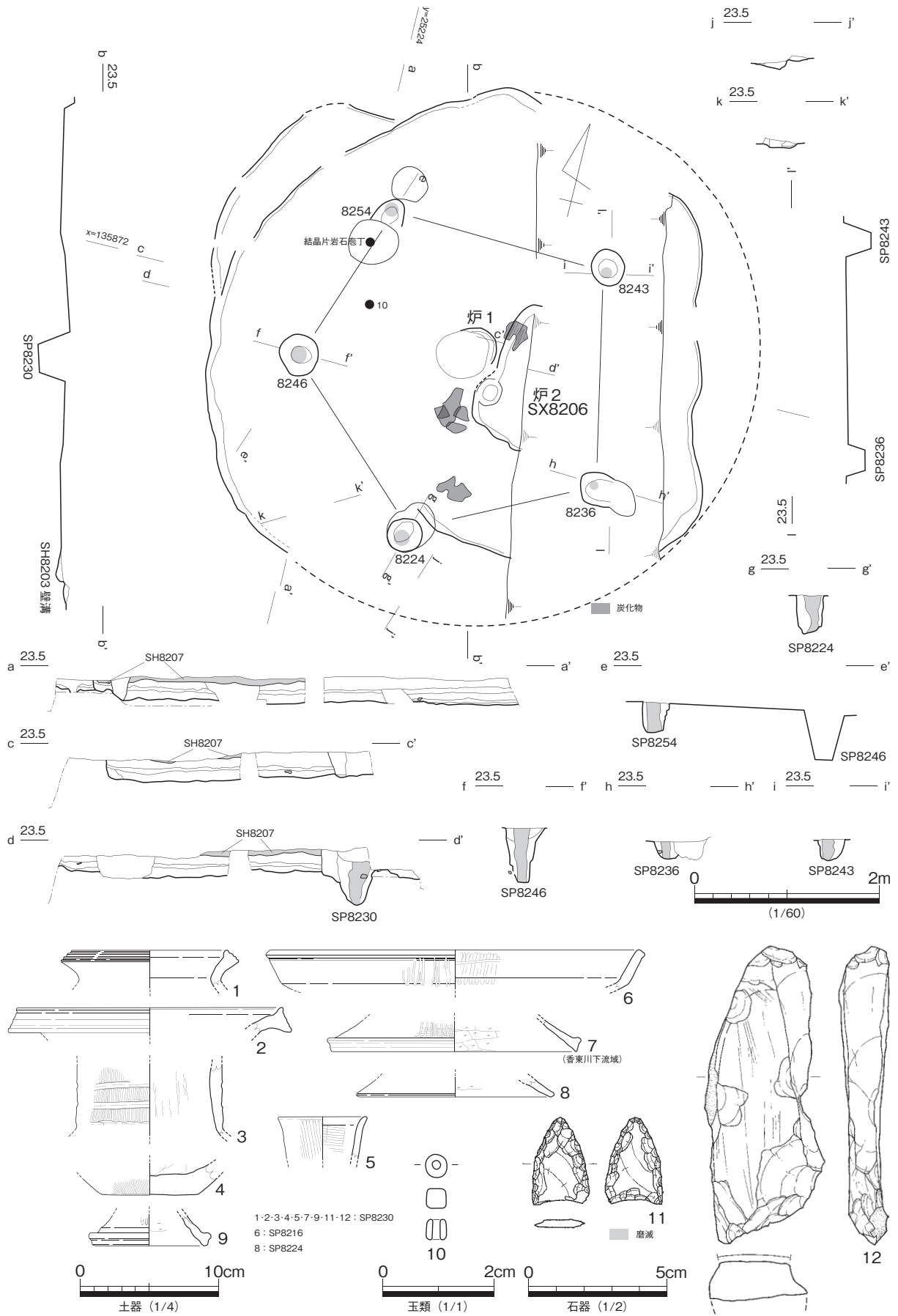


図 192 O 区 SH8203 平・断面・出土遺物 (1)

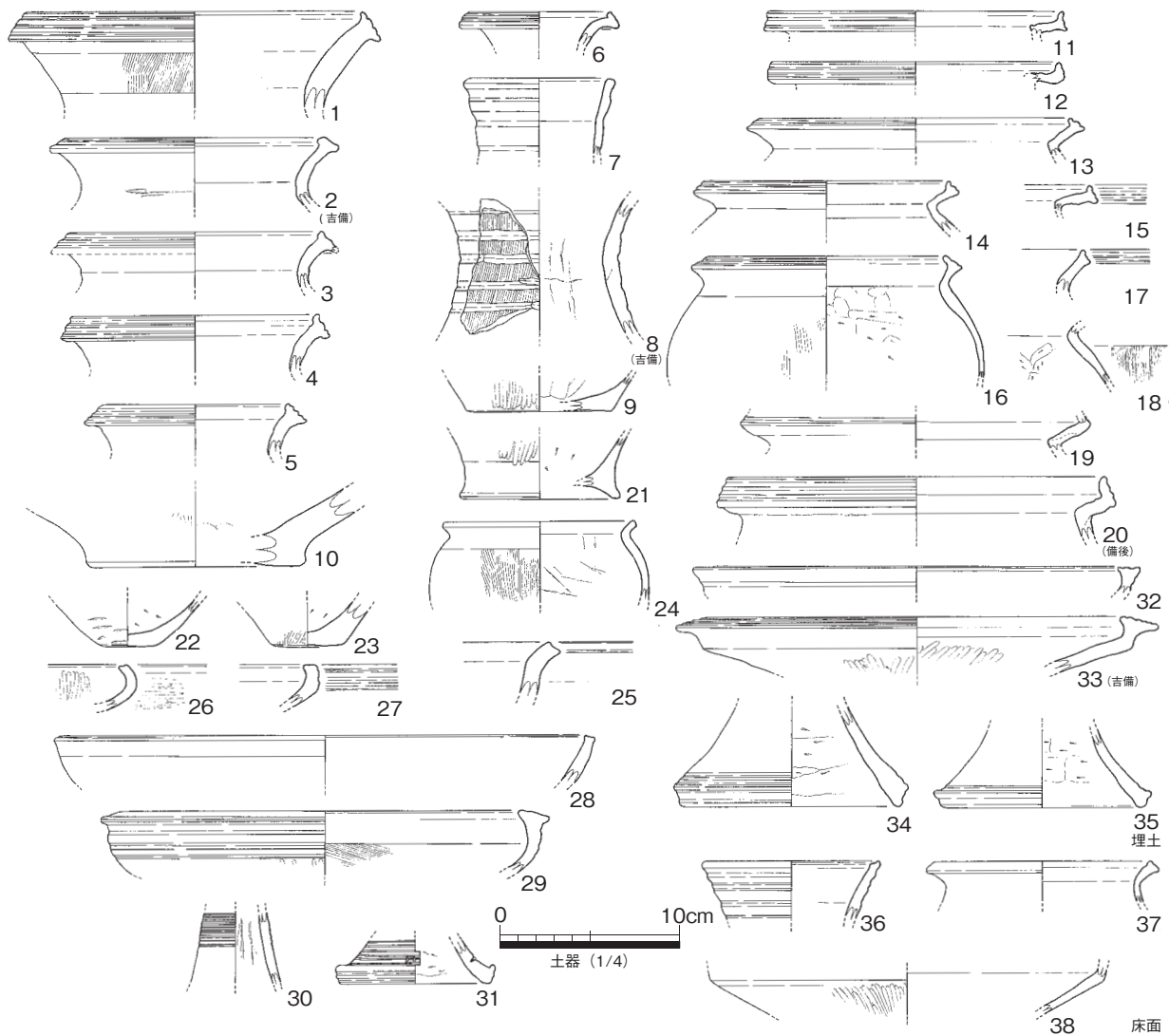


図 193 O 区 SH8203 出土遺物 (2)

半期の SH9004 を切る。住居南西部の壁面と床面を検出したに過ぎず、大半は SH9005 によって滅失している。支柱穴は 4 基と推定しているが、弥生時代の住居と捉えた場合、南北の柱間が長すぎるなど、検討の余地を残している。住居床面には、土器群とともに点々と焼土・炭化物が残されているが、焼失家屋を想定できるような状態ではない。

出土遺物の内、比較的全体形状が判明する鉢 (図 195-13.14) の形態から、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したものと推定しておく。蛇紋岩製勾玉 (図 195-23) は、住居北部の貼床土から出土した。

P 区 SH9004 (図 196)

P 区南東部で検出した竪穴住居であり、中世の SD9002、古墳前期の SH9005 に切られ、東部は攪乱坑で滅失する。基本層序のⅢ層上面で平面プランを確認できず、かなり掘り下げた段階で壁溝と貼床土を辛うじて検出した。支柱穴は現存 2 基で東側の攪乱坑の部分に 2 基推定することにより、4 基に復元している。一辺が約 4.5m の平面形をもつものと見られるが、支柱穴の深度及び壁面との位置関係など、資料不足は否めない。住居南辺の壁溝上面では、土器片がややまとまって出土した。

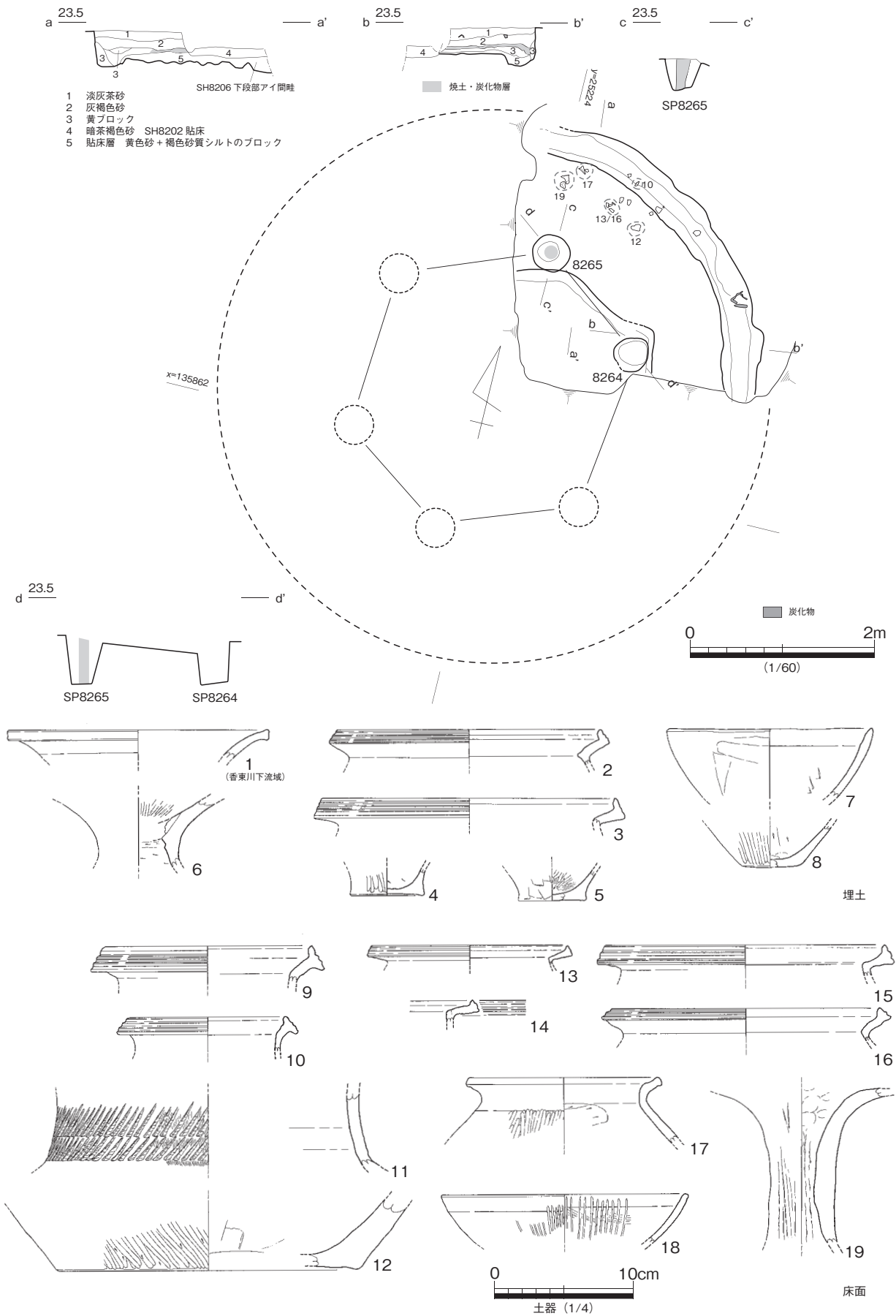


図 194 O 区 SH8206 平・断面・出土遺物

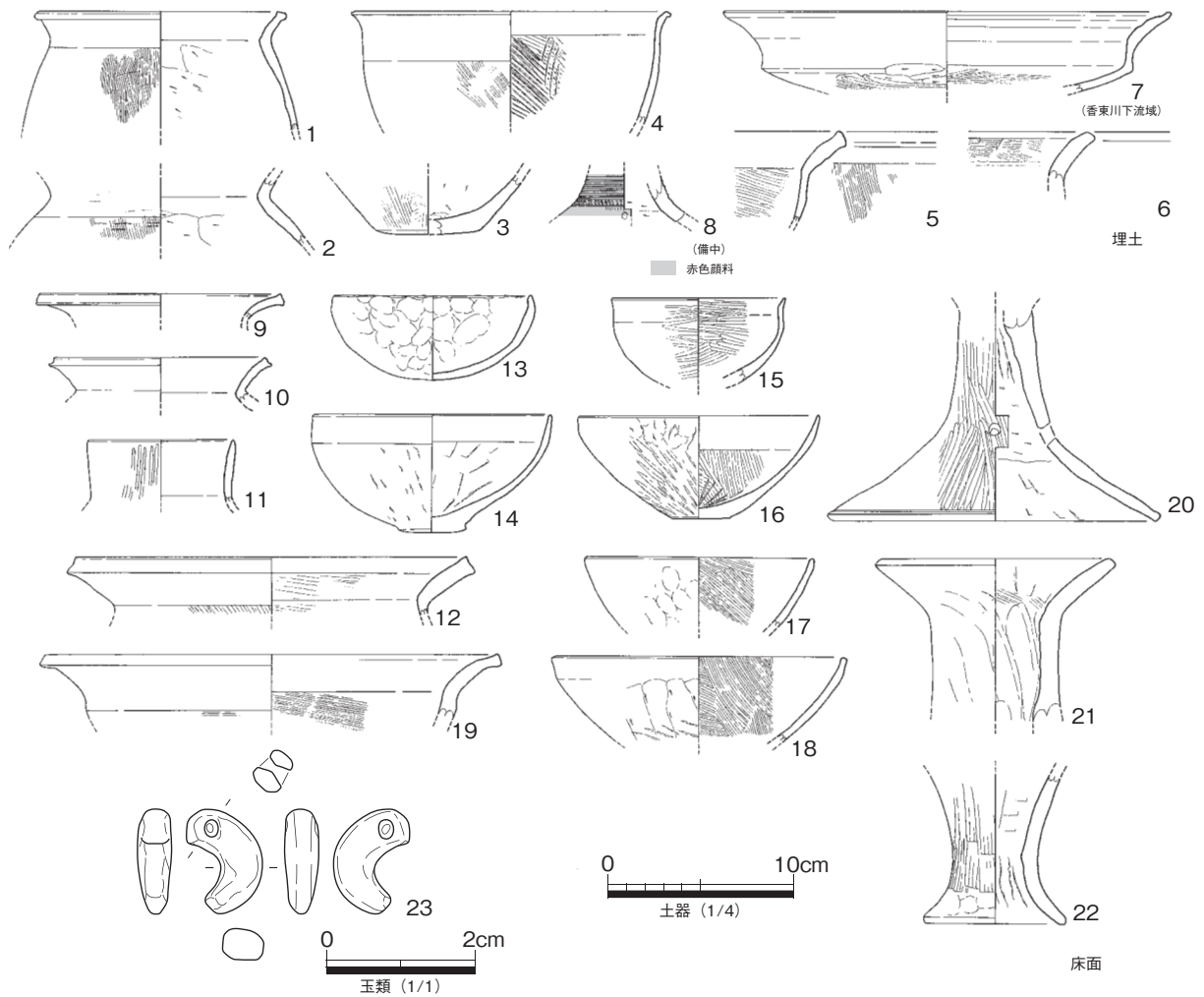
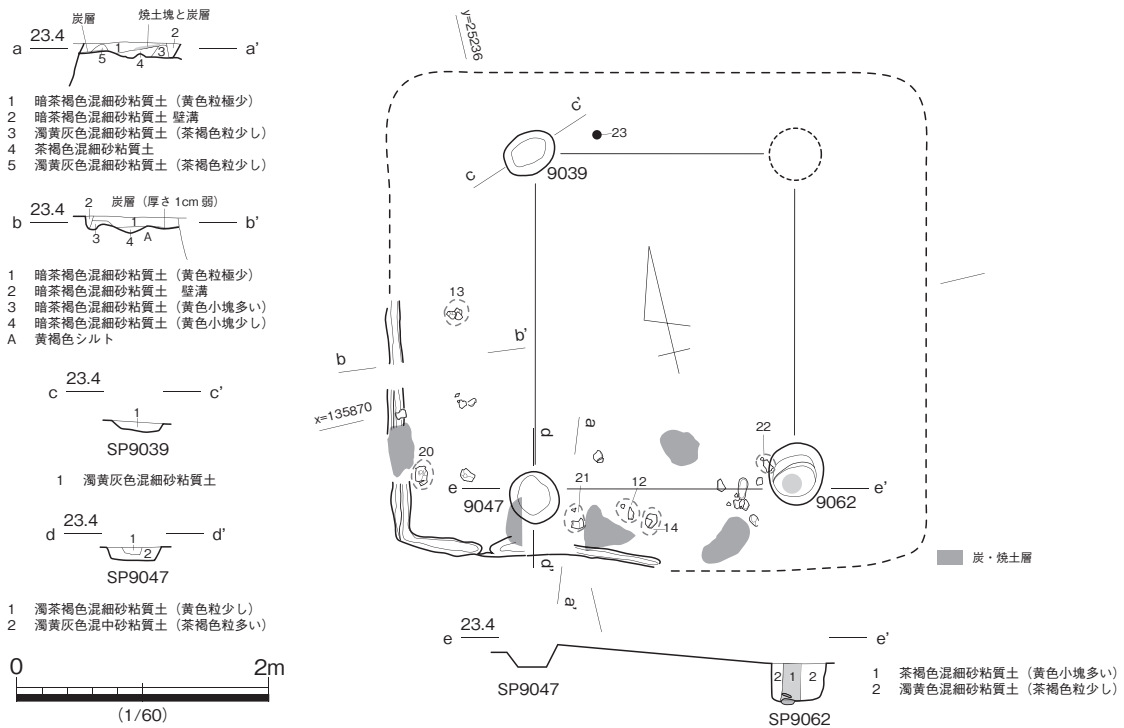


図 195 P 区 SH9003 平・断面・出土遺物

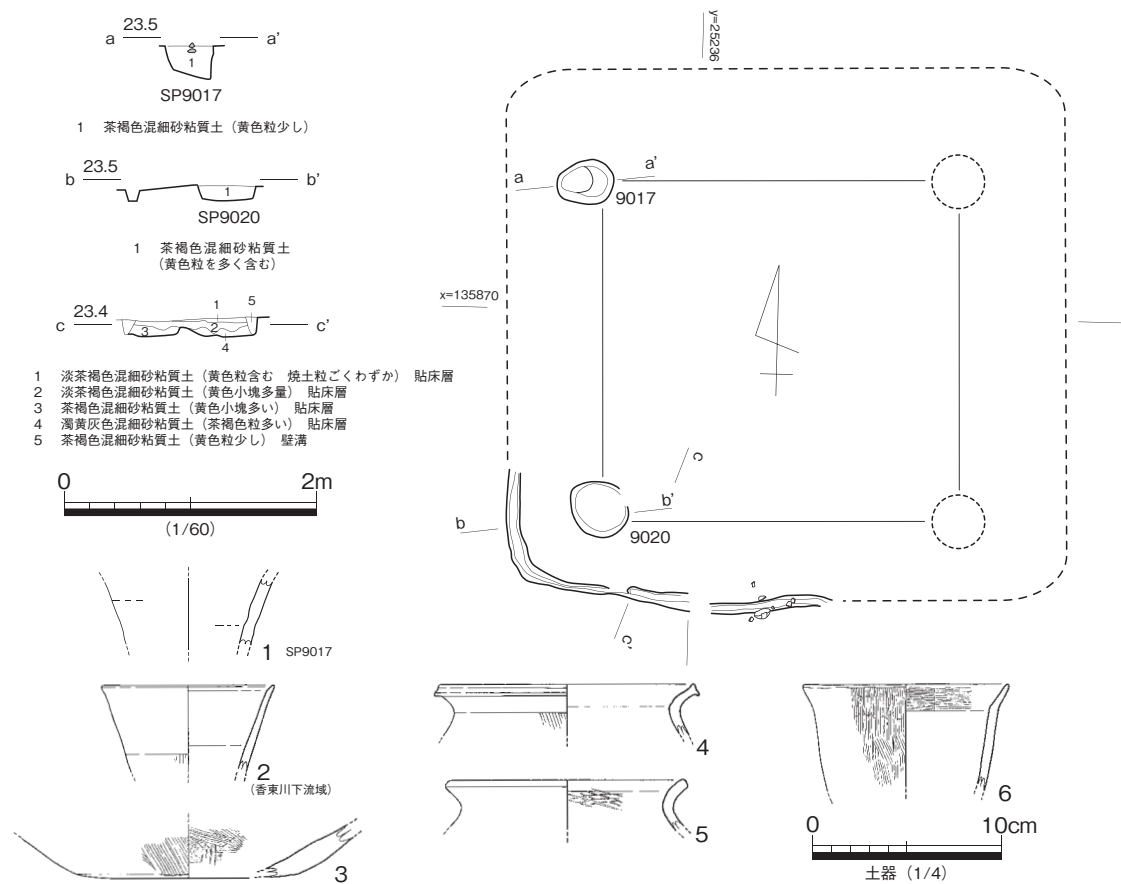


図 196 P 区 SH9004 平・断面・出土遺物

主柱穴 SP9017 からの出土遺物に須恵器長頸壺の頸部片があるが、上面の出土であり混入品と考える。南側壁溝からまとめて出土した遺物の内、図 196-4.5 の甕口縁形態から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定する。

P 区 SH9005 (図 197)

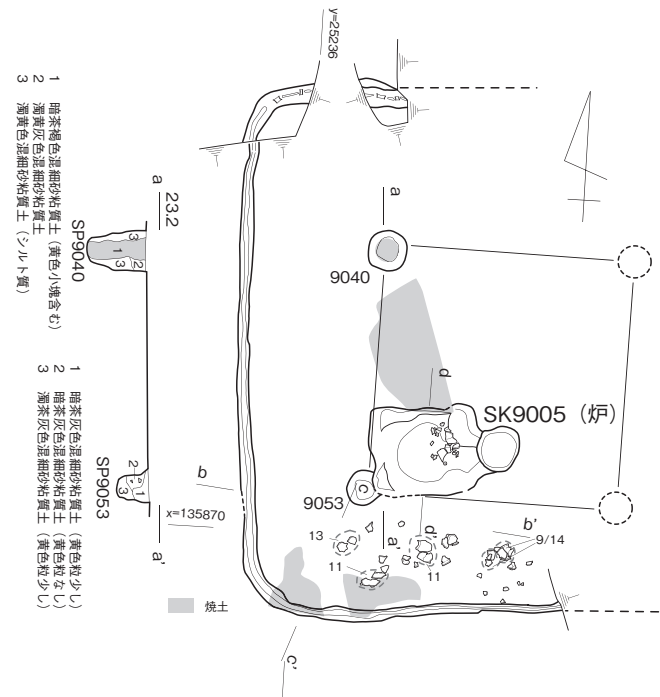
P 区南東部で検出した竪穴住居である。弥生後期後半から終末期の SH9003.9004 を切り込む。住居東部は攪乱坑によって滅失するが、図示する主柱穴の配置から一辺が約 4m の方形住居と考えられる。壁面高は約 0.3m とやや深く、ベッド状遺構は確認できない。

炉 SK9005 は床面中央から南西に偏り主柱穴 SP9053 に近接した位置にある。炉の床面南側への配置は、弥生終末期から古墳前期に多く見られるものであるが、本住居のような主柱穴に接した位置を示すものは少ない。炉は所謂灰穴炉であり、北側の床面には掻き出しに伴う炭化物が広がる。埋没土は全て基本層序 IV 層に由来したブロック土を含む埋め戻し土である。住居南部の床面上には多くの土器片が廃棄されている。埋め戻し土の状況から、完形品は少ないものの、一括性の高い土器群と評価できよう。

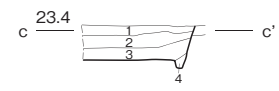
出土土器 (図 197) の様相から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定できる。

P 区 SH9006 (図 198)

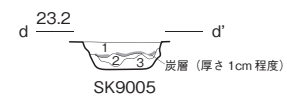
P 区北東部で検出した竪穴住居であり、古墳時代後期の SH9002 に切られ。大半を攪乱坑によって滅



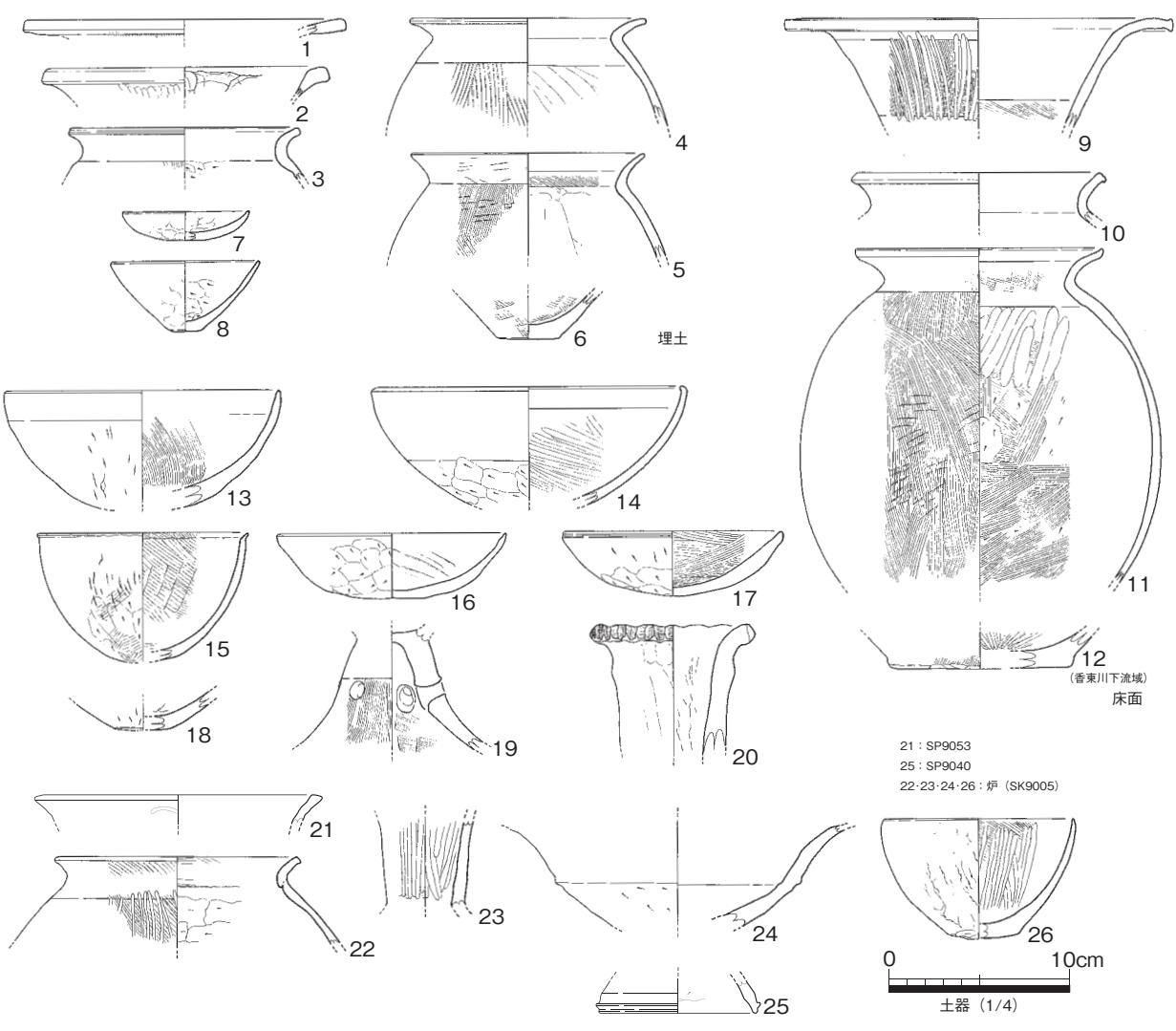
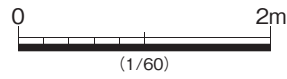
- 1 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒少し) 埋土
- 2 茶褐色混細砂粘質土 (黄色小塊多い) 埋土
- 3 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒少し) 貼床
- 4 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒なし) 壁溝
- 5 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒少し)
- 6 暗茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒なし)
- 7 濁黄灰色混細砂粘質土 (茶褐色粒多い) 貼床層



- 1 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒少し)
- 2 茶褐色混細砂粘質土 (黄色小塊多い)
- 3 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒少し)
- 4 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒なし) 壁溝



- 1 濁茶灰色混細砂粘質土 (黄色粒・焼土粒・炭少し)
- 2 濁黄灰色混細砂粘質土 (1の小塊多い)
- 3 濁黄灰色混細砂粘質土



21 : SP9053
25 : SP9040
22-23-24-26 : 炉 (SK9005)

(香東川下流域)
床面

図 197 P区 SH9005 平・断面・出土遺物

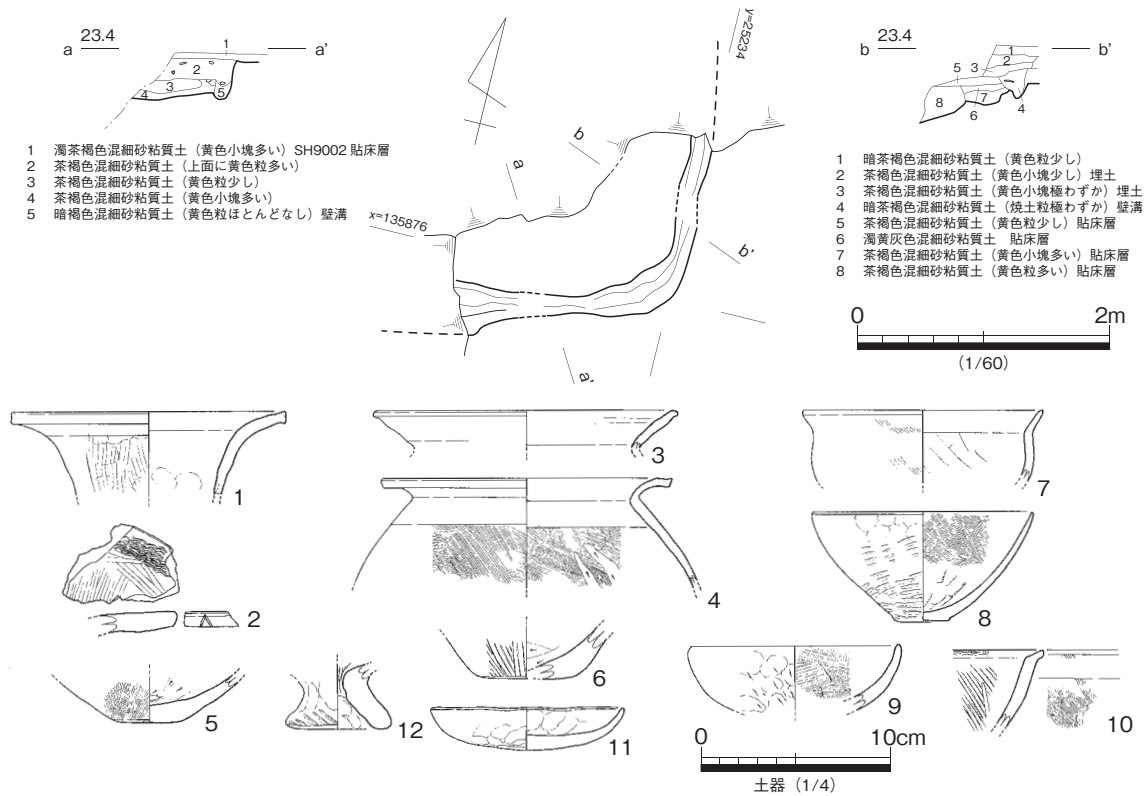


図 198 P 区 SH9006 平・断面・出土遺物

失し、住居南東隅部を確認したにすぎない。残存部の状況から、方形住居に復元されるが、主柱穴や炉跡などの諸施設を復元する材料は見られない。

出土遺物の中でも、新しい属性をもつ甕（図 198-3.4）や鉢（図 198-10.11）を根拠として、本住居は古墳前期前半に廃絶したものと推定しておく。

P 区 SH9301（図 199・200）

P 区中央部で検出した竪穴住居である。SH9302.9306 に切られる。住居南東部から北部が攪乱坑で破壊されるが、一辺が約 5m を測る方形住居であり、各辺に膨らみをもつ円形住居から方形住居への移行期に見られる形態をもつ。主柱穴は 4 基であり、西側と南側に盛土によるベッド状遺構が確認されているが、主柱穴との位置関係から、元来は全周していたものと推定される。また、ベッド状遺構の内側にも壁溝が確認される箇所があり、壁材設置に伴うものと見られる。炉は床面中央から西寄りに SX9303 とした土坑である。炉の埋没土は炭化物が疎らに混じるブロック土であり、底面が 2 か所窪むもので、2 基の炉が結合しているものと見られる。住居壁面は良好な箇所で約 0.3m 残存しており、埋没土は全て埋め戻し土である。

床面出土遺物の中で完形に復元される台付鉢（図 200-22）の形態から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したと推定しておきたい。

P 区 SH9302（図 201・202）

P 区北西部で検出した竪穴住居である。古墳後期の O 区 SH8207 に切れ、弥生後期後半以前の

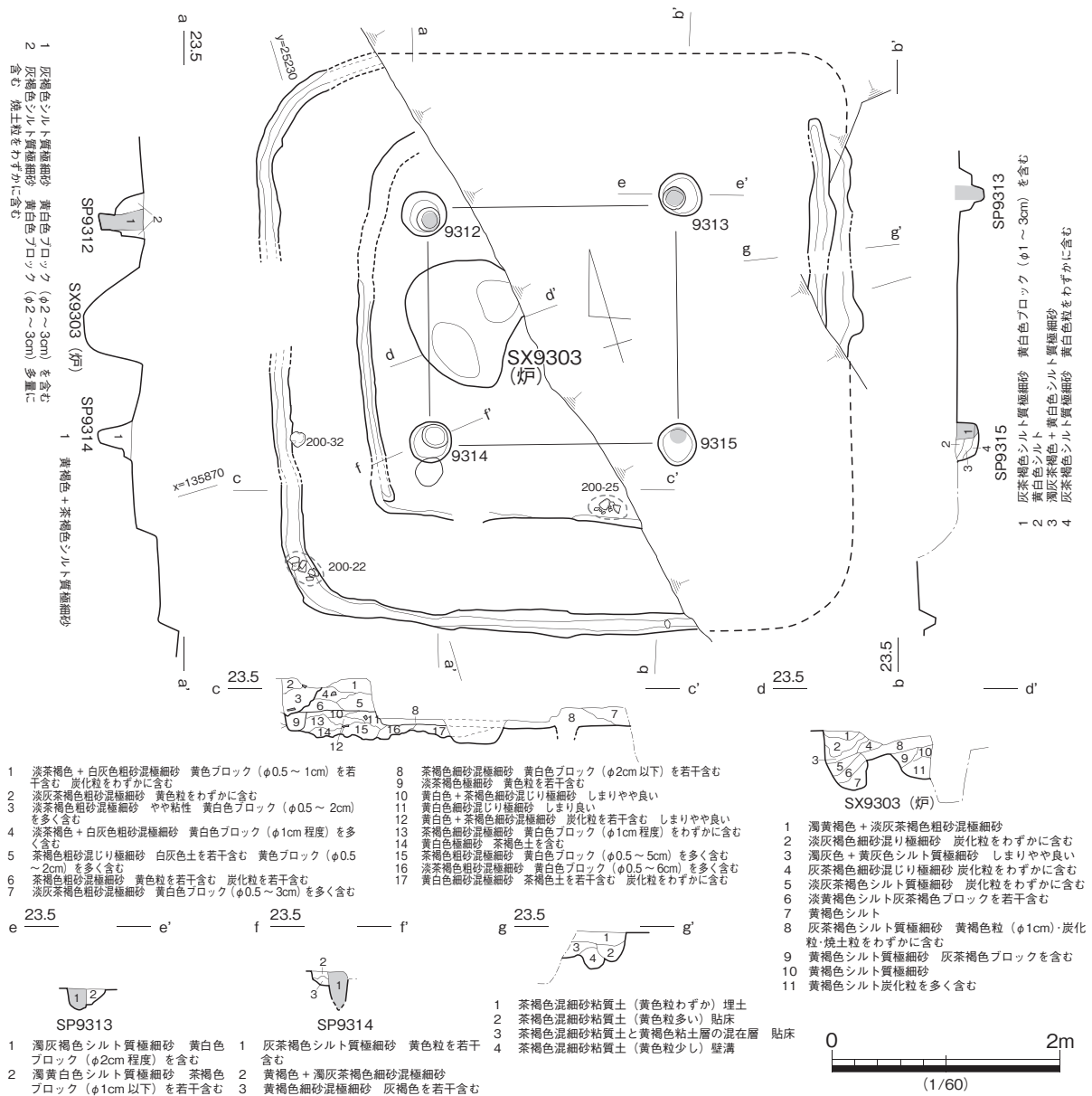


図 199 P 区 SH9301 平・断面

SH9301.O 区 SH8203 を切り込む。住居西部を攪乱坑によって滅失するが、4.5 × 4m の長方形の平面プランをもつものと推定できる。ベッド状遺構は盛土によって敷設されており、残存する住居東側のほぼ全域で確認しているが、元来は全周していたものと見られる。支柱穴は中央に直列する 2 基が該当し、その間に炉が存在している。炉は中位から上位が炭化物で満たされる灰穴炉である。床面上には、焼土・炭化物が多く見られ、炭化物の中には少数部材様のものも見られたことから、本住居は焼失家屋の可能性が高い。しかし、炭化物は腐食が進み形状の把握が困難なものが多く、樹種同定及び使用部位・種別を推定できるものは殆どみられない。

出土遺物は、弥生中期後半から終末期までのものを含んでいる。中でも覆土出土の鉢 (図 201-16.17) や床面出土の胴部が強く張る甕 (図 201-27) は時間的に後出する一群である。加えて住居形態を考慮して本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと推定しておきたい。ガラス小玉 (図 202-5) は北東部壁面

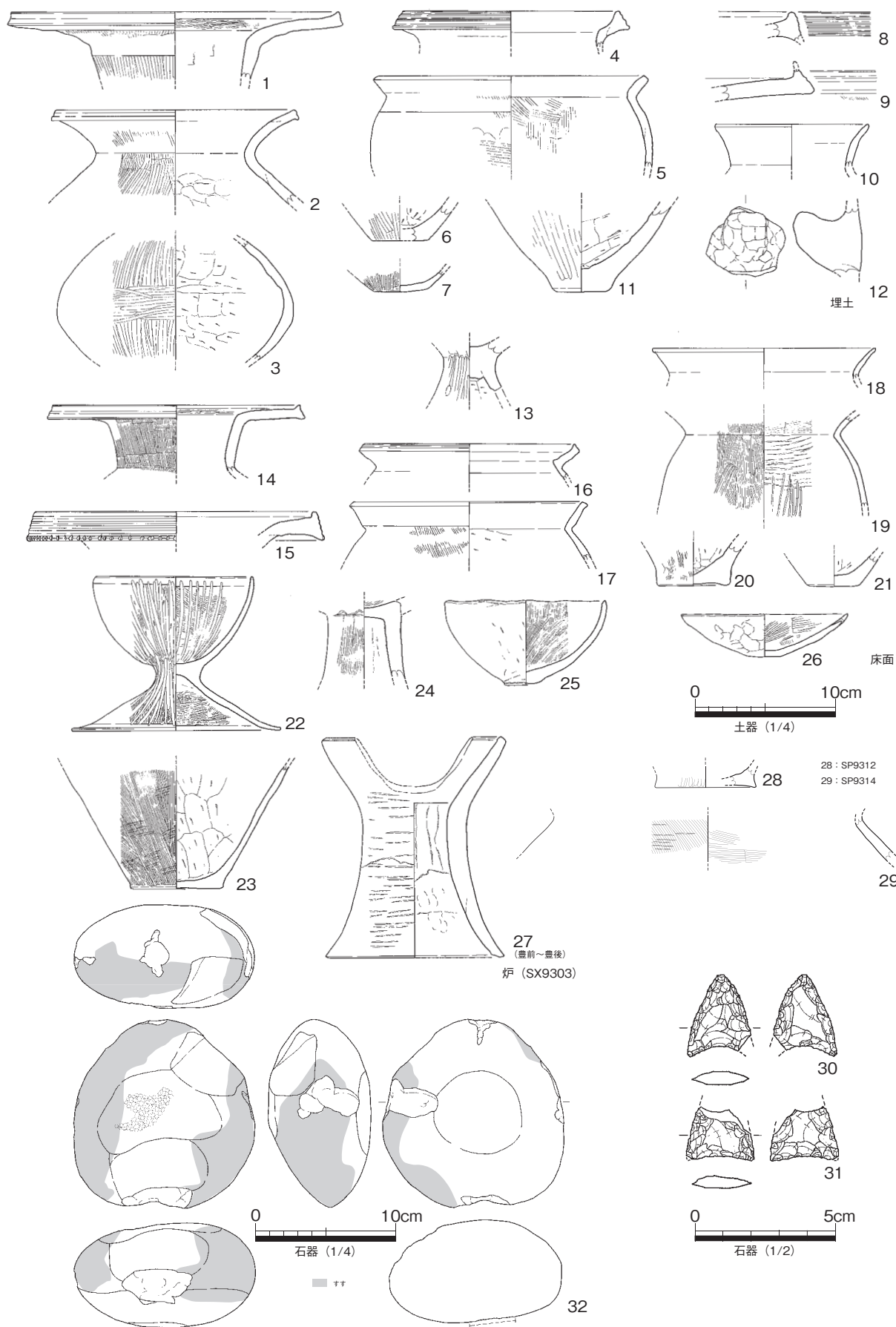


图 200 P 区 SH9301 出土遺物

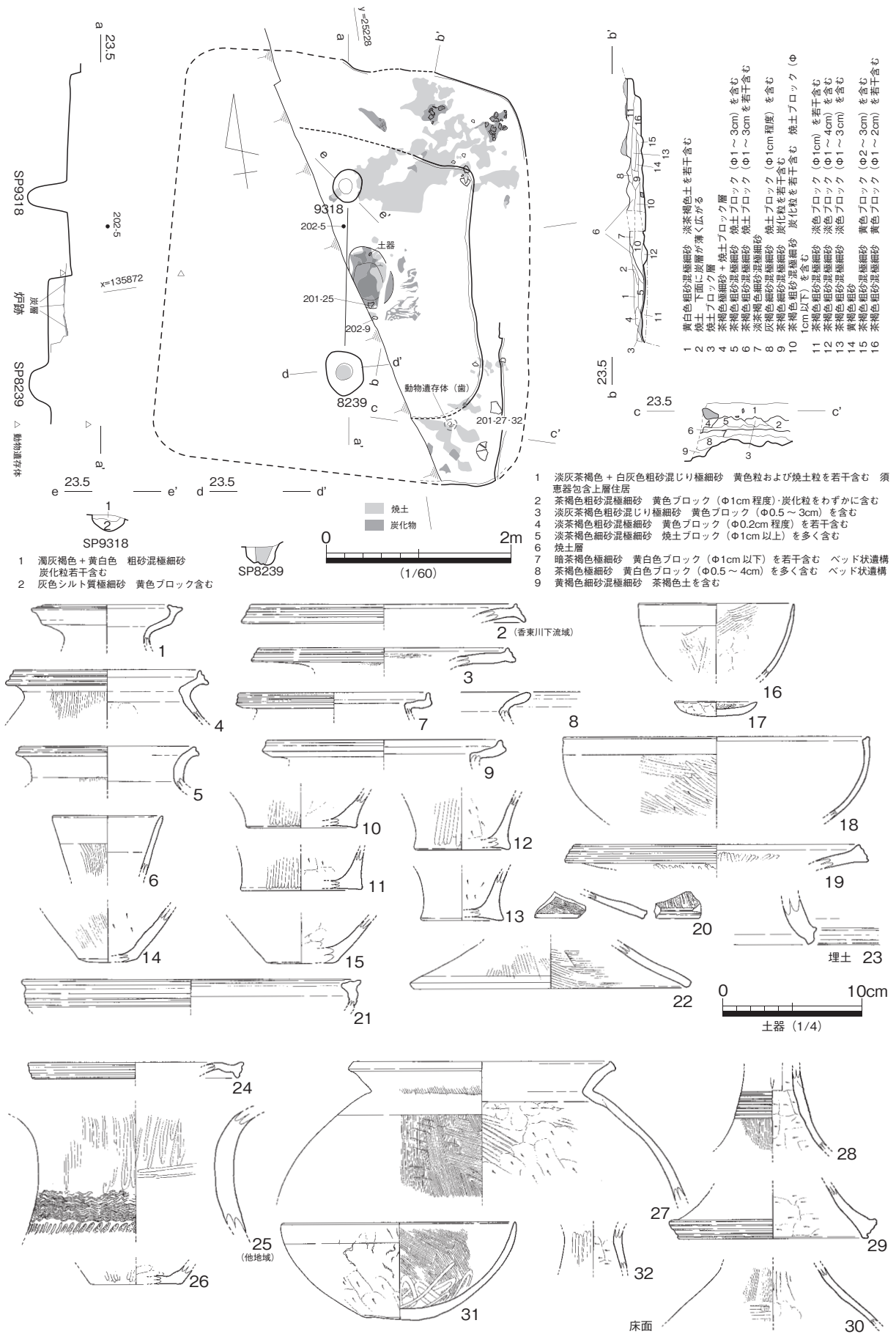


図 201 P 区 SH9302 平・断面・出土遺物 (1)

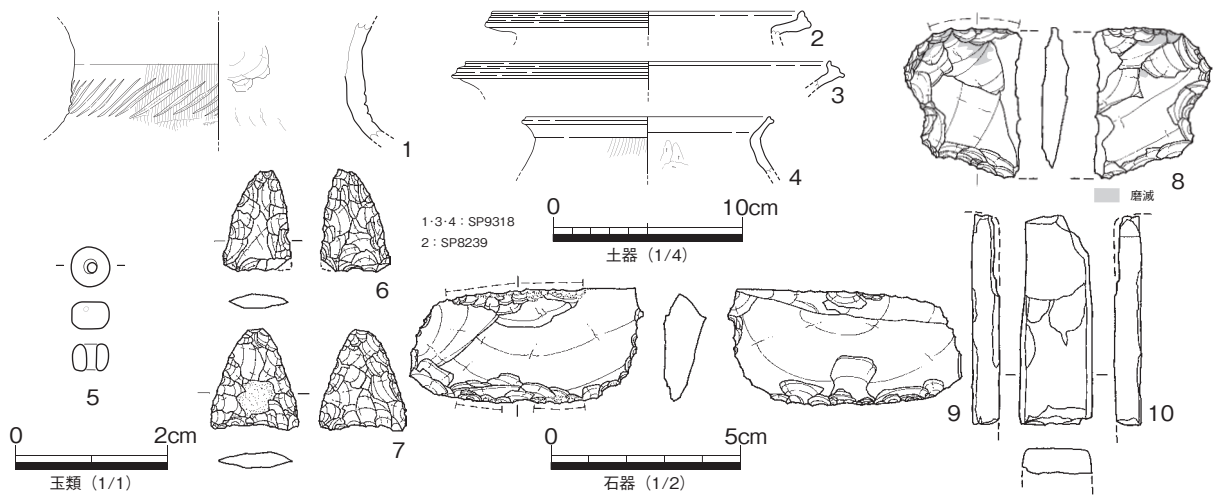


図 202 P区 SH9302 出土遺物 (2)

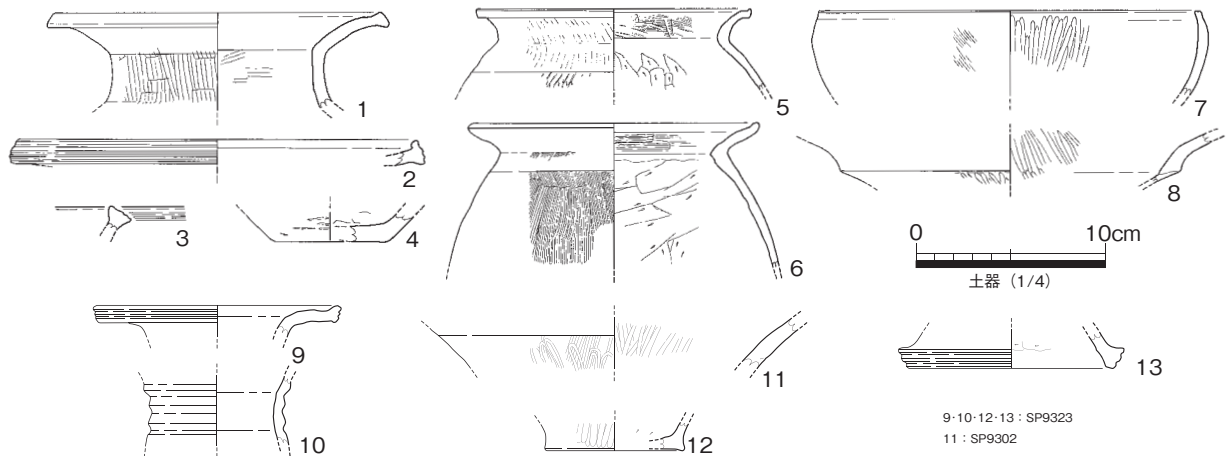
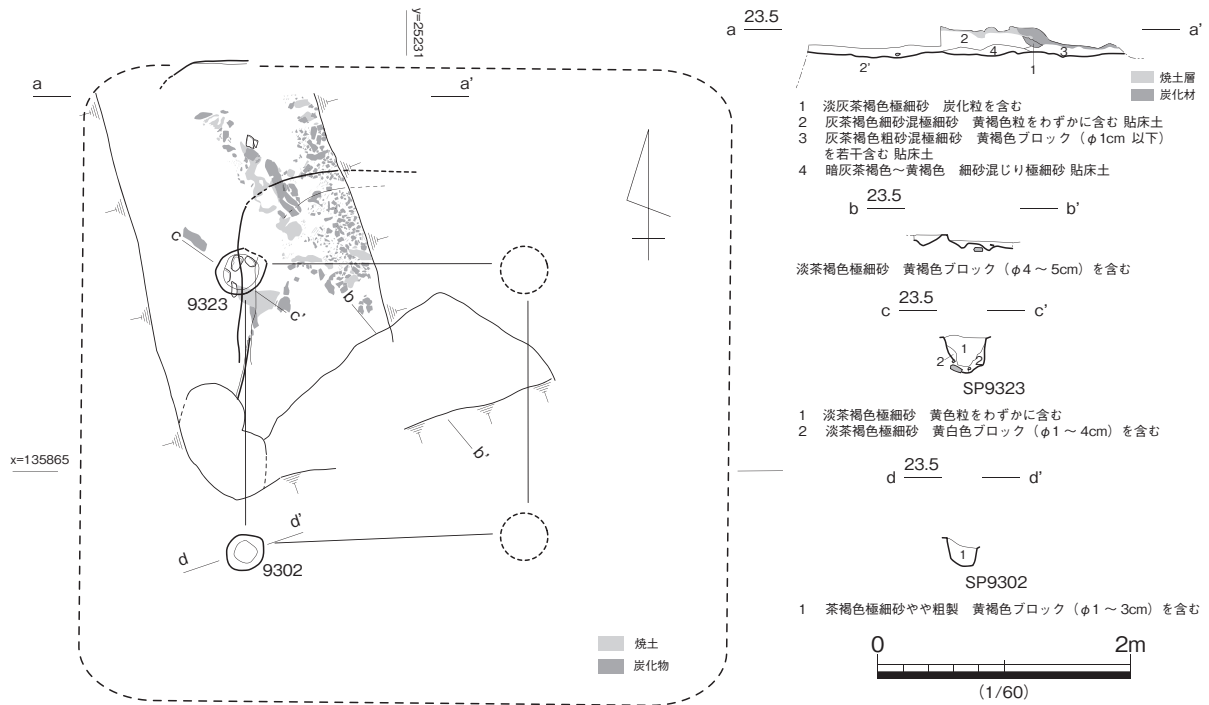


図 203 P区 SH9306 平・断面・出土遺物

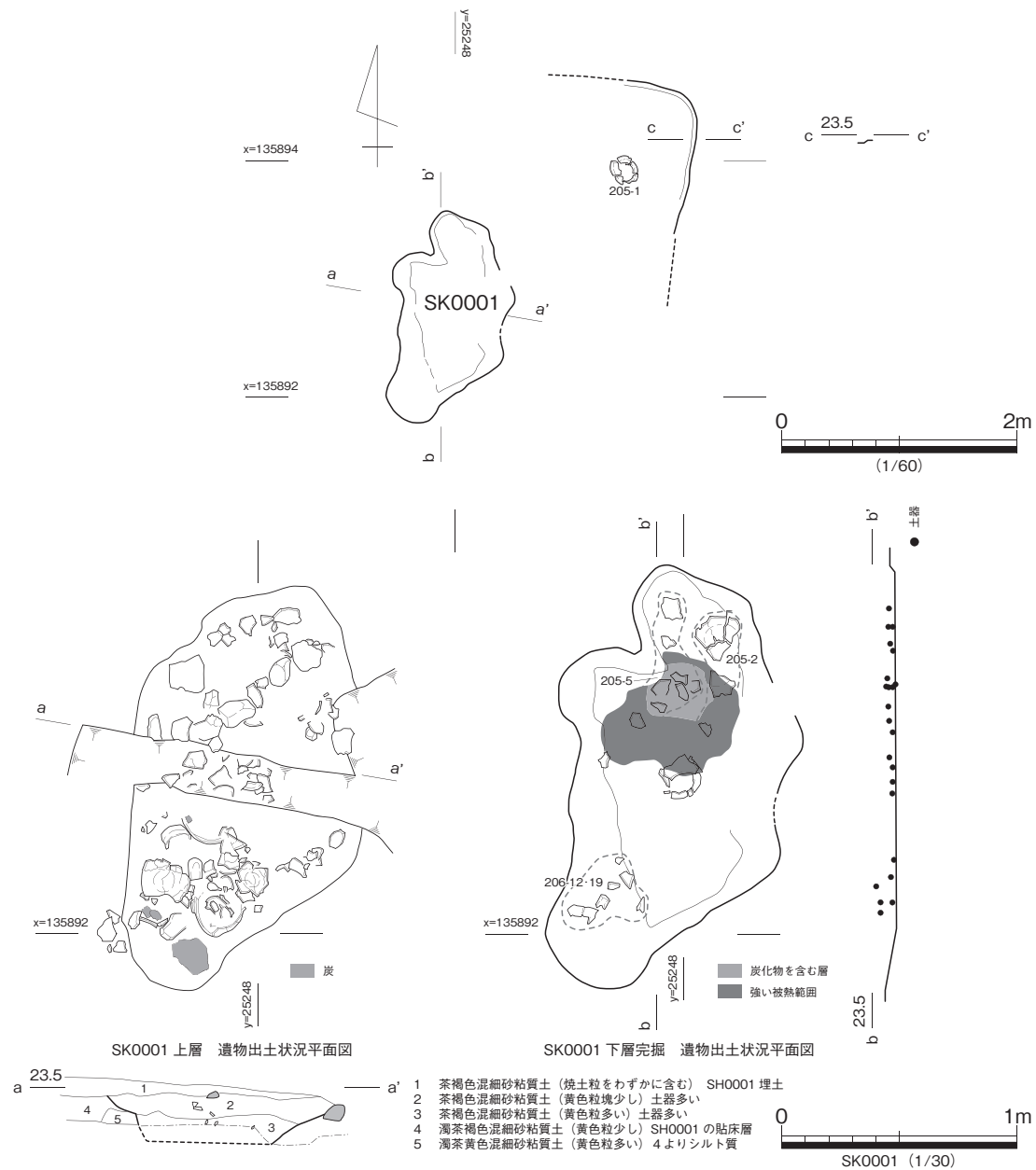
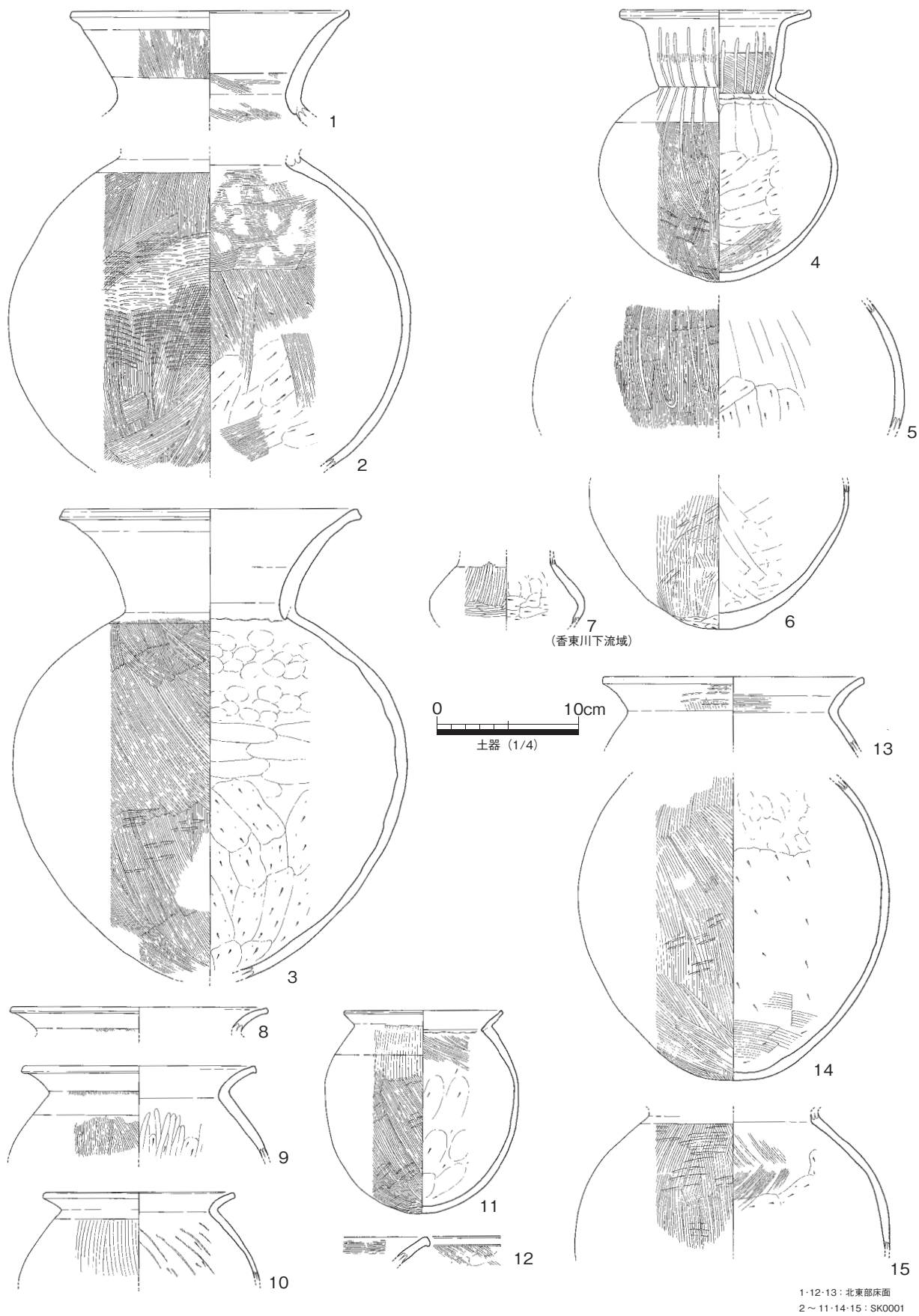


図 204 Q 区 SH0007 平・断面・遺物出土状況

際から出土したもので、気泡の目立つ鮮やかなブルーガラスを素材とする。図 202-10 は結晶片岩製の扁平片刃石斧片であり、住居の帰属時期からみて混入品の可能性が高い。

P 区 SH9306 (図 203)

P 区南西部で検出した竪穴住居であり、弥生後期後半期の SH9301 を切り込む。住居北西部の床面が辛うじて残存しており、現存する 2 基の主柱穴に加えて 4 基の主柱穴を想定する。北西部の壁面と主柱穴との位置関係から、一辺が約 5m の方形住居を復元しておきたい。また、住居北西部には盛土によるベッド状遺構が確認され、その上面には焼土・炭化材の集中が認められた。炭化材は碎片と化しているが、出土状態やその量から見て、焼失家屋を推定できる。炭化材における部材の推定は困難である。本



1-12-13: 北東部床面
2~11-14-15: SK0001

图 205 Q 区 SH0007 出土遺物 (1)

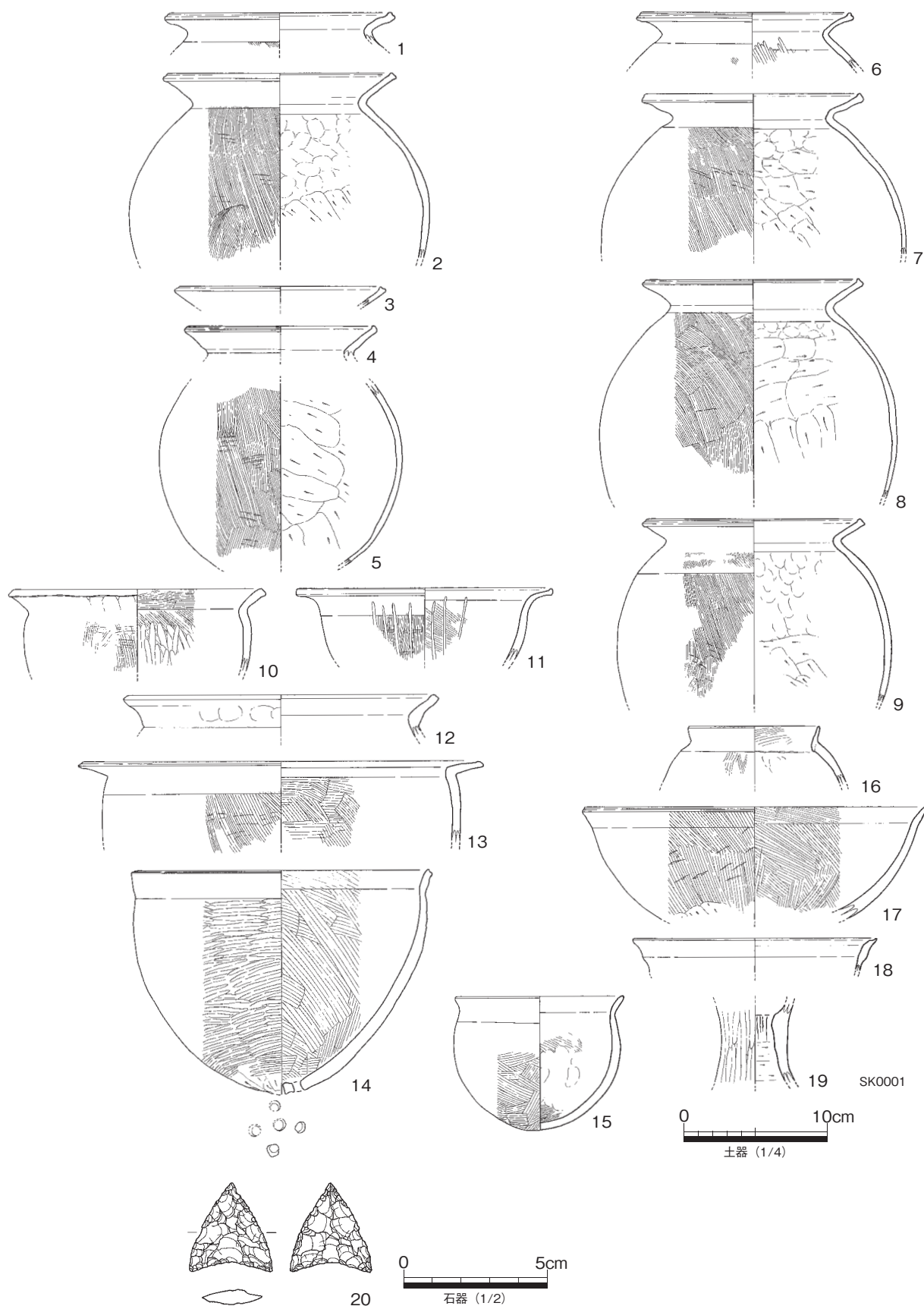


图 206 Q 区 SH0007 出土遗物 (2)

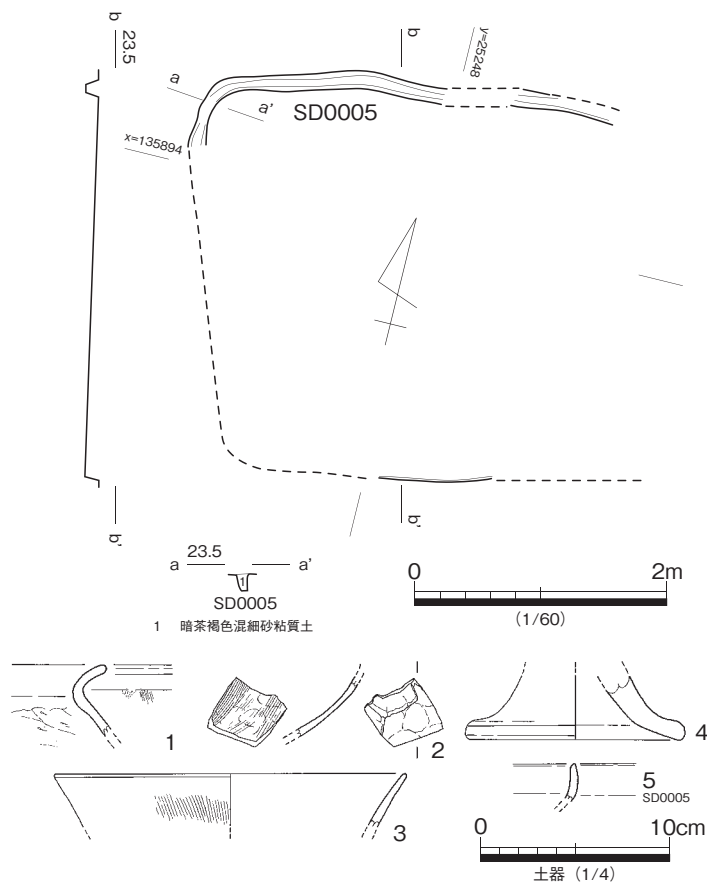


図 207 Q 区 SH0016 平・断面・出土遺物

できなかった。SK0001 は完形品の古式土師器を多量に含む出土状況を示し、廃絶時の一括廃棄を想定できる。また、下層及び周辺に時期的に先行する弥生時代の竪穴住居が存在していないことから、混入品もほぼ含まれてないと想定することができ、当該期の良好な一括資料と評価することができる。

出土土器の特徴から、古墳前期前半新段階に比定することができよう。

Q 区 SH0016 (図 207)

Q 区中央部で検出した竪穴住居であり、古墳後期の SH0001 に切られる。埋没土の大部分が SH0001 によって削平されているため、南側に接する SH0007 との切り合い関係は明確ではない。壁溝は北辺のみで確認し、南辺では僅かに落ち込む壁面を検出した。住居東辺を示す材料に欠けるが、現状から長方形プランの平面形態を想定しておきたい。また、支柱穴の存在は確認できない。

出土遺物には、1 点のみ須恵器無蓋杯小片(図 207-5)が含まれるが、明らかに時期を違えるものであり、周辺遺構との前後関係からも混入品と見做せる。器壁の薄い土師器甕胴部片(図 205-2)や土師器高杯(図 207-3) などから、古墳前期前半期の住居と推定しておきたい。また、住居南側でほぼ同時期の SH0007 と重複することから、遺構の切り合い関係では確認できなかったものの出土遺物様相から同住居との前後関係を想定し、古墳前期前半古段階の廃絶時期を想定しておく。

R 区 SH3006 (図 208)

住居の北方約 2m には同時期と見られ、炭化材や焼土塊が同じ出土状況を示す SH9302 が存在するが、同時併存を推定するには、距離的に接近しすぎている。

出土遺物には、時間幅が認められるが、床面出土の甕(図 203-5.6)の口縁形態、支柱穴出土の広口壺(図 203-11)の存在から、本住居は弥生終末期新段階の所産と推定しておきたい。

Q 区 SH0007 (図 204 ~ 206)

Q 区中央部で検出した竪穴住居である。SH0001 をはじめとした古墳時代後期以降のすべての遺構に切られる。住居北東部の壁面の立ち上がりのみが、辛うじて残存する。SK0001 は焼土・炭化物を含む炉跡であり、北東部の立ち上がりとの位置関係から、平面形が隅丸長方形を呈すると推測できるが、規模を推定する具体的な材料に欠ける。炉跡 SK0001 に対応する支柱穴は確認

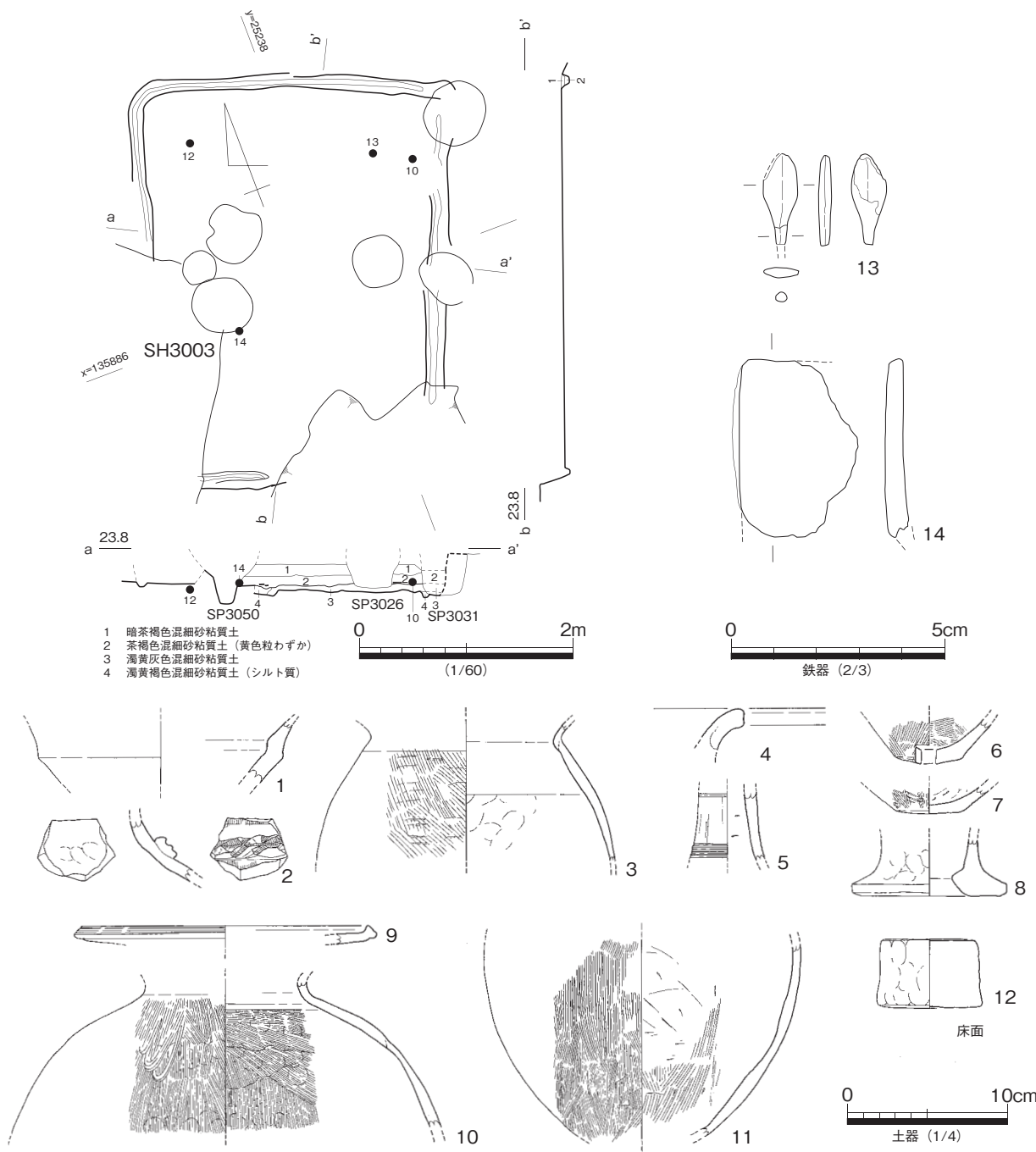


図 208 R区 SH3006 平・断面・出土遺物

R区南部で検出した竪穴住居である。住居北東部を古墳時代のSH3003、東部をSH3008.3002に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、3.9×3.0m程に復元できる。0.3m程の立ち上がりが残存しており、支柱穴をもたない。床面には層厚0.1m程の貼床土が見られ、床面上には土器が散発的に出土した。

図208-1～8は覆土より、9～12は床面からの出土遺物である。甕(図208-3.11)は胴部最大径が下がり、図208-7のような底部をもつものとみられることから、弥生終末期新段階に属するものと見られる。図208-1は二重口縁壺として図化した。反転する口縁部の形態や内面の段などに違和感があり、別器種を想定すべきかもしれない。図208-13の銅鏃は床面から出土したもので、小型の柳葉状の身部をもち、

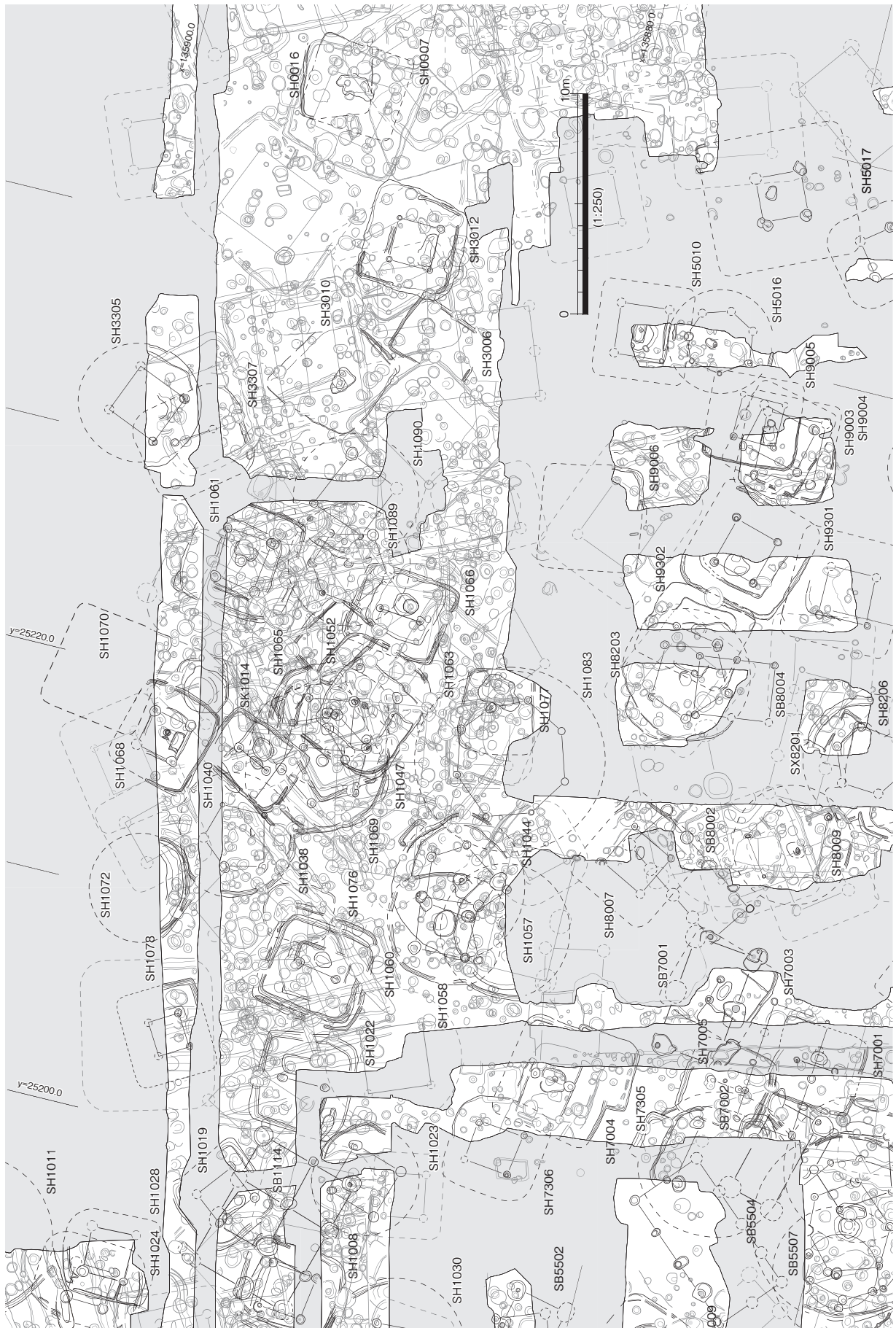
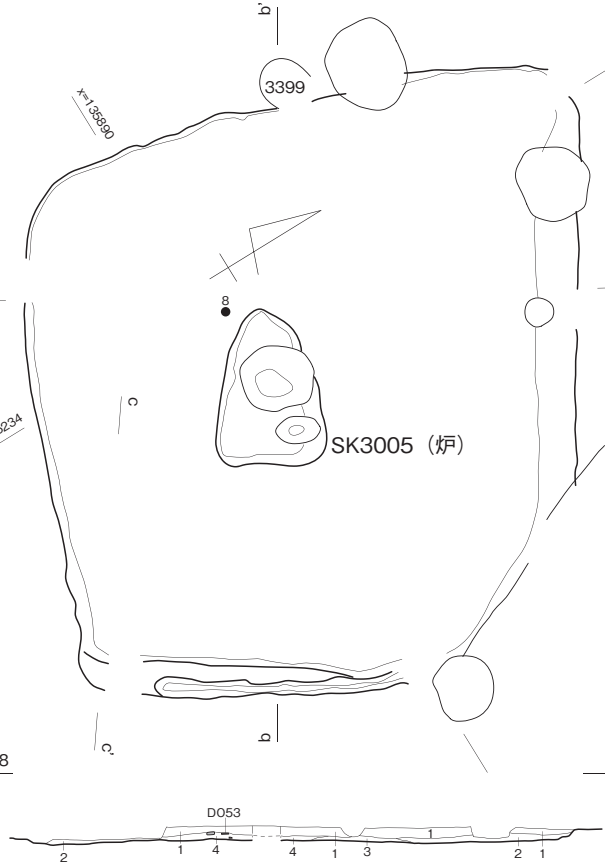


图 209 R·S·T 区 平面

- 1 淡茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒多い)
- 2 濁黄灰色混細砂粘質土 (黄色粒少し)
- 3 濁黄褐色混細砂粘質土 (黄色粒多い)
- 4 濁黄灰色混細砂粘質土 (黄色粒少し)
- 5 淡灰褐色混細砂粘質土 (黄色粒多い)
- 6 濁黄褐色混細砂粘質土 (黄色粒多い)
- 7 濁黄灰色混細砂粘質土 (黄色粒多い)
- 8 茶褐色混細砂粘質土 (黄色粒多い)

SH3010 23.8
 坂わずか
 SH3010
 Y=25234



- 1 濁茶灰色混細砂粘質土 (黄色小塊多い)
- 2 濁黄褐色混細砂粘質土 (黄色小塊少し)
- 3 濁黄褐色混細砂粘質土 (茶灰色粒少し)
- 4 濁黄褐色混細砂粘質土 (茶灰色粒なし)
- 5 濁黄褐色混細砂粘質土 (黄色小塊多い)
- 6 濁茶灰色混細砂粘質土 (柱痕) SP
- 7 濁黄灰色混細砂粘質土 SP3399 (SH3010より新)
- 8 明茶褐色混細砂粘質土

SK3006
 SK3005
 SP3399
 4層
 a-a'の4層
 a-a'の2層
 a-a'の3層
 SK3006
 SP

- 1 濁茶灰色混細砂粘質土 (黄色小塊多い)
- 2 濁黄褐色混細砂粘質土 (茶灰色粒少し)
- 3 濁黄褐色混細砂粘質土 (茶灰色粒なし)
- 4 濁黄灰色混細砂粘質土 (黄色小塊少し)

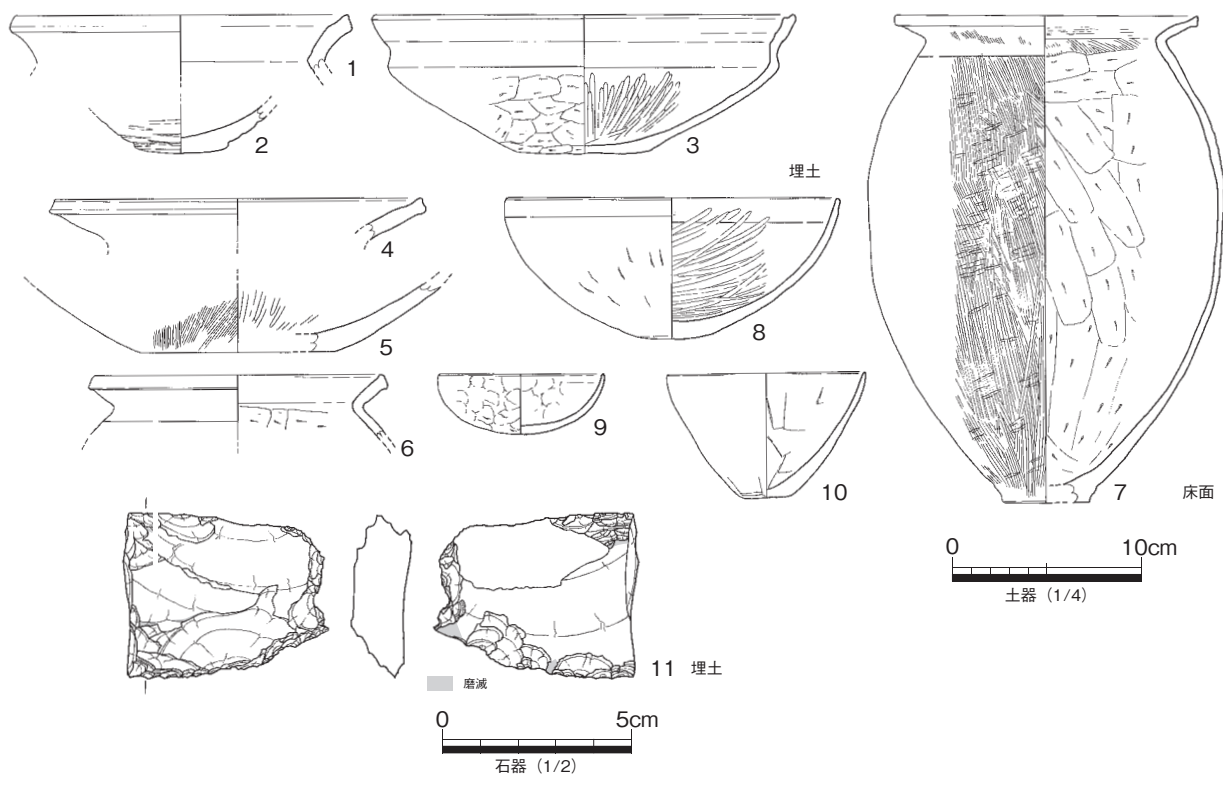
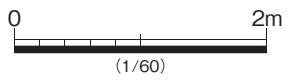


図210 R区 SH3010 平・断面・出土遺物

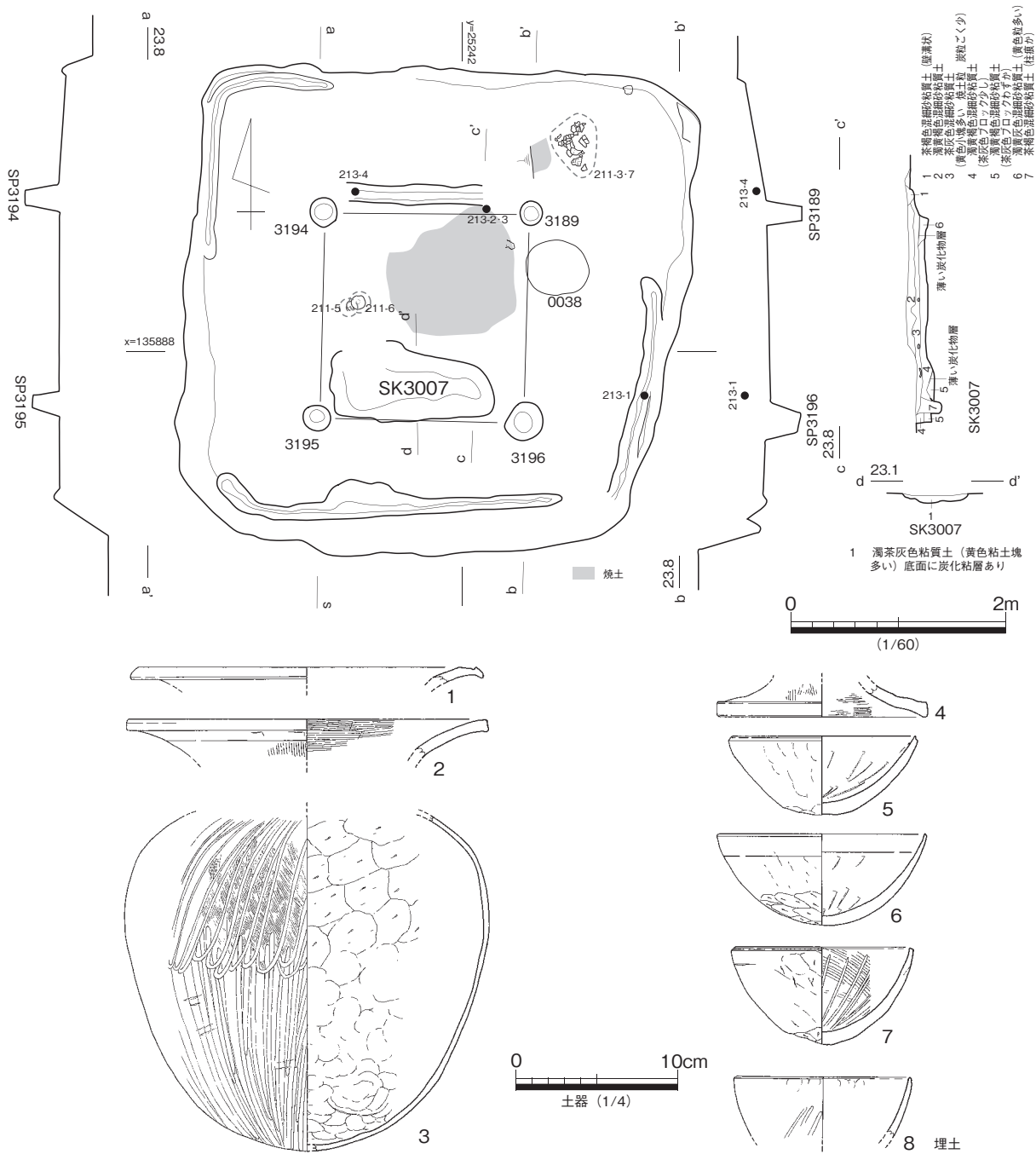


図211 R区 SH3012 平・断面・出土遺物 (1)

鏝とみられる弱い稜線をもつ。図 208-14 は器種不明の鉄器片である。出土土器の全体の様相から、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと考えておきたい。

R区 SH3010 (図 210)

R区中央部で検出した竪穴住居であり、古墳時代の SH3001.3003.3303 に切られる。現状では歪な台形状を呈するが、無柱の隅丸長方形の平面プランをもつ住居と考えられる。住居北東隅部や南東隅部の歪なプランは、調査段階のミスであろう。住居中央部には炉跡と考えられ底面を中心に炭化物の薄層の

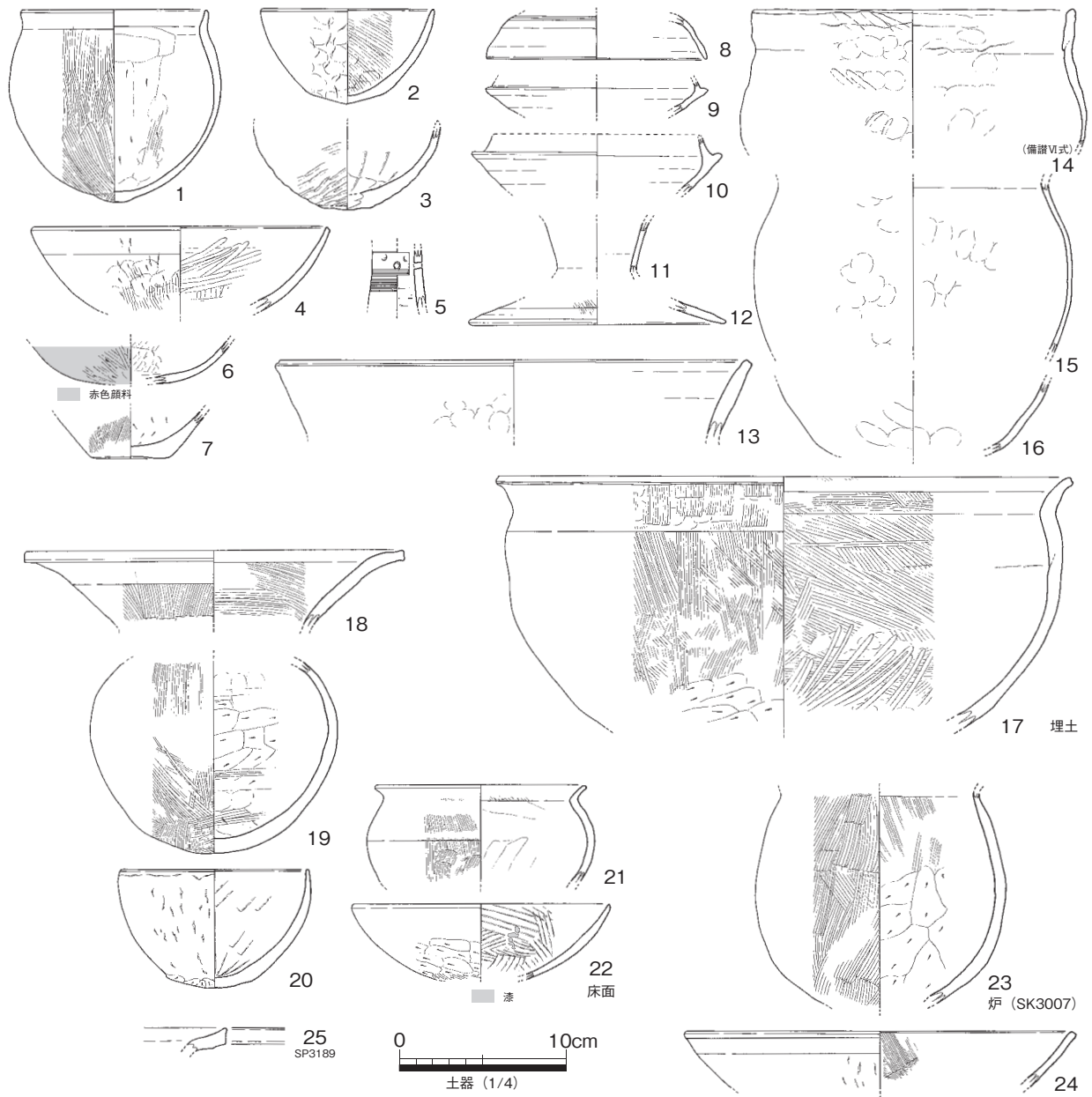


図 212 R 区 SH3012 出土遺物 (2)

堆積が確認できる SK3005 がある。貼床土は全域で確認できるが、住居南部ではその下場が土坑状に窪み、厚いものとなっている。

出土遺物の中で、小型鉢 (図 210-9) は年代的に下がる可能性があるが、残存率が高い他の個体 (図 210-3.7.10) の帰属時期は、弥生後期後半古段階にまとまる。後者の出土遺物の年代観から、本住居の廃絶時期を弥生後期後半古段階に比定しておきたい。

R 区 SH3012 (図 211 ~ 213)

R 区南東部と Q 区南西部に跨って検出した竪穴住居である。SH3002.3008 に切られ、SH3006 を切る。現地では上層と下層で 2 棟重複する形で調査を進めたが、支柱穴等を検討した結果、下層の 1 棟の住居

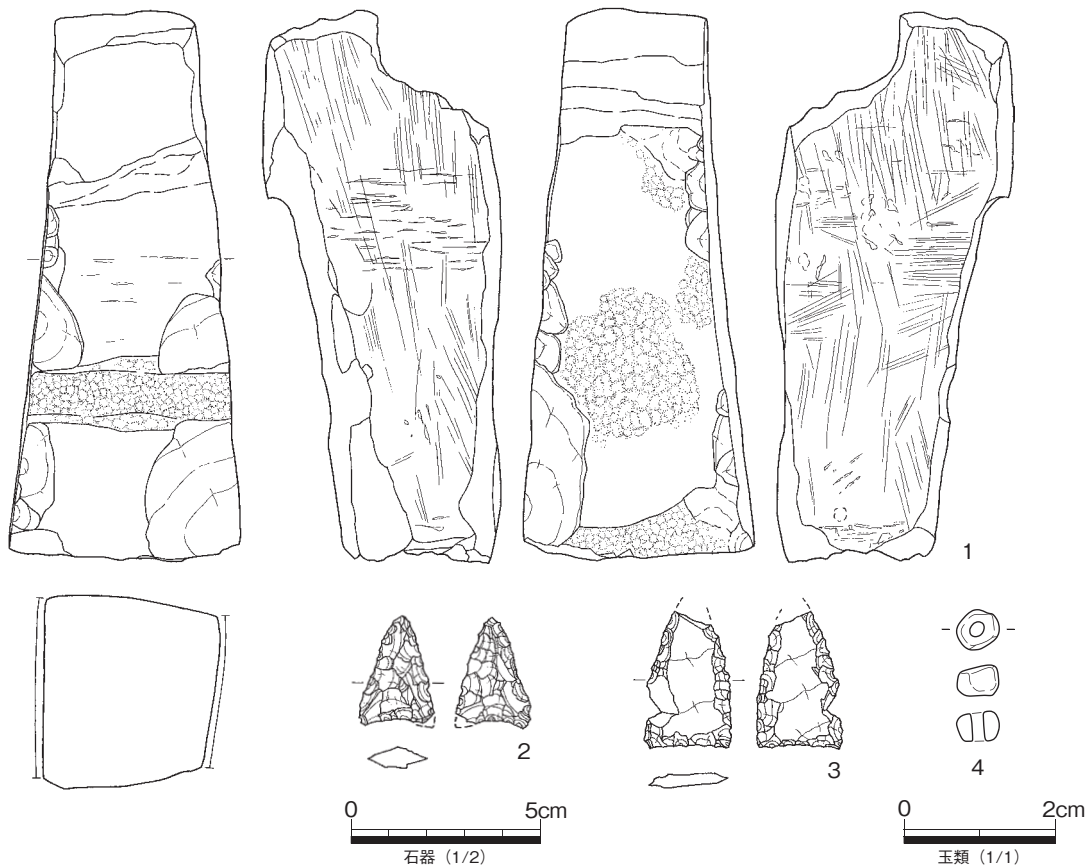
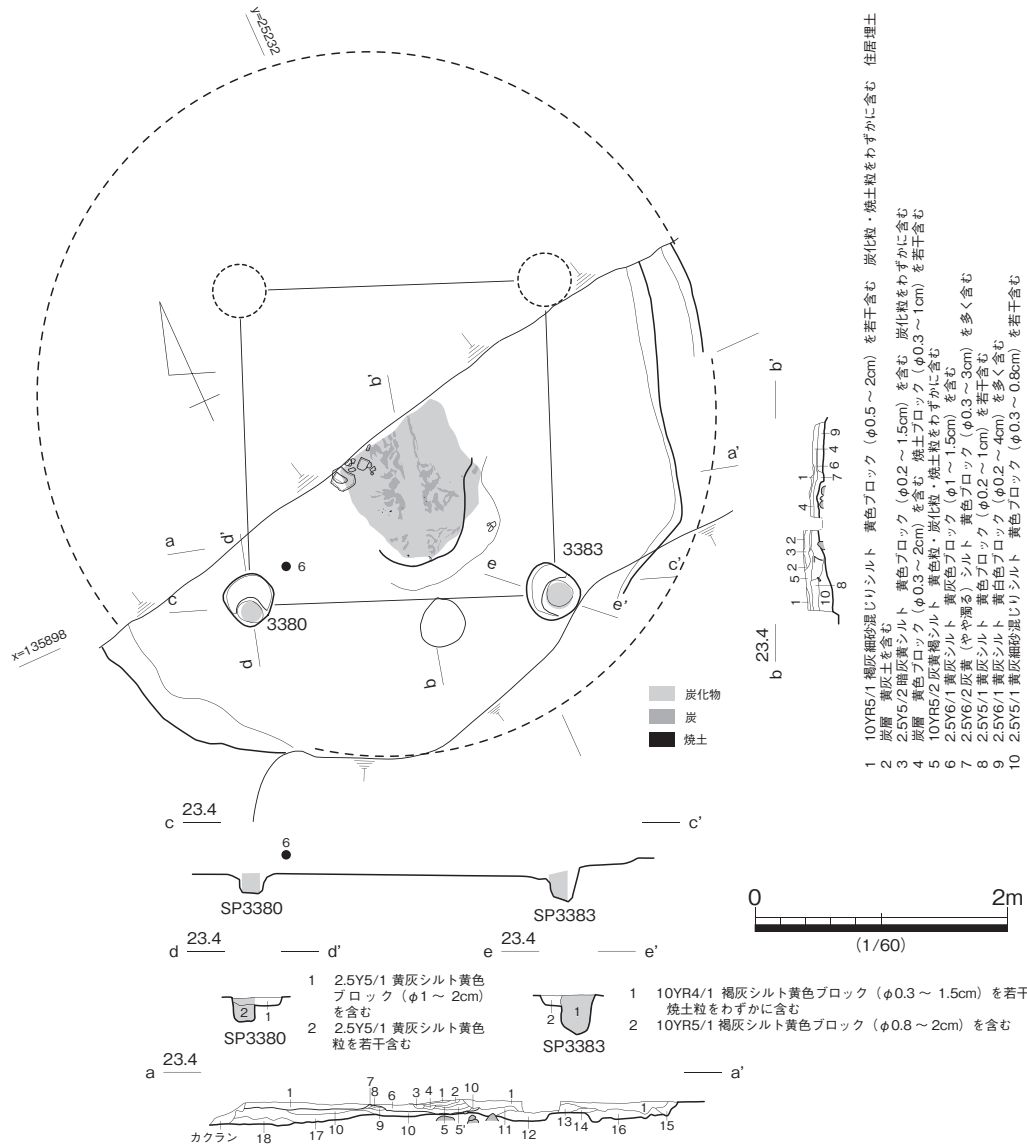


図 213 R 区 SH3012 出土遺物 (3)

として提示する。平面形は一辺が約 4.5m の隅丸方形を呈し、図示する 4 基の主柱穴を配置する。炉跡は南側の主柱穴間に存在する SK3007 が該当すると考えられる。炉跡 SK3007 は、底面全域に炭化物の広がり確認できる灰穴炉である。平面的にベッド状遺構を検出できていないが、北側の主柱穴である SP3194 と SP3189 を結ぶ形で小溝を検出しており、ベッド状遺構の壁材設置に伴う溝であると考えられる。従って、4 周にベッド状遺構があり、4 基の主柱穴はそのコーナーに配置されたと考えられる。壁面の立ち上がりは良好に残る箇所でも 0.5m を測るが、埋没土上位の出土遺物に須恵器・土師器片が一定量含まれるので、本住居上位に古墳時代の住居や隣接する竪穴住居に伴う床面が存在していた可能性が高く、精査を経ずに破壊した可能性が高い。

図 211-1 ～ 8 は Q 区側の住居北東部の床面でまとまって出土した一群の資料である。図 212-1 ～ 17 は住居西部の埋め戻し土から出土した資料で、図 212-18 ～ 22 は住居西部の床面出土、図 212-23.24 は炉 SK3007 からの出土、図 212-25 は主柱穴 SP3189 からの出土資料である。埋め戻し土からの出土遺物には古墳後期の須恵器蓋杯 (図 212-8 ～ 10) に加えて、土師器直口壺 (図 212-11) 高杯 (図 212-12) の他に備讃Ⅵ式の製塩土器 (図 212-14) が含まれる。これらは明らかに混入品と判断できる。他の資料は、鉢や広口壺の形態に古墳時代前期前半期の特徴が見られ、床面出土の鉢 (図 212-22) の内面には黒色を呈する被膜状の付着物があり、分析は行えていないが、漆の可能性が高い。図 212-4 は北側の 2 基の主柱穴 SP3189.3194 を繋ぐ小溝から出土したガラス玉である。

出土した土器の特徴から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。



- 1 10YR5/1 褐灰細砂混じりシルト 黄色ブロック (φ0.5 ~ 2cm) を若干含む 炭化粒・焼土粒をわずかに含む 住居埋土
- 2 炭層 焼土を含む
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄シルト 黄色ブロック (φ0.2 ~ 1.5cm) を含む 炭化粒をわずかに含む
- 4 炭層 黄色ブロック (φ0.3 ~ 2cm) を含む 焼土ブロック (φ0.3 ~ 1cm) を若干含む
- 5 10YR5/2 灰黄褐シルト 黄色粒・炭化粒・焼土粒をわずかに含む
- 6 2.5Y6/1 黄灰シルト 黄色ブロック (φ1 ~ 1.5cm) を含む
- 7 2.5Y6/2 灰黄 (やや濁る) シルト 黄色ブロック (φ0.3 ~ 3cm) を多く含む
- 8 2.5Y5/1 黄灰シルト 黄色ブロック (φ0.2 ~ 1cm) を若干含む
- 9 2.5Y6/1 黄灰シルト 黄色ブロック (φ0.2 ~ 4cm) を多く含む
- 10 2.5Y5/1 黄灰細砂混じりシルト 黄色ブロック (φ0.3 ~ 0.8cm) を若干含む

- 1 10YR5/1 褐灰細砂混じりシルト 黄色ブロック (φ0.5 ~ 2cm) を若干含む 炭化粒・焼土粒をわずかに含む 住居埋土
- 2 炭層 黄白色ブロックおよび焼土ブロック (φ1cm程度) を若干含む
- 3 10YR5/2 灰黄褐シルト
- 4 炭層 黄白色ブロック (φ0.3 ~ 1cm) をわずかに含む
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄シルト 黄色粒および焼土粒を若干含む
- 5' 2.5Y5/2 暗灰黄シルト 黄色ブロック (φ0.2 ~ 1.5cm) を含む 炭化粒をわずかに含む
- 6 炭層 黄色ブロック (φ0.3 ~ 2cm) を含む 焼土ブロック (φ0.3 ~ 1cm) を若干含む
- 7 2.5Y5/1 黄灰シルト 黄色粒を若干含む
- 8 2.5Y5/1 黄灰シルト
- 9 2.5Y5/1 黄灰シルト 黄色ブロック (φ1.5cm程度) を多く含む
- 10 2.5Y6/2 灰黄 (やや濁る) シルト 黄色ブロック (φ0.3 ~ 3cm) を多く含む
- 11 2.5Y6/2 灰黄細砂混じりシルト 黄色ブロック (φ0.3 ~ 1.5cm) を含む
- 12 2.5Y6/4 にぶい黄シルト 黄灰色ブロック (φ1 ~ 2cm) を含む
- 13 2.5Y6/2 灰黄 (やや濁る) シルト 黄色ブロック (φ0.5 ~ 2.5cm) を多く含む
- 14 2.5Y6/4 にぶい黄シルト 黄灰色土をわずかに含む
- 15 2.5Y6/4 にぶい黄 (わずかに濁る) シルト 黄灰色土を含む
- 16 2.5Y6/4 にぶい黄細砂混じりシルト 黄灰色ブロック (φ0.5 ~ 1.5cm) を多く含む
- 17 2.5Y5/1 黄灰 (濁る) シルト (わずかに粘性) 黄色ブロック (φ0.3 ~ 3cm) を多く含む
- 18 2.5Y6/3 にぶい黄 (やや濁る) シルト 黄灰色土を若干含む

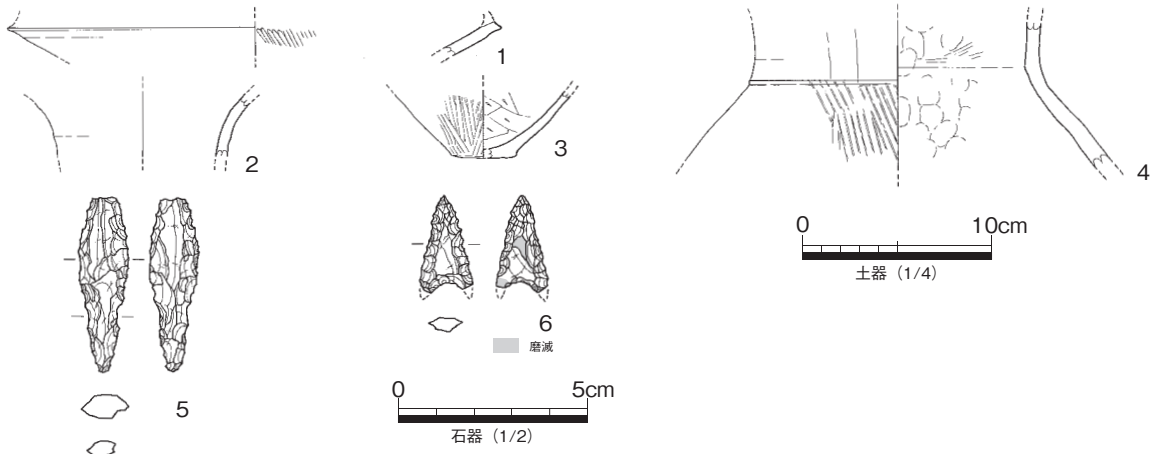


図 214 R 区 SH3305 平・断面・出土遺物

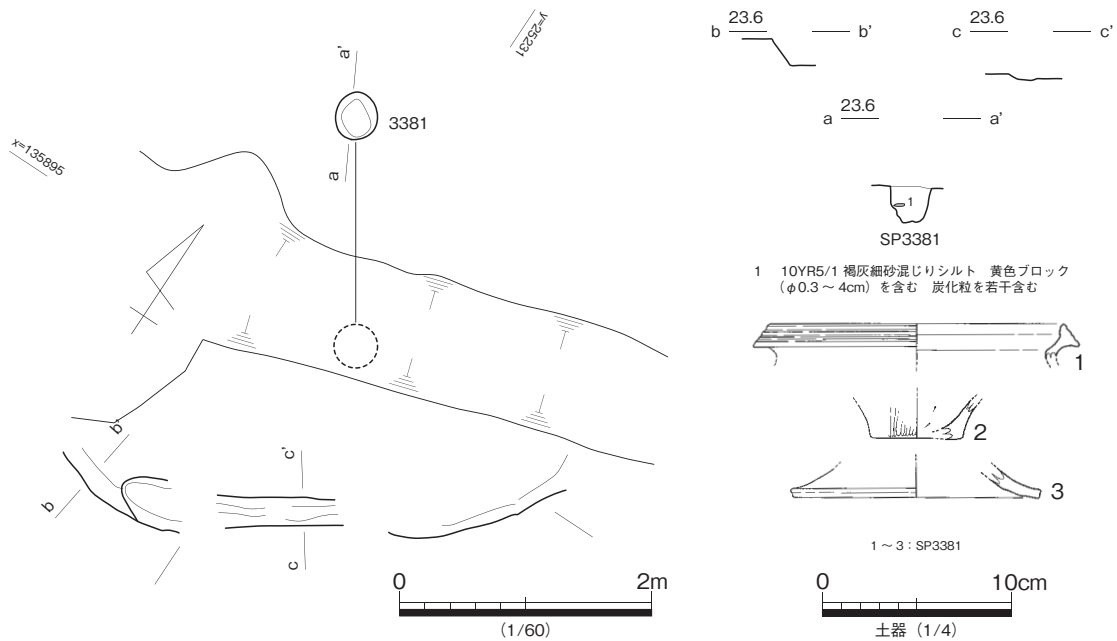


図 215 R 区 SH3307 平・断面・出土遺物

R 区 SH3305 (図 214)

R 区北部で検出した竪穴住居であり、古墳時代後期の SH3301 に切られる。南側の弥生時代後期前半期の SH3307 との切り合い関係を掴む材料は無いが、出土遺物の年代観から推測して、本住居が SH3307 に後出する可能性が高い。直径約 5.5m の円形と考えられるが貼床土の広がり確認しており、壁溝は確認していない。壁溝が残存していない状況は、ベッド状遺構が存在していた可能性を示唆しており、更に規模が大きくなる可能性を残している。

主柱穴の確認ができたのは図示する 2 基であり、その配置から 4 主柱の柱配置を推定する。住居中央には、やや広い範囲に炭化物層が広がる箇所があり、炉跡と考えられる。また、炉跡南東部を中心に土手状の高まりが確認できた。本来的には、全周するものであった可能性が高い。

出土遺物は、小破片が中心となるが、甕底部片 (図 214-3) の形態から、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したものと推定しておく。

R 区 SH3307 (図 215)

R 区北部で検出した竪穴住居であり、SH3301 に切られる。北側の SH3305 との切り合い関係を示す材料は無いが、出土遺物の年代観から、本住居が SH3305 に先行するものとして捉える。住居中央部や北部に攪乱坑によって消失する為、南辺の壁溝と壁面のみ確認しているが、隅丸長方形の平面形をもつものと考えられる。主柱穴は埋没土、出土遺物、深度などから SP3381 と、その南側の攪乱坑内にもう 1 基想定し、2 基の主柱穴として提示する。

遺物は主柱穴 SP3381 からのものが中心となるが、甕 (図 215-1.2) や小型器台あるいは高杯脚端部片 (図 215-3) 形態、住居形態などを考慮し、本住居の帰属時期を弥生後期前半中段階と推定しておきたい。

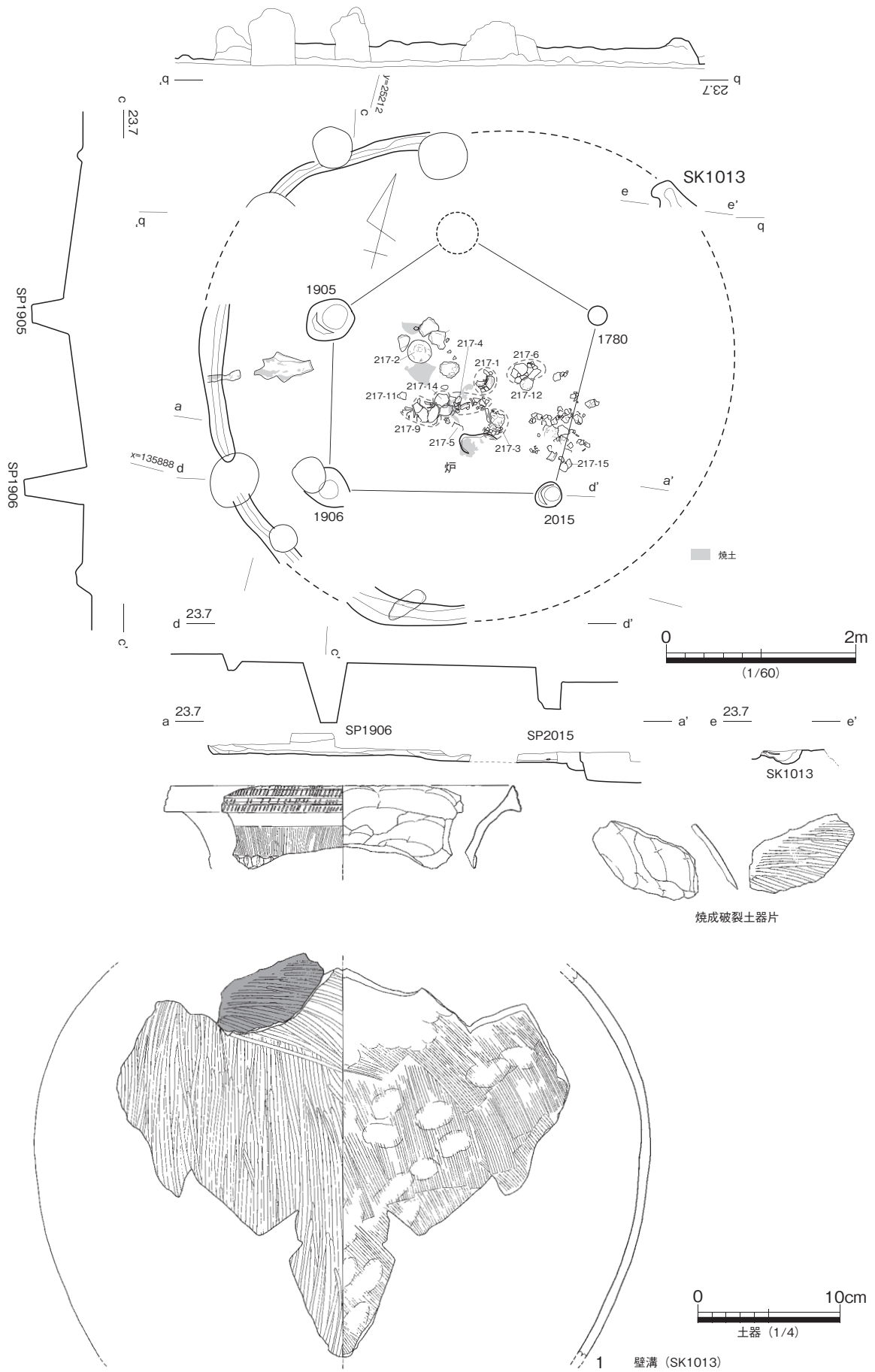


图 216 S 区 SH1038 平·断面·出土遗物 (1)

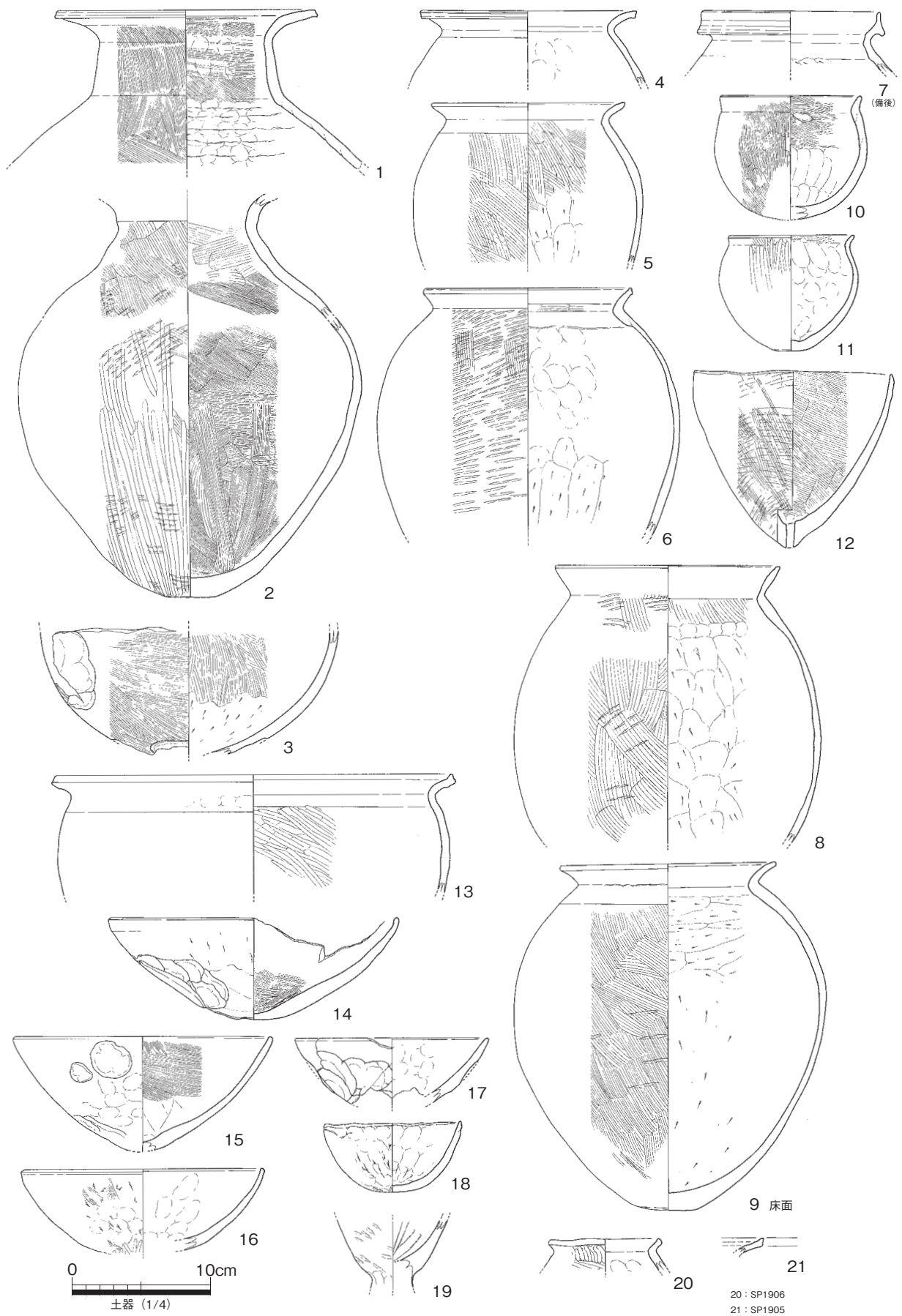


图 217 S 区 SH1038 出土遺物 (2)

S 区 SH1038 (図 216・217)

S 区中央北寄りで見出した竪穴住居である。住居北側の一部を帯状の攪乱によって消失し、南側の一部を古代の溝状遺構 SD1029 によって切られ、更に東側を弥生終末期に属する SH1040 を切る。現地調査段階では SH1040 に切り込まれると判断して調査を進めたが、出土遺物の帰属時期及び土層断面の再検討を行った結果、本住居が SH1040 に後出するものとして提示する。北東部の SK1013 は、位置関係からみて、壁溝の残欠として本住居に含める。残存する壁溝及び掘り方から推定して、直径約 5.8m の円形住居に復元できる。主柱穴は現存で 4 基であり、柱穴配置及び間隔から、攪乱部分にもう一基の柱穴を想定し、5 基の柱構造として捉える。床面中央やや南よりに炭化物で満たされる不定形の小規模な落ち込みがあり、炉跡と考える。炉跡周辺の中央の床面上には完形品を含む土器が多量に廃棄されており、その上位が地山塊を含む埋め戻し土に被覆されていることから、これらの土器群は一括資料として評価できる。

図 217-1～19 は床面中央部の土器溜り、図 217-20.21 は主柱穴から出土した土器群である。土器溜り出土資料には焼成破裂土器が多く見られる。器種は広口壺胴部片 (図 217-3) や鉢 (図 217-10.14.15.17) があり、空隙が生じる程に破損している個体がみられることから、焼成破損直後に廃棄されたと考えられる。これらの土器群の特徴からみて、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと考えておきたい。SK1013 出土の広口壺 (図 216-1) は、弥生中期後半古段階に比定され本住居の帰属時期に伴う資料ではない。口縁部内面と胴部外面には焼成破裂痕がみられ、胴部外面については色調を若干違えた小破片が接合した。

S 区 SH1040 (図 218・219)

S 区中央部北寄りで見出した竪穴住居である。古墳時代の住居である SH1034.1037.1039、弥生終末期の SH1038 に切られ、弥生終末期以前の SH1047.1064.1069 を切り込む。平面形は、隅丸長方形を呈し、2 基の主柱穴間の中央に K-1 とした長楕円形の炉跡と、そのやや東側に X-1 とした楕円形の 2 基の炉が敷設されている。北側の短辺側のみベッド状遺構を検出することができたが、断面の所見から南側にもベッド状遺構が敷設されている可能性が高い。壁面は、良好な箇所を 0.5m を測り、S 区では比較的深く掘り込まれた住居となる。住居南東部の埋没土中位には土器溜りが形成されている。土器溜りは炭化物の薄層の上位で確認しており、住居の埋め戻しが複数回に亘って行われていたと考えられる。

図 218-1～4 は主柱穴、図 219-1～14 は覆土、図 219-15～26 は土器溜りからの出土した土器である。壺胴部 (図 219-10) は、破片間で黒化層が途切れることから焼成破裂土器と考えられる。複合口縁壺 (図 219-11) は、ほぼ完形に復元される資料であり、形態や頸部突帯の属性から西部瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。円盤状の土製品 (図 219-8) の用途は不明である。

これらの土器の特徴からみて、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したものと考えたい。

S 区 SH1044 (図 220・221)

S 区南西部で見出した竪穴住居であり、古墳時代の SH1050、弥生終末期の SH1057.1058 に切られる。また、弥生前期に埋没する SD1043 と弥生中期後半の SB1104 を切る。住居床面が下位の SD1043 から広がる黒色の越流堆積物と交錯していたために床面の認定や主柱穴の検出が難航し、遺物の取り上げが西側の SH1058 出土遺物と混乱するなどの不備があることを断っておく。住居南辺を攪乱坑によって滅

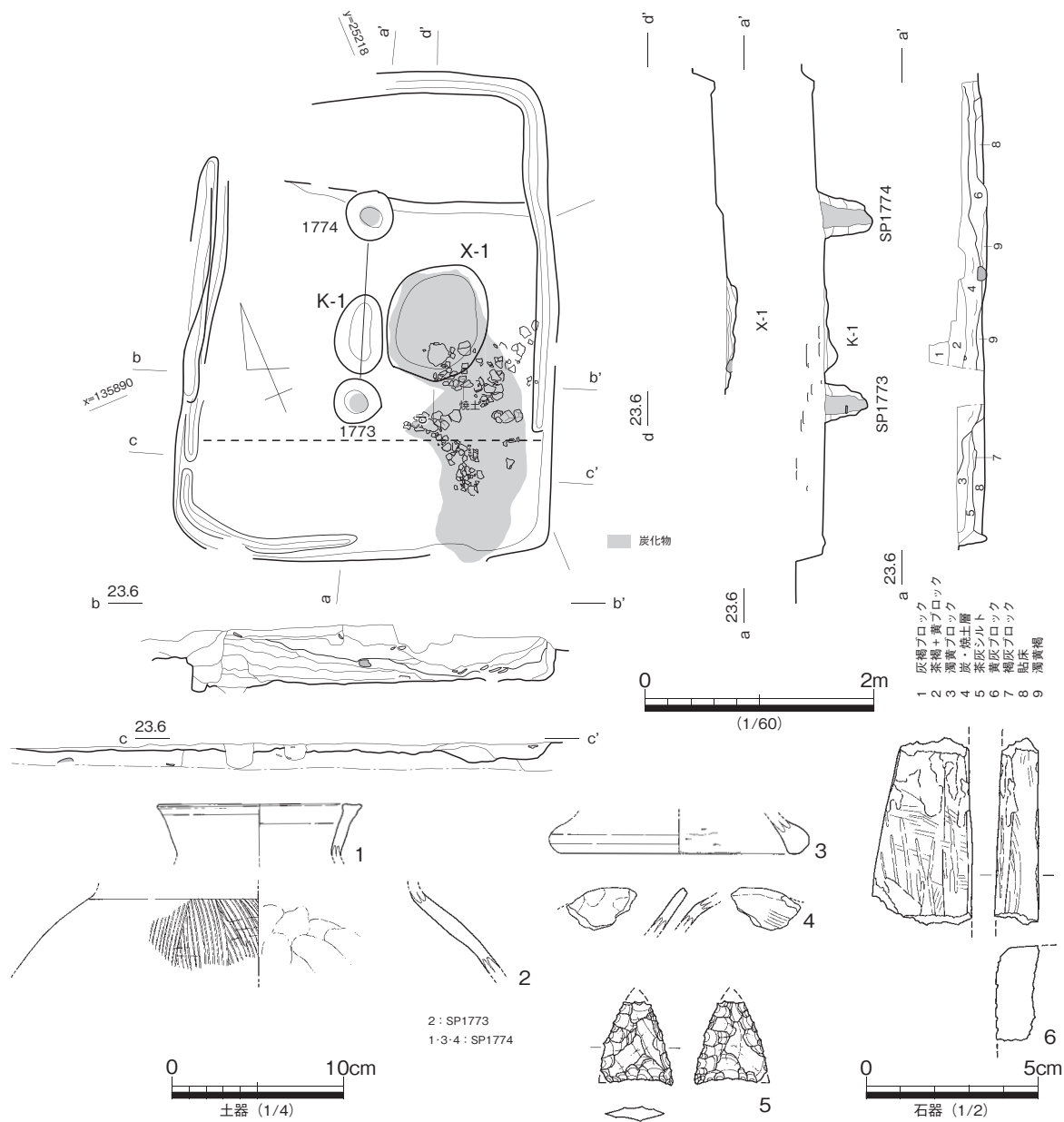


図 218 S 区 SH1040 平・断面・出土遺物 (1)

失するが、直径約 6.2m の円形プランの復元が可能であり、北側に小規模な長方形の張り出し部をもつ。主柱穴は 5 基であり、SP1850 とその南側に不定形の浅い落ち込みの SF1001 があり、炉跡と推定する。SP1850 は炭化物主体の埋没土であり、SF1001 及びその周辺には焼土・焼土塊が広がるなどの状況が見られることから炉として捉え、同時併存する 2 基の炉が機能的に区分されていたことが想定される。

図 221-1 ~ 5 は覆土、図 221-6 ~ 11 は床面、図 221-12 ~ 20 は炉、図 221-21 ~ 25 は主柱穴から出土した遺物である。床面出土遺物の一部と炉及び主柱穴土器には大きな時間差が認められ、覆土・床面出土遺物の多くは SH1058 に帰属するものと考えられる。ここでは帰属することが確認される炉及び主柱穴出土土器から、本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定しておきたい。この時期比定が正しいものであるならば、本遺跡における張り出し付住居の初現期の資料となる。図 221-5 は明瞭な接合痕を留める異形の鉢である。

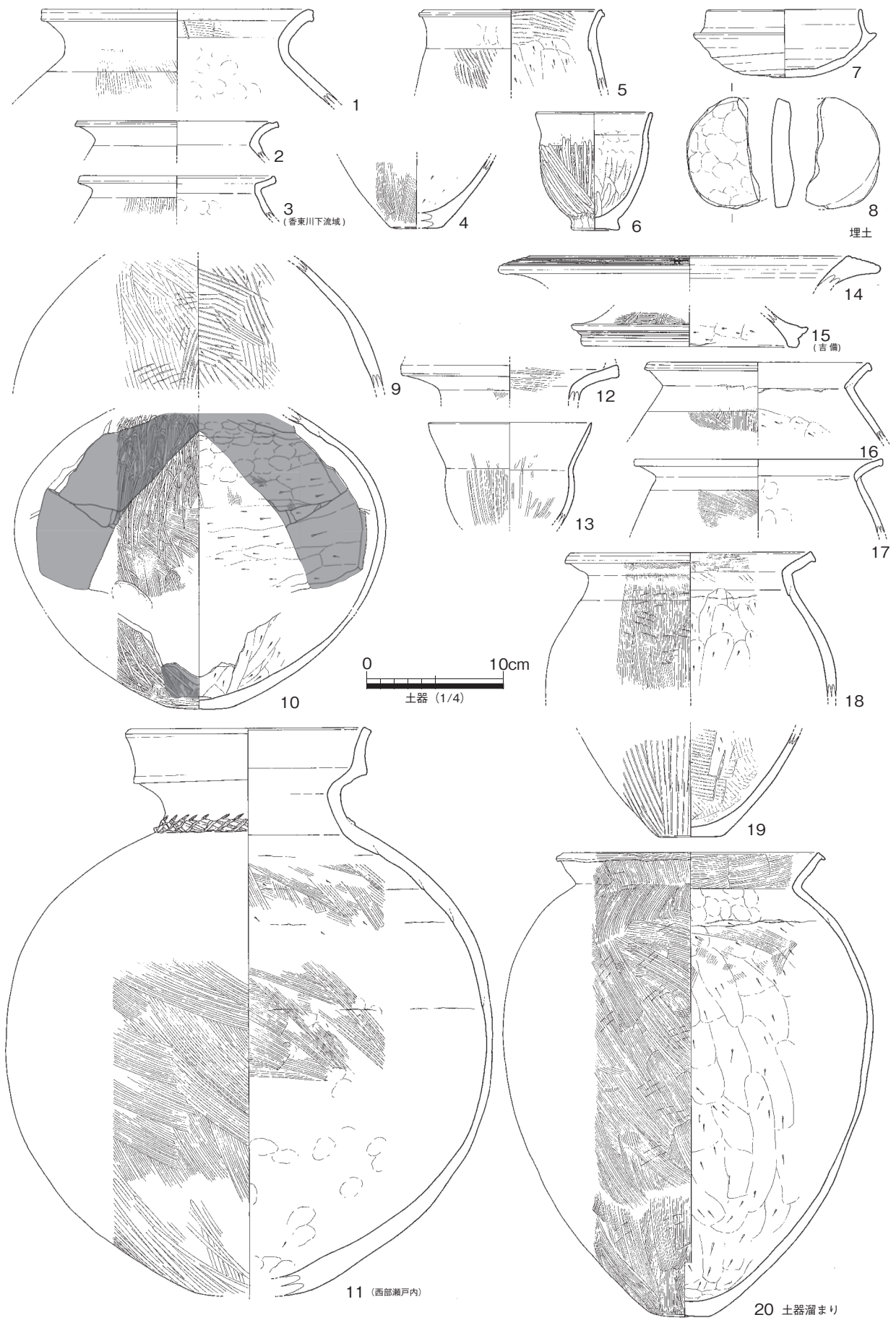


図 219 S区 SH1040 出土遺物 (2)

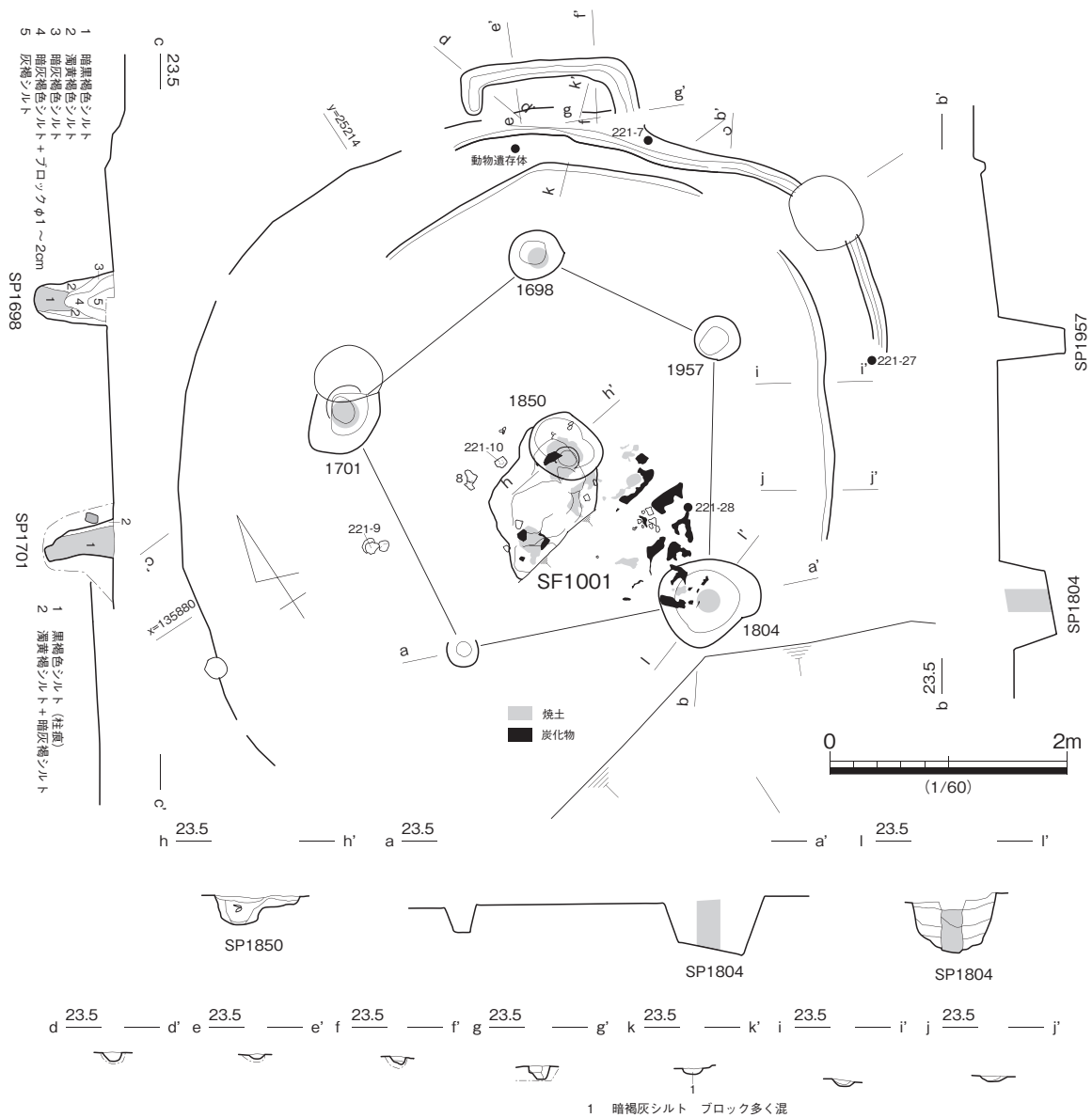


図 220 S区 SH1044 平・断面

図 221-26 はサヌカイト製の打製石庖丁であり、側面片側に自然面を留める。本住居の帰属時期からみて、共時性のある遺物として評価することが可能である。図 221-27,28 碧玉製管玉片である。SH1058 と重複がみられなかった住居東部の覆土から出土しており、コンタミネーションの可能性は低いことから本住居の廃絶時に投棄された可能性が高い。

S区 SH1047 (図 222)

S区中央部で検出した竪穴住居であり、古墳時代のSH1037.1034に切られ、弥生終末期以前のSH1040.1063.1069を切り込む。住居東側の大部分が後出するSH1034.1037で消失しており、床面の残存は西側の壁際において辛うじて確認した。支柱穴は図示する2基から構成されるが、西側支柱穴SP1535の十分な記録作成が行えていない。また、炉跡が想定できる部分の床面は残存しないため、炉

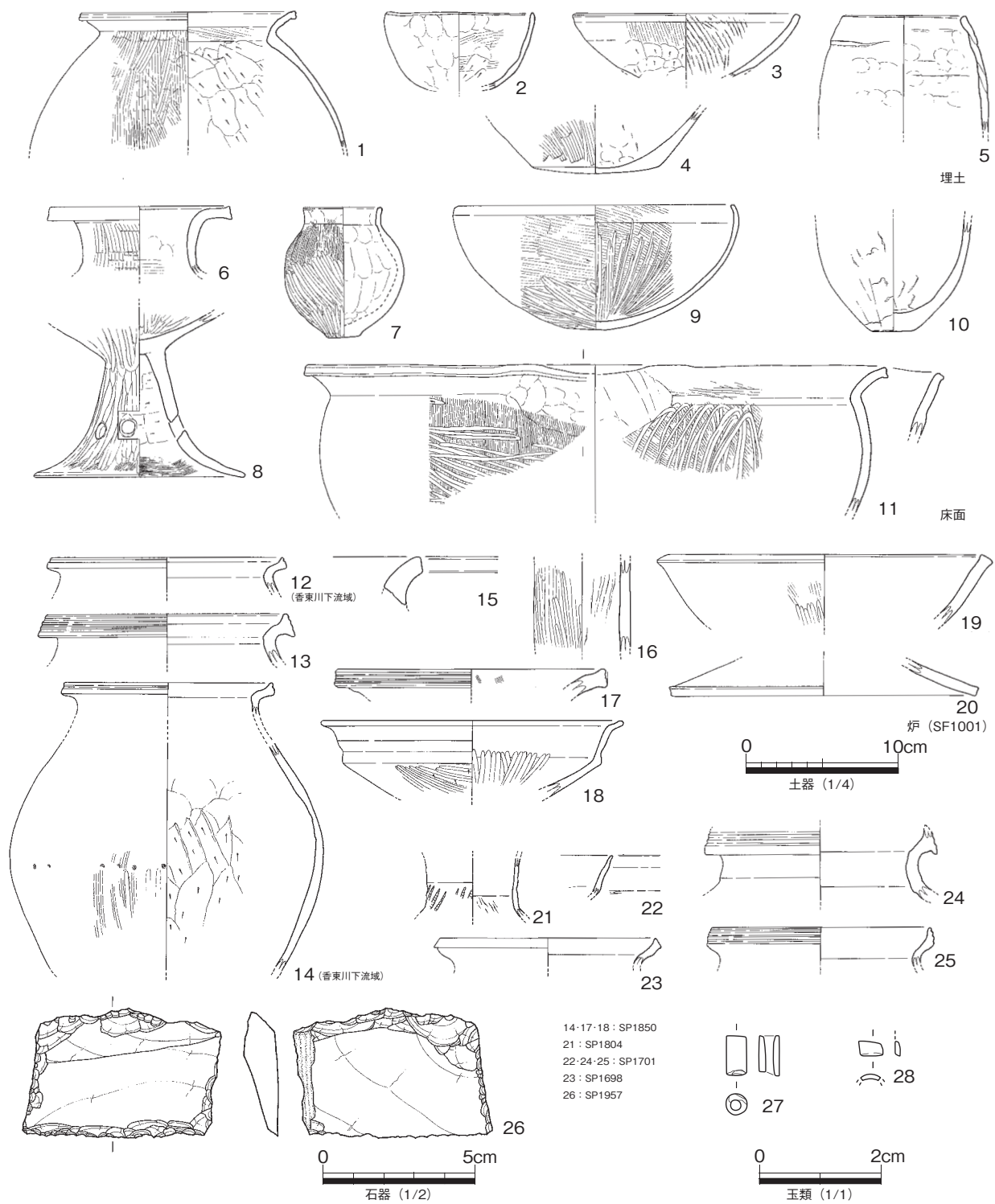


図 221 S 区 SH1044 出土遺物

の配置及び形態は不明となる。出土遺物の中で図 222 - 4 の甕の形態から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。

S 区 SH1052 (図 223・224)

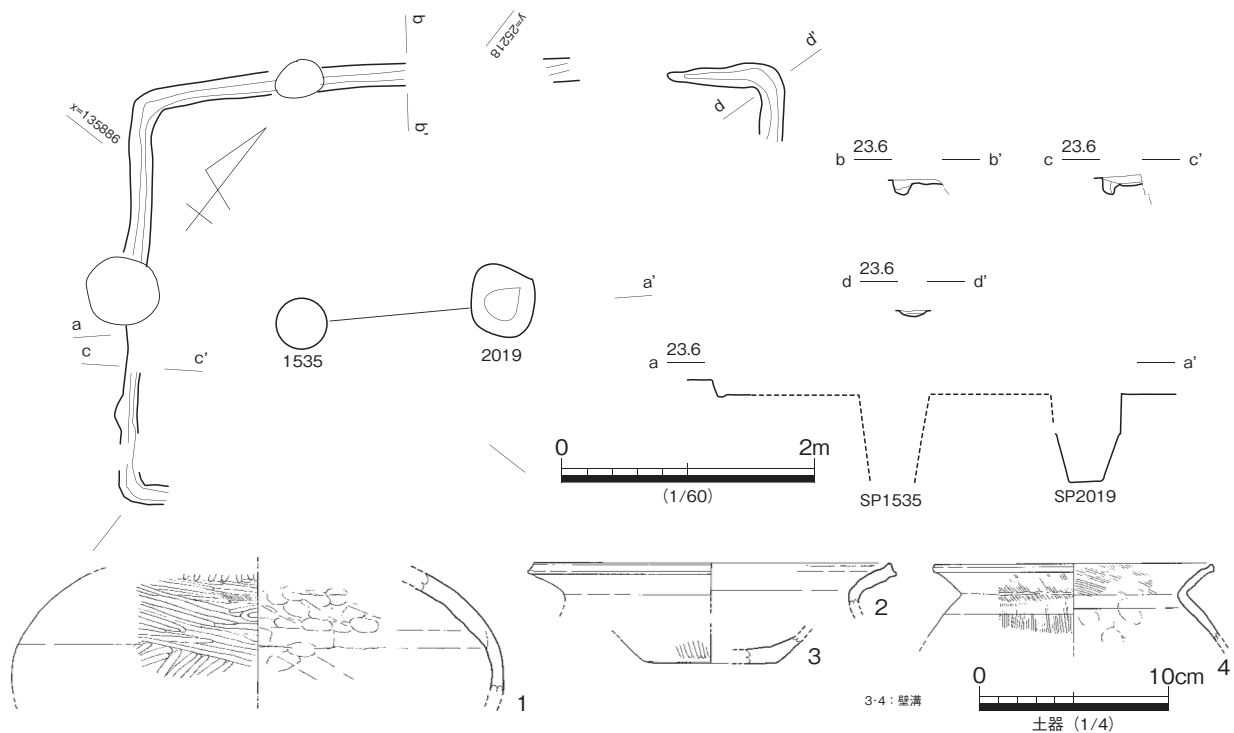


図 222 S 区 SH1047 平・断面・出土遺物

S 区北東部で検出した竪穴住居である。古墳中期の SH1034.1037 に切られ、弥生終末期以前の SH1066.1063 を切り込む。平面形は 3.7 × 2.9m の小形長方形を呈し、主柱穴はもたない。壁面の立ち上がりは、約 0.3m と良好に遺存しており、内部は基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多く含む土層で埋め戻されている。壁溝はほぼ全周するとみられ、床面南西隅には細かな焼土塊、南隅には土器群が廃棄されている。焼土塊の集中は、この場所での炉などを示す被熱ではなく、二次的に移動しているような状態であった。

覆土及び床面から出土した鉢（図 223-11.12.17）や高杯（図 223-7）などから、本住居は弥生終末期中段階に廃絶したものと考えたい。図 223-5 は壺の肩部片であり、外面に連続して剥離した焼成破裂痕が見られる。図 224-2 は蛇紋岩製の勾玉で、頭に比べて尾が細く尖る小型品である。住居床面から出土しており、本住居に伴う遺物と考えられる。図 224-3 は覆土から出土した滑石製白玉であり、上層遺構からの混入品である。

S 区 SH1057 (図 225 ~ 227)

S 区南西部で検出した竪穴住居であり、古墳時代の SH1050 に切られ、弥生終末期の SH1058、弥生前期に埋没する SD1043 と弥生中期後半の SB1104 を切る。現地調査では当初 SH1058 との先後関係の把握に手間取り、壁溝は南西部しか平面的に検出できていない。現状からは直径約 6.2m の円形住居に復元でき、主柱穴は検出した 3 基の配置から、5 基と推定できる。中央には炭化物が直径約 0.7m の範囲に集中する小規模な落ち込みがあり、炉跡と判断できる。埋没土は、基本層序Ⅳ層起源の小ブロックが多く含まれるもので埋め戻し土と見られる。炉周辺の床面上には、多数の土器が土器溜まり状に廃棄されており、上位と下位に大別して取り上げた。

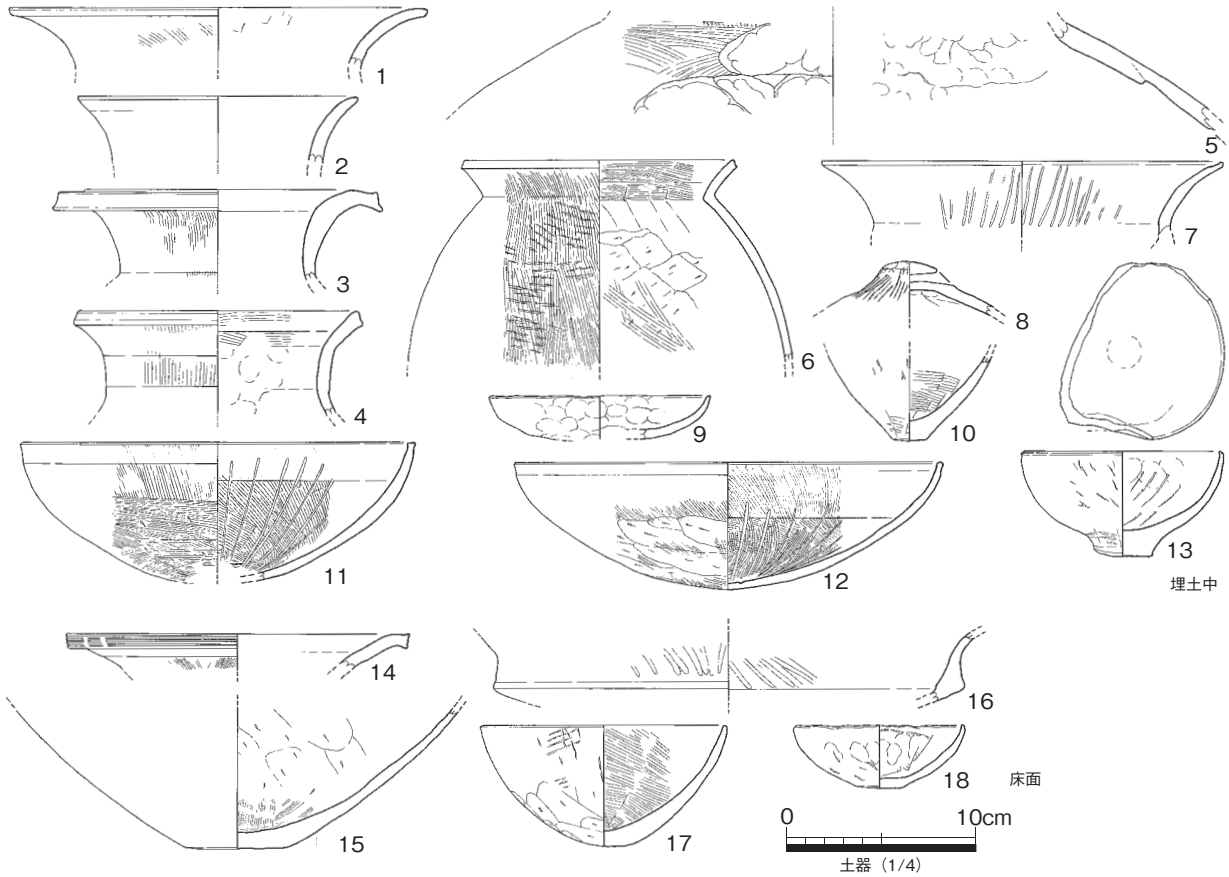
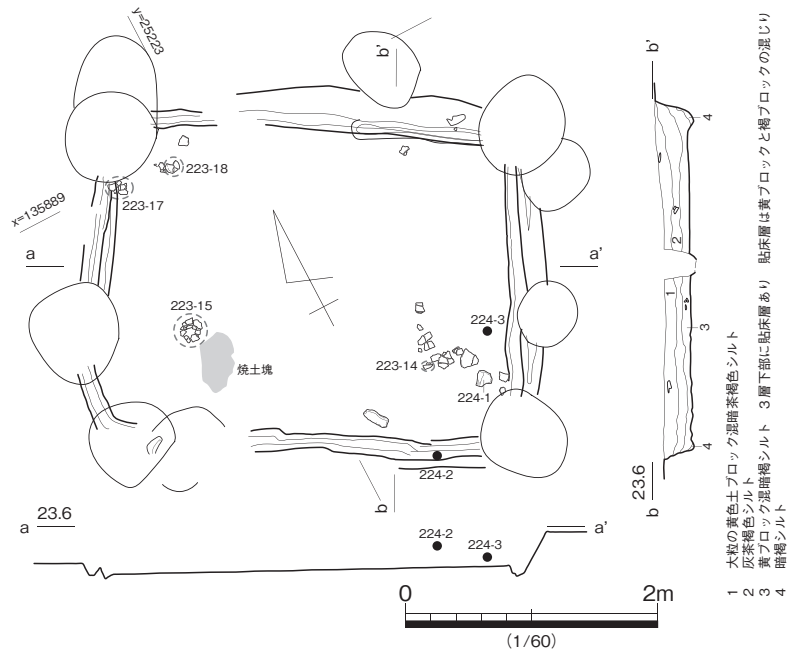


図 223 S区 SH1052 平・断面・出土遺物 (1)

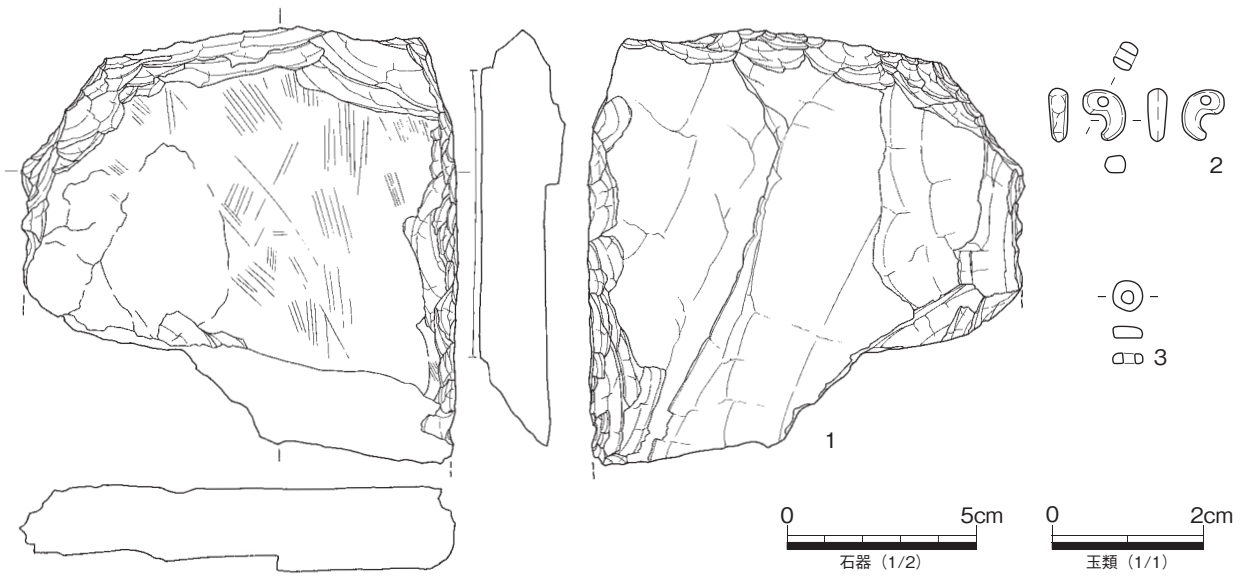


図 224 S区 SH1052 出土遺物 (2)

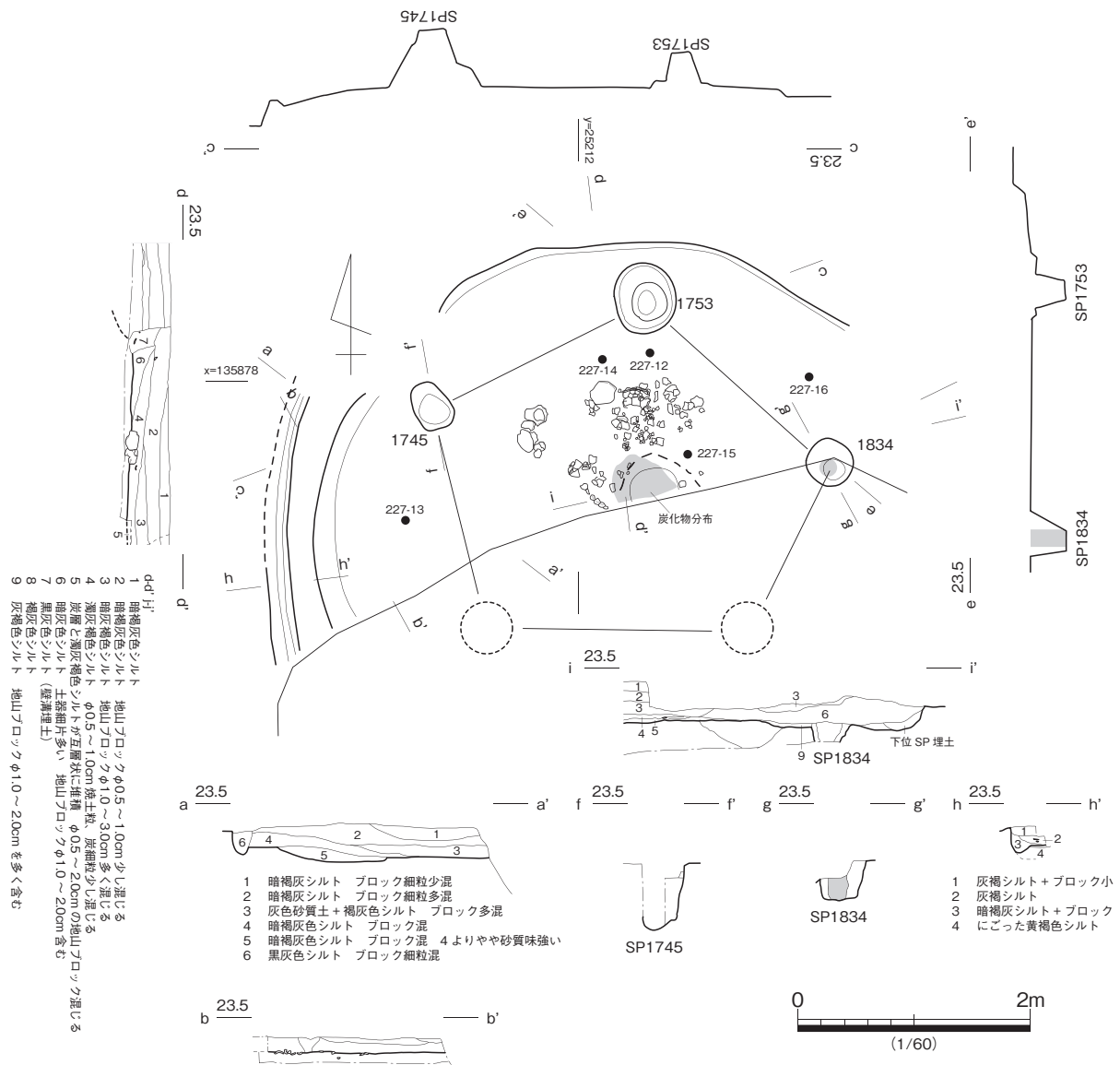


図 225 S区 SH1057 平・断面

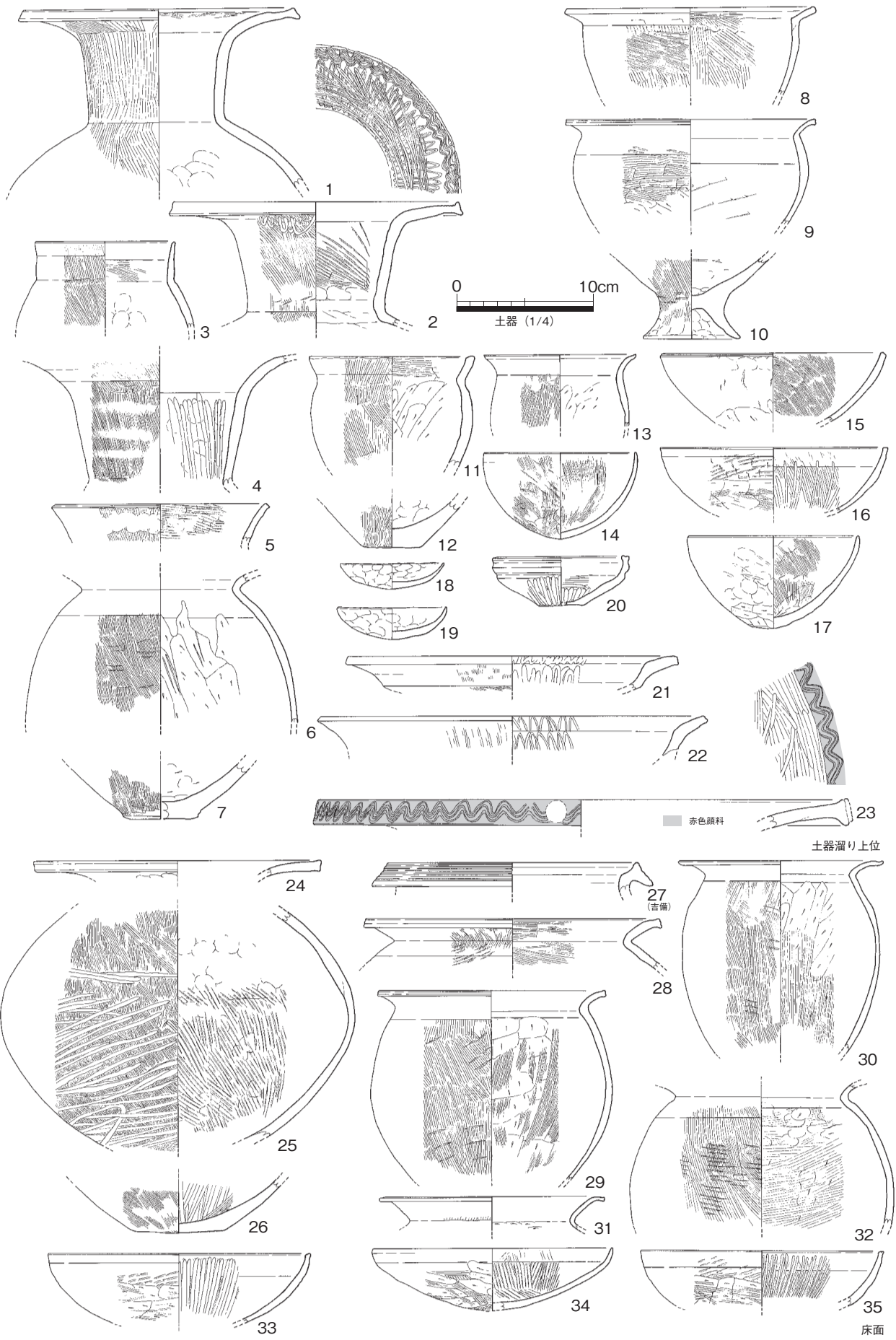


图 226 S区 SH1057 出土遺物 (1)

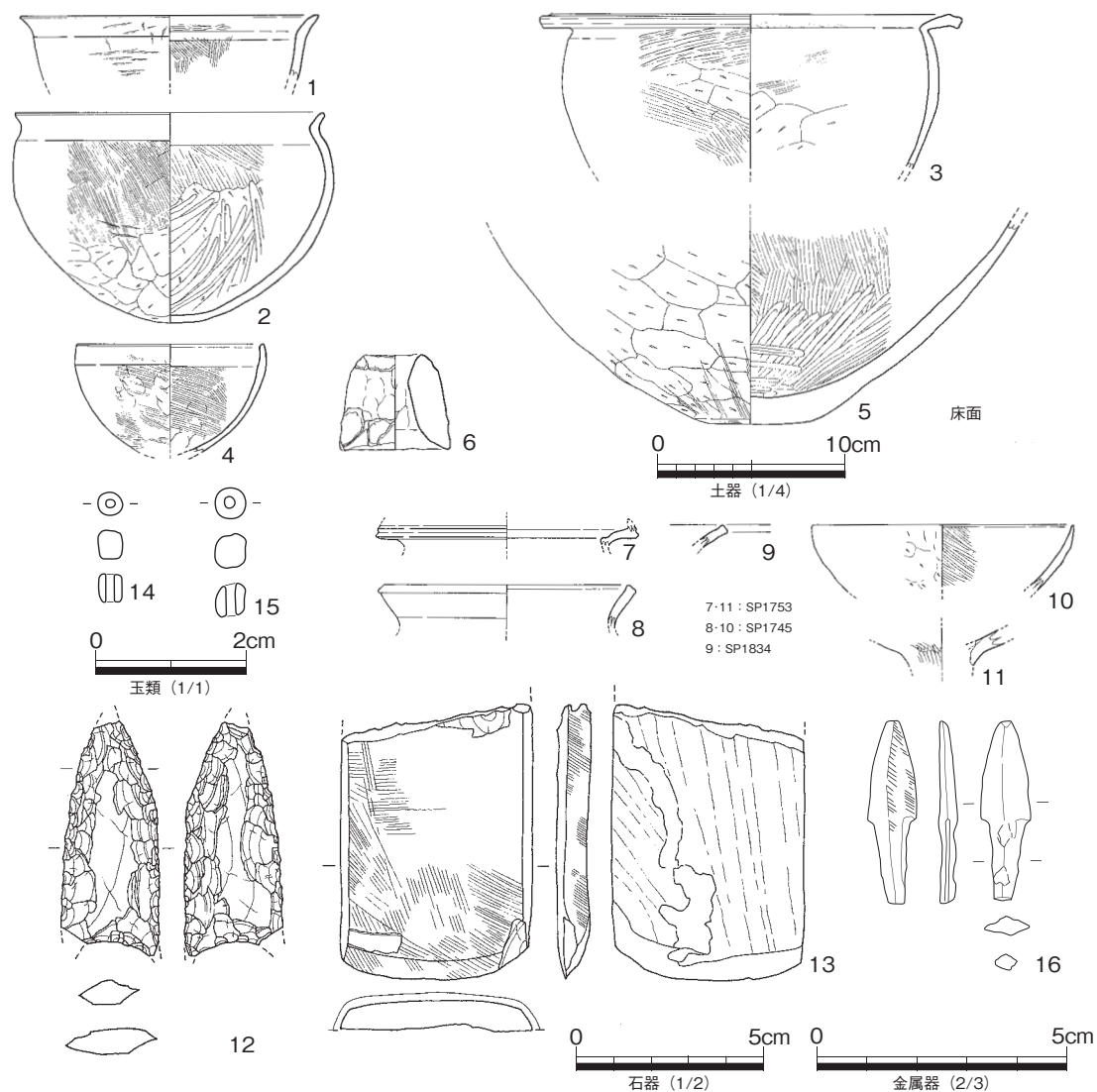


図 227 S 区 SH1057 出土遺物 (2)

図 226-1 ~ 23 は上位土器溜まり、図 226-24 ~ 35、図 227-1 ~ 6 は床面として取り上げた土器群である。また、図 227-7 ~ 11 は主柱穴からの出土土器である。土器溜まりからの出土土器は、一部に後期前半期の混入品を含むものの、広口壺 (図 226-1.2) 甕 (図 226-30.31) 鉢 (図 226-14.34.35、図 227-4) などからみて時期的に弥生終末期新段階にまとまる。出土状況からこれらの遺物は住居廃絶時に一括廃棄されている可能性が高いことから、本住居の廃絶時期を弥生終末期新段階と推定しておきたい。

図 227-12 の大型サヌカイト製無茎鏃は覆土からの出土であり、時期的にみて混入品と考えられる。図 227-13 の結晶片岩製扁平片刃石斧は覆土からの出土であり、土器群に伴うものとは考えられない。図 227-14.15 はガラス小玉であり、14 はトレンチからの出土で層位不明、15 は炉の周辺の床面から出土した。図 227-16 の銅鏃は、住居東部の覆土から出土した。身部の断面形状は菱形に近いが、鋳合わせが不良で整ったものではない。研磨は身部のみ確認でき、茎部側面には鋳合わせにともなうバリ状の痕跡が明瞭に残る。

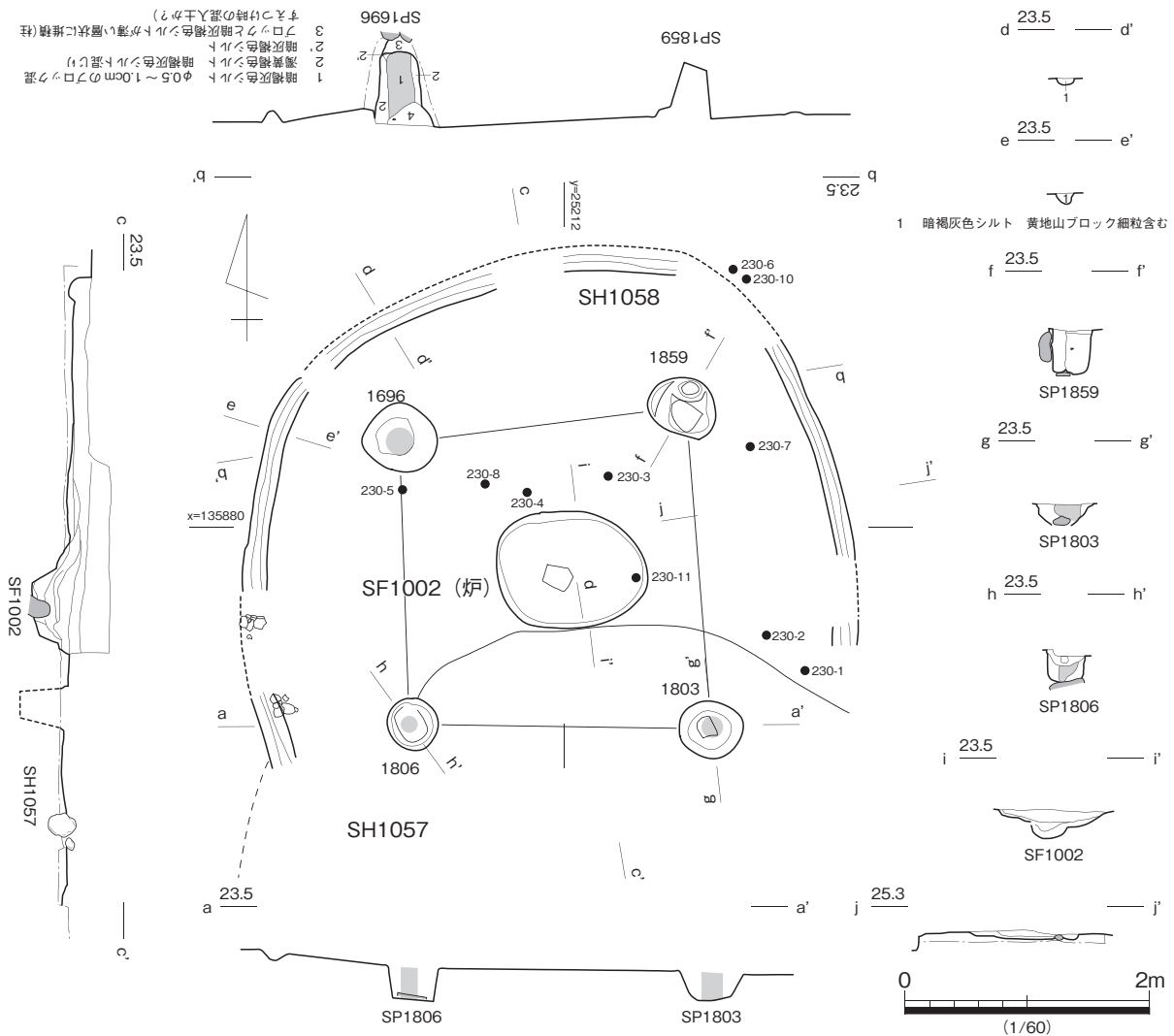


図 228 S 区 SH1058 平・断面

S 区 SH1058 (図 228 ~ 230)

S 区南西部で検出した竪穴住居であり、SH1044 を切り、SH1057 に切られる。住居南部が SH1057 に消滅するが、直径 5.1m 程の円形住居に復元でき、床面中央に炉跡 (SF1002)、その周囲に図示した 4 基の主柱穴を配す。炉跡 SF1002 は底面のほぼ中央に砂岩製角礫を配置しており、炉使用時の支脚が遺棄されたものと考えられる。前述のとおり、現地調査で SH1044.1057 との切り合い関係の把握が難航したことで遺物取り上げが充分に行えていないが、出土遺物は住居プランを確定した後に取り上げた資料に限って提示している。図 229-1 ~ 19 は覆土、図 229-20 ~ 23 は床面、図 229-24 ~ 28 は炉、図 229-29 ~ 33 は主柱穴から出土した土器群である。炉及び主柱穴出土遺物が古相を示すが、床面出土の鉢 (図 229-20.22) や西側壁溝から出土した壺 (図 229-23) の形態から、本住居は弥生終末期古段階に廃絶したものと考えたい。図 229-10 の甕は、摩滅した砂粒を多く含む胎土をもつ搬入品である。また、頁岩の可能性のある砂粒が含まれることや締りの弱い頸部など四国南西部から搬入品の可能性もある。時期的には後期前半期に遡る可能性が高く、本住居東側の SH1044 に伴う資料かもしれない。図 230-1 ~ 4 はガラス小玉であり、すべて床面から出土している。図 230-5.6 は銅鏃であり、5 は住居東部の床面から、6 は住居北東部の壁溝の上部と推定される位置から出土している。図 229-5 は身部から茎部までの完存

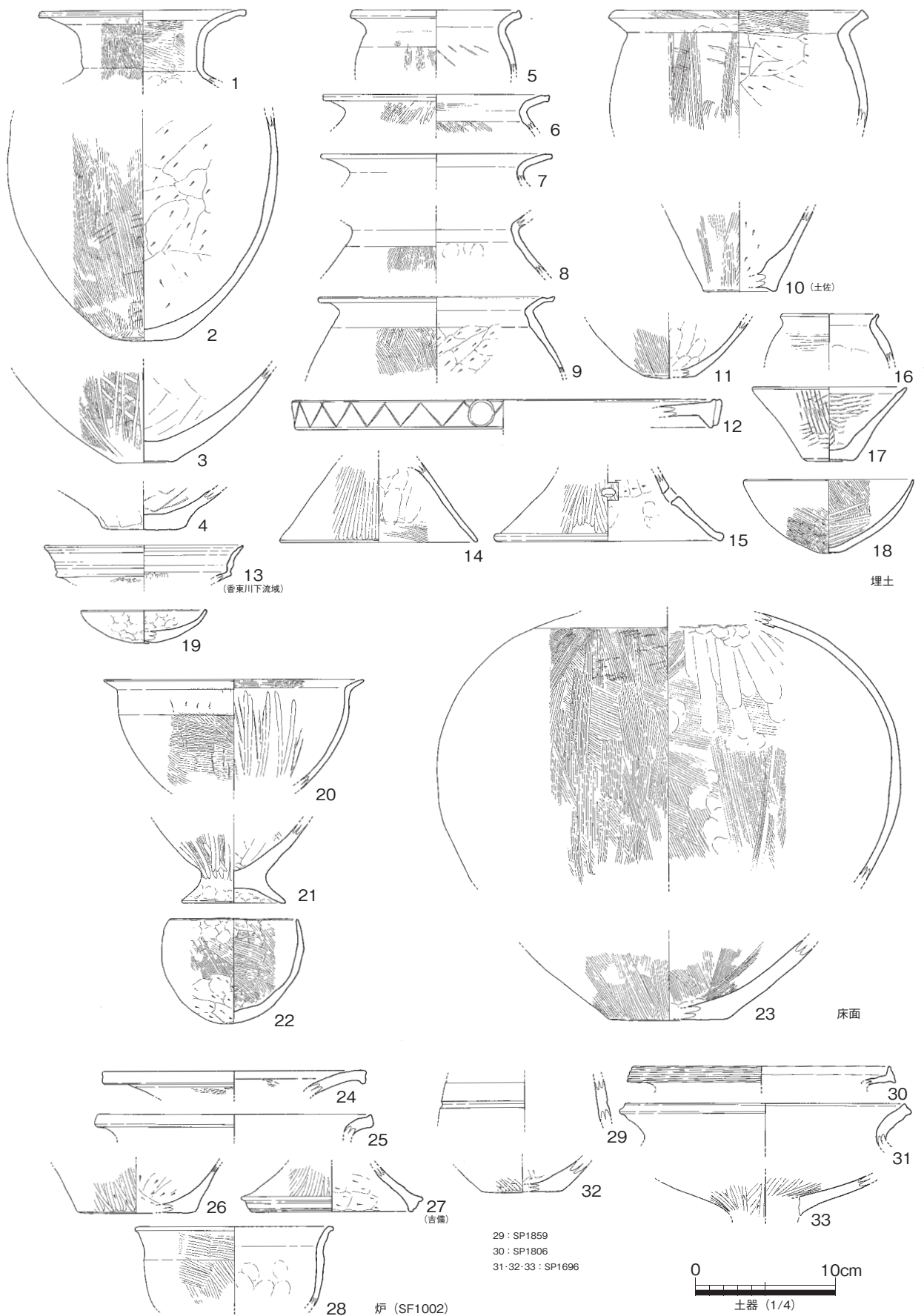


图 229 S 区 SH1058 出土遺物 (1)

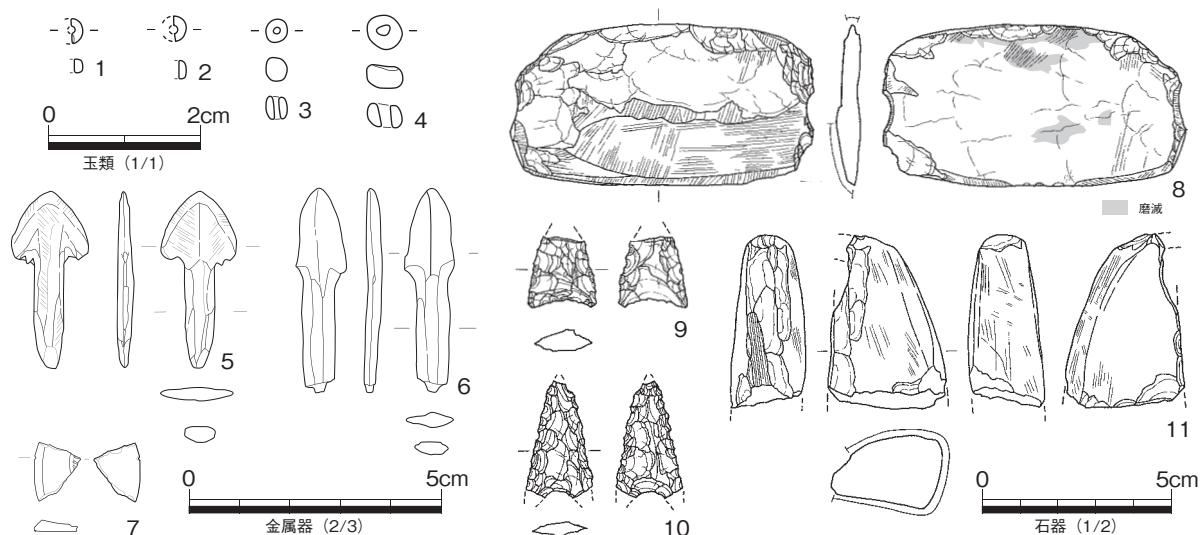


図 230 S 区 SH1058 出土遺物 (2)

品であるが、逆刺を除いたほぼ全体に丁寧な研磨が施されている。図 230-6 は茎部下端に若干の欠損が認められるものの、完形に近い状態と考えられる。茎部の研磨が不十分であることに起因して、身と茎の境の関も不明瞭となっているが、この部分で茎部上面の平滑面が途切れ身部に鑄状の稜線が見られることから判断して、膨をもつ有茎三角形鏃と考えられる。図 230-7 は鏡片であり、素文の鏡縁の内側に櫛歯文帯が辛うじて残存する。周縁及び断面に研磨は確認できず、分割時の破断面を留めている。鏡縁と櫛歯文との構成から、連弧紋鏡と考えられる。図 230-8 は粘板岩製の磨製石庖丁である。研磨は刃部と両側縁のノッチを中心としたもので、素材の主要剥離面を明瞭に留める。床面から出土しているものの、本住居下位に存在する弥生前期溝 SD1043 からの混入品と考えられる。

S 区 SH1060 (図 231 ~ 233)

S 区西側で検出した竪穴住居である。平面形は方形に近いが、図示した 2 基の主柱穴主軸となる南北方向がやや長く隅丸長方形となる。4 周にベッド状遺構が巡り、壁溝を重複して検出しているが、内側の壁溝はベッド状遺構を除去した段階で検出しており、主柱穴の移動は見られないものの、やや小形の住居が拡張されたものとする。従って、ベッド状遺構は拡張段階で敷設されたと考えられる。ベッド状遺構内側の床面直上では、炭化材及び炭化物の集中と焼土塊をやや多く確認しているが、消失家屋と認定できるような状況ではない。廃屋時に一部の部材を焼却した可能性もある。炉跡は主柱穴間のラインの東側にあり土手状の周堤が作り付けられている。検出段階では、周堤内部に崩落した状態で細かな焼土塊が密集して見られた。焼土塊の状況は、恰も古墳時代以降の竈に見られる崩落した天井部に極めて類似する。周堤より上部にも炉に伴う構築物が存在したのであろう。

土器等の遺物は、炉跡内及びその周囲の床面上を中心にして出土している。覆土と床面出土遺物に大きな時間幅はみられない。鉢 (図 232-9.21.22) や甕 (図 232-16.18) の形態から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておく。図 233-4 は住居北西部のベッド状遺構上面から出土した銅鏃である。鏃身部は膨らのある長三角形を呈し、深い逆刺をもつ。研磨は身部を中心に施され、茎部はほぼ省略され側縁に鋳バリ状の細い突帯が残存する。

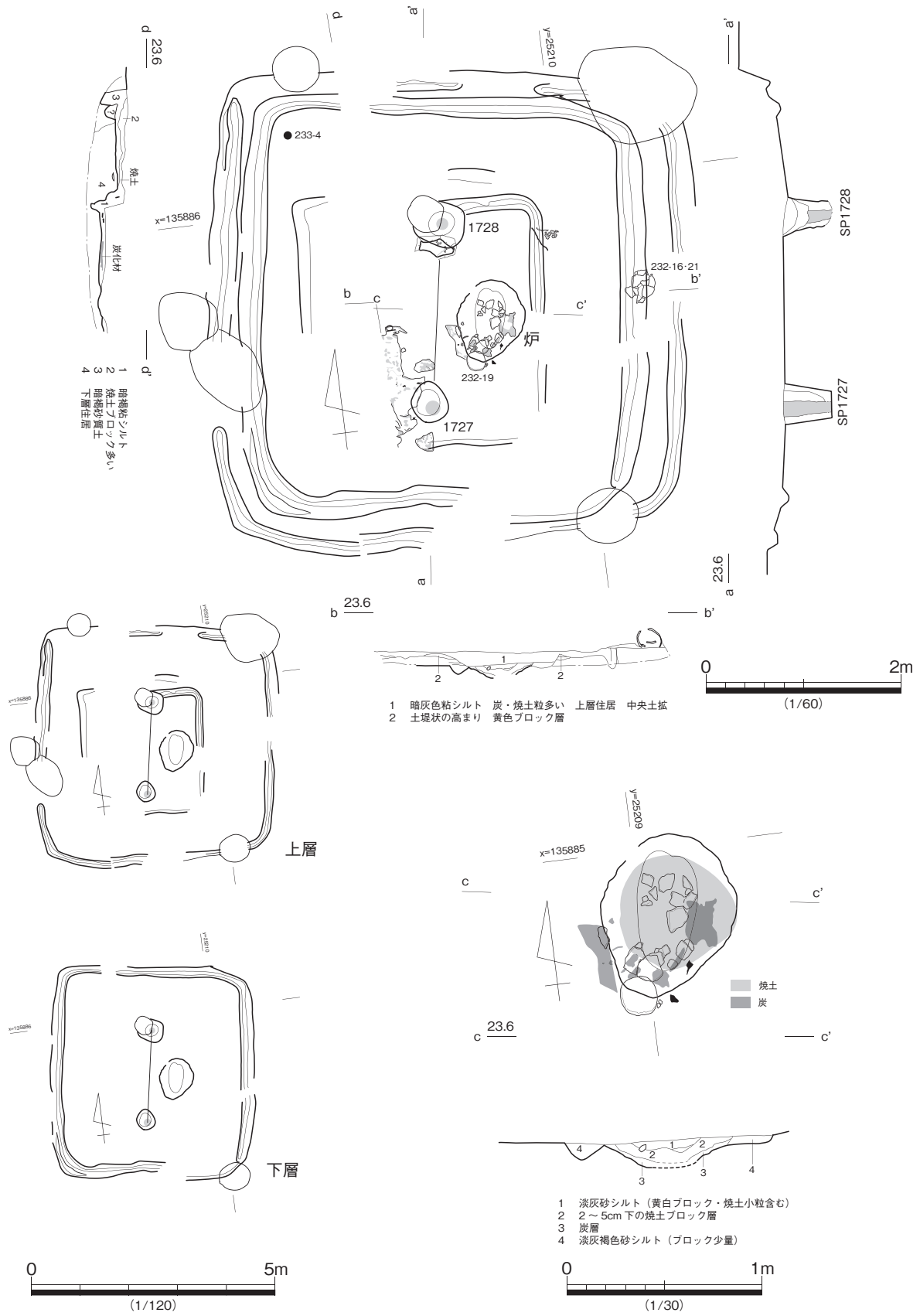


図 231 S 区 SH1060 平・断面

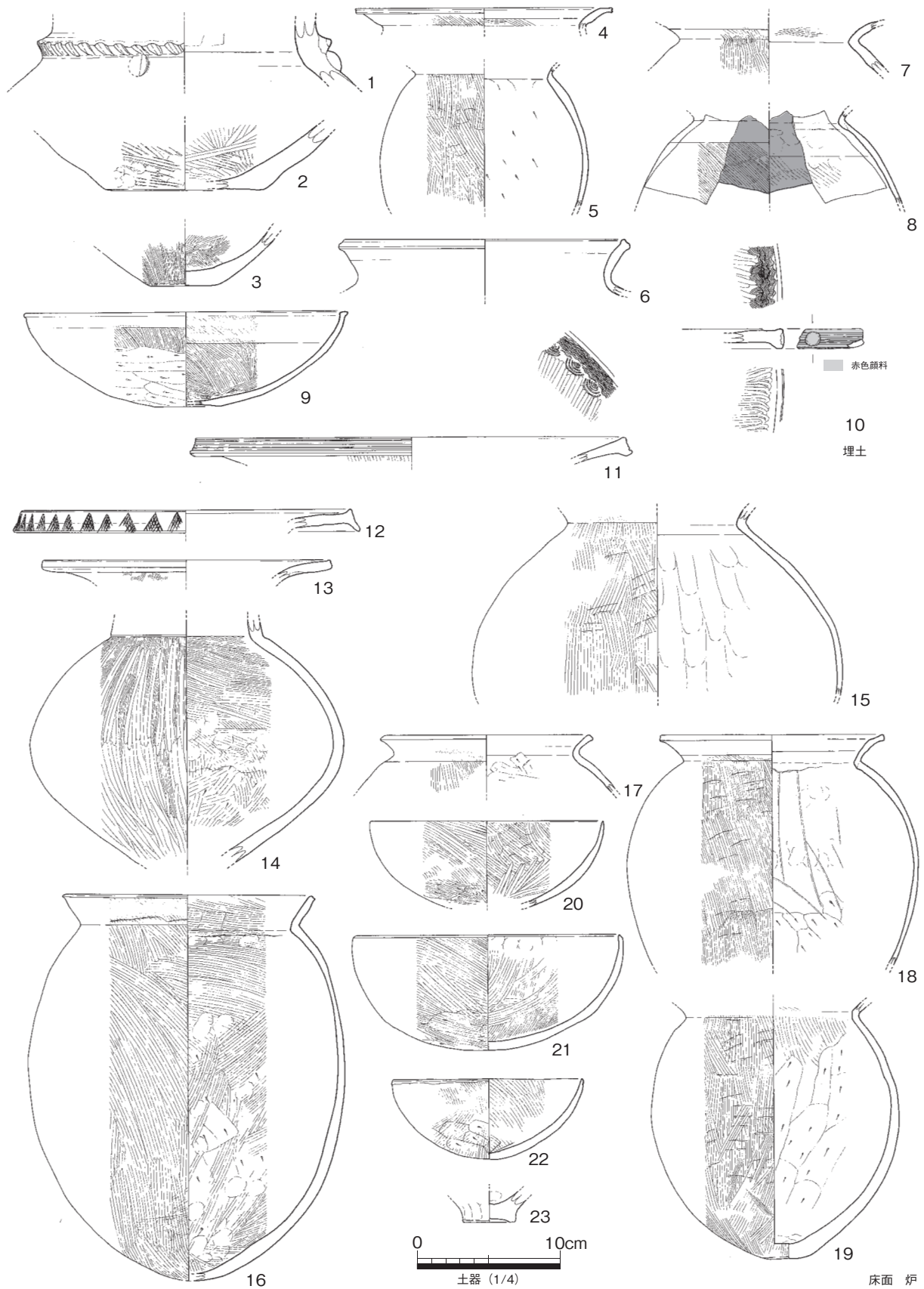


图 232 S区 SH1060 出土遺物 (1)

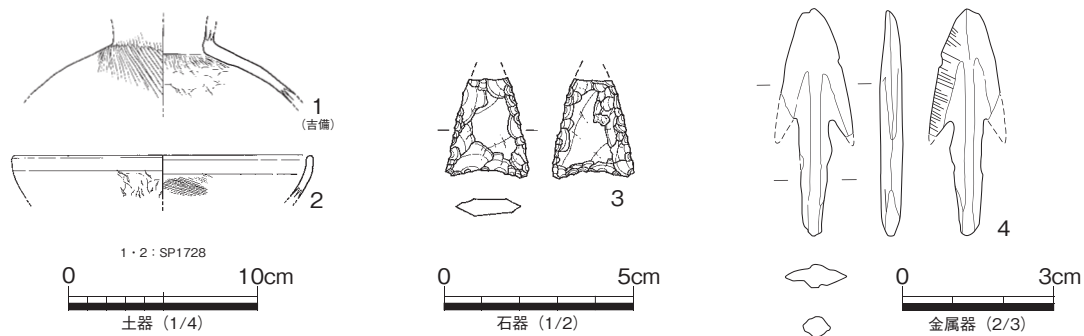


図 233 S 区 SH1060 出土遺物 (2)

S 区 SH1061 (図 234・235)

S 区北東部で検出した竪穴住居で一辺が約 5.2m の隅丸方形を呈する。上層を古代の掘立柱建物 SB1111、7 世紀後半代の SH1056 に切られる。4 周に盛土によるベッド状遺構をもち、その内側のコーナー部に 4 基の主柱穴を配置する。北東隅柱 SP1717、南東隅柱 SP1718 では、根石と見られる拳大かそれよりやや大きな砂岩礫が充填されている。全ての主柱穴で柱状の痕跡を確認したが、小ブロックが多く確認できることから、廃絶時に柱材を全て抜き取ったものと考えられる。住居立ち上がりは良好な箇所約 0.5m を測るが、壁際の多くで壁材痕と見られる変色部を確認している。埋没土は全て基本層序 IV 層起源の小ブロックを多く含むことから、一度に埋め戻された可能性が高い。炉跡は 2 基あり、住居中央に円形ピットである K-2、それに接した東側に隅丸長方形の K-1 を敷設する。K-2 は少量の炭化物を含むブロック土で埋没しているが、長方形の K-2 は底面全体に炭化物の薄層が認められる。また、K-1 周辺の床面では、K-2 を中心に広がる形で炭化物層が見られた。

図 234-1～10 は覆土、図 234-11～15 は炉 (K-1)、図 234-16 は床面、図 235-1～3 は主柱穴から出土した土器群である。覆土出土の甕 (図 234-4) のような一部古墳前期前半段階まで下る資料を含むが、炉を含めた住居形態を考慮するとこれらは混入品と理解することができる。ここでは、広口壺 (図 234-11) 台付鉢 (図 234-8.15) 高杯 (図 234-10) の形態から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。図 235-6 は銅鏃の身部片とみられる。刃部は一側縁にのみ残存しているが、あまりに扁平な断面や復元される法量が大型となることなどから、武器型青銅器の切先付近の転用途上品である可能性も考慮しておく必要がある。

S 区 SH1063 (図 236～239)

S 区中央部で検出した竪穴住居跡である。上層を古墳時代の SH1033.1034.1037、弥生終末期の SH1052 に切られ、弥生後期後半以前の SH1064.1066.1069 を切り込む。古墳前期前半期と推定した SH1047 との切り合い関係は、古墳中期以降の SH1034.1037 の存在によって明確にはできなかった。平面プランは南北方向がやや短いもののほぼ方形を呈し、4 周にベッド状遺構を敷設するが、南東隅が幅約 1m 途切れる。主柱穴は図示した 4 基であり、床面中央に焼土塊が多く含まれる小ピットがあり、炉跡と判断する。住居の立ち上がりは良好な箇所約 0.6m を測り、埋没土は基本層序 IV 層起源の小ブロックを含む埋め戻し土を除去すると、床面上に層厚約 0.2m を測り焼土塊・同粒、炭化材を多く含む消失家屋を示す土層が現れる。

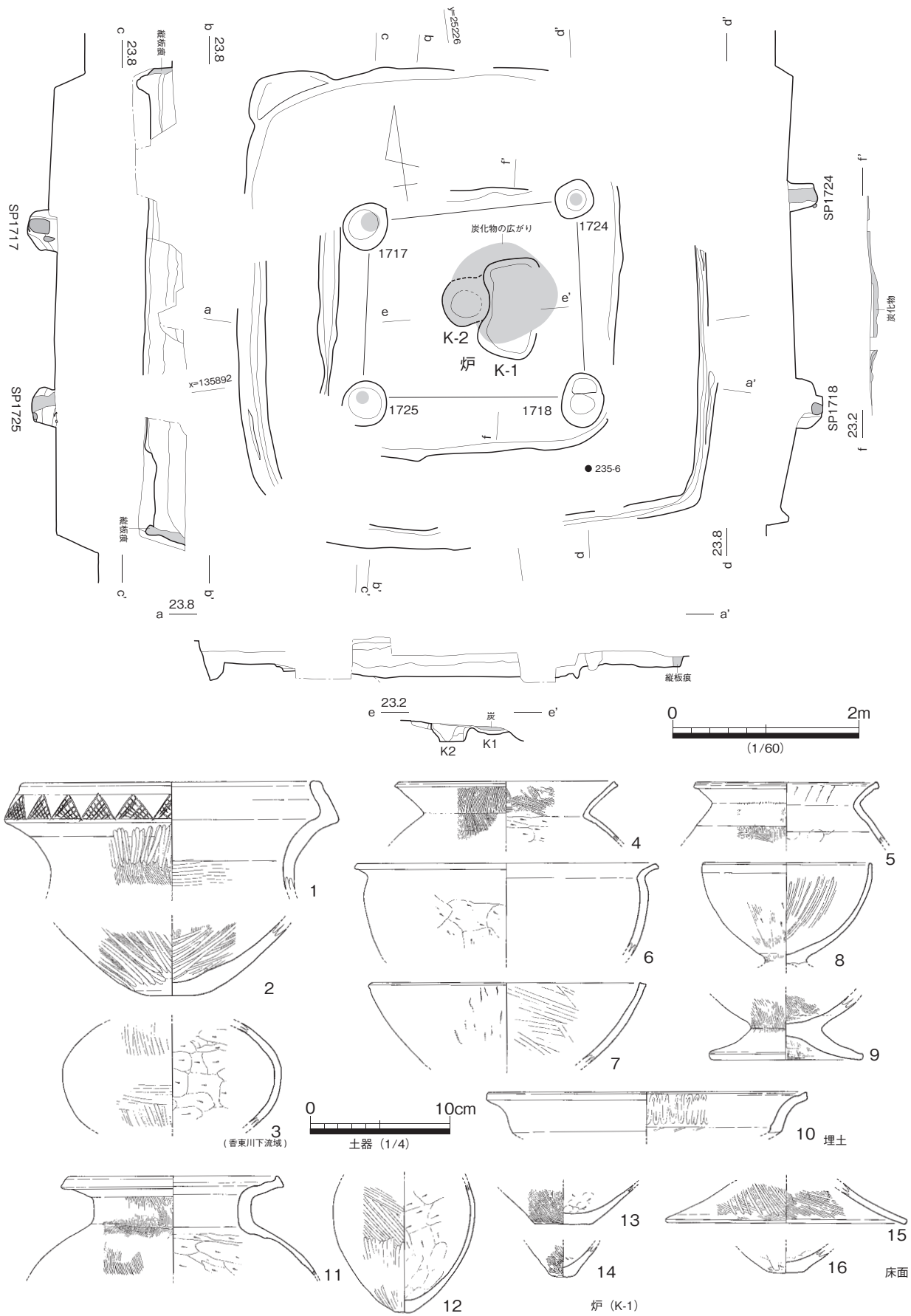


図 234 S 区 SH1061 平・断面・出土遺物 (1)

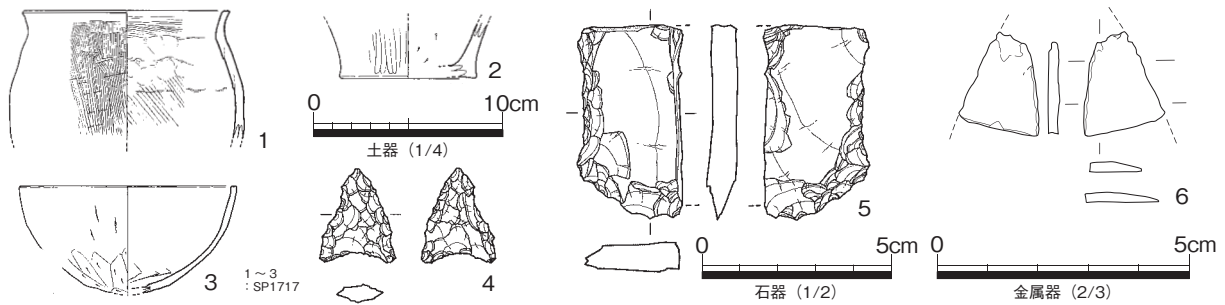


図 235 S 区 SH1061 出土遺物 (2)

炭化材には、細身の垂木と考えられるものに加えて、各主柱穴の間のベッド状遺構に並行して見られるものや、住居主軸方向に合致した形で中央に見られる大形のものがあり、梁や棟木を含む可能性が高い。また、ベッド状遺構が途切れる南西部には大形で板状を呈する炭化材が並んで見られることから、住居入り口に関係した屋根材の存在を暗示している可能性がある。炭化物に混じって見られる焼土塊や焼土粒の多くは炭化物の上位に覆い被さるように検出しており、土屋根の存在を示唆するものと考えられる。ただ、このような焼土塊・焼土粒が住居中央部においても検出されており、消失に伴った垂木等の大幅な倒壊とそれに伴う土屋根材の移動を想定しなければ、屋根の上部まで土屋根が施されていたことになる。

図 238-1 ~ 12 は覆土、図 238-13 ~ 21 は消失に伴う炭化材と焼土中から、図 238-22 ~ 31、図 239-1 ~ 3 は炭化材と焼土より下位の床面、図 239-4,5 は主柱穴から出土した土器である。共伴関係が確実な床面資料の中で、広口壺 (図 238-22,23) 高杯 (図 238-29) の形態などから、本住居は弥生終末期古段階に廃絶したものと推定しておきたい。

図 238-9 の壺胴部には刻目文をもつ突帯が施されており、西部瀬戸内地域からの搬入土器と考えられる。図 238-24 の壺は、胴部下半に焼成破裂痕がみられ、破片間で色調を違えることから焼成破裂土器と考えられる。図 238-30 は破片間で黒斑や色調を明瞭に違えており、焼成破裂土器と考える。図 239-1 は拡張される口縁部形態からみて吉備地域からの搬入土器と考えられるが、本住居の帰属時期よりも先行するものとみられ、混入品の可能性が高い。

図 239-3 の土製品は皿状を呈するが、内面に赤色顔料等の付着は確認できず、機能は不明とせざるを得ない。

S 区 SH1065 (図 240)

S 区中央部で検出した竪穴住居である。住居の大半を古墳時代の住居 SH1034.1037 に切られ、北西部を弥生後期後半期の SH1040 によって滅失し、住居北東部において辛うじて壁溝及び壁面の立ち上がりを確認した。南東部では弥生中期後半新段階の SH1064 を切り、住居西側は SH1069 と重複することになるが、切り合い関係の確認はできていない。残存部分から推定すると、多角形である可能性が高い。住居北東部では壁溝が 2 条並行しており、内側の壁溝が上位から穿たれている。間隔からベッド状遺構として捉えることはできず、ほぼ並行することから見て同一住居として報告するが、層位的に考えた場合、それぞれ別住居に帰属する可能性もある。炉跡などの情報は、古墳時代の住居 SH1037 等によって床面が全て削平されていることにより、不明となる。

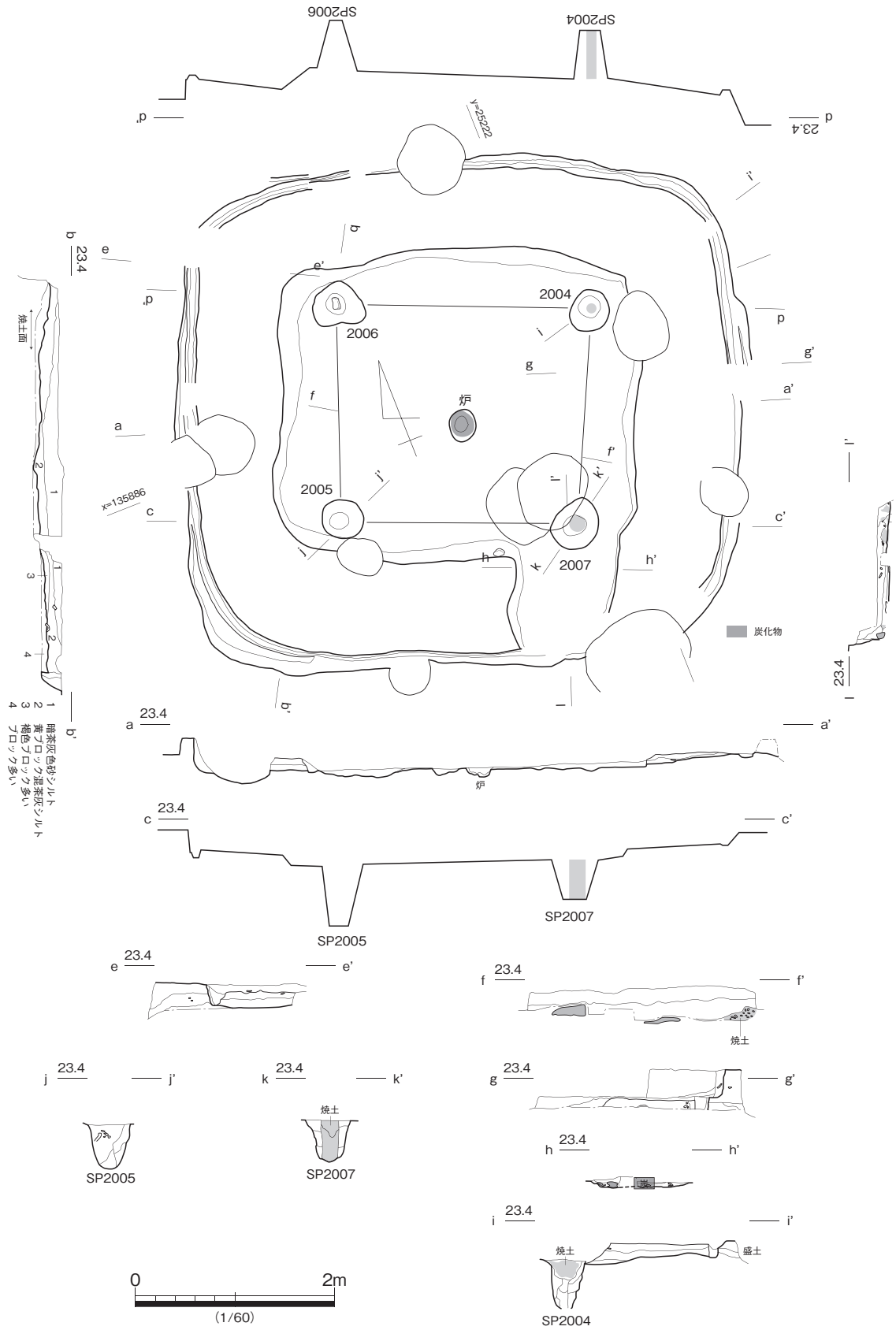


図 236 S区 SH1063 平・断面

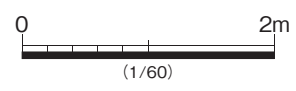
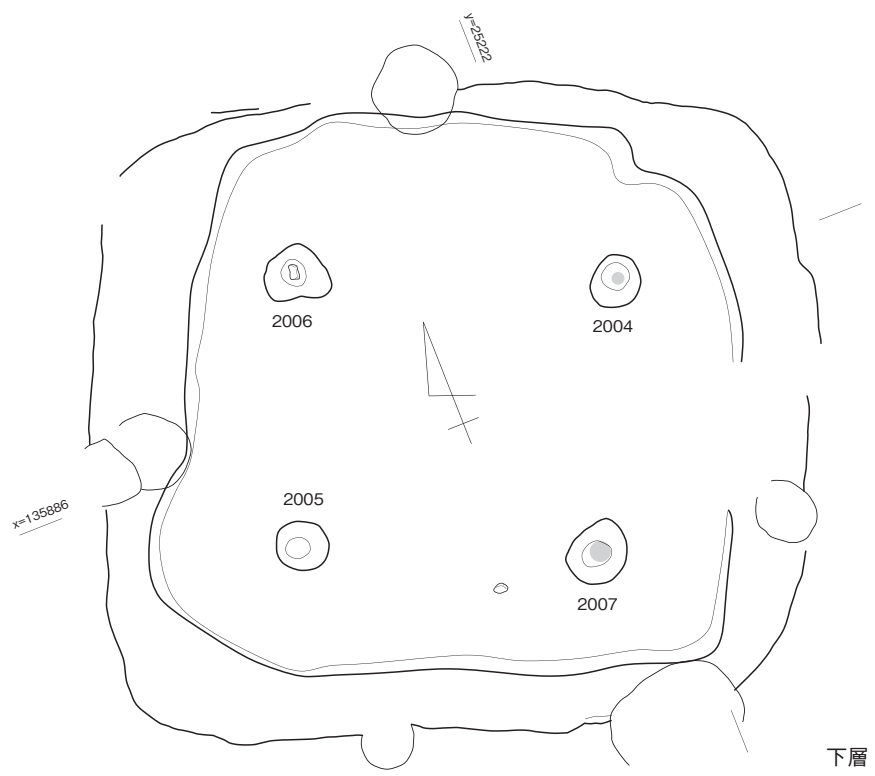
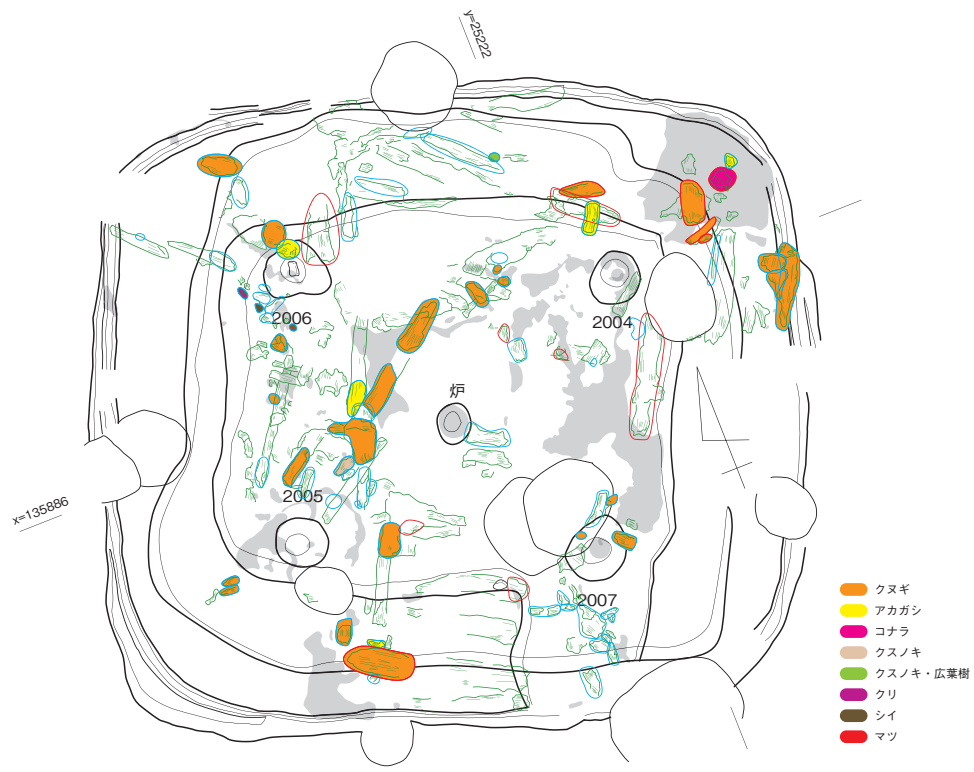


図 237 S 区 SH1063 遺物出土状況

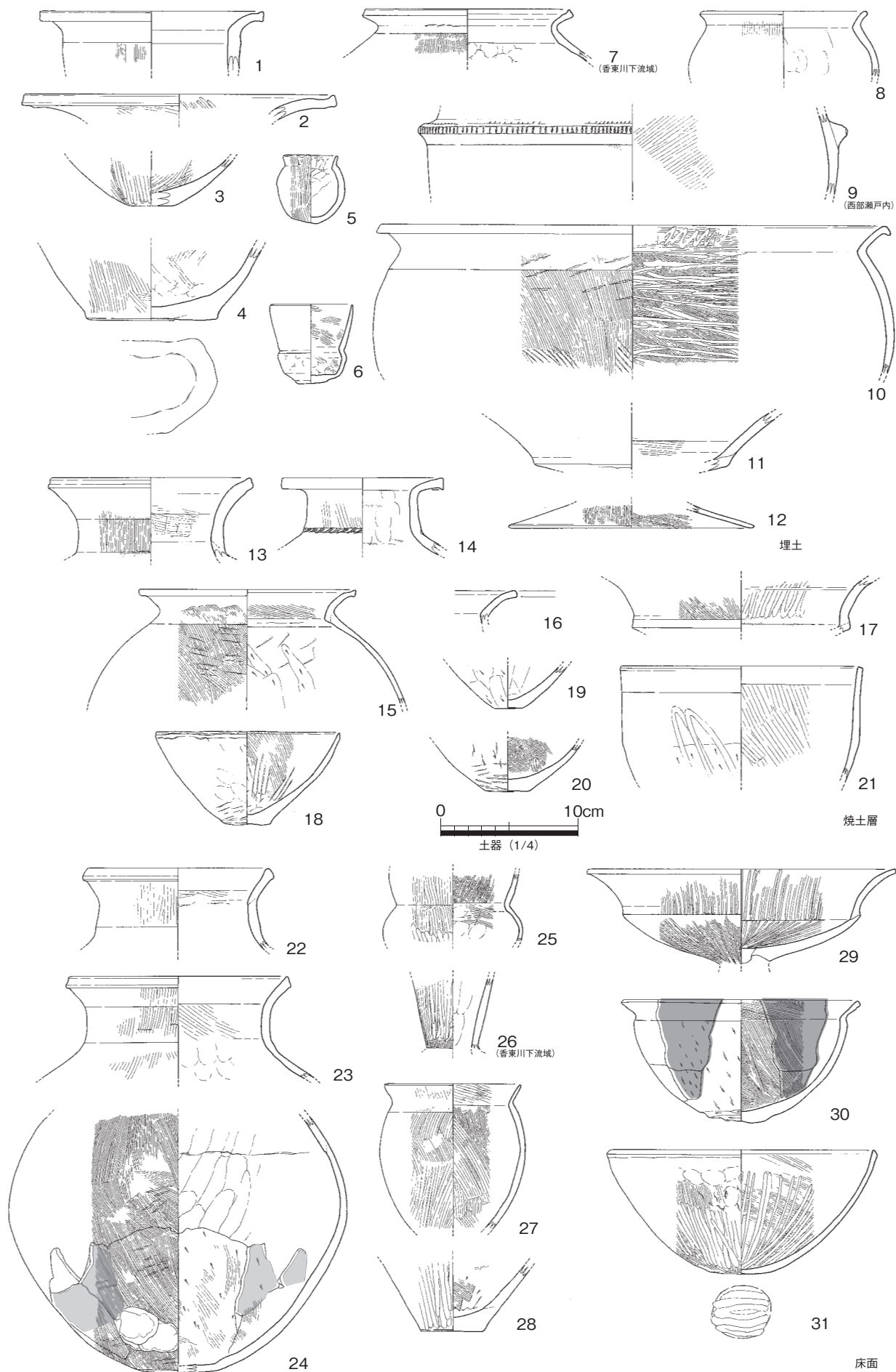


図 238 S区 SH1063 出土遺物 (1)

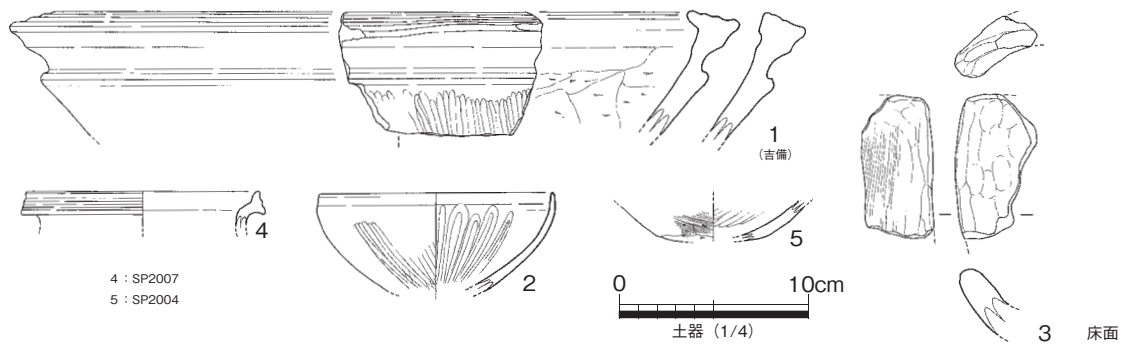


図 239 S 区 SH1063 出土遺物 (2)

図 240-1 ~ 17 は覆土、図 240-18 ~ 25 は貼床土・壁溝、図 240-26 ~ 29 は主柱穴から出土した土器群である。いずれも小片であるが、甕の口縁・底部形態などからみて、後期後半以降に下ると捉えるのは困難である。

これらの出土遺物から、本住居は弥生後期前半新段階に帰属するものと考えたい。

S 区 SH1066 (図 241・242)

S 区南西部で検出した竪穴住居である。南部を古墳時代の SH1033、北東部を弥生終末期の SH1052.1063 に切られる。南東部の SH1075 との切り合い関係を示す材料はない。平面形は、南北方向を主軸とする隅丸長方形を呈し、東側を除く 3 方向に盛土によるベッド状遺構をもち、図示した 2 基の主柱穴を配置する。ベッド状遺構によって凹地となるほぼ中央にやや大形の円形炉をもつ。残存状態が良好な住居北側では約 0.6m の壁面の立ち上がりが確認され、埋没土は基本層序Ⅳ層に起因する小・中ブロックを含む粘土で埋め戻されている。住居南西部の床面上では、約 5 個体の土器がまとまって遺棄されていた。

図 242-1 ~ 27 は覆土、図 242-28 ~ 31 は床面から出土した土器群である。香東川下流域産の高杯 (図 242-32) が時間的にやや古相を示す可能性があるが、床面から出土した甕 (図 242-29) 鉢 (図 242-28) の形態からみて、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したものと考えられる。

図 241-2 は白色を呈する花崗岩の円礫であり、磨石としての機能も考えられるが顕著な使用痕はみられない。図 241-3 の圭頭式鉄鏃は覆土からの出土。断面方形の厚みのある茎部に身上上半にのみ刃部を作出する。図 241-4 はガラス小玉であり、住居北部の床面から出土した。図 241-5 は翡翠製の勾玉で、腹部の円孔を穿つことにより頭と尾を区別する。

S 区 SH1068 (図 243 ~ 246)

S 区中央部北よりで検出した竪穴住居である。古墳時代の SH1067 に切られ、弥生終末期以前の SH1071.SK1014 を切る。住居南側の SH1040 との切り合い関係は、接点となる部分に攪乱坑が存在しているため、不明となる。平面形は復元で 4.5 × 4.0m の隅丸方形を呈し、4 周に配置された盛土によるベッド状遺構のコーナー部に 4 基の主柱穴を配置する。住居壁面の立ち上がりは、良好な部分で約 0.4m を測り、基本層序Ⅳ層に由来する小ブロックを含む埋没土で埋め戻される。床面の直上には、まばらに焼土と炭化物を含む埋土がみられるが、消失家屋を想定できるようなものではない。本層を除去すると、住居中央部のベッド状遺構内側を中心に弥生終末期の完形土器が多く出土した。完形に近い状態でまと

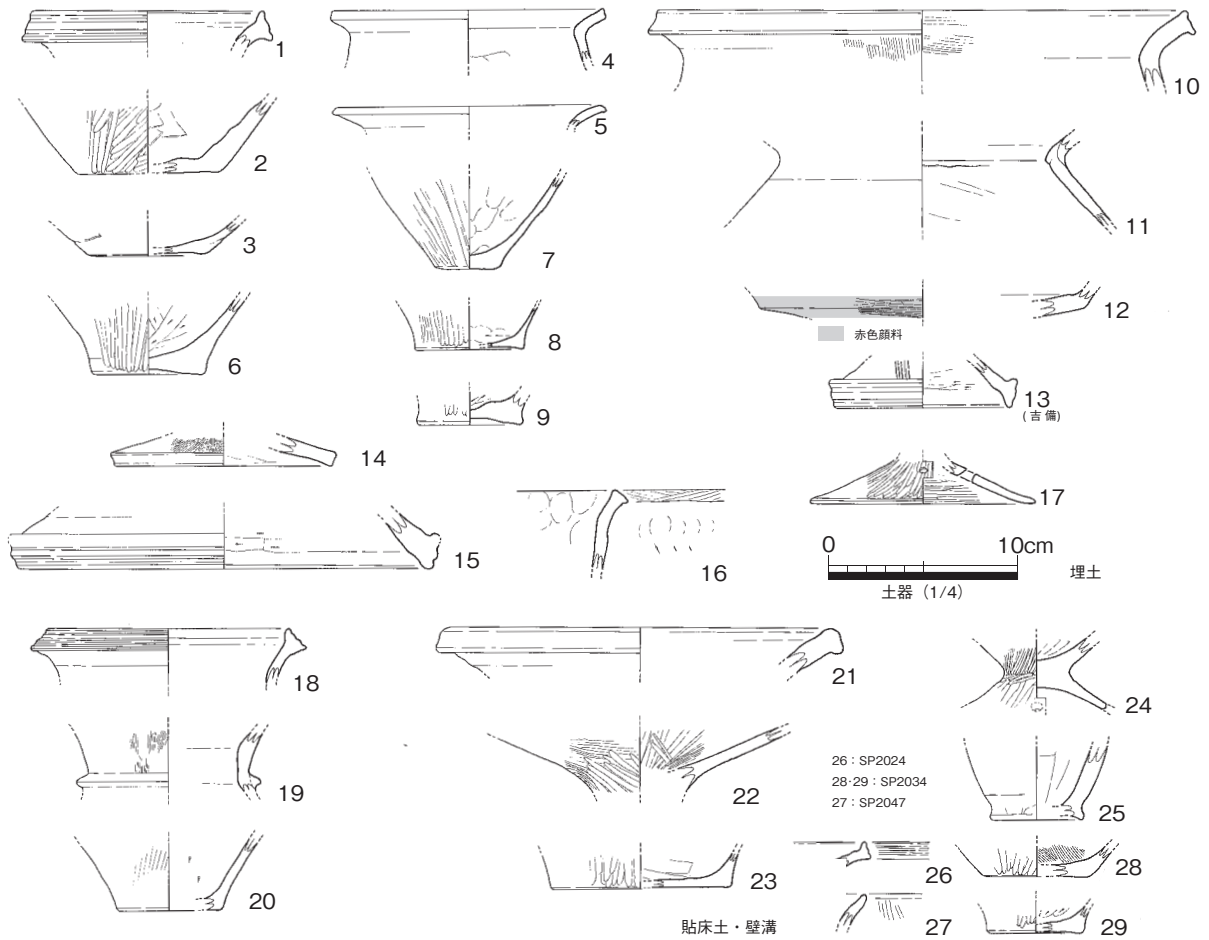
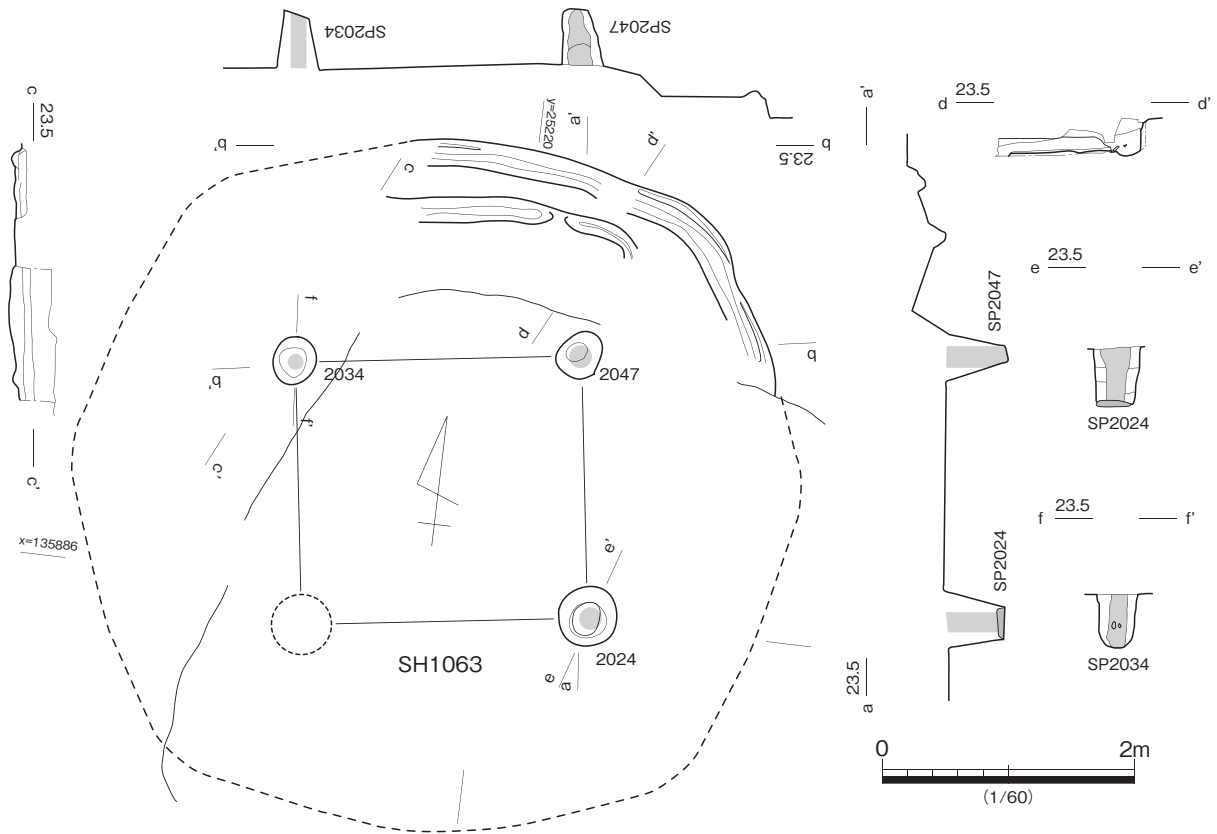


图 240 S 区 SH1065 平·断面·出土遺物

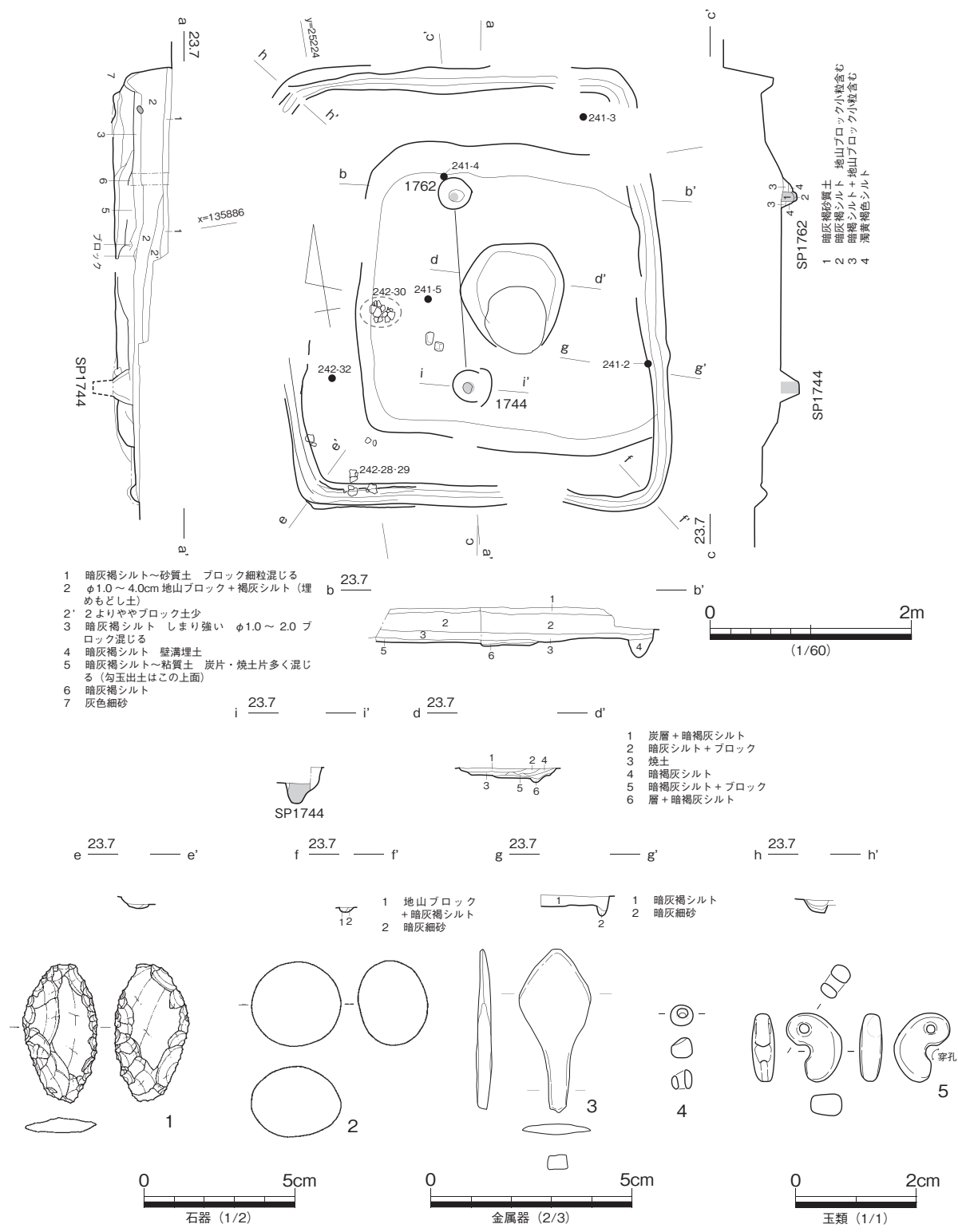


図 241 S 区 SH1066 平・断面・出土遺物 (1)

まった出土状況を見せることと、土器群上位の全体を埋め戻し土が覆うことから、一括性の高い土器群と評価することができる。

炉跡は3基あり、K-1とした南側の隅丸方形のものが大きく、住居中央にはSP1712とした細身の小規模楕円形の溝状のものと、ピット状の円形を呈するSP1889がある。北側の2基については、埋没

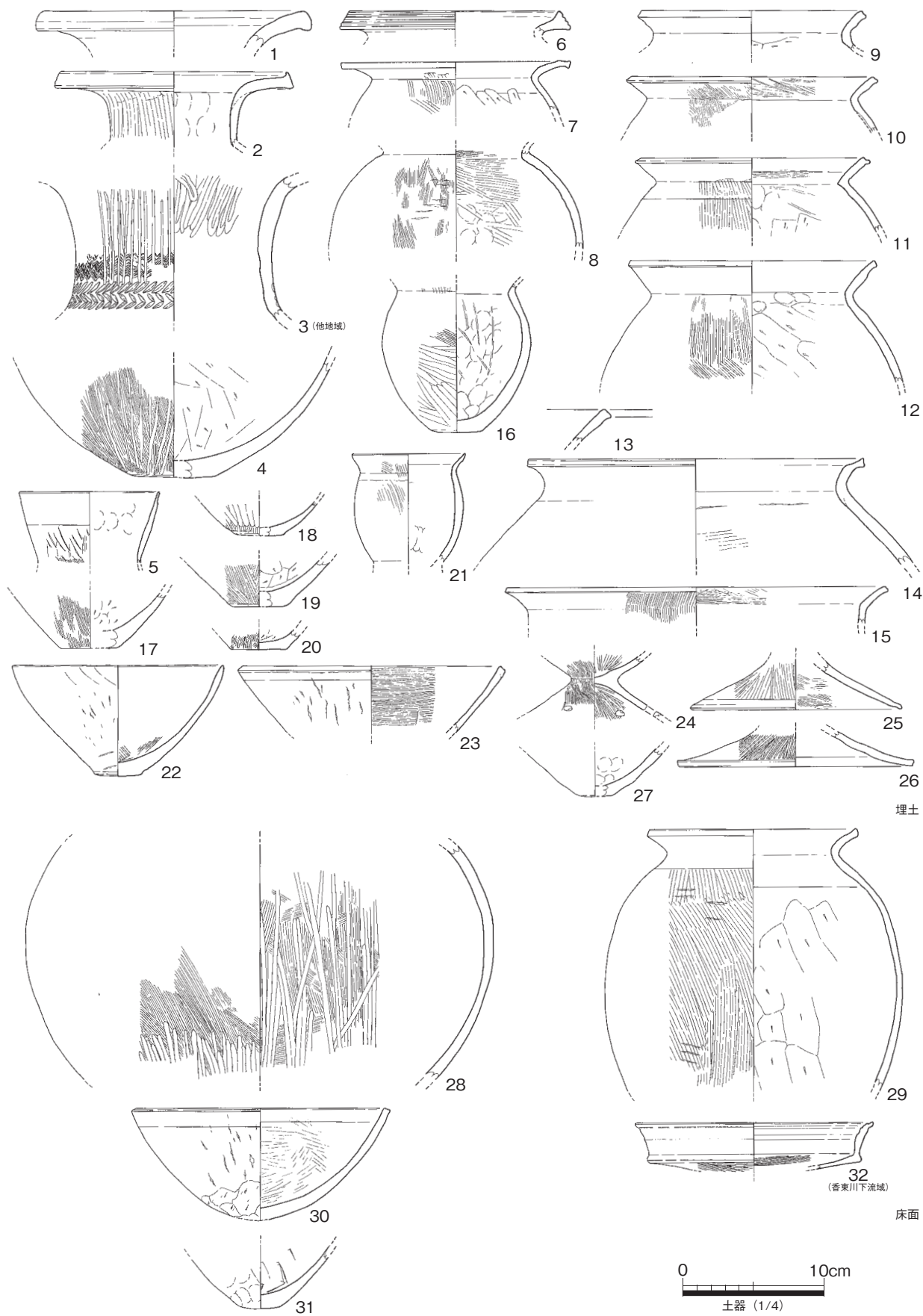


图 242 S区 SH1066 出土遺物 (2)

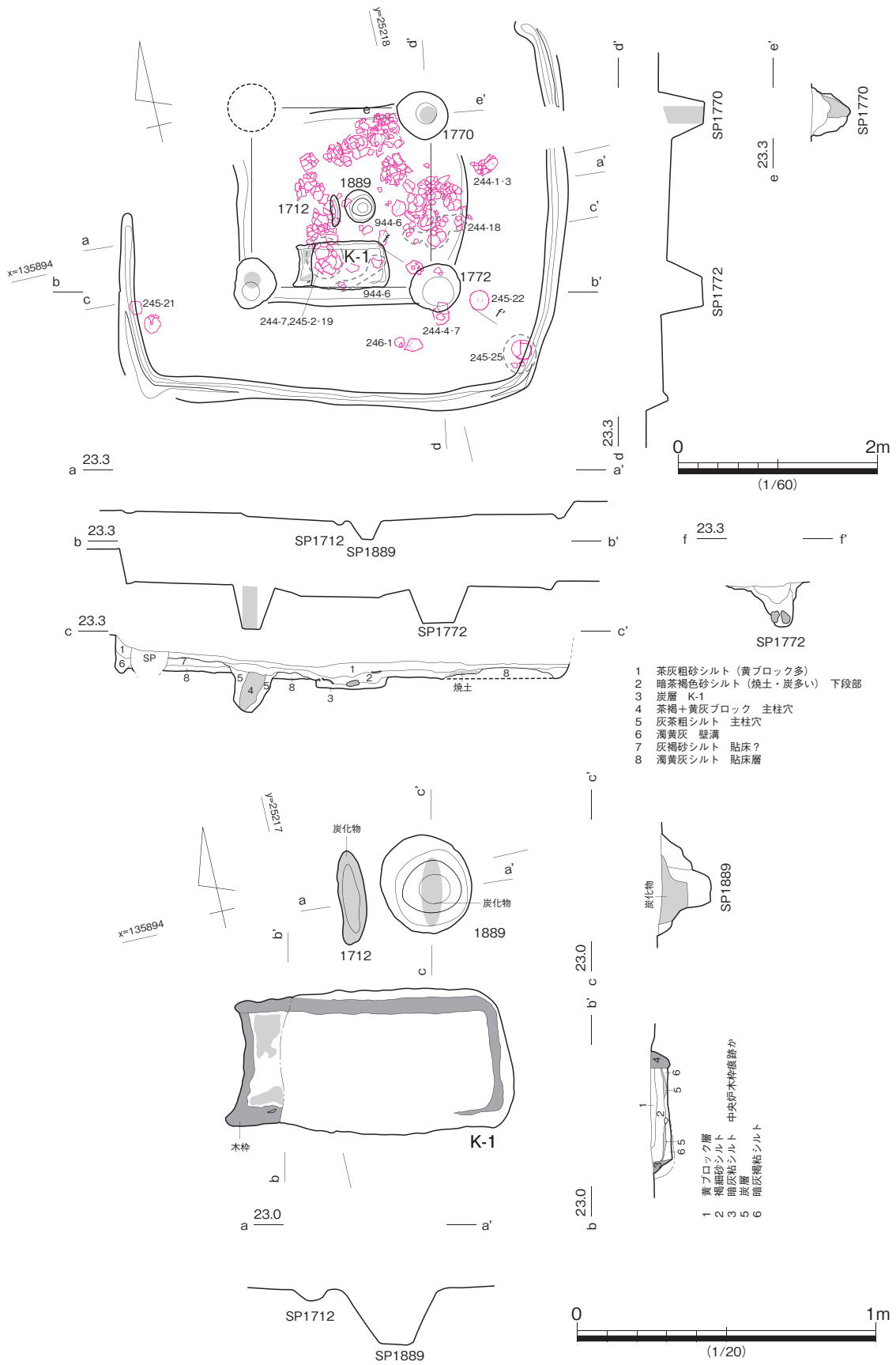


図 243 S区 SH1068 平・断面

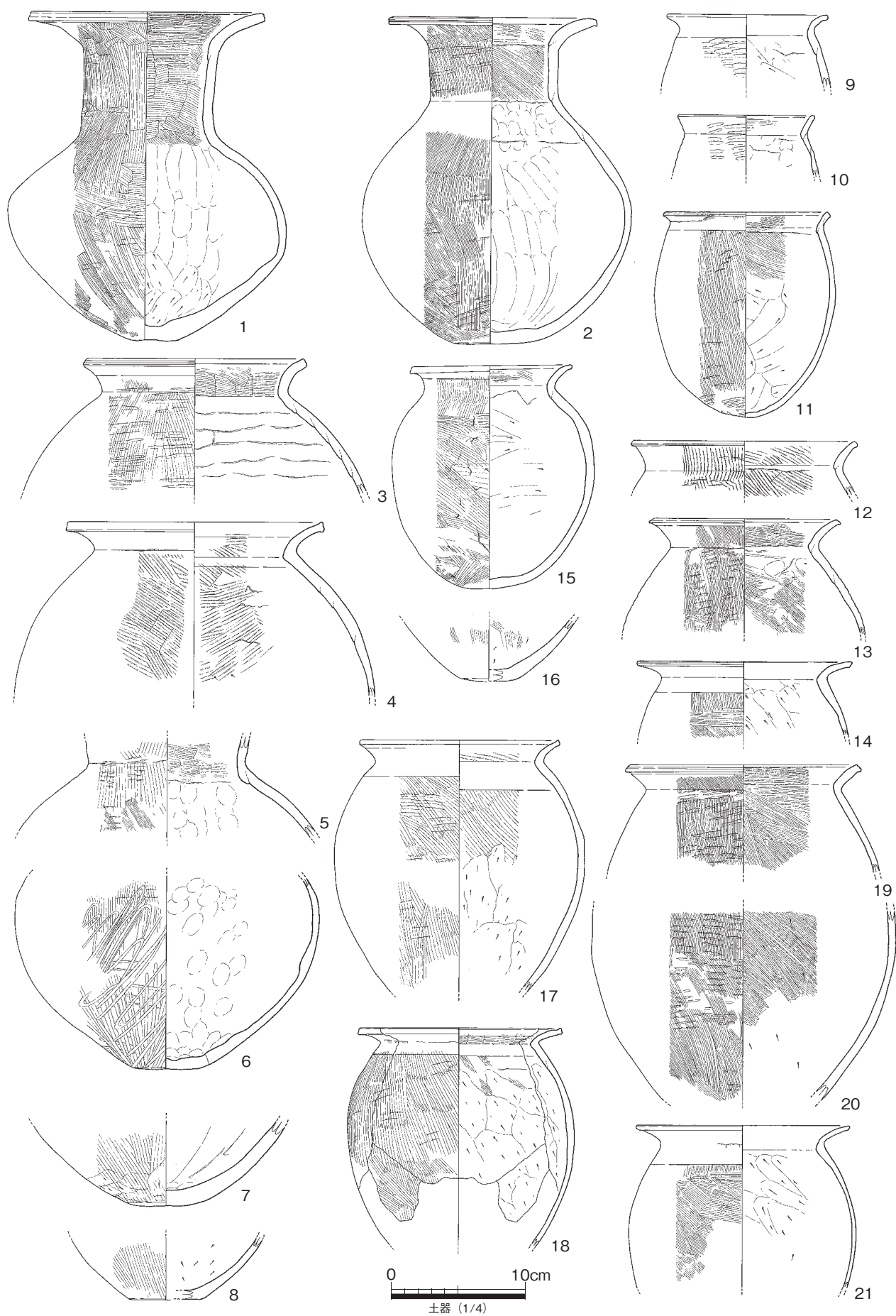


图 244 S区 SH1068 出土遺物 (1)

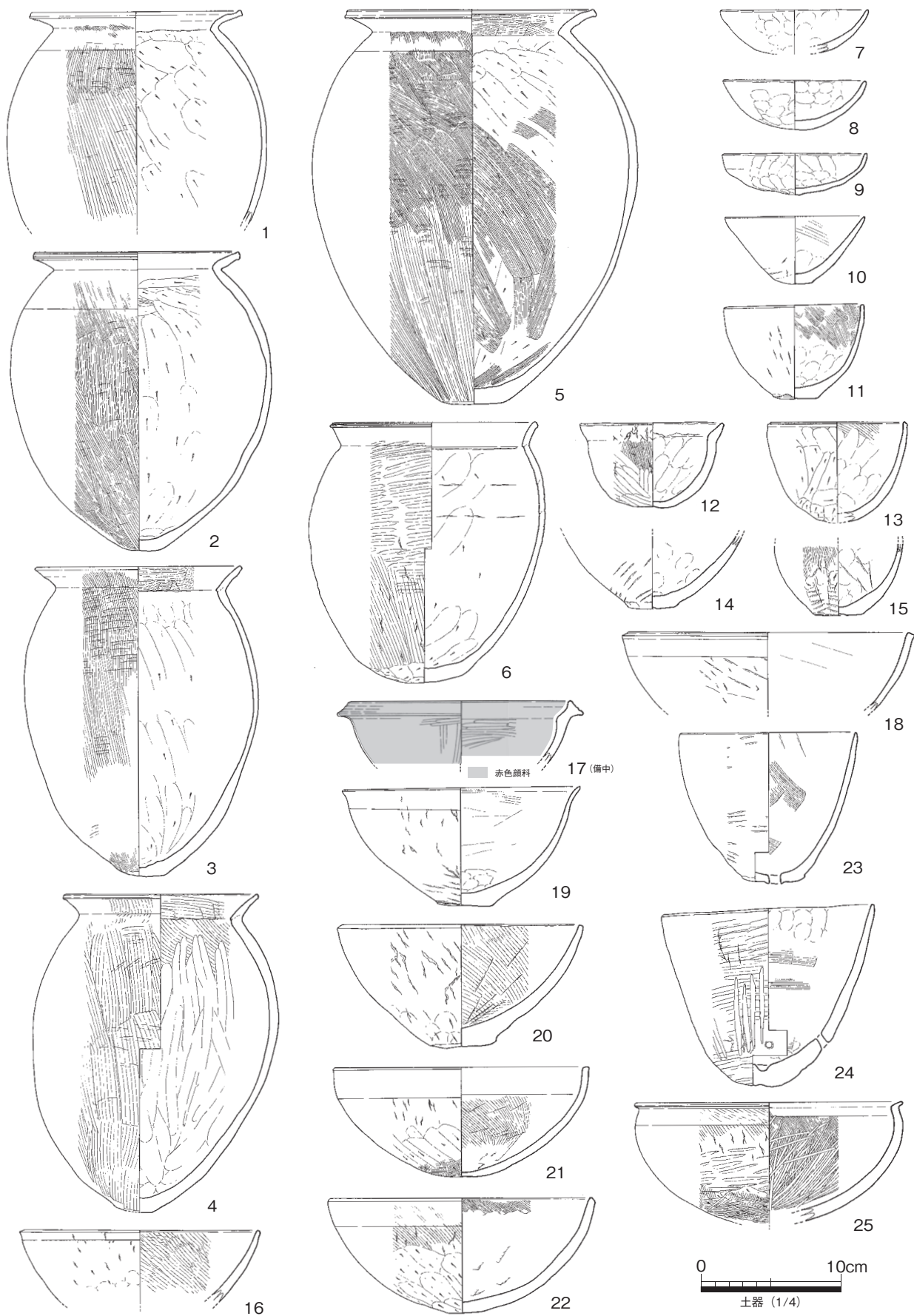


图 245 S 区 SH1068 出土遺物 (2)

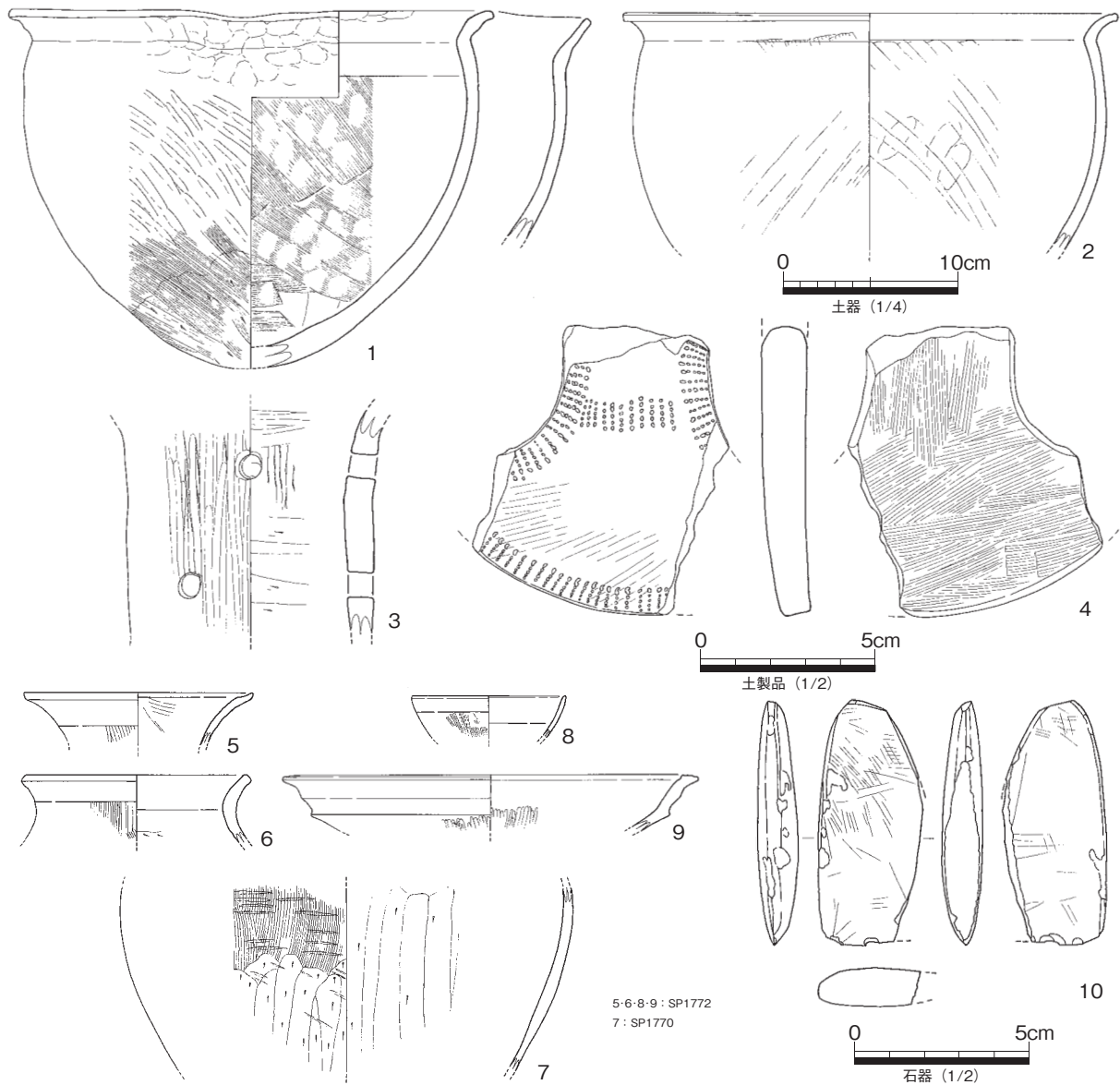


図 246 S 区 SH1068 出土遺物 (3)

土に炭化物塊を多く含むことから炉に関係した機能もつとみられるが、具体的な機能は不明である。K-1とした南側の隅丸長方形の土坑は、断面及び平面で壁際に板材を設置した痕跡が確認された。底面は全体に炭化物が広がり、灰穴炉の様相を呈する。K-1の板材を敷設した入念な構築方法や、3基に分化した炉の在り方など、他の住居に見られない要素をもつといえるが、各炉跡の機能を推定する情報が乏しい。

図 244～図 246-4 は床面、図 246-5～7 は主柱穴から出土した土器群である。床面出土資料は、後期後半期から継続し長頸壺と折衷した形態をもつ広口壺 (図 244-1.2) や胴部最大径が上位にあり口縁部の屈曲があまり発達しない甕 (図 244-17.18. 図 245-2.5)、弥生終末期中段階以降に顕著となる薄手尖底鉢が組成さないことからみて、弥生終末期古段階の一括資料と評価できる。甕 (図 244-18) は破片間で黒斑や色調を違えることから、焼成破裂土器と考えられる。図 245-17 は白色系の胎土をもち外面にベンガラ塗布が確認される鉢であり、備中西部地域からの搬入土器と考えられる。形態から後期前半期の所産と推定されるため、床面の土器群の中では混入品と判断される。

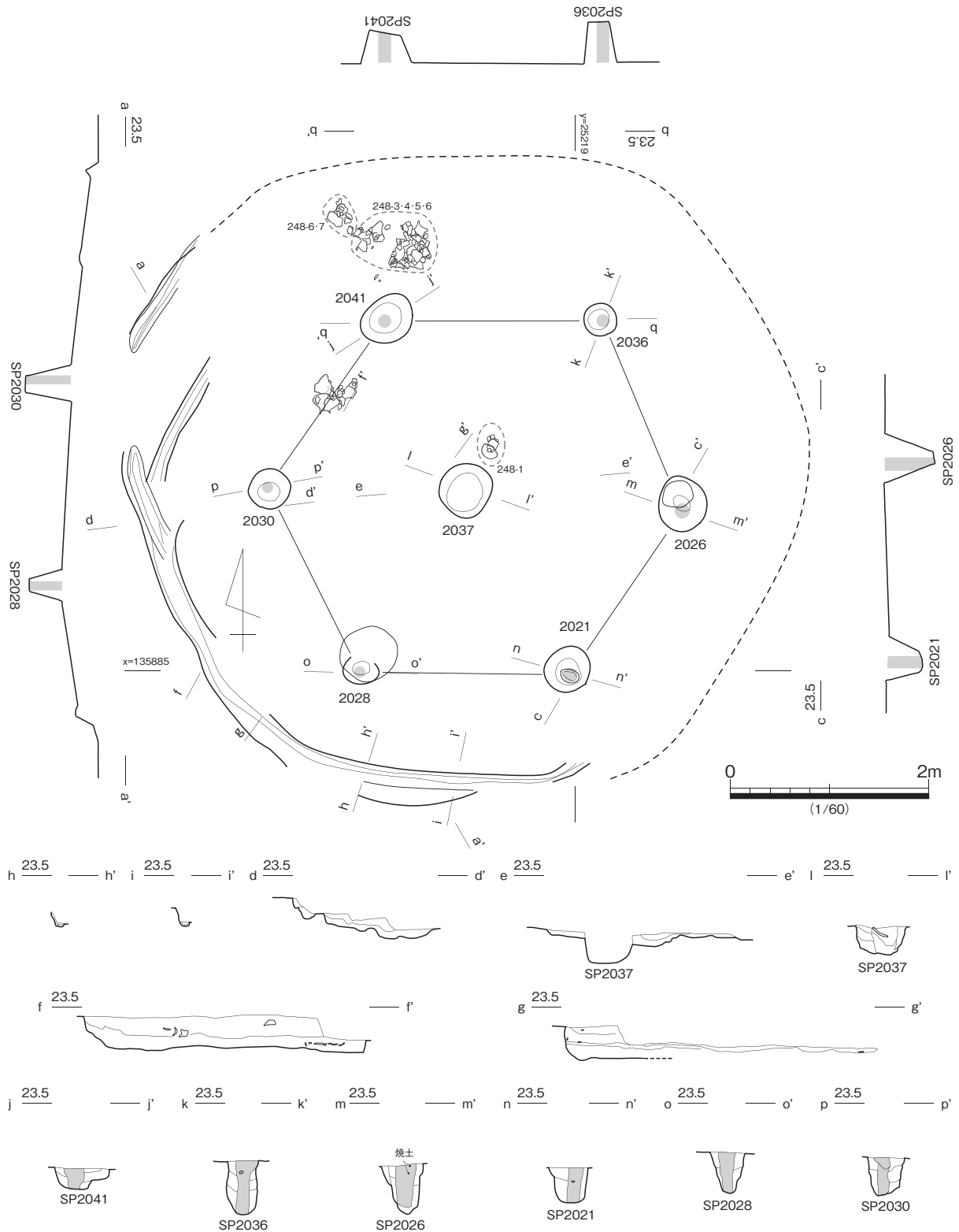


図 247 S 区 SH1069 平・断面

図 246-4 は大型の分銅型土製品であるが、時期的にみて混入品である可能性が高い。図 246-10 は床面から出土した結晶片岩製の扁平片刃石斧である。側縁部が膨らみをもつもので、基部は尖り気味となる。時期的に見て、本住居の年代に伴う資料とは考えられない。

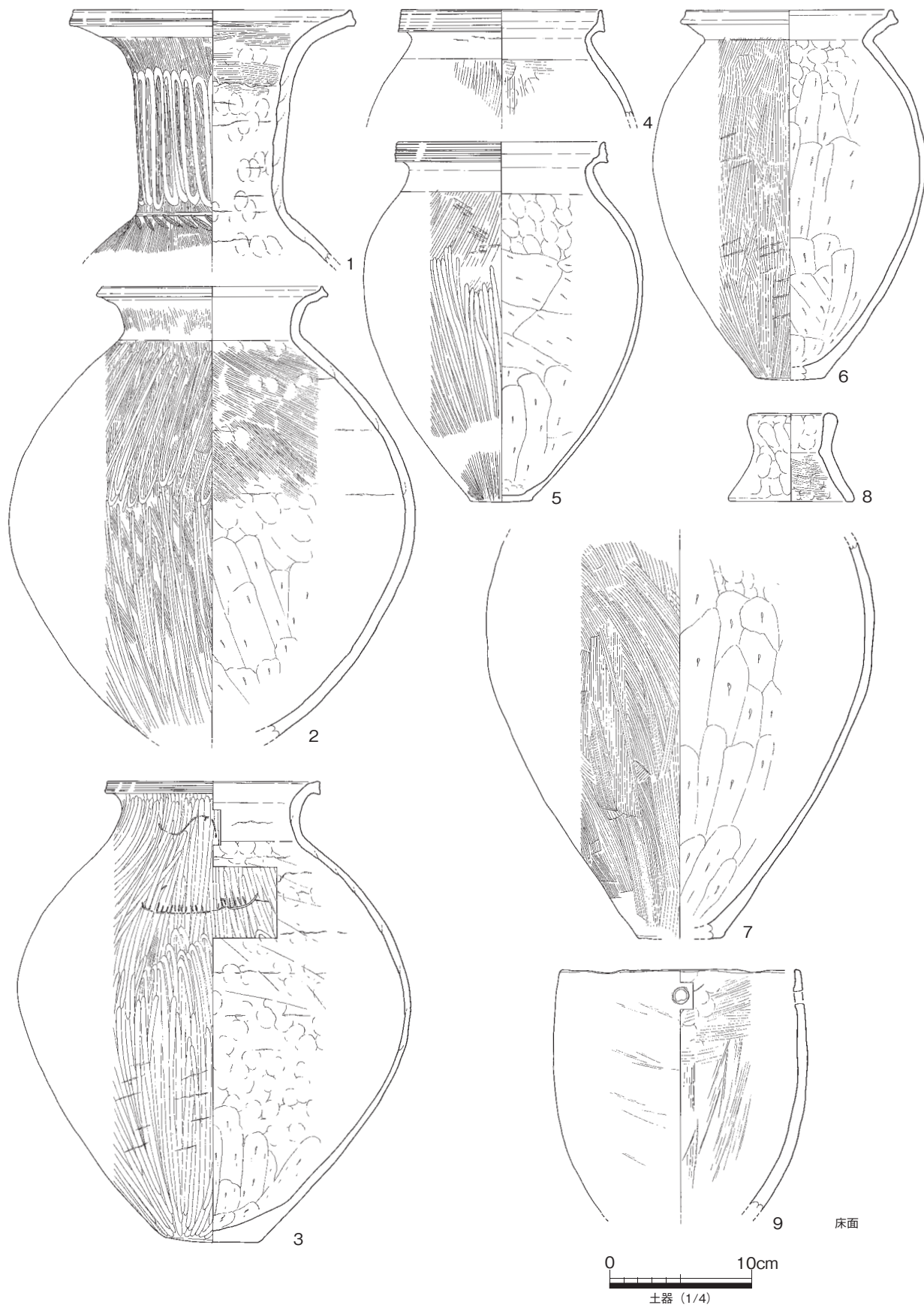


图 248 S 区 SH1069 出土遗物 (1)

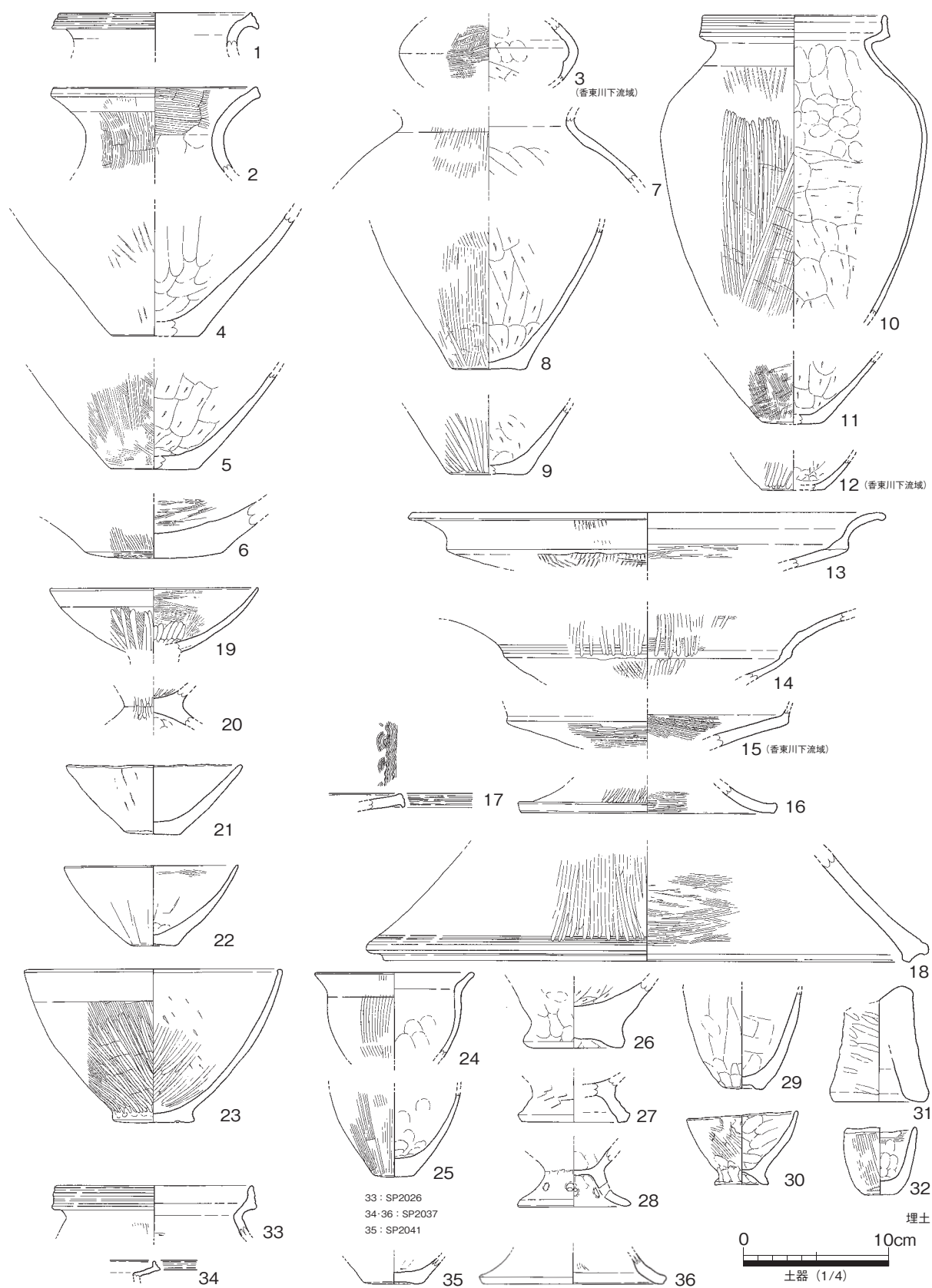


图 249 S 区 SH1069 出土遺物 (2)



図 250 S区 SH1069 出土遺物 (3)

S区 SH1069 (図 247 ~ 250)

S区中央部で検出した竪穴住居である。古墳時代のSH1034.1037、弥生終末期以前のSH1038.1040に切られる。平面的に見て住居東側で重複することになるSH1065との切り合い関係は明らかにできなかった。壁面の立ち上がりや壁溝を確認したのは西側のみにとどまるが、図示する6基の支柱穴の配置状況を併せて考えて、六角形の多角形住居と捉える。復元では約18.4mの床面積を想定できる。住居西部の外郭線が北側に張り出し壁溝が重複する状況がみられることから、建て替えや切り合い関係を想起させるが、支柱穴に建て替えた痕跡が確認できないことから、北側のみベッド状遺構が敷設されたこと

による拡張を想定しておく。この点は、貼床土が厚いことや床面よりやや高い位置で遺物がまとまって出土した箇所もあることから推定できる。拡張に伴って炉跡は支柱穴の中央に位置し、埋没土に炭化物を含むSP2037が該当すると思われる。床面からは3か所に分かれて土器等の遺物が出土している。これらは、残存率が高く形式的にもまとまった特徴をもつことから、本住居の廃絶に伴って廃

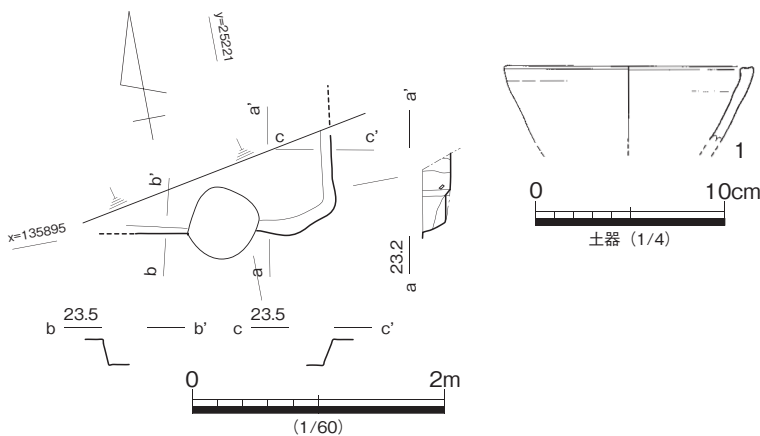


図 251 S区 SH1070 平・断面・出土遺物

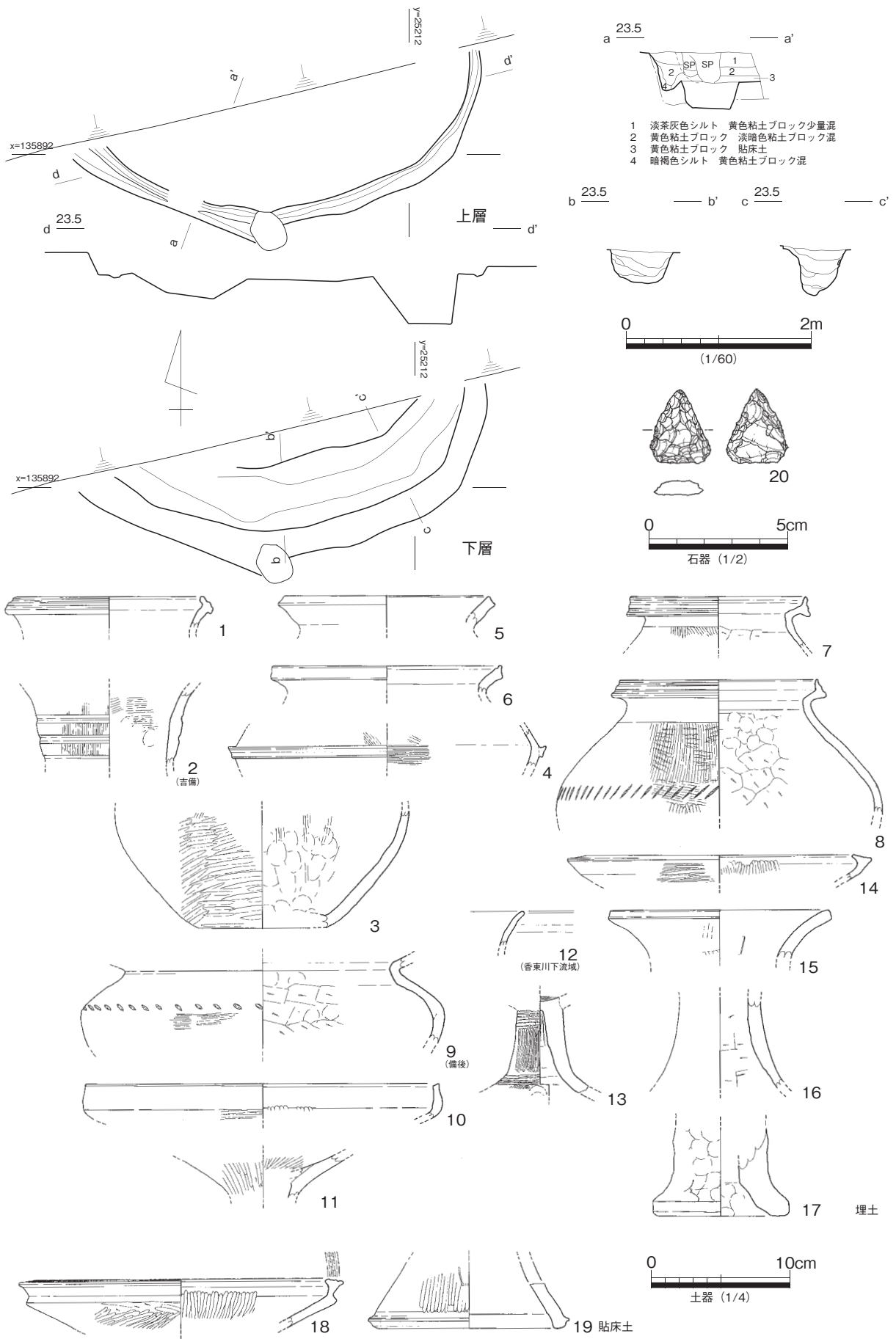


図 252 S区 SH1072 平・断面・出土遺物

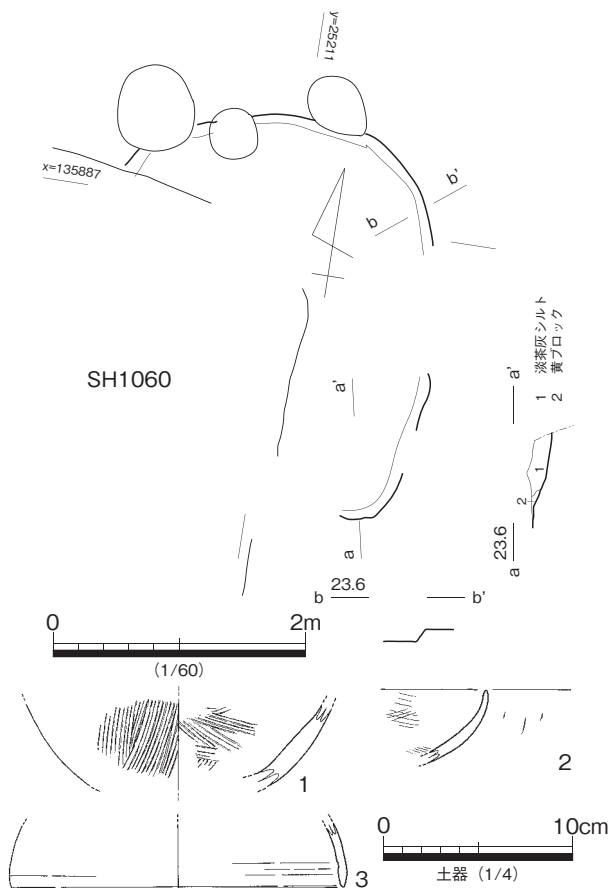


図 253 S 区 SH1076 平・断面・出土遺物

棄された一括資料と捉えられる。

図 248-1 ~ 9 は床面、図 249-1 ~ 32 は覆土、図 249-33 ~ 36 は支柱穴からの出土した土器群である。口縁部を上方に拡張する甕(図 248-4.5 図 249-10.33)は、一見備後地域の資料に類似するが口縁形態やプロポーシオンが若干ことなることから、在地の土器群と考える。長頸壺(図 248-1)や甕(図 248-4.5)の形態から、弥生後期後半古段階の資料群と推定できる。

広口壺(図 248-3)の頸部から肩部外面には、「S」字状と舟をモデルとした記号紋が描かれる。鉢(図 248-9)は寸胴に近い形態をもち、口縁部下に焼成前の穿孔を行う。器形や穿孔から漁労具の可能性も考えられる。図 250-1 は床面から出土したサヌカイト製打製石庖丁であり、背面側に広く自然面を留める。図 250-2 は覆土から出土した安山岩製の置砥石である。

S 区 SH1070 (図 251)

S 区北東部で検出した竪穴住居である。西側で SH1071 を掘り込まれる。また、大部分が攪乱坑で消滅しており、方形住居の 1 か所のコーナー部を検出したにとどまる。壁面の立ち上がりは約 0.2m であり、検出した範囲で壁溝の存在は確認できないが、立ち上がりが急であることや、想定される主軸方向が周辺に見られる弥生後期後半から終末期の竪穴住居に類似することから、住居として報告する。

図化可能な遺物は、弥生土器の直口壺、あるいは鉢の口縁図 251-1 のみであり、時期決定を行うにはあまりにも少量であるため、周辺遺構の状況から、弥生終末期の所産と捉えておく。

S 区 SH1072 (図 252)

S 区北西部で検出した竪穴住居であり、古墳時代の SH1074、弥生終末期の SH1038 に切られる。住居北側の大部分を攪乱坑によって消失するが、復元で直径約 5m の円形住居と推定することができる。壁面の立ち上がりは約 0.3m を測り、検出した範囲で支柱穴や炉は見られない。壁溝を検出しているが、貼床土を除去すると、住居壁側からやや内寄りで上面幅約 0.7m、深さ約 0.4 ~ 0.5m の溝が巡ることが確認された。壁面に沿う形で検出していることから本住居に伴う施設と考えられるが、先行する段階の壁溝や貼床敷設に伴う際の地業と捉えた場合には、規模からみて疑問が残る。本住居に伴う遺構として報告するが具体的な性格は不明とせざるをえない。

出土遺物(図 252)からみて、本住居は弥生後期前半古段階に廃絶したものと捉えられる。図 252-9 は肩部が強く張る形態や列点文からみて、備後地域からの搬入土器と考えられる。

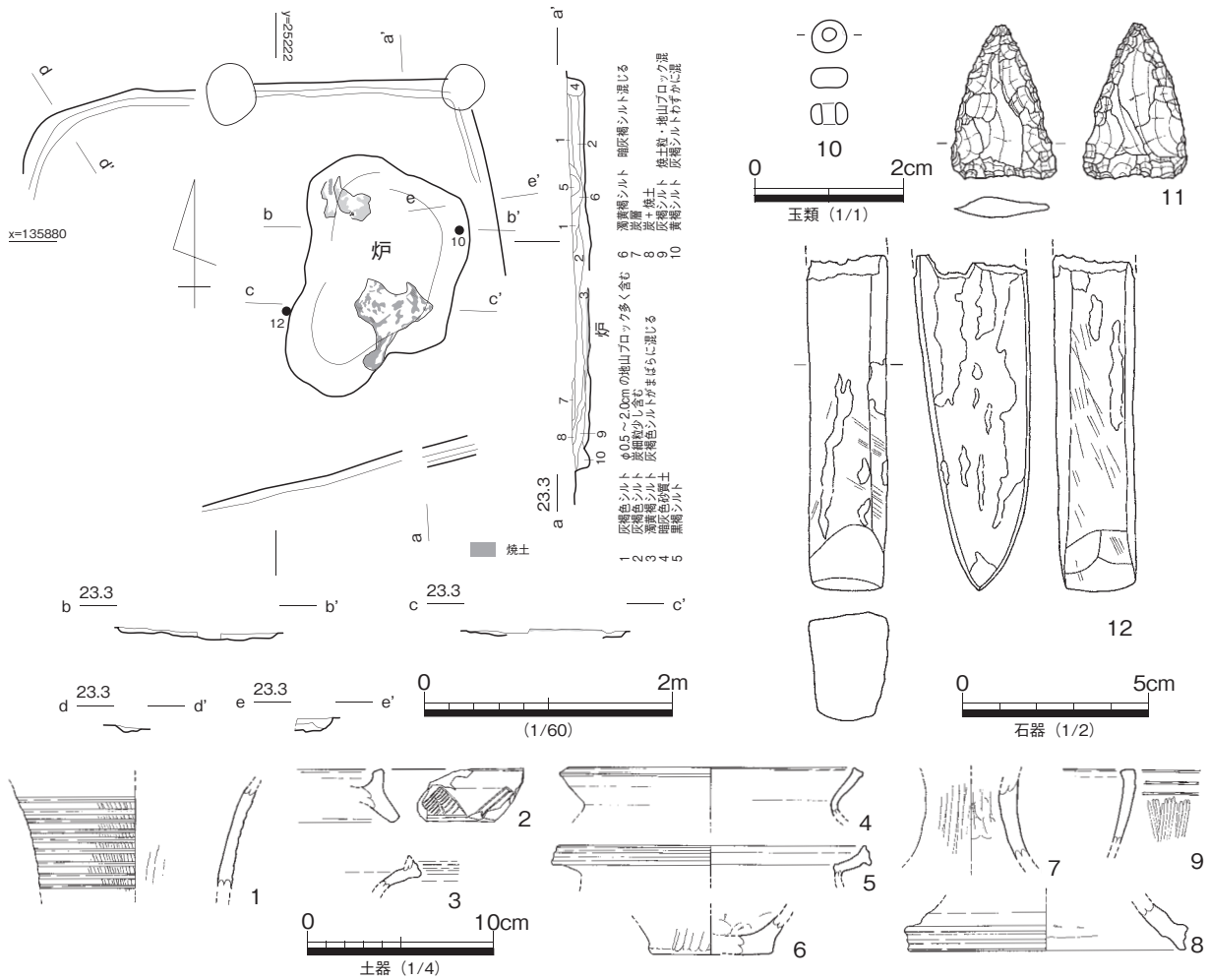


図 254 S 区 SH1077 平・断面・出土遺物

S 区 SH1076 (図 253)

S 区西部で検出した竪穴住居である。住居南西部を古墳前期の SH1060 に切られる。壁面の立ち上がりは 10cm 程しか残存しておらず、炉跡・支柱穴の存在も確認できないため、落ち込みの可能性も考えられるが、埋没土が貼床土に類似するものであることから、小形無柱の隅丸長方形の住居として報告しておきたい。

出土遺物には、壺胴部片 (図 253-1) 鉢口縁 (図 253-2) がある。須恵器蓋杯 (図 253-3) は、SH1060 との切り合い関係からみて、混入品と理解することができる。SH1060 との先後関係や鉢 (図 253-2) の形態から、弥生終末期中段階の所産と推定しておきたい。

S 区 SH1077 (図 254)

S 区南部で検出した竪穴住居である。古墳時代以降の SH1033.1035.1045 に切られ、弥生中期後半期の布掘建物 SB1104 を切り込む。住居西辺と東辺の一部を消失するが、 $3.8 \times 3.5\text{m}$ の隅丸長方形の平面プランをもつと考えられる。支柱穴は確認できず、床面東側に炉跡と考えられる不定形落ち込み K-1 が見られる。炉跡 K-1 は深さ約 0.1m の浅い落ち込み状を呈し、ほぼ全面に炭化物が広がる灰穴炉の様相を

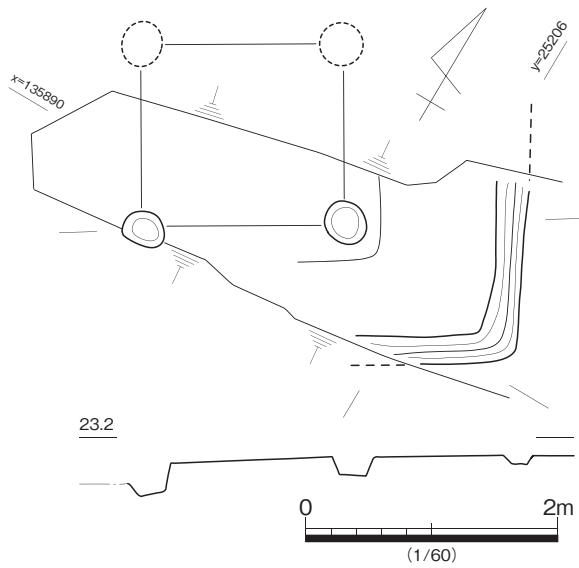


図 255 S区 SH1078 平・断面

示す。

出土遺物は、弥生終末期まで下る器台又は複合口縁壺(図 254-2)や甕(図 254-4)がみられるなど一定程度の時間幅が看取されるが、主柱穴をもたず大型の炉を敷設する小型の住居形態であることからみて、長頸壺頸部片(図 254-1)甕口縁(図 254-3)高杯脚端部(図 254-8)などを重視し、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものと考えておく。図 254-10 は炉内から出土したガラス小玉、図 254-12 は炉周辺の床面から出土した結晶片岩製の柱状片刃石斧である。

S区 SH1078 (図 255)

S区北西部で検出した竪穴住居である。古墳時代後期前葉のSH1032の貼床土を除去した段階でその直下で検出した。住居壁面はSH1032によって大幅に削平されており、南東コーナーと見られる壁溝と図示した2基の主柱穴を辛うじて検出した。4基の主柱穴を想定すると、壁溝との位置関係から一辺が約4.5mの方形住居として復元できる。検出範囲内で炉の存在は確認できないため、攪乱坑によって滅失した床面中央に存在していたものと考えられ

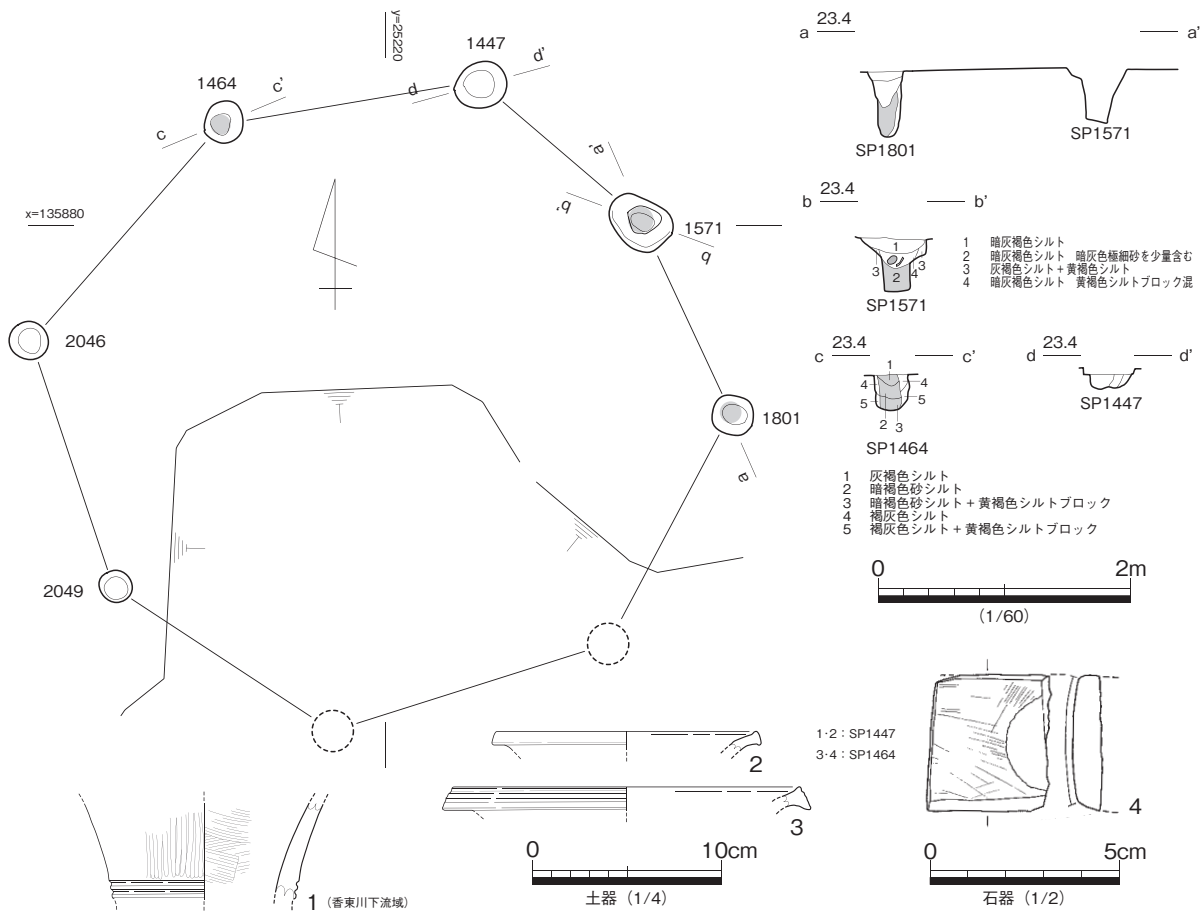


図 256 S区 SH1083 平・断面・出土遺物

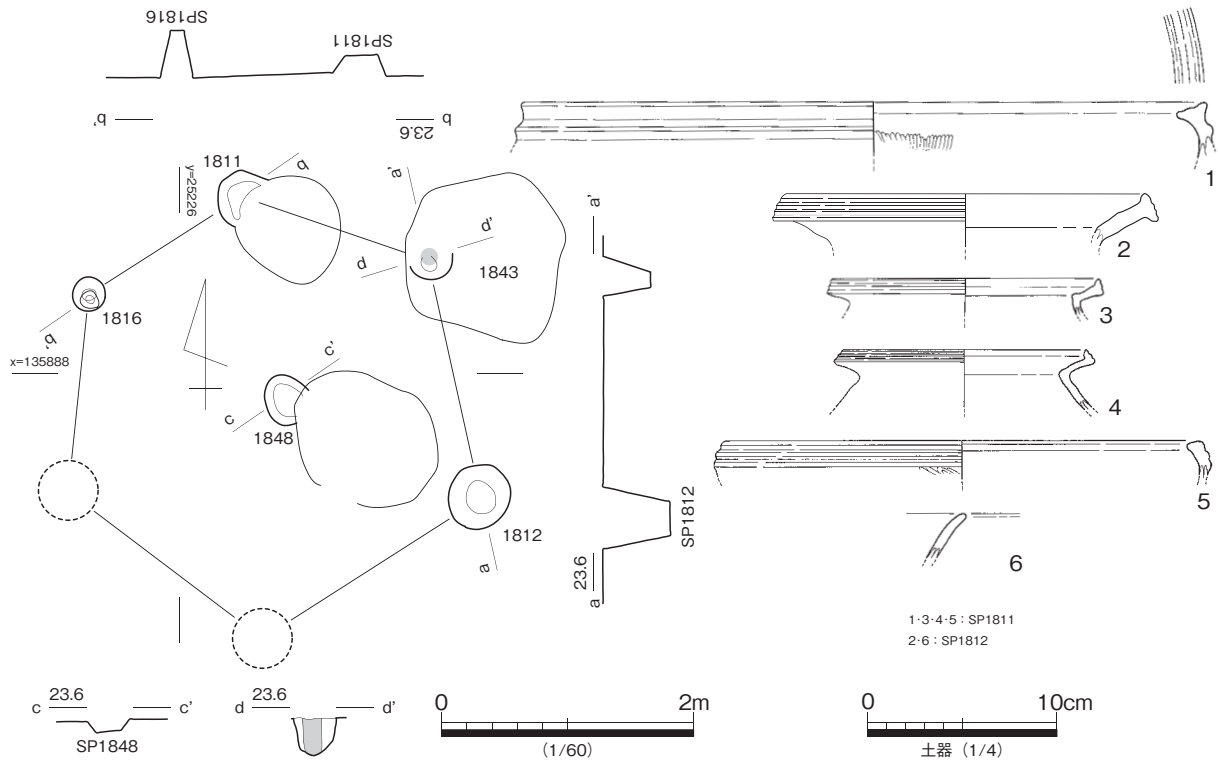


図 257 S 区 SH1089 平・断面・出土遺物

る。南東隅の支柱穴と壁溝の間の部分には、ベッド状遺構と見られる盛土が僅かに残存していた。

出土遺物は、ベッド状遺構の盛土から出土した弥生土器片が数点あるのみであり、時期決定の材料に欠ける。古墳後期前葉の SH1032 の下位で検出していることや周辺遺構との関係から、弥生後期後半期の所産と推定しておきたい。

S 区 SH1083 (図 256)

S 区南西部で検出した竪穴住居である。弥生後期後半から終末期の住居を除去した段階で検出した柱穴が円形に並ぶ状況が見られたため、建物復元を行った。南側の柱穴列が攪乱坑によって消滅しているが、8 基の支柱穴をもつ直径 8m を超える円形住居と推定しておきたい。

SP1447 から出土した器台 (図 256-1) SP1464 から出土した甕口縁 (図 256-3) の形態から、本住居は弥生後期前半古段階に帰属するものと推定しておく。図 256-4 は SP1464 から出土した安山岩製の手持砥石である。

S 区 SH1089 (図 257)

S 区東部で検出した竪穴住居である。壁溝及び壁面は確認できていないが、柱穴埋没土の特徴及びその配置から 6 支柱の竪穴住居として復元する。北東部の支柱穴 SP1843 が弥生中期後半期の SB1108 を切り込むことや、出土遺物に弥生後期前半古段階に位置づけられる広口壺 (図 257-2) などが帰属時期推定の資料となる。また、記録作成が行えていないが、SP1848 は位置関係からみて炉の可能性が高い。

SP1812 出土の高杯口縁 (図 257-6) が時期的に下る可能性があるものの、広口壺 (図 257-2) の形態から、

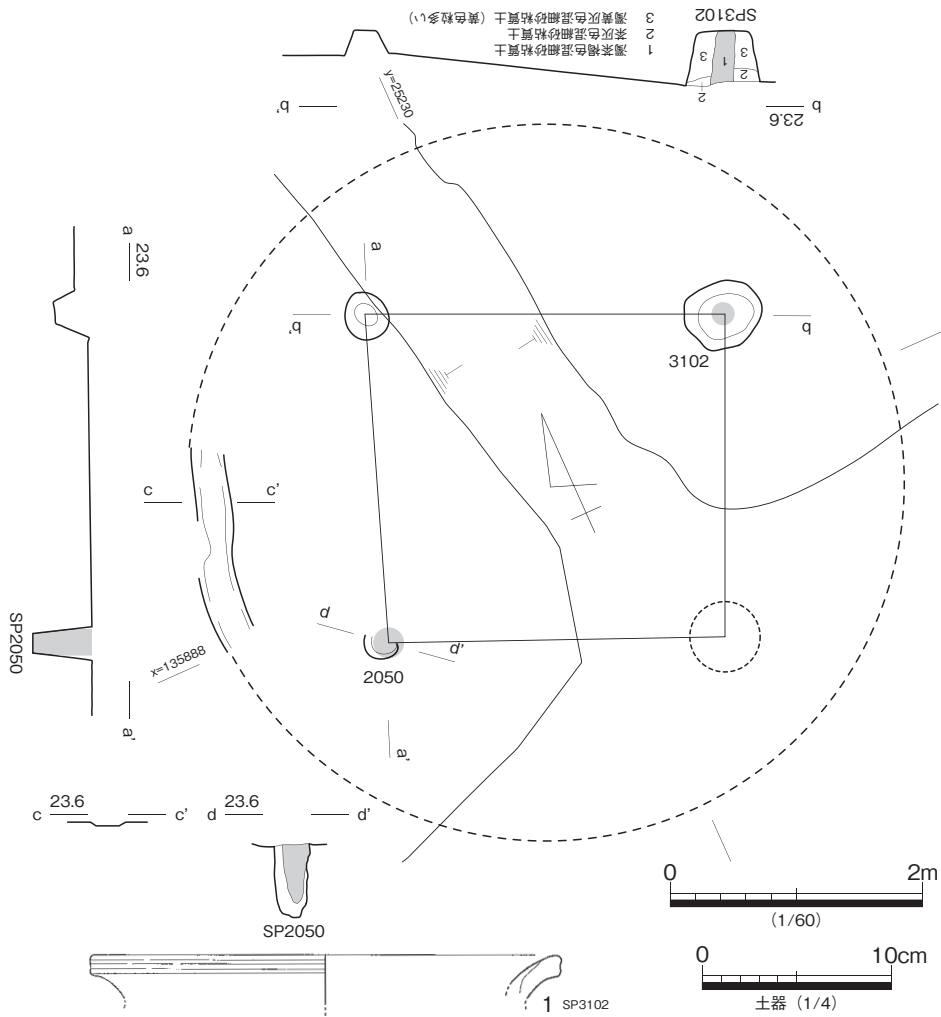


図 258 S 区 SH1090 平・断面・出土遺物

本住居は弥生後期前半古段階に帰属するものと考えたい。

S 区 SH1090 (図 258)

S 区南西部で検出した竪穴住居である。現地調査において住居西部で壁溝を部分的に確認し、報告書作成段階で支柱穴を加えて復元した。直径約 5.6m 円形住居に復元できる。4 基の支柱穴をもつと考えられるが、南東隅柱を攪乱坑で滅失する。

時期決定可能な出土遺物に乏しいが、SP3102 より弥生後期前半期に位置付けられる甕口縁 (図 258-1) が出土していることや、これより時期的に下る出土遺物がみられないことから、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものと判断しておく。

T 区 SH1008 (図 259・260)

T 区西部で検出した竪穴住居であり、古墳時代の SH1009.1012 に切られ、弥生後期前半期の SH1030 を切る。住居南側の一部を帯状に攪乱坑で滅失するが、4.5 × 4.3m の隅丸方形を呈し、図示する 4 基の支柱穴をもつ。北部床面を中心に、盛土によるベッド状遺構を確認しており、南東隅では板状を呈する

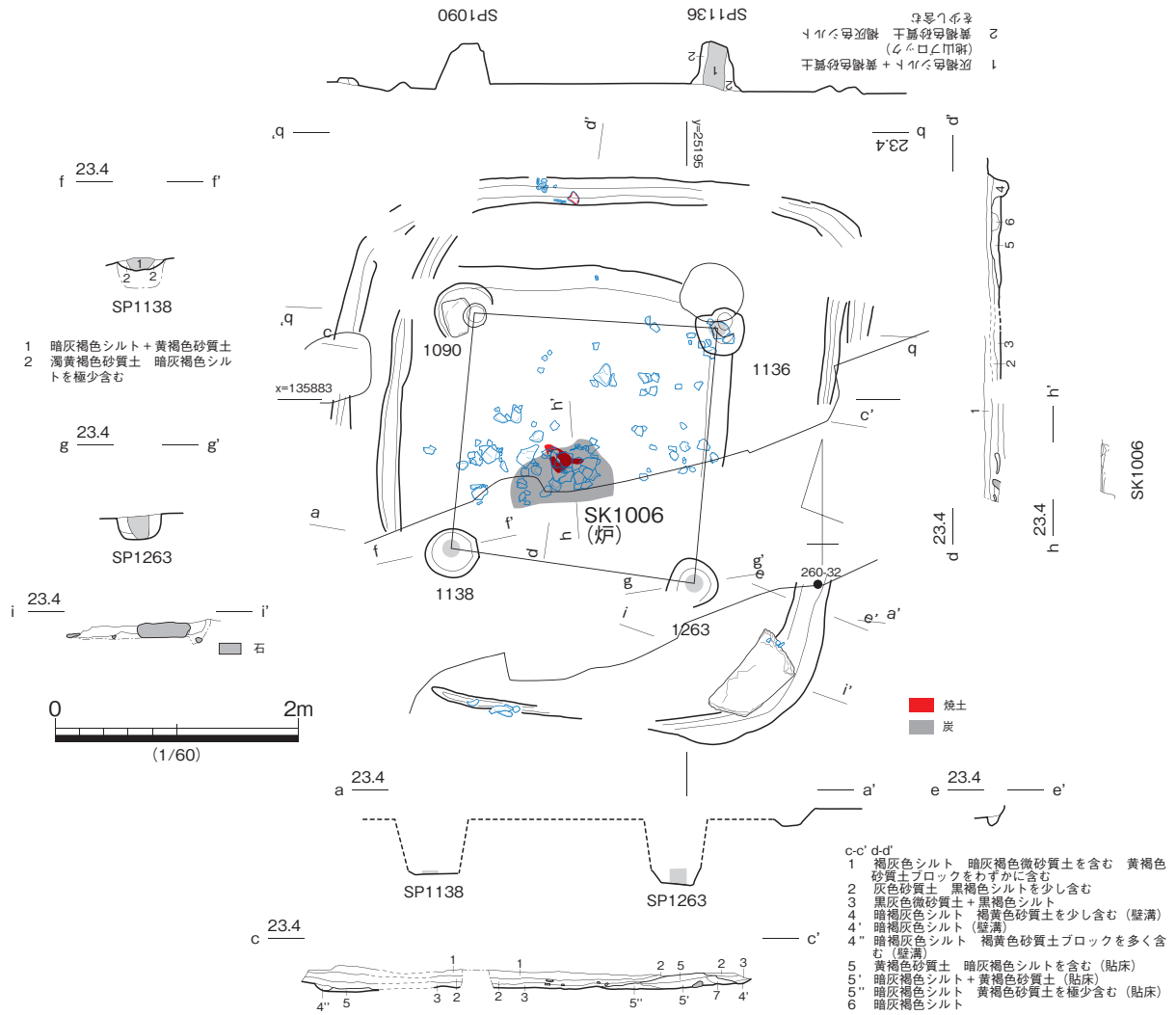


図 259 T 区 SH1008 平・断面

安山岩の台石が見られる。断面図に反映されていないが、西側のベッド状遺構内側には小溝が併走し、住居北側の壁際まで及ぶ。壁材設置に伴う小溝と見られるが、北側のベッド状遺構に食い込む形で検出しており、用途は不明とせざるを得ない。住居中央部南寄りには SK1006 とした炭化物が広がる浅い落ちがあり、炉跡と考える。SK1006 中央に直径約 0.3m を測る円形に焼土化した箇所があり、その下位に SP1138 が見られる。SP1138 は通常の柱穴に比べて浅く、位置関係から見て炉に伴うものと考えられるが、具体的な機能は分からない。床面には、ベッド状遺構内側を中心に土器片が散乱していた。

覆土からの出土遺物には、須恵器高杯 (図 260-7) 蓋杯 (図 260-8) などの混入品がみられるが、床面の土器群は弥生後期前半期の小片を除いて、弥生終末期の資料で占められる。また、北西隅柱穴 SP1090 には須恵器蓋杯 (図 260-26) 土師器直口壺 (図 260-27) が出土しているが、床面におけるまとまった土器群の出土状況を踏まえると、これらの遺物は上位の SH1016 からの混入品と理解できる。床面出土の土器群から、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと推定しておきたい。

図 260-32 は住居南東部の壁溝上面から出土した緑色凝灰岩製の管玉である。

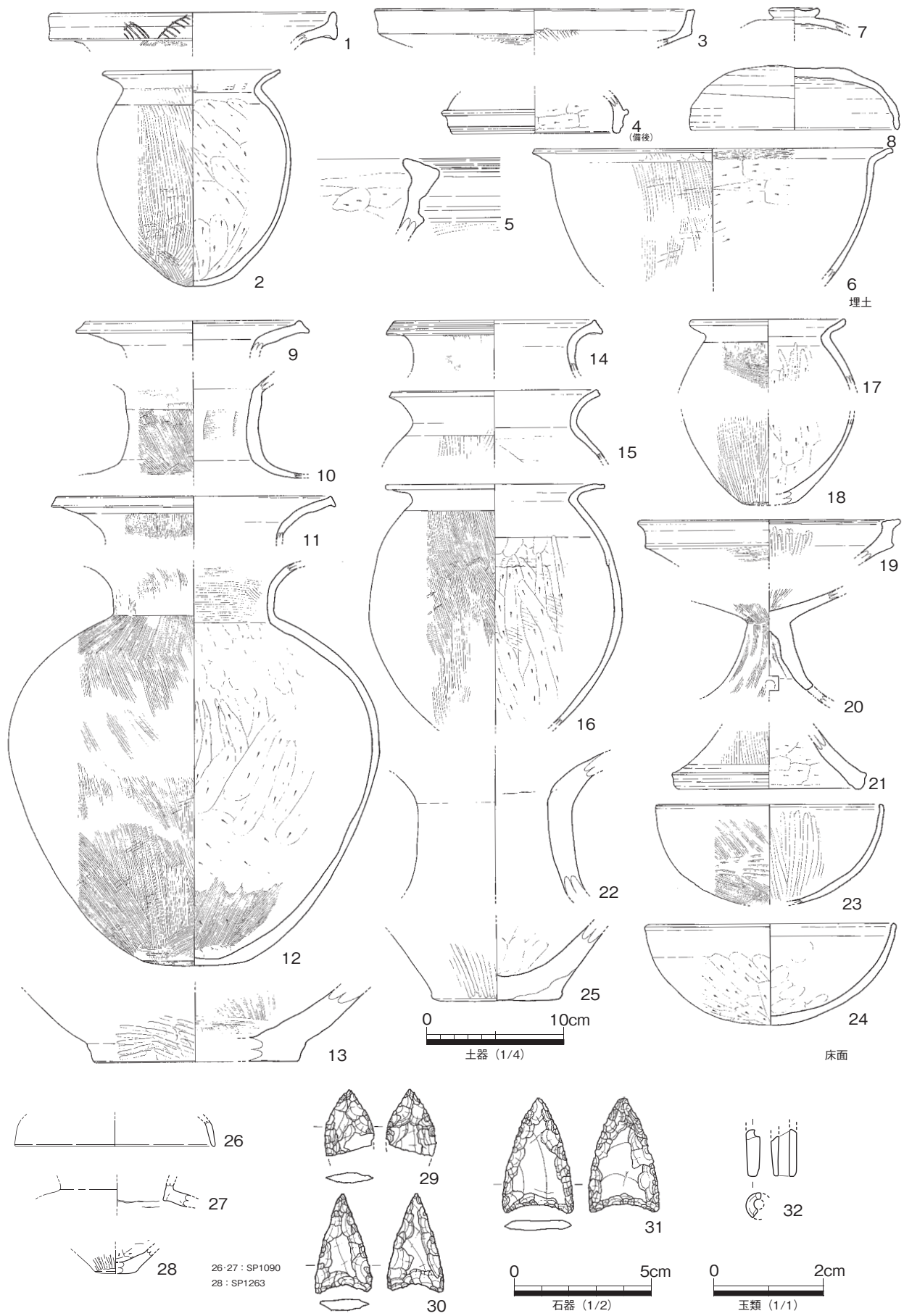


图 260 T 区 SH1008 出土遺物

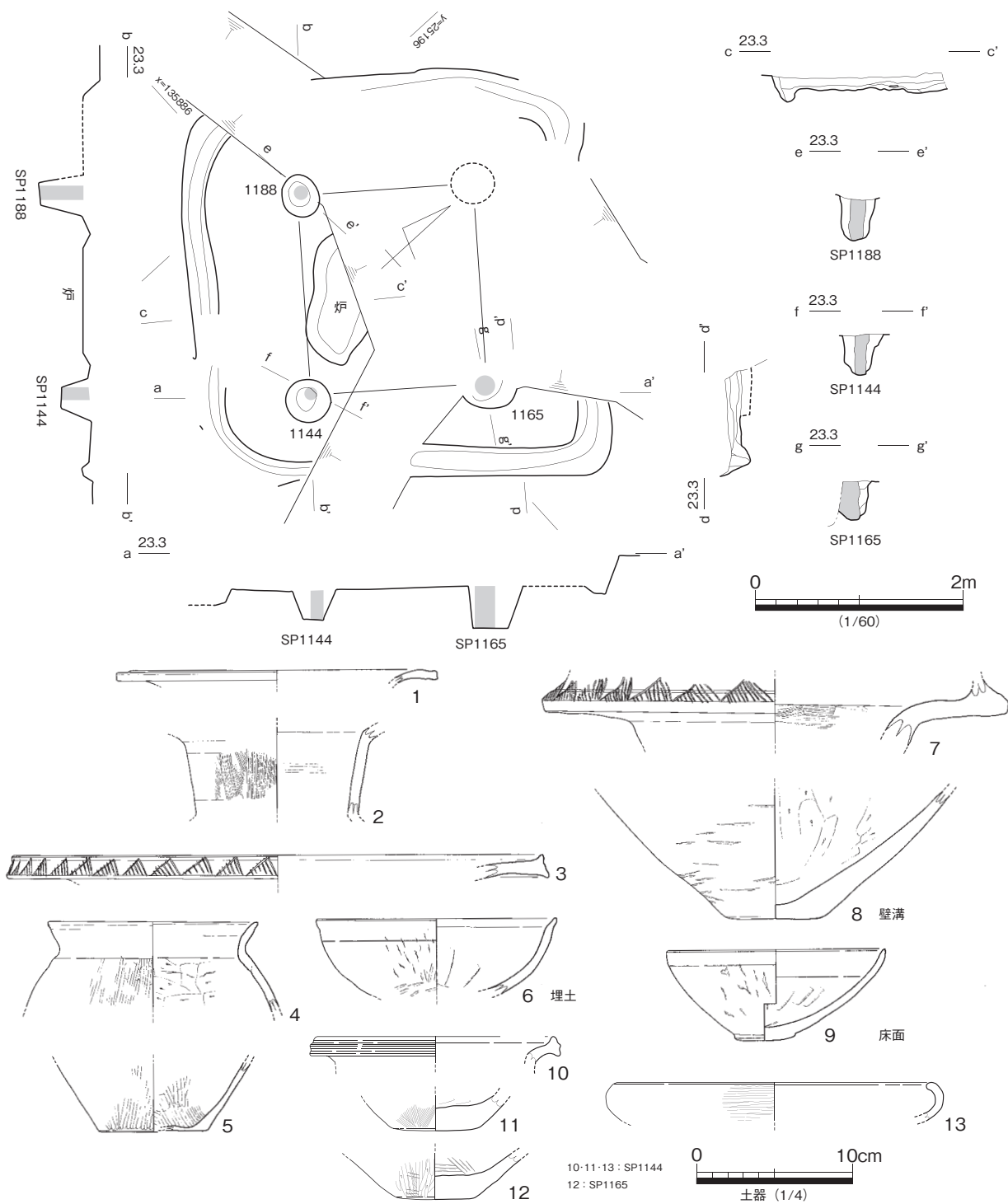


図 261 T 区 SH1019 平・断面・出土遺物

T 区 SH1019 (図 261)

T 区西部で確認した竪穴住居跡であり、古墳後期の SH1018 に切られる。住居北東部を攪乱坑により滅失するが、平面形は一辺が 3.9 ~ 4m の隅丸方形の平面形を復元でき、4 基の支柱穴を推定することができる。南側の支柱穴 SP1188 と SP1144 を結んだライン上やや北側に、隅丸長方形の浅い土坑が検出された。炭化物で満たされていることから、本住居に伴う炉跡と考える。

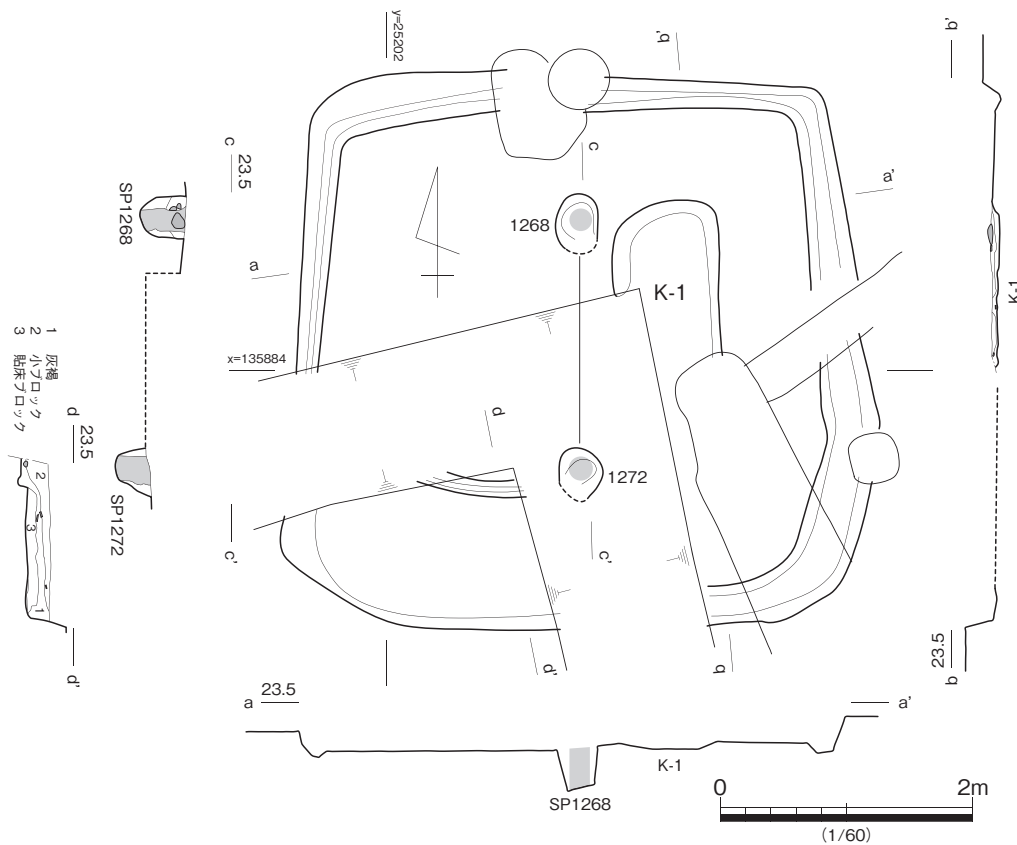


図 262 T 区 SH1022 平・断面

図 261-1 ~ 5 が覆土、図 261-7 ~ 9 が床面及び壁溝、図 261-10 ~ 13 が主柱穴からの出土資料である。床面・壁溝出土資料には、明確な平底を残す鉢 (図 261-9) がある一方で古墳前期前半期まで下る複合口縁壺 (図 261-7) がみられる。覆土出土資料では、鋸歯文を施す広口壺口縁 (図 261-3) や口縁部反転に伴う頸部内面の稜線の位置が下がった甕 (図 261-4)、口縁端部が斜め上方に短く屈曲する鉢 (図 261-6) があり、これらも古墳前期前半期まで下る資料である。一部に古相を示す資料を含むが、年代的に下限を示す一群を評価して、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。

T 区 SH1022 (図 262・263)

T 区東部で検出した竪穴住居跡で、一辺が約 4.5m の方形を呈し、2 基の主柱穴をもつ。住居内南部で僅かながらベッド状遺構に伴う壁溝と、その段差を確認していることや、主柱穴及び炉がやや北側に偏ることから、南側のみベッド状遺構が敷設されたと考えられる。埋没土は、小規模な地山塊が多く含まれるものを主体としており、廃絶時に一気に埋め戻されたと見られる。床面上には、2 か所に分かれて土器群が確認された。

図 263-1 ~ 18 は覆土、図 263-19 ~ 21 は床面、図 263-22 ~ 24 は主柱穴から出土した土器群である。ここでは、覆土出土の甕 (図 263-9 ~ 11) や鉢 (図 263-12 ~ 14) の形態から、本住居は弥生終末期中段階に廃絶したものと推定しておきたい。

T 区 SH1023 (図 264)

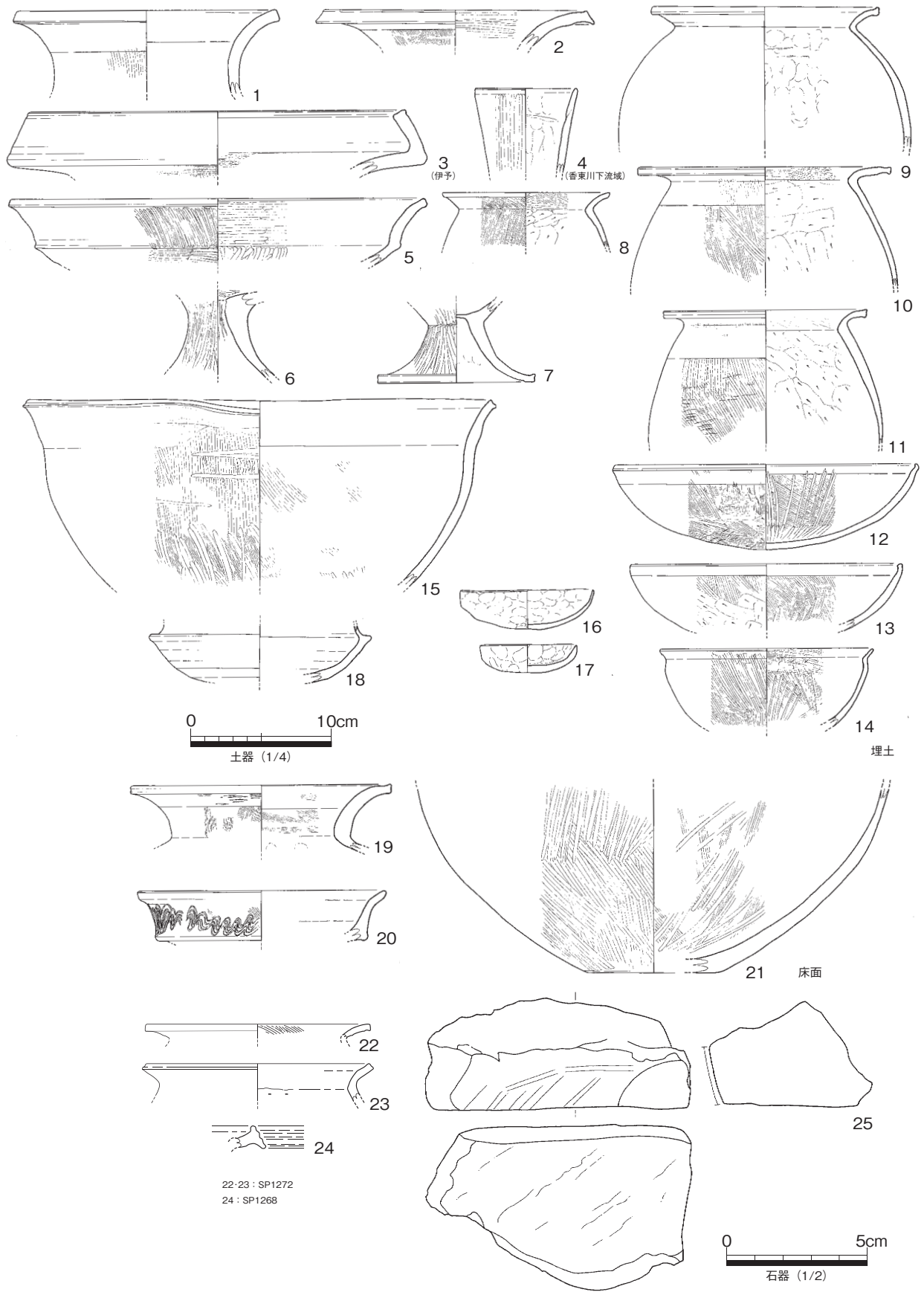


图 263 T 区 SH1022 出土遺物

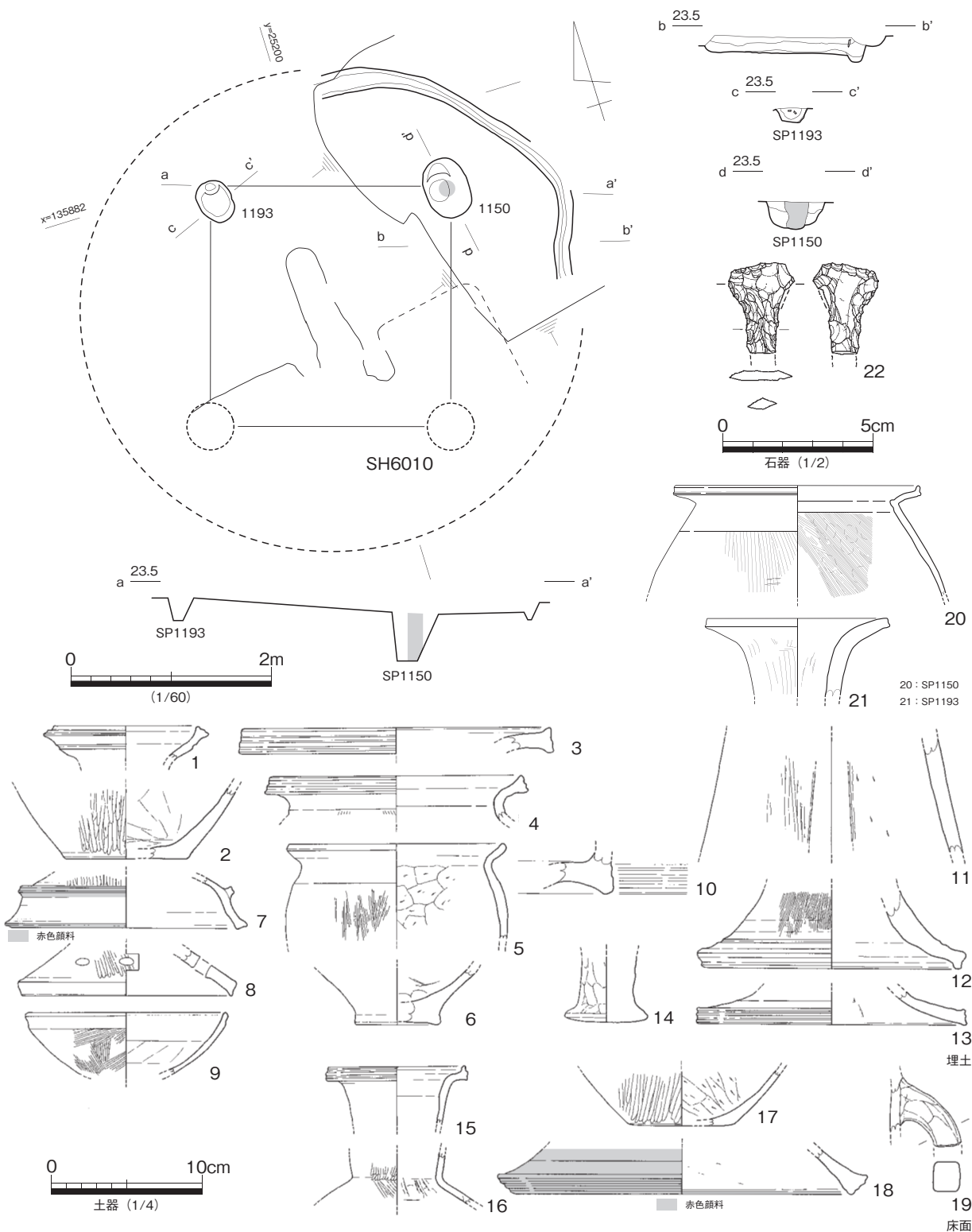


図 264 T 区 SH1023 平・断面・出土遺物

T 区東部で検出した竪穴住居である。古墳時代後期の V 区 6010 に切られ、弥生中期後半期の SH1096 を切り込む。住居北東部に相当するとみられる円弧を描く壁溝及び掘り方を確認し、図示した 2 基の支柱穴の南側にもう 2 基想定し、4 基の支柱穴をもつ円形住居として捉える。炉跡の存在が予測される住居中央部は攪乱坑によって滅失するため、存在は不明となる。

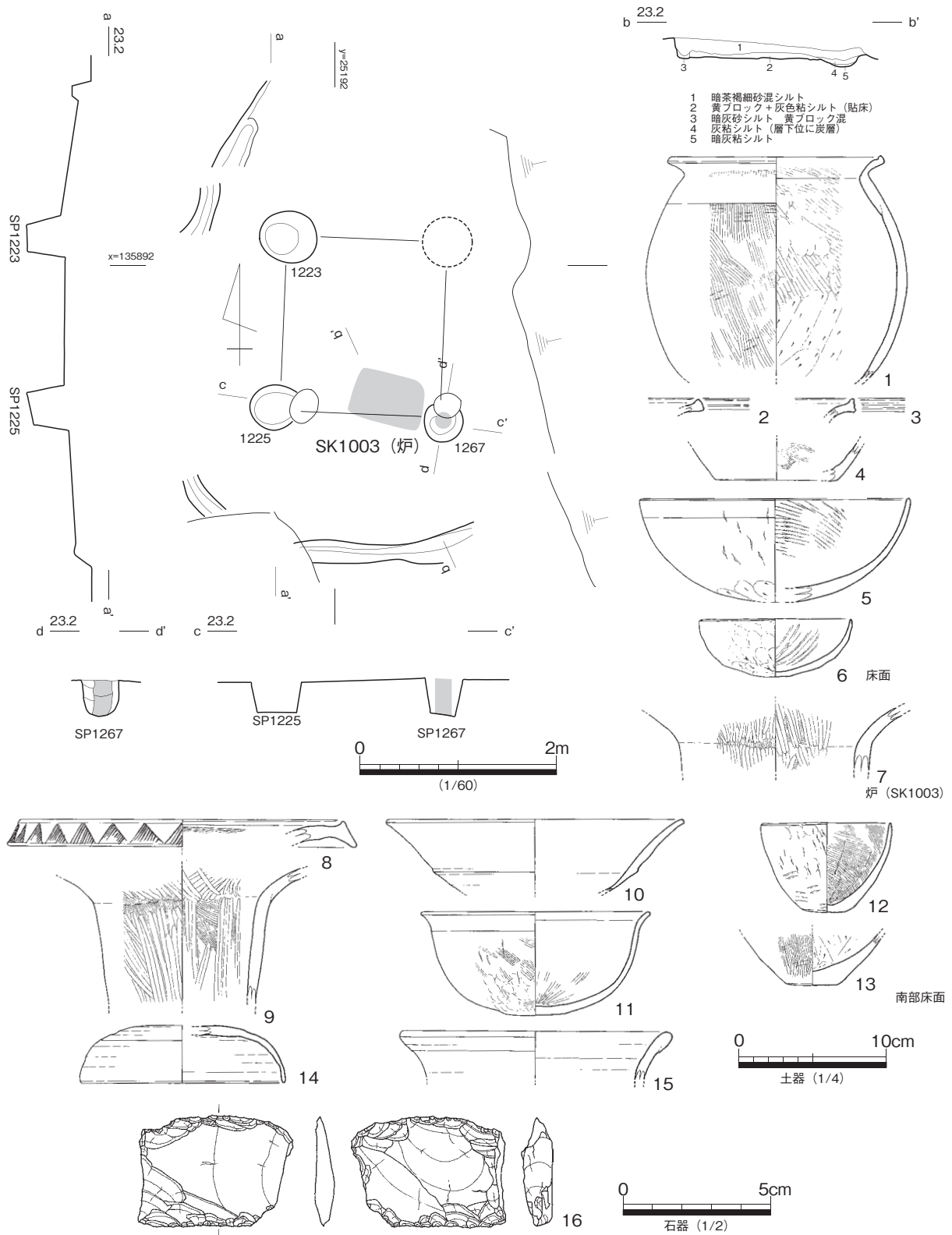


図 265 T区 SH1024 平・断面・出土遺物

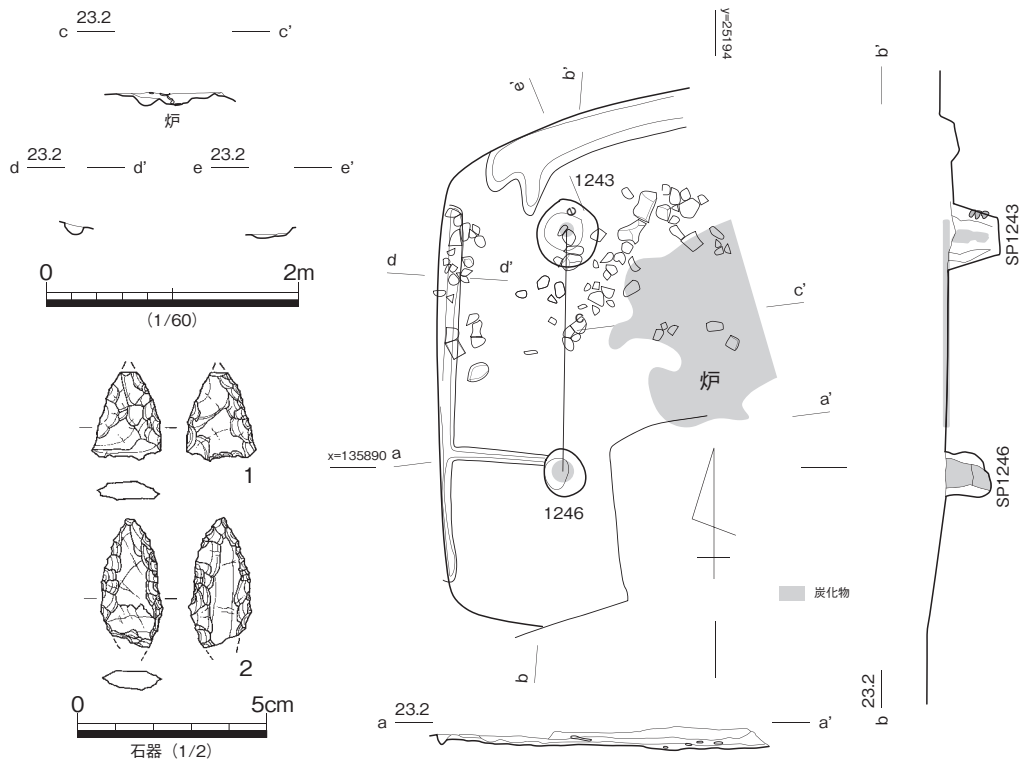


図 266 T 区 SH1028 平・断面・出土遺物 (1)

図 264-1～13 は覆土、図 264-15～19 は床面、図 264-20～21 は主柱穴から出土した土器群である。各資料とも弥生中期後半期と後期前半期が混在した様相を示す。この内、弥生中期後半期の資料は、本住居の下位に存在する SH1096 からの混入品と捉えられる。主柱穴出土の小型器台 (図 264-21) や床面出土の器台脚 (図 264-18)、覆土出土の装飾高杯脚 (図 264-7) の存在から、本住居は弥生後期前半中段階に廃絶したものと推定しておきたい。

T 区 SH1024 (図 265)

T 区北西部で確認した竪穴住居で、住居北側は H 区に一部跨る。住居東側に大きな攪乱部分が存在し、住居中央部は古代以降の条里型地割に伴う坪界溝である SD1014.1016.1001 によって切られ、住居西部を中心に弥生終末期の竪穴住居である SH1028 を切り込む。主柱穴の配置がやや東側に偏った配置を見せるが、現存する壁溝や柱穴配置からみて、一辺が約 4m の隅丸長方形住居に復元する。また、炉 SK1003 の詳細な平面及び断面の記録作成が行えていない。住居南側の壁際の床面上には、3 か所に別れて土器群の投棄が見られた。

図 265-1～6 は住居北部の床面から、図 265-7 は炉 SK1003、図 265-8～13 は住居南部の床面、図 265-14～19 は遺構検出作業中に出土した資料である。床面から出土した土器群の中で、広口壺 (図 265-8) 甕 (図 265-1) 鉢 (図 265-11) の形態から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと考えられる。

T 区 SH1028 (図 266～268)

T 区北部で検出した竪穴住居であり、古代以降の条里型地割坪界溝である SD1014.1016.1001 や古墳

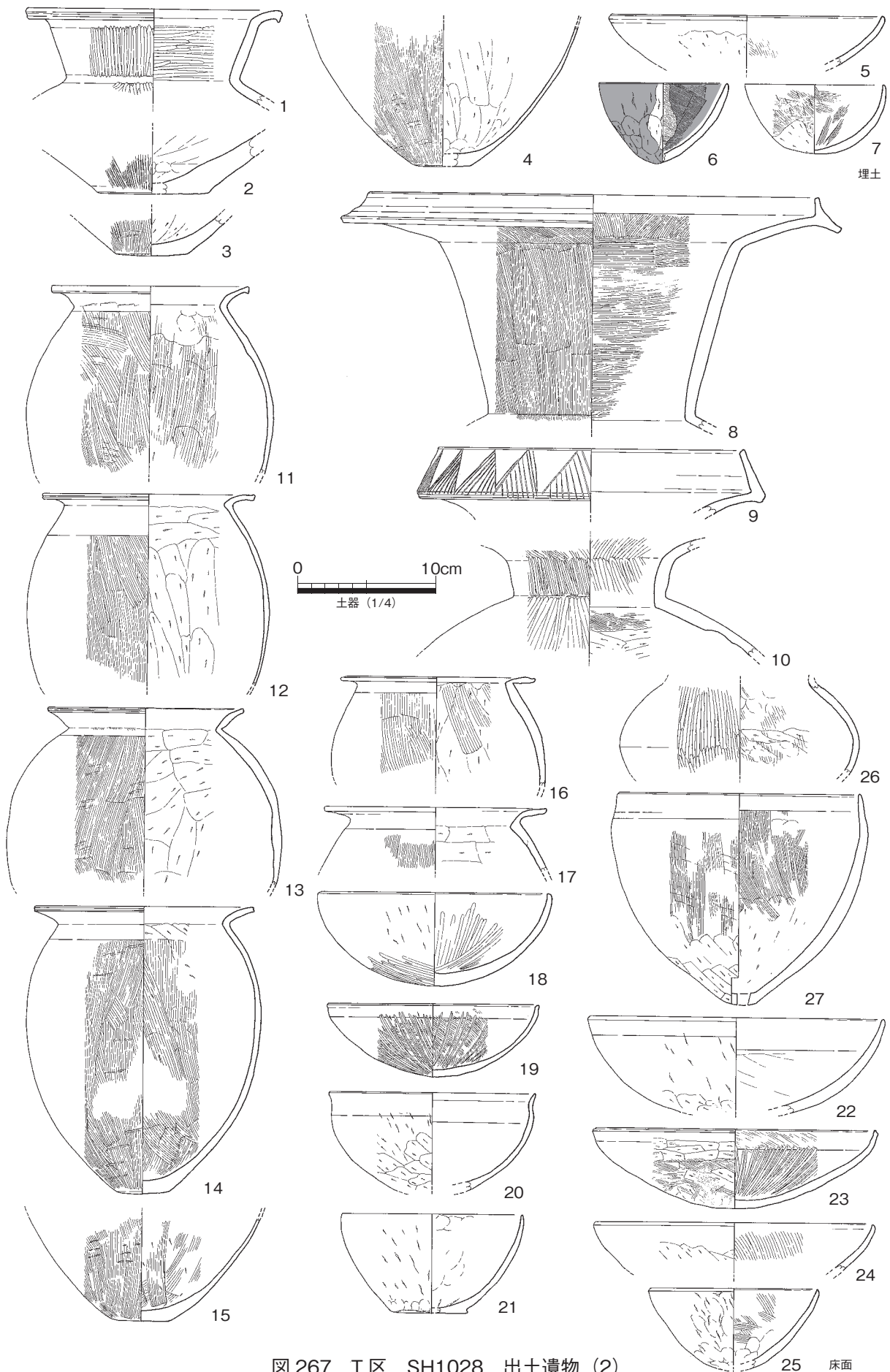


图 267 T 区 SH1028 出土遺物 (2)

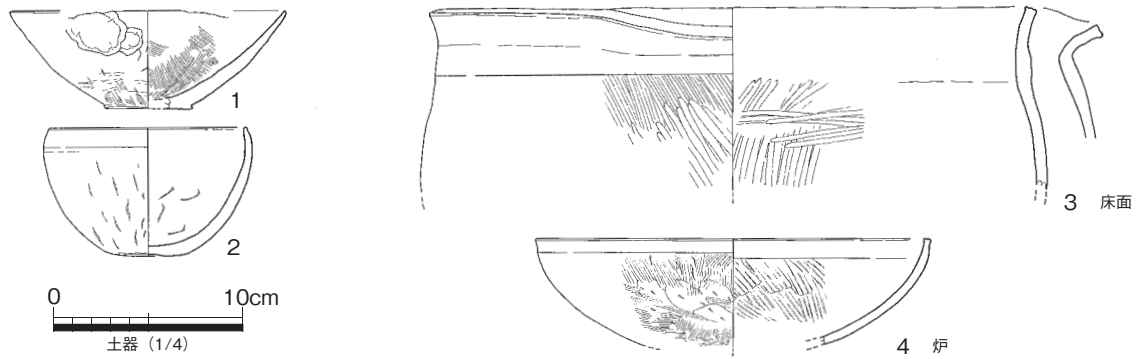


図 268 T 区 SH1028 出土遺物 (3)

前期前半期の SH1024 に切られる。住居東部が攪乱坑によって大きく削られることから全体形は不鮮明となるが、残存部からの推定により 4 基の主柱穴をもつ方形住居になると考えられる。現状の床面に、明確な炉跡の掘り込みが見られないが、住居中央部を中心に炭化物が広がる箇所が存在していることから、浅い不定形の落ち込みを伴う地床炉か、炭化物の広がりを炉跡からの掻き出しと推定し主柱穴 SP1246 の東側の攪乱部分にその存在を想定することもできよう。床面上には北側を中心に土器溜りが検出された。

図 267-1 ～ 7 は遺構検出作業中に出土した資料、図 267-8 ～ 27. 図 267-1 ～ 3 は床面の土器溜まり、図 268-4 は炉に関する炭化物集中範囲の下部で出土した資料である。また、遺構検出段階で出土した資料と床面の土器溜まりから出土した資料間で接合する個体が多いことを踏まえると、これらの資料は住居廃絶時に一括廃棄された資料と考えることができる。図 267-6 は、弥生終末期新段階から古墳前期前半期に特徴的に見られる尖底鉢であり、破片間で明確に色調を違えることから、焼成破裂土器と考えられる。図 267-8 は広口壺の口縁端部を上下に拡張することにより複合口縁壺とするものであり、胎土中に雲母片を多く含む。甕 (図 267-11 ～ 17) は口縁部が間延びし、頸部内面の屈曲点も下がるなど、弥生終末期でも新しい属性をもつ。

図 267-14 は胎土や調整から図上で完形に復元した資料であるが、口縁部形態に比べて安定した平底の底部形態もつなど古相を示す属性をもつ。鉢 (図 268-1) は口縁部外面に連続する焼成破裂痕が確認できる。口縁端部上面を面取りし底部外面を削り込むことにより丸底化する鉢 (図 267-19.23. 図 268-4) は、弥生終末期新段階に特徴的にみられるものである。

これら一括廃棄された土器群の型式学的な特徴から、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと推定しておきたい。

T 区 SH1030 (図 269)

T 区南西部で検出した竪穴住居跡であり、一部 V 区に跨り、住居中央から南側は攪乱坑によって消滅する。壁溝や主柱穴配置から推定して、直径約 7m の中型の円形住居に復元できる。主柱穴は、図示した 3 基に加え住居の推定規模や現存する主柱穴間隔からみて、5 基の主柱穴を想定しておきたい。また、現状で炉は確認できない。

図 269-1 ～ 21.23 は床面、図 269-22 は主柱穴 SP1095 からの出土資料である。

出土遺物は、一部の混入品の須恵器 (図 269-19.20.21) を除いて、長頸壺 (図 269-2.3) 器台 (図 269-9.7)

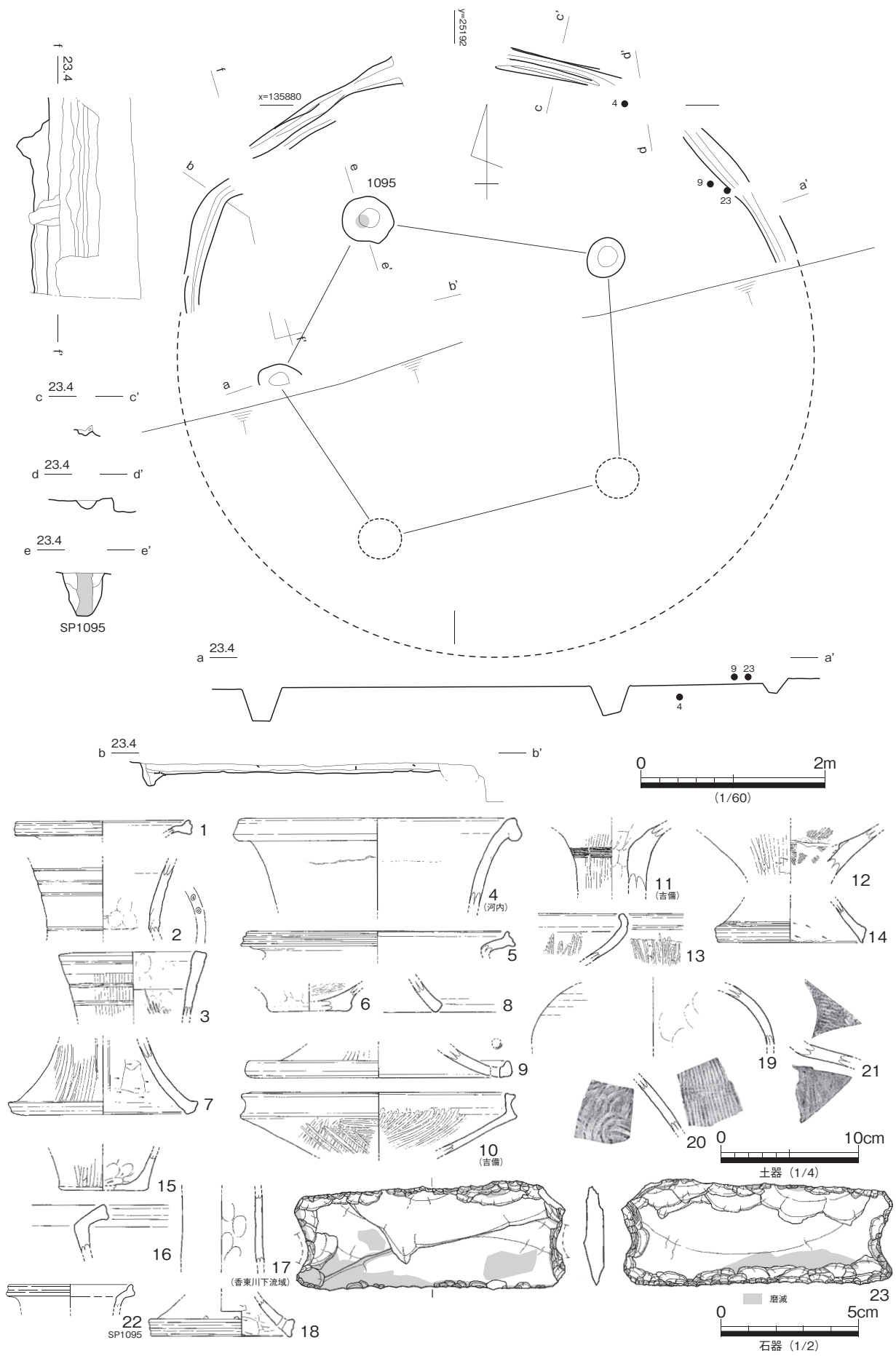


図 269 T区 SH1030 平・断面・出土遺物



图 270 W·U·V 区 平面

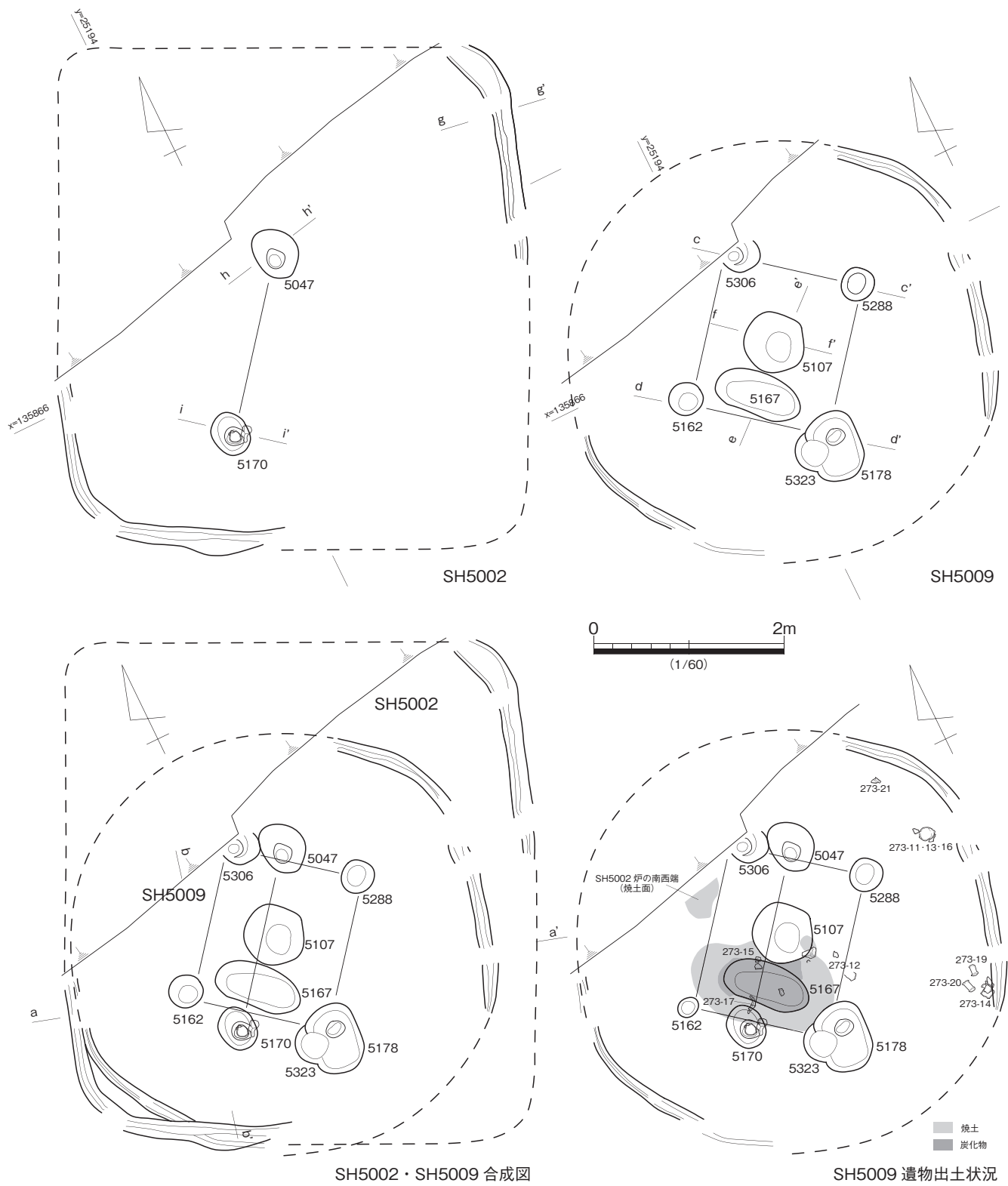


図 271 U 区 SH5002・SH5009 平面

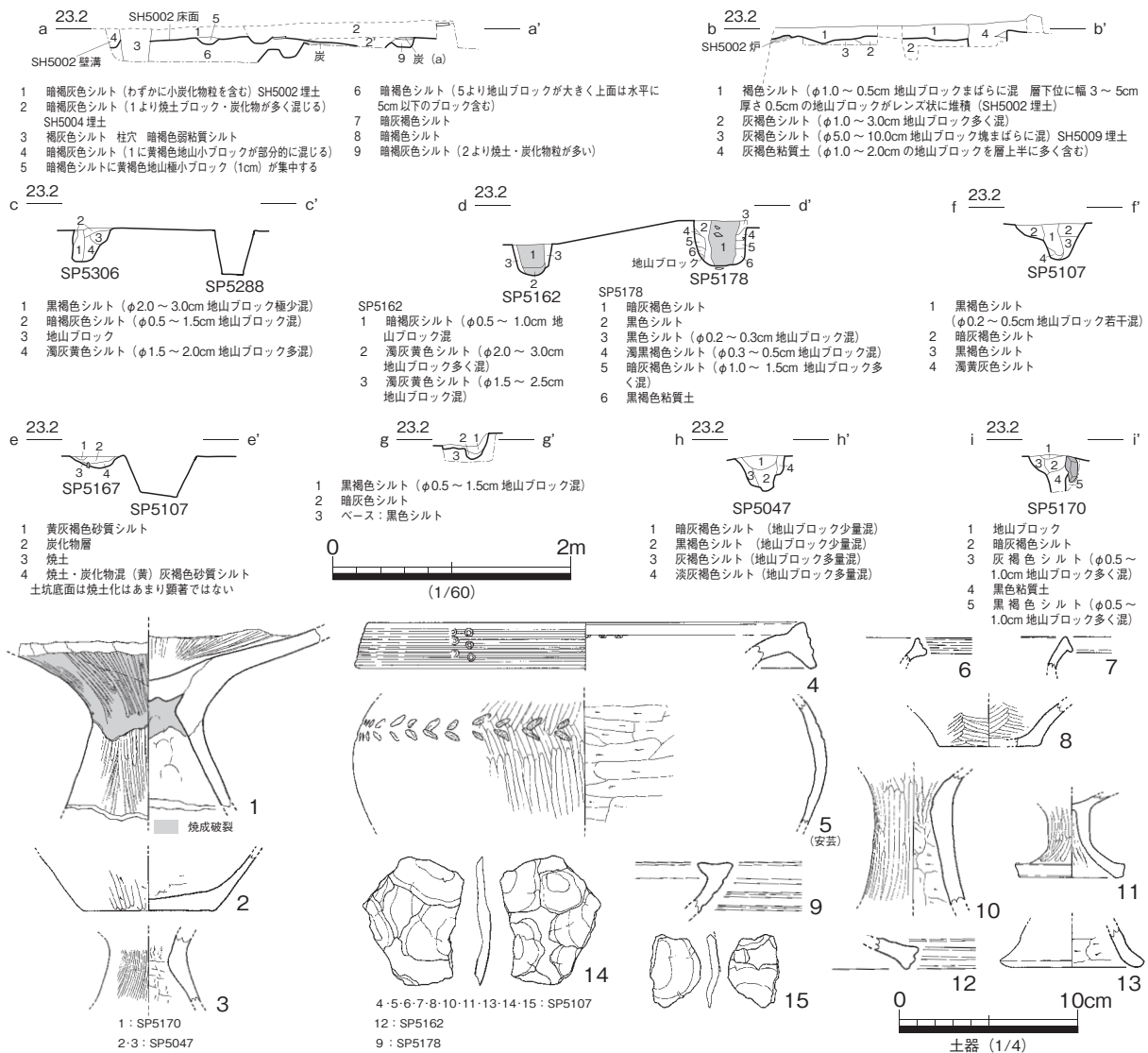


図 272 U 区 SH5002・SH5009 断面・出土遺物 (1)

高杯 (図 269-12.13.18) などを典型として弥生後期前半古段階にまとまることから、本住居の廃絶年代を示す資料として評価できる。図 269-4 の垂下口縁をもつ広口壺は、形態や粗い角閃石粒を多く含む胎土からみて生駒西麓産とみることができ、西ノ辻 N 式かそれを若干下る時期に比定される。図 269-23 はサヌカイト製打製石庖丁であり、刃部を中心に摩滅痕が確認できる。

U 区 SH5002・SH5009 (図 271 ~ 273)

U 区中央部で検出した竪穴住居である。本住居及び周辺は、基本層序のⅢ層が厚いことと、下位に存在する SD5002 の越流堆積物の上面に構築されていることもあり、遺構検出作業が難航した。当初、SH5002 の長方形プランを検出し掘り下げを開始したところ、床面の確認できないまま下層の SH5009 の平面プランを検出しているなど、現地調査段階での遺物の取り上げや記録作成に不備があることは否めない。ここでは、SH5002・SH5009 の平断面や出土遺物を同時に提示することにより、関係性を整理する。現状からは、SH5002 は 5 × 5.4m の長方形の平面形をもち、位置がやや南西部に偏っている。

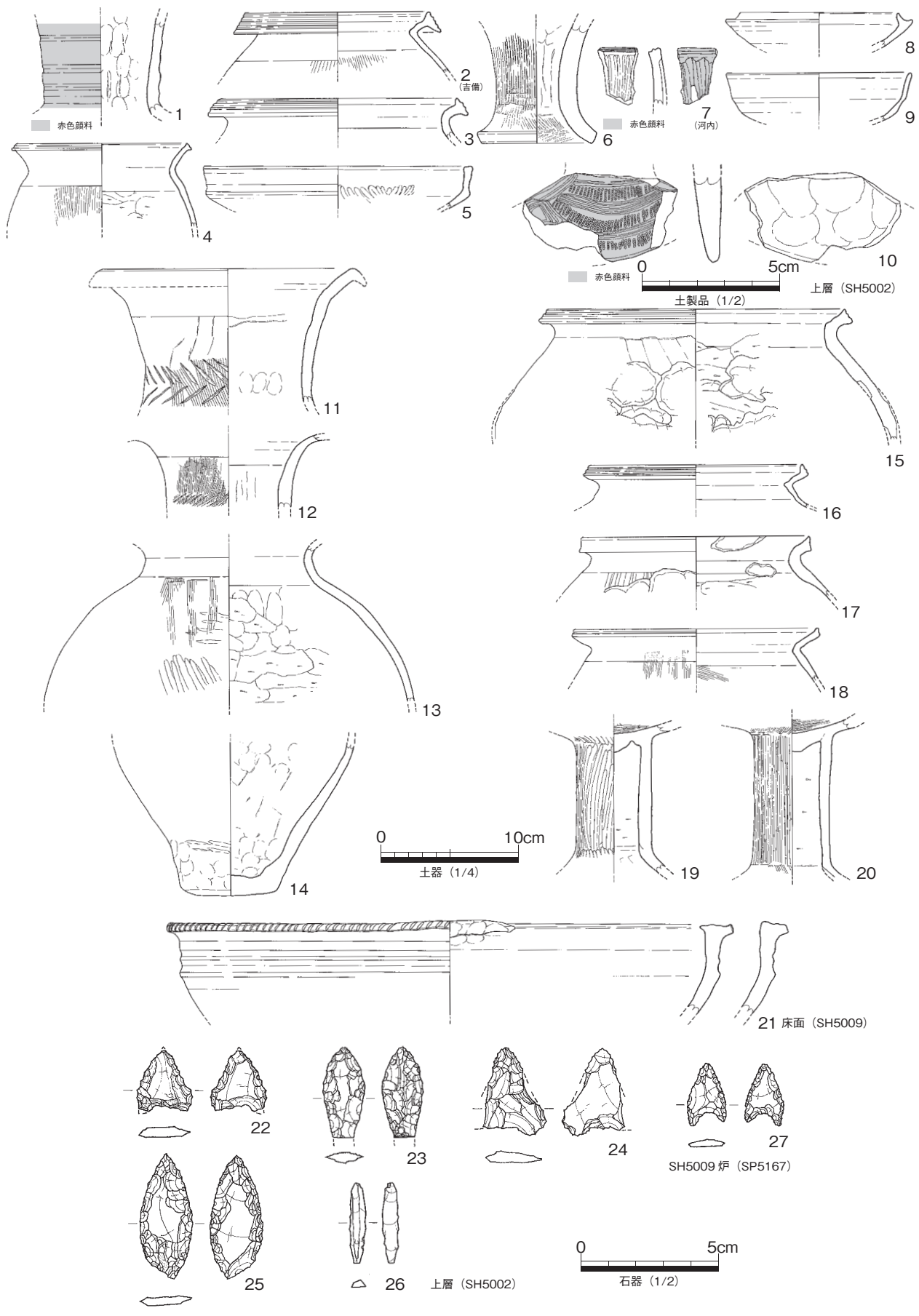


图 273 U 区 SH5002 · SH5009 出土遺物 (2)

るものの、深度や埋没土からみて SP5047 と SP5170 を主柱穴と推定する。炉跡等の付属施設については、前述したとおり床面を見誤っており、明らかにできない。

SH5009 は、住居南西部で SH5002 に切られ、住居東部で弥生中期後半期の SH5004 を切り込む。残存する壁溝等から直径 4.5m の円形を呈し、図示した 4 基の主柱穴をもつ。住居床面には層厚約 10cm の貼床土が見られ、中央に 2 基の炉跡を敷設する。SH5002 の床面より中央の SP5107 の方が深く、南側の楕円形を呈する SP5167 は浅い灰穴炉であり、周囲の床面に焼土・炭化物を伴う。炉跡周辺と東部の壁際から土器片が散発的に出土した。

図 272-1～3 は SH5002 主柱穴、図 273-1～10 は SH5002 の覆土から出土した土器群である。図 272-4～12 は SH5009 主柱穴、図 273-11～21 は SH5009 床面から出土した土器群である。

SH5002 出土遺物は、一部の混入品(図 273-8.9)を除き弥生後期前半古段階の資料が中心となるが、時間的に後出し後期前半でも新段階に位置付けられる甕(図 273-4)を伴う。SH5009 出土遺物は、厚手の口縁をもつ甕(図 273-17)が時間的に後出する形態をもつが、弥生後期前半古段階のものが主体となる。これらの出土遺物や遺構の層位関係から、SH5009 を弥生後期前半古段階、SH5002 を弥生後期前半新段階に位置付ける。SH5002 主柱穴から出土した台付鉢(図 272-1)は破片間で明確に色調を違えることから、焼成破裂土器と考えられる。SH5009 主柱穴から出土した甕胴部(図 272-5)は外面の最大径付近に綾杉状の列点を施す資料で、施文位置は異なるものの安芸地域からの影響とみることができる。SH5002 覆土から出土した台付鉢(図 273-7)は、断面四角形の肥厚する口縁部下に縦位の棒状浮文を施し、外面に赤色顔料を塗布する。口縁端部上面に凹線文を施す点は異なるが、器形や棒状浮文からみて近畿地方の影響をうけた模倣土器の可能性が高い。図 273-10 は分銅型土製品であり、櫛描文原体による列点・弧線を描くもので、赤色顔料の塗布が確認できる。SH5009 床面から出土した甕(図 273-15.17)は内外面に連続する剥離痕があり、焼成破裂土器と考えられる。図 273-19.20 は柱状脚をもつ高杯であり、装飾高杯となる可能性が高い。

図 273-22～26 は SH5002、図 273-27 は SH5009 の炉 SP5067 から出土した石器である。図 273-26 の縦長剥片は、白色に風化しておらず楔形石器の碎片と考えられる。

U 区 SH5006 (図 274)

U 区北西部で検出した竪穴住居である。弥生時代前期の埋没が推定される SR5001 を切り込む。本住居上位の大部分に攪乱が及ぶため、周辺遺構との切り合い関係を明らかにすることはできない。現状では、円弧状の壁溝の一部と炉跡のみ確認できる。壁溝の形態から、直径 3.6m 程の小形円形住居に復元できよう。復元規模から判断して、掘り方内部に主柱穴をもたない可能性が高い。また、壁溝外の周辺においてそれに対応する柱穴を検討したが確定するには至らなかった。炉跡は中央やや北寄りに存在する楕円形の土坑であり、底面に炭化物が広がる。炭化物の広がり周囲には、高さ 10cm 弱の土手が置土によって構築されている。

図 274-1～7 は床面、図 274-8～10 は炉からの出土土器である。炉出土土器が弥生後期前半古段階の様相を示すが、床面出土の高杯(図 274-6.7)の形態から、本住居は弥生後期前半新段階に位置付ける。

U 区 SH5007 (図 275)

U 区中央部と W 区北部に跨って検出した竪穴住居であり、SH5002.5004.5009 を切り込む。住居中央

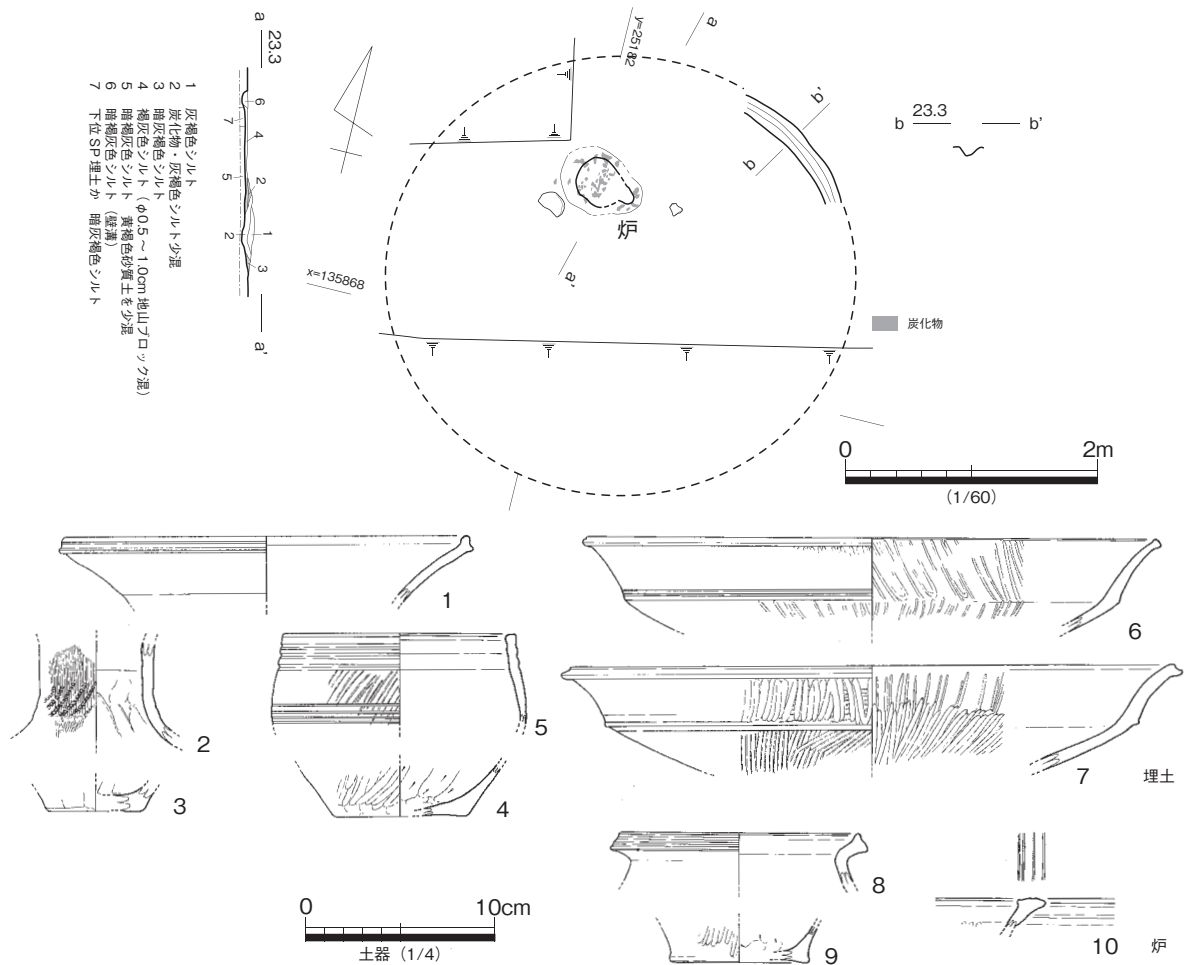


図 274 U 区 SH5006 平・断面・出土遺物

部の大半を攪乱坑によって滅失する。主柱穴や炉は不明であるが、 $5.4 \times 4.2\text{m}$ の長方形を呈するものと見られる。

図 275-1～17 は本住居からの出土遺物である。一点のみ須恵器無蓋高杯脚 (図 275-17) が認められるが、混入品と考えられる。時期決定に有効な資料は、比較的残存率が高い鉢 (図 275-13.14) 甕 (図 275-6.7) の形態からみて、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものと考えられる。高杯脚 (図 275-10) は下方に延びる形態をもつことから、備後地域からの搬入・模倣土器と考えられる。

U 区 SH5011 (図 276～283)

U 区中央部で検出した竪穴住居である。住居北側及び南側の一部を攪乱坑で滅失するが、直径 8.6m を測る大形円形住居とみられる。住居壁面は約 0.25m 程残存しており、中央に炉と考えられる K-1.2 が見られる。K-1.2 に切り合い関係はみられず同時併存する炉跡と考えられる。K-1 は焼土塊と若干の炭化物を含む比較的深い土坑であり、K-2 は浅い灰穴炉となる。主柱穴は炉を中心とした周辺に 6 基確認されたが、更にその外側にもう一組円形に回る柱穴列が検出された。この二つの主柱穴の組み合わせを拡張等の建て替えに伴うものとも考えることもできるが、本住居が 8m を超える大形であることや貼床等に更新した様子が見られないことを踏まえるならば、二つの柱穴列は同時併存するものと考えたい。

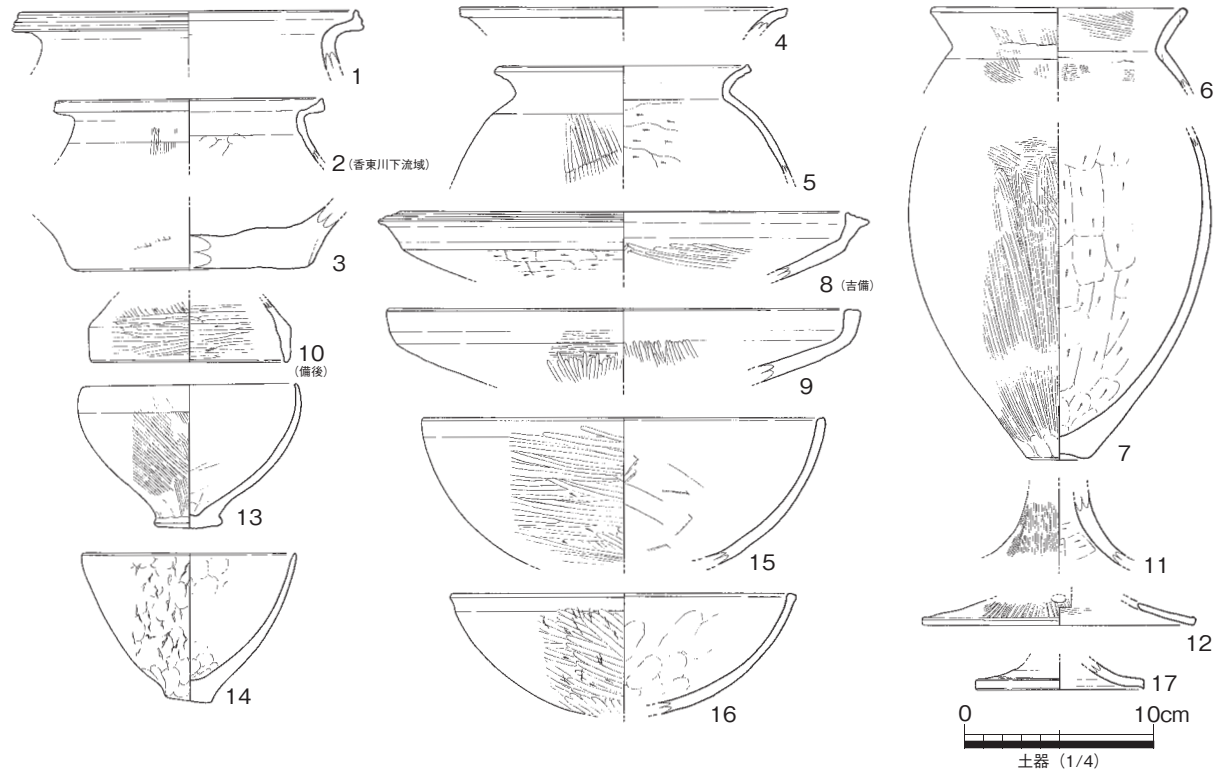
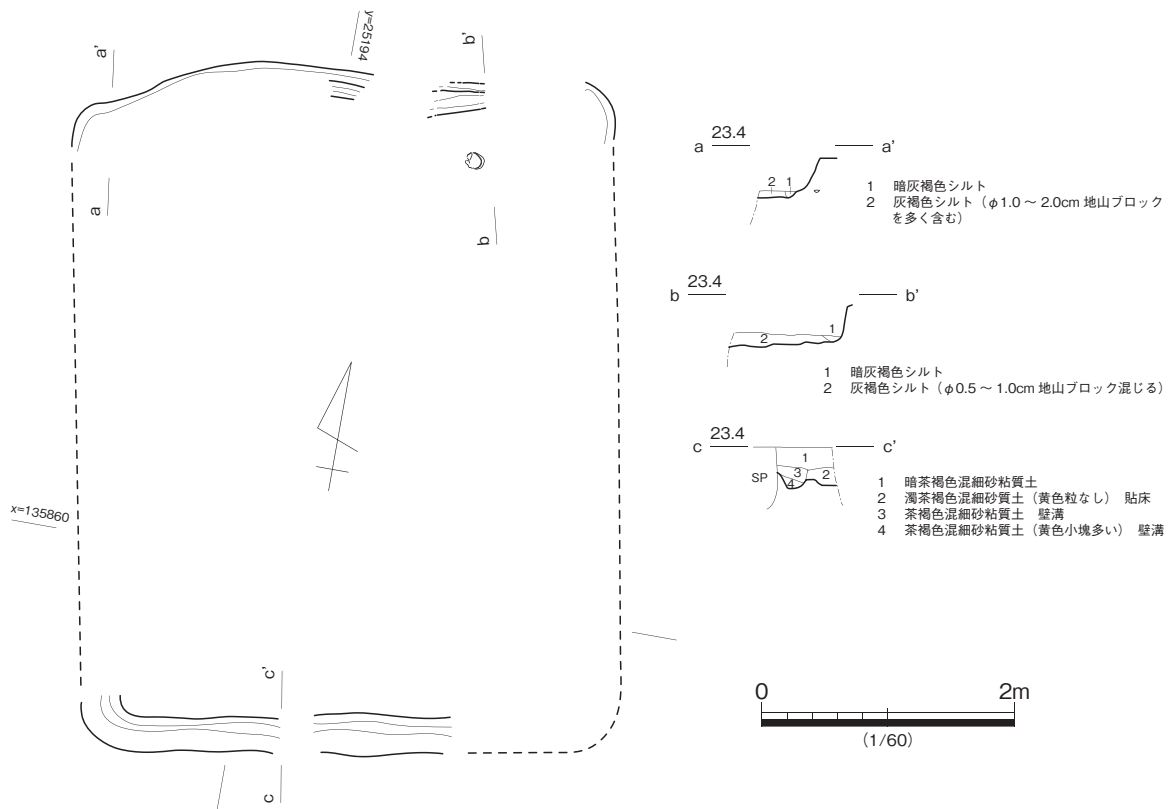
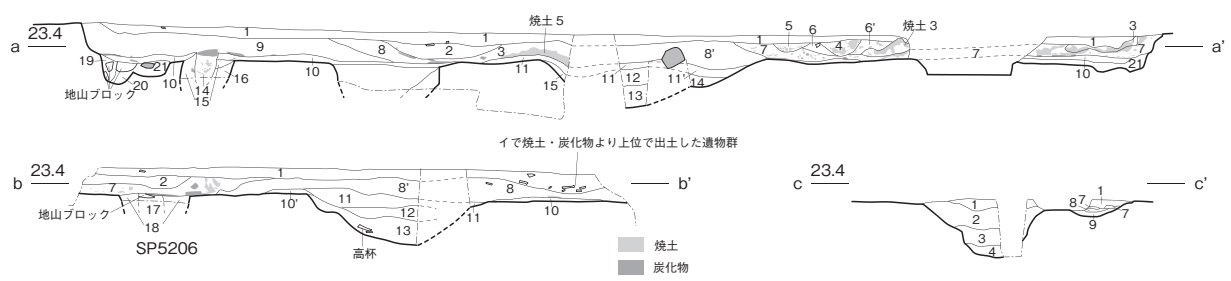
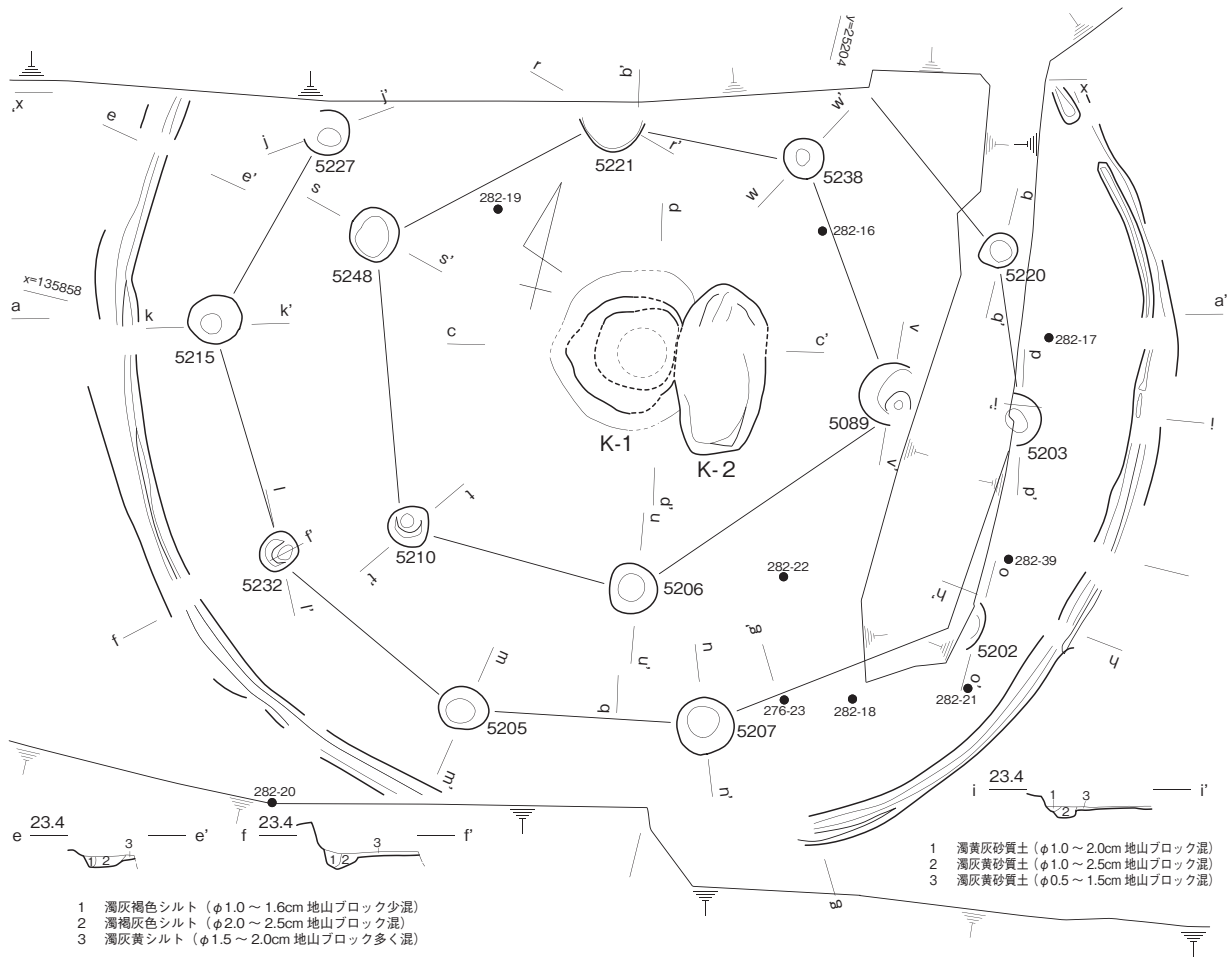


図 275 U 区 SH5007 平・断面・出土遺物



- 1 濁灰褐色シルト (φ1.0~1.6cm 地山ブロック少混)
- 2 濁暗灰色シルト (φ2.0~2.5cm 地山ブロック混)
- 3 濁灰黄シルト (φ1.5~2.0cm 地山ブロック多く混)
- 4 暗灰褐色砂質土 (φ1.5~4.0cmの明赤橙色焼土ブロックが多く混入)
- 5 暗暗褐色砂質シルト (φ0.5~1.0cmの淡赤橙色の焼土ブロックが多く混入)
- 6 灰色砂質シルト
- 6' 灰色砂質シルト (φ1.0~2.5cmの淡赤橙色のよく焼けた焼土ブロックが少し混入)
- 7 濁暗灰褐色砂質土 (φ0.5~1.5cmの赤橙色焼土ブロックが多く混入 φ0.2~0.5cmの地山ブロック極少混)
- 8 濁暗灰褐色砂質土 (φ1.0~2.5cmの淡赤橙色焼土ブロック混)
- 8' 暗暗褐色砂質土 (φ0.5~1.0cmの地山ブロック混)
- 9 暗暗褐色砂質シルト (φ0.2~0.5cmの炭粒、0.5~1.0cmの赤橙色焼土ブロックを極少含む)
- 10 濁暗灰色シルト (厚さ0.2~0.5cm、幅1.5~3.0cmの地山ブロックがレンズ状に多く混じる φ0.2~0.5cmの炭粒が極少混じる)
- 10' 層と類似するがベースが砂質土のためか砂質が強い
- 11 濁暗褐色砂質土 (φ0.5~1.0cm 炭粒、φ1.0~3.0cm 地山ブロックが多く混入) (炉の最終機能面 この層に埋置された石がある)
- 12 暗褐色シルト (φ0.2~0.5cm 地山ブロックが少し混入)
- 13 暗褐色シルト (φ0.5~3.0cm 地山ブロック φ0.2~0.5 炭粒・赤褐色焼土粒が多く混入)
- 14 濁暗褐色砂質シルト (φ0.2~0.5cm 炭粒、φ0.3~1.5cm 赤褐色焼土を多く混入 炭面上に炭化材)
- 15 濁暗褐色砂質土 (φ0.3~1.0cm 地山ブロックが多く混入) (裏込め土)
- 16 濁暗褐色シルト 濁暗褐色砂質土が少し混入
- 17 暗褐色砂質シルト (φ0.2~0.5 炭粒 φ0.3~0.5 赤褐色焼土粒が多く混入 主柱穴柱痕 層上位の大きなブロックは柱抜き取り後に混入したもの)
- 18 濁暗褐色シルト 濁暗褐色砂質土が少し混入 (主柱穴裏込め)
- 19 暗暗褐色砂質シルト (φ2.5~7.0cmの地山ブロック混入)
- 20 暗暗褐色砂質シルト
- 21 濁暗褐色黄色砂質シルト+濁暗褐色砂質シルト

- 1 濁黄灰砂質土 (φ1.0~2.0cm 地山ブロック混)
- 2 濁黄砂質土 (φ1.0~2.5cm 地山ブロック混)
- 3 濁黄砂質土 (φ0.5~1.5cm 地山ブロック混)

- 1 暗褐色砂質シルト (φ1.0cm~3.5cm 炭多く混)
- 2 暗褐色砂質シルト (φ0.5~1.5cm 地山ブロック極少混)
- 3 暗褐色砂質シルト (φ0.5~3.0cm 地山ブロック多混)
- 4 黒粘質シルト
- 5 淡灰黄色砂質土
- 6 濁暗黄色砂質土
- 7 炭化物層
- 8 暗褐色灰砂質土 (φ1.5~3.0cm 地山ブロック多く混)
- 9 暗褐色砂質土 (φ0.2~0.5cm 炭粒多混)

- 1 灰褐色シルト (φ0.5~1.0cm 地山ブロック混)
- 2 濁暗褐色砂質土 (φ0.2~0.5cm 地山ブロック極少混)
- 3 濁暗褐色砂質土 (φ0.2~3.0cm 地山ブロック混)

- 1 灰褐色シルト
- 2 濁暗褐色砂質土 (φ2.0~3.5cm 地山ブロック多く混)
- 3 濁暗褐色砂質土 (φ0.5~2.0cm 地山ブロック混)

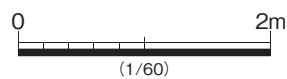


図276 U区 SH5011 平・断面

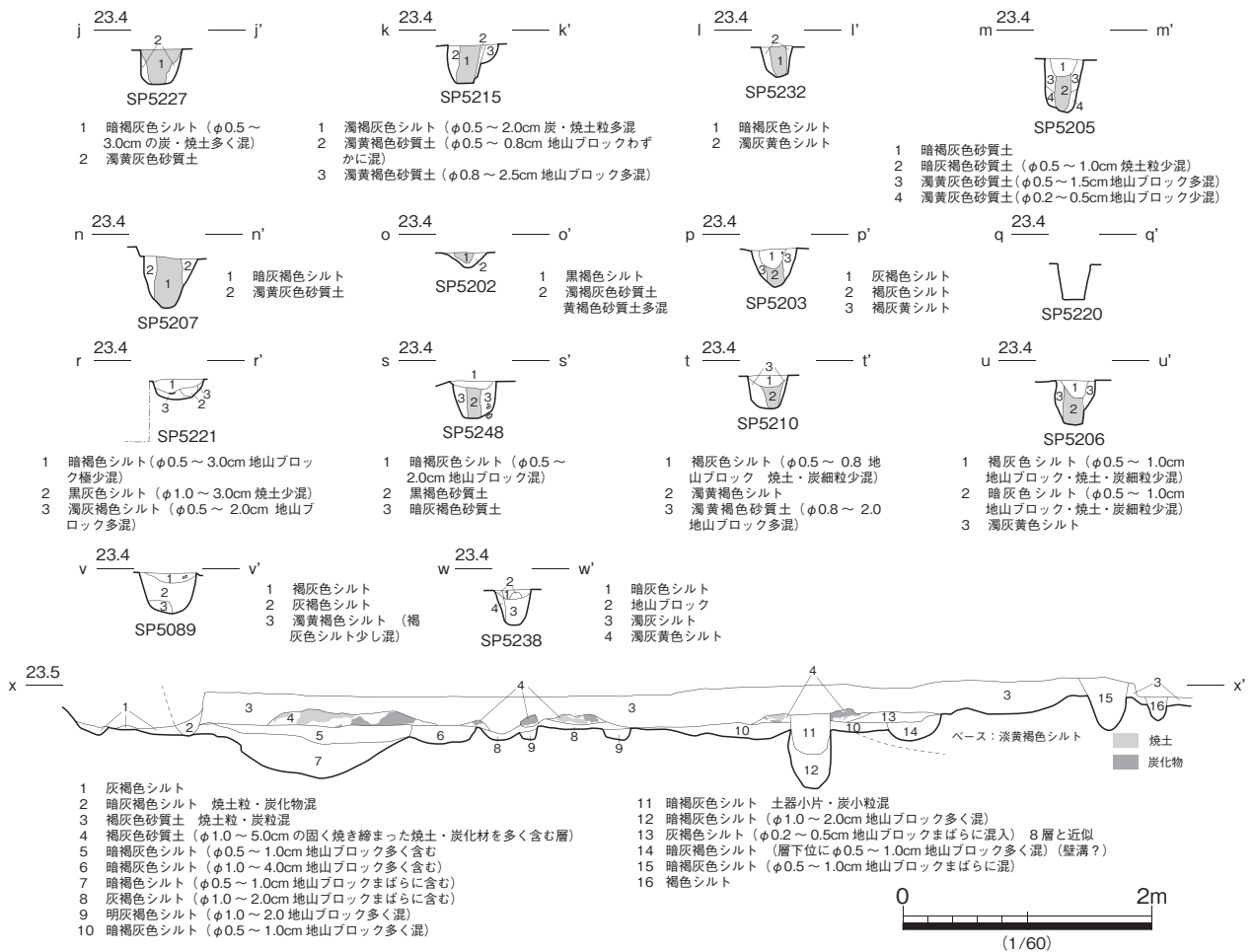


図 277 U 区 SH5011 断面

床面直上には焼土及び炭化材がほぼ全域に広がり、焼失住居の様相を呈する。炭化材は、部材状のものと、板状又は塊状を呈するものが見られる。部材状のものの中には、壁際から住居中心に向かう状態のものと、内側の支柱穴を繋ぐように横たわるものがある。炭化材の残存状態が良好ではなく仕口等の加工は確認できないが、前者は梁や桁を、後者は垂木を想起させる。また、焼土塊は大形のものも多く、層位的に炭化材より上位で確認されている。住居の土屋根等に由来する可能性が高いが、問題は出土位置及び範囲が住居中央部にまで及ぶ点である。構造材の崩落とともに移動・飛散した状況が推測されるものの、焼土塊の分布状況を考慮すると、屋根部のかなりの高さまで土葺きであったことも考えられよう。炭化材・焼土塊より下位の床面上では、完形に近い土器群や、ガラス玉などの装身具、銅鏃、台石が出土している。

出土遺物は、炭化材・焼土塊が多く見られる土層を境にして、上位と下位の大きく二つの層位区分で取り上げた。図 279 は上層、図 280 と図 281 は、焼土・炭化物より下位となる床面、図 282-1 ~ 3 は炉、図 282-3.4 は貼床土、図 282-5 ~ 14 は支柱穴から出土した土器群である。時期決定に有効な焼土・炭化物より下層の床面出土遺物の中でも残存率の高い個体を見ると、甕 (図 280-21) や高杯 (図 280-27、図 281-5) 器台 (図 281-8) 鉢 (図 281-10 ~ 13) などは弥生後期初頭から時間的にやや後出する属性を備えている。炉 K-1 出土の高杯 (図 282-1) も杯部がやや丸みを帯びて深くなる形態をもち、焼土・炭化物より下層の他の資料群と同様の傾向を示す。これらの出土遺物より、本住居は弥生後期前半中段階に廃絶



図 278 U 区 SH5011 遺物出土状況

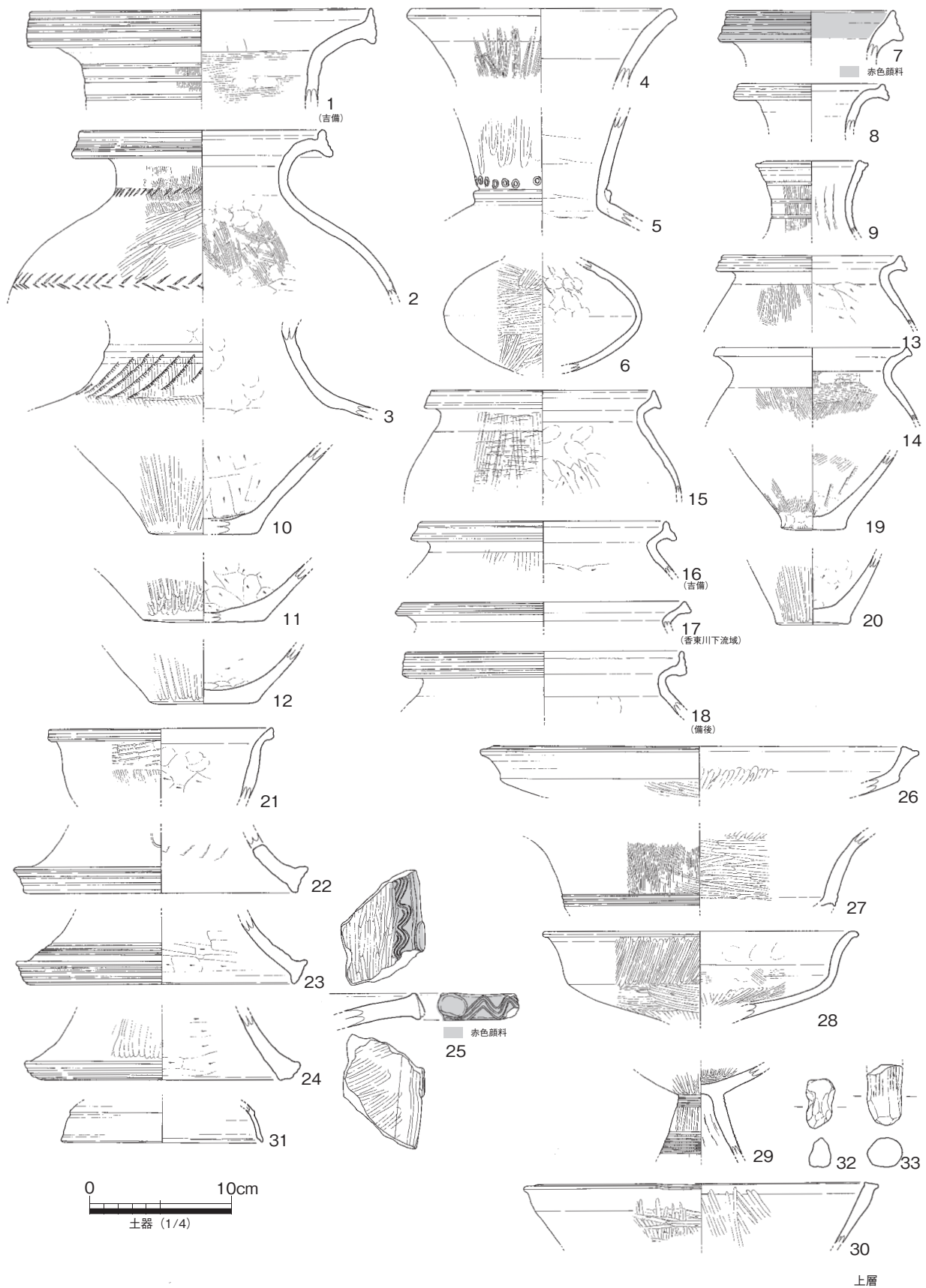


図 279 U 区 SH5011 出土遺物 (1)

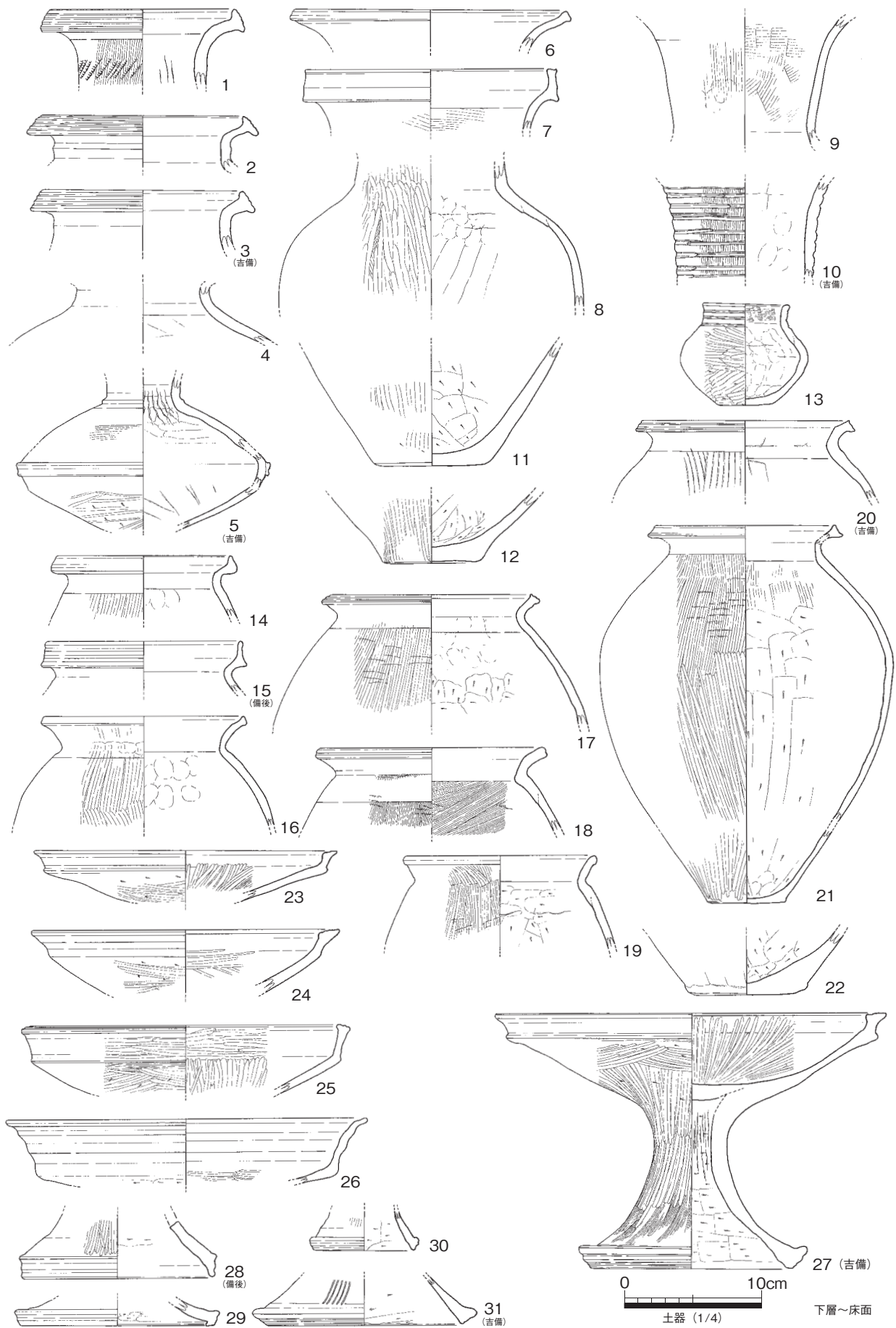


図280 U区 SH5011 出土遺物 (2)

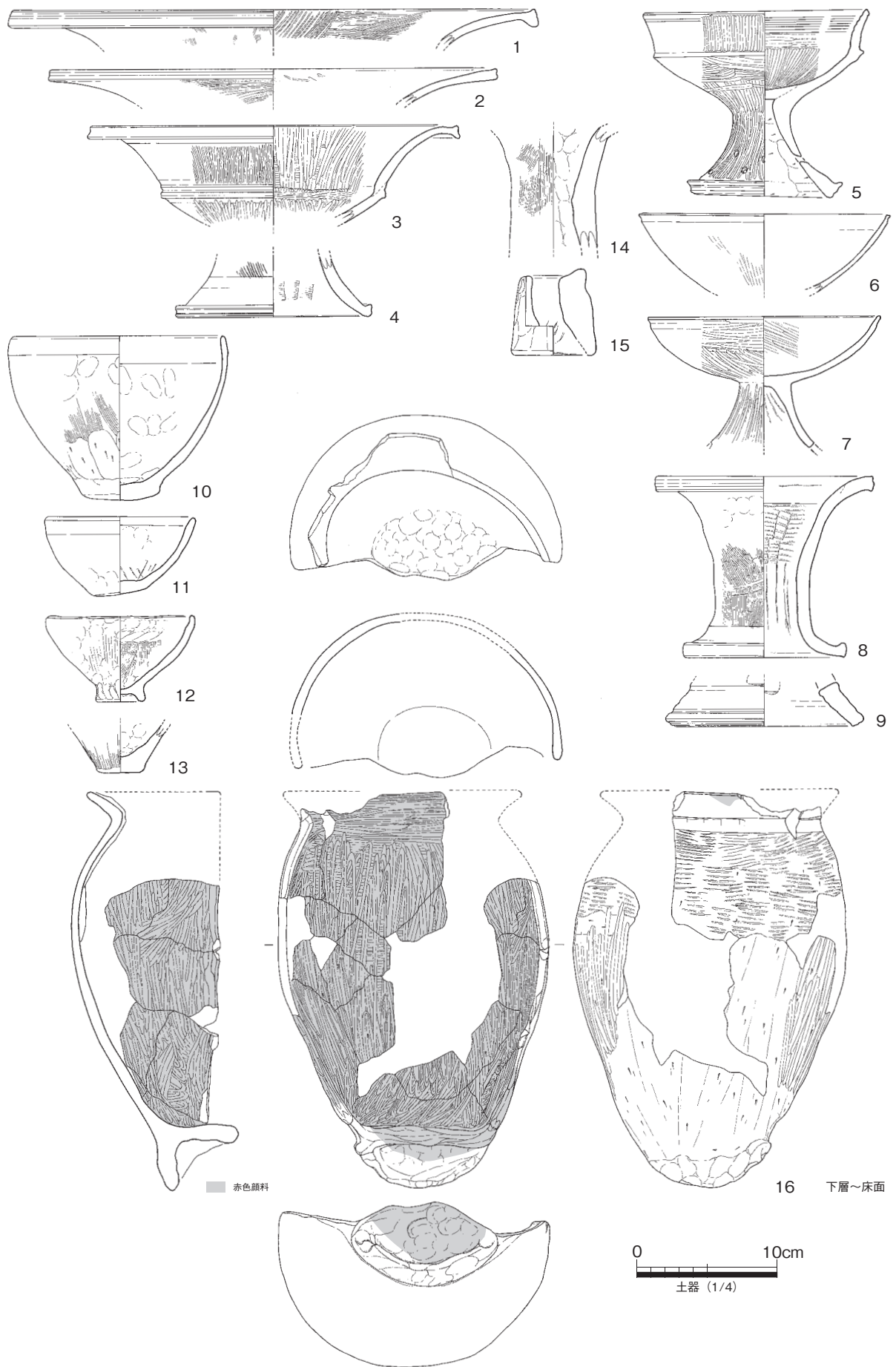


图 281 U区 SH5011 出土遺物 (3)

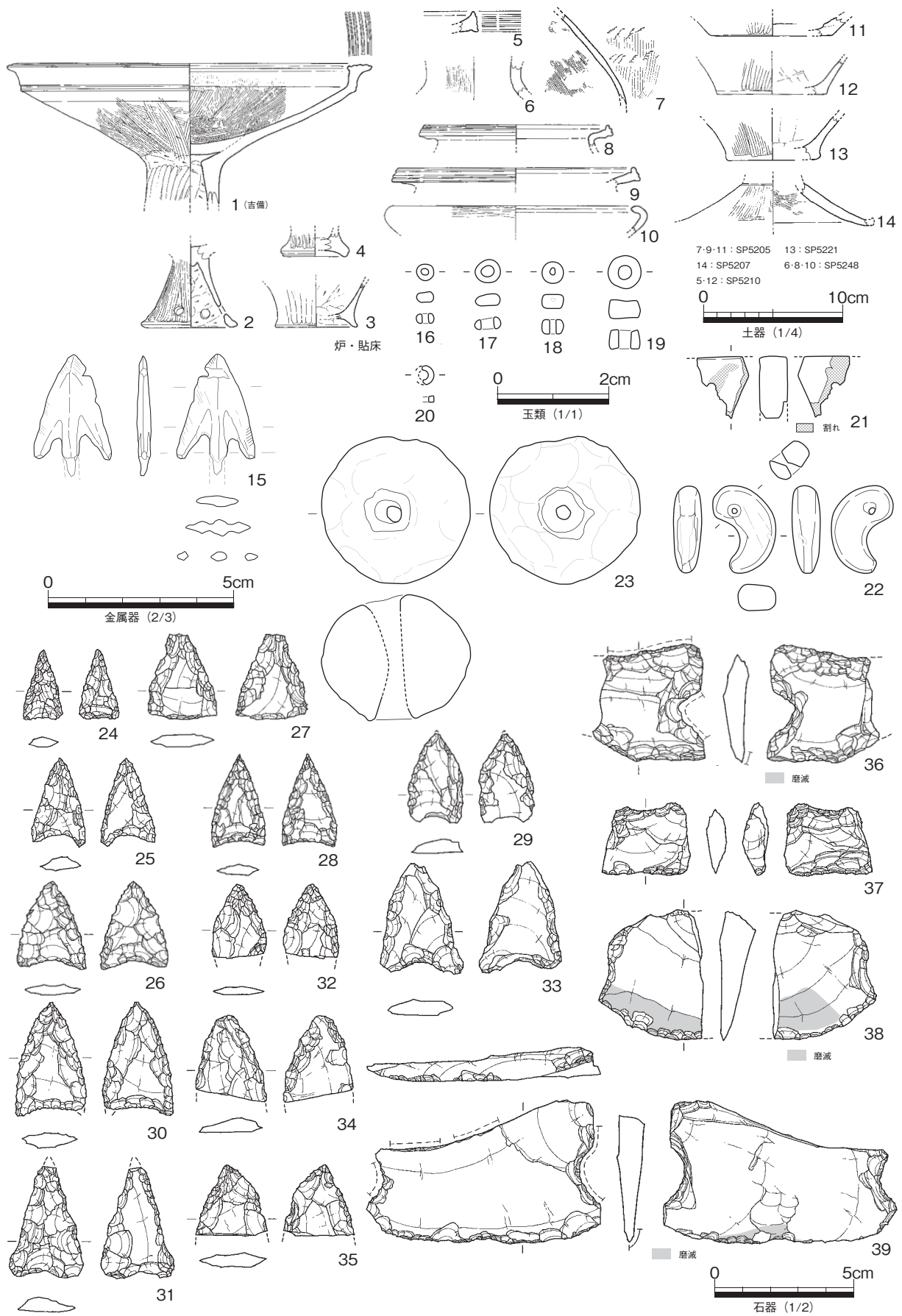


図 282 U 区 SH5011 出土遺物 (4)

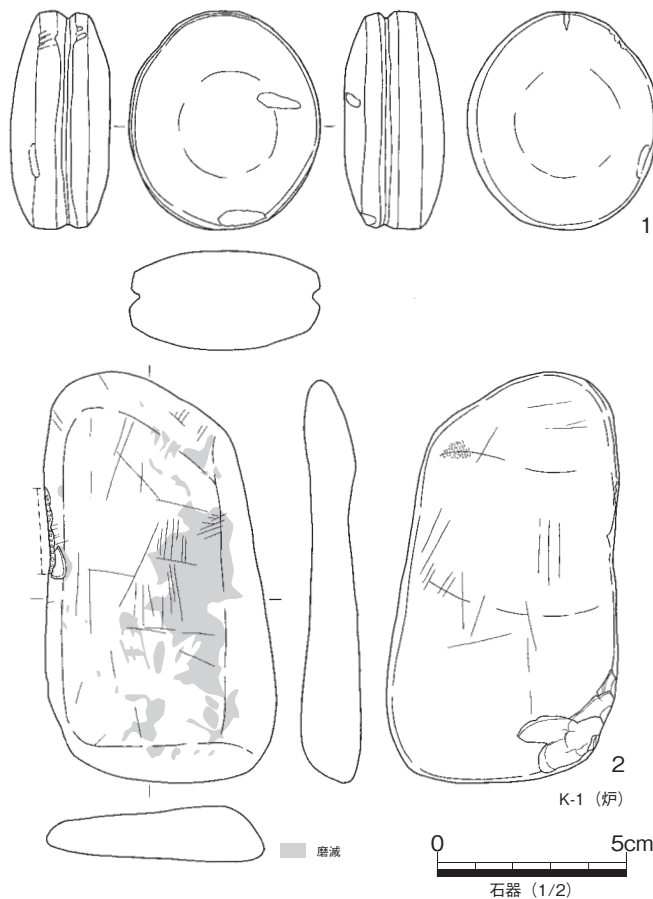


図 283 U 区 SH5011 出土遺物 (5)

残存する壁溝を確認し、報告書作成段階で主柱穴の配置を推定した。位置関係から、SH5011 に切られることが推定されるが、現地での確認はできなかった。主柱穴は現状で 4 基であり、その配置から 5～6 基の存在が推定される。また、いずれも SH5011 の床面下位あるいは床面上で確認したものである。SP5086 は位置関係から炉である可能性が高い。このような状況のため、時期決定は主柱穴出土遺物に頼らざるを得ない。

出土遺物の年代観や SH5011 に切られる可能性が高いことや、主柱穴出土遺物 (図 284-1～5) の特徴からみて、弥生後期前半古段階の住居と推定しておきたい。

V 区 SH6013 (図 285)

V 区中央部の T 区との調査区境で検出した竪穴住居であり、T 区 SH1009 と V 区 SH6005 に切られ、SH6014 を切る。住居西辺の壁溝及び立ち上がりのみ確認できたが、主柱穴は確認できない。本遺跡では弥生中期後半の凹線文期以降、小形の長方形プランで主柱穴をもたない住居が出現することが知られており、本住居もその一例に含まれると考えられる。

図 285-1～4 は床面からの出土遺物である。口縁部が内傾する高杯 (図 285-3.4) が中期末に遡る可能性があるが、甕 (図 286-2) の口縁・頸部の形態から、本住居は弥生後期前半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。

したものと推定しておきたい。

図 282-21 は出土層位不明の蛇紋岩製の玉類の破片である。大形勾玉の破片の可能性はあるが、断面形状に違和感があり器種を特定できない。図 282-16～18 はガラス製小玉であり、図 282-16.17 は焼土・炭化物より上位、図 282-18 は床面から出土した。図 282-19.20 は滑石製白玉であり、混入が明らかな資料といえる。図 282-22 は、焼土と炭化物より上位の住居埋め戻し土から出土した蛇紋岩製の勾玉であり、頭・尾ともに丸みをもつ小形品である。図 282-15 は、膨らのある三角形の鏃身に明瞭な逆刺をもつ平根系の銅鏃である。床面直上から出土しており、本遺跡の中では初現期の資料となる。土玉 (図 282-23) と有溝石錘 (図 283-1) は、焼土・炭化物に伴って出土している。

U 区 SH5017 (図 284)

U 区南部で検出した竪穴住居である。現地調査において SH5011 の西側で辛うじて

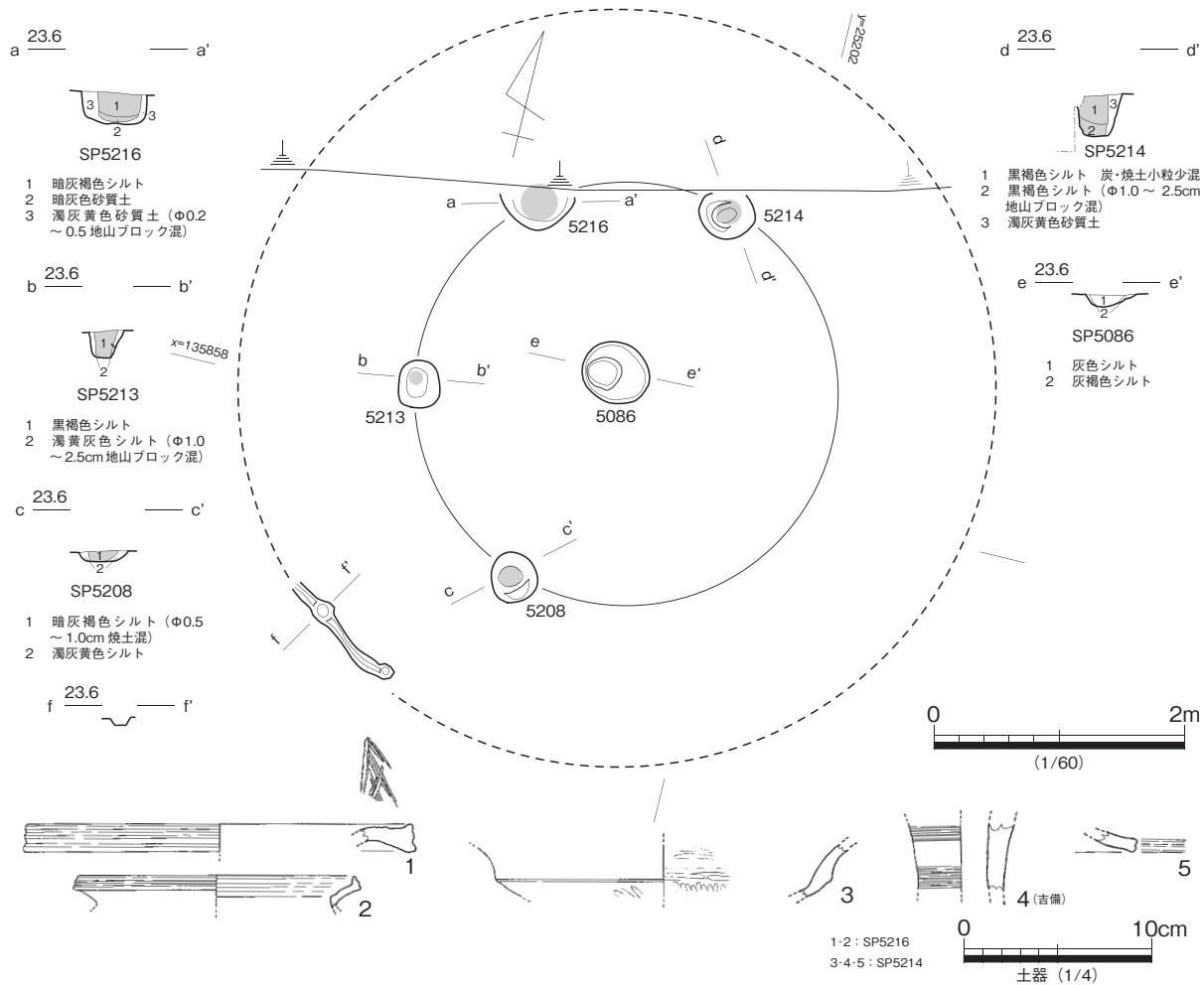


図 284 U 区 SH5017 平・断面・出土遺物

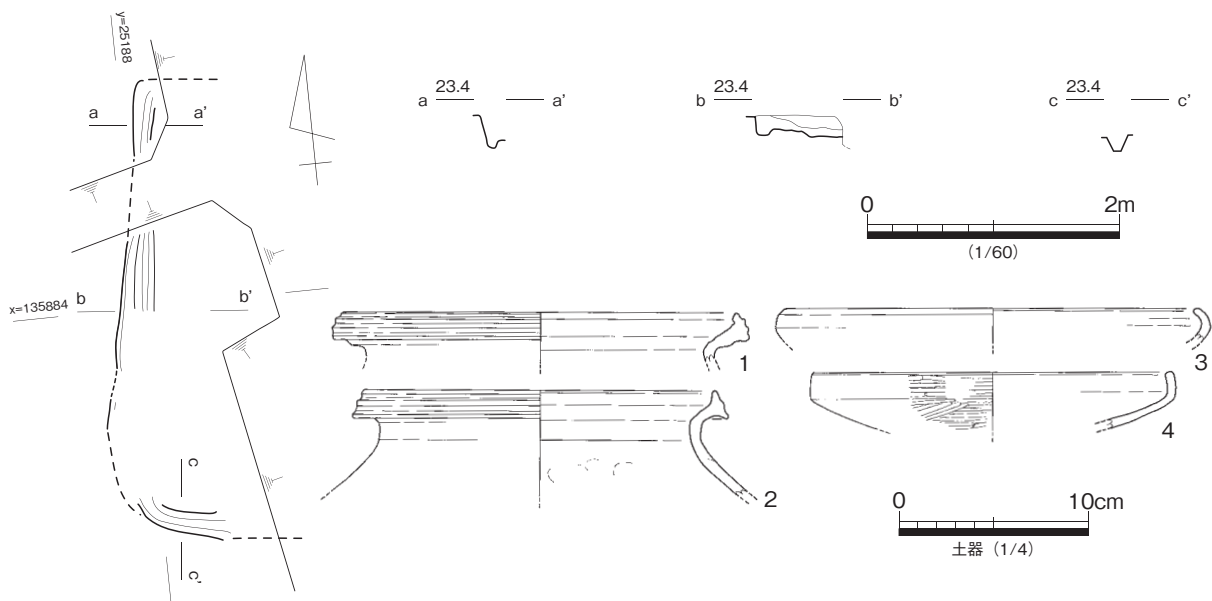


図 285 V 区 SH6013 平・断面・出土遺物

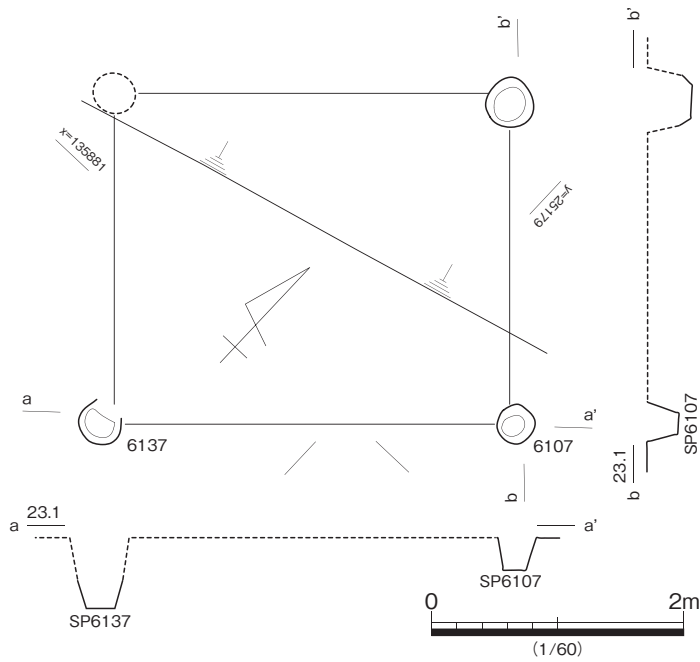


図 286 V区 SH6020 平・断面

V区 SH6020 (図 286)

V区西部で検出した竪穴住居である。上位に存在するSH6008や北側の条里型地割坪界溝SD6001によって破壊されており、報告書作成時に柱穴配置から、推定した北西隅柱を加えて4基の支柱穴をもつ住居として復元している。図化に至っていないが支柱穴SP6137から弥生土器広口壺頸部とみられる小片が出土しており、須恵器・土師器を含まない。また、支柱穴主軸方位が、弥生終末期の住居のそれに類似することから、本住居も同時期に推定しておきたい。

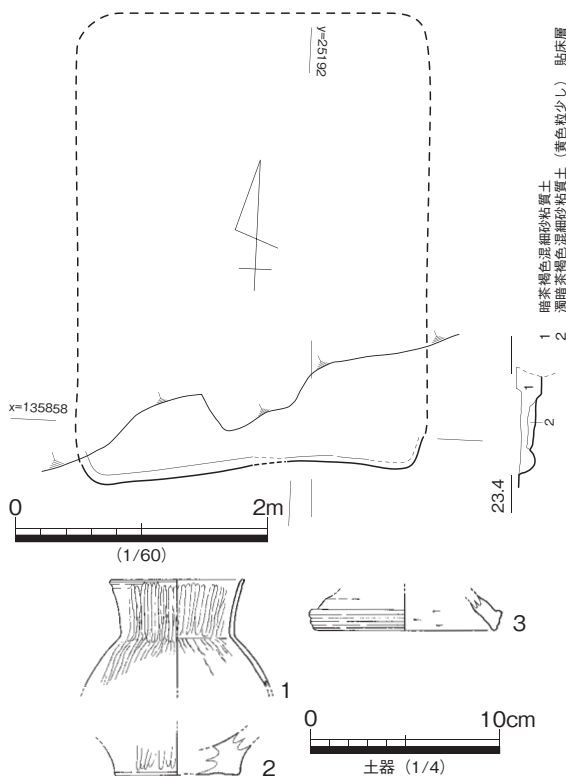


図 287 W区 SH4005 平・断面・出土遺物

W区 SH4005 (図 287)

W区西部で検出した竪穴住居である。弥生後期後半期のU区SH5007に切られる。住居大半を攪乱坑によって滅失し、不明な点が多く残るが、断面において壁溝と貼床土が確認できることから、竪穴住居として報告する。現状からの推定では、弥生後期前半期の小形隅丸長方形の住居の可能性が考えられる。支柱穴については不明とせざるを得ない。

図 287-1～3は出土遺物である。薄手の精製品である直口壺(図 287-1)の形態や遺構の切り合い関係からみて、本住居は弥生後期前半新段階に帰属するものと推定しておく。

図 288-1～3は支柱穴からの出土遺物である。また、これらは弥生中期後半期から後期前半期に収まる。現地調査では、東部と南部の壁溝のみ確認しており、報告書作成段階で支柱穴を推定した。大半の部分を攪乱坑により滅失するが、図示した2基の支柱穴に北側の攪乱部にもう2基加えて4基の支柱穴を想定する。壁溝と支柱穴の位置関係から、約8×6mの大形長方形住居が復元できる。

W区 SH4010 (図 288)

W区中央部で検出した竪穴住居であ

る。現地調査では、東部と南部の壁溝のみ確認しており、報告書作成段階で支柱穴を推定した。大半の部分を攪乱坑により滅失するが、図示した2基の支柱穴に北側の攪乱部にもう2基加えて4基の支柱穴を想定する。壁溝と支柱穴の位置関係から、約8×6mの大形長方形住居が復元できる。

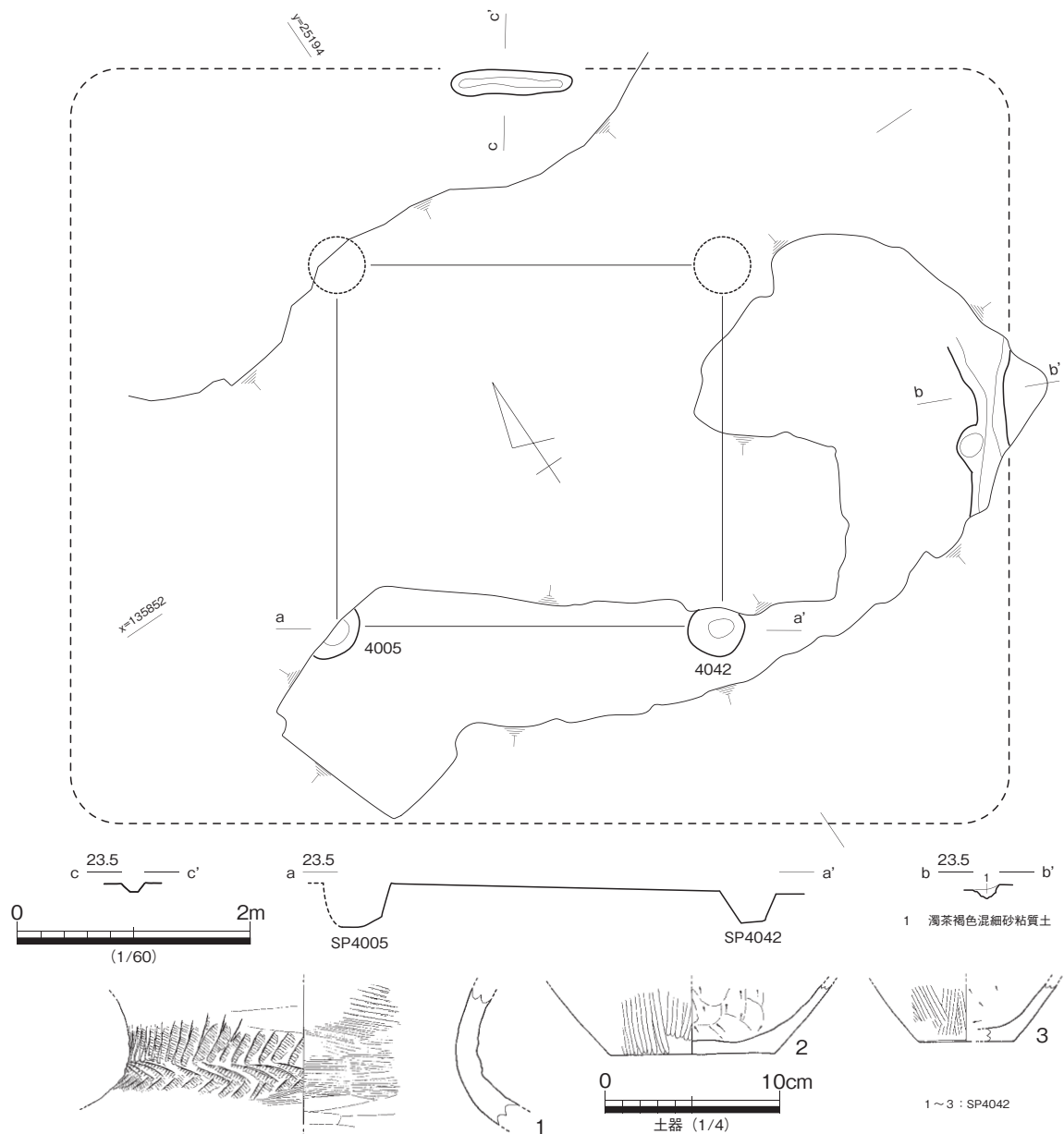


図 288 W 区 SH4010 平・断面・出土遺物

る資料であるが、図化に至っていない薄手の土師器甕胴部片が出土している点を考慮し、本住居は古墳前期前半期に帰属するものと考えたい。

W 区 SH4012 (図 289)

W 区西部で検出した竪穴住居である。古代の竪穴住居である SH4002 に切られる。北西隅部を中心とした僅かな部分の壁溝を検出したのみで、大部分が攪乱坑で滅失する。

現状で支柱穴を検査する材料は見られないが、壁溝から弥生後期前半期の高杯脚端部(図 289-1)が出土している。必ずしも時期決定可能な資料とはいえないが、壁溝は方形住居を示す平面形をもつことから、弥生後期前半期に見られる小形の長方形住居として捉えたい。

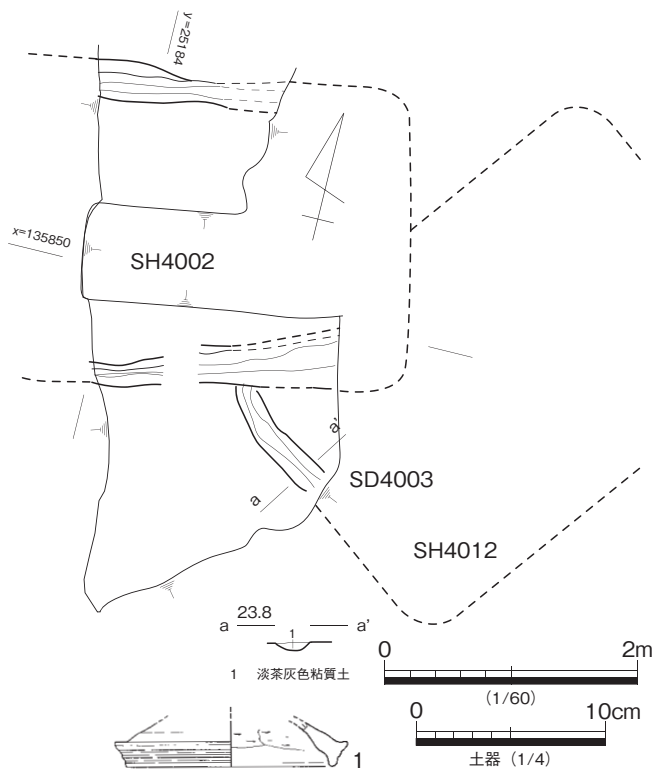


図 289 W 区 SH4012 平・断面・出土遺物

W 区 SH4013 (図 290)

W 区中央部で検出した竪穴住居である。弥生後期前半新段階の SH4005、後期後半古段階の SH5007 に切られる。壁面の立ち上がりは確認できず極めて限られた調査範囲となるが、弧状を描く SD4005.4006 を壁溝と推定し、直径約 8m の大形円形住居を復元する。また、SD4005.4006 は周溝の可能性も考えられる。主柱穴は、報告書作成段階で 2 基復元しているが、大形円形住居とした場合、6～8 基程の多柱になる可能性もある。

図 290-1 は壁溝或いは周溝と考えられる SD4005.4006、図 290-5 は主柱穴とした SP4054 からの資料である。多く資料は弥生中期後半新段階に位置付けられるが、外面にベンガラによる赤塗がみとめられ備中西部からの搬入品である弥生後期前半期の

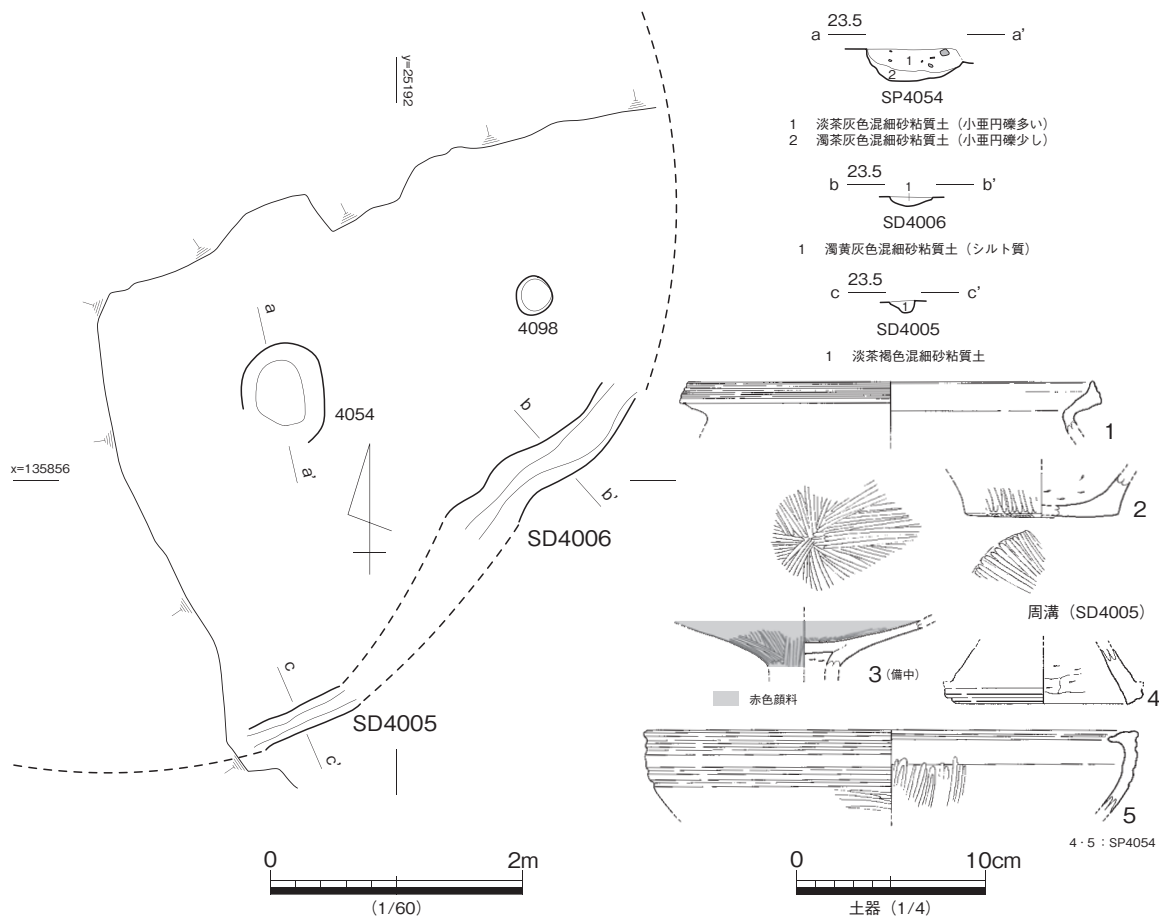


図 290 W 区 SH4013 平・断面・出土遺物

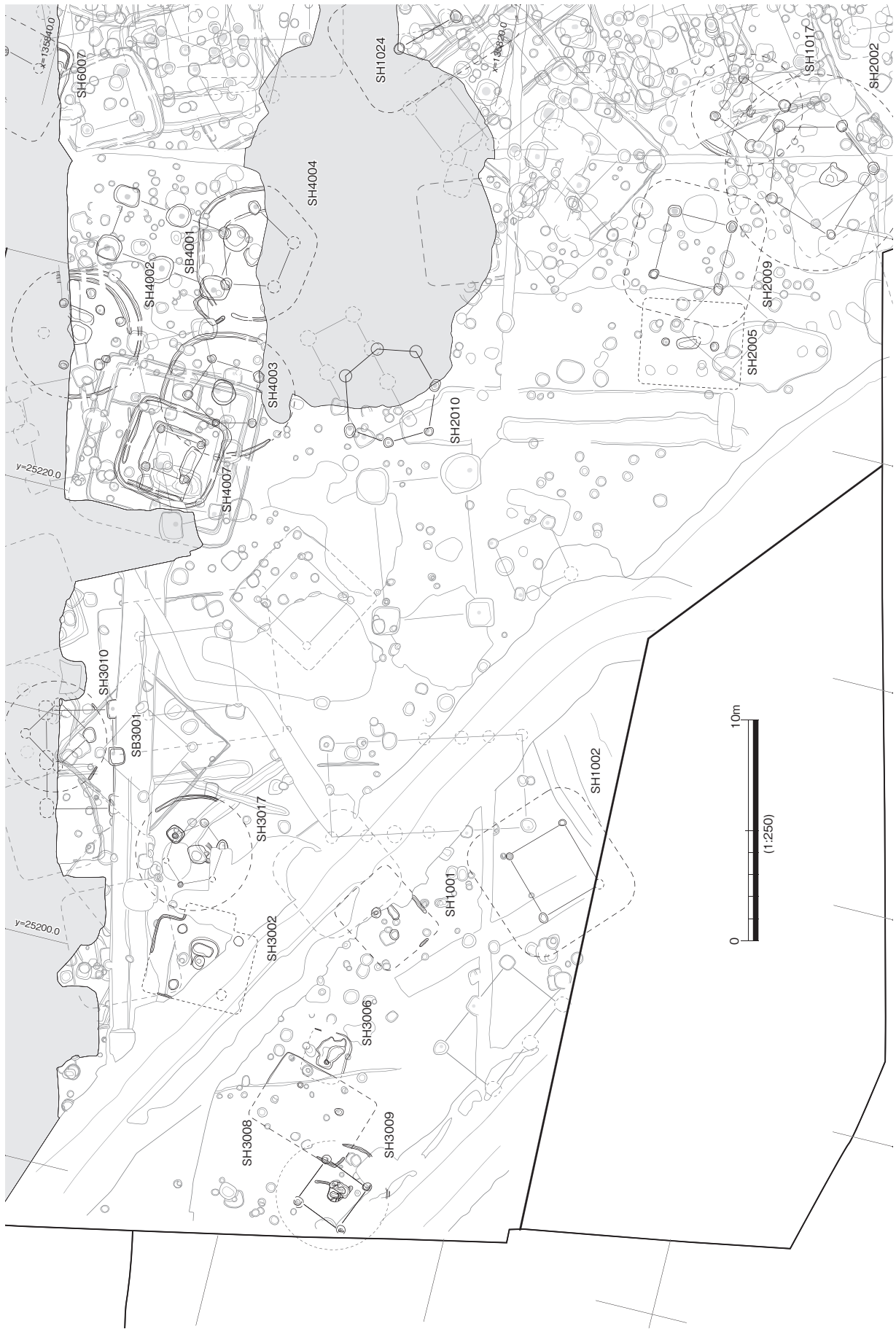


图 291 I 区 平面

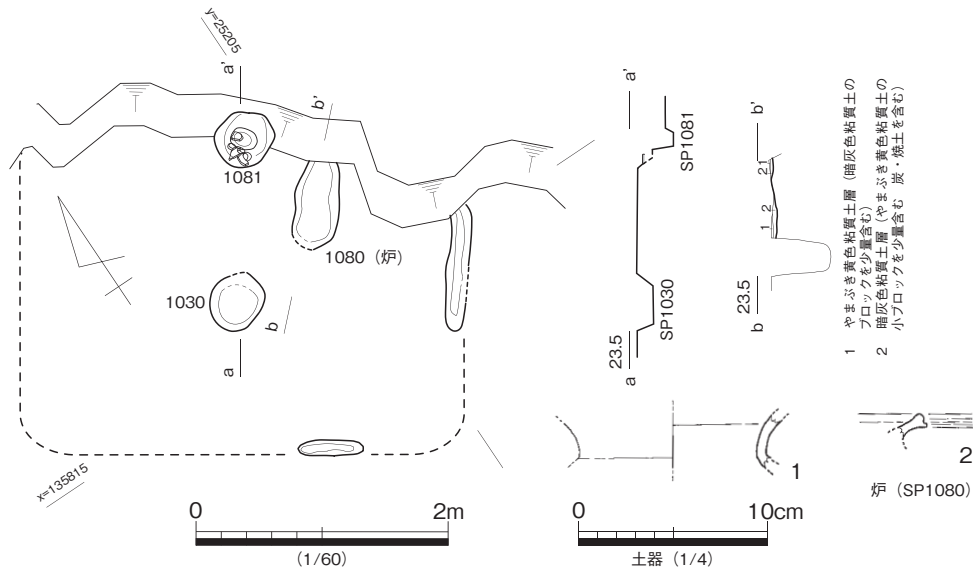


図 292 I -1 区 SH1001 平・断面・出土遺物

高杯(図 290-3)が含まれる。

詳細な時期決定に課題を残すが、ここでは本住居の帰属時期を大型円形住居が多くみられる弥生後期前半中段階に比定しておきたい。

I -1 区 SH1001 (図 292)

I -1 区南西部で検出した竪穴住居である。住居と東辺・南辺に伴う壁溝の一部とその内部に 2 基の主柱穴と 1 基の炉跡を確認している。北部を近代溝によって滅失するが、約 3.5 × 4m の小形方形住居

に復元できる。炉は残存深度が約 5 cm ほどと浅く、主柱穴の残存深度との関係から、後世の削平を考慮しても構築当初から浅い地床炉であった可能性が高い。

出土遺物の内、広口壺頸部(図 292-1)は壁溝、甕口縁(図 292-2)は炉 SP1080 から出土している。必ずしも十分な資料とは言えないが、広口壺(図 292-1)の頸部形態や 2 基の主柱穴の柱通りからややずれた炉をもつ形態などから、本住居は古墳前期前半古段階に帰属するものと推定しておきたい。

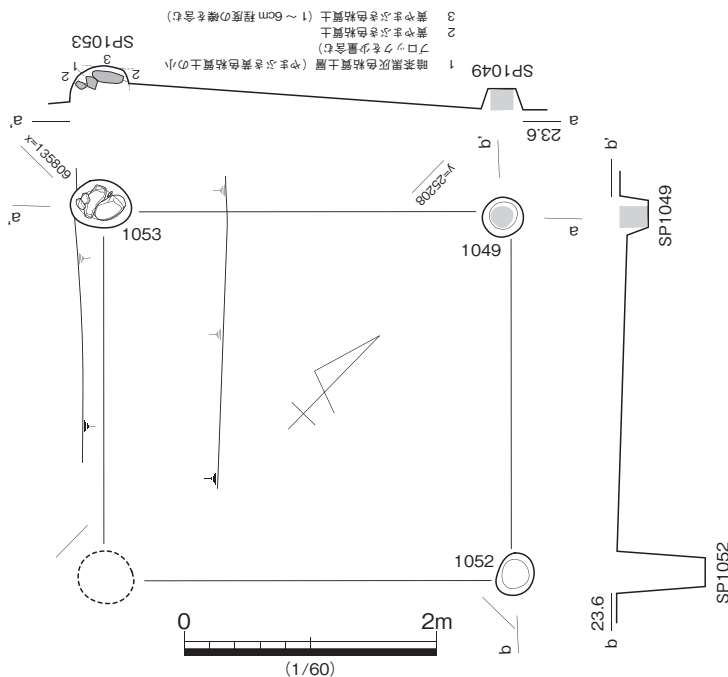


図 293 I -1 区 SH1002 平・断面

I -1 区 SH1002 (図 293)

I -1 区南部で検出した竪穴住居で

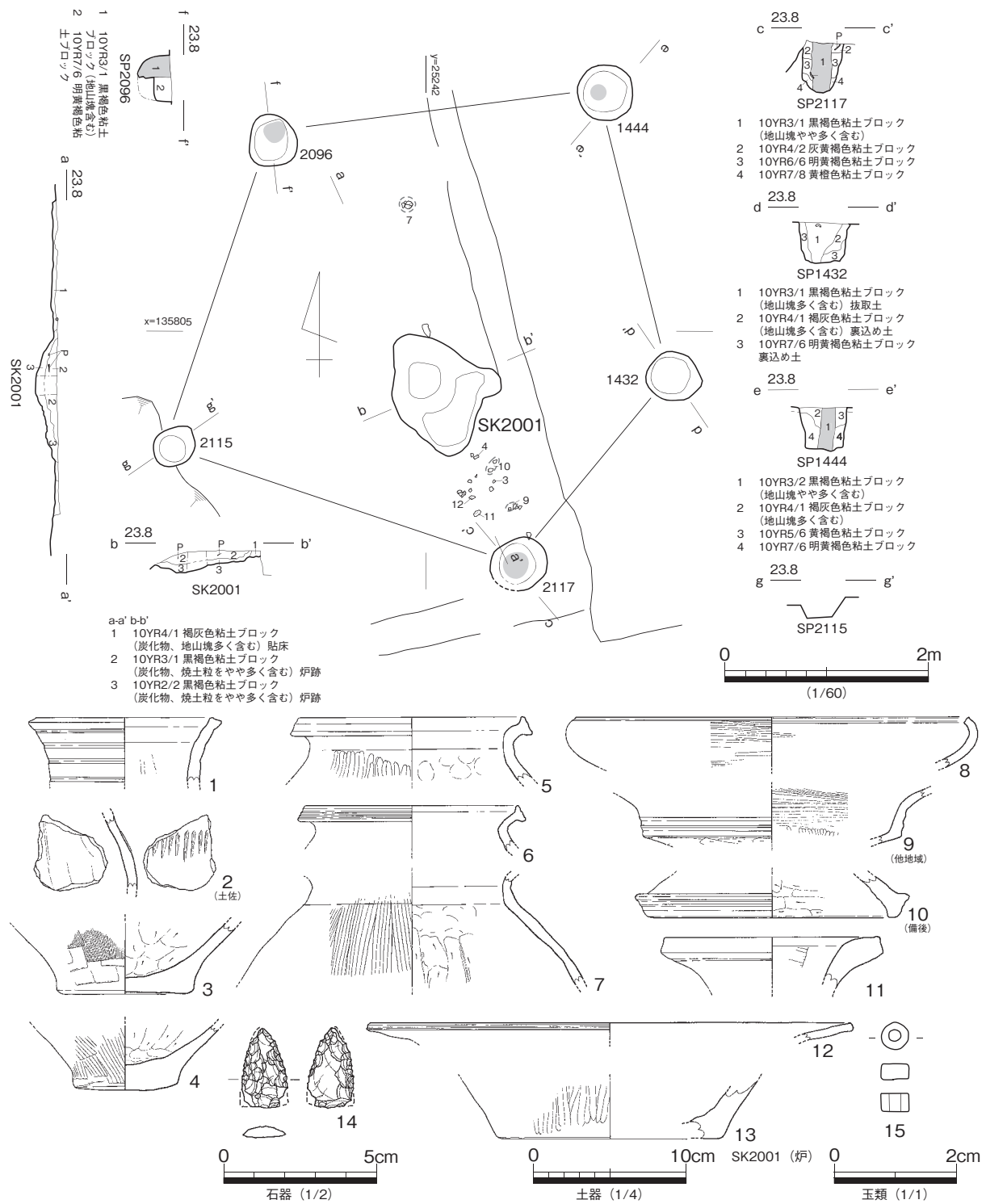


図 294 I -2 区 SH2002 平・断面・出土遺物

ある。本住居付近は、近代における削平が顕著であり、多くの遺構が消滅したと考えられるが、そのような状況下においても比較的深度がある柱穴がみられたことから、報告書作成段階で図示する3基の柱穴に加えて、調査区外にもう1基想定することで竪穴住居の主柱穴として提示することとした。北東隅のSP1053は、柱抜き取り後に砂岩礫がまとまって投棄されている。図化可能な出土遺物はみられないが、須恵器・土師器片が含まれないことや主柱穴の方位などを考慮し、弥生終末期の所産と推定しておきた

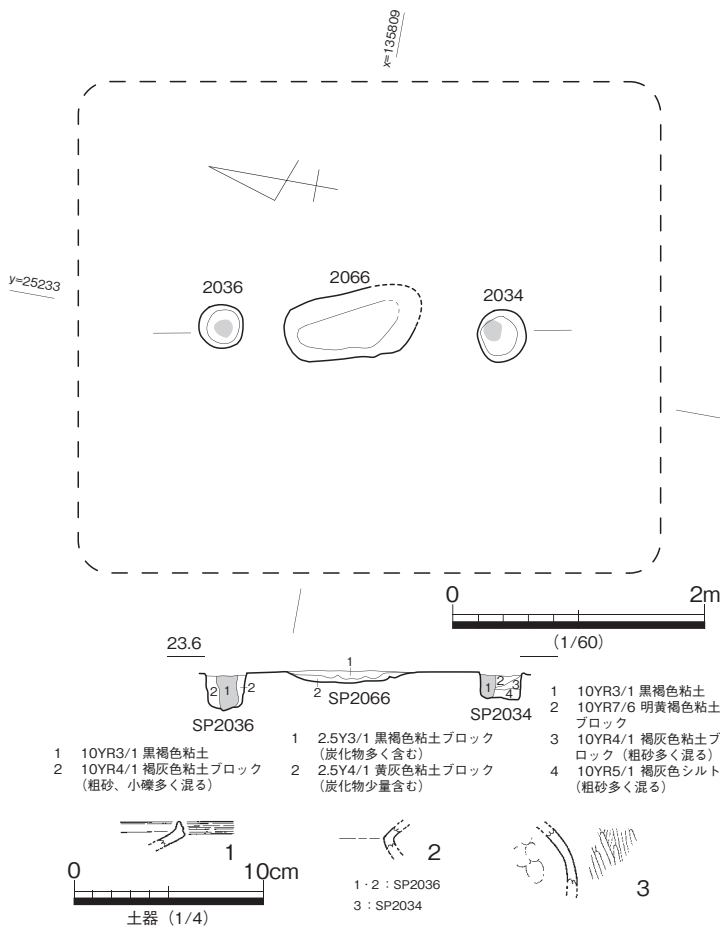


図 295 I -2 区 SH2005 平・断面・出土遺物

図 294-1 ~ 15 の出土遺物の内、図 294-13 のみ炉 SK2001 より出土した資料であり、他の資料は全て部分的に残存していた床面から出土している。一部に弥生中期後半期の資料を含むが、長頸壺 (図 294-1) や壺底部 (図 294-3.4)、甕 (図 294-5 ~ 7) など弥生後期前半期の特徴を示す資料が主体を占める。図 294-9.12 は装飾高杯と考えられる。滑石製白玉 (図 294-15) は、本住居直上の SH1020 からの混入品とみられる。これらの出土遺物の特徴から、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものと推定しておきたい。

I -2 区 SH2005 (図 295)

I -2 区南東部で検出した竪穴住居である。検出箇所は大きく削平を受けており、住居掘り方は残存しておらず、炭化物を多く含む炉 SP2066 の南北に深度のある 2 基の柱穴を検出し、竪穴住居として復元した。

出土遺物は小片であり、時期決定に課題を残すが、炉及び支柱穴の配置が古墳時代初頭に多く見られる形態であることを根拠として、本住居は古墳前期前半古段階に属すると推定しておきたい。

I -2 区 SH2009 (図 296)

I -2 区北東部で検出した竪穴住居である。現地調査で確認しておらず、報告書作成段階で推定した建物である。南東隅支柱穴 SP2002 以外の柱穴深度が浅くなっているが、砂礫層である V 層が露出する

い。

I -2 区 SH2002 (図 294)

I 区南西部で検出した竪穴住居である。古墳後期の SH1020 に切られる。検出位置が微高地上となるため、壁面は既に削平されており、中央土坑と考えられる SK2001 を中心に、柱穴埋没土及び深度・配置などを考慮して、現地調査の段階で 5 基の支柱穴を推定した。支柱穴の位置関係から、直径 7m を超える大形の円形住居となる可能性が高い。中央土坑 SK2001 は、中央に存在せずやや南へ偏る。また、北側の最深部とは別に南側にテラス面があり、円形と楕円形を組み合わせた平面形から、後期前半期に見られた円形と隅丸方形の 2 基から構成される炉構造が結合したような形態を呈していると考えられよう。中央土坑 SK2001 周辺には貼床土の残欠が見られ、数点の弥生土器片が出土した。

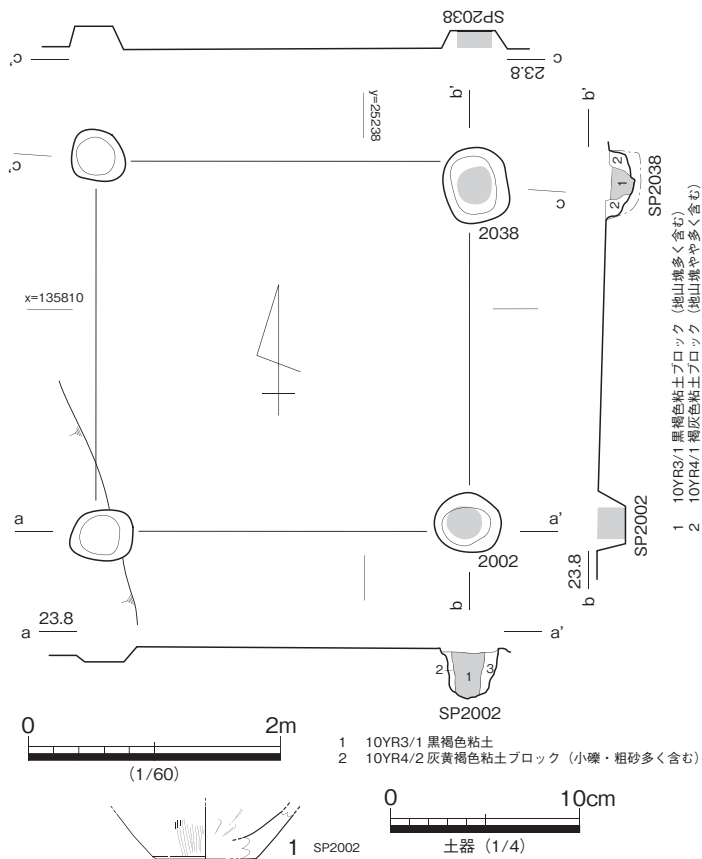


図 296 I -2 区 SH2009 平・断面・出土遺物

に加えて東側の攪乱坑の部分に3基想定し、合計7基の主柱穴を復元する。多角柱の配置となり、多角形住居の可能性が残るが、直径約6mの円形住居を復元しておきたい。図化可能な出土遺物はみられな

微高地上で検出していることもあり、後世の削平を考慮する必要がある。また、現状から、住居平面形を推定する材料はない。

図化可能な出土遺物は、SP2002 から出土した弥生土器甕底部(図 296-1)のみである。主柱穴方位が古墳時代以降の竪穴住居と異なり、埋没土の特徴が弥生時代の柱穴と類似している点などから、甕底部(図 296-1)を本住居の帰属時期を示す資料と評価し、弥生後期後半古段階の住居と推定しておきたい。

I -2 区 SH2010 (図 297)

I -2 区北部で検出した竪穴住居である。現地調査の段階において、住居壁面や壁溝はみられないものの、埋没土が類似し比較的深度がある柱穴がまわって分布することから、竪穴住居としての符合を与えている。現状の4基

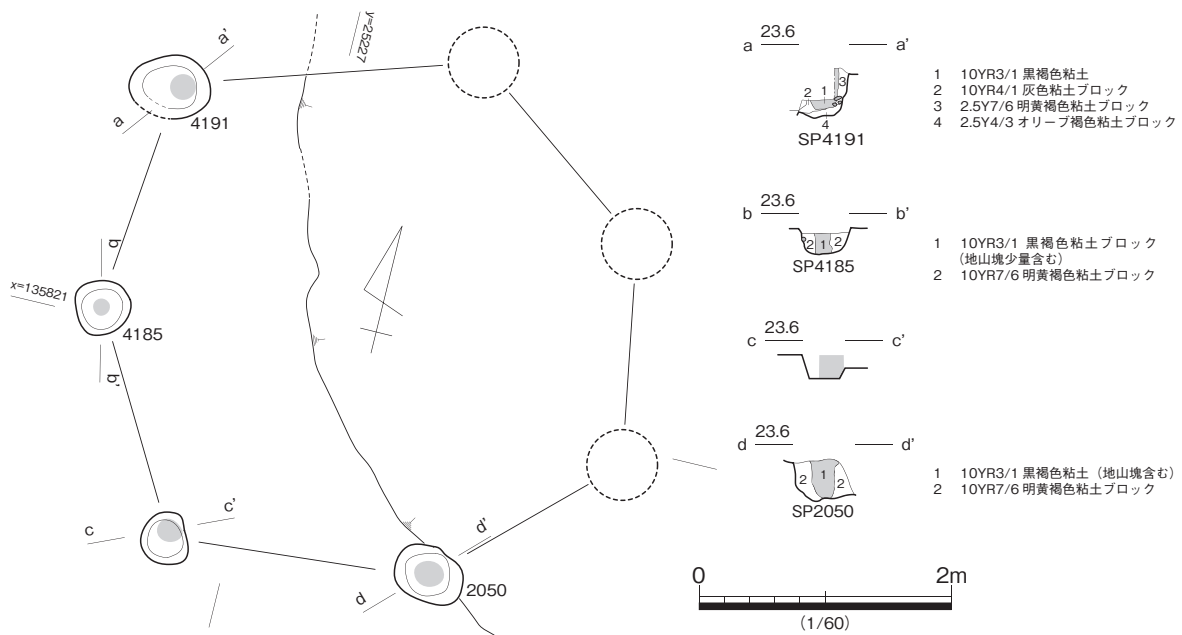


図 297 I -2 区 SH2010 平・断面

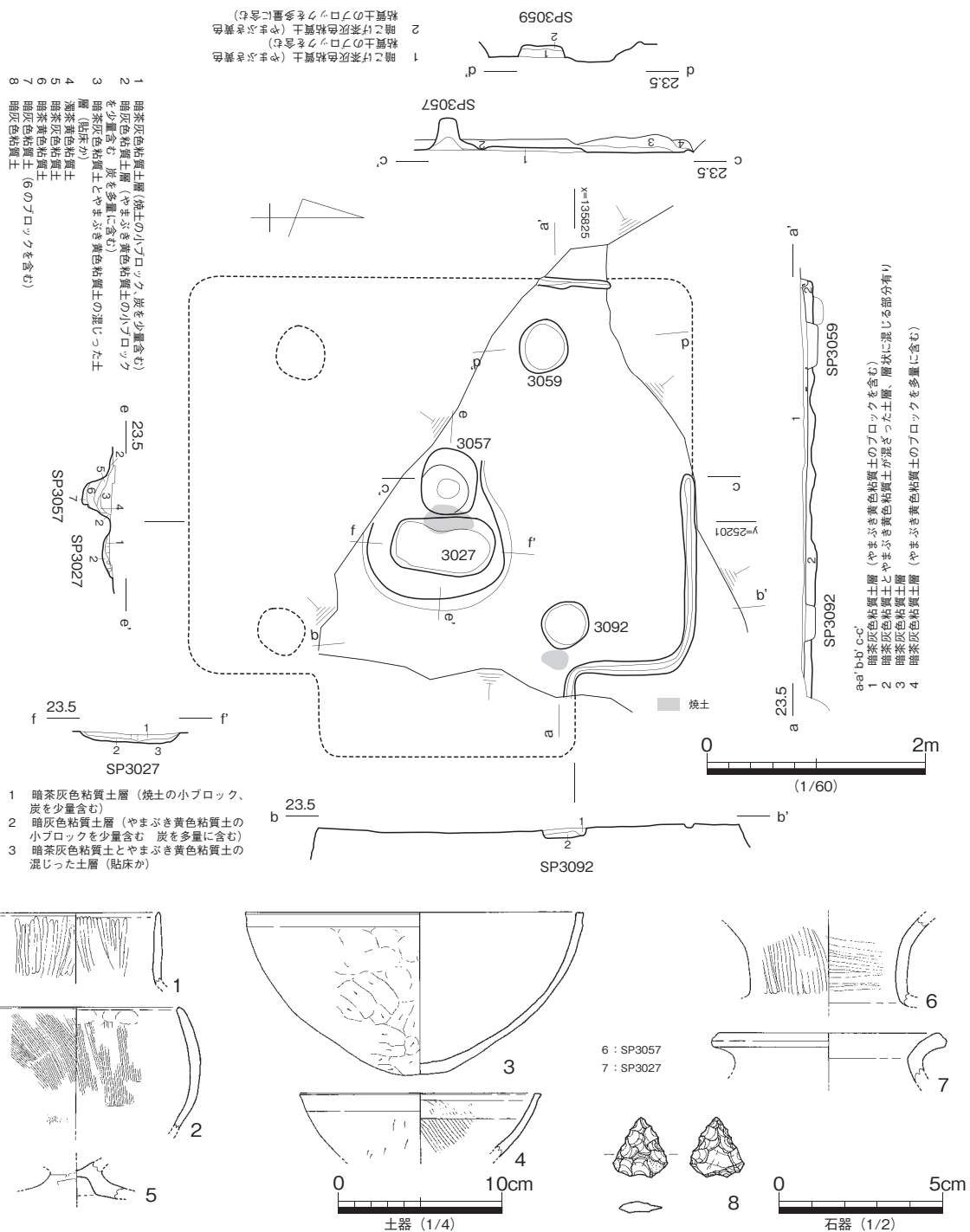


図 298 I-3 区 SH3002 平・断面・出土遺物

かったが柱配置の特徴や周辺遺構との関係などから、概ね弥生後期前半期の帰属時期を想定しておく。

I-3 区 SH3002 (図 298)

I 区北西部で検出した竪穴住居である。東側に存在する SH3017 とは重複関係にあるが、遺構で先後関係を把握できる箇所は見られない。住居南部を近代溝によって消失し、北部を中心に方形に巡る壁溝と支柱穴、炉が残存する。支柱穴は、現存する 2 基に南側にもう 2 基を加えて 4 基と推定する。壁溝は、

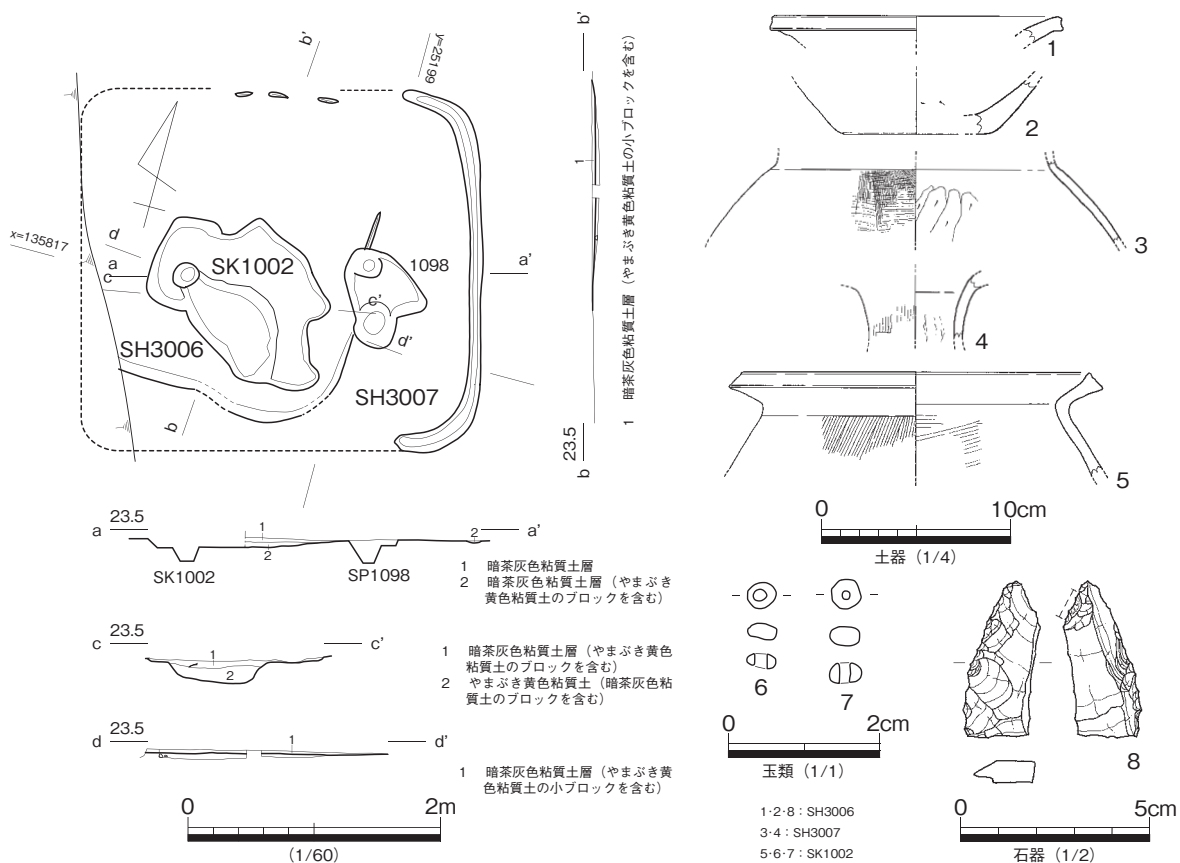


図 299 I -3 区 SH3007 平・断面・出土遺物

北東隅から南へ延びた後、支柱穴 3092 を境にして東へ反転する。また、支柱穴との位置関係を考慮した場合、住居壁面に伴うものではなく、ベッド状遺構敷設に伴う小溝と考えた方が妥当である。従って、平面形は方形を採るのは確実であるが、一辺が 5～6m の規模を想定しておくべきであろう。炉は、東側の円形炉 SP3057、西側の隅丸長方形炉 SP3027 がセットとなる。西側の円形炉 SP3057 の方が深く、東側の隅丸長方形炉 SP3027 は浅い灰穴炉となる。両者は低い土手状の掘り残し部を経て接続するが、その上面の一部が焼土化している。炉の構造や埋没土や焼土化の状況は、本住居の東側の SH3009 と極めて類似している。炉の周囲には高さ約 5cm 程度の土手状の高まりが巡る。この高まりは貼床土と同じ客土によって構成されていることから、炉の構築と貼床の敷設が同時に行われた可能性が高い。

I -3 区 SH3007 (図 299)

I 区西部で検出した竪穴住居である。住居東辺と北辺の壁溝の一部とその内部に図示した 2 基の支柱穴と炉を確認した。住居掘り方は削平されているが、残存する壁溝と支柱穴との位置関係から、約 2.9 × 3.1m の小形長方形住居に復元できる。炉 SK1002 は歪な形態をもち、その周囲にも不定形の落ち込みを伴う。周囲の落ち込みは、貼床土敷設時の窪みと考えられよう。また、炉内の埋没土には炭化物が目立たない。

出土遺物の内、甕 (図 299-3) は壁溝、壺 (図 299-1.2.4) 甕 (図 299-5) は床面、ガラス製小玉 (図 299-6.7) は炉 (SK1002) より出土している。

床面出土の甕 (図 299-5) は弥生後期前半期の特徴をもつが、壁溝から出土した甕 (図 299-3) の形態から、

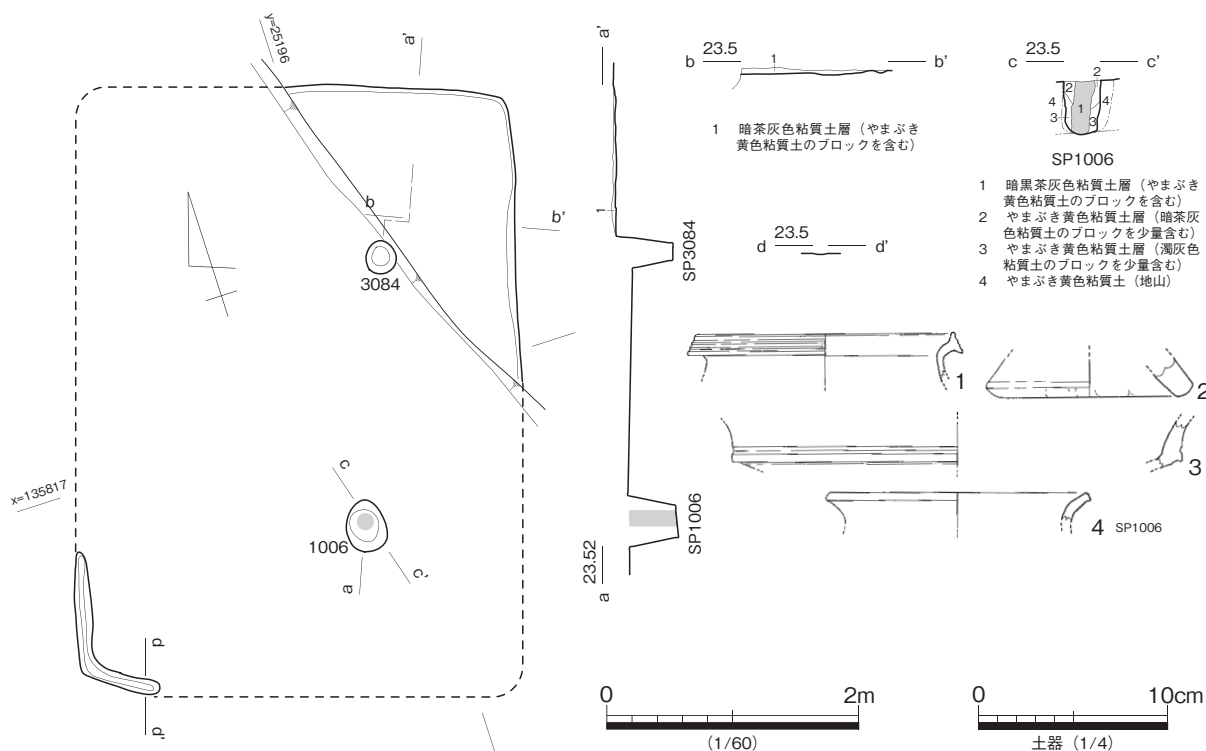


図 300 I -3 区 SH3008 平・断面・出土遺物

本住居は弥生終末期中段階に帰属するものと考えておく。

I -3 区 SH3008 (図 300)

I 区西部で検出した竪穴住居である。検出面が大きく削平されており、北東隅や南西隅部を中心とした壁溝及び掘り方の一部と、2 基の支柱穴が残存するのみである。約 3.5 × 4.8m の長方形住居とみられるが、支柱穴 SP1006.3084 の位置がやや東へ偏る。北西部に僅かに残る貼床土から推定できる深度のある柱穴が他に認められないことから、無柱の可能性は残るものの、2 基の支柱穴をもつ住居として提示しておきたい。

図 300-1 ~ 3 は床面、図 300-4 は支柱穴 SP1006 から出土した土器である。床面出土の小形器台あるいは支脚 (図 300-2) や支柱穴出土の甕 (図 300-4) の形態から、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものとする。

I -3 区 SH3009 (図 301)

I 区西部で検出した竪穴住居である。住居掘り方は既に削平されており、東側の壁溝、図示した 4 基の支柱穴、炉跡が残存する。壁溝と支柱穴との位置関係から、直径約 5m の円形住居に復元できる。SH3008 と重複関係にあるが、切り合い関係を検証する接点がないため、出土遺物から推測して本住居が後出する可能性が高いと考えられる。炉は住居中央に存在する SP3028 であり、西側が円形、東側が隅丸方形を呈し、北側に東側の隅丸長方形の炉から伸びる排水溝が付随する。西側の円形炉は深いピット状を呈するもので、上位に炭化物をやや多く含む土層と最上位に廃絶時に伴う土器片が集中する。

東側の隅丸長方形炉は、深度が浅く底面に炭化物の薄層が広がる灰穴炉で、最上位に廃絶時に伴う土

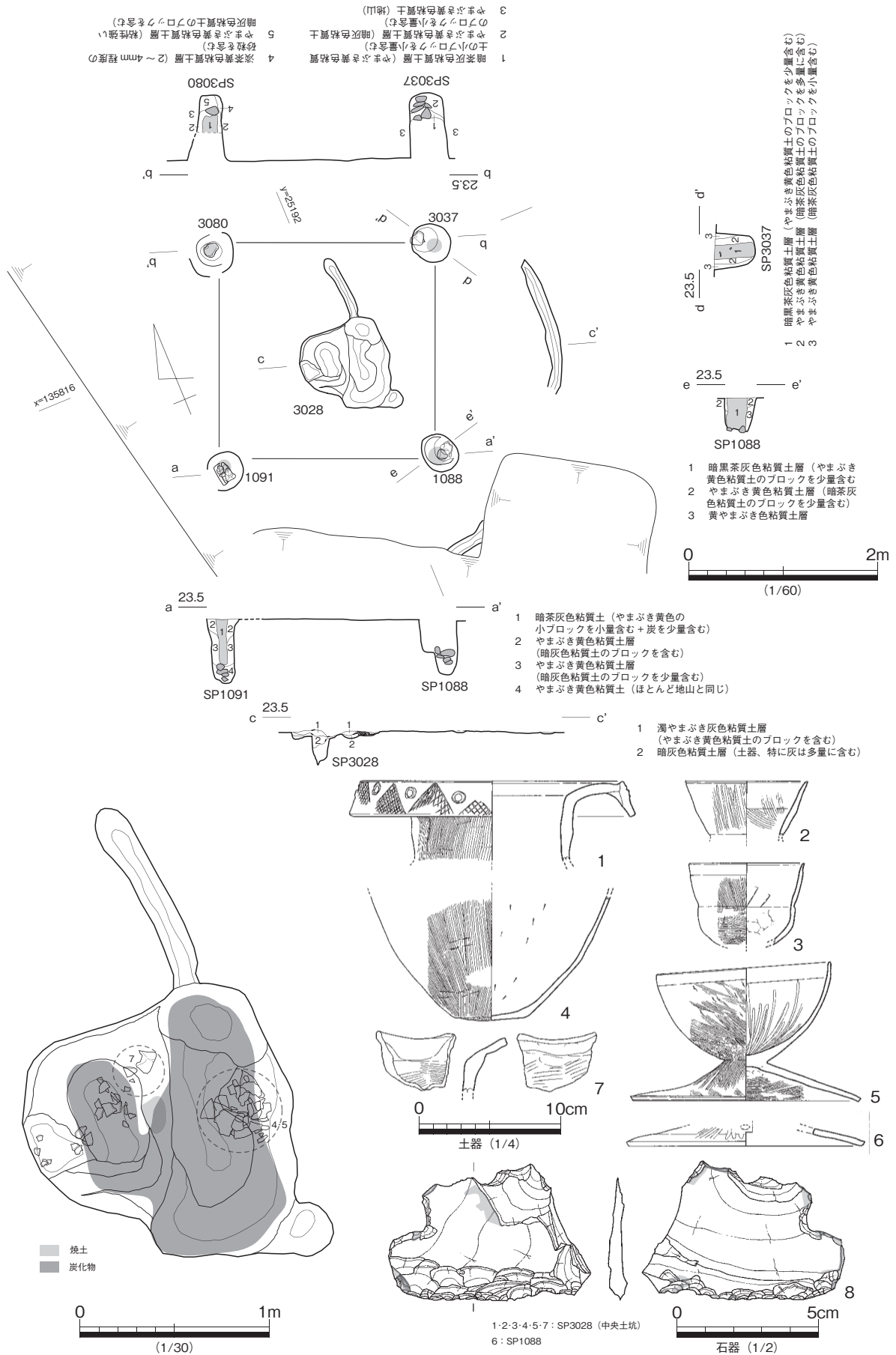


図 301 I -3 区 SH3009 平・断面・出土遺物

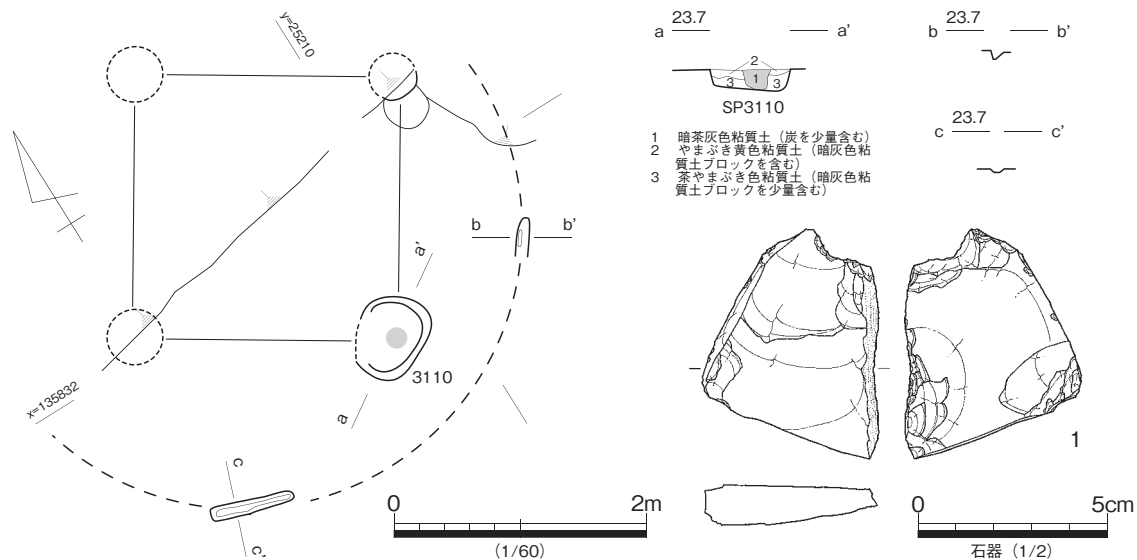


図 302 I -3 区 SH3010 平・断面・出土遺物

器廃棄が行われている。炭化物薄層上面での被熱痕は見られない。両者は高さ約 10cm、幅約 5cm の土手状の掘り残し部を介して接するが、土手状の一部が被熱を受けている。後期前半期から出現する円形炉と隅丸方形炉がセットとなる炉構造の系譜で捉えられよう。

床面出土の鉢（図 301-5）の形態からみて、本住居は弥生後期後半新段階に帰属するものと考えておきたい。

I -3 区 SH3010（図 302）

I -3 区北端で検出した竪穴住居である。古墳後期の SH3001.3012 に切られ、弥生中期後半の SH3019 を切り込む。部分的に検出した壁溝に報告書作成段階で支柱穴を推定したが、配置や深度など材料不足は否めない。南側の壁溝がやや傾きをみせるため、4 基の支柱穴をもつ円形住居と推定しておきたい。

サヌカイト製の板状素材分割片（図 302-1）は、壁溝から出土している。時期決定可能な出土遺物に乏しいが、周辺遺構の状況から本住居は弥生終末期古段階に帰属するものと推定しておきたい。

I -3 区 SH3017（図 303）

I 区北部で検出した竪穴住居である。古墳後期前葉の SH3001 に切られる。住居覆土は既に削平されており、円弧状を描く東側の壁溝と、中央に炉と考えられる円形土坑 SP3157 とその周囲に多角柱となる支柱穴が巡る。現況から 6 基の支柱穴をもつ直径約 5m の円形住居に復元できる。炉 SP3157 は、中に炭化物の薄層があり、その上面に焼土塊とサヌカイトの微細な石片がやや多く含まれる。炉の壁面は、弱い被熱を受けている。また、南側へ派生する排水溝と見られる小溝が付設され、南東部では炉の周囲を全周していたと考えられる土手状の高まりとそれに付随した小溝を確認している。

I -4 区 SH4002（図 304～306）

I 区北東部で検出した竪穴住居である。住居北半部を攪乱坑で滅失するが、直径約 5.8m の円形住居とみられる。壁面の立ち上がりは約 0.2m 残存しており、壁溝上面検出時に壁材と見られる帯状の変色

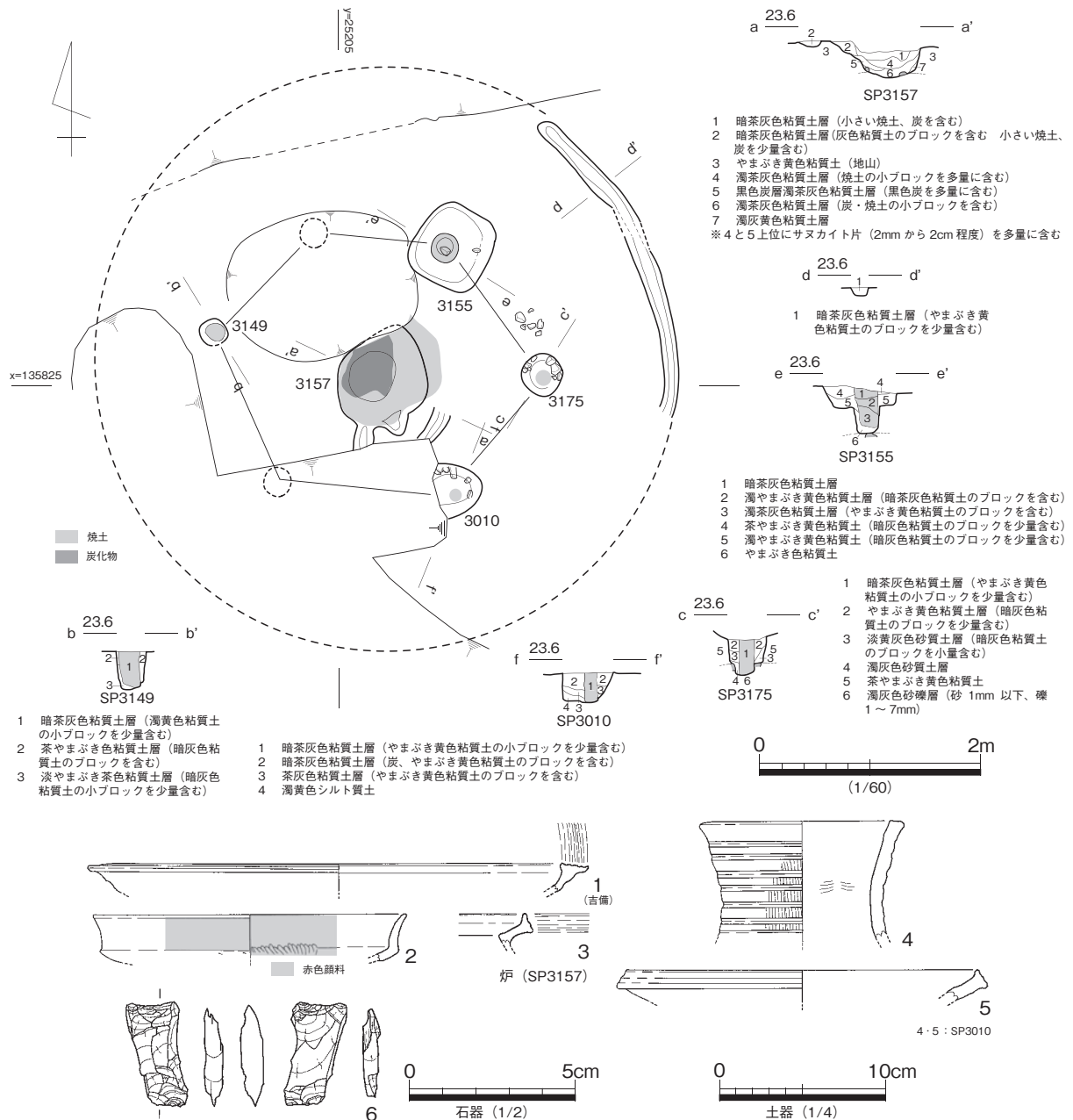


図 303 I -3 区 SH3017 平・断面・出土遺物

土層が確認された。住居床面は層厚約 0.1m の貼床土が敷設されており、貼床土上面及び下面で 7 基の主柱穴が確認した。深度からみて、いずれも主柱穴に相当すると考えられるが、配置や数からみて先後関係をもつと考えられる。住居南東部の貼床土の下面において壁溝を検出していることを考慮すると、一部の主柱穴を建て替えて床面を南東側へ拡張したと推定できる。

床面中央には、円形土坑 (SK4007) と東側に接して楕円形土坑 (SK4008) が検出された。両者ともに炉跡と考えられ、本地域の弥生後期前半期に多く見られるイチマル土坑から変容した形態と考えられる。円形土坑 SK4007 はやや深く、下位に焼土粒を多く認めるものの、底面及び壁面の被熱は見られない。SK4008 は浅い灰穴炉であり、2 層に分かれる炭化物の薄層をもち、下位の炭化物層の上面には焼土粒がやや多くみられる。炭化物層は SK4007 の中層にも延びるため、両者が同時併存していたことが

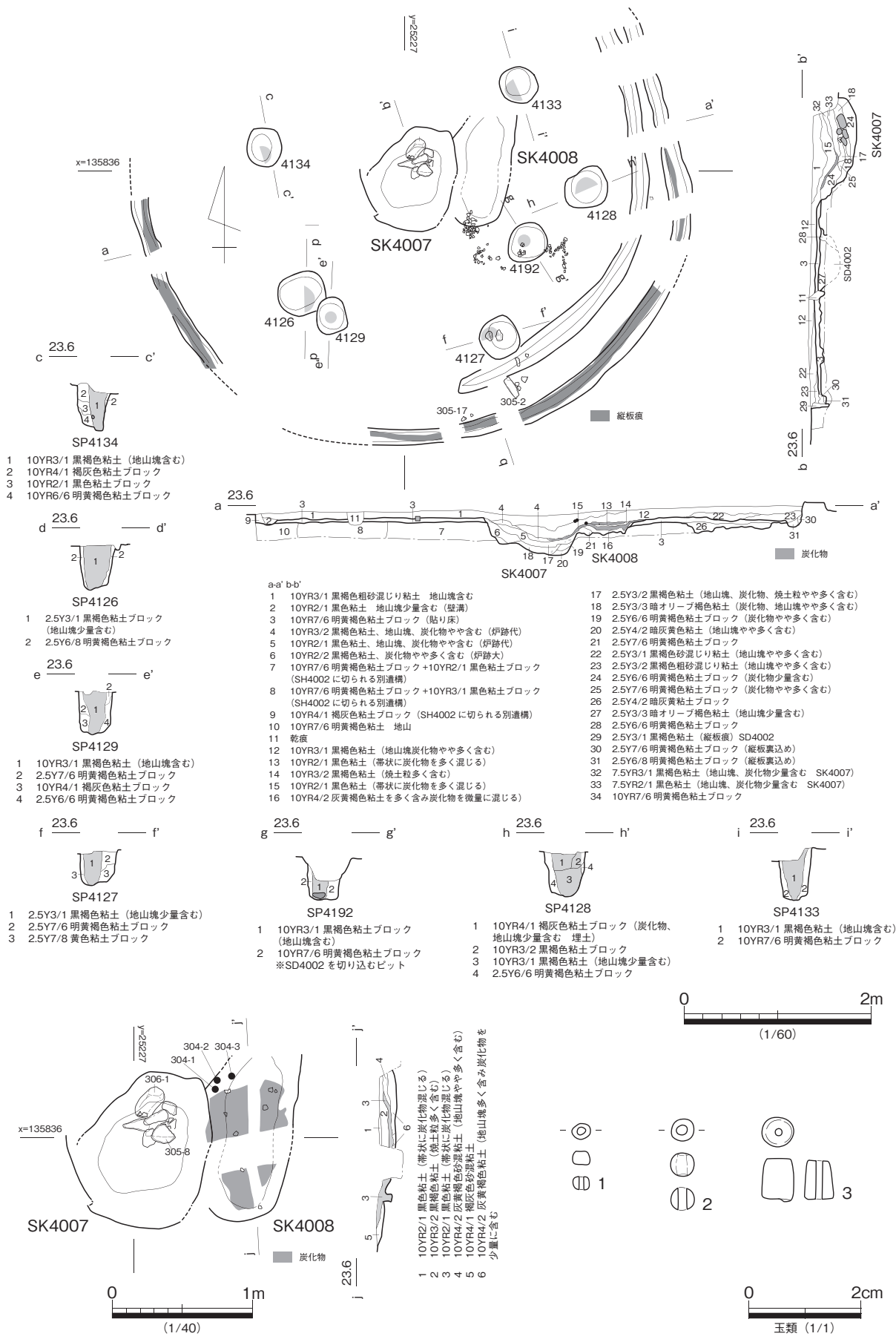


図 304 I -4 区 SH4002 平・断面・出土遺物 (1)

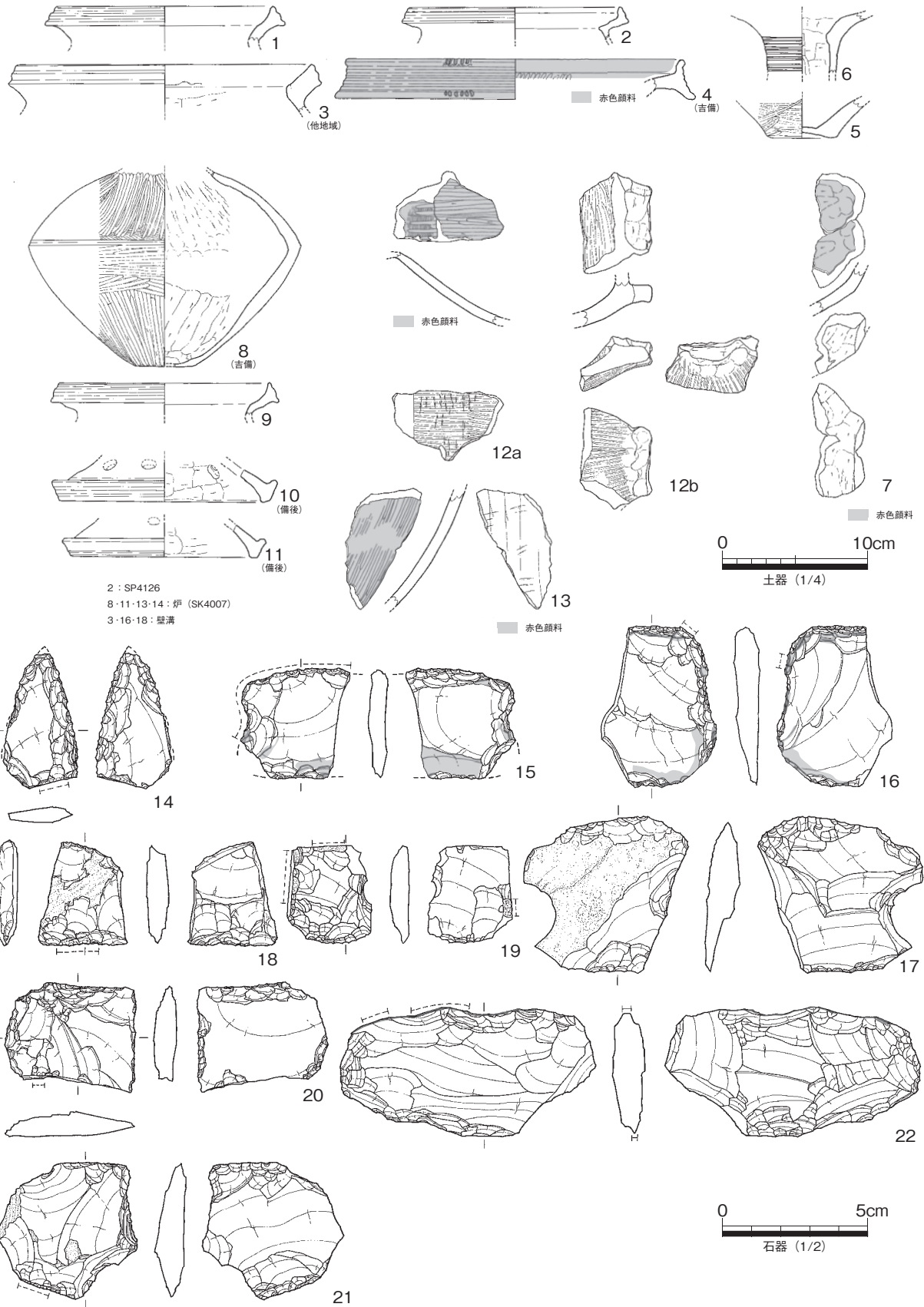
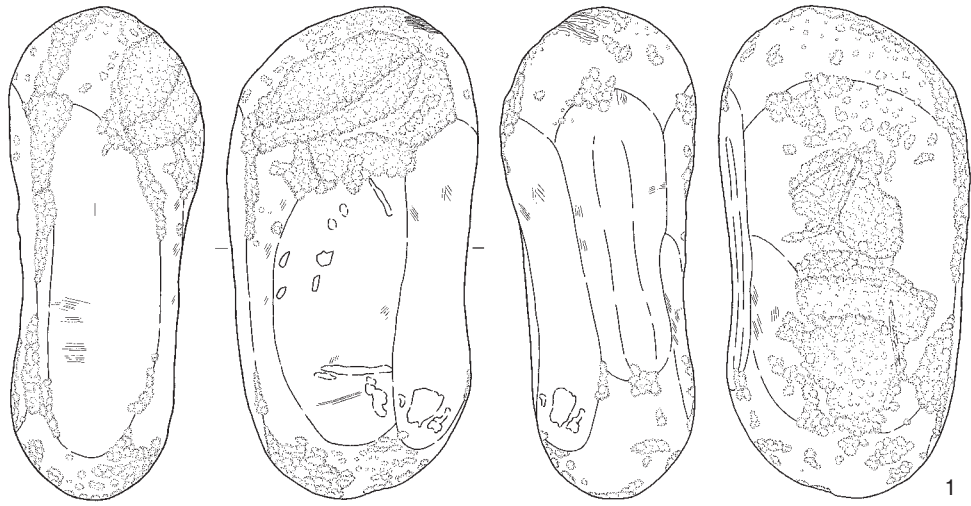
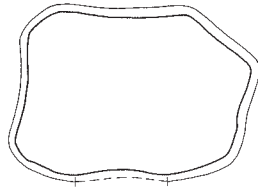


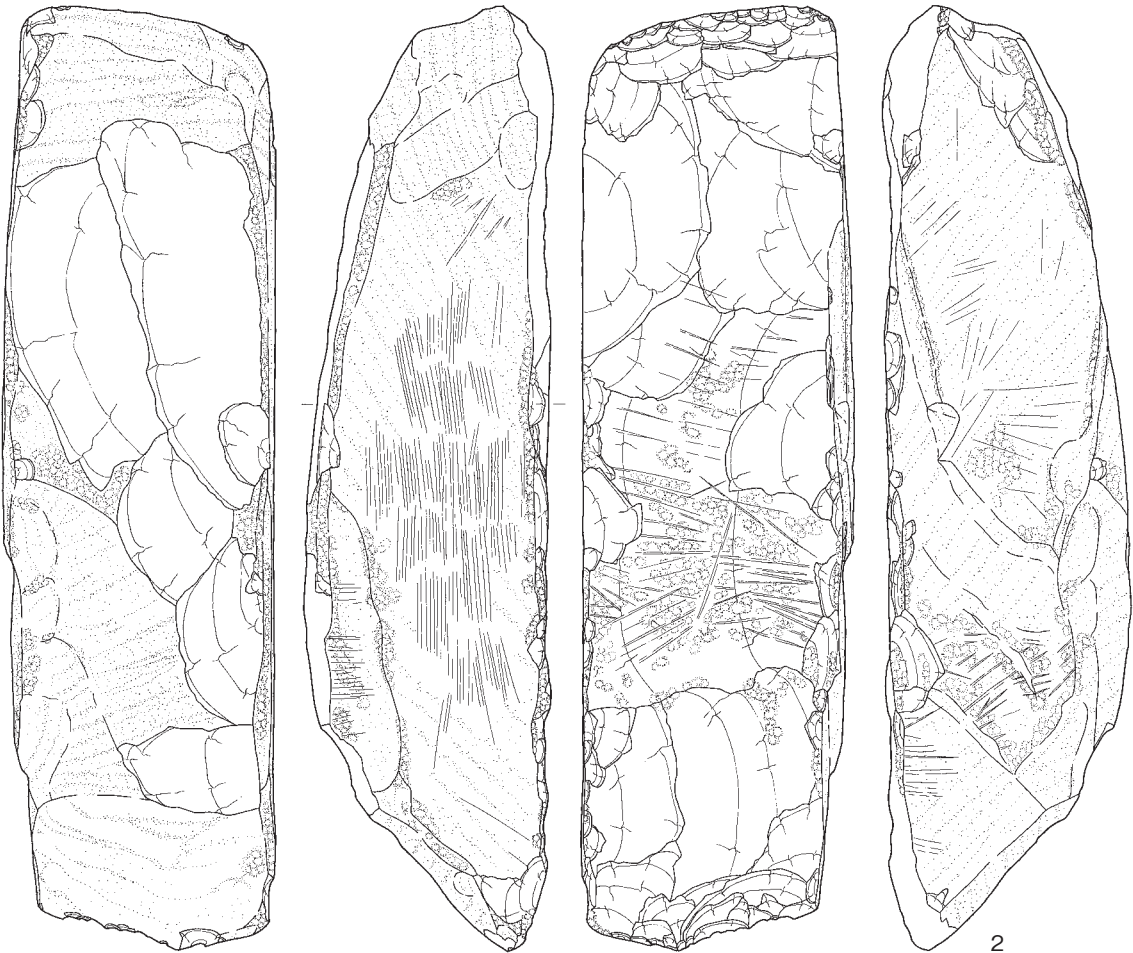
図 305 I -4 区 SH4002 出土遺物 (2)



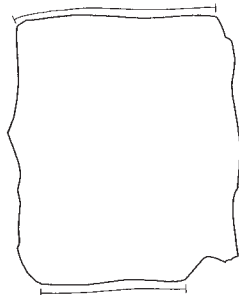
1
炉 (SK4007)



0 10cm
石器 (1/4)



2



0 5cm
石器 (1/2)

图 306 I -4 区 SH4002 出土遺物 (3)

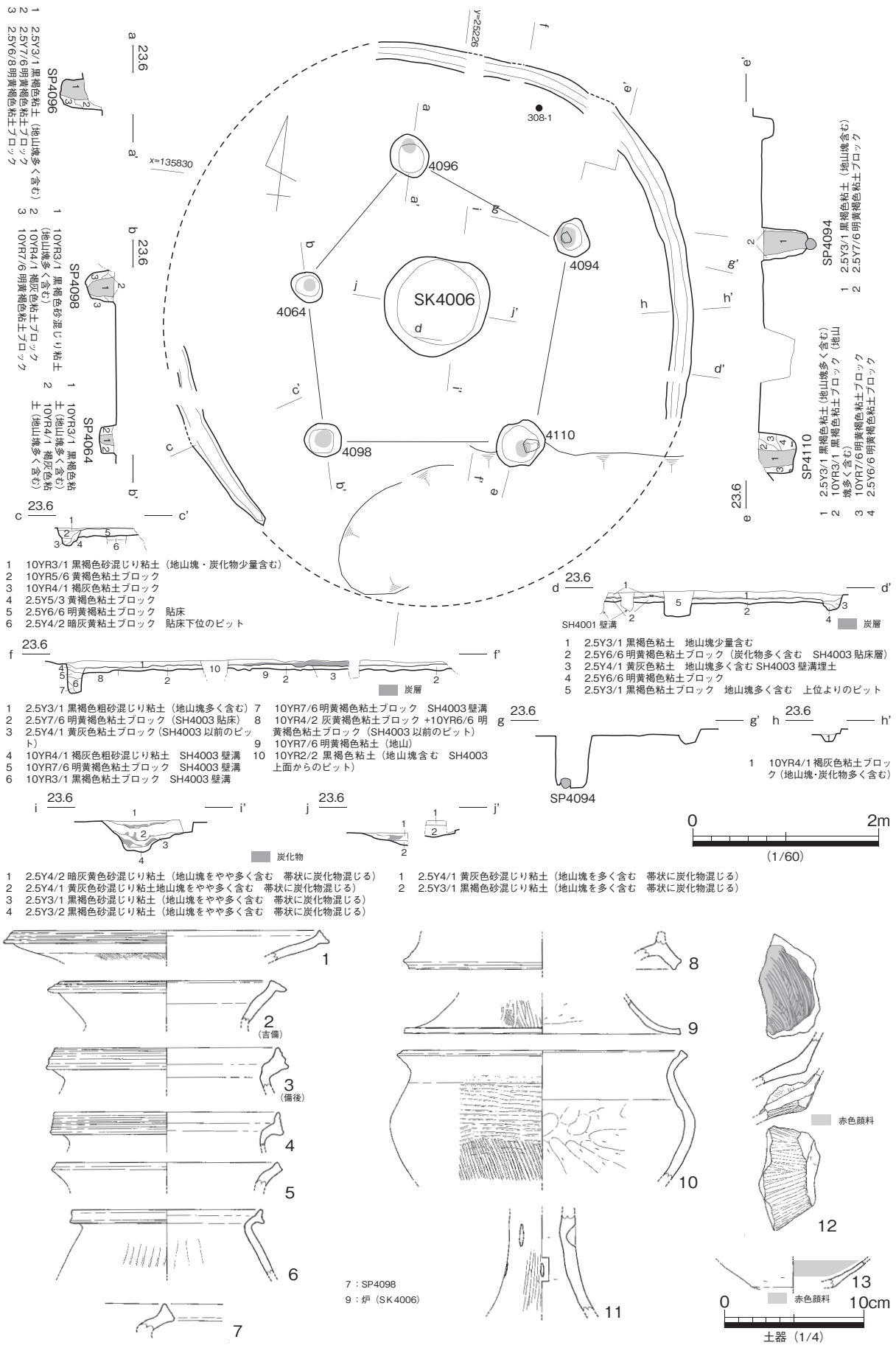


図 307 I-4区 SH4003 平・断面・出土遺物 (1)

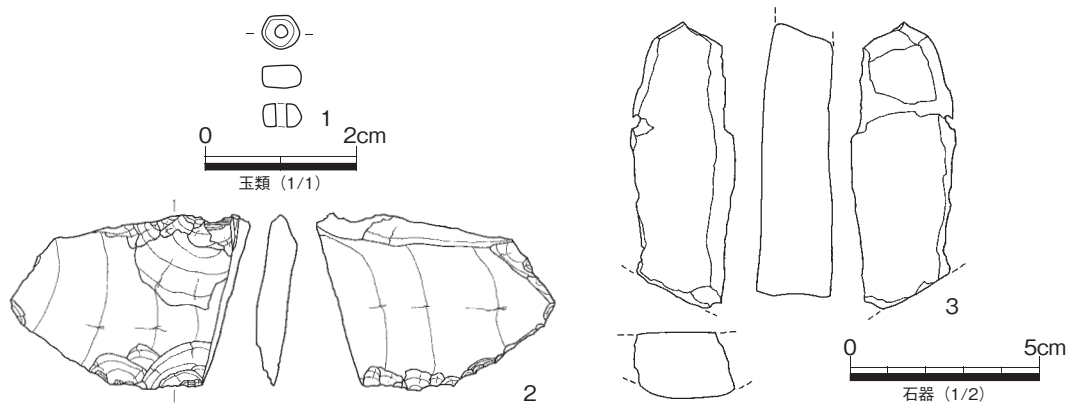


図 308 I -4 区 SH4003 出土遺物 (2)

窺えるが、具体的な機能を推定する材料に乏しい。

壁溝及び床面出土遺物（図 305）から、本住居は弥生後期前半中段階に帰属するものと考えられる。

図 304-1.2 はガラス製小玉、図 304-3 はガラス製管玉であり、これらは東側の楕円形炉 (SK4008) の北西部の炭化物層からまとまって出土した。ガラス製管玉（図 304-3）は、弥生後期以降に北部九州地域から東方への分布を広げた初期の事例となる。図 305-7.12a.12b.13 は水銀朱の精製に伴う把手付広片口皿である。いずれも甕半裁による成形とみられ、底部形態や外面調整から図 305-12a.12b と図 305-7.13 からなる最低 2 個体の存在を想定できる。図 305-4 は外面に赤色顔料みられる吉備系の器台。図 305-8 は算盤形の胴部形態から、吉備系の壺と考えられる。高杯（図 305-10.11）は、脚端部を下方に拡張する特徴からみて、備後系と考えられる。

図 306 は安山岩製の柱状の砥石であり、摩滅痕以外に線状の敲打痕がみられ、最終的には敲石に転用されている。

I -4 区 SH4003 (図 307・308)

I 区北東部で検出した竪穴住居である。古墳後期の SH4001、弥生終末期の SH4007 に切られ、弥生中期後半の SB4002.4003 を切り込む。住居北西部を SH4001、南東部を攪乱坑によって滅失するが、直径約 5.7m の円形住居であり、図示した 5 基の主柱穴をもつ。炉跡 SK4006 は、直径約 1.1m の円形ピットであり、埋没土中に複数の炭化物の薄層を交える。平面的に記録が採れていないが、SK4006 周辺には、掻き出しに伴う炭化物層が広がっていた。炉及び床面出土遺物（図 307）の特徴からみて、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものとする。

図 307-12 は水銀朱精製に伴う把手付広片口皿とみられ、甕半裁による底部に該当する破片である。外面に突起を作り出さない平底を残す形態をもち、内面には水銀朱の付着が確認される。図 307-13 は、内面に水銀朱の付着がみられる資料であり、小片ながら外面ケズリが確認されることから、把手付片口皿と考えてよいだろう。図 308 は滑石製白玉であり、上層からの混入品である。

I -4 区 SH4004 (図 309～311)

I 区北東部で検出した竪穴住居である。住居南西部を攪乱坑で滅失するが、弥生後期前半期の SB4001 を切り込む。住居壁面が直線的に延びる箇所が存在することから、5 基の主柱穴をもつ五角形

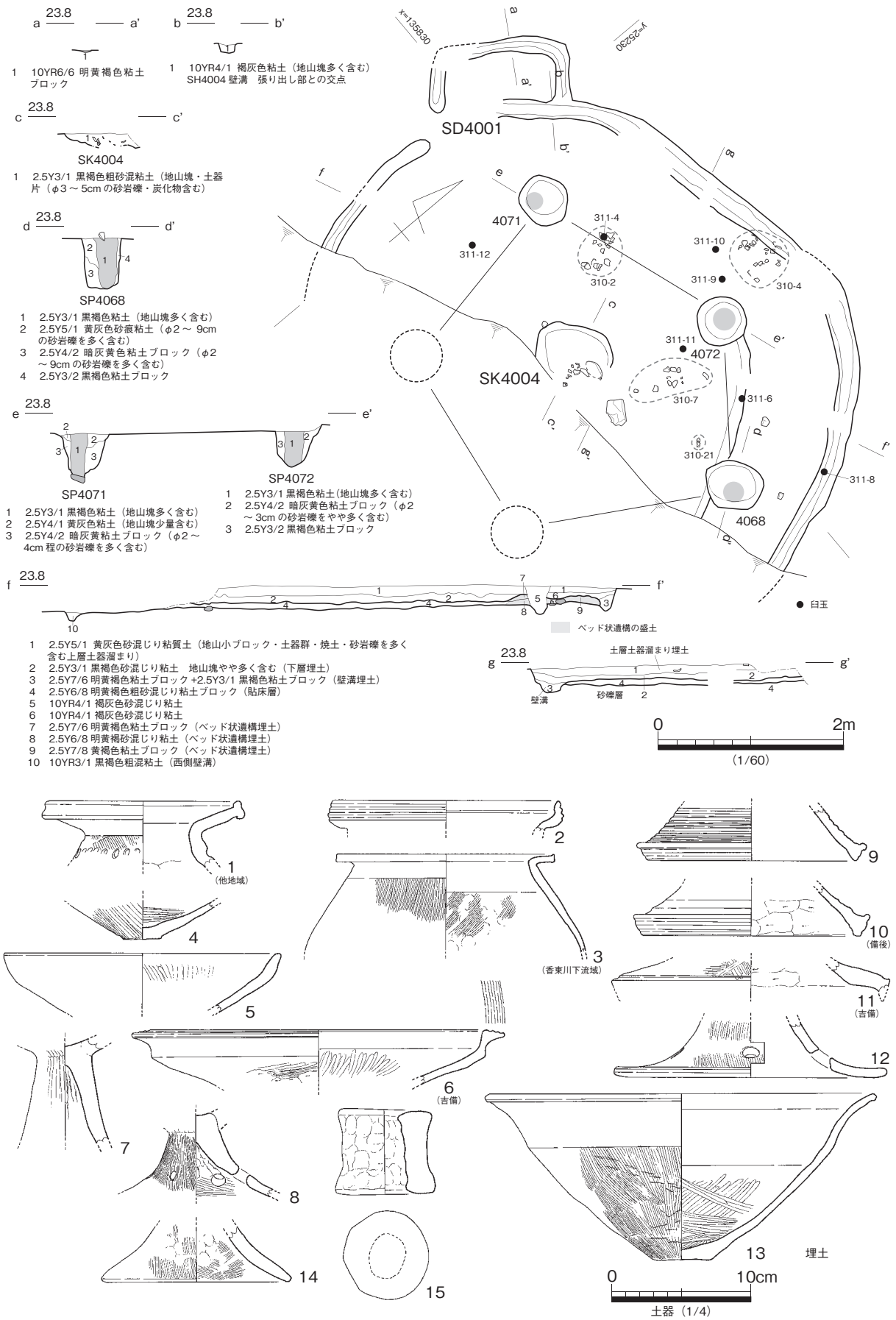


図 309 I-4区 SH4004 平・断面・出土遺物 (1)

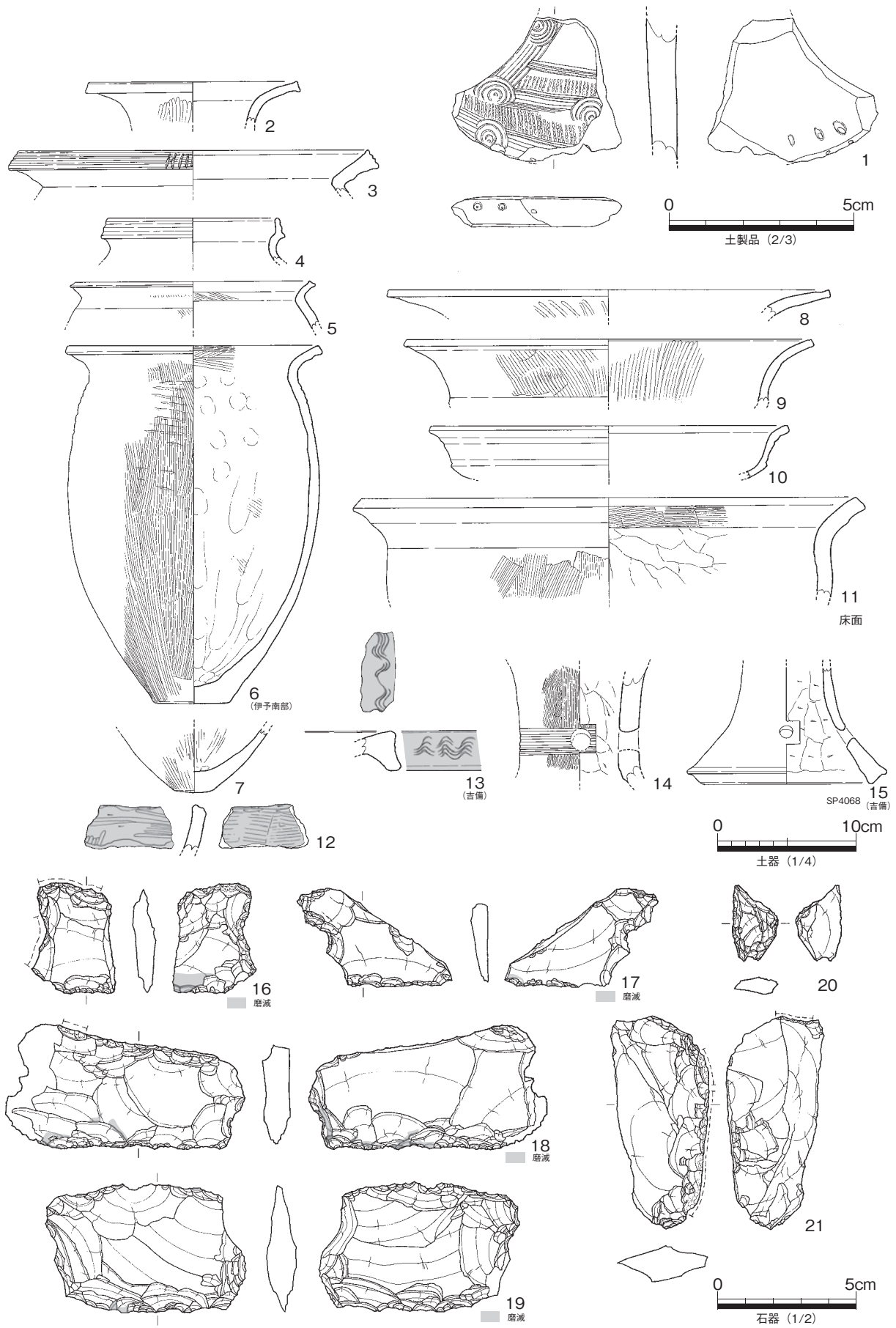


図 310 I-4区 SH4004 出土遺物 (2)

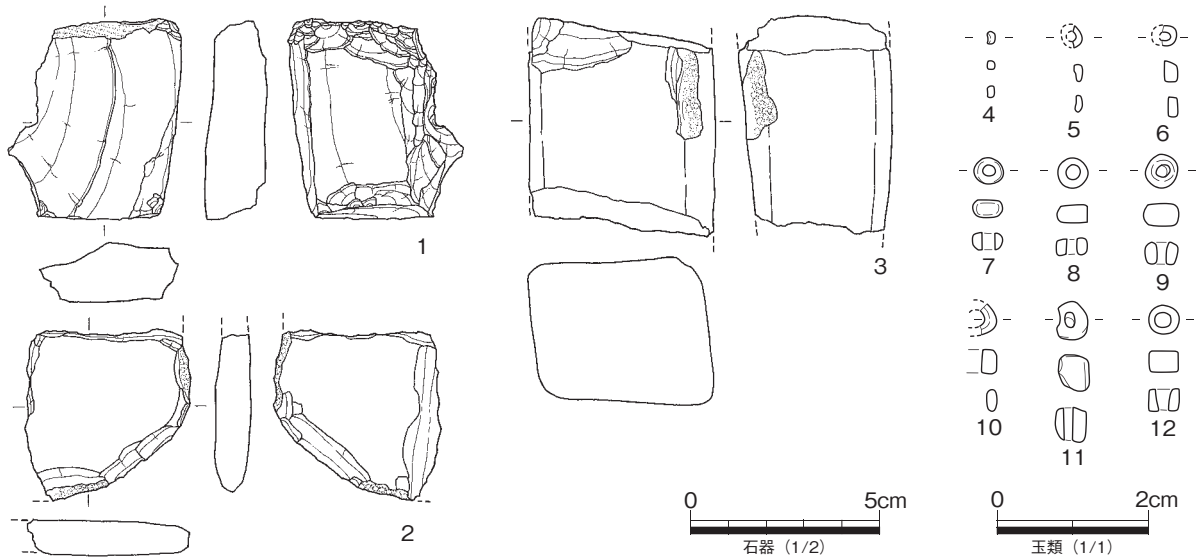


図 311 I -4 区 SH4004 出土遺物 (3)

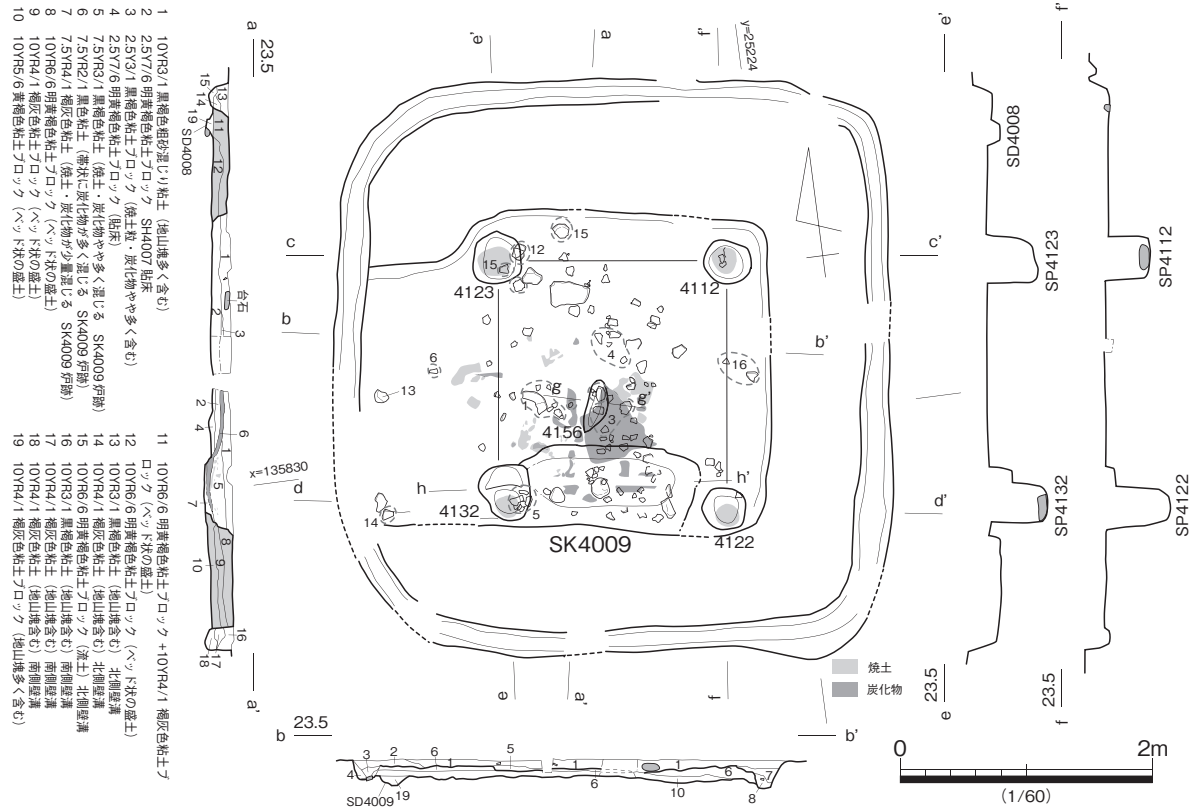
住居と判断する。また、住居北西部にはSD4001とした方形溝が取り付いた状況が見られ、張り出し部と捉える。住居西半部は、削平が床面まで及ぶが、東半分では約0.2mの壁高を測り、ベッド状遺構の敷設が確認された。床面中央には炉跡とみられるSK4004があり、それに接した形で安山岩製の台石が据え置かれていた。住居覆土は砂岩礫を多く含む埋め戻し土で、覆土中からは細片化した土器とともに、4点のガラス製小玉が出土している。住居東部のガラス玉は床面直上で検出したものであるが、一括して埋め戻された状況を考慮すると、他のものと同様に住居廃絶時に投棄されたと考えられる。また、遺物の取り上げは上層の土器溜りと床面に大別して取り上げているが、後期前半期の混入品を除いて両者に大きな時間差は看取できない。

鉢(図309-13)と高杯(図310-9.10)の形態から、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものと考えたい。鉢(図310-12)は、内外面に水銀朱とみられる赤色顔料が付着している。小片ながら上端にケズリ調整が確認できることから、甕半裁形の把手付広片口皿の可能性が高い。ガラス製玉(図311-4~11)の内、図311-4~10については小玉の範疇で理解できるが、図311-11は側面観に厚みがあることから、管玉と考えたい。

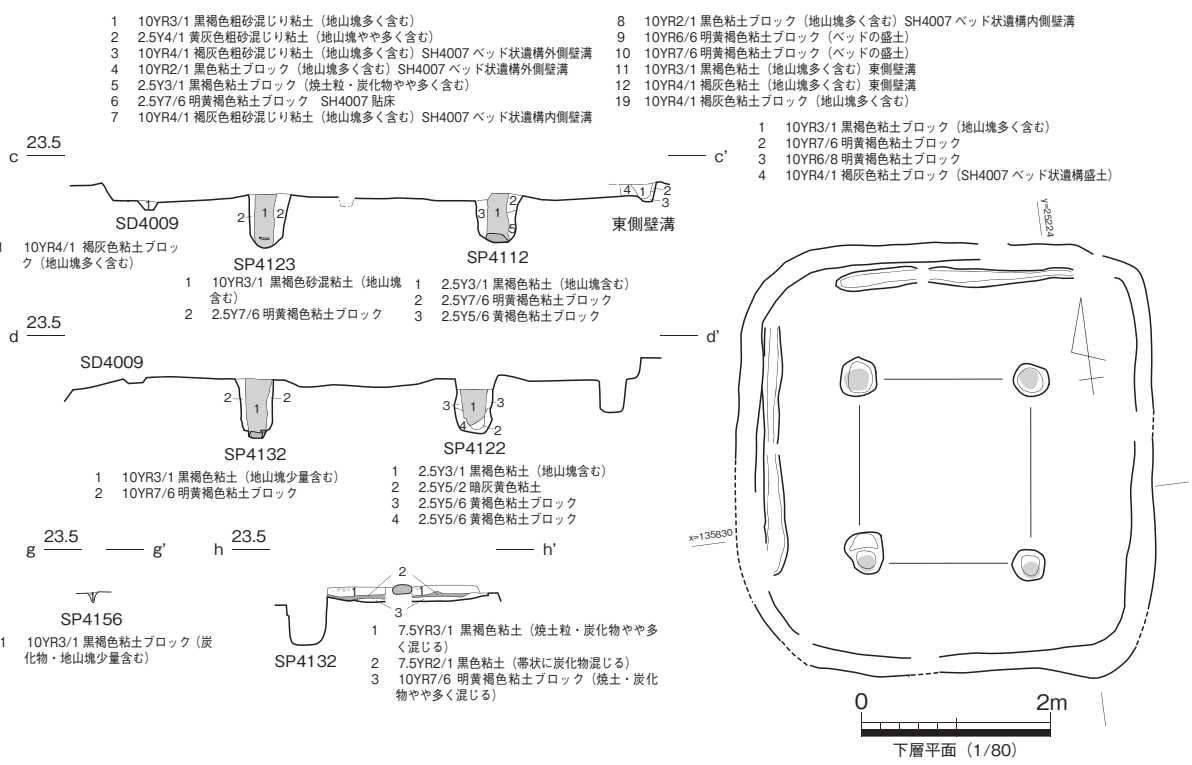
図311-12は滑石製白玉であり、上層からの混入品。図311-2は結晶片岩製の扁平な自然礫を素材とし、周縁に加工痕がみられる。定形器種の未成品の可能性はあるが、特定はできない。

I -4 区 SH4007 (図 312・313)

I区北東部で検出した竪穴住居である。古墳後期のSH4001に切られ、弥生後期前半期のSH4003、弥生中期後半期のSB4002.4003を切る。一辺が約4.5mの隅丸方形を呈し、壁面の立ち上がりが約0.2m残存している。主柱穴は図示した4基であり、西側を除いて壁面との間にベッド状遺構を敷設する。床面中央からやや南よりにSP4156とした楕円形の小ピットと、その南側にベッド状遺構に接する形で隅丸方形を呈するSK4009がみられる。SK4009は中位に帯状の炭化物を認める灰穴炉であるが、楕円形のSP4156は埋没土に炭化物粒を多く認めるため、炉跡を構成するピットと考えられるが、形態や規模から推測される灰穴炉SK4009との機能面での関係など不明な点が多い。本形態の炉は、弥生終末期に



- 1 10YR3/1 黒褐色粗砂混じり粘土 (地山塊多く含む)
- 2 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック SH4007 貼床
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック (炭土粒・炭化物や多く含む)
- 4 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック (炭土) (炭土)
- 5 7.5YR3/1 黒褐色粘土 (焼土・炭化物や多く混じる SK4009 貯蔵)
- 6 7.5YR2/1 黒褐色粘土 (帯状に炭化物が混じる SK4009 貯蔵)
- 7 7.5YR4/1 黒褐色粘土 (焼土・炭化物が少量混じる SK4009 貯蔵)
- 8 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック (ベツト状の盛土)
- 9 10YR4/1 褐色粘土ブロック (ベツト状の盛土)
- 10 10YR5/6 黄褐色粘土ブロック (ベツト状の盛土)
- 11 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック + 10YR4/1 褐色粘土ブロック (ベツト状の盛土)
- 12 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック (ベツト状の盛土)
- 13 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊含む) 北側壁溝
- 14 10YR4/1 褐色粗砂混じり粘土 (地山塊含む) 北側壁溝
- 15 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊含む) 南側壁溝
- 16 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック (炭土) 北側壁溝
- 17 10YR4/1 褐色粘土ブロック (炭土) 南側壁溝
- 18 10YR4/1 褐色粘土ブロック (地山塊含む) 南側壁溝
- 19 10YR4/1 褐色粗砂混じり粘土 (地山塊多く含む)



- 1 10YR3/1 黒褐色粗砂混じり粘土 (地山塊多く含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じり粘土 (地山塊や多く含む)
- 3 10YR4/1 褐色粗砂混じり粘土 (地山塊多く含む) SH4007 ベッド状遺構外側壁溝
- 4 10YR2/1 黒色粘土ブロック (地山塊多く含む) SH4007 ベッド状遺構外側壁溝
- 5 2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック (焼土粒・炭化物や多く含む)
- 6 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック SH4007 貼床
- 7 10YR4/1 褐色粗砂混じり粘土 (地山塊多く含む) SH4007 ベッド状遺構内側壁溝
- 8 10YR2/1 黒色粘土ブロック (地山塊多く含む) SH4007 ベッド状遺構内側壁溝
- 9 10YR6/6 明黄褐色粘土ブロック (ベッドの盛土)
- 10 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック (ベッドの盛土)
- 11 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊多く含む) 東側壁溝
- 12 10YR4/1 褐色粘土 (地山塊多く含む) 東側壁溝
- 13 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊多く含む) 東側壁溝
- 14 10YR4/1 褐色粘土ブロック (地山塊多く含む)
- 15 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊多く含む)
- 16 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック
- 17 10YR6/8 明黄褐色粘土ブロック
- 18 10YR4/1 褐色粘土ブロック (SH4007 ベッド状遺構盛土)
- 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊含む)
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (地山塊含む)
- 3 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック
- 4 2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック
- 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊少量含む)
- 2 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック
- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (地山塊含む)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
- 3 2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック
- 4 2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック
- 1 7.5YR3/1 黒褐色粘土 (焼土粒・炭化物や多く混じる)
- 2 7.5YR2/1 黒色粘土 (帯状に炭化物混じる)
- 3 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック (焼土・炭化物や多く混じる)

図 312 I -4 区 SH4007 平・断面

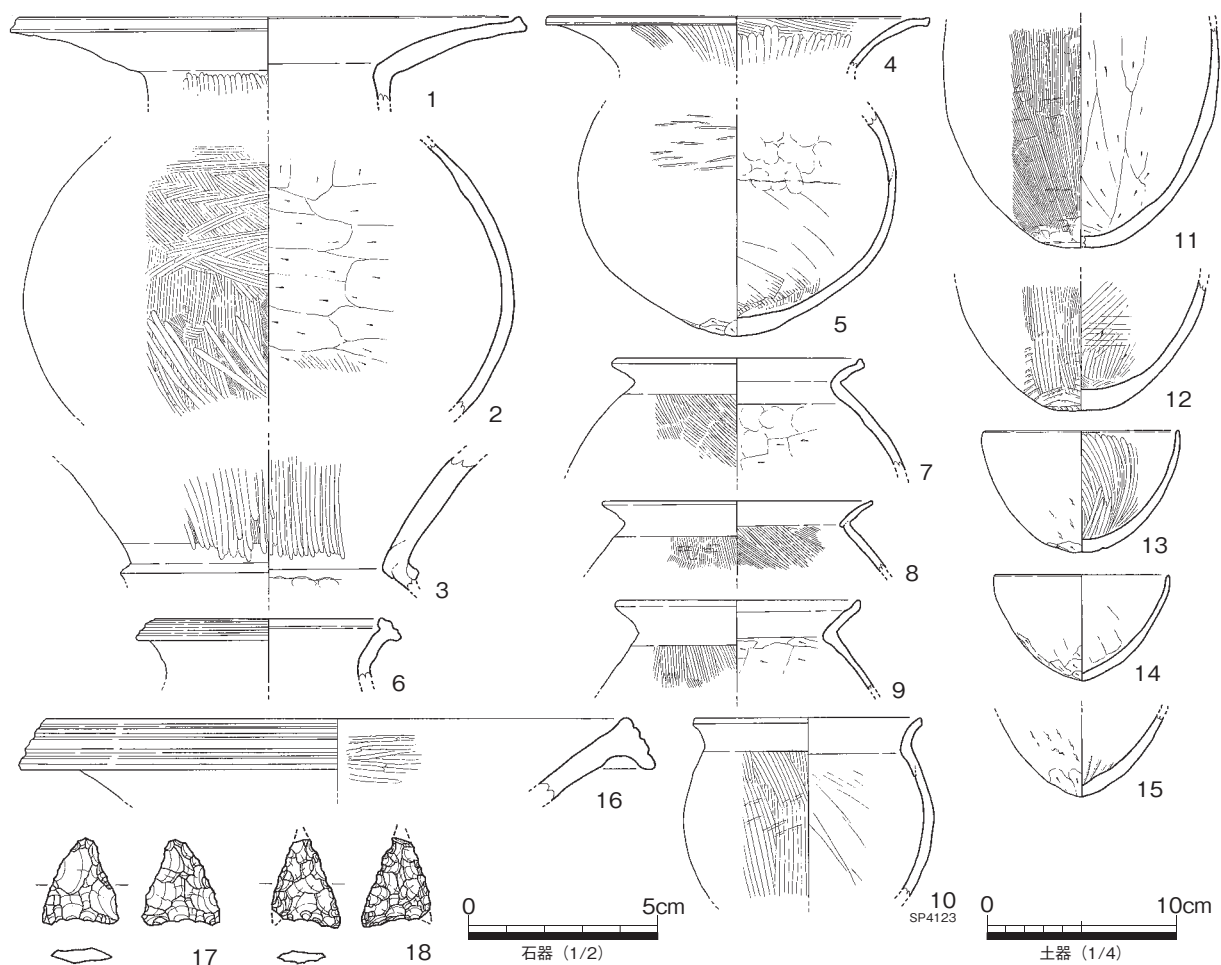


図 313 I -4 区 SH4007 出土遺物

見られる類型の一つであり、古墳初頭の床面南側に灰穴炉単独で設けられる類型への過渡的な様相を示すものと考えられる。床面上には、土器片が散乱した状態で検出されており、炉跡周辺では掻き出しに伴う炭化物の集積や焼土塊がまとまって見られた。床面調査終了後に、貼床土及びベッド状遺構を構成する盛土を除去した段階で、住居北・西側の壁溝に併行する小溝を検出した。先行住居の壁溝とも考えられるが、検出状態から見て、ベッド状遺構敷設に伴う地形に関係したものと考えられよう。

広口壺（図 313-1）や鉢（図 313-13～15）の形態から、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと推定しておきたい。

II -1 区 SH1001（図 315～317）

II 区中央部南端で検出した竪穴住居である。住居南側が調査区外となるが、北西部を中心に壁溝及びベッド状が残存している。現状で支柱穴は 5 基検出しており、南側の未調査部分にもう 3 基の柱穴を想定し、合計で 8 基の支柱穴を想定する。また、壁溝の平面プランが円弧を描かないことや、支柱穴数から考えて多角形住居となる可能性が高い。住居中央と推定できる箇所には円形炉 SK1007 があり、その北側に炭化物層が集中落ち込みが見られる。床面上には碎片化した土器片や砂岩礫を多く検出しているが、覆土に明瞭な層境は認められず、一括して埋め戻された状況が想定できるため、これらの土器群は



图 314 II区 平面

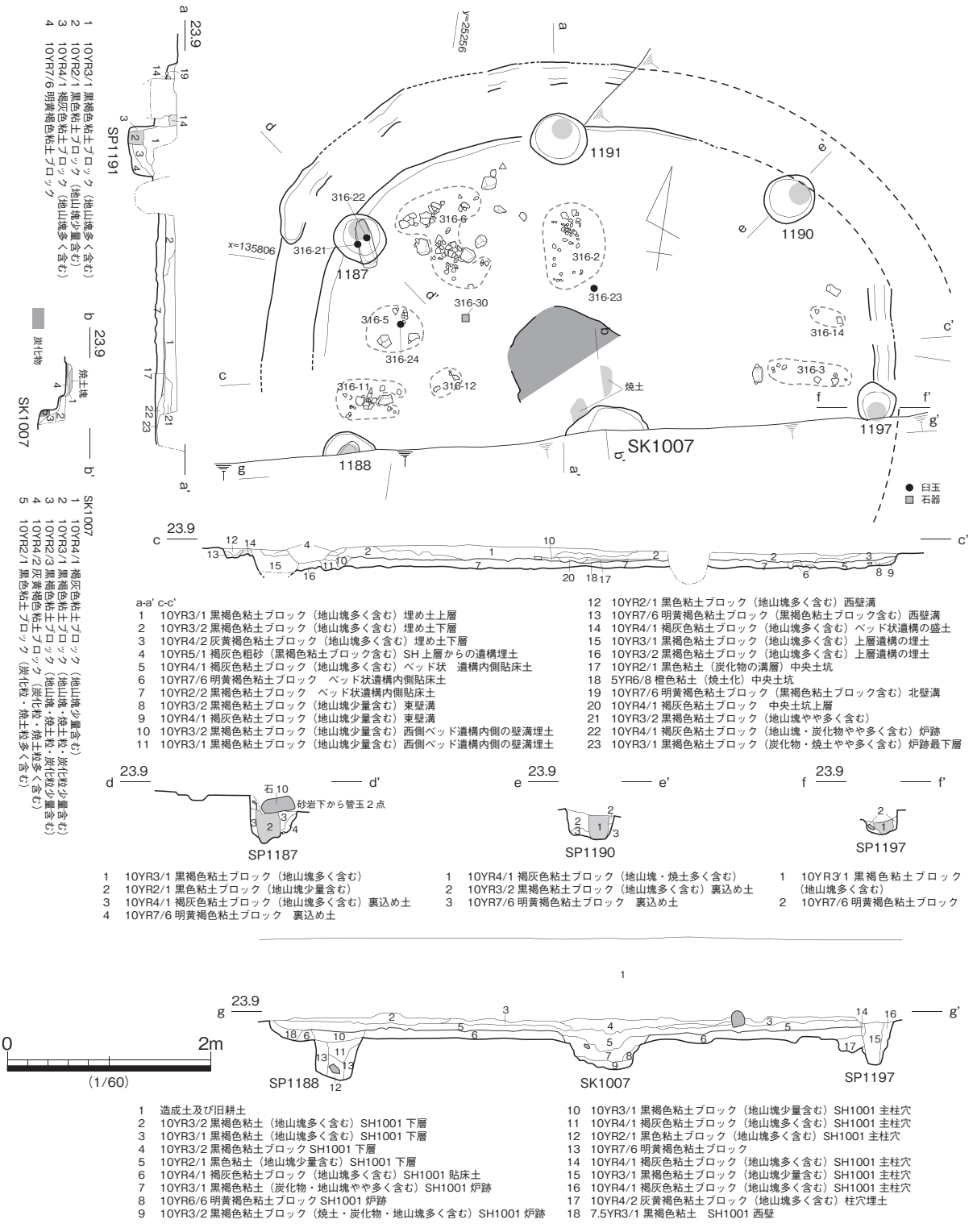


図 315 II -1 区 SH1001 平・断面

廃絶時の一括廃棄と考えられる。また、この際に主柱穴SP1187上面に投棄された大形の砂岩礫の下より、碧玉製の管玉（図 316-21.22）が2点出土している。

出土遺物の内、甕（図 316-3.6）鉢（図 316-15）の形態から、本住居は弥生終末期中段階に廃絶したものと捉えたい。図 316-23.24 は滑石製白玉であり、上位よりの混入品。図 316-30 は結晶片岩製の柱状

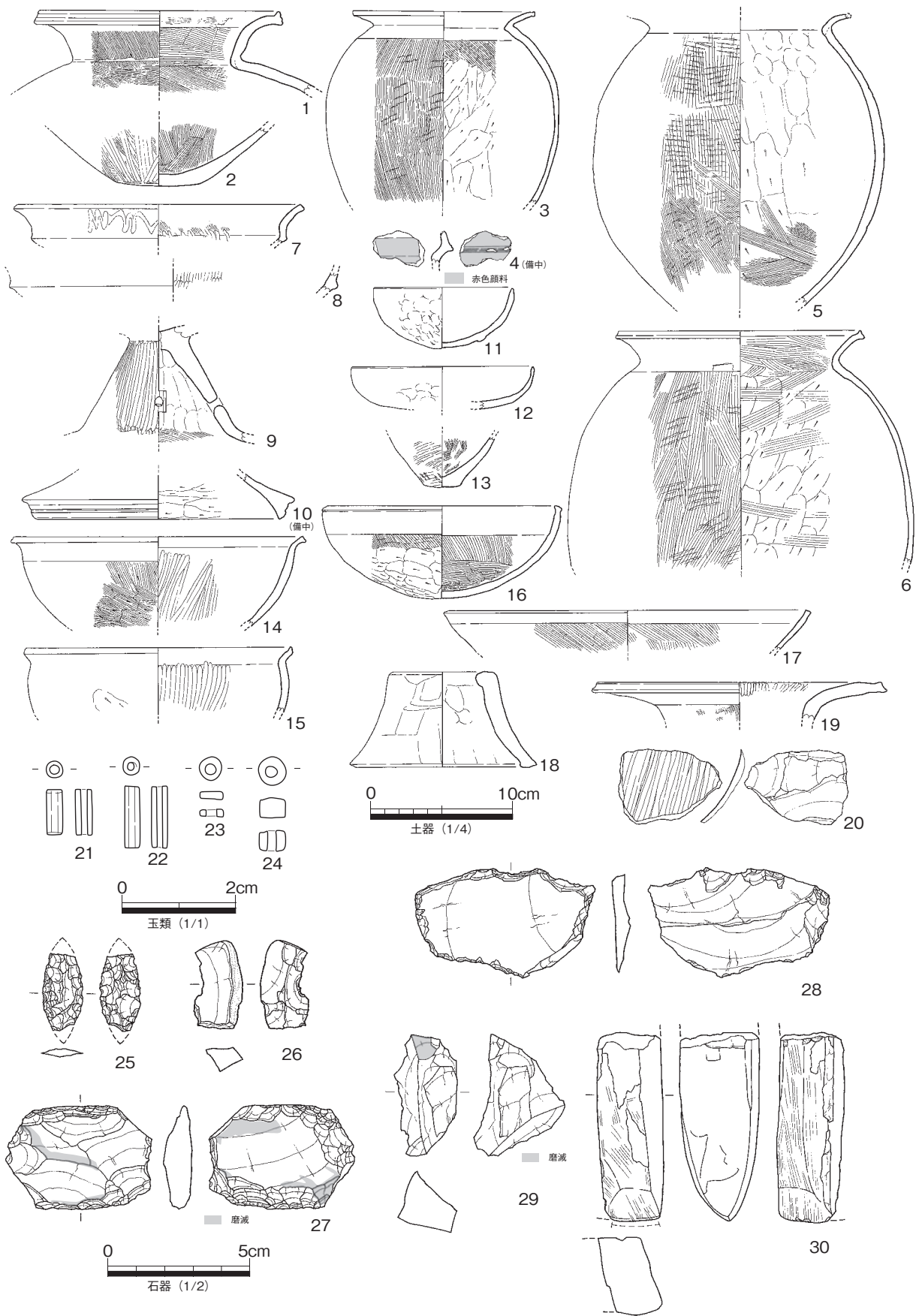


图 316 II -1 区 SH1001 出土遺物 (1)

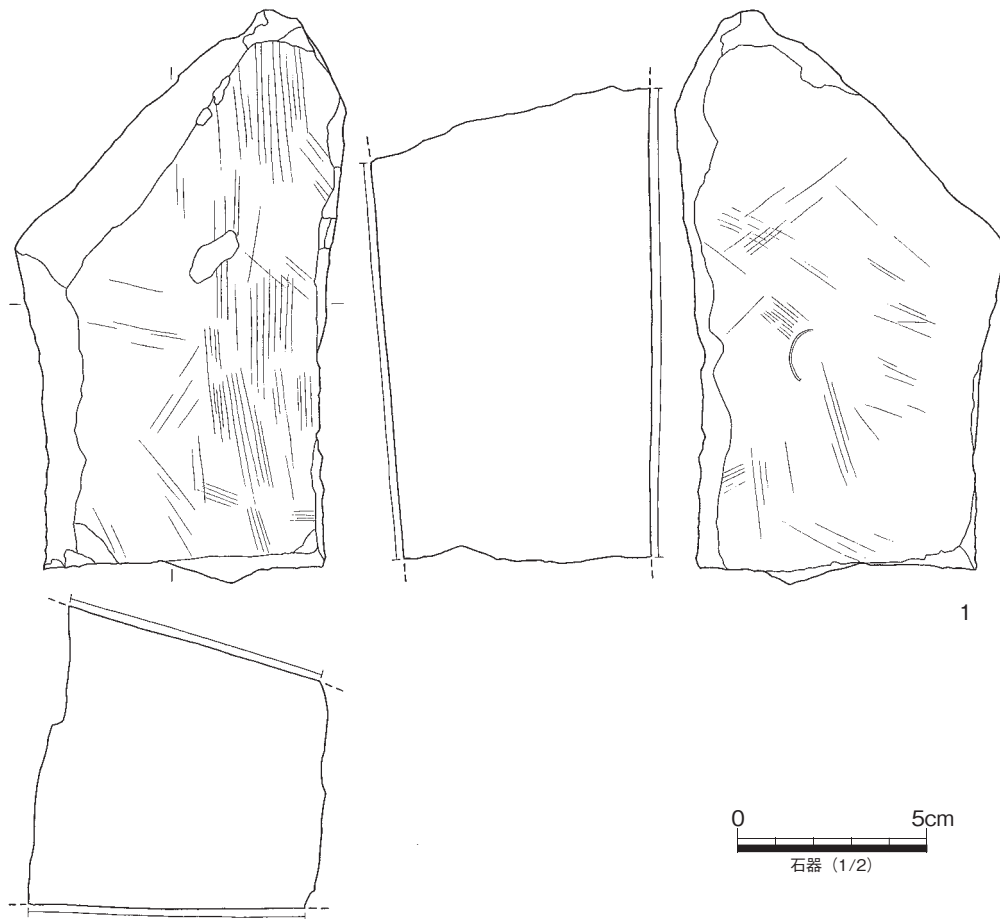


図 317 II -1 区 SH1001 出土遺物 (2)

片刃石斧片であるが、時期的にみて本住居の帰属時期に伴うものとは考えられない。図 317 は安山岩製の置砥石である。

II -1 区 SH1005 (図 318・319)

II 区中央南寄りで検出した竪穴住居である。古墳中期の SH1004 に切られ、弥生後期後半期の SH1006 を切り込む。一辺が約 3.8m の隅丸方形を呈し、南北方向の 2 基の主柱穴とそのやや南側に炉 SK1006 があり、南北両側にベッド状遺構を敷設する。検出状態で床面ほぼ全域に焼土・炭化物が広がり焼失家屋とみられるが、炭化材は元々の形状を保つものが少ない。焼土・炭化物の上位は黄褐色粘土ブロックを多く含む埋め土であり、消失後の早期に埋め戻された可能性が高い。主柱穴は図示した 2 基であり、柱痕と見られる層序の底面まで住居覆土と類似する焼土塊及び炭化物が含まれていることから、柱材が抜き取られた後住居が焼き払われたと考えられる。また、住居中央部まで焼土塊がみられるため、かなり高さまで土屋根を想定する必要がある。

炉 SK1006 は主柱穴の柱間に深い円形炉があり、その東側に結合した状態で隅丸長方形の灰穴炉がある。円形炉に顕著な熱変は観察できず、埋没土は住居埋め戻し土と共通したものであった。

出土遺物の内、鉢 (図 318-2.4.5) の形態から、本住居は弥生終末期古段階に廃絶したものとする。図 318-2 は破片間で明瞭に色調を違えることから、焼成破裂土器と考えられる。

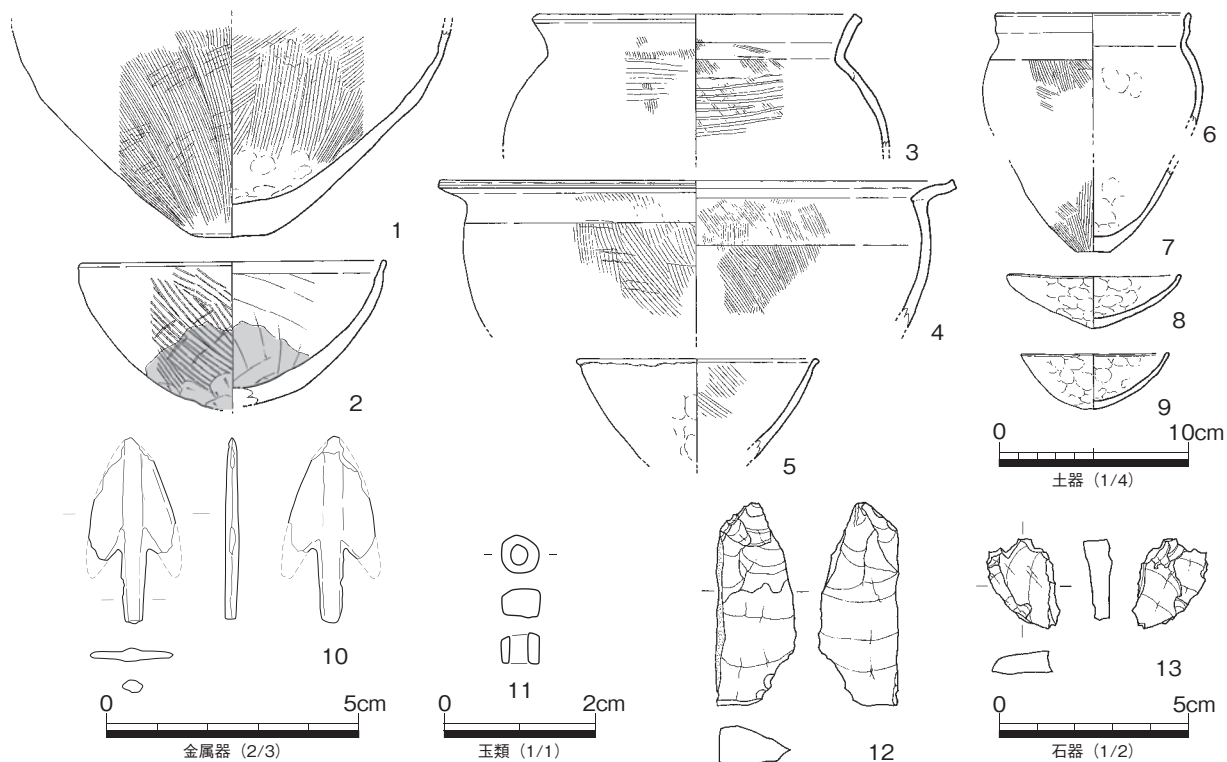
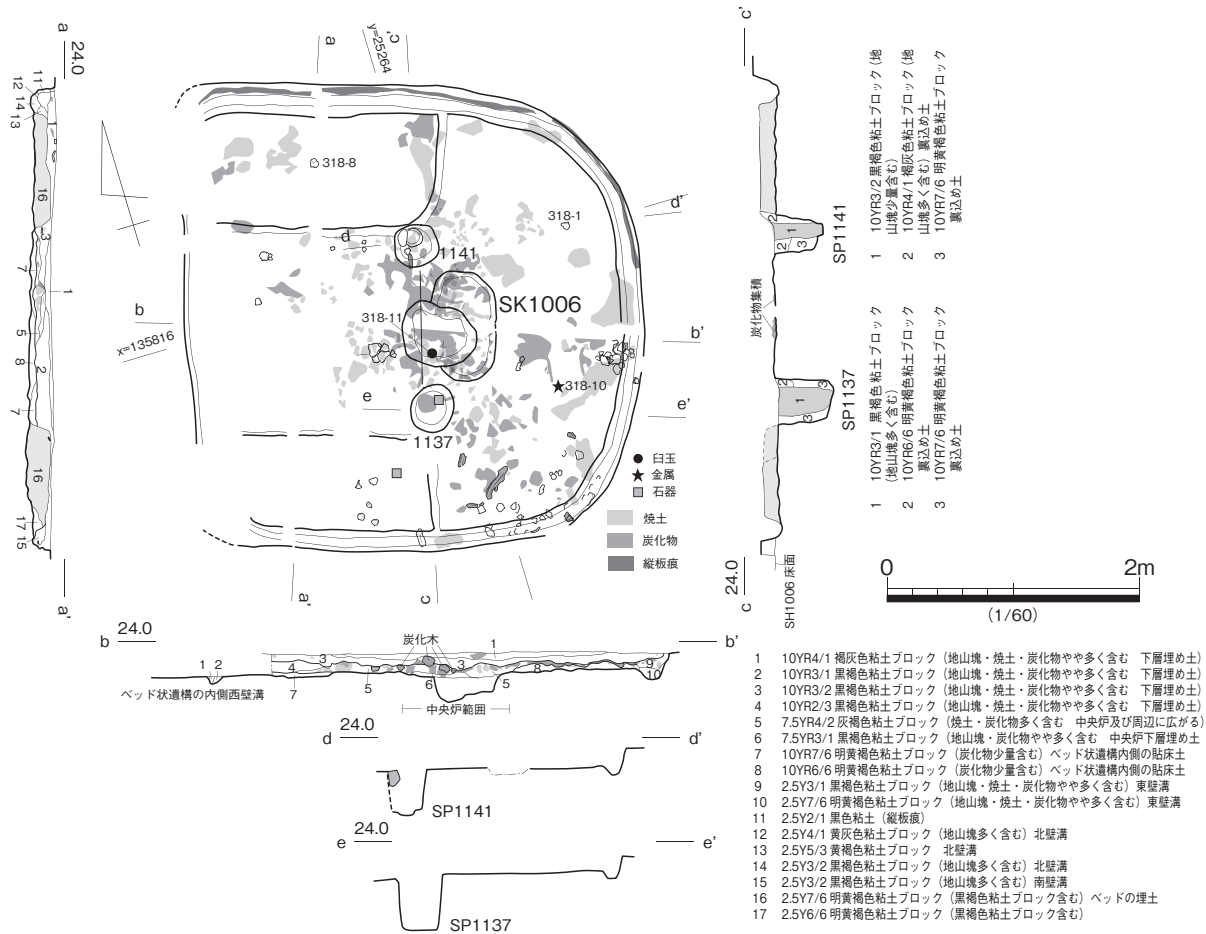


図 318 II -1 区 SH1005 平・断面・出土遺物 (1)

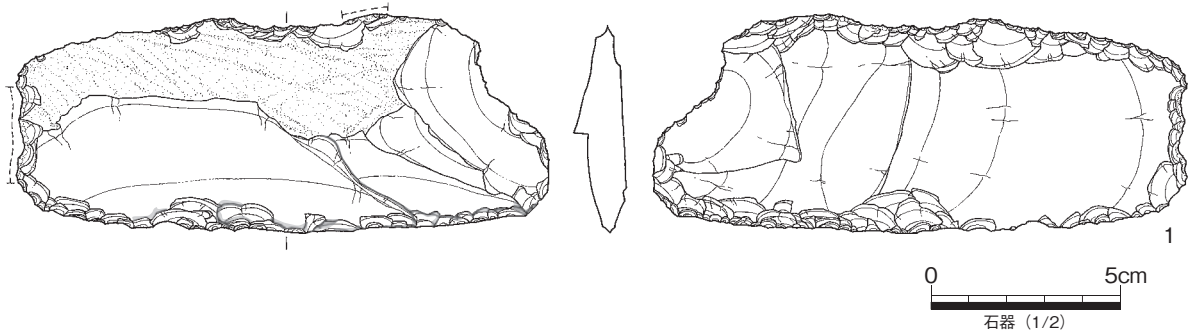


図 319 II -1 区 SH1005 出土遺物 (2)

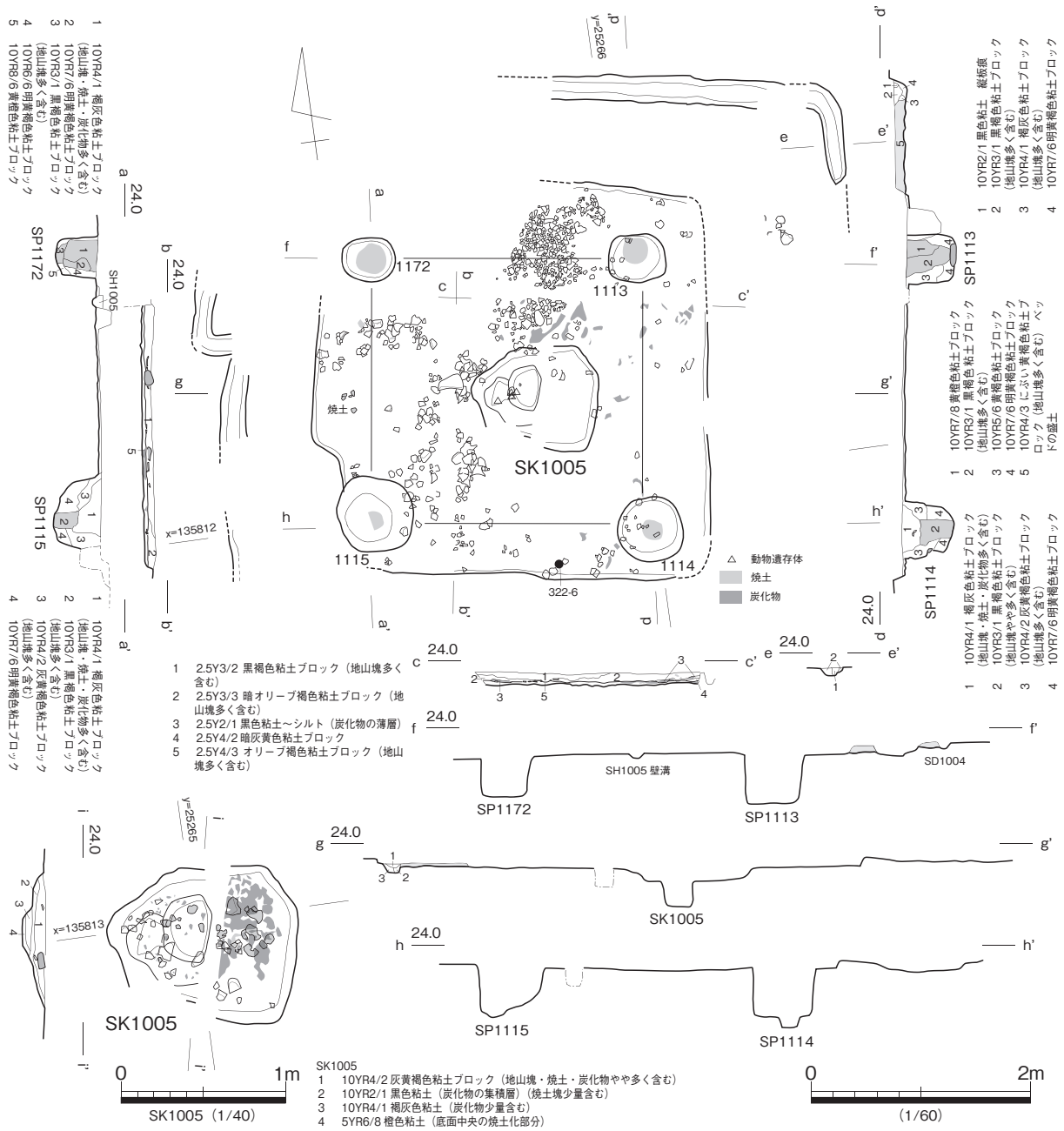


図 320 II -1 区 SH1006 平・断面

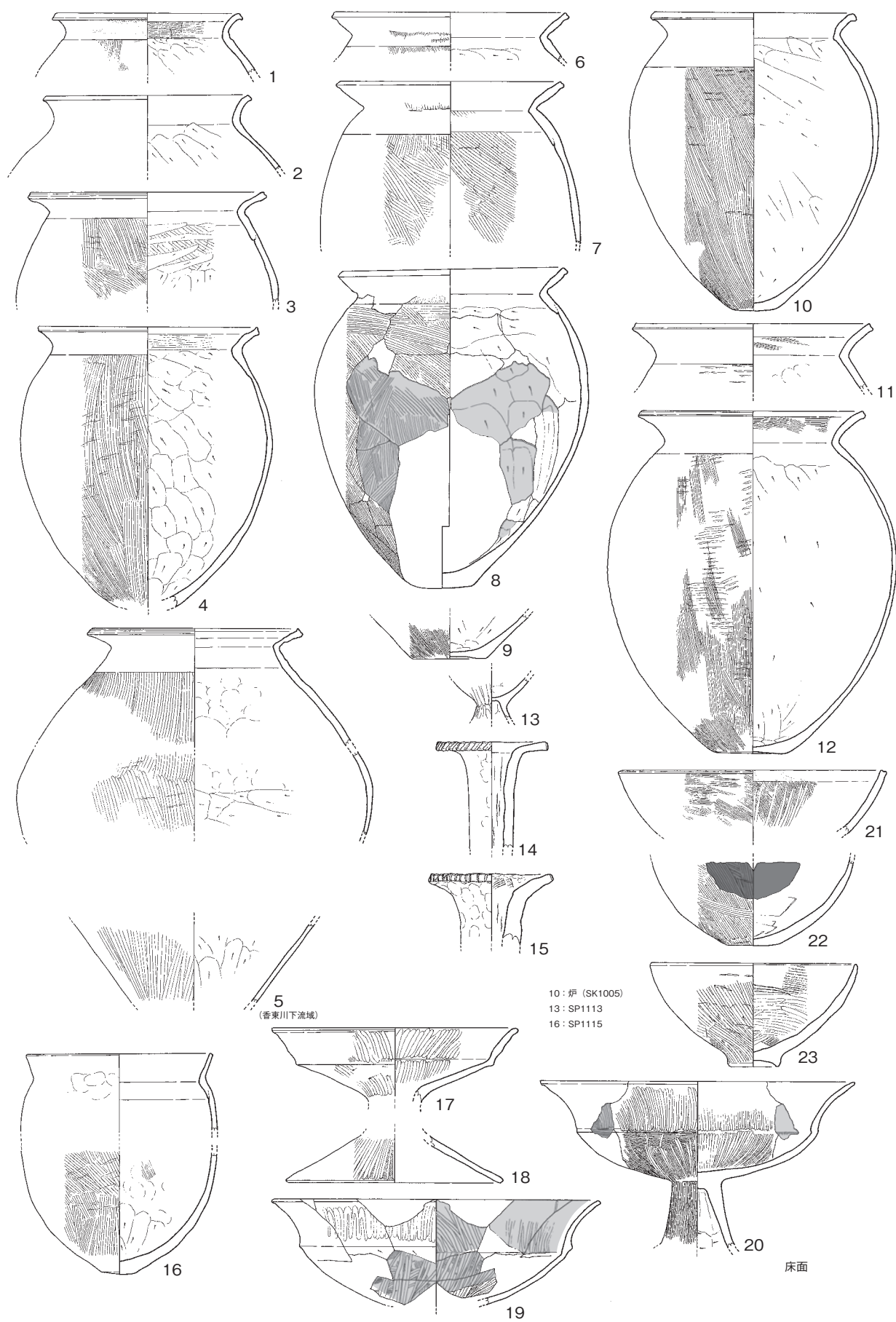


图 321 II -1 区 SH1006 出土遺物 (1)

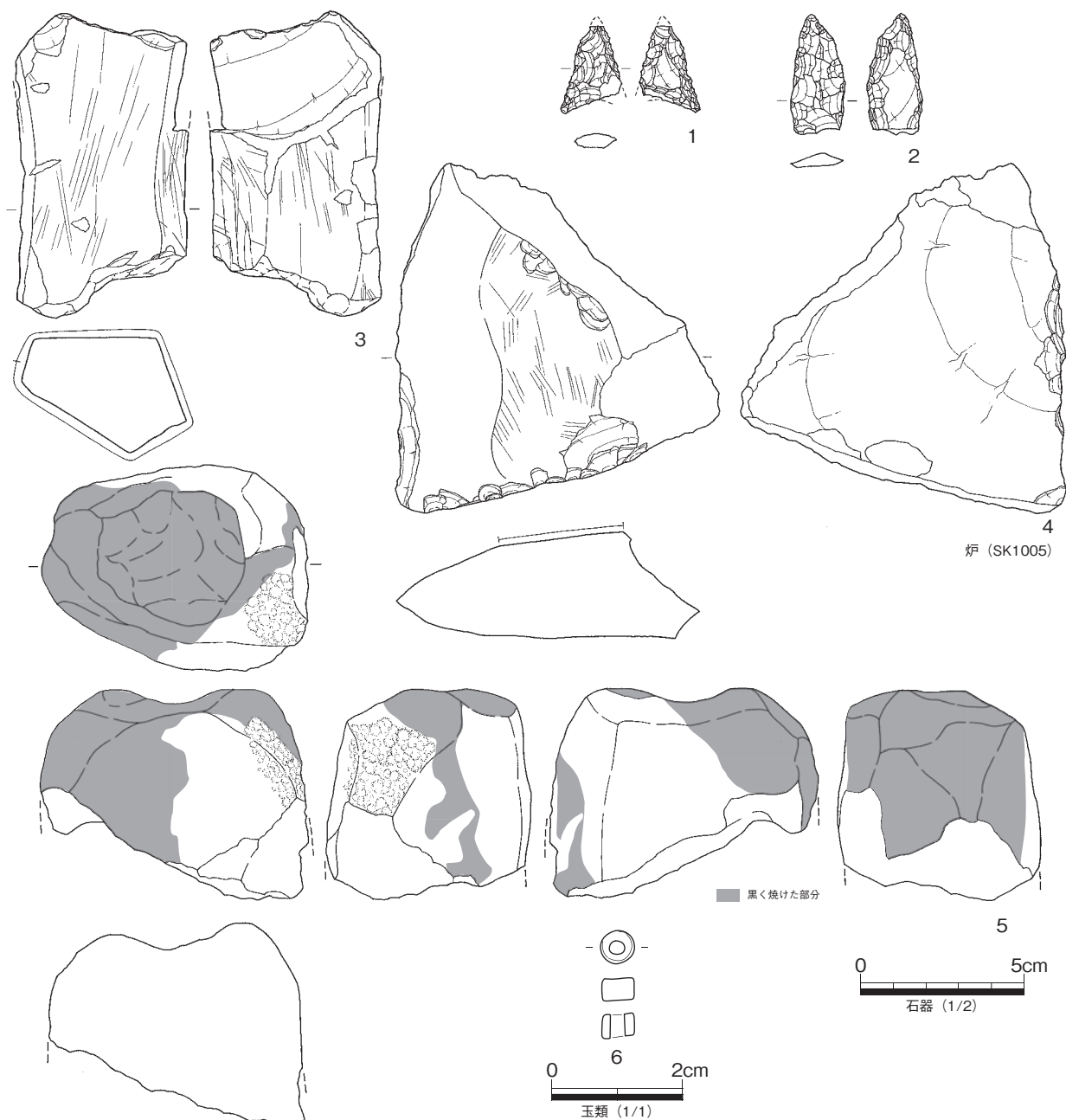


図 322 II -1 区 SH1006 出土遺物 (2)

床面から出土した銅鏃（図 318-10）は、逆刺を欠損するものの、身部には湯道と考えられる明瞭な脊が観察できる。図 318-11 は滑石製白玉であり、上位からの混入品である。図 319-1 は完形のサヌカイト製打製石庖丁であり、背面に大きな自然面を残す。

II -1 区 SH1006 (図 320 ~ 322)

II区中央南よりで検出した竪穴住居である。弥生終末期のSH1005、1007に切られ、弥生中期後半のSB1001を切り込む。これらの切り合い関係や後世の削平により、壁面を部分的にしか検出できていないが、4基の支柱穴の検出位置から一辺が約5.5mの方形住居に復元できる。また、住居北西部で壁溝

がクランクしてみられる箇所があり、小規模な張り出し部が敷設されていた可能性が高い。南側を除く三方に盛土によるベッド状遺構を辛うじて検出しており、主柱穴はその内側の隅部に配置される。床面中央に不定形の炉 SK1005 があり、炉東側を中心に炭化物の集中が認められた。ベッド状遺構より内側の床面では碎片化した土器片が広がり、特に北西部と南西部にその集中がみられた。

出土遺物の内、床面や炉から出土した甕（図 321-8.10）の形態から、本住居は弥生後期後半新段階に帰属するものと考えたい。また、甕（図 321-8）鉢（図 321-22）高杯（図 321-19.20）は、破片間で黒斑が途切れたり、色調を違えることから、焼成破裂土器と考える。

II -1 区 SH1007（図 323）

II 区南東部で検出した竪穴住居である。弥生後期後半期の SH1006.1008 を切り込む。現状で約 3.2 × 3.6m の隅丸長方形の掘り方をもつ。主柱穴は住居長軸に併行する 2 基であり、その中央に炉 SK1001 がみられる。北側の壁溝から両主柱穴に向かって派生する小溝があり、小溝から東西の壁面との間がベッド状遺構となる。住居西側の SH1006 の上面で検出することはできなかったが、住居北・東側の掘り方外側において壁溝状の小溝を検出しており、掘り方内部でベッド状遺構を確認していることからみて、小溝は住居周堤の土留めに伴う可能性が高い。

床面中央の炉 SK1001 は、底面に疎らに焼土粒、中位に炭化物の薄層が広がる灰穴炉である。炉北側の床面上には、2 か所に分かれて焼土塊が確認された。住居規模や炉・主柱穴配置は、弥生終末期から古墳前期によくみられるものであるが、住居短辺両側 2 か所にベッド状遺構を認め周堤の存在を推定できたことなど、小形方形住居の構造が明らかになった。

出土遺物の内、高杯（図 323-7）鉢（図 323-3.5）の形態から、本住居は弥生終末期中段階に帰属するものと考えておきたい。図 323-8 は滑石製の臼玉であり、上位からの混入品である。

II -1 区 SH1008（図 324）

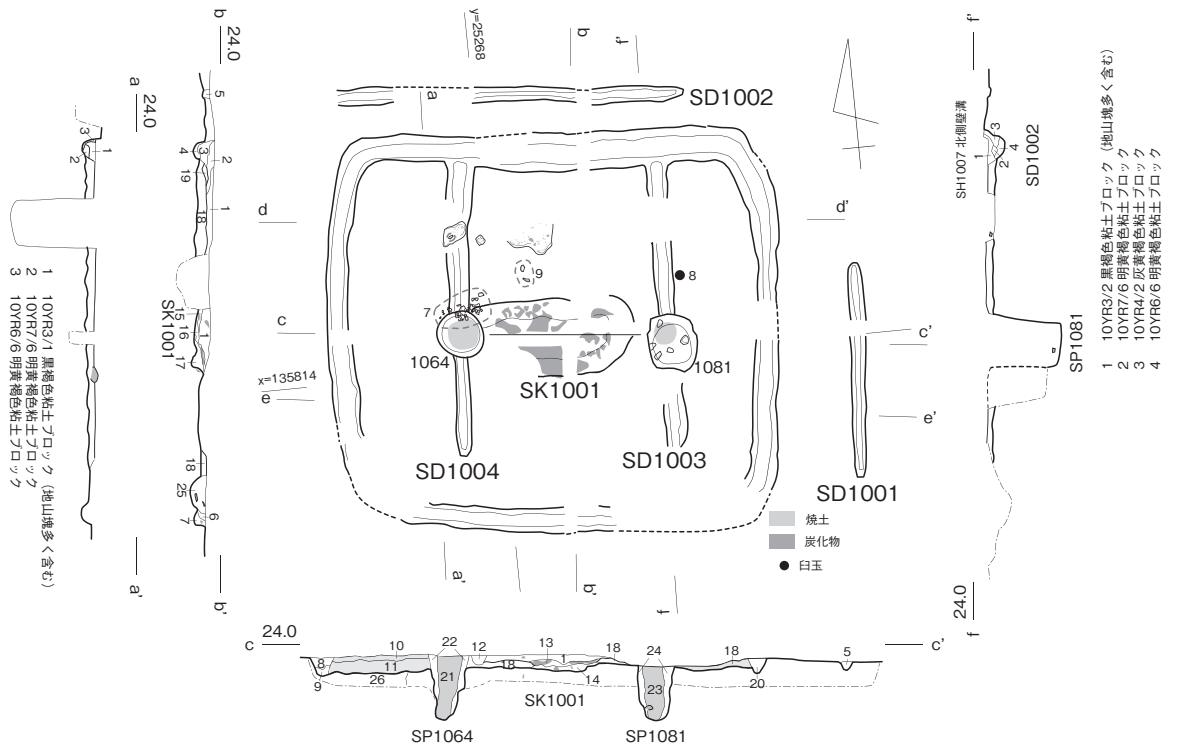
II 区南東部で検出した竪穴住居であり、弥生終末期の SH1007、弥生後期後半期の SH1006 に切られる。また、住居東側を攪乱坑で滅失することにより全体形状が不鮮明となるが、住居北・西辺の壁溝と主柱穴配置から見て、一辺が約 7m の大形方形住居となる可能性が高い。検出段階で壁面は既に削平されており、貼床土と壁溝の埋め土のみ残存していた。壁溝は 2～3 条重複して検出されたが、これらに明確な先後関係は認められない。

また、北辺の壁溝から北西角主柱穴 SP1042 に向かい派生する小溝を伴うが、現状から具体的な機能を推定することが困難である。主柱穴は図示した 4 基であり、南東隅柱 SP1083 を除いて柱痕が遺存する。全体的に大形の柱痕をとどめていると見られ、住居規模に比例した柱材が使用された可能性が高い。床面中央からやや西寄りには、小規模な範囲で貼床土が焼土化する箇所があり、住居覆土が削平されていることから、掘り方が消滅していることも考えられるが、地床炉を示す痕跡と考えたい。

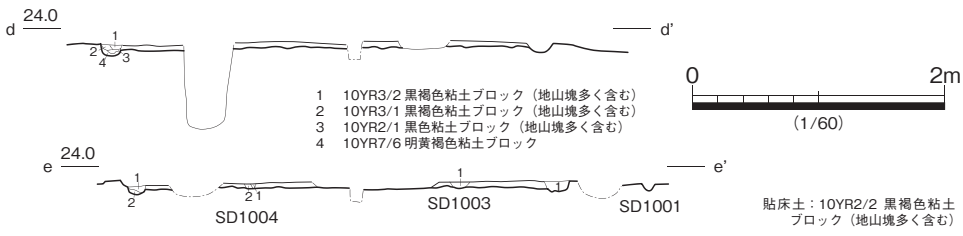
時期決定資料に乏しいが、壁溝から出土した甕底部（図 324-1）の形態から、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものと考えたい。図 324-2 は砂岩製の磨石であり、弱い摩滅痕がみられる。

II -1 区 SH1009（図 325・326）

II 区中央部南よりで検出した竪穴住居である。古墳中期の SH1004 に切られ、弥生後期前半期の



- | | |
|---|---|
| 1 5Y3/1 オリーブ黒色粘土ブロック (地山塊多く含む) ベッド内側埋め土 | 14 2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック (炭化物が帯状に混じる) 中央炉中層埋土 |
| 2 5Y2/1 黒色粘土ブロック (地山塊多く含む) | 15 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土ブロック (炭化物が帯状に混じる) 中央炉中層埋土 |
| 3 2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック (地山塊少量含む) 北壁溝埋土 | 16 15に同じ |
| 4 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック (地山塊少量含む) 北壁溝埋土 | 17 10YR3/3 暗褐色粘土ブロック (地山塊・炭化物やや多く含む) 中央炉下層埋土 |
| 5 2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロック 住居外側の壁溝? | 18 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック (炭化物少量含む固く締まる) ベッド内側貼床土 |
| 6 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック 南壁溝の埋土 | 19 2.5Y3/2 黒褐色粘土ブロック 貼床土 |
| 7 10YR3/2 黒褐色粘土ブロック 南壁溝の埋土 | 20 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック 貼床土 |
| 8 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土ブロック (地山塊やや多く含む) 西壁溝埋土 | 21 2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック (地山塊少量含む) |
| 9 2.5Y4/1 黄灰黄色粘土ブロック 西壁溝の埋土 | 22 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック |
| 10 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土ブロック 西側ベッド盛土 | 23 2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック (地山塊多量含む) |
| 11 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック 西側ベッド盛土 | 24 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック |
| 12 2.5Y3/2 黒褐色粘土ブロック 西側ベッド際の壁溝埋土 | 25 10YR3/1 黒褐色粘土ブロック 土層からのピット埋土 |
| 13 2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック (炭化物多く含む) 中央炉中層埋土 | 26 10YR3/2 黒褐色粘土ブロック (地山塊多く含む) 下層の弥生中期ピット |



- | | | | |
|-------------------------------|---------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 10YR4/1 褐灰色粘土ブロック (地山塊多く含む) | 1 10YR3/1 黒褐色粘土ブロック (縦板痕) | 1 10YR3/1 黒褐色粘土ブロック (地山塊多く含む) | 1 10YR3/2 黒褐色粘土ブロック (地山塊多く含む) |
| 2 10YR3/1 黒褐色粘土ブロック (地山塊多く含む) | 2 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック | | |

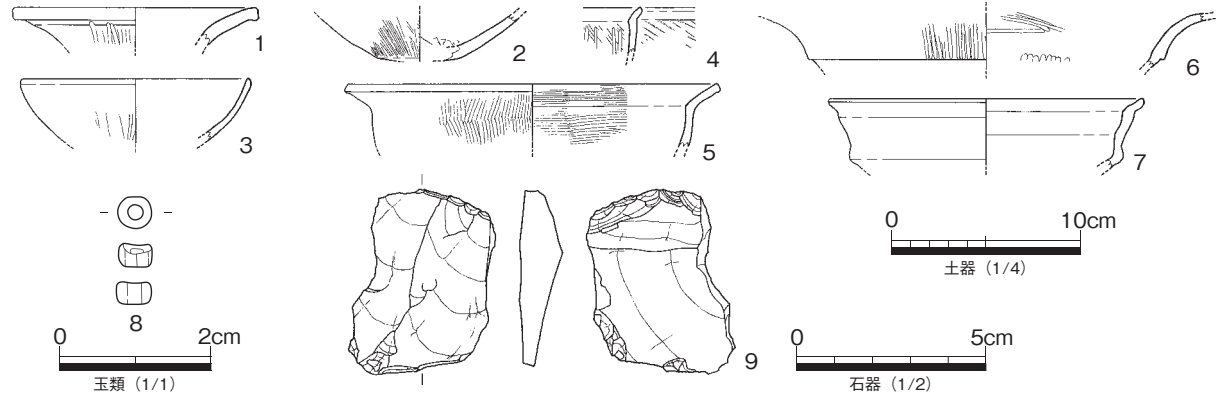


図 323 II -1 区 SH1007 平・断面・出土遺物

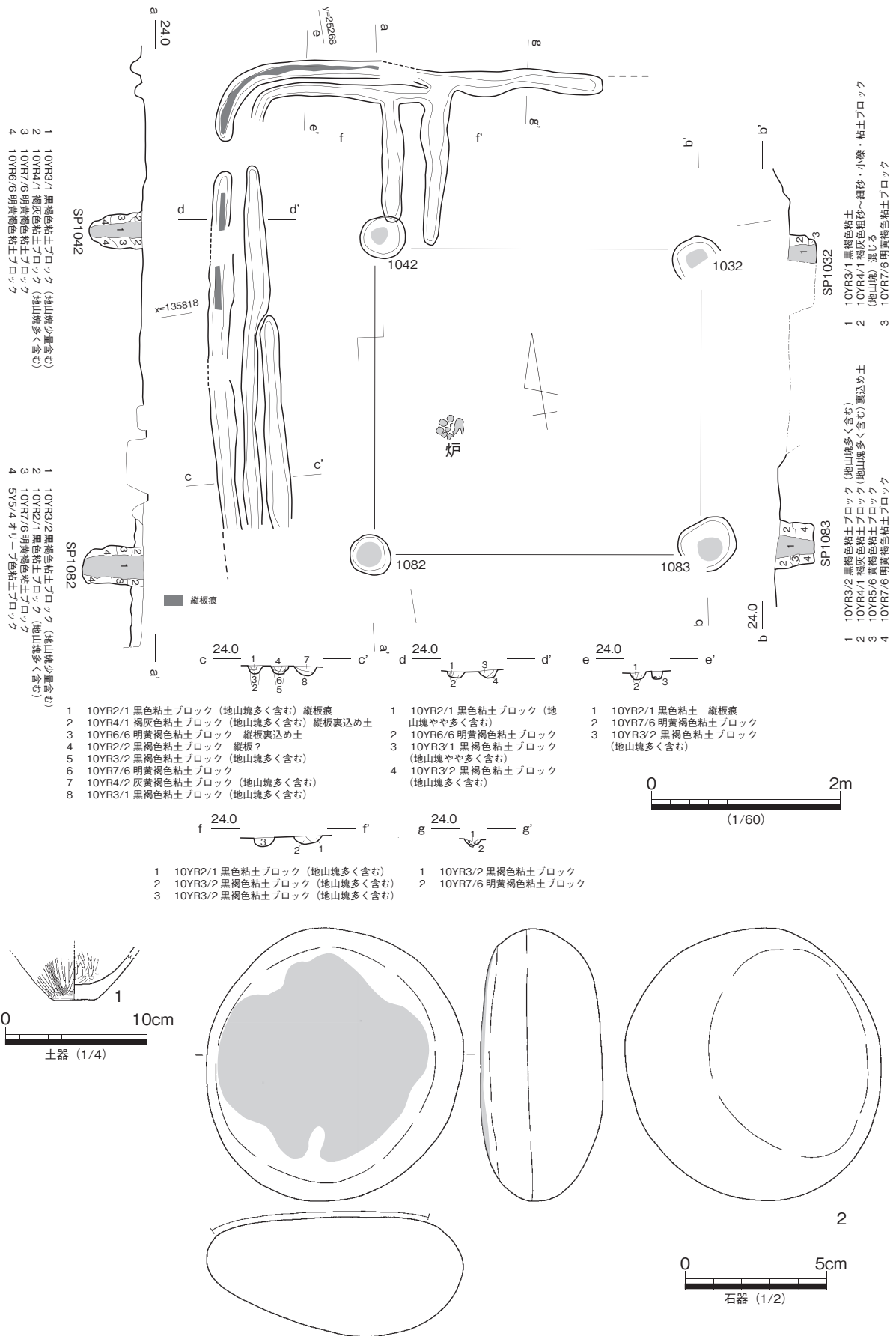


図 324 II -1 区 SH1008 平・断面・出土遺物

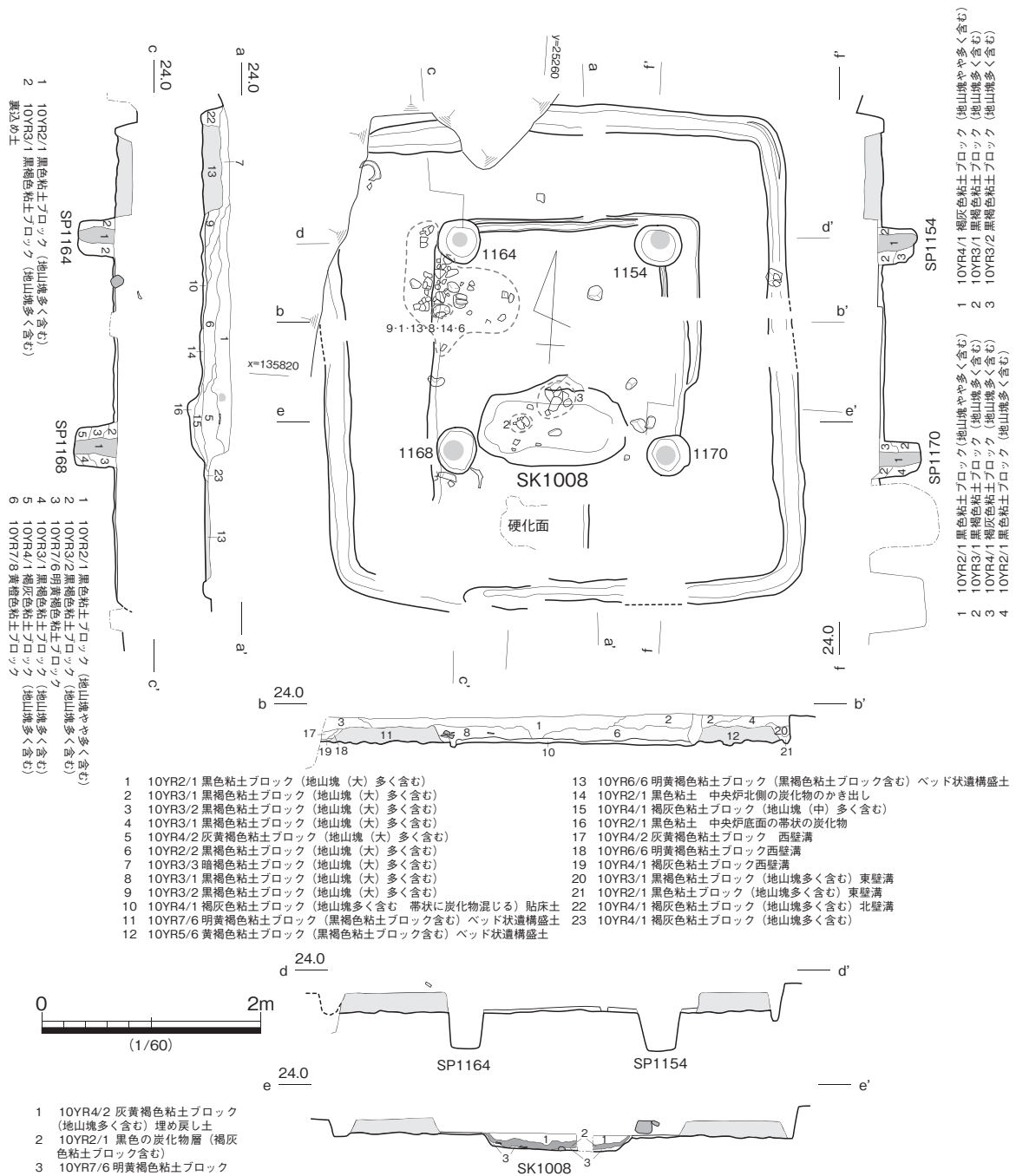


図 325 II -1 区 SH1009 平・断面

SH1010、弥生中期後半期のSB1004を切り込む。一辺が約4.5mの方形住居であり、三方にベッド状遺構が敷設されている。住居南部はSH1004によってベッド状遺構がほぼ削平されているが、aラインの断面で類似するブロック土を確認しているため、元来は南側にも敷設されていたと考えられる。また、住居南西部の壁面際において硬化面を確認しており、ベッド状遺構は南西隅で途切れていたと考えられる。支柱穴は4基であり、ベッド状遺構の隅部に配置される。また、部分的ではあるが、支柱穴を繋ぐ形でベッド状遺構の立ち上がり際に小溝を確認しており、この部分に土留めを意図した板材が敷設された可能性もある。ベッド状遺構内側の床面上面には、炉SK1008から延びる炭化物の薄層がほぼ全域で

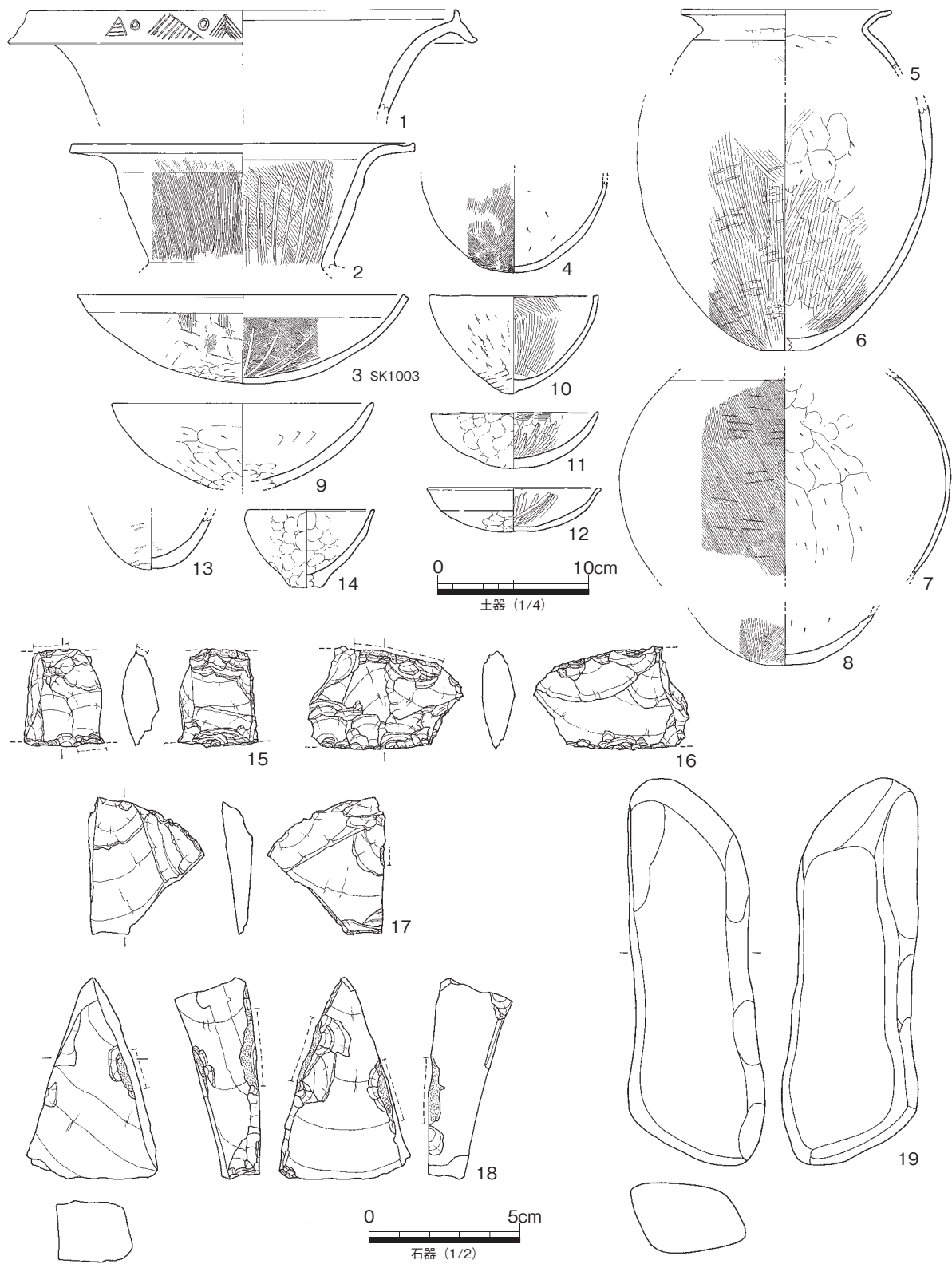


图 326 II -1 区 SH1009 出土遺物

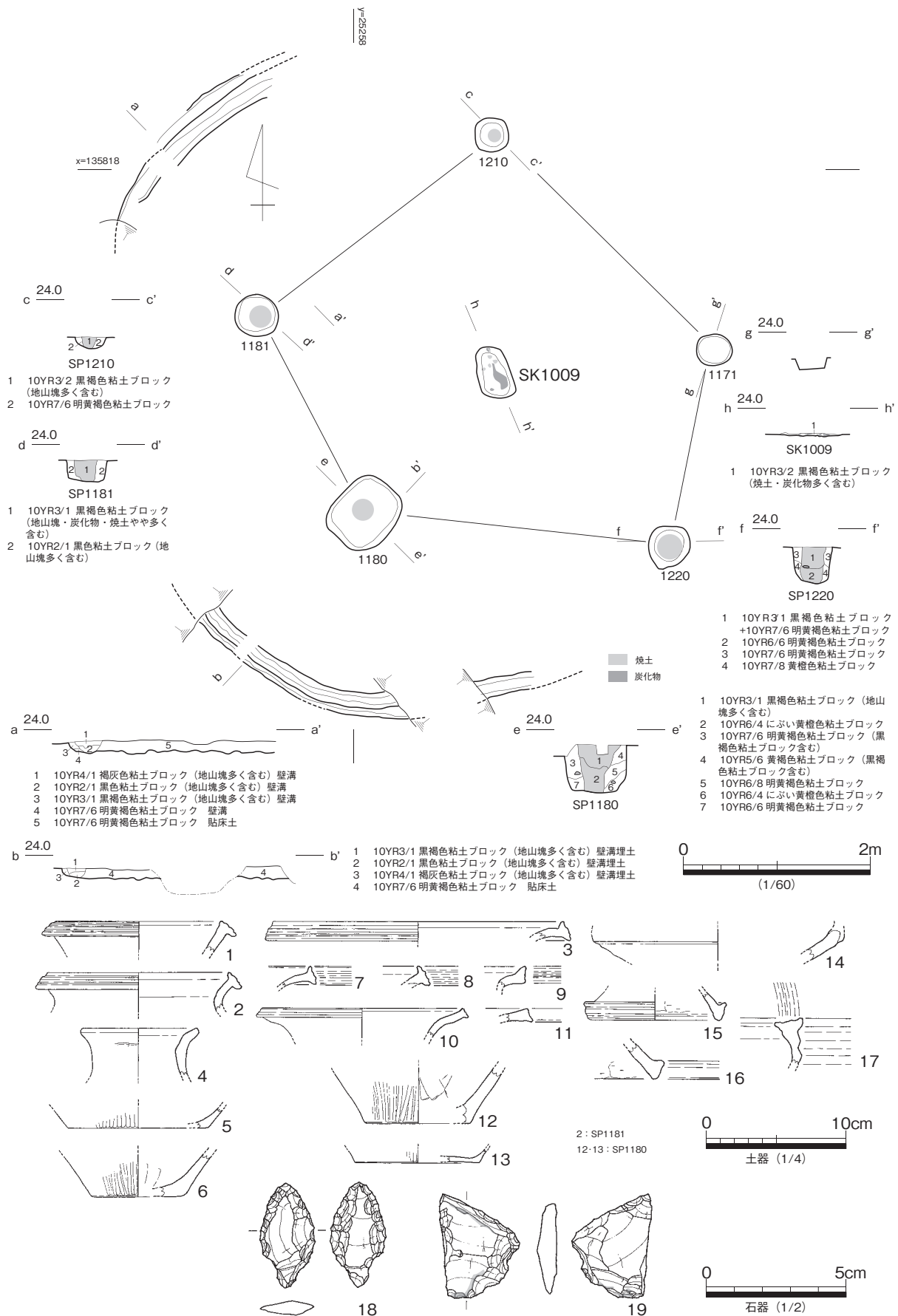


図 327 II -1 区 SH1010 平・断面・出土遺物

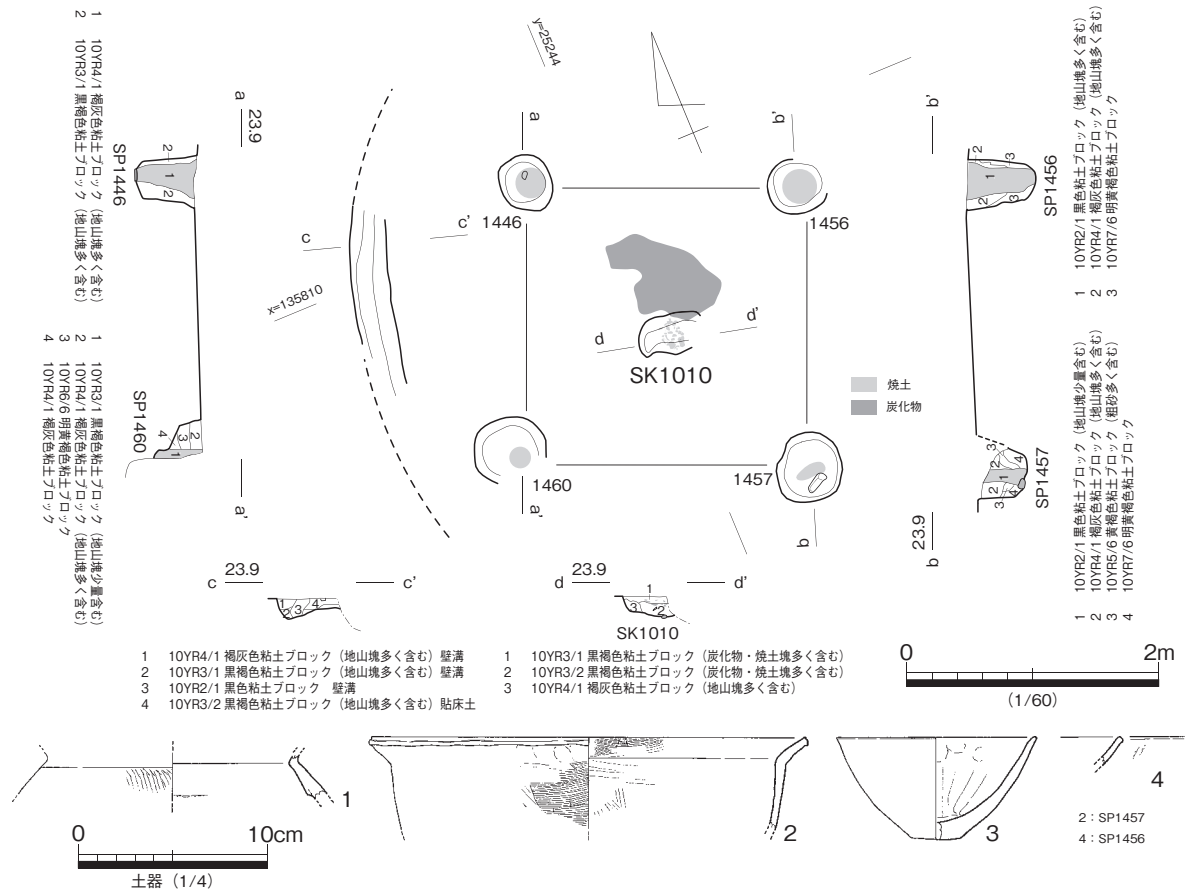


図 328 II -1 区 SH1017 平・断面・出土遺物

確認できる。炉 SK1008 は、底面及び壁面に層厚約 5cm の炭化物層が見られる楕円形土坑であり、住居中央部に向かう北辺の中央の外郭線が飛び出し、テラス状となる。住居覆土は大形の黄褐色粘土ブロックを多く含む埋め戻し土であり、出土遺物の多くはその際に投棄されたと考えられる。

出土遺物の内、複合口縁壺 (図 326-1) 広口壺 (図 326-2) 鉢 (図 326-3) の形態から、本住居は古墳前期前半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。

II -1 区 SH1010 (図 327)

II 区中央南よりで検出した竪穴住居である。古墳中期の SH1004、古墳初頭の SH1009、弥生終末期の SH1005 に切られ、弥生中期後半の SB1001 を切る。壁溝及び床面は、北西部と南部の一部しか残存しないものの、炉跡 SK1009 と図示した 5 基の支柱穴との位置関係から、直径約 7.5m の円形住居に復元できる。一部の支柱穴は上位を後出する住居によって削平されるため、深度が浅くなるが、検出面や埋没土の特徴を手懸りに組み合わせを想定している。

炉 SK1009 は SB1001 の北西隅柱の直上で検出しているが、後出する遺構掘削により上位を大きく削平されており炉底面の一部と細かな焼土塊が残存する状況であり、現状が本来の炉の形状をとどめているとは言い難い。壁溝の埋め土や支柱穴の埋没土は、離水の進んだ黄色系の粘土ブロックから構成されており、検出段階から上位の遺構の埋没土を除去してしばらくたったのち、輪郭が把握できるような状態であった。

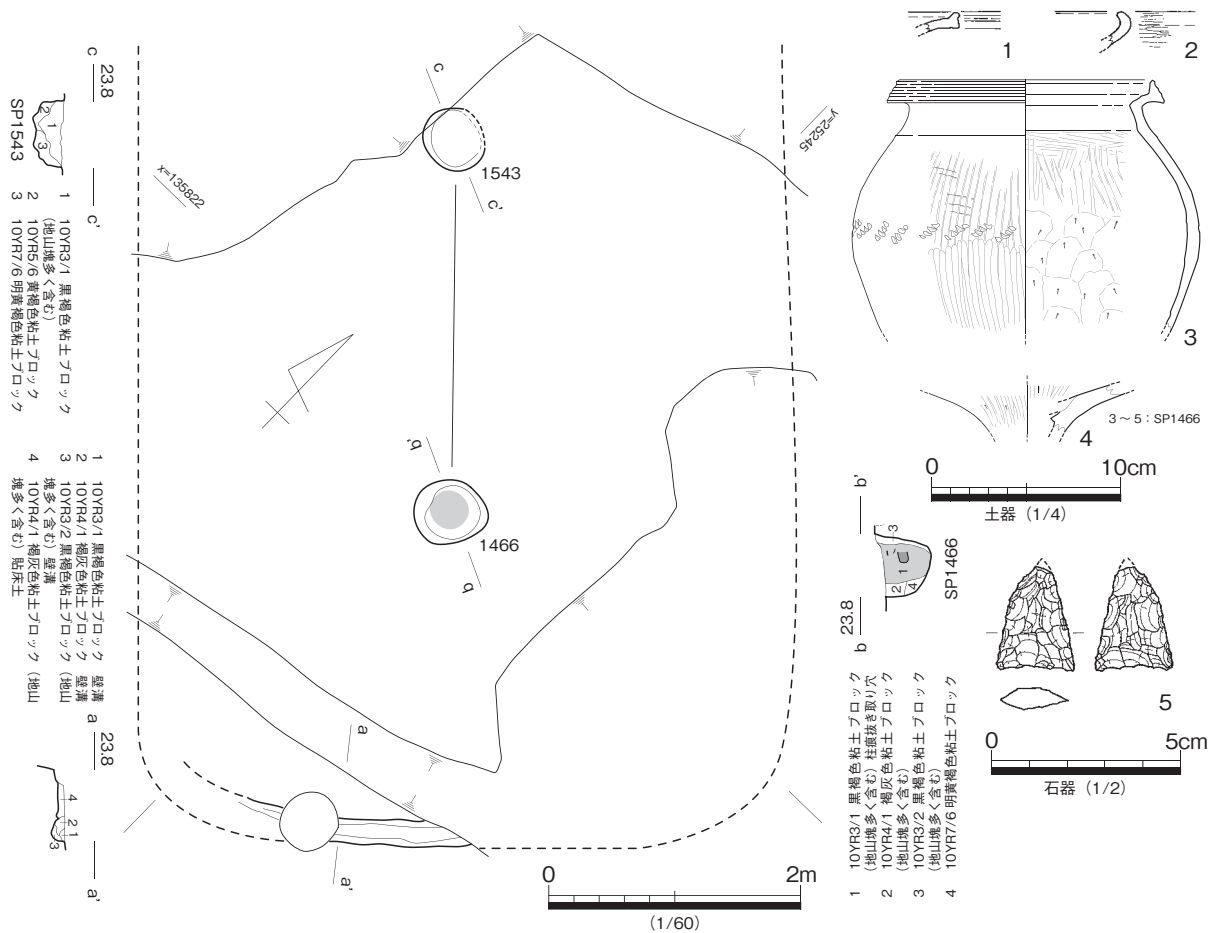


図 329 II -1 区 SH1024 平・断面・出土遺物

埋没土の特徴や遺構の前後関係、主柱穴及び貼床土内の遺物は、弥生中期後半期の帰属時期を想定させるものであるが、一部に後期前半期まで下る若干量の遺物（図 327-10.14）が見られることや、7m を超える円形住居であることなどから見て、弥生後期前半中段階の所産と推定しておく。

II -1 区 SH1017 (図 328)

II -1 区南西部で検出した竪穴住居である。古墳後期から古代期の SH1016.1020.1022 に切り込まれ、住居東部の壁溝の一部の炉と主柱穴周辺の一部の主柱穴が辛うじて残存する。現状での壁溝の平面形と図示した 4 基の主柱穴との位置関係からから、直径約 4.5m の円形住居に復元できる。床面の中央には楕円形炉 SK1010 があり、その北側の床面上掻き出しと見られる炭化物の集中部がみられる。炉 SK1010 の中位に焼土塊が集中する箇所が認められるが、出土状況から推測すれば炉内の被熱箇所を示すものではなく何らかの構築材が崩落したような状況を想定でき、土手などがその候補と考える。

出土遺物の内、主柱穴 SP1457 から出土した鉢の形態から、本住居は弥生終末期中段階に帰属するものと考えておきたい。

II -1 区 SH1024 (図 329)

II -1 区北西部で検出した竪穴住居である。古墳後期から古代の竪穴住居構築に伴い覆土の大半が削

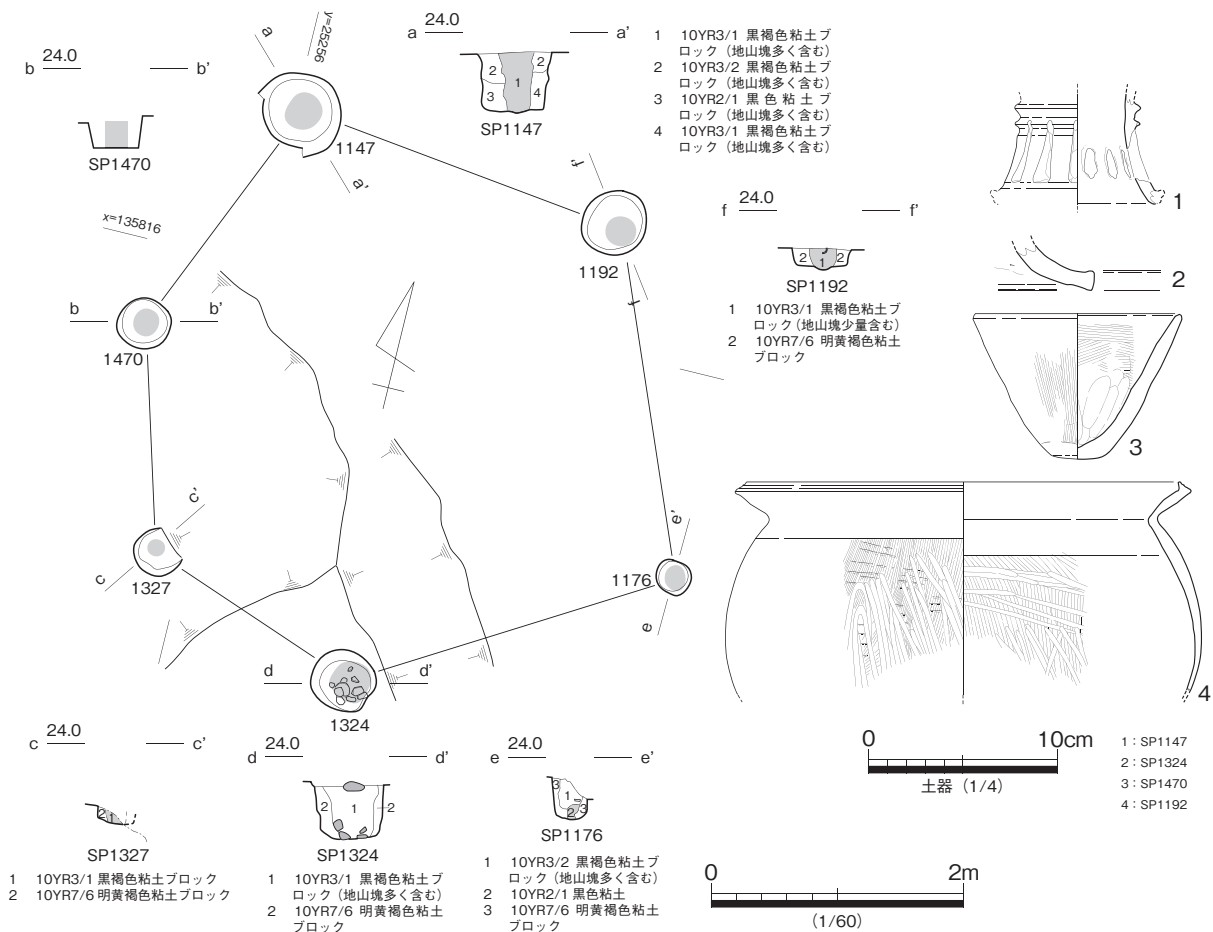


図 330 II -1 区 SH1026 平・断面・出土遺物

平されており、住居南側の壁溝と2基の主柱穴を推定するのみに止める。図示した2基の主柱穴は、上記竪穴住居の貼床土を除去した段階で検出しているものを抽出して推定の根拠としたが、SP1466に比べてSP1543の残存深度がやや浅いなど、検討の余地を残している。この推定が正しいものであれば、約5×7m程の隅丸長方形の平面形態を想定できる。

図329-1～5の出土遺物の内、図329-1,2は壁溝、図329-3～5は南側主柱穴SP1466から出土した資料である。壁溝出土高杯口縁(図329-2)とSP1490出土の甕(図329-3)の形態から、本住居は弥生後期前半古段階に帰属するものと推定しておきたい。

II -1 区 SH1026 (図 330)

II区中央部南寄りのSH1004.1010の下位において、比較的深度のある円形柱穴列を検出しており、竪穴住居として報告する。主柱穴の配置から、直径が約7mを超える円形住居となる可能性が高い。主柱穴出土遺物の内、SP1192から出土した鉢(図330-4)の形態から、本住居は弥生後期前半古段階に帰属するものとする。

II -2 区 SH2001 (図 331・332)

II-2区北部で検出した竪穴住居である。古墳後期のSH2003、SB2001に切られる。北東部に僅か

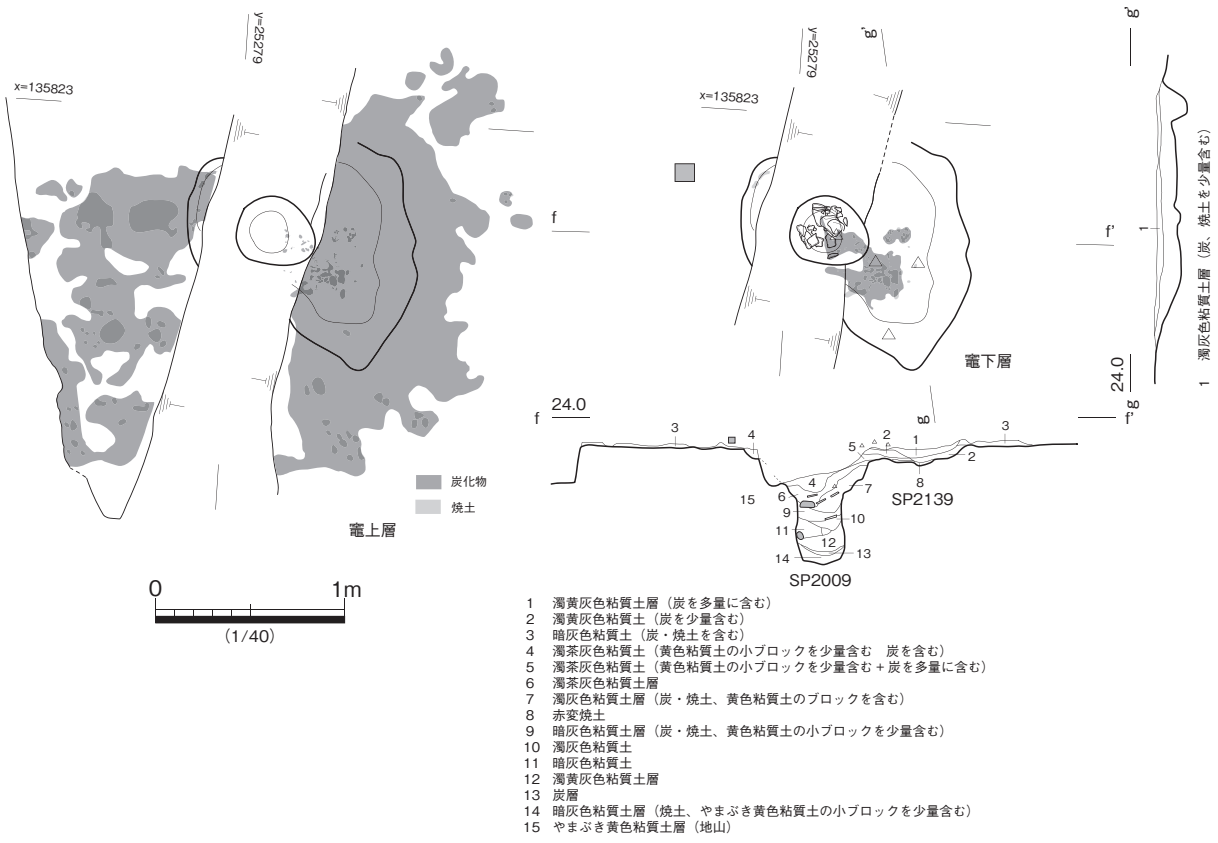
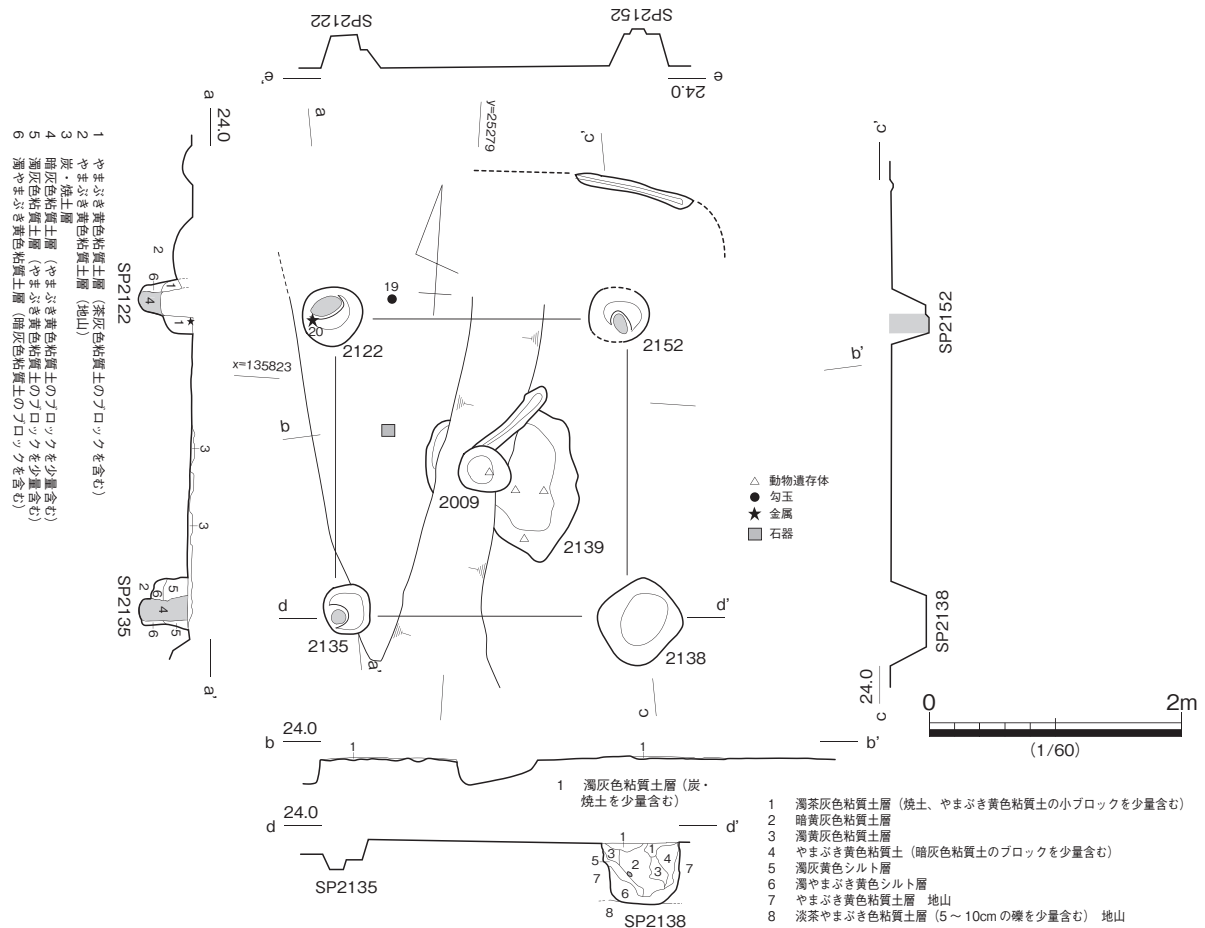


図 331 II-2区 SH2001 平・断面

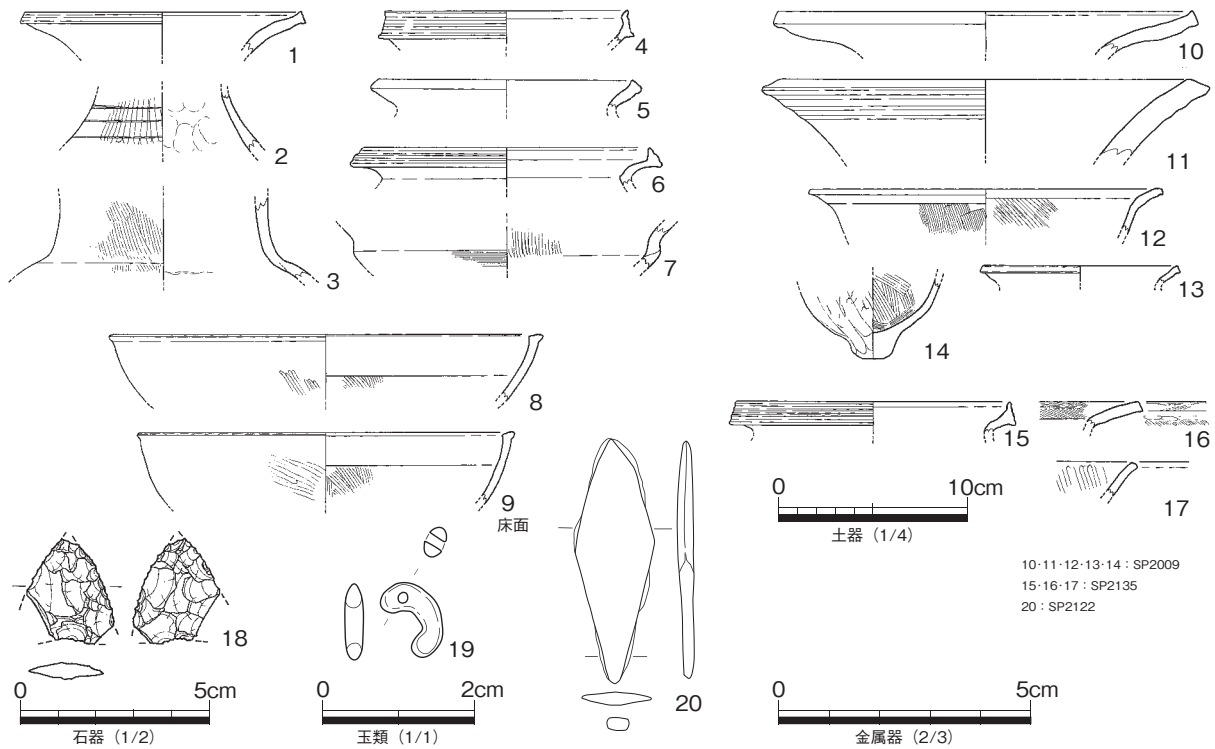


図 332 II -2 区 SH2001 出土遺物

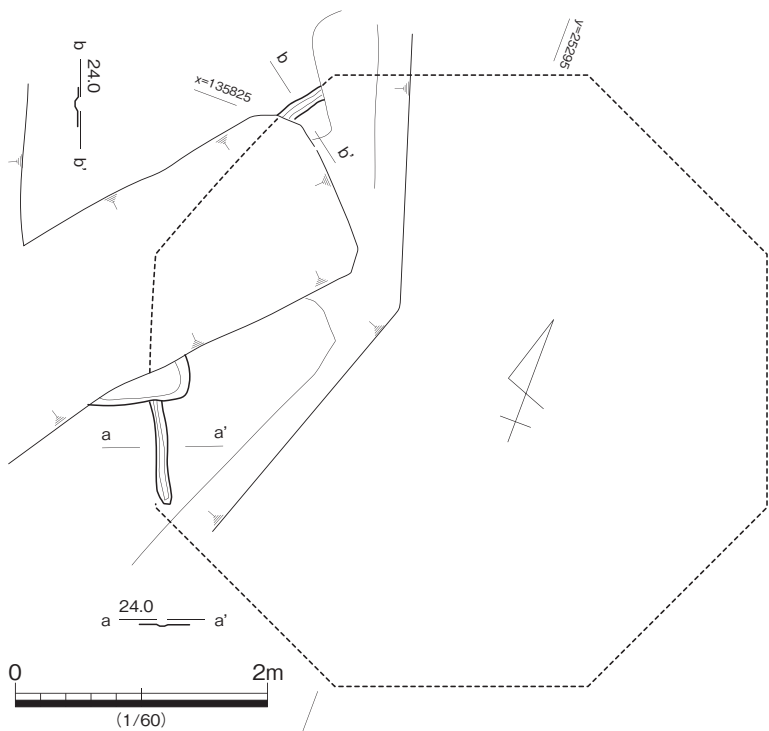


図 333 II -2 区 SH2002 平・断面

に残存する壁溝と図示した4基の支柱穴から、一辺が約4.5mの隅丸方形住居を想定する。上層遺構により住居覆土は既に削平されており、部分的に貼床土が残存していた。中央には炉SP2009.2139が存在する。西側のSP2009は、上位に攪乱を受けているが、現状から円形炉と考えられ、残存深度は約0.6mを測り柱穴状の断面を示す。下位から中位にかけて、機能時の堆積層とみられる炭化物の薄層がみられる。東側のSP2139は、隅丸長方形が弛緩したような楕円形を呈し、残存

深度は約0.15mと浅い。埋没土は上面に炭化物層が全域に広がり、底面南部を中心に焼土化した箇所を確認できる。

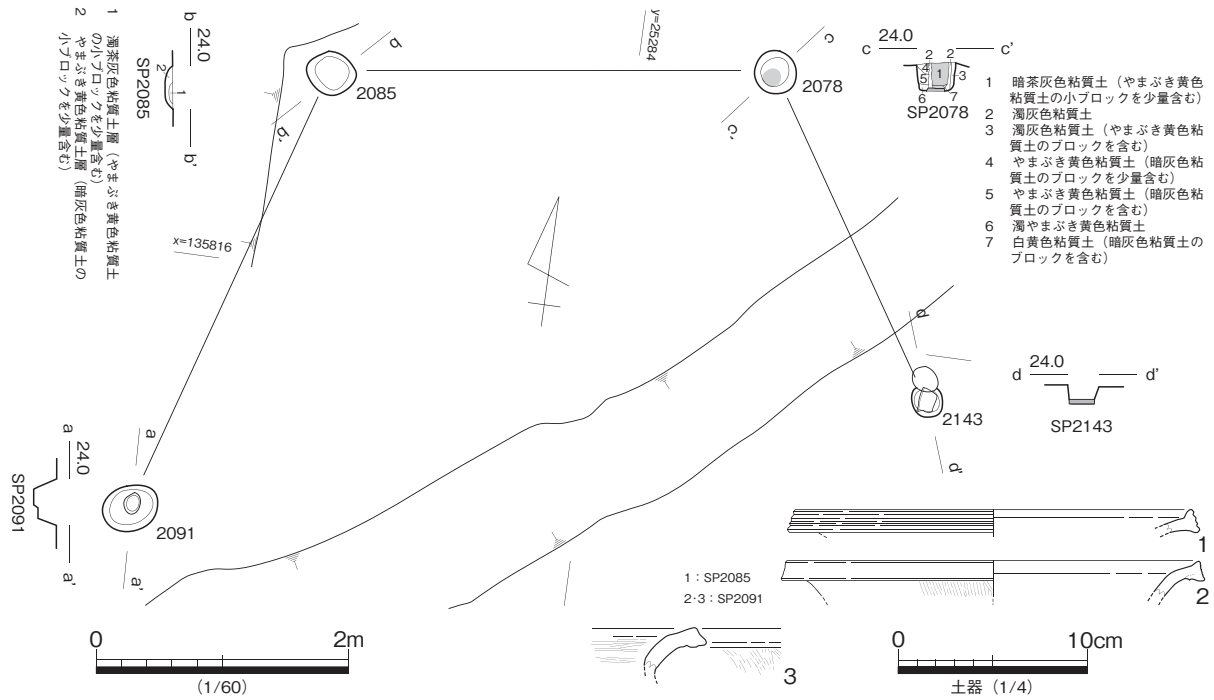


図 334 II -2 区 SH2005 平・断面・出土遺物

出土遺物(図 332-1 ~ 20)の内、図 332-1 ~ 9.18 ~ 20 は床面、図 332-10 ~ 14 は西側の炉 SP2009、図 332-15 ~ 17 は南西隅支柱穴 SP2135 から出土した資料である。勾玉(図 332-19)は、滑石製であり、本遺跡の弥生時代に一般的ではない石材を用いることから、上位の古墳後期の SH2001 からの混入品の可能性も排除できない。床面出土の甕(図 332-4.5)鉢(図 332-8.9)などの特徴や炉の形態からみて、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定しておきたい。

図 332-20 は支柱穴 SP2122 から出土した鉄鏃であり、柳葉形を呈する身と茎の厚みに変化がない平板な鉄片を素材とする。

II -2 区 SH2002 (図 333)

II -2 区南東部で検出した竪穴住居である。調査区壁際で部分的に壁溝を検出したのみであるが、その平面プランから多角形住居として復元した。

現状で支柱穴や炉の確認はできておらず、帰属時期が判明する出土遺物もみられない。多角形住居であることや周辺遺構との位置関係などから、概ね弥生終末期に帰属するものと推定しておきたい。

II -2 区 SH2005 (図 334)

II -2 区南東部で検出した竪穴住居である。現地調査で把握しておらず、報告書作成段階において、本住居付近の遺構検出面は極度の削平を受けているにも拘らず根石の敷設や深度のある柱穴が存在することを材料として復元した建物であり、壁溝や炉の検出は行っていない。支柱穴の柱間が不均等であるが、大型円形住居や多角形住居の可能性を指摘しておきたい。

甕(図 334-1)は SP2085、広口壺(図 334-2.3)は SP2091 から出土した資料である。広口壺の口縁部形態から、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものと推定しておきたい。

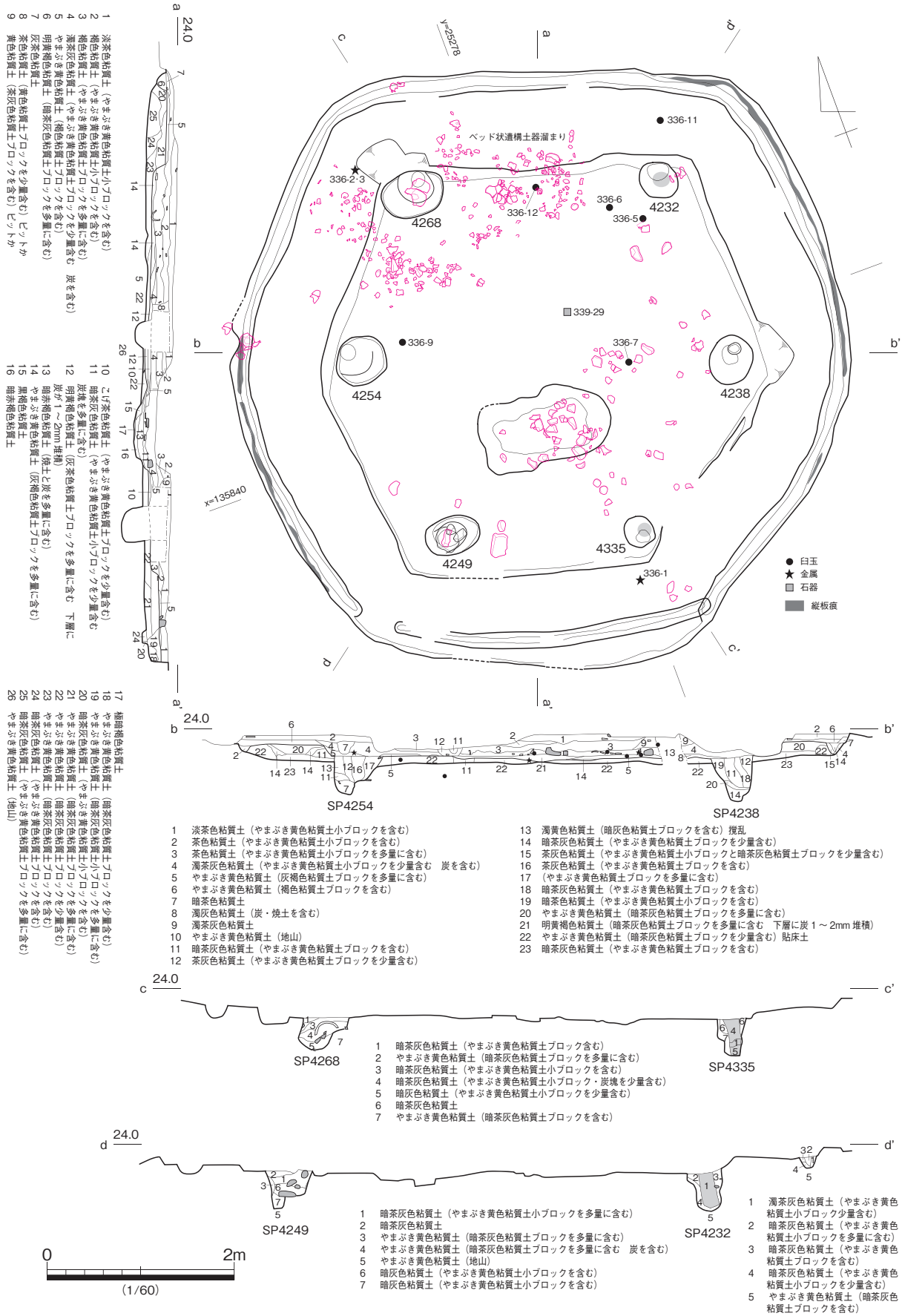


図 335 II-4区 SH4001 平・断面

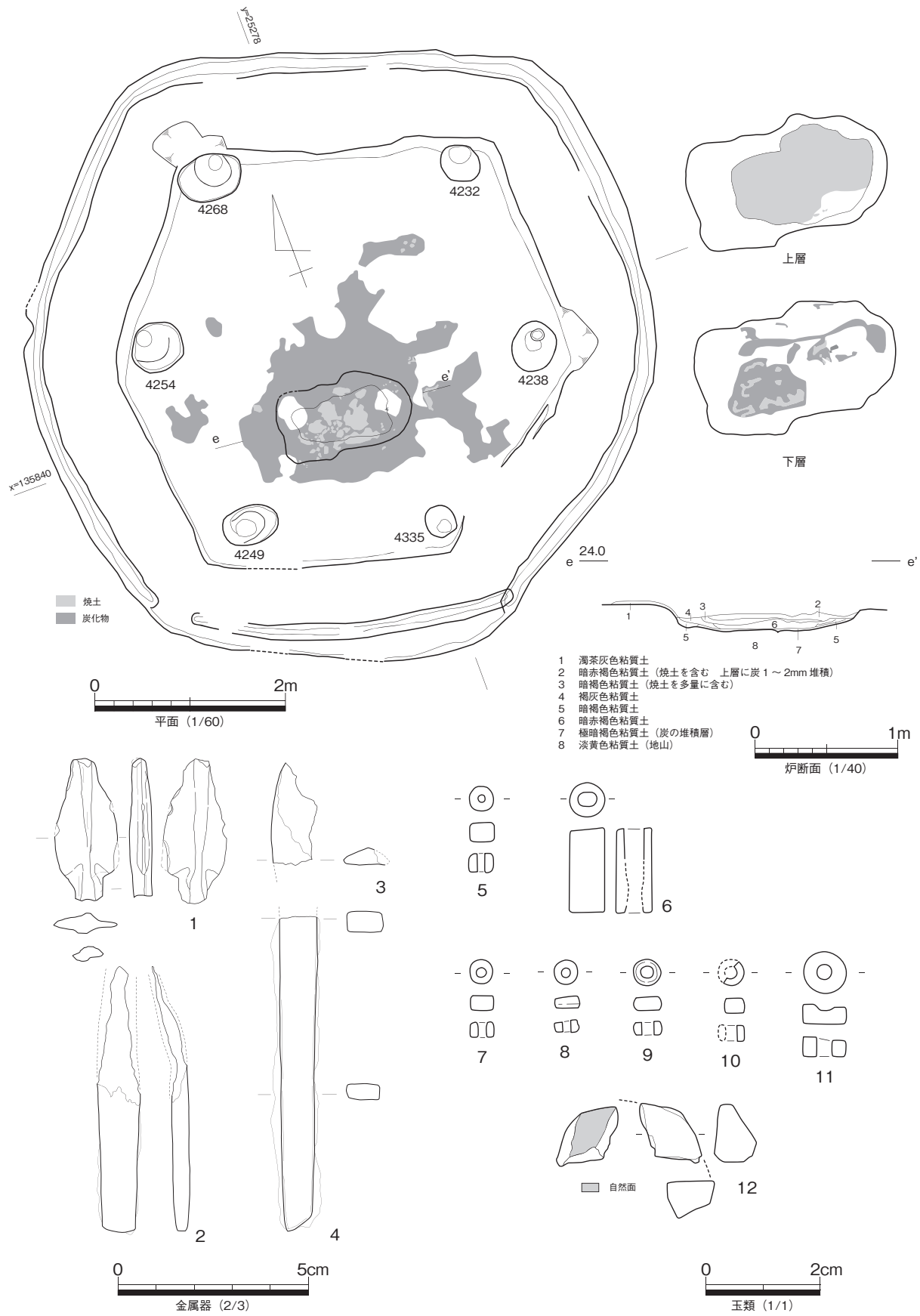


図 336 II-4区 SH4001 炉跡平・断面・出土遺物 (1)



図 337 II -4 区 SH4001 出土遺物 (2)

II -4 区 SH4001 (図 335 ~ 340)

II -4 区北東部で検出した竪穴住居である。弥生前期埋没の SD4001、弥生中期後半期の SH4033 を切り込む。六角形の多角形住居であり、南北 6.4m 東西 6.3m を測る。壁溝等の住居外形線に沿ってベッド状遺構が全周し、隅部に対応して 6 基の主柱穴が配置される。床面中央から南寄りに隅丸方形炉が敷設されており、炉周囲の床面には掻き出しと見られる炭化物が集中する箇所がある。炉は底面に炭化物と焼土化した焼成箇所がみられ、中位には焼土塊がほぼ全域に広がる。焼土塊は、炉周囲の土手の存在を示唆するものかもしれない。埋没土は数層に細分されるが、黄褐色の粘土ブロックを多く含む点で共通しており、廃絶後早期の埋め戻しが想定される。

床面では土器片を中心とした遺物が散乱した状態で出土しているが、炉内及び主柱穴の柱材の抜取穴出土の土器片と接合関係が多く認められたことから、これらの遺物は廃絶に伴う一括廃棄と考えられる。出土遺物の内、甕 (図 338-12.13.15) 鉢 (図 339-4 ~ 9) の形態からみて、本住居は弥生終末期中段階に帰属すると考えられる。

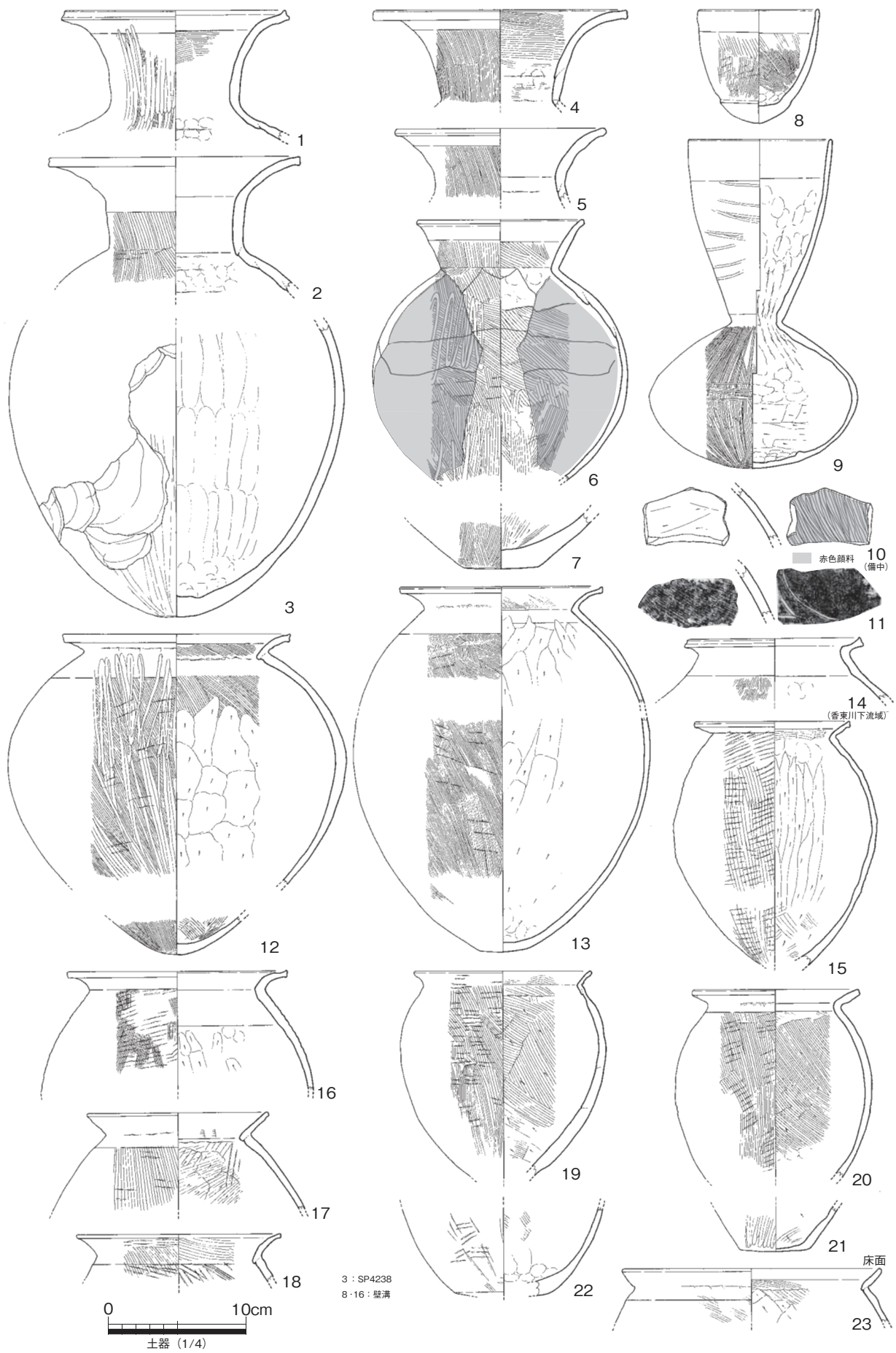


図 338 II -4 区 SH4001 出土遺物 (3)

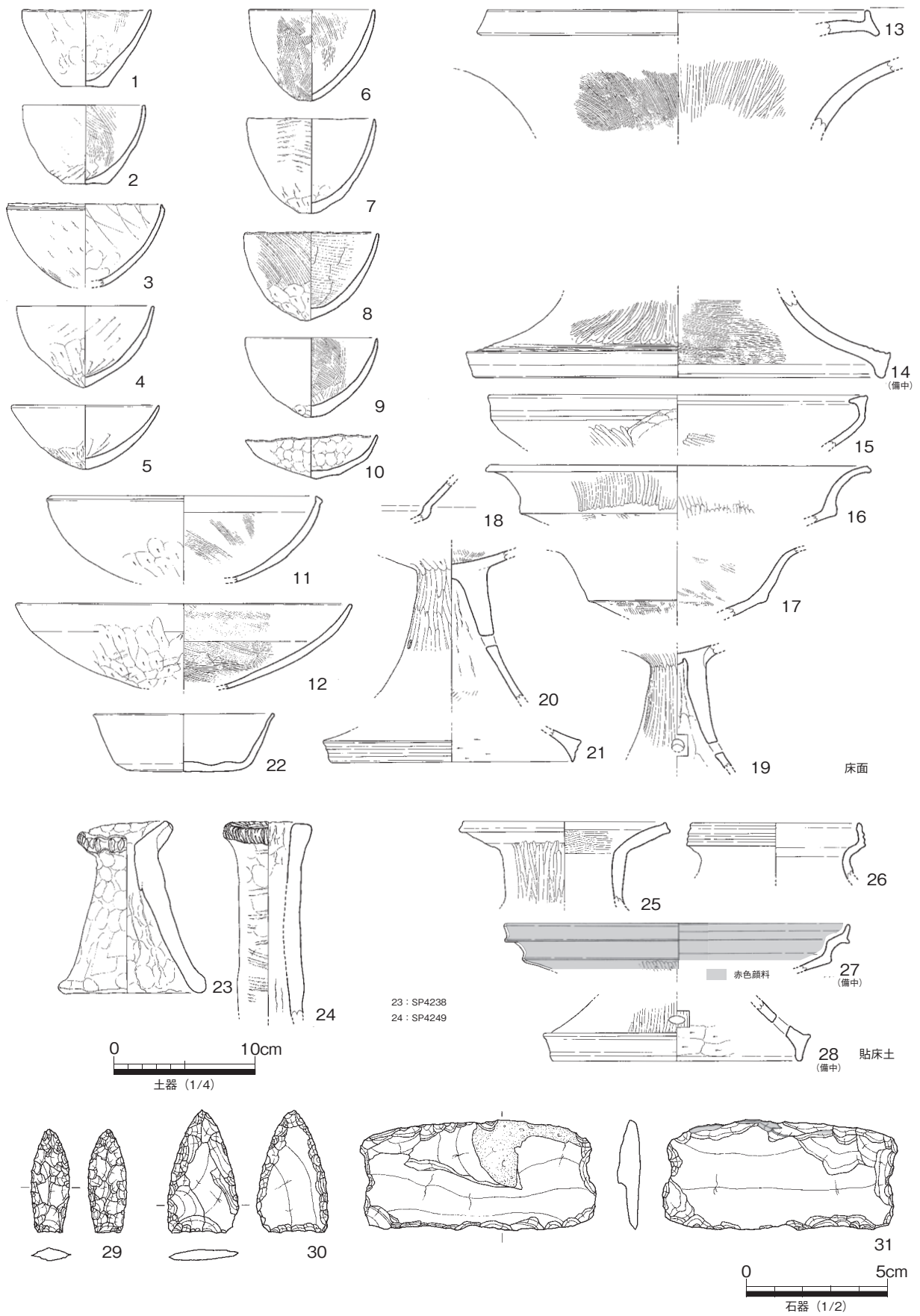


图 339 II -4 区 SH4001 出土遺物 (4)



图 340 II -4 区 SH4001 出土遺物 (5)

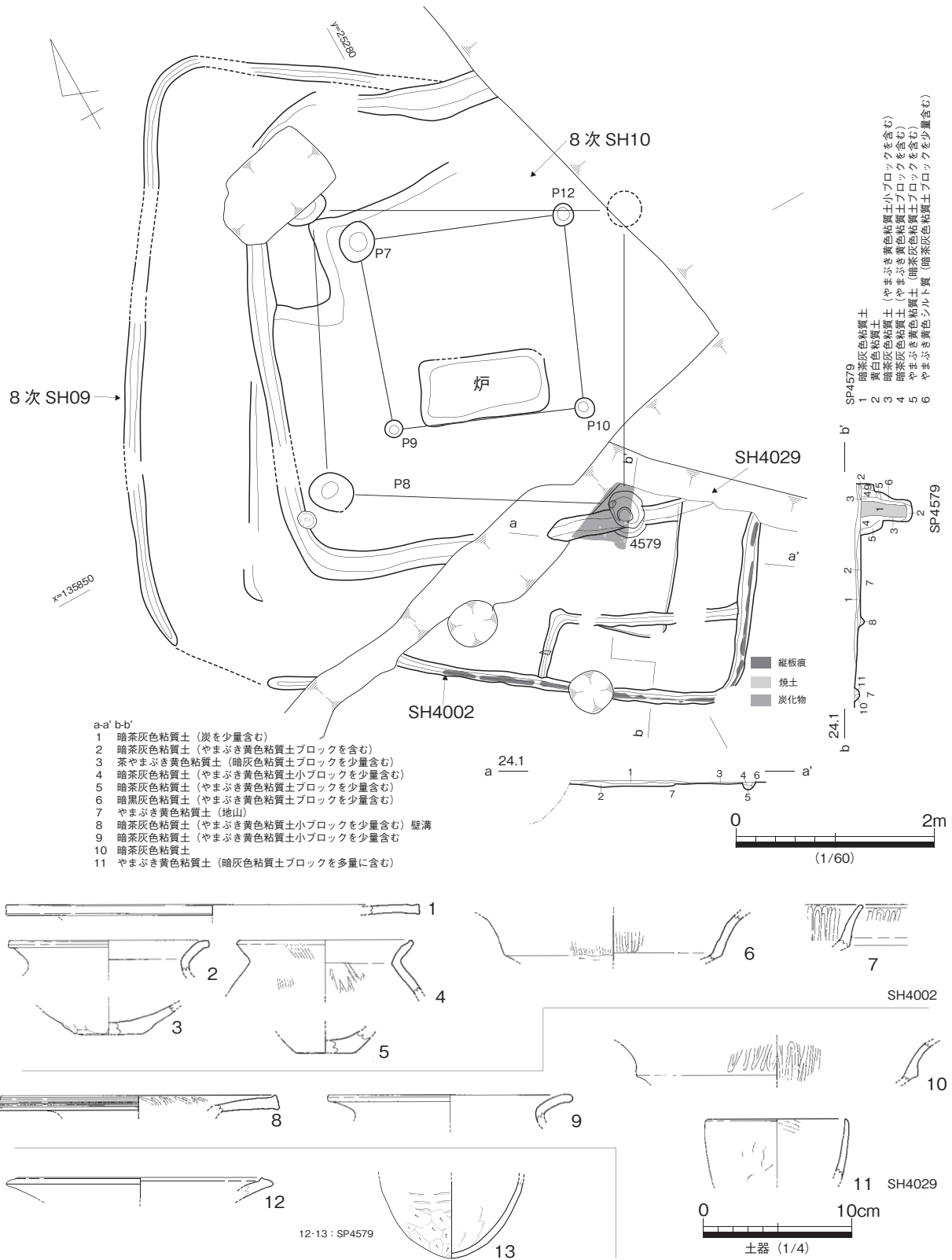


図 341 II -4 区 SH4002・SH4029 平・断面・出土遺物 (1)

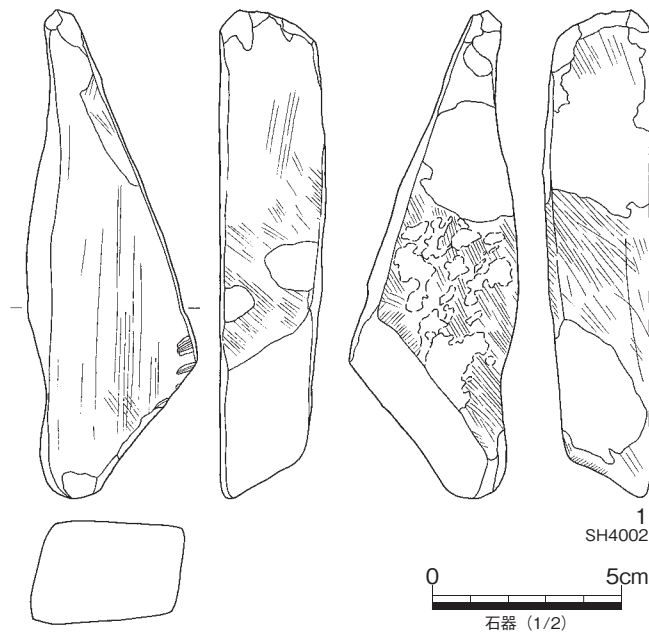


図 342 II -4 区 SH4002 出土遺物 (2)

南東部のベッド状遺構上面から出土した銅鏃(図 336-1)は、研磨を行っておらず身と茎に裁断痕跡を留めている。連鑄式による鑄放し状態を分割した直後の状態を示している。図 336-2.3.4 は鉄製刀子であり、図 336-3.4 は同一個体の可能性が高い。図 336-5.9 はガラス製小玉、図 336-6 は碧玉製の管玉である。図 336-12 は蛇紋岩製の破片であり、大形勾玉となる可能性が高い。図 336-7.8.10.11 は滑石製の白玉であり、上層からの混入品である。

複合口縁壺(図 337-1)は、口縁部や胴部上半の形態は在地品と捉えるには違和感があり、西部瀬戸内地域の搬入・模倣土器と考えたい。図 338-3 は外面に連続する焼成破裂痕がみられる。図 338-6 は破片間で色調を明瞭に違えることから、焼成破裂土器と考える。完形の細頸壺(図 338-9)と小型丸底壺(図 338-8)は、形態や調整が高松平野の香東川下流域産土器に類似するが、胎土は異なっている。壺胴部片(図 338-11)は外面に撥形文が描かれる。

調を明瞭に違えることから、焼成破裂土器と考える。完形の細頸壺(図 338-9)と小型丸底壺(図 338-8)は、形態や調整が高松平野の香東川下流域産土器に類似するが、胎土は異なっている。壺胴部片(図 338-11)は外面に撥形文が描かれる。

II -4 区 SH4002・SH4029 (図 341・342)

II -4 区北東部で検出した竪穴住居である。重複する 2 棟の竪穴住居として検出しており SH4029 が SH4002 を切り込む。また、本住居北側は 8 次調査地となることから既往調査の住居と連絡関係を検討した結果、それぞれの住居の全体形が判明した。SH4002 は 8 次調査 SH09 に対応し、一辺が約 6.3m の方形住居に復原できる。SH4029 は 8 次調査 SH10 に連続すると考えられ、一辺が 4.8m の方形住居となる。SP4579 は SH4002 の南東隅支柱穴と考えられ、8 次調査の SH09 と併せて 4 基の支柱穴に復原できる。SH4029 は 8 次調査で 4 基の支柱穴が想定されており、床面中央より南側に隅丸長方形の炉をもつ。遺構の切り合い関係や住居形態、出土遺物の様相から、SH4002 を古墳前期前半古段階、SH4029 を古墳前期前半新段階に帰属するものとして想定しておきたい。

II -4 区 SH4003 (図 343・344)

II -4 区北部で検出した竪穴住居である。弥生前期埋没の SD4001 を切り込む。攪乱坑によって多くの部分を滅失するが、炉との位置関係から SP4053.4517 は南西と南東隅の支柱穴と考えられ、4 基の支柱穴をもつ一辺が約 5.5m の方形住居に復原できる。ベッド状遺構は南側で途切れており、支柱穴間のほぼ中央部で炭化物を多量に含む隅丸長方形の炉を検出している。

また、貼床土とベッド状遺構の盛土を除去した段階で、下層の壁溝を検出した。調査中に東西方向の畦を除去したために連続的な記録が取れていないが、下層の壁溝は、上層の内側で検出しており、住居の拡張が行われた可能性がある。また、支柱穴及び炉に移設が認められないため、部分的な壁面の拡張

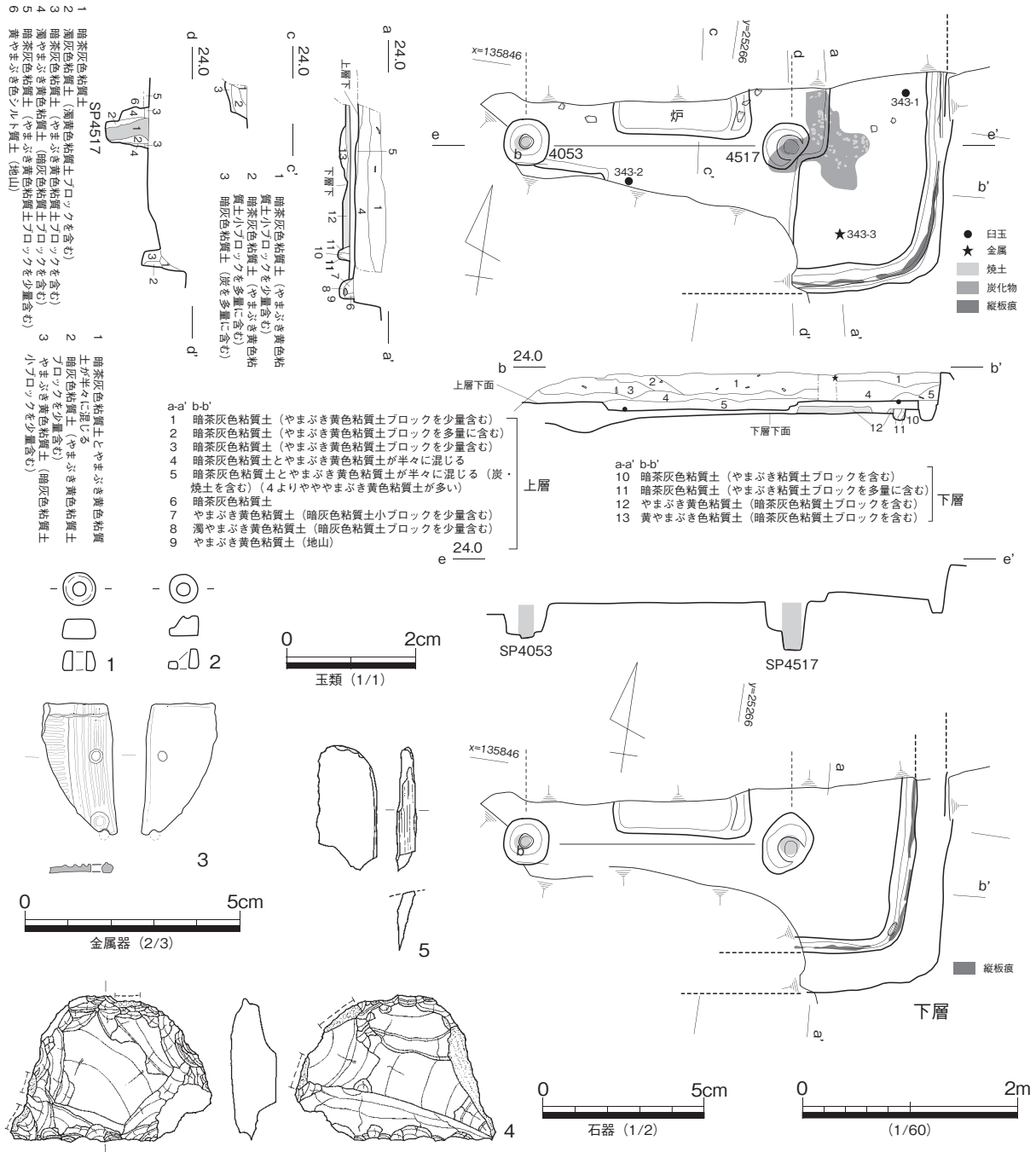


図 343 II -4 区 SH4003 平・断面・出土遺物 (1)

と床面土の敷設であった可能性が高い。上位の床面に伴う埋没土は、すべて埋め戻し土と見られ、最上層から内行花文鏡片 (図 343-3) が出土している。

出土土器の内、鉢 (図 344-10 ~ 14) の形態や炉の構築位置などから、本住居は弥生終末期中段階に廃絶したものと捉えられる。

図 343-3 は内行花文鏡片である。平行線となった斜角線文と形骸化した渦文、外区側に櫛歯文をもつ。破片上部と鈕側の破断面は入念に研磨されているが、櫛葉文のある外区側の破断面はそのまま残される。また、鏡背側のみ雲雷文を切る擦り切り溝があり、中央と下端に 2 つの穿孔が認められる。滑石製白玉

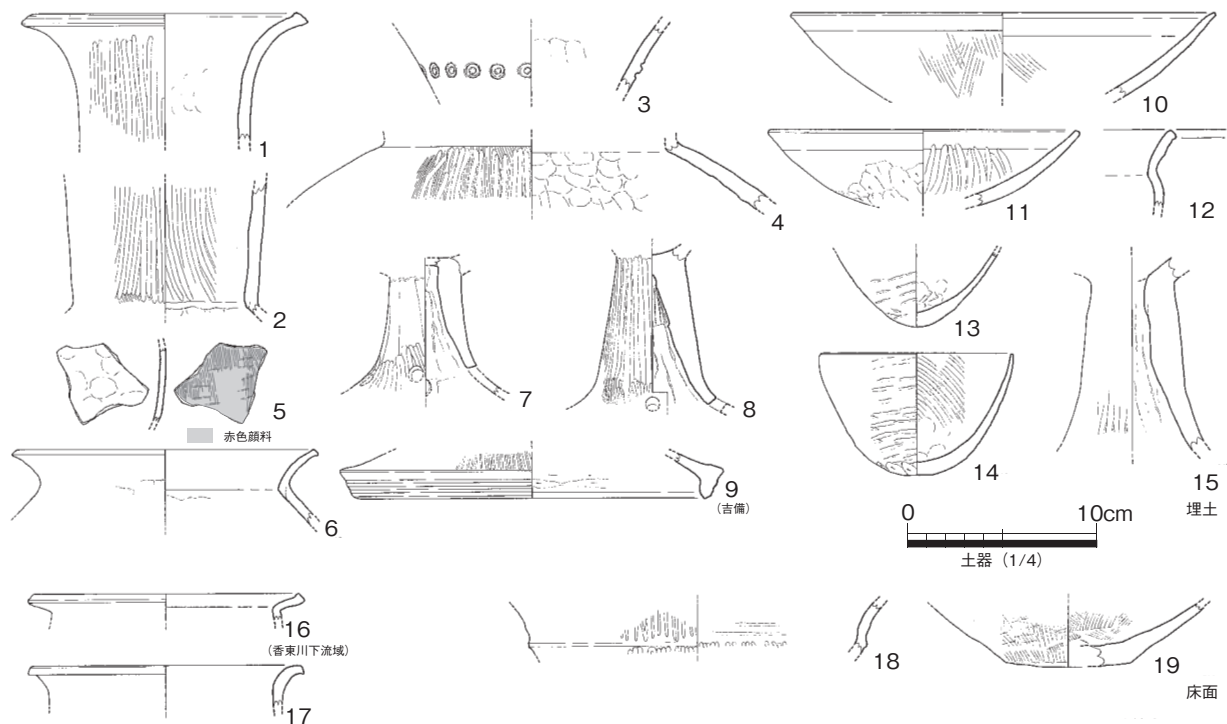


図 344 II -4 区 SH4003 出土遺物 (2)

(図 343-1.2) は上層からの混入品である。

II -4 区 SH4004 (図 345)

II -4 区北東部で検出した竪穴住居である。古墳前期前半新段階の SH4005 に切られる。住居北辺の壁溝及び壁面の一部を検出するに止まり、主柱穴の確定には至らなかったが、現状から方形住居と推定できる。

図化可能な出土遺物は深手の鉢底部 (図 345-1) と支脚 (図 345-2) のみであるが、SH4005 との先後関係や鉢 (図 345-1) の形態からみて、弥生終末期新段階に帰属する住居と考えておきたい。

II -4 区 SH4005 (図 346)

II -4 区北部で検出した竪穴住居である。弥生前期埋没の SD4001 を切り込む。遺存状態が悪く、検出段階で床面が露出するもので、住居南辺と東辺の一部と 2 基の主柱穴が残存するのみである。主柱穴

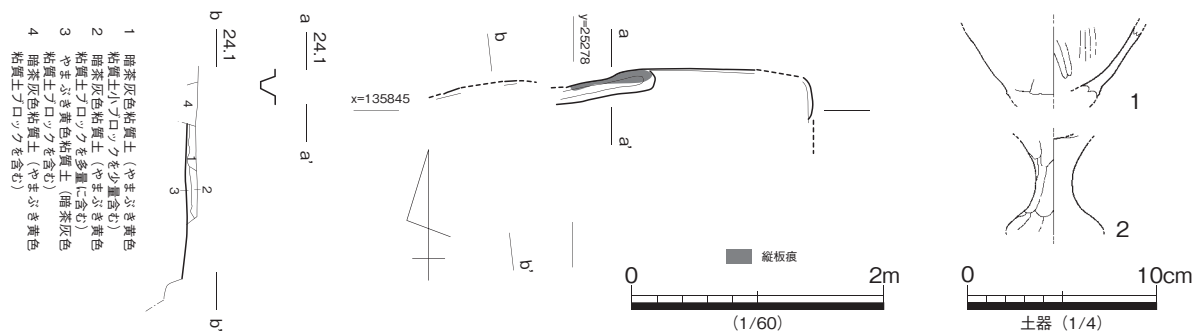


図 345 II -4 区 SH4004 平・断面・出土遺物

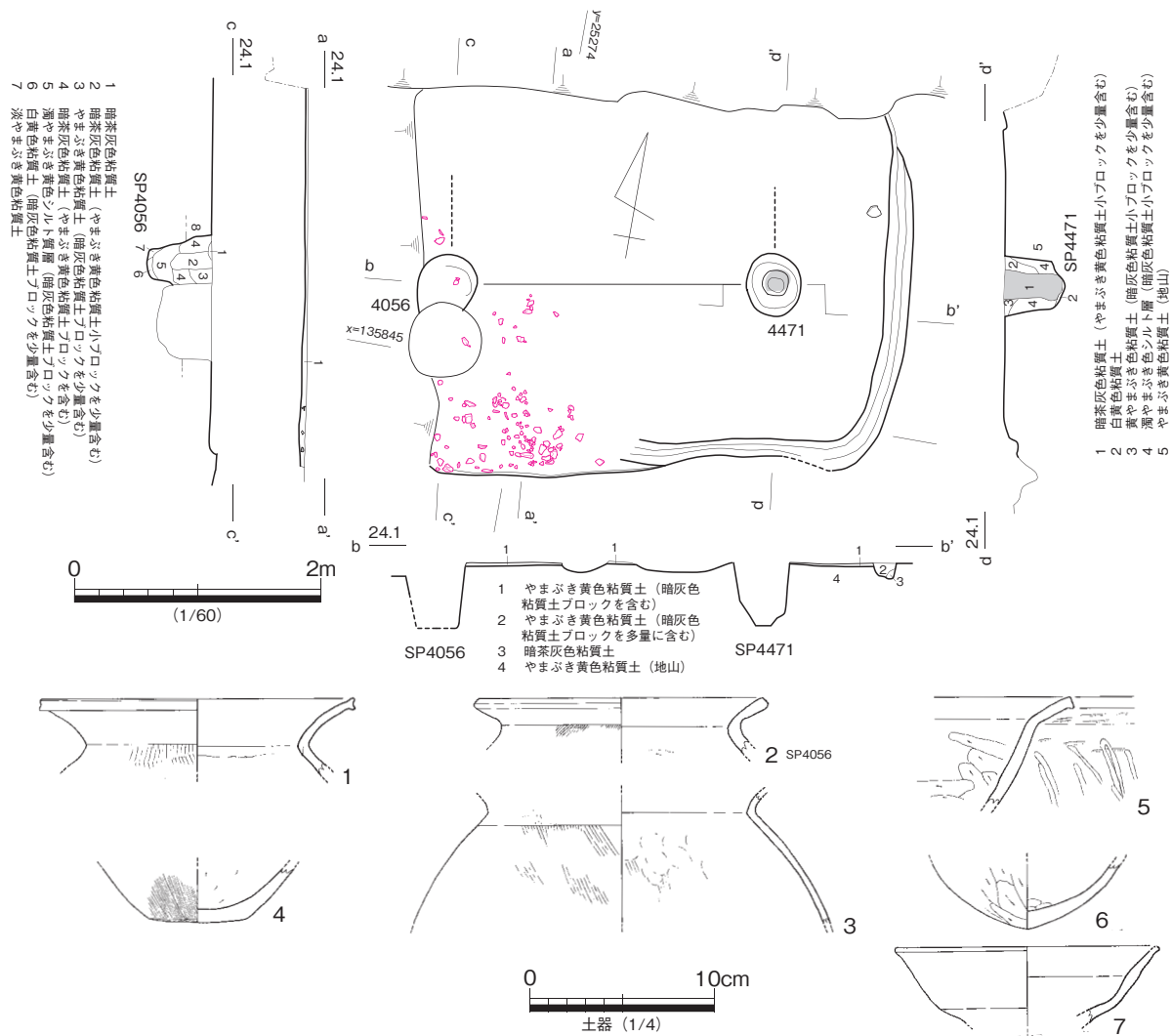


図 346 II -4 区 SH4005 平・断面・出土遺物

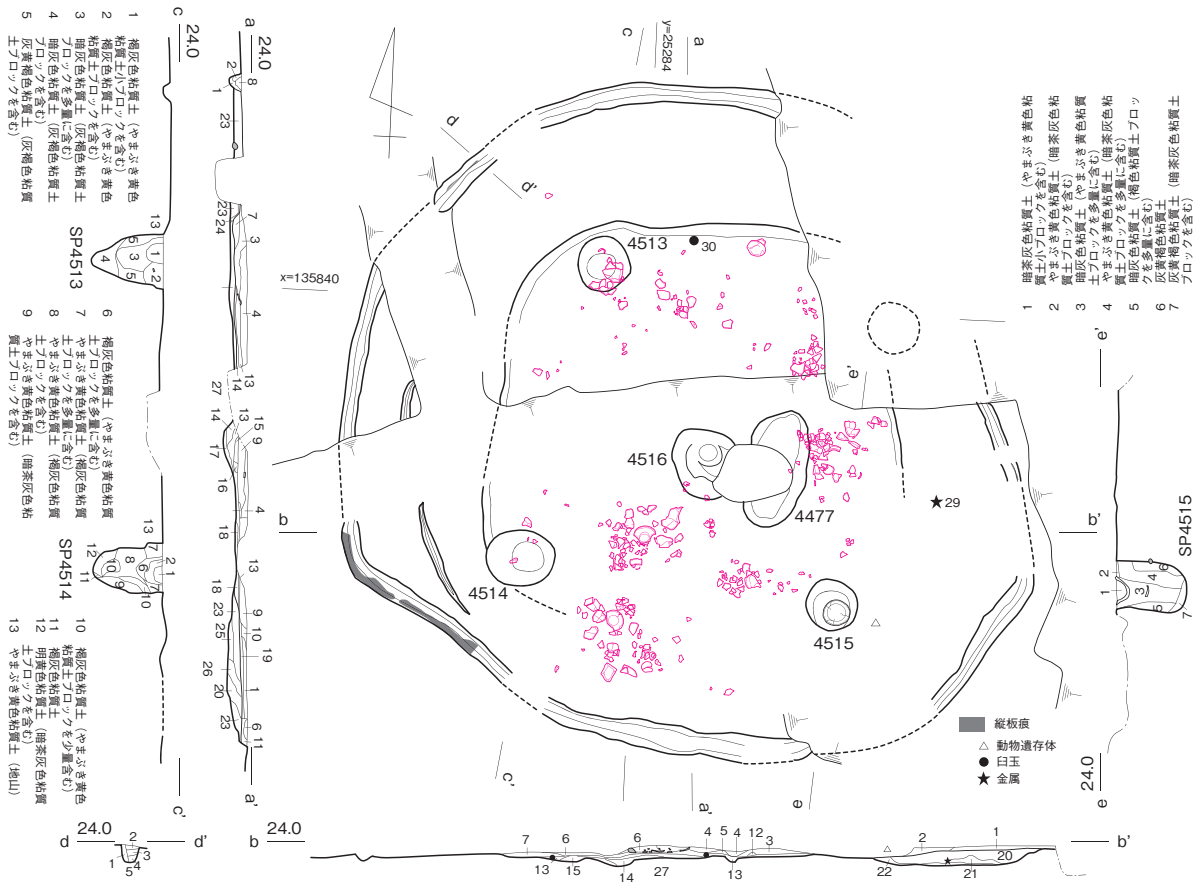
配置と壁溝の位置関係から、4基の主柱穴をもつ一辺が約5mの方形住居に復原できる。住居南西部の貼床土内には土器片がややまとまって検出されたが、接合可能な個体が少なく、碎片化したものが散乱した状態であった。

図 346-1～6 は南西部床面からの出土遺物、高杯 (図 346-7) は貼床土からの出土遺物である。図 346-2.4 の甕は古相を示すが、広口壺 (図 346-1) や鉢 (図 346-6)、高杯 (図 346-7) の形態から、本住居は古墳前期前半新段階に帰属するものと推定しておきたい。

II -4 区 SH4006 (図 347・348)

II -4 区北東部で検出した竪穴住居である。八角形の多角形住居と考えられるが、住居の南北で隅の角度が異なる。南側主柱穴 SP4514.4515 以北では隅角が鈍角でこれより南側は鋭角となり、あたかも住居南辺が張り出し部のような印象を与える。7.26 次調査で多角形住居の一辺が張り出し部となる事例が確認されており、これらの異系統住居との関連が想定される。

床面中央には2基の炉が配置される。西側の円形炉 (SP4516) は深度のある焼土・炭化物を多く含



- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを多量に含む) | 12 赤褐色粘質土 |
| 2 暗灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを多量に含む) | 13 暗灰色粘質土 (炭を多量に含む 焼土を含む) |
| 3 灰褐色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを多量に含む) | 14 暗灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを少量含む) |
| 4 灰褐色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを含む) | 15 暗灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを含む) |
| 5 暗茶灰色粘質土 (炭を含む) | 16 暗灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを含む) |
| 6 黄褐色粘質土 (暗茶灰色粘質土小ブロックを多量に含む) | 17 暗赤褐色粘質土 (炭・焼土を含む) |
| 7 黄褐色粘質土 (暗茶灰色粘質土小ブロックを含む) | 18 暗灰色粘質土 |
| 8 灰黄褐色粘質土 (暗茶灰色粘質土小ブロックを含む) | 19 暗茶灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを多量に含む) |
| 9 暗褐色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを多量に含む) | 20 暗茶灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを含む) |
| 10 灰白色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを含む) | 21 やまぶき黄色粘質土 (暗灰色粘質土小ブロックを含む) |
| 11 やまぶき黄色粘質土 (暗茶灰色粘質土小ブロックを多量に含む) | 22 灰黄褐色粘質土 (暗灰色粘質土小ブロックを少量含む) |
| | 23 やまぶき黄色粘質土 (暗茶灰色粘質土小ブロックを含む) |
| | 24 褐色粘質土 |
| | 25 やまぶき黄色粘質土 (暗茶灰色粘質土小ブロックを多量に含む) |
| | 26 暗茶灰色粘質土 (やまぶき黄色粘質土小ブロックを多量に含む) |
| | 27 やまぶき黄色粘質土 (地山) |
| | * 20~27 貼床 |

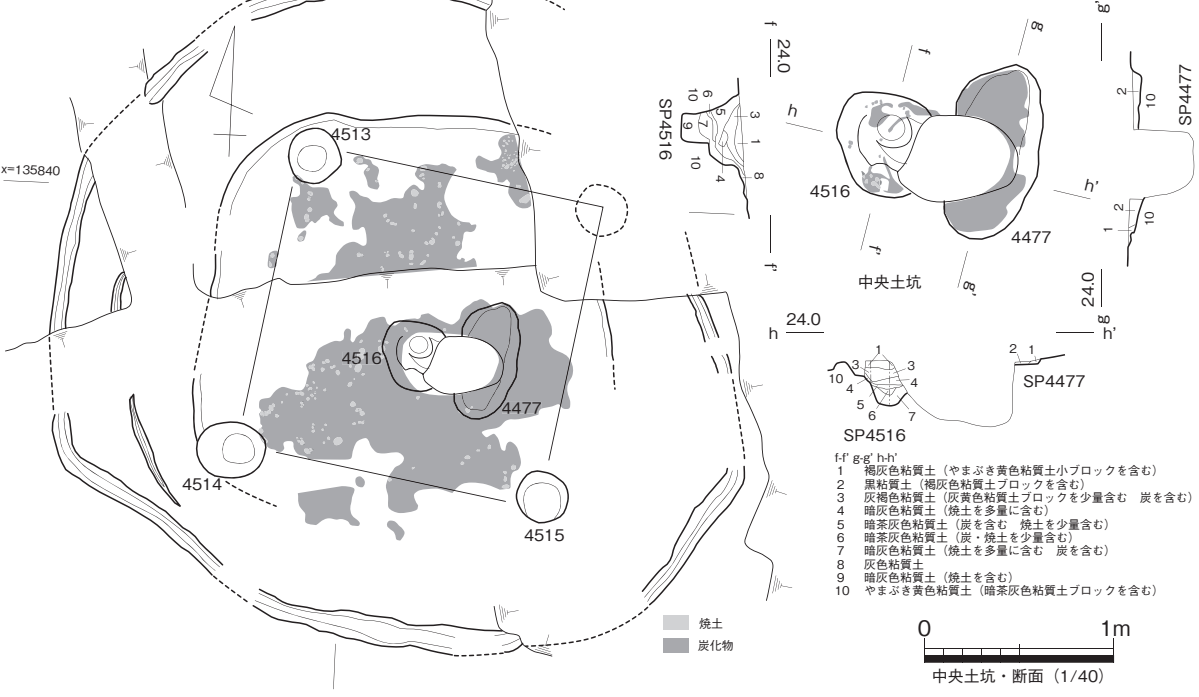


図 347 II-4区 SH4006 平・断面

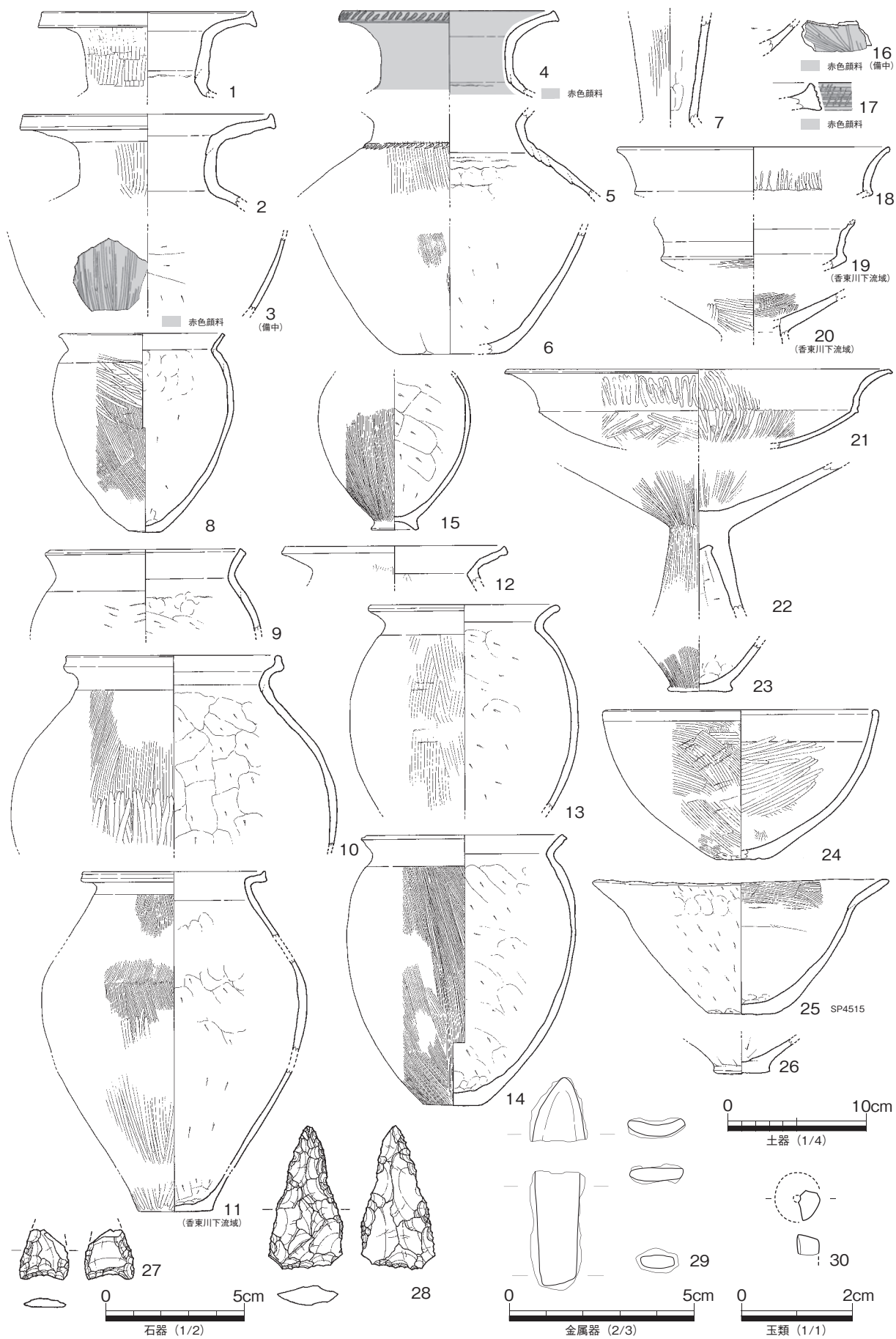


図 348 II -4 区 SH4006 出土遺物

み、東側の楕円形炉 (SP4477) は浅く炭化物が充填される灰穴炉である。所謂イチマル土坑を始原として、後期前半期から継続する炉形態であるが、本住居のそれは灰穴炉の平面形が楕円形を呈するなど、弛緩した状態を窺わせるものである。住居床面には、炉周辺を中心として炭化物層が貼床土に食い込む形で広がり、ベッド状遺構の内側を中心に土器片を散乱した状態で検出している。

出土遺物の内、甕 (図 348-10.13.14) 鉢 (図 348-24.25) の形態から、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものとして考えたい。図 348-29 は鉄製ヤリガンナであり、刃部を中心に裏すきが確認できる。図 348-30 は碧玉製の管玉片である。

II -4 区 SH4012 (図 349・350)

II -4 区北西部で検出した竪穴住居であり、古墳後期の SH3011.4011 に切られ、弥生終末期の SH4017 を切り込む。住居北西部と南部が攪乱坑で滅失するが、北東部に残存する壁溝の状況及び主柱穴配置から、六角形の多角形住居となる可能性が高い。検出段階で炉 SP4321 や床面が露出しており、壁面の立ち上がりは殆ど残存しない。

炉 SP4321 は東半部の底面を中心にして面的に焼土が広がる。焼土の被熱状態は、高温状態が想定できるものではないことから、炉周囲にあった土手等などの施設が住居廃絶に伴い破壊・投棄された可能性が高い。また、貼床土と判断した土層は層厚約 25cm を測ることから、本住居下位に存在する SH4017 の埋め戻し土を誤認し掘り下げてしまっていると考えた方がよいだろう。

出土土器の内、図 350-3.7.30.32 は主柱穴から、図 350-21 ~ 29 は床面、他は全て貼床土からの出土したもので土器群である。遺物の取り上げに混乱が生じている可能性があるが、甕 (図 350-2.10) 鉢 (図 350-12.19) の形態からみて、本住居は弥生終末期新段階に帰属するものと推定しておきたい。また、須恵器蓋杯・高杯 (図 350-27 ~ 29) や滑石製白玉 (図 350-37.38) は、西側で切り合い関係をもつ SH3011 からの混入遺物と見做せる。

II -4 区 SH4017 (図 351 ~ 353)

II -4 区北東部で検出した竪穴住居である。古墳後期前葉の SH3011、弥生終末期の SH4012 に切られ、弥生中期後半期の SB4011 を切り込む。また、本住居にはほぼ重複して SH4012 がみられるため、両者は建て替え関係にあるとみられる。壁面の立ち上がりは南西部のみ残存しているが、一部鈍角に屈曲する箇所がみられることや想定する主柱穴配置から見て、多角形住居となる可能性が高い。

床面中央から南よりには、炉と考えられる隅丸長方形土坑があり、周囲の床面上には焼土・炭化物が面的に広がる。炉底面は炭化物がほぼ全域に広がり、灰穴炉の様相を呈しており、中位から上位にはまとまった土器廃棄がみられた。床面の状況は、炉周辺の焼土・炭化物に加え数箇所に分かれた土器集中が認められる。

図 352-1 ~ 26 は床面、図 352-27.28 は炉からの出土遺物である。図 352-4 は焼成破裂土器片であり、外面にミガキ調整を認め、内面は剥離面となる。図 352-8 は胴部外面に大型の焼成破裂痕を留める鉢である。図 353-1 は安山岩製の砥石であり、床面中央部から出土した。これらの出土遺物の中で、尖底を指向する鉢 (図 352-12.16 ~ 19) や、甕 (図 352-5.6) の形態から、本住居は弥生終末期中段階に廃絶したものと推定しておきたい。

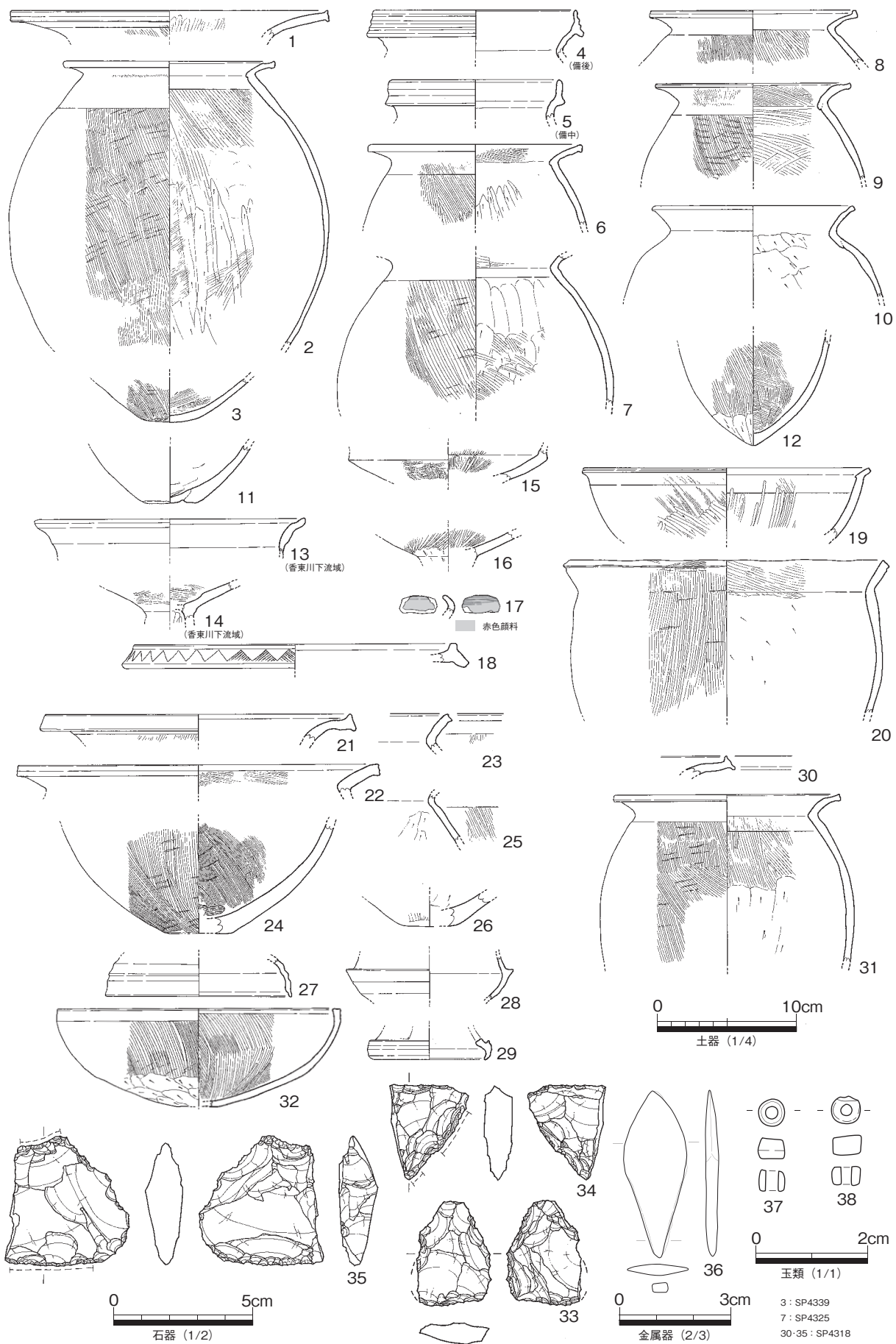


図 350 II -4 区 SH4012 出土遺物

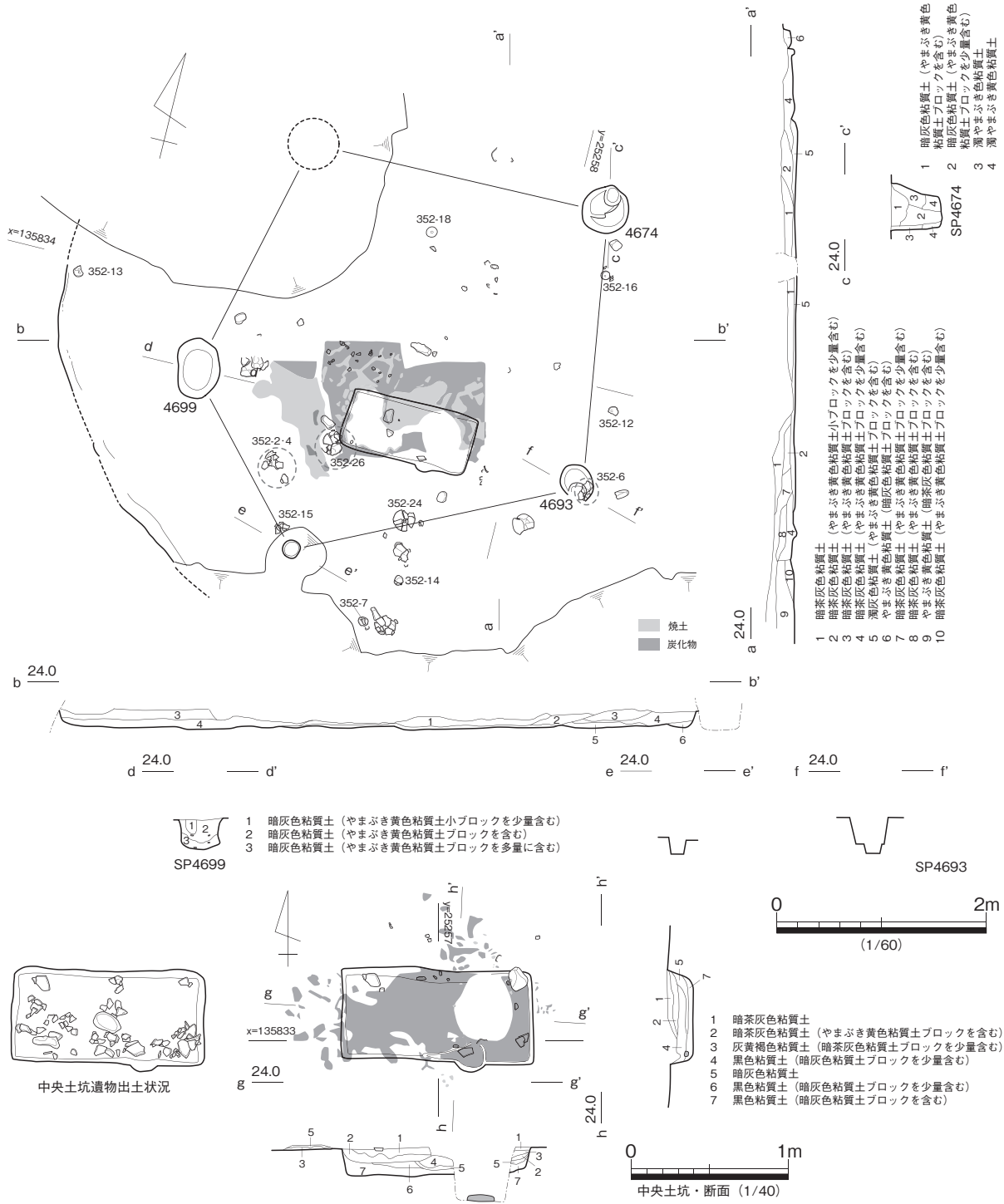


図 351 II -4 区 SH4017 平・断面

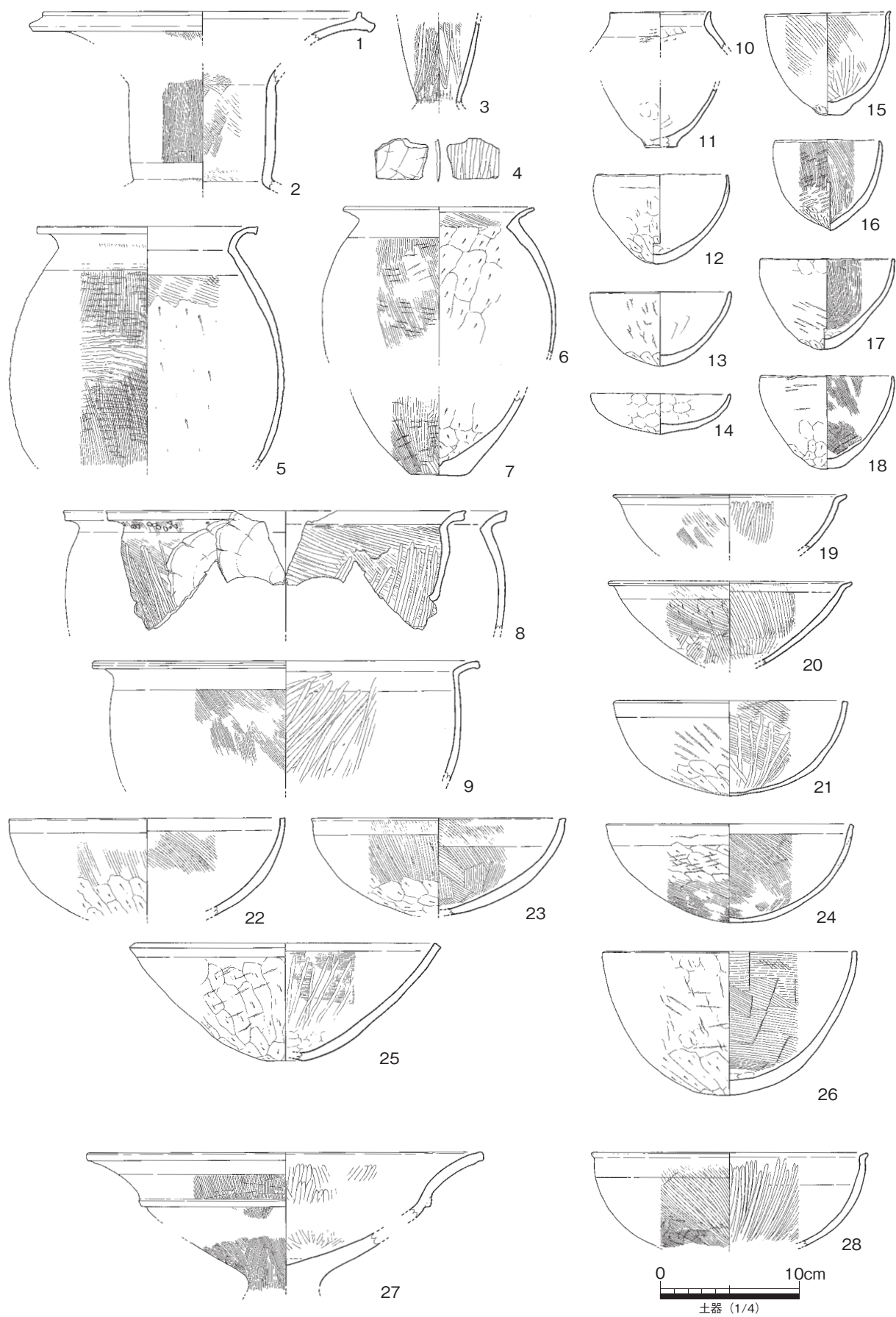


图 352 II-4区 SH4017 出土遺物 (1)

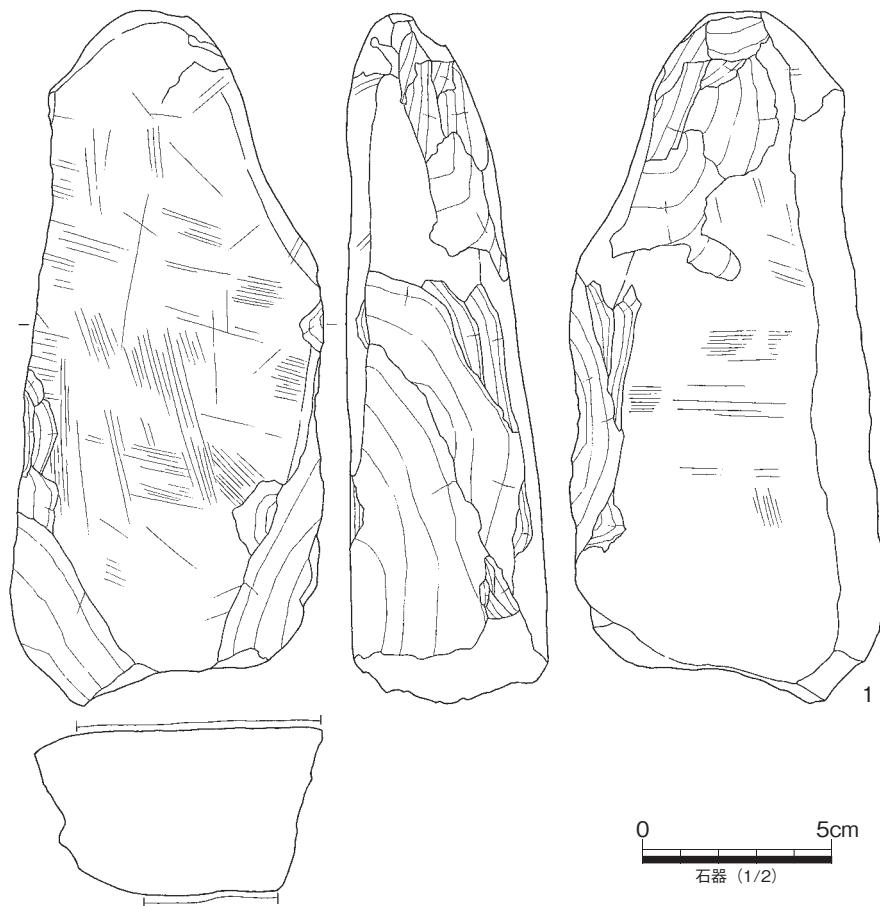


図 353 II -4 区 SH4017 出土遺物 (2)

II -4 区 SH4019 (図 354)

II -4 区北東部で検出した竪穴住居である。壁溝の一部を検出したのみであり、主柱穴の推定にも至っていない。残存する壁溝の北端部が鈍角に屈曲することから、小形方形住居と多角形住居の二通りの可能性がある。図化可能な出土遺物は見られなかったが、周辺遺構の状況を考慮し、弥生終末期の所産と推定しておきたい。

II -4 区 SH4020 (図 355)

II -4 区中央部で検出した竪穴住居である。大半を攪乱坑によって滅失するため、方形住居の北西隅部とみられる壁溝と床面の一部を辛うじて検出したのみである。また、弥生後期後半期の多角形住居 SH4021 と重複する位置にあるが、切り合い関係は明確にはできなかった。

図化可能な出土遺物は鉢 (図 355-1) のみである。胴部下半部の破片であり底部が残存していないものの、球形化が進む形態をもつことから、古墳前期前半期の所産と推定しておきたい。

II -4 区 SH4021 (図 356)

II -4 区中央部で検出した竪穴住居である。古墳後期の SH4008.4022 に切られる。住居南北部が攪乱坑によって滅失しているが、西側の壁溝及びベッド状遺構の状況からみて、六角形の住居と考えられる。

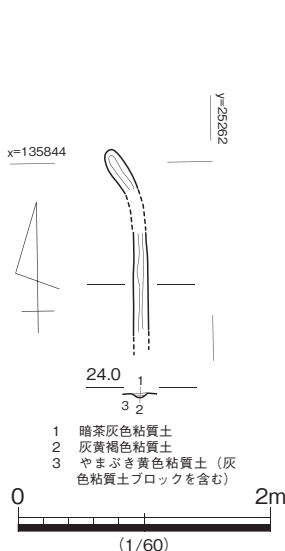


図 354 II -4 区 SH4019
平・断面

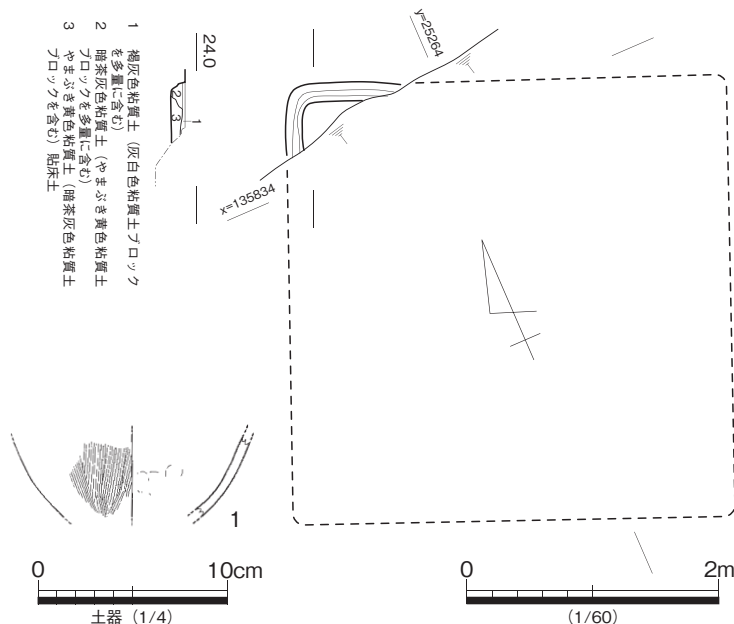


図 355 II -4 区 SH4020 平・断面・出土遺物

主柱穴は、床面中央の炉 (SP4432) を中心として現状の 2 基に加えて攪乱坑内に 4 基を想定し 6 基と推定する。西側には基盤層の IV 層を掘り残したベッド状遺構が確認されているが、現状の高さからみて、本来的には置土が存在していたと考えられる。

炉 SP4432 は楕円形を呈し、西側に排水溝とみられる小溝を敷設する。また、東側には焼土粒と炭化物が集中する浅い落ち込みが部分的に見られる。埋没土には上位に焼土粒と炭化物を多く含むが、下位にこれらは認められず、IV 層に由来したブロック状のシルトで埋め戻されており、炉の機能時には専ら上位が使用されたことが伺える。防湿目的で深く掘削した後、早期に埋め戻されたことも想定できよう。

図 356-1 ~ 10 の出土土器の内、図 356-3.7.10 は炉 SP4432、図 356-2 は主柱穴 SP4225 から出土している他は、全て床面に伴う資料である。甕 (図 356-6) は口縁部外面を肥厚するもので土佐地域からの搬入・模倣土器である。ガラス製小玉 (図 356-11) は主柱穴 SP4689 の上面から出土したもので、コバルトブルーの色調を示し、表面には小さな気泡が目立つ。

炉内や主柱穴出土遺物が古相を示すが、直口壺 (図 356-1) や大型鉢 (図 356-9) の形態や高杯脚 (図 356-8) の接合方法から判断して、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものと推定しておきたい。

II -4 区 SH4025 (図 357)

II -4 区東部で検出した竪穴住居である。弥生後期前半期の SB2007 を切り込む。削平により南部の壁溝を滅失するが、図示した主柱穴の配置から、一辺が約 4m の方形住居に復元する。西隅の主柱穴は攪乱坑で滅失しているが、南隅主柱穴 SP2034 は SB2007 の西側桁行の柱との重複に気付かず掘り下げてしまっている。また、床面中央にある SP2033 は、炉の可能性が高い。

図 357-1 ~ 12 は出土遺物であり、図 357-3.8 は主柱穴 SP4425、図 357-9 ~ 12 は主柱穴 SP2034、図 357-2.4.7 は壁溝、他の資料は全て床面から出土している。前述のとおり、SP2034 出土の図 357-9 ~ 12 は時期的に先行する SB2007 の資料が混在している可能性が高い。

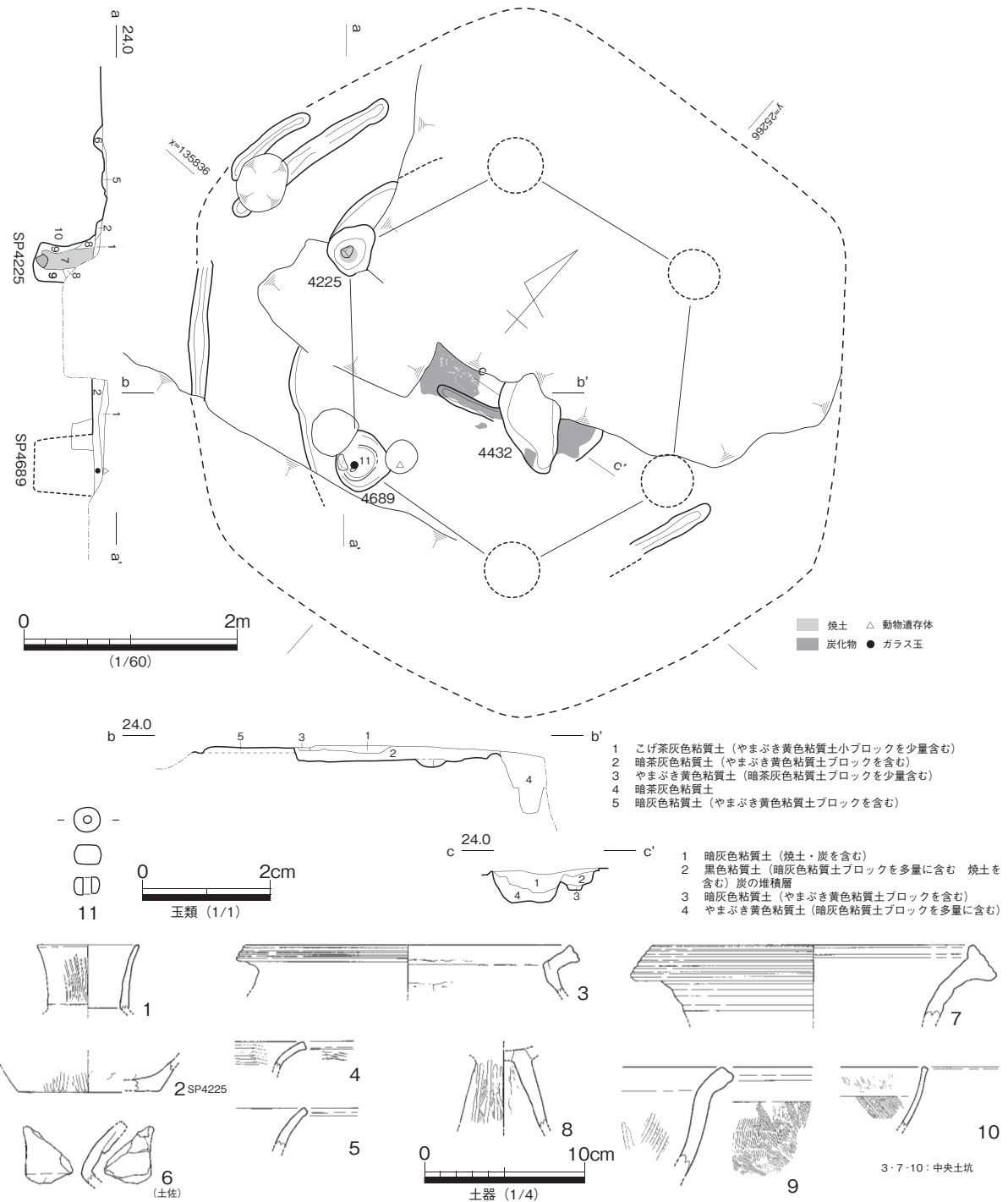


図 356 II -4 区 SH4021 平・断面・出土遺物

甕口縁及び底部(図357-2.3)の形態から、本住居は弥生後期後半古段階に帰属するものと推定しておく。

II -4 区 SH4026 (図 358)

II -4 区東部で検出した竪穴住居である。弥生中期後半期の SB2004 を切り込む。後世の削平により、壁溝や壁面は既に失われており、炉 SP4426.4272 を中心に支柱穴を推定したもので、直径約 5m の円形住居となる可能性が高い。2 基の炉の内、SP4426 は深く細かなシルト～粘土のブロックで埋め戻され

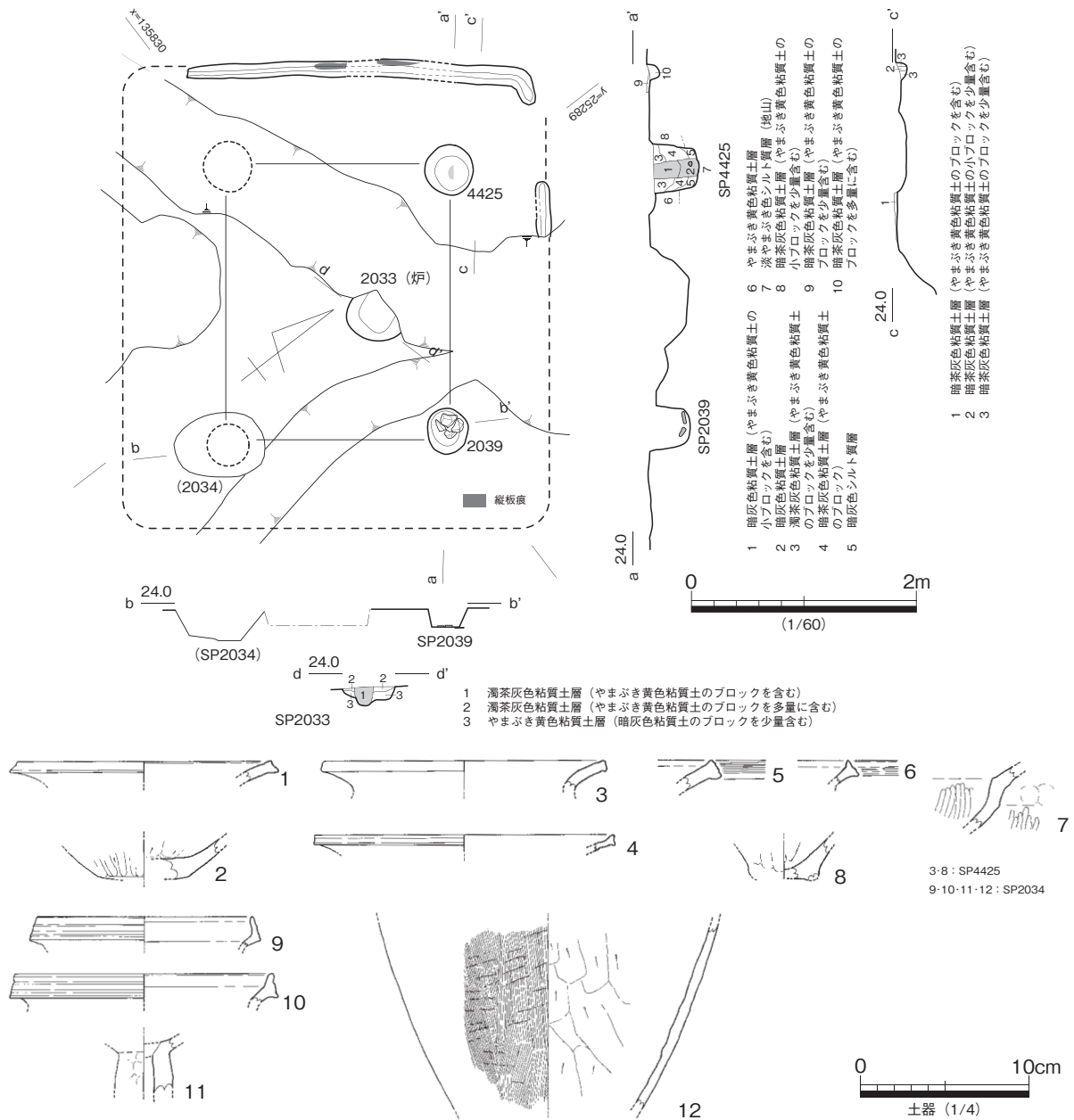


図 357 II -4 区 SH4025 平・断面・出土遺物

ており、焼土・炭化物を殆ど含まない。SP4272 は隅丸長方形を呈し、炭化物を多く含む灰穴炉の状態を示す。弥生後期初頭から継続する所謂イチマル土坑を始原とする炉形態が変容したものと捉えたい。

図 358-1 ~ 6 の出土遺物の内、図 358-1.6 が西側の炉 SP4426、図 358-2 ~ 5 が東側の炉 SP4272 から出土した資料である。広口壺 (図 358-1) や甕口縁 (図 358-2) の形態から、本住居は弥生後期前半新段階に帰属するものと推定しておく。

II -4 区 SH4027 (図 359・360)

II -4 区南西部で検出した竪穴住居である。攪乱坑によって一部滅失しているが、平面形が約 4.7 × 5m の方形を呈し、図示した 4 基の支柱穴と床面中央に円形炉を配置する。壁溝より内側へ約 0.2m 入っ

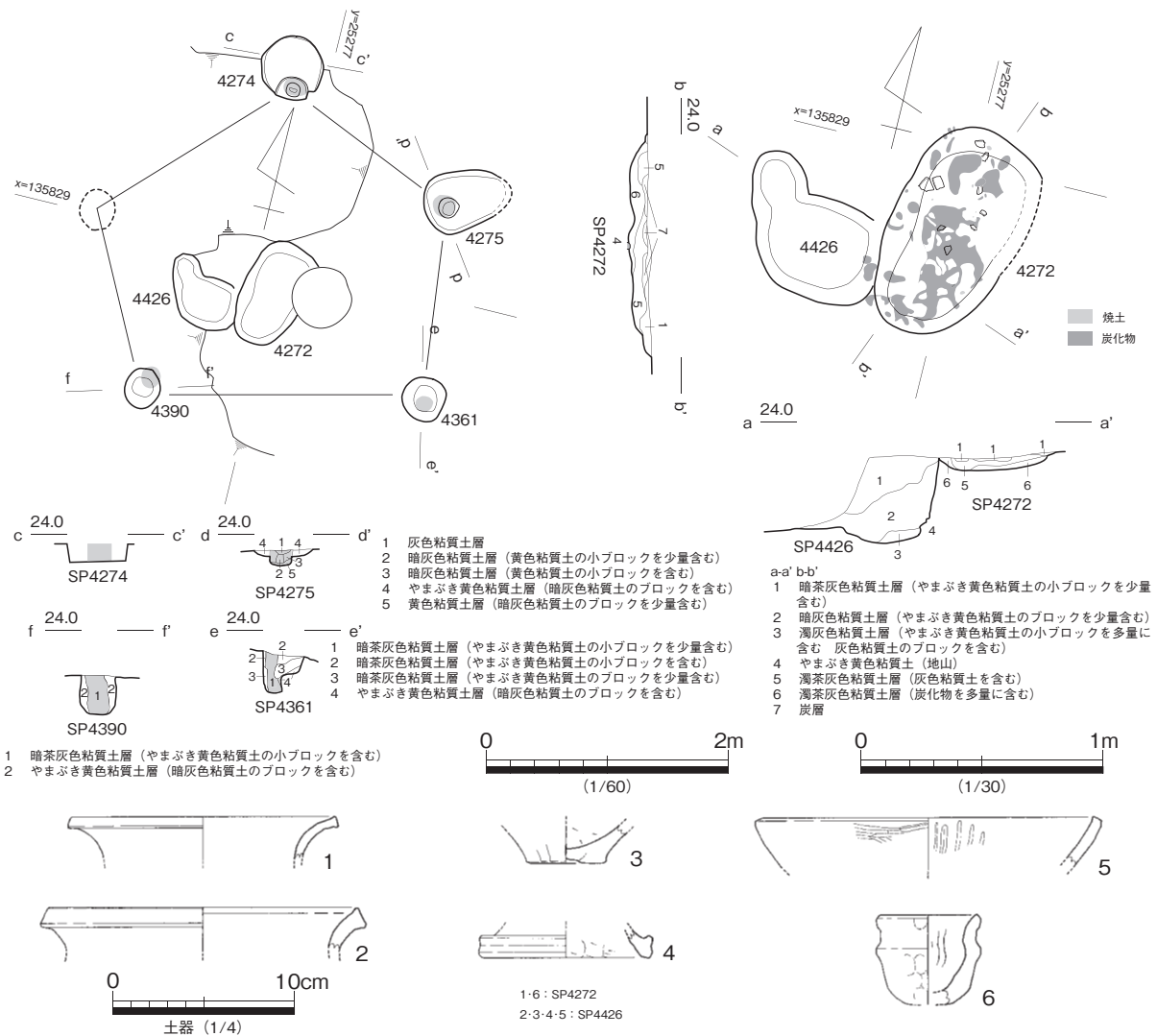


図 358 II -4 区 SH4026 平・断面・出土遺物

た位置に、低い落ち込みが巡るが、ベッド状遺構とも捉えられず機能は不明である。主柱穴の柱通りは良好で、直径約 0.15m の柱痕が床面から約 0.6m の深度で見られ、丁寧な裏込土が確認できる。

炉 SP4601 は一部攪乱坑で滅失するが円形を呈するとみられ、床面からの深度は約 0.7m を測る。埋没土上位は住居廃絶に伴う埋め戻し土であり、中位から下位に機能時の炭化物を多く含む堆積層があり、炭化物層上面には若干の土器片の投棄がみられる。

図 360-1 ~ 26 は出土遺物であり、図 360-3.6.8 ~ 10 は炉 SP4601、図 360-5 は主柱穴 SP4582、図 360-26 は主柱穴 SP4583 から出土している他は、全て床面に伴う出土遺物である。図 360-13 ~ 23 は焼成破裂土器片又は焼成破裂土器である。これらは、調整・胎土や壺頸部片 (図 360-20 ~ 22) の形態から弥生中期後半期の所産とみられ、本住居に伴うものではなく時期的に先行する遺構からの混入資料とみられる。主柱穴 SP4583 から出土した小型の扁平片刃石斧 (図 360-26) は、本住居に伴うものかどうかの判断が難しい。

炉から出土した甕 (図 360-6 ~ 10) の形態からみて、本住居は弥生後期後半新段階に廃絶したものと考えておきたい。

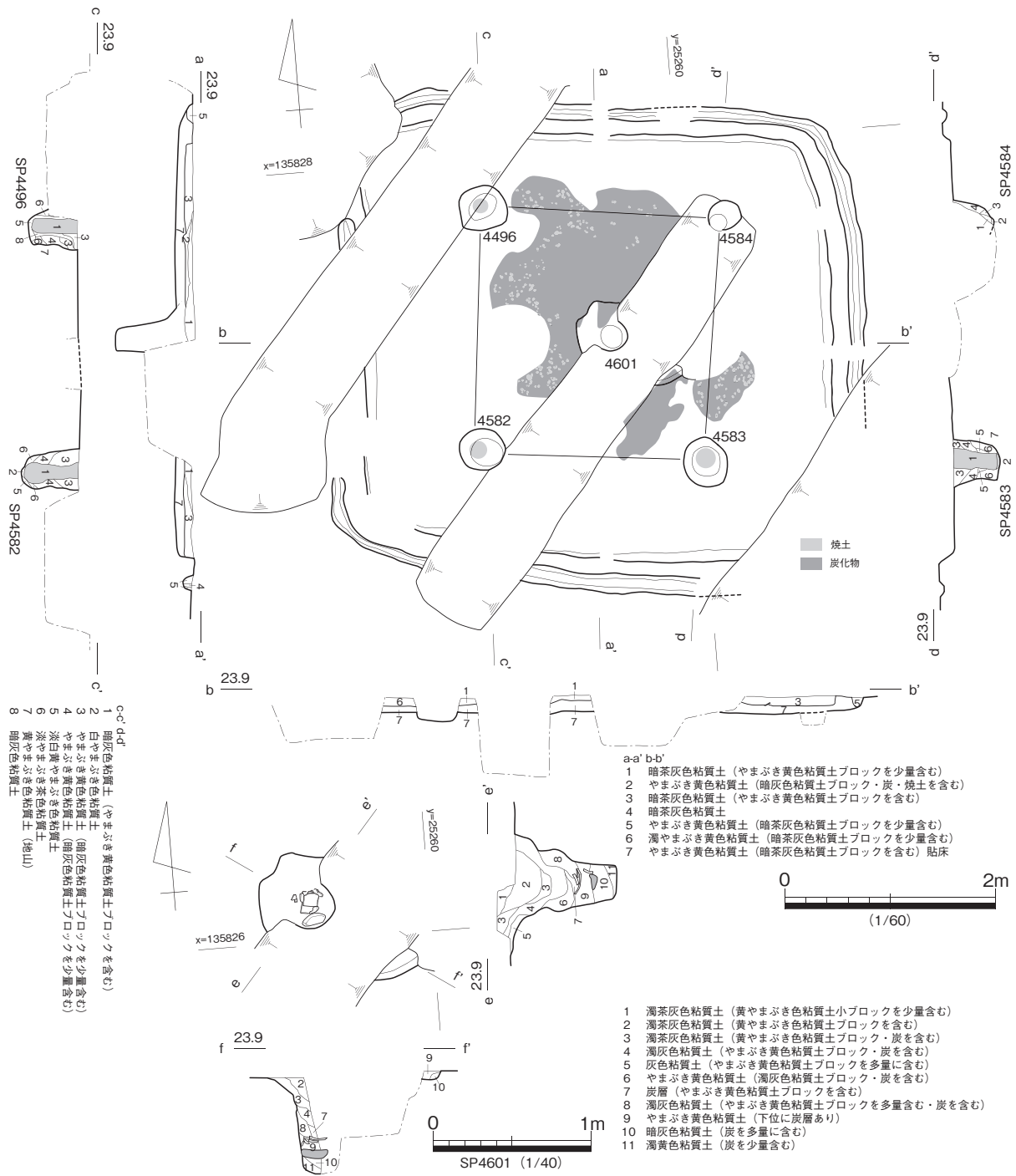


図 359 II -4 区 SH4027 平・断面

II -4 区 SH4033 (図 361)

II -4 区北東部で検出した竪穴住居である。古墳前期の SH4002.4005、弥生終末期の SH4001 に切られる。現地調査で把握しておらず、報告書作成段階で柱穴配置等から復元している。5 基の支柱穴の中央には SP4106 が存在しており、断面図作成が行えていないが写真記録から炉に推定する。

出土遺物の内、短頸広口壺 (図 361-1) は SP4106、高杯 (図 361-2) は SP4070、大型鉢 (図 361-3) は SP4630 から出土している。図 361-1.2 は弥生中期後半期の所産であり、高杯 (図 361-2) は外面に焼成破

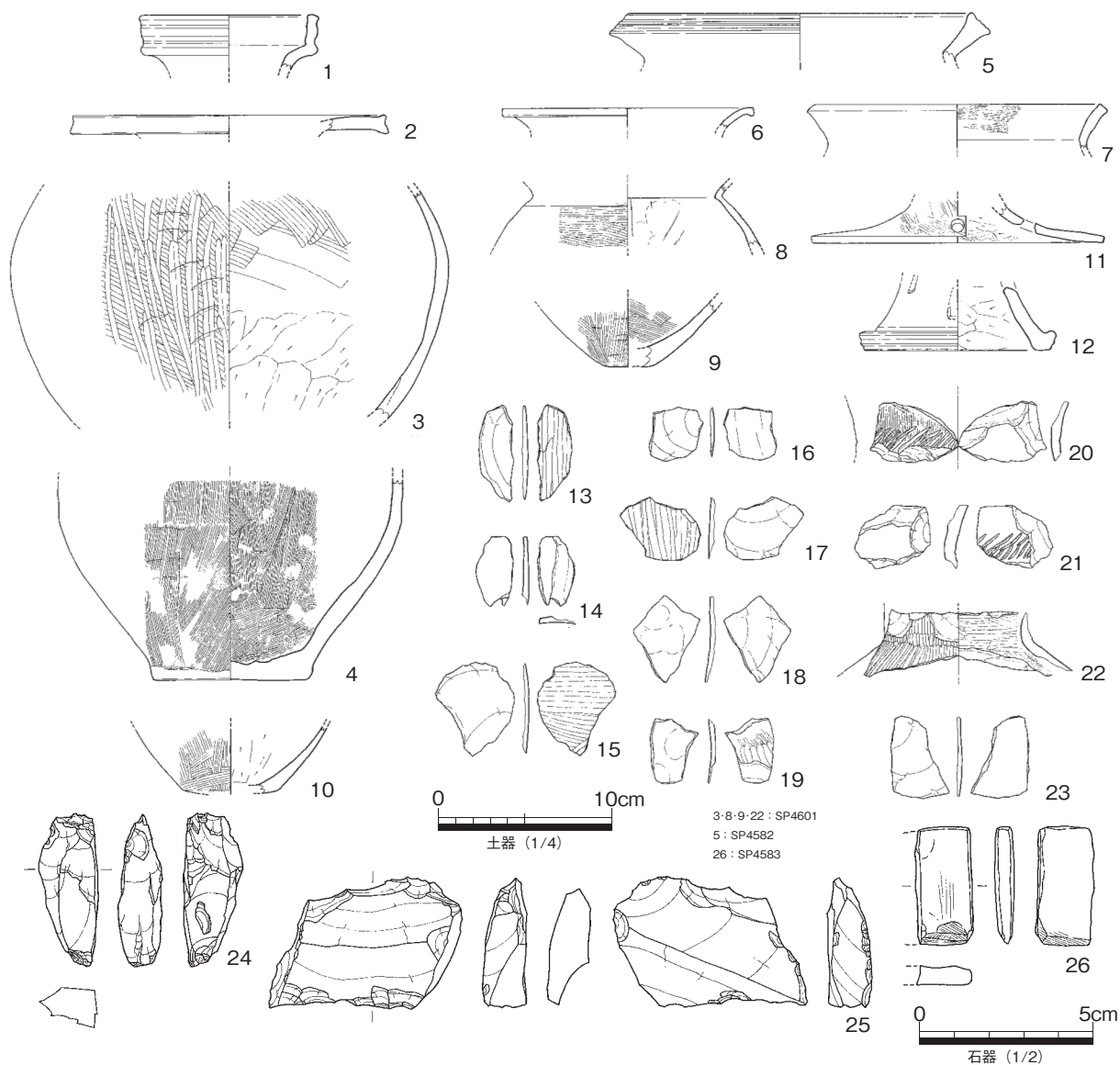


図 360 II -4 区 SH4027 出土遺物

裂痕を留める。大型鉢 (図 361-3) は口縁部端部を若干跳ね上げる形態をもち、弥生後期後半期の所産と推定できる。

大型鉢 (図 361-3) の帰属時期を援用し、本住居は弥生後期後半期に帰属するものと推定しておく。

II -4 区 SH4036 (図 362)

II -4 区東部で検出した竪穴住居である。攪乱坑によって島状に分割された遺構面に焼土・炭化物が広がる状態で検出しており、一見して焼失家屋の状況を呈していた。周辺を精査・検討したが伴う壁溝及び支柱穴の検出は不可能であったが、焼土・炭化物の広がり方を考慮すると、直径又は一辺が約 6m の円形か方形住居と推定できる。焼土・炭化物を除去すると SK4004 が確認された。SK4004 は住居覆土と共通する焼土・炭化物層で埋没し、底面に機能時の堆積層と見られる炭化物の薄層が確認されたことから、本住居に伴う炉と考える。

図 362-1 ~ 6 は出土遺物であり、全て床面上面にみられる焼土・炭化物層から出土した。図 362-14

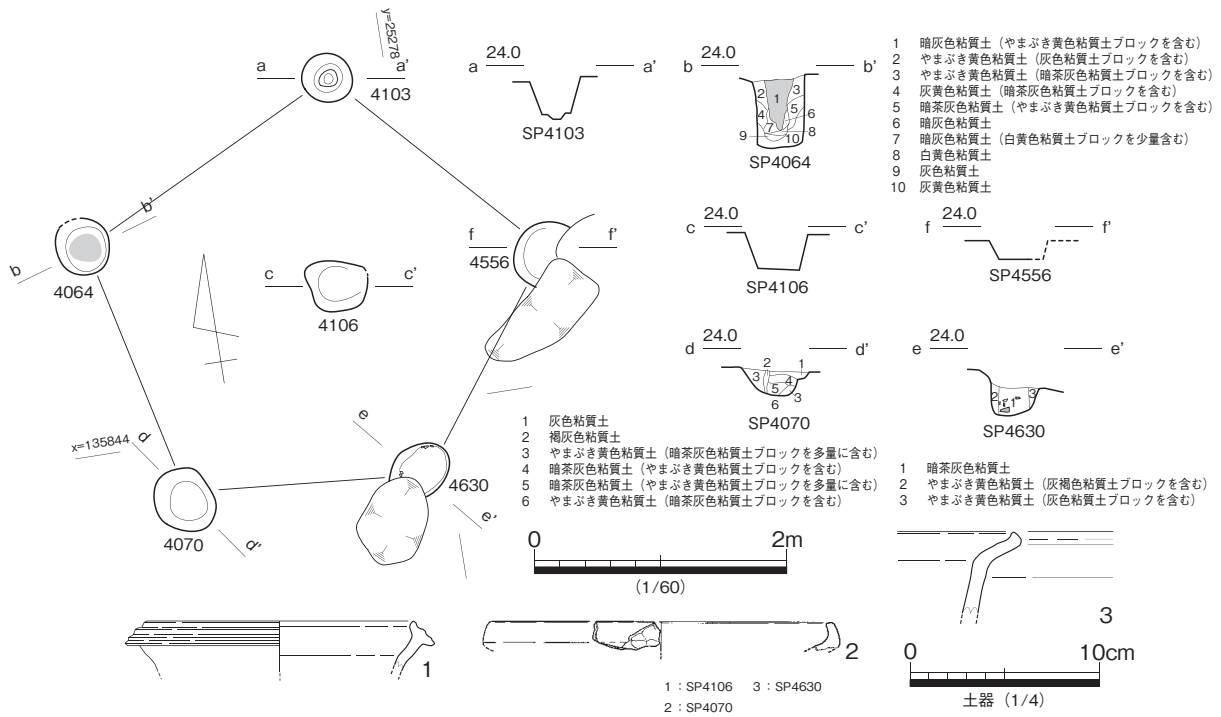


図 361 II -4 区 SH4033 平・断面・出土遺物

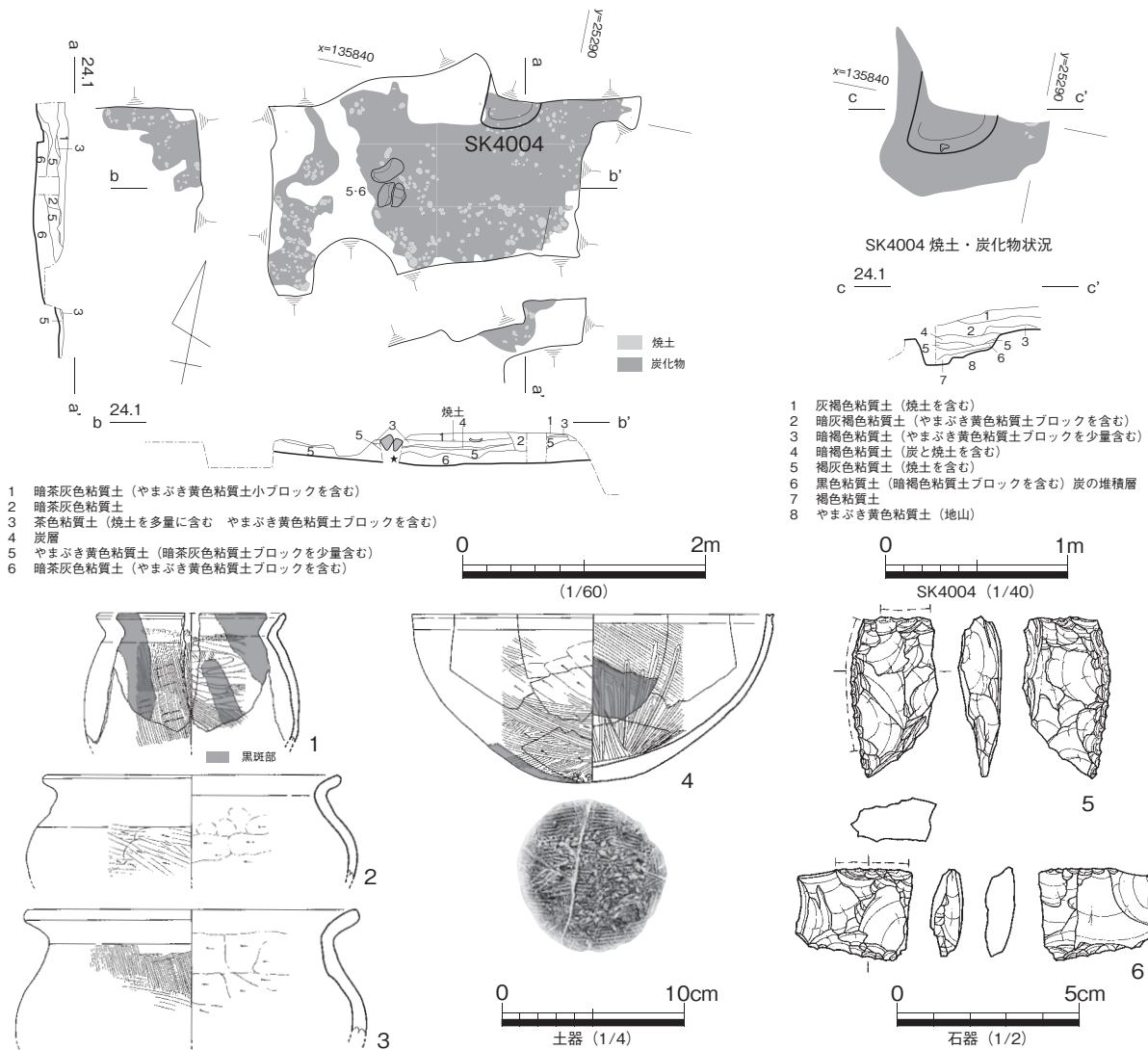


図 362 II -4 区 SH4036 平・断面・出土遺物

は焼成破裂土器である。小型甕(図 362-1)は破片間で黒斑が途切れる。鉢(図 362-4)は破片間で色調を明瞭に違えている。また、図 362-4 の鉢外底面には、調整の下に被籠痕とみられる圧痕が残される。サヌカイト製の楔形石器(図 362-5.6)は、時期的にみて、本住居に伴う遺物と想定し難い。

鉢(図 362-4)の形態から、本住居は弥生終末期に廃絶したものと推定しておきたい。

G 区 SB0005 (図 363)

G 区北西部で検出した掘立柱建物である。古墳後期の開削から古代 8 世紀に埋没する SD0005、古代期と推定される SB0004 に切られる。現状で梁間 1 間 (3m) × 桁行 1 間 (2m) が確認できるが、桁行が西側の未調査地へ更に伸びると考えられる。柱穴は隅丸方形を基調とする整った平面形をもつ。柱痕の確認はできていない。

南東隅柱 SP0223 (図 363-1) からの出土遺物より、本建物は弥生後期前半古段階と推定しておきたい。建物全体形は、向後の調査報告に譲ることとしたい。

H 区 SB1012 (図 364)

H 区中央南側で検出した併行する 2 条の舟形土坑であり、弥生後期の SH1005 に切られる。土坑の平面径は、隅丸長方形を呈し、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。SX1008.1012 とした北側の掘り方は、延長約 5.6m に亘って検出しているが、攪乱で滅失する南側の SX1010 も本来は並行していたものと考えられる。埋没土は全て基本層序 IV 層由来のブロック土であり、掘開後の早期に埋め戻しが行われたことが

地区	遺構名	時期	梁間(間)	桁行(間)	梁間(m)	桁行(m)	面積(m ²)	主軸方向	柱穴平面形	柱痕径	備考
G 区	SB0005	弥生後期前半古段階	1	(2)	3	2 以上		N-80° E	方形		
H 区	SB1012	弥生後期前半新段階			5.6 以上	3.5	20.2 以上				
J 区	SB4001	弥生後期前半中段階	2	2	2.8	3.1	8.7	N-76° E	方形	20 ~ 25	
J 区	SB4002	弥生後期前半新段階	1	3	2.6	5.3	13.8	N-80° W	方形	25	
L 区	SB5007	弥生後期前半古段階	1	7	2.7	5.5	14.9	N-80° W		25	
M 区	SB6001	弥生後期前半古段階	1	1	3.1	2.8	8.7	N-14° W	方形	25	
M 区	SB6002	弥生後期前半古段階	1	2	2.5	4.7	11.8	N-85° E	方形	25	
M 区	SB6007	弥生後期前半中段階	1	3	2.7	6.0	16.2	N-77° E	円形	20	
N 区	SB7001	弥生後期前半中段階	1	2	2.9	5.2	15.1	N-85° W	方形	20	
N 区	SB7002	弥生後期後半新段階	1	(4)	2.7	5.5	14.9	N-85° W	円形(小)	10	
O 区	SB8002	弥生後期後半新段階	1	4	2.2	5.7	12.5	N-35° E	円形		
O 区	SB8004	弥生後期後半新段階	1	2	2.6	3.4	8.8	N-4° W	円形		
T 区	SB1114	弥生後期前半古段階	2	3	4.8	6.8	32.6	N-74° W	円形	20 ~ 25	
U 区	SB5501	弥生後期前半新段階		3		7.0		N-70° E	円形	20	
U 区	SB5502	弥生後期前半中段階	1	2	2.4	4.2	10.1	N-75° W	隅丸方形	20	
U 区	SB5504	弥生後期前半古段階	1		2.2			N-75° W	円形	20	
U 区	SB5506	弥生後期前半中段階	1	2	2.5	4.2	10.5	N-84° W	隅丸方形・円形混在	20	焼成破裂土器 1
U 区	SB5507	弥生後期後半古段階	2?	4		6.8		N-42° E	円形	25	
V 区	SB6002	弥生後期前半中段階	1	2	3.0	4.5	13.5	N-70° W	隅丸方形	15	
W 区	SB4002	弥生後期前半古段階		2				N-80° W	隅丸長方形	20	
I -3 区	SB3001	弥生後期前半中段階		2		4.5		N-75° E	隅丸方形	20	
I -4 区	SB4001	弥生後期前半新段階	1	2	2.5	5.2	13.0	N-6° E	隅丸方形	20	
II -2 区	SB2002	弥生後期前半中段階	1	2	2.4	4.5	10.8	N-77° E	隅丸方形	0.15 ~ 0.2	
II -2 区	SB2007	弥生後期前半新段階	1	2	2.6	3.6	9.4	N-47° W	円形	0.15	
II -4 区	SB4004	弥生後期前半古段階	1	2	3.0	4.5	13.5	N-2° W	隅丸方形	0.3	焼成破裂土器
II -4 区	SB4005	弥生後期前半	1	2	1.8	3.4	6.1	N-25° W	円形		
II -4 区	SB4006	弥生後期前半古段階	1	3	3.6	7.3	26.3	N-30° E	隅丸方形・円形	30 ~ 35	焼成破裂土器

表 10 掘立柱建物跡一覧

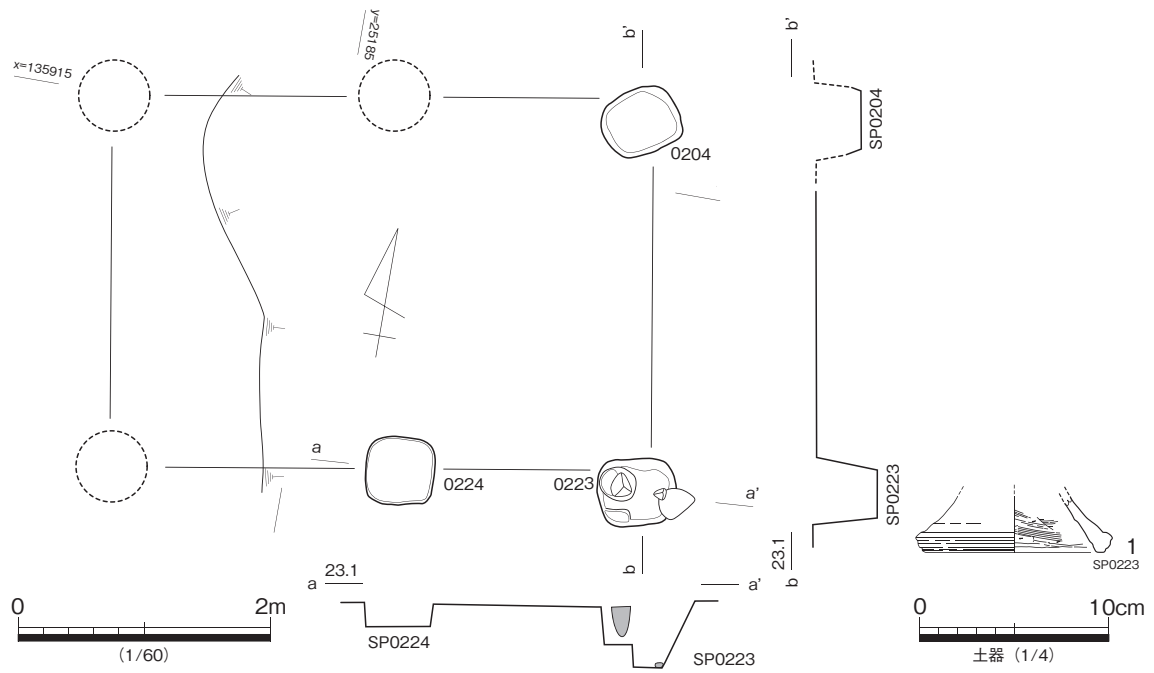


図 363 G区 SB0005 平・断面・出土遺物

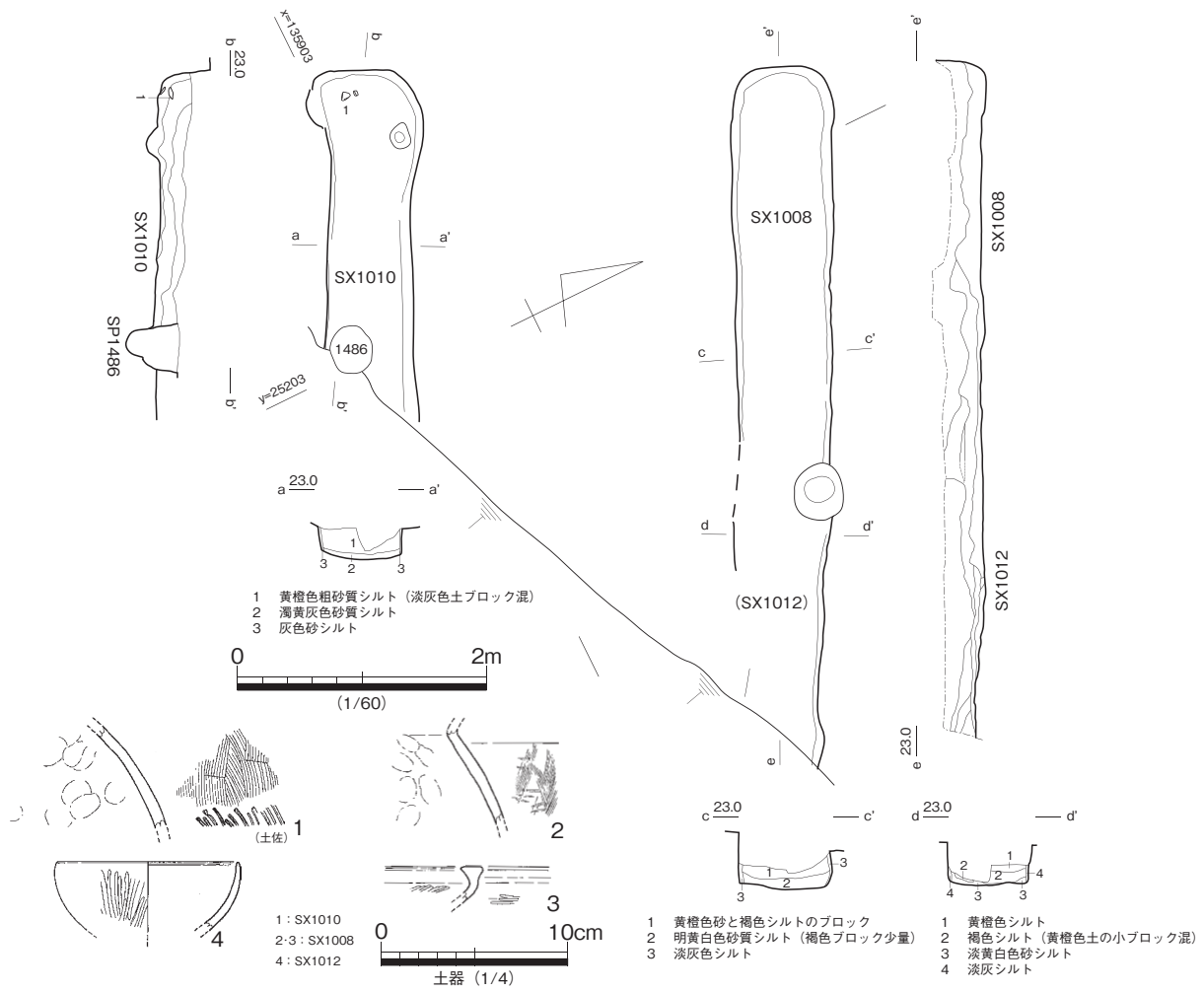


図 364 H区 SB1012 平・断面・出土遺物

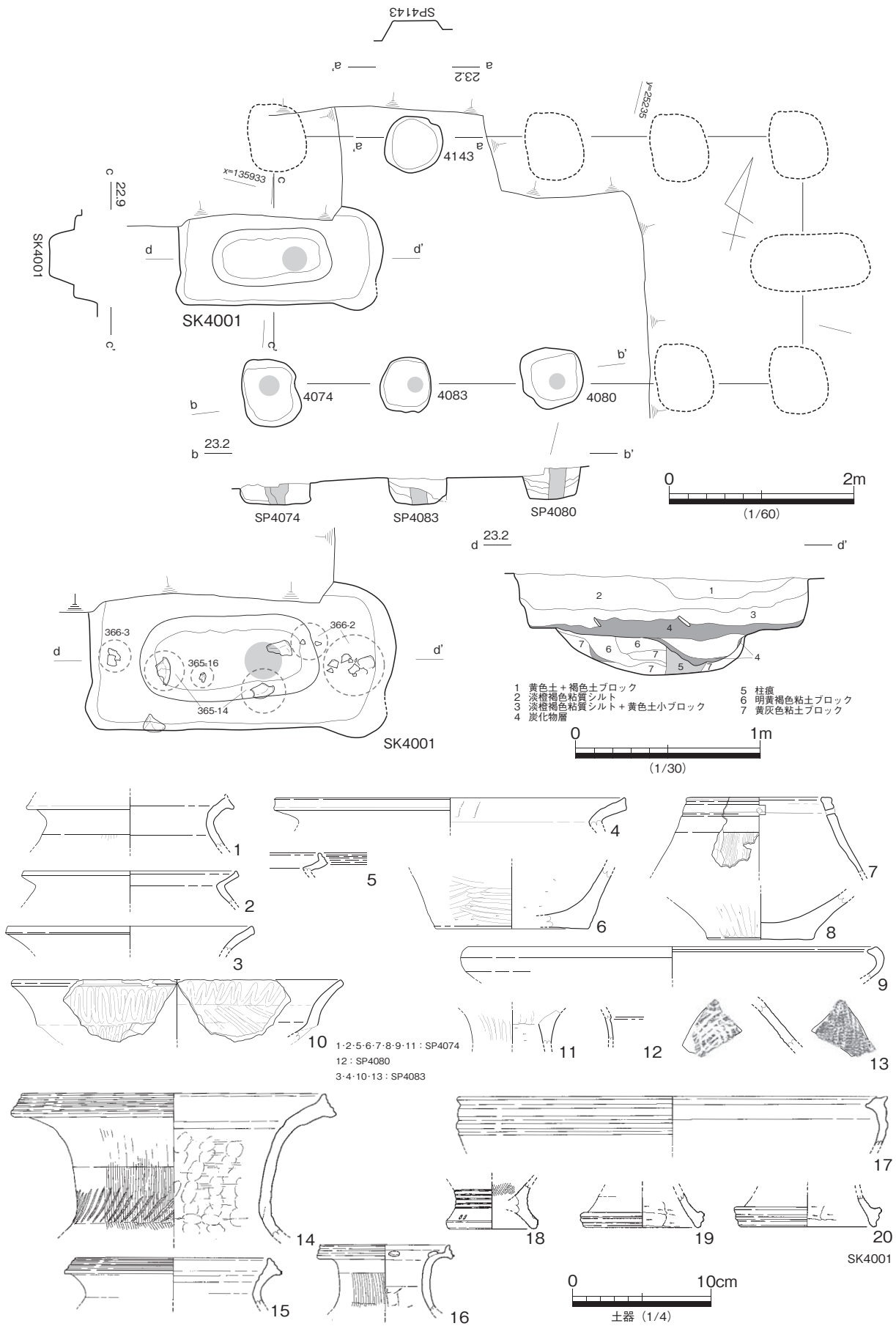


図 365 J 区 SB4001 平・断面・出土遺物 (1)

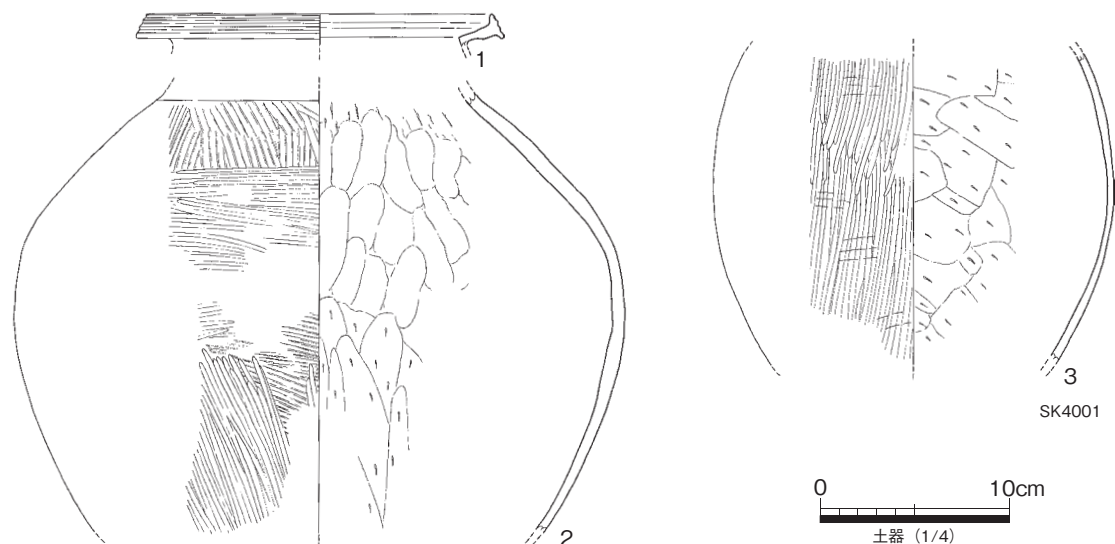


図 366 J区 SB4001 出土遺物 (2)

想定できる。2条の並行する溝の配置から布掘建物が想定できるものの、埋め戻し土と関係が把握できる状態で柱痕の確認ができなかった。しかし、L区を含め他の調査区において本遺構に類似した土坑内において柱痕を確認していることから、布掘柱掘り方の可能性を考え建物として提示する。

図 364 は出土遺物である。図 364 の甕胴部片は最大径付近に列点文を施すが、本地域で一般的なハケ原体やヘラ状工具によるものとは異なっており、文様の端部が「コ」字状に静止する。地域を特定する属性としては不安定であるが、施文状態から土佐地域からの搬入・模倣土器として提示しておく。

甕 (図 364-2) の形態や鉢 (図 364-4) などから、本建物は弥生後期前半新段階の所産として推定しておく。

J区 SB4001 (図 365・366)

J区北東部で検出した掘立柱建物である。現状で梁間2間(2.8m)×桁行2間(3.1m)の柱構造をもち、建物主軸は座標北から76°東偏する。東側で西側に対応する棟持柱を検出していないことから、桁行は更に伸びる可能性が高い。西側梁間の棟持柱の位置にあるSK4001は、上層が隅丸長方形の大きな掘り方をもち、上層の底面に炭化物層の堆積が確認されている。上層と下層間には明確な不整合が確認されており、両者は時間差をもち機能が異なると考えられよう。上層の平・断面形や埋没土の状況は、貯蔵穴としての機能を推定できる。下層は長軸1.2m、短軸0.6mの長楕円形に近い掘り方をもち、東寄りに直径約0.3mの柱痕が確認された。柱痕位置は必ずしも梁間柱筋に合致しないが、位置関係から見て棟持柱と考える。上位の貯蔵穴は、本建物の廃絶後に営まれた可能性が高いが、主軸方向が本建物と合致するため、同時に報告しておくこととしたい。

梁間長や桁行の柱間など本遺跡の弥生中期後半から後期前半期で多く見られる掘立柱建物と共通したものといえるが、棟持柱の存在などは希少な事例となる。

図 365-1～13は桁行柱穴列からの出土遺物。図 365-14～20、図 366-1～3は棟持柱SK4001からの出土遺物である。桁行柱穴列からの出土遺物は、弥生中期後半の資料の他に、後期前半期まで下る甕 (図 365-1～5) や高杯 (図 365-10) がみられる。高杯 (図 365-10) は外面に焼成破裂痕が確認できる。須恵器甕 (図 365-13) 小破片は、上位からの混入資料である。SK4001出土資料は弥生中期末葉を主体とし、

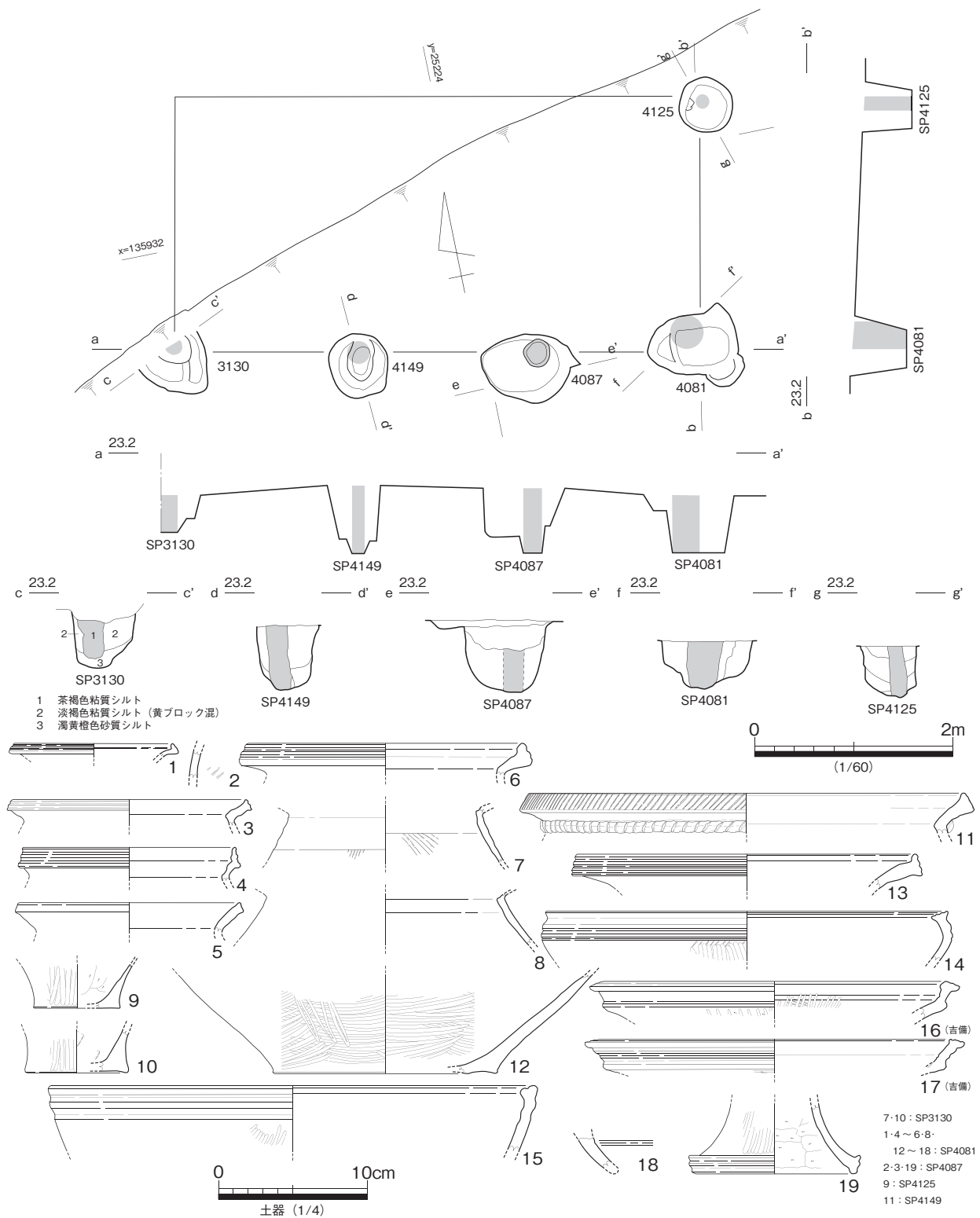


図 367 J区 SB4002 平・断面・出土遺物

壺胴部(図 366-2)甕胴部(図 366-3)など後期前半期まで下る資料が散見される。桁行柱穴列出土遺物から、本建物は弥生後期前半中段階に帰属するものと推定しておきたい。

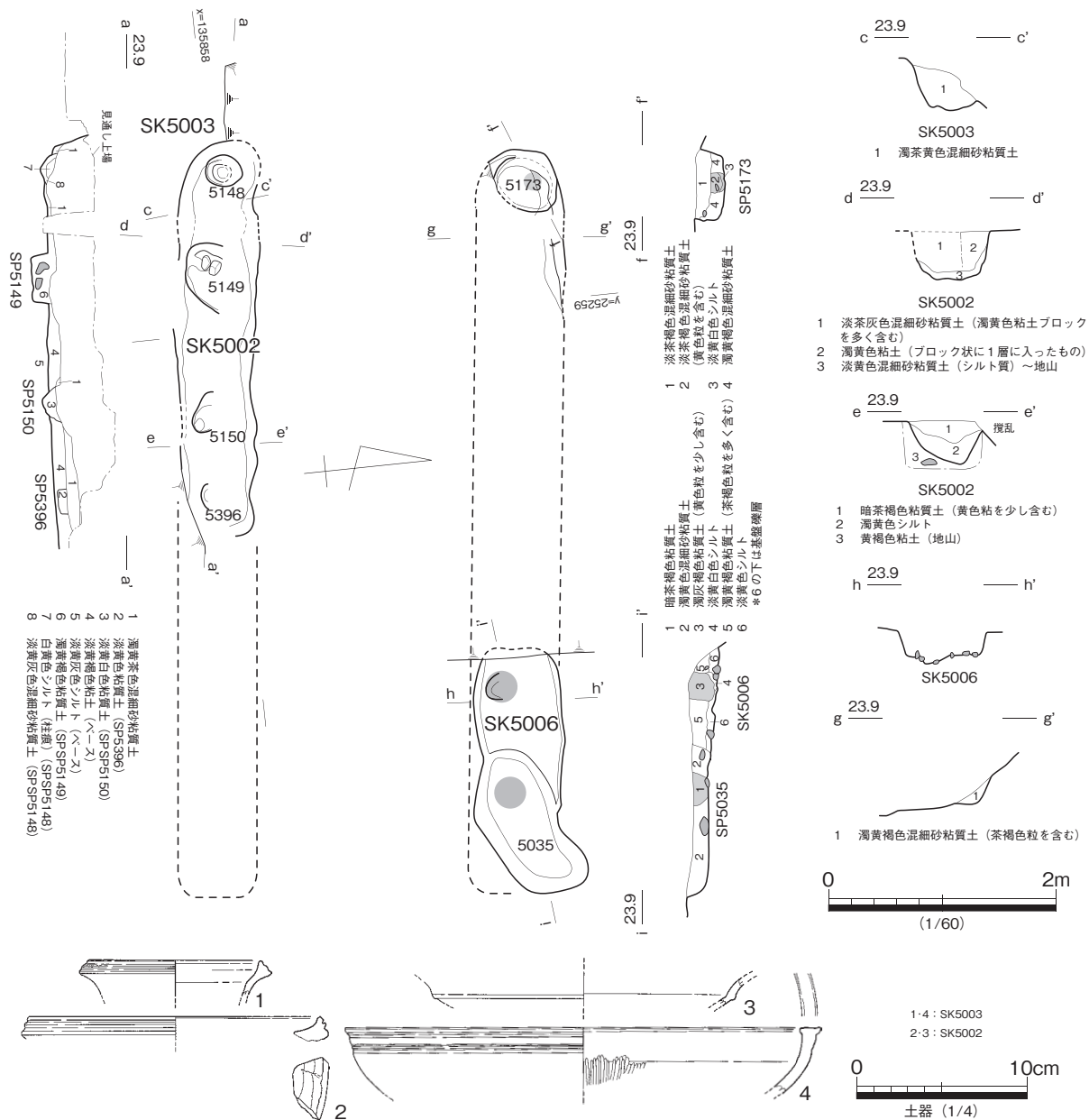


図 368 L区 SB5007 平・断面・出土遺物

J区 SB4002 (図 367)

J区北部で検出した掘立柱建物である。北側の桁行が調査区外となるが、現状で梁間1間(2.6m)×桁行3間(5.3m)を測り、建物主軸は座標北から80°西偏する。柱穴掘り方は円形乃至楕円形を呈するものが多く、柱痕は直径約20～25cmと弥生時代の掘立柱建物の中では大形であり柱通りも良好である。南東隅柱のみ柱材が抜き取られており、抜き取り穴から多くの土器が出土している。出土土器(図367-1.4.5.6.8.12～18)は、本建物の廃絶年代を示すと考えられる。北西側の調査区外は、第29次調査地となっており、向後の報告によって詳細な規模が確定されるだろう。

柱穴からの出土遺物(図367-1～19)は、弥生中期後半期から後期前半期のものが見られる。中でも図367-4.5の甕口縁は時間的に最も後出すると考えられるため、これらの出土遺物の年代観から本建物

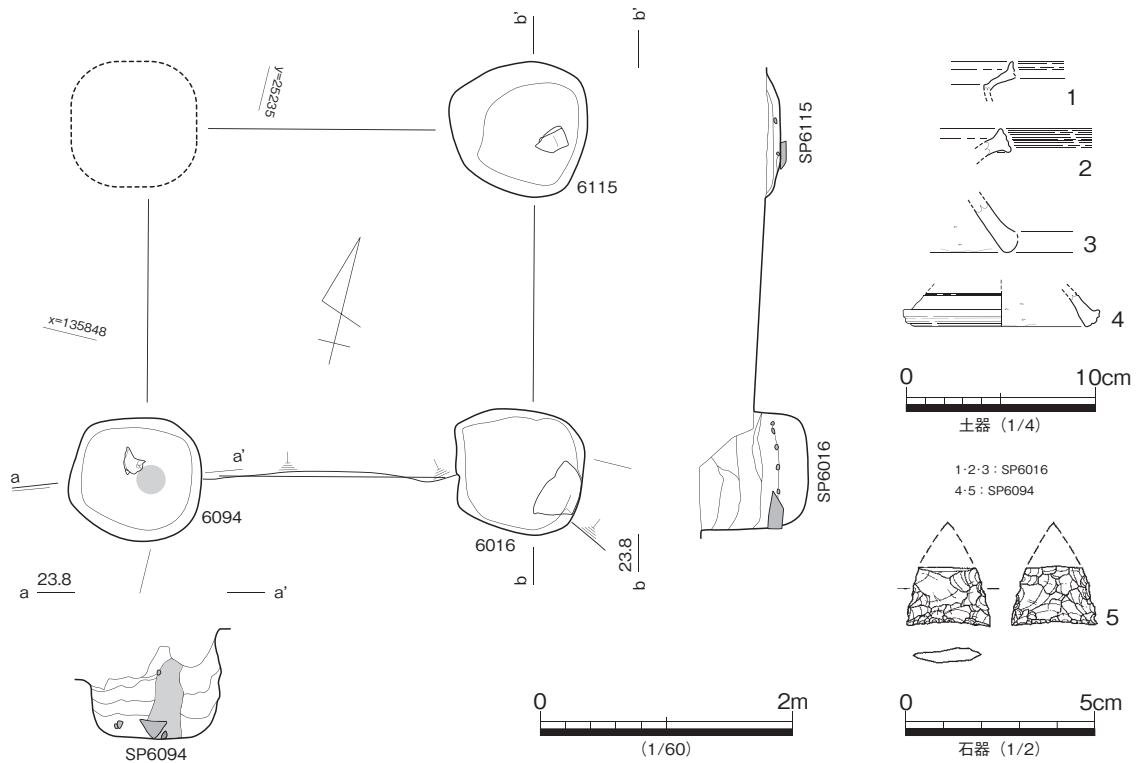


図 369 M 区 SB6001 平・断面・出土遺物

は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定する。

L 区 SB5007 (図 368)

L 区南東部で検出した建物であり、布掘柱掘り方をもつ。東側の桁行が更に伸びる可能性が考えられるが、梁間 1 間 (2.7m) × 桁行 7 間 (5.5m) の柱構造をもち、布掘り状の掘り方をもつ。南側の掘り方は、当初土坑 SK5002.5003 として調査を進めており、離水の進んだ黄色粘土ブロックをある程度除去した段階で底面において SP5148 等の柱穴状の掘り方が並ぶ状況が確認された。縦断面の記録が取れていないが、これらの柱穴は上面検出や掘り方中位では確認できなかった。布掘の掘り方とは先後関係をもつ可能性があるが、底面に直線的に並ぶ状況からみて布掘柱掘り方に伴うものとする。

北側の掘り方については、攪乱坑で分断されており、残存状態が悪い。西端に位置する SP5173 と東端と見られる SK5006.SP5035 として個別に遺構番号を付与して調査を進めた。しかし、調査の結果、SK5006 と SP5035 に先後関係がみられない点が判明したことや、底面において並ぶ柱痕を確認したことから、両者を北側の桁行を構成する布掘柱掘り方として建物復元を行った。また、柱痕の周囲の底面には、一回り大きな掘り込みがあり、布掘の掘り方掘削時に柱材より大きく底面を掘削し、据付位置を決定していた可能性が高い。梁間長については、弥生時代通有の掘立柱建物と共通するが、桁行の柱間が若干短いなど相違点もあり、異なった上部構造を想定すべきかもしれない。

出土遺物は、弥生中期後半期から後期前半期にかけての時間幅がみられるが、時期的に最も後出する高杯杯部小片 (図 368-3) を根拠として、本遺構の帰属時期を弥生後期前半古段階と捉えておきたい。

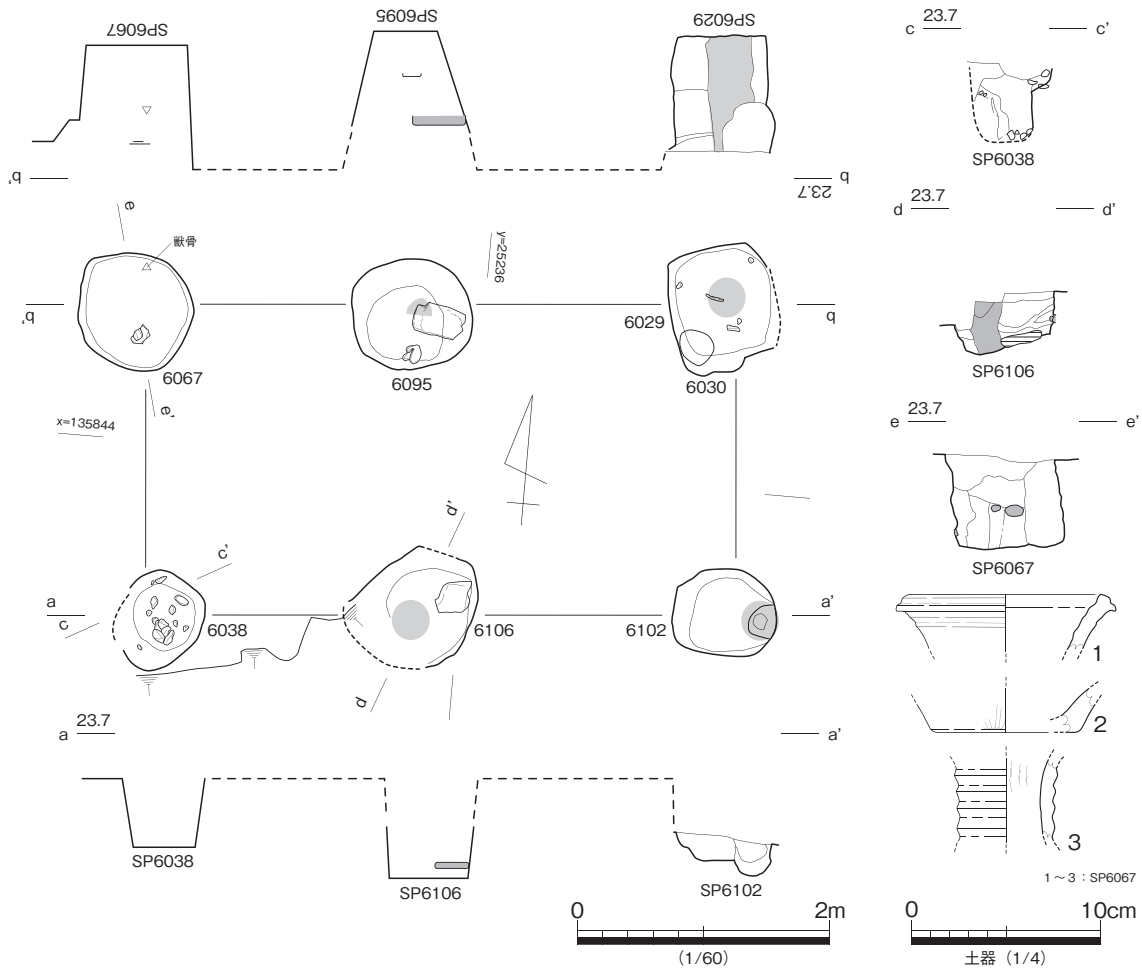


図 370 M区 SB6002 平・断面・出土遺物

M区 SB6001 (図 369)

M区南部で検出した掘立柱建物である。弥生前期埋没のSD6009を切り、弥生後期前半期のSH6006に切られる。北西隅柱を攪乱坑で滅失するが、現状で、梁間1間(3.1m)×桁行1間(2.8m)の柱構造をもつ。1間×1間の柱構造とした場合、平面形が正方形に近く弥生中期後半期に見られる1間×1間の建物とは異なるため、南北のどちらかに桁行が伸びる可能性が高いが、検出することができていない。各柱穴は一辺が1m前後を測る大形の方形のものであり、直径約25cmの黒褐色粘土に置換した柱痕下部に板状流紋岩の根石を据えつけるなど、入念なものである。

柱穴出土遺物の年代観や遺構の切り合いによる先後関係、SP6094から出土した器台脚(図369-3)の形態から、本建物は弥生後期前半期古段階に属するものと考えたい。

M区 SB6002 (図 370)

M区南部で検出した掘立柱建物である。弥生後期前半期のSH6006に切られる。梁間1間(2.5m)×桁行2間(4.7m)の柱構造をもつ東西棟の建物であり、各柱穴は方形と円形の間隔的な平面形をもつ大形柱穴から構成される。北東隅柱の柱痕がやや大きく見えるが、柱抜き取りが多くの柱穴で行われており、底面に残る柱のあたりから見て、直径約25cmと推定できる。また、流紋岩の板石を根石として利

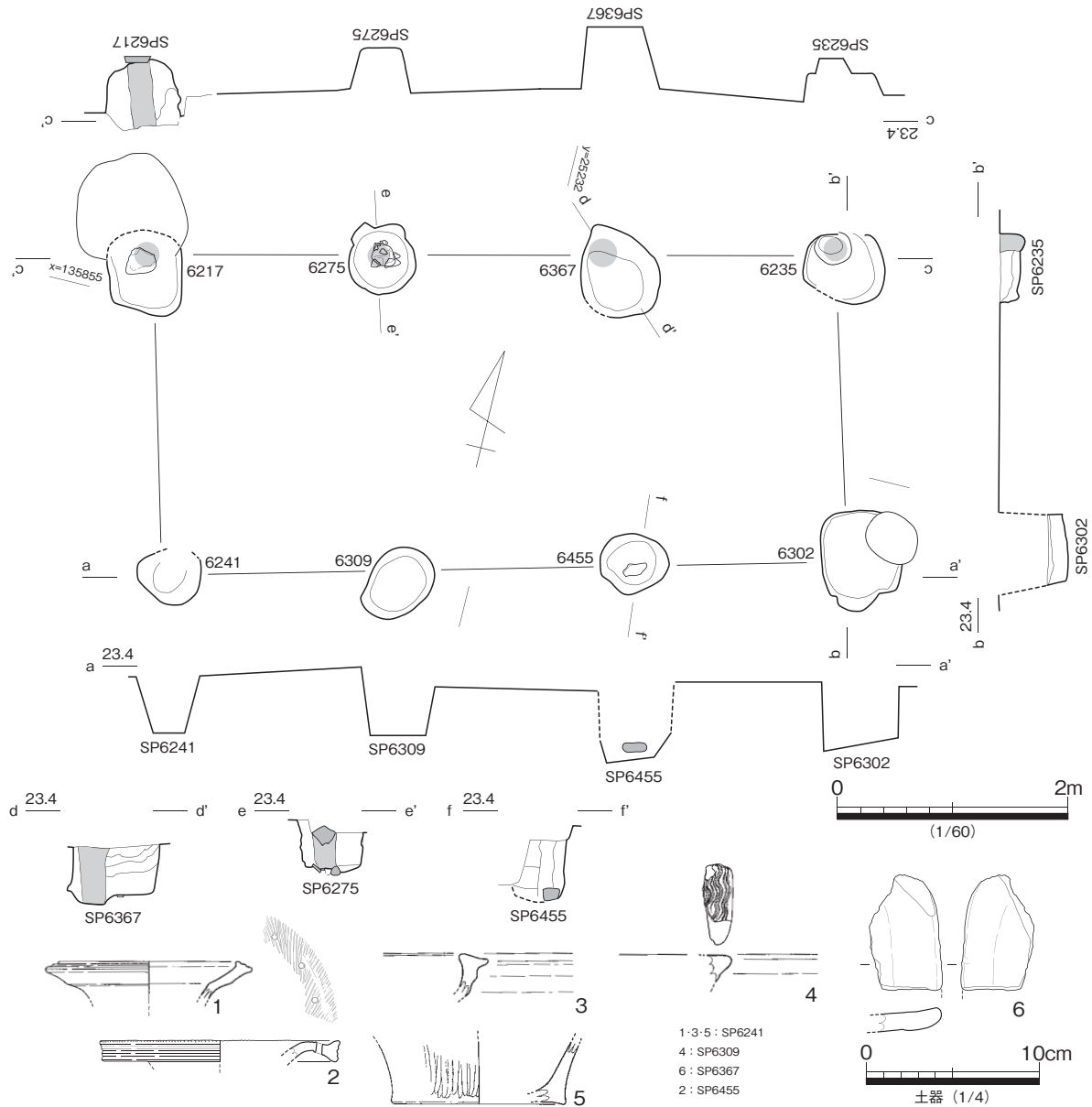


図 371 M 区 SB6007 平・断面・出土遺物

用するものも確認された。

遺構の切り合いによる先後関係や、出土遺物の内、長頸壺口縁（図 370-1）の形態から見て、弥生後期前半古段階の所産と見られるが、同時期とした SB6001 とかなり接近した位置にあるが、主軸方向は互いに直交したものであり、上部構造如何によっては、L 字状に配置されていた可能性も否定できない。

M 区 SB6007 (図 371)

M 区北部で検出した掘立柱建物である。SB6006 と同様に、上層を古墳後期の竪穴住居群で大きく削平され、弥生中期後半期の SB6006 を切り込む。SB6006 との切り合い関係を誤認したまま調査を行ってしまっているが、現状で梁間 1 間 (2.7m) × 桁行 3 間 (6.0m) の柱構造をもち、建物主軸は SB6006 とほぼ共通する東西棟である。南西隅柱を除いて隅柱は方形、南北桁行はやや小形の円形柱穴となるな

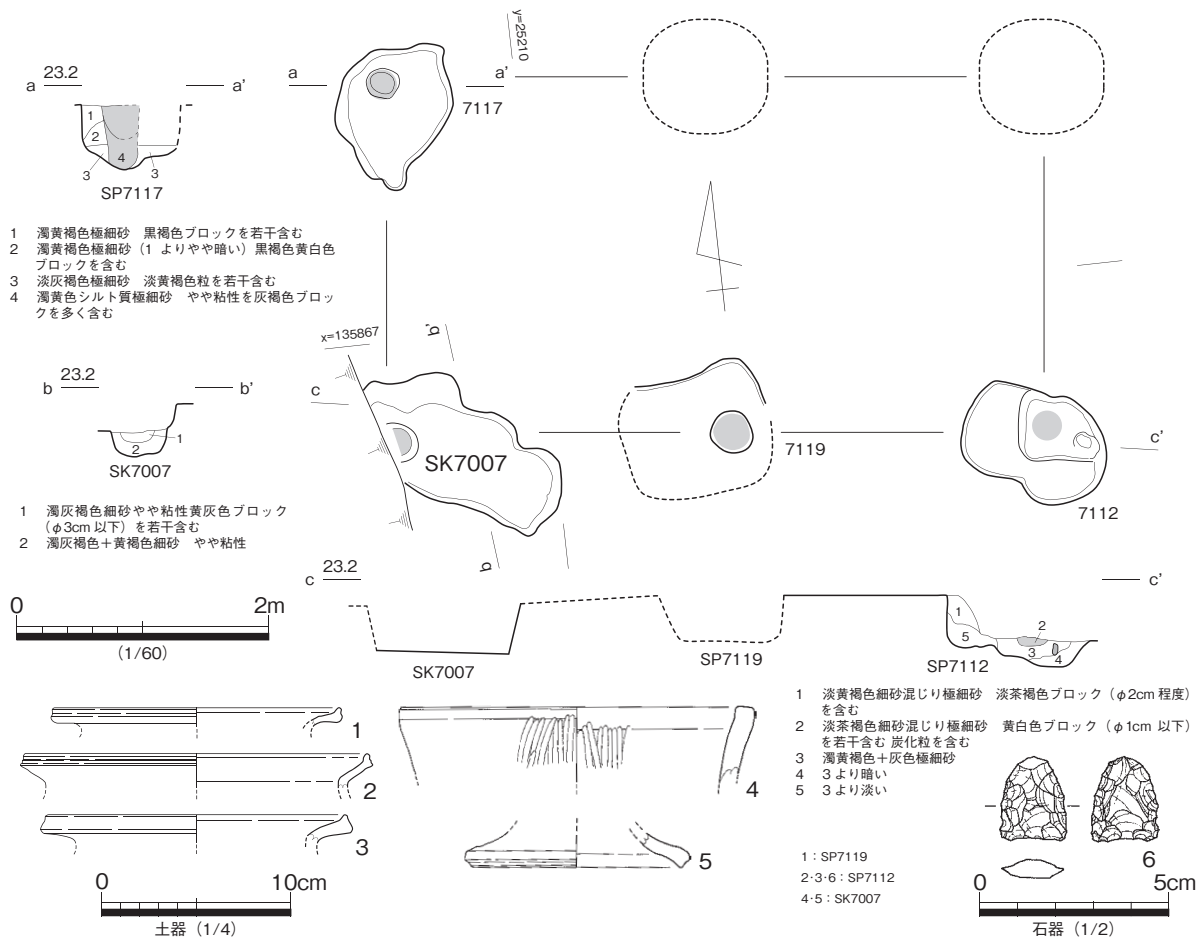


図 372 N 区 SB7001 平・断面・出土遺物

ど、柱穴の規模や形態に差異が目立つ。弥生中期後半期の掘立柱建物に見られる規範が弛緩している状況と考えられよう。

出土遺物は、弥生中期後半期のものが主体であるが、SB6006 からの遺物の混入や桁行柱穴規模や形態を考慮すると、本建物は弥生後期前半中段階に帰属するものと捉えておきたい。図 371-6 は古代の土師器長胴甕の鏝部片であり、混入品である。

N 区 SB7001 (図 372)

N 区中央部で確認した掘立柱建物であり、弥生終末期の SH7003.7005 に切られる。北側の桁行の柱列の一部を攪乱坑によって滅失するが、梁間 1 間 (2.9m) × 桁行 2 間 (5.2m) の柱構造を想定できる。SK7007 とした南西隅柱の平面形が乱れる点は、柱材の抜き取りに伴うと解釈した。柱穴の平面形は方形を基調とし柱痕は直径約 20cm を測る。柱穴平面形が歪なものも含まれるが、大型の掘り方をもつ点は共通しており、弥生後期前半期の掘立柱建物の特徴をもつものといえよう。

図 371-1 ~ 5 は出土遺物である。弥生中期後半期のものが多いが、甕 (図 372-3) の形態や凹線文の退化傾向からみて、本建物は弥生後期前半中段階に廃絶したものと推定しておきたい。

N 区 SB7002 (図 373)

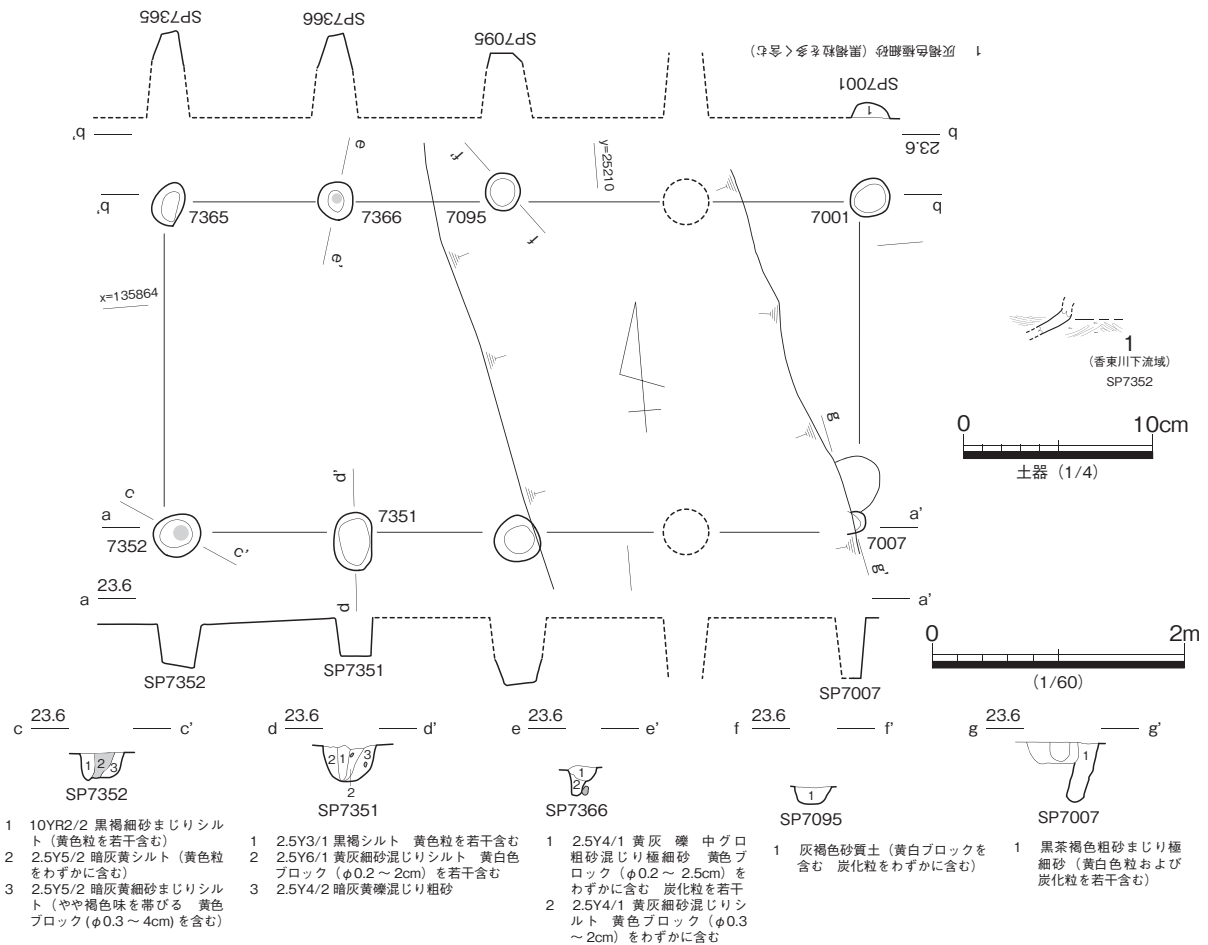


図 373 N 区 SB7002 平・断面・出土遺物

N 区南部で検出した掘立柱建物である。報告書作成段階で柱穴配置から建物復元を行っている。一部攪乱坑で滅失する柱穴が存在するものの、梁間 1 間 (2.7m) × 桁行 4 間 (5.5m) の柱構造を復元することが可能である。弥生後期後半期の SH7305 を切り、弥生終末期の SH7004.7005 に切られる。弥生中期後半から後期前半期のものと比較して、梁間長などは共通するが柱穴掘り方が小さくなり桁行の柱間が短くなるなど、柱構造の様相が異なる。

図化可能な出土遺物は、SP7352 から出土した高杯または鉢 (図 373-1) のみであり、遺物からの時期決定は難しい。ここでは、周辺遺構との切り合い関係を考慮し、本建物の帰属時期を弥生後期後半新段階と推定しておきたい。

O 区 SB8002 (図 374)

O 区西部で検出した掘立柱建物である。古墳後期の SH8001 に切られ、弥生後期後半期の SH8007 を切り込む。西側の桁行の柱列の殆どを攪乱坑によって滅失するなど、復元に不確定要素が多く存在するが、柱穴分布などを優先し報告書作成段階で建物として復元した。

図 374-1 ~ 7 は出土遺物である。弥生中期後半期から後期後半期の資料が主体を占めるが、古墳前期まで下る備讃Ⅳ式段階の製塩土器脚 (図 374-7) がみられる。本遺跡で希少な古墳前期の掘立柱建物の可能性が高い。

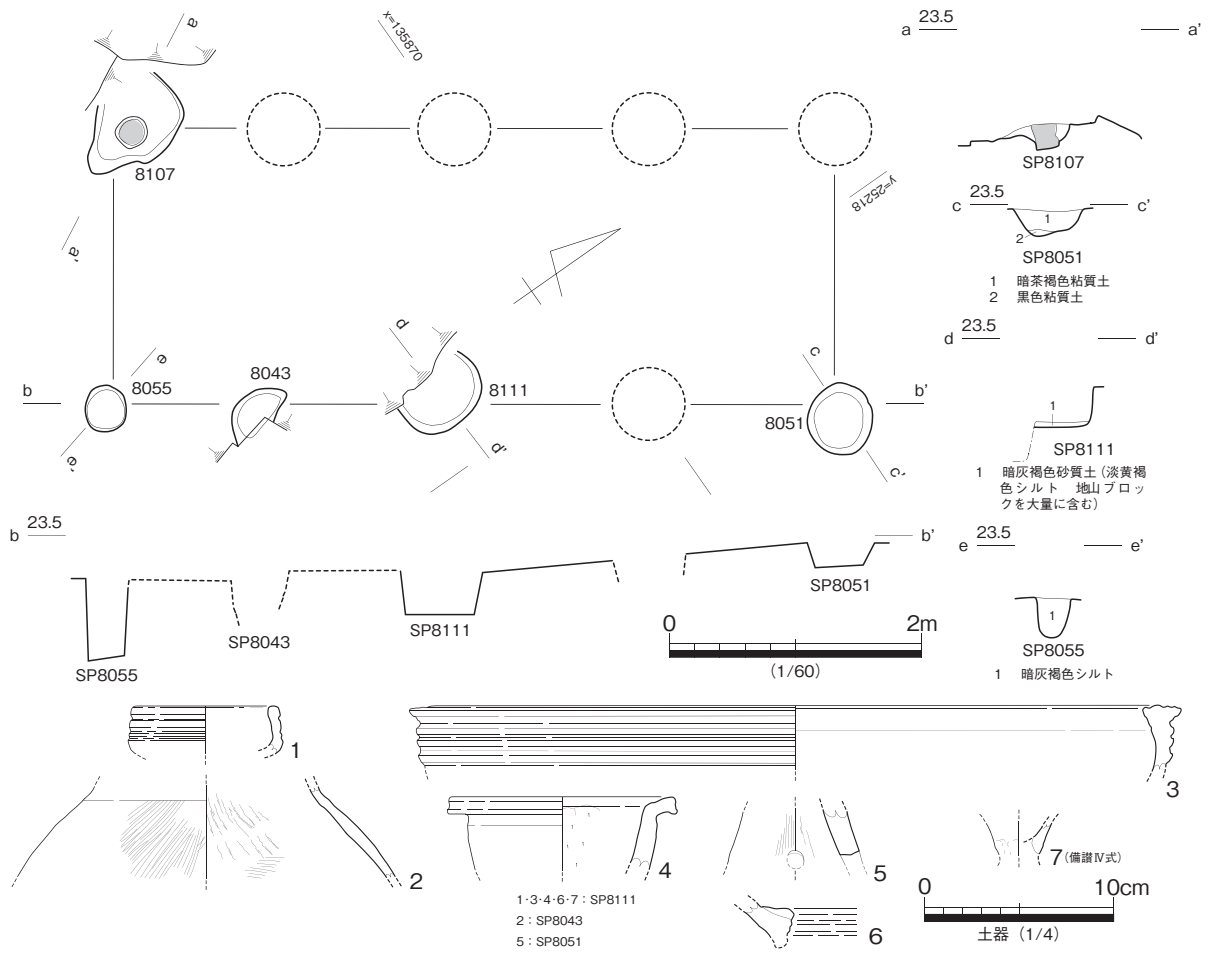


図 374 O区 SB8002 平・断面・出土遺物

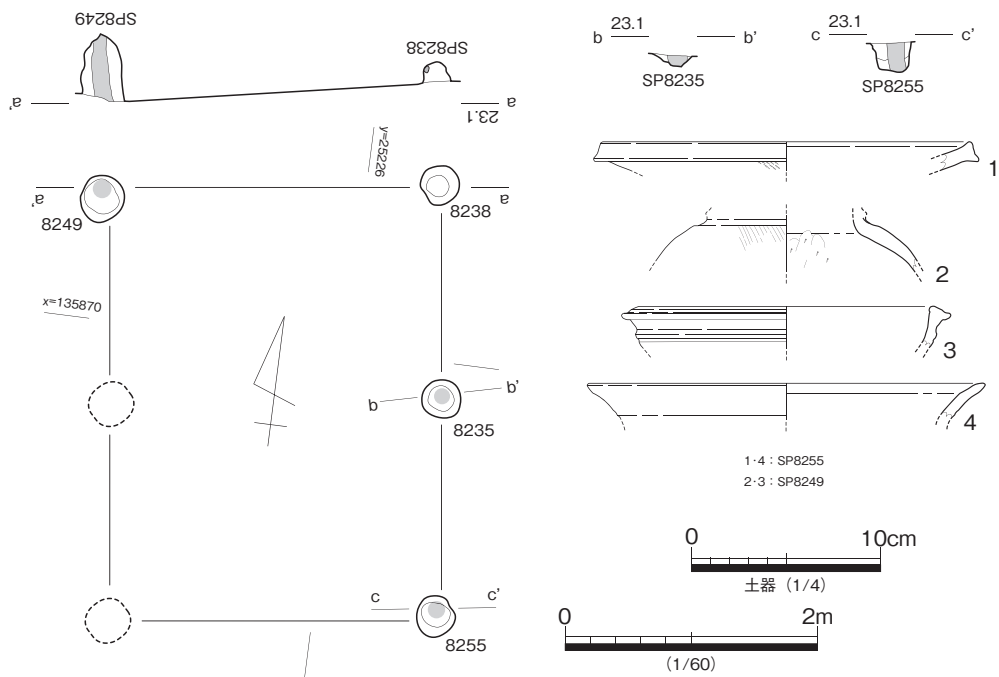


図 375 O区 SB8004 平・断面・出土遺物

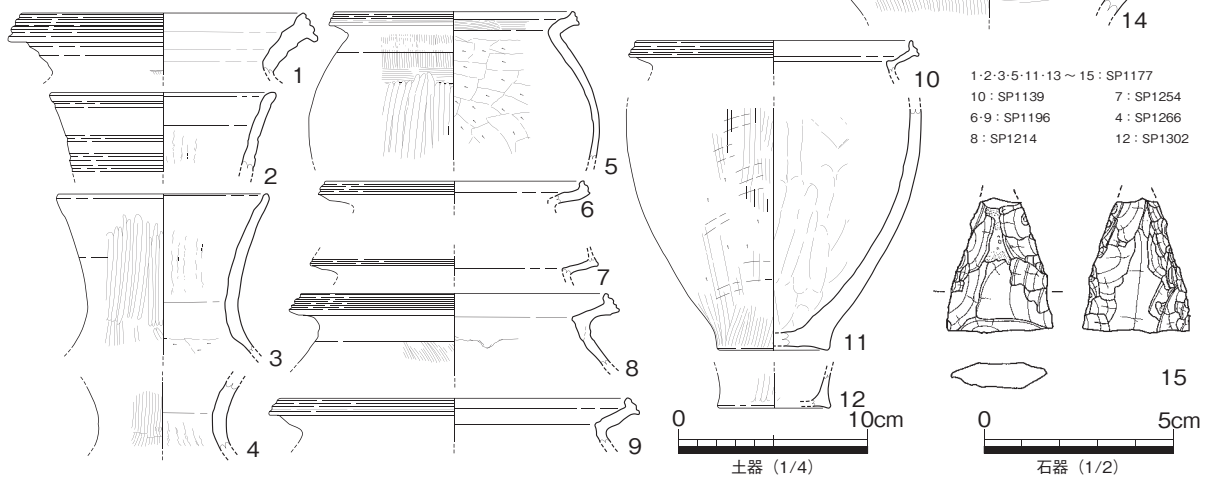
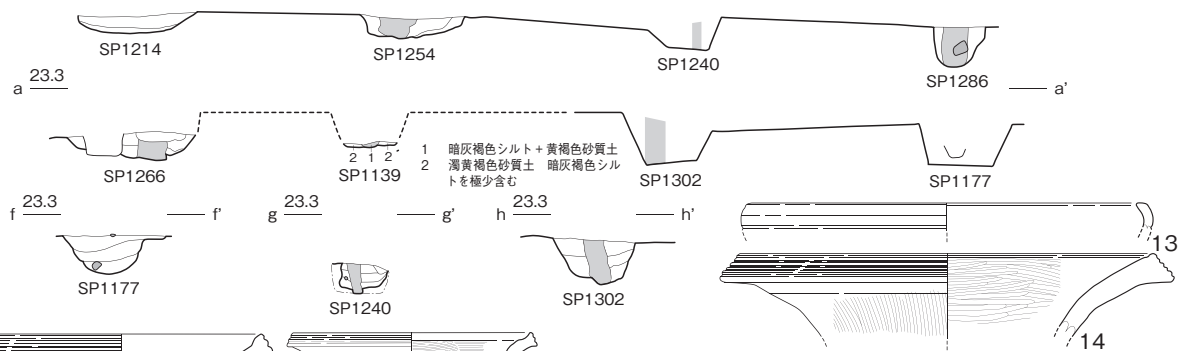
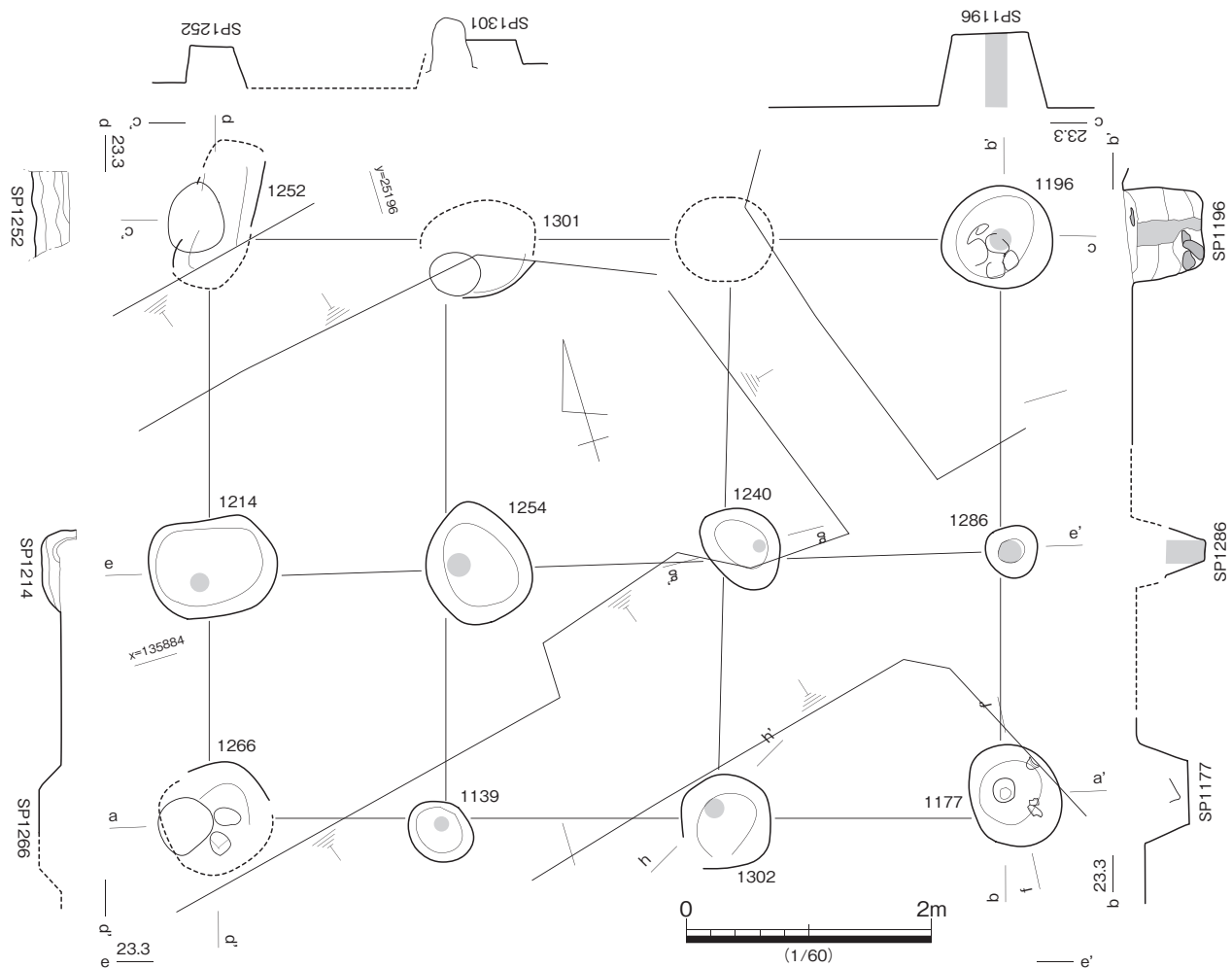


図 376 T区 SB1114 平・断面・出土遺物

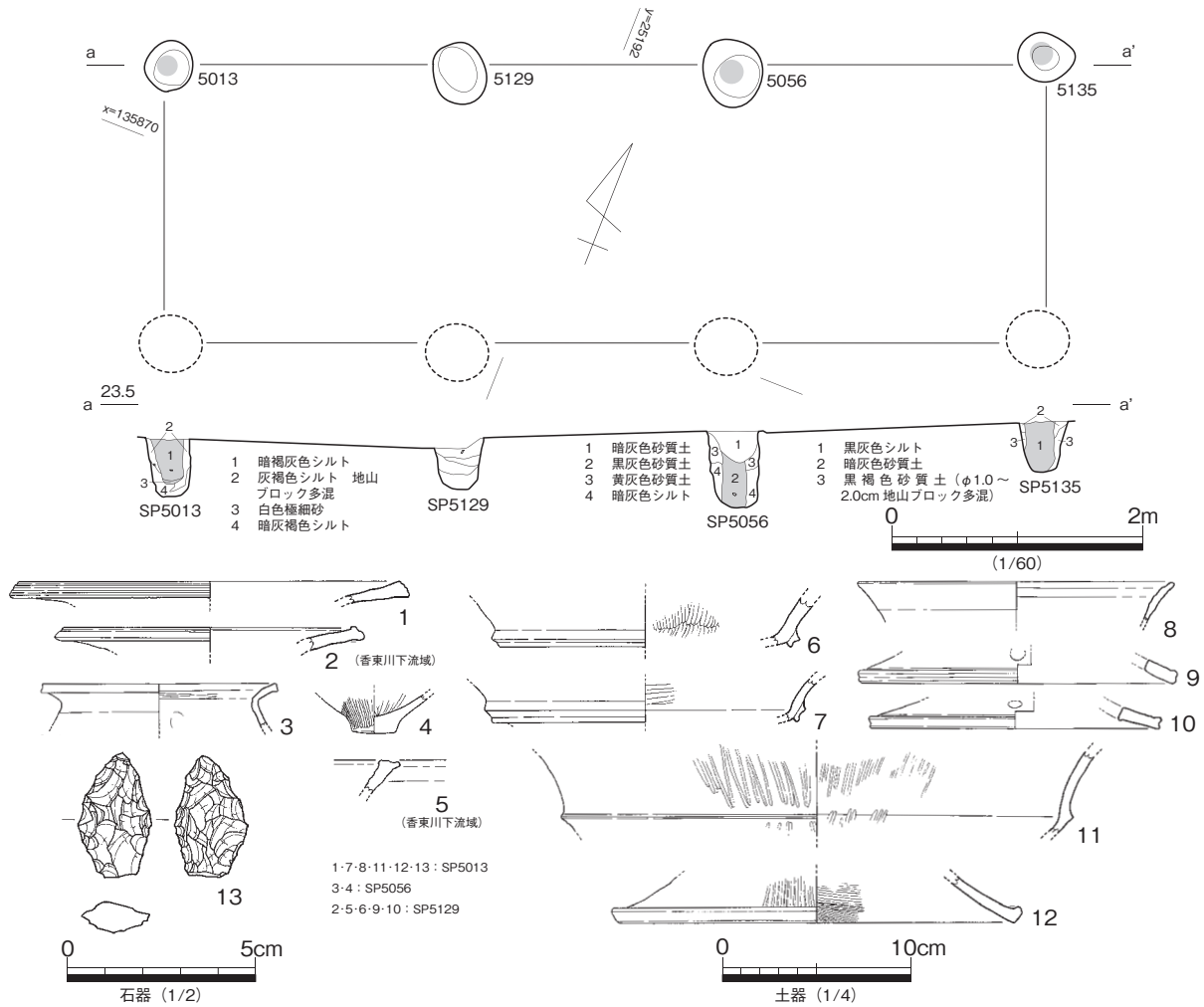


図 377 U区 SB5501 平・断面・出土遺物

O区 SB8004 (図 375)

O区北東部で検出した掘立柱建物である。西側の桁行の確認ができていないが、梁間1間(2.6m)×桁行2間(3.4m)の柱構造を復元できる。北西隅柱であるSP8249はSH8203の床面において検出しており、先後関係をもつ可能性が高いが、現地調査で切り合い関係の確認はできていない。出土遺物の様相からは、本建物が若干後出する可能性が高い。弥生中期後半期の建物と比較して、柱穴が小形の円形となるなど、弛緩した状況が窺える。

出土遺物の内、高杯口縁(図 375-4)の形態から、本建物は弥生後期後半新段階に属する可能性が高い。

T区 SB1114 (図 376)

T区中央部で検出した掘立柱建物である。弥生終末期のSH1008.1019、同後期前半期のSH1023に切られ、弥生中期後半期のSH1096を掘り込む。攪乱坑によって北側桁行などの柱穴の上部が破壊されるが、外回りが梁間2間(4.8m)×桁行3間(6.8m)の柱配置が行われている。身舎内部にもほぼ同規模の柱穴が2基存在することから総柱建物と考えられる。また、東梁間のSP1286、南桁行のSP1139

が小振りな柱穴となるが、攪乱によって上部が削平されているためであり、柱のあたりは側柱と差がみられない。また、全体的にみて柱穴の深度が浅いが、建物上位の全体が弥生後期以降の住居構築に伴ってかなりの削平を被っていることは考えておくべきだろう。埋没土の特徴は、黄色粘土ブロックを主体とした裏込土に、直径約 25cm の黒褐色粘土に置換した柱痕が確認できる。北東隅柱 SP1196、南西隅柱 SP1266 には詰石と見られる拳大程度の砂岩礫が多くみられた。

時期比定に良好な資料としては、南東隅柱 SP1177 は柱材が抜き取られており、その際に投棄された一定量の土器片がある。図 376-5.11 の甕が示すように、下限となる時期は弥生後期前半期でも古段階の所産である。他の柱穴の出土遺物の帰属時期の下限も同様であることから、本建物は弥生後期前半古段階に廃絶したものと考えられる。この時期比定が動かないとすれば、本地域のみならず中部瀬戸内地域でも数少ない弥生時代の総柱建物となるであろう。

U 区 SB5501 (図 377)

U 区北部で検出した掘立柱建物であり、古墳時代の SH5008 を切り込む。攪乱によって遺構面が帯状となる箇所で見出ししており、桁行の柱穴列から建物として復元した。このため、主軸方向の推定はできるが、対面する桁行の柱列位置や梁行長は推定の域にとどまる。柱穴の平面形は中形の円形であり、直径 20cm の柱痕が確認されるものもある。柱間は 2.2 ～ 2.5m と弥生時代の掘立柱建物に共通しており、隅丸方形の平面形など、弥生後期以降に確認される特徴を備える。

図 377-1 ～ 13 は出土遺物である。図 377-6.7 は杯部に断面方形の突帯施す装飾高杯であるが、現状で赤色顔料の塗布は確認できない。単口縁の甕 (図 377-3) 高杯 (図 377-6.7.11) の形態から、本建物は弥生後期前半新段階に帰属するものと推定しておきたい。

U 区 SB5502 (図 378)

U 区北部で検出した掘立柱建物である。現状で梁間 1 間 (2.4m) × 桁行 2 間 (4.2m) の柱構造を認めるが、周辺の攪乱坑との関係から、桁行は伸びる可能性がある。柱穴の平面形は、隅丸方形に近いが、南西隅柱の SP5177 が円形を呈するなど、弥生中期後半期から後期にかけての過渡的な様相を示すと考えられる。

図 378-1 ～ 13 は出土遺物である。弥生中期末葉から後期初頭の資料が大半を占めるが、甕 (図 378-6.8) 器台 (図 378-12) など時間的に後出する資料が含まれる。新しい一群の資料を柱抜き取りに伴うものと推定し、本建物は弥生後期前半中段階に廃絶したものとして推定しておく。

U 区 SB5504 (図 379)

U 区南東部と N 区に跨って検出した掘立柱建物である。現状で柱穴の平・断面が捉えられるのは SP5172.SX7304 のみであるが、両者とも裏込土と見られる埋土が見られることから、掘立柱建物として復元した。SP5172.SX7304 を梁間として捉えているが、弥生時代の掘立柱建物の中では、短い部類となる。桁行の長さについては、推定する材料に乏しい。また、位置的に SH5011 と重複するが、先後関係を示す検討できる材料に欠ける。

図化可能な出土遺物が見られないため、周辺遺構の状況から、ここでは SH5011 を切られるものとして捉え、弥生後期前半古段階の所産と推定しておく。

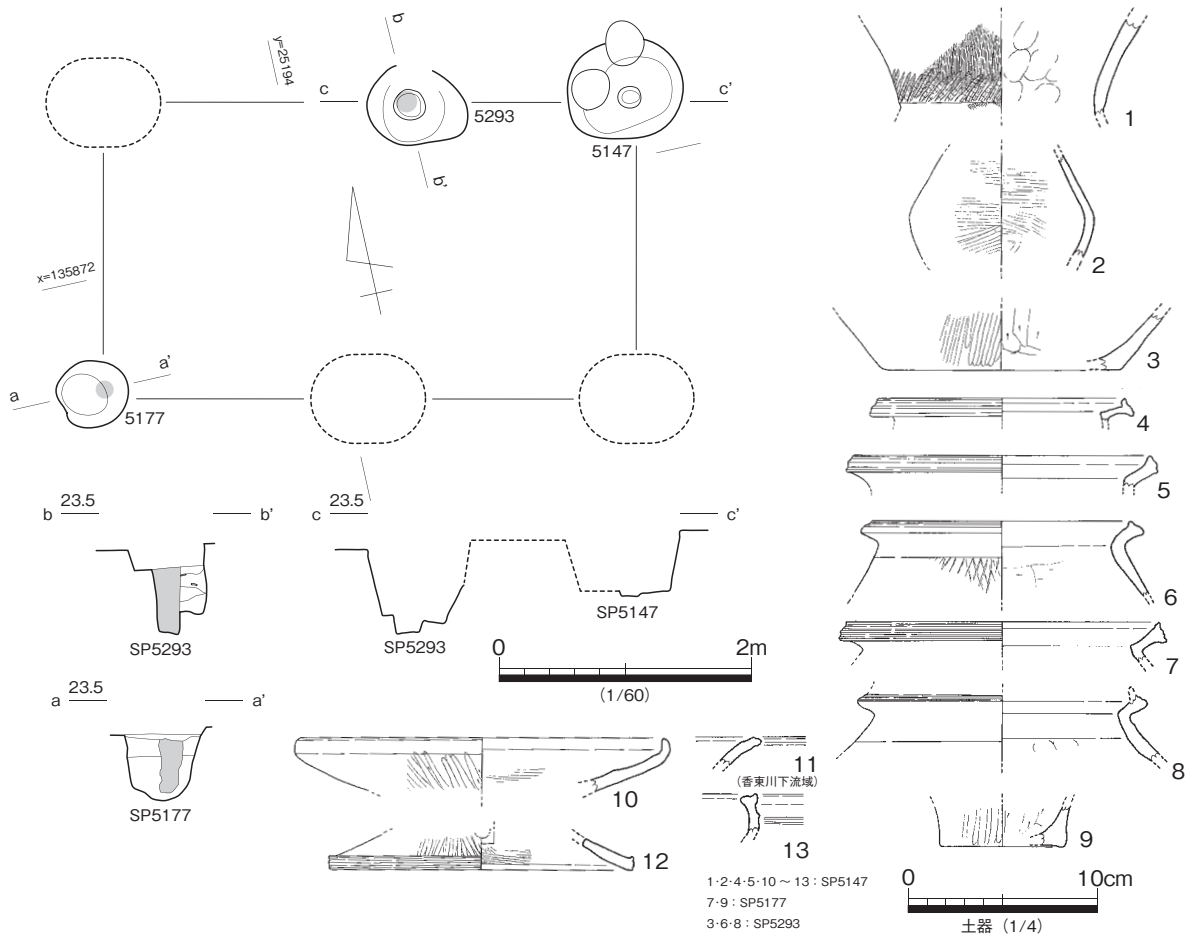


図 378 U区 SB5502 平・断面・出土遺物

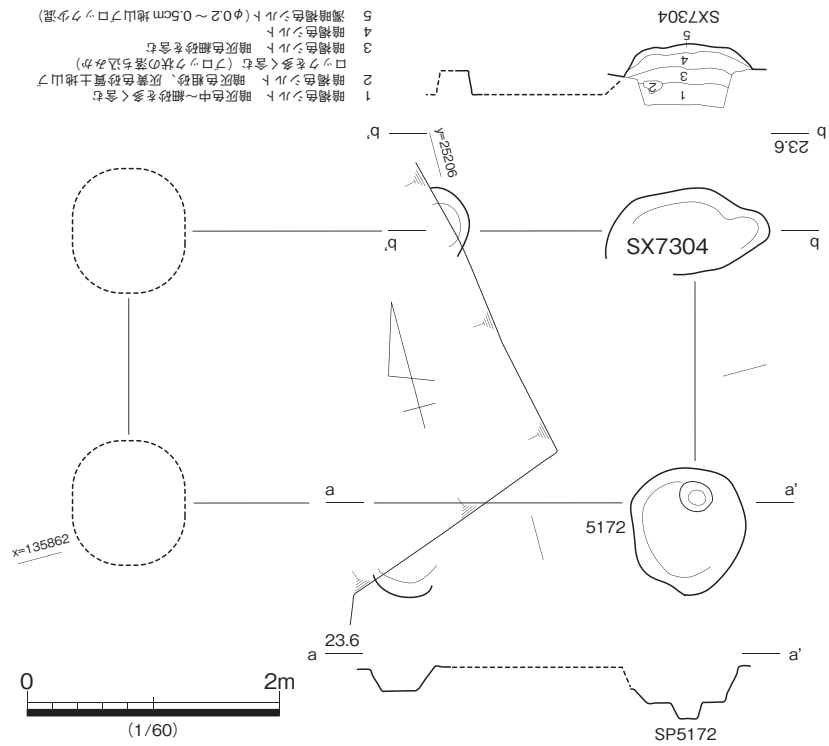


図 379 U区 SB5504 平・断面

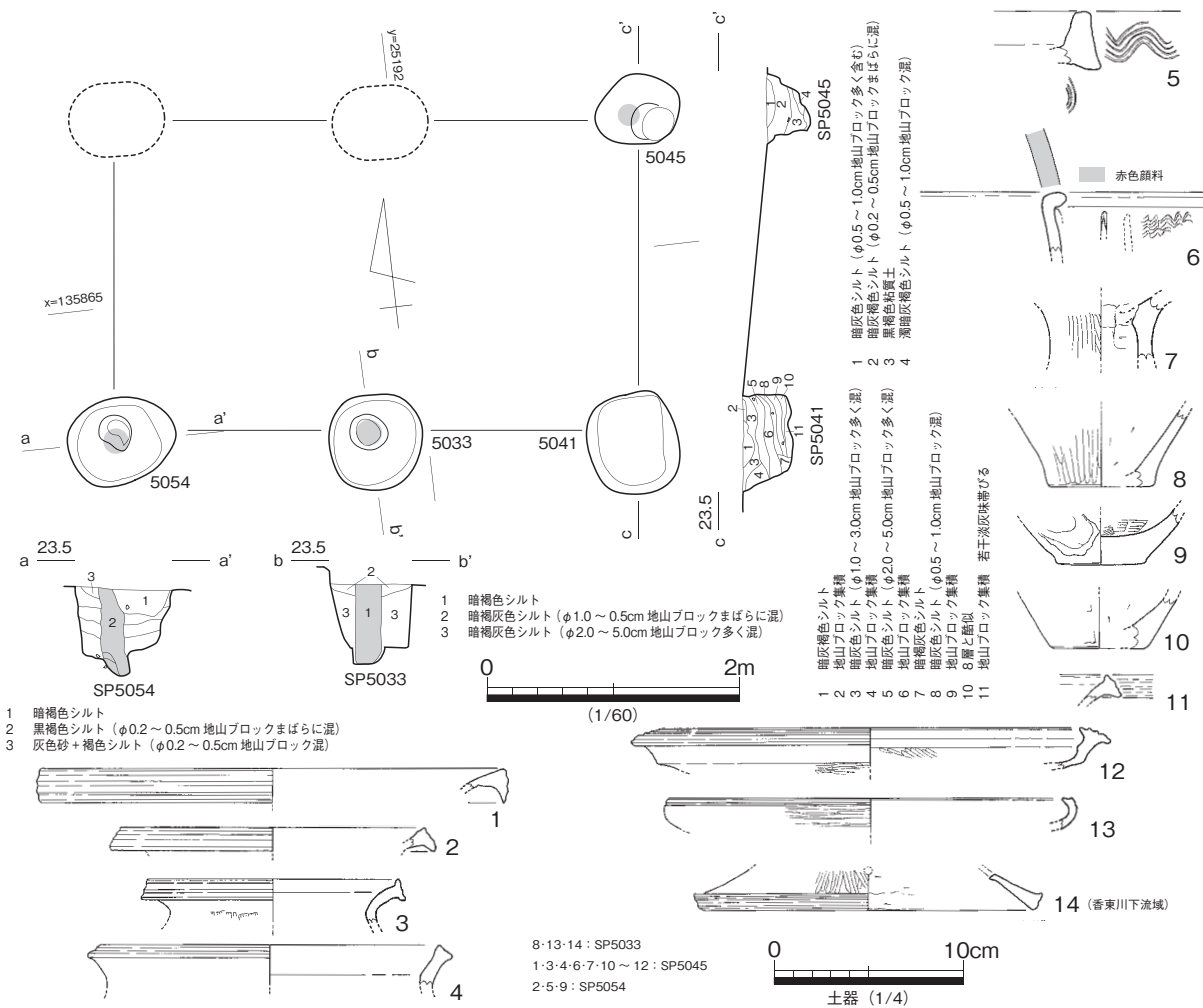


図 380 U 区 SB5506 平・断面・出土遺物

U 区 SB5506 (図 380)

U 区中央部で検出した掘立柱建物である。古墳時代 SH5001、弥生後期後半の SH5007 に切られ、同後期前半期の SH5009 を切る。梁間 1 間 (2.5m) × 桁行 2 間 (4.2m) の柱構造をもち、北東隅柱の SP5045 を除いて隅丸方形の掘り方をもつ。柱痕は約 20cm と弥生時代の掘立柱建物に通有の規模をもち、入念な裏込土を施す。

図 380-1 ~ 14 は本建物からの出土遺物である。後期前半古段階の資料が目立つものの、甕口縁 (図 380-4) 同底部 (図 380-9.10) など時間的に後出する資料が存在する。これらの資料から、本建物は弥生後期前半中段階に廃絶したものと推定しておく。また、重複関係にある SH5009 廃絶直後に構築された建物となる。台付鉢 (図 380-6) は外面に縦位の棒状浮文と波状文を施し、口縁端部上面にベンガラによる彩色を施す。形態や棒状浮文の属性から近畿地方の影響がみられるが、波状文など変容した属性も存在することから、模倣土器と考える。甕底部 (図 380-9) の外面には焼成破裂痕が確認できる。

U 区 SB5507 (図 381)

U 区中央部東寄で検出した掘立柱建物である。北側の桁行 4 間 (6.8m) と東側梁間 1 間 (1.8m) が残存

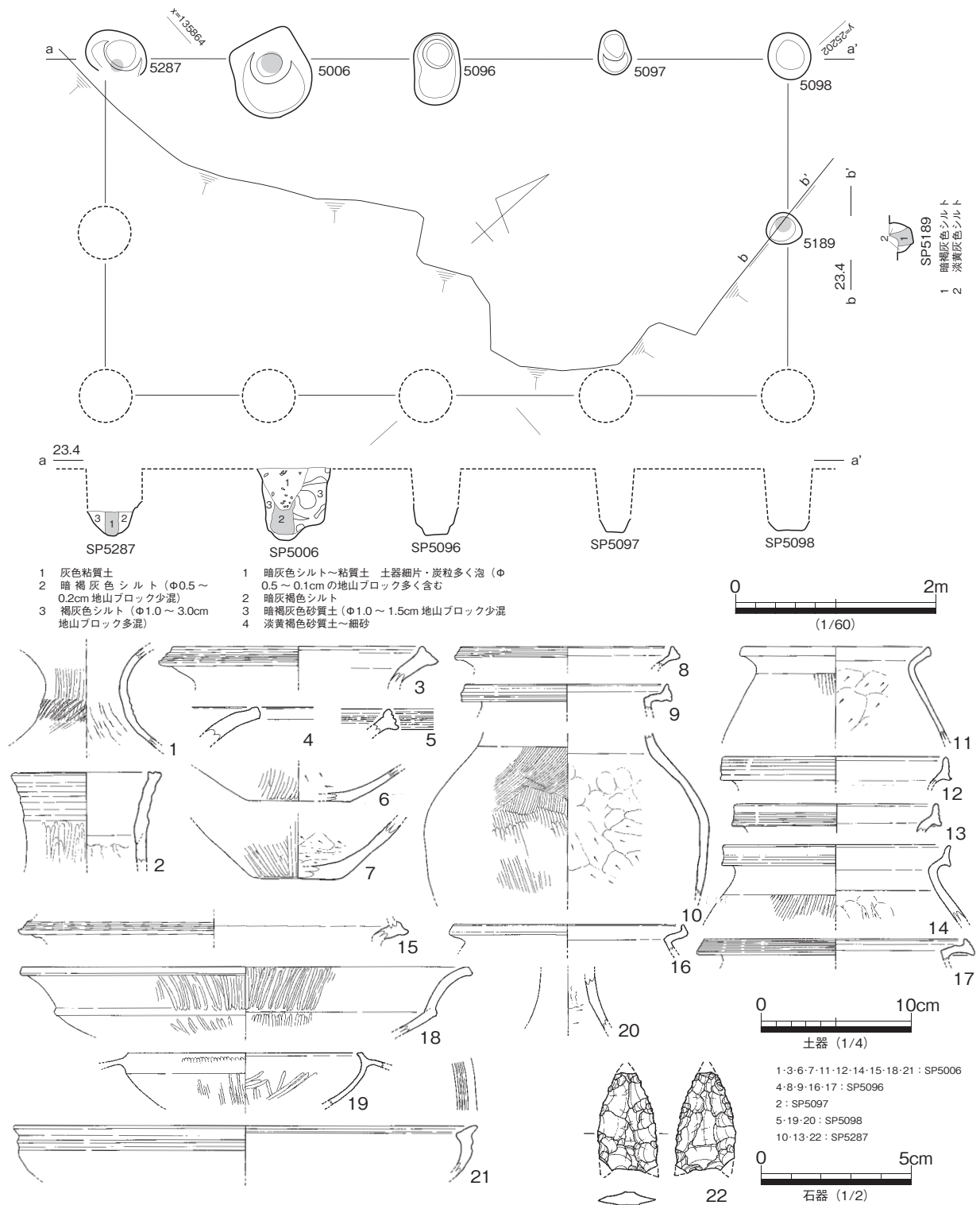


図 381 U 区 SB5507 平・断面・出土遺物

する。梁間については、1間とすると短すぎるため、攪乱坑内に隅柱を想定し2間と推定した。桁行はU区南部に残存する遺構面との関係から、現状の4間を越えることはない。東側の棟持柱となるSP5189がSH7305と重複関係にあるが、現地調査で切り合い関係を把握することができなかった。

また、本遺跡内の弥生時代における希少な梁間2間の建物と推定するが、SP5006をはじめとして柱

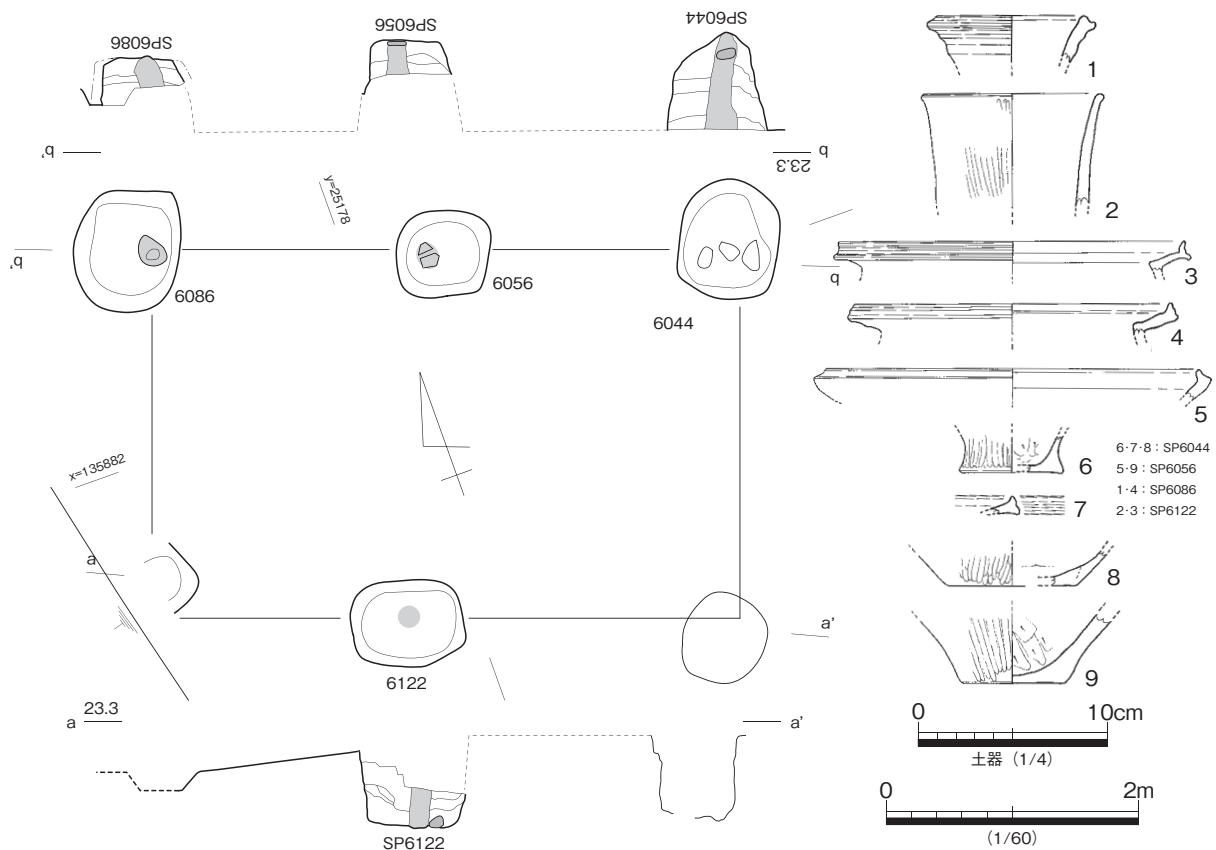


図 382 V区 SB6002 平・断面・出土遺物

材抜取に伴い多量の弥生土器片の投棄が見られことや、古代以降の掘立柱建物とも方位を違えるため、弥生時代の建物のものとして捉える。

図 381-1 ~ 22 は本建物に伴う出土遺物である。これらの中で建物の廃絶時期を示す遺物として SP5006 柱抜き取り穴から出土した資料(図 381-1.3.6.7.11.12.14.15.18.21)がある。甕(図 381-11.14)高杯(図 381-18)の口縁部形態から、本建物は弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定できる。

V区 SB6002 (図 382)

V区北西部で検出した掘立柱建物である。SB6001と切り合い関係をもつが、現地調査では明らかにできなかった。後述する出土遺物からの時期比定では本建物が後出する。梁間1間(3m)×桁行2間(4.5m)を測るが、建物西部が28次調査地へ延びるため、床面積は増加する可能性が高い。また、梁間3mの長さは、本遺跡及びその周辺における弥生時代の掘立柱建物で長い部類に属する。柱穴の平面形は隅丸長方形を基調としており、弥生時代の基盤層に由来した黄色粘土ブロックを裏込土にもち、柱痕部分は黒褐色粘土から成る。柱穴の残存深度は良好な箇所では約0.7mを測るが、上面を古墳時代後期のSH6003に大きく削平されていることを考慮すれば、構築当初は1mを越える深度を有していたことが推定できる。

図 382-1 ~ 9 は出土遺物である。弥生中期後半期のものに混って、細頸壺(図 382-2)や甕底部(図 382-9)など時間的にやや後出する資料がみられる。これらの出土遺物の特徴から、本建物は弥生後期前

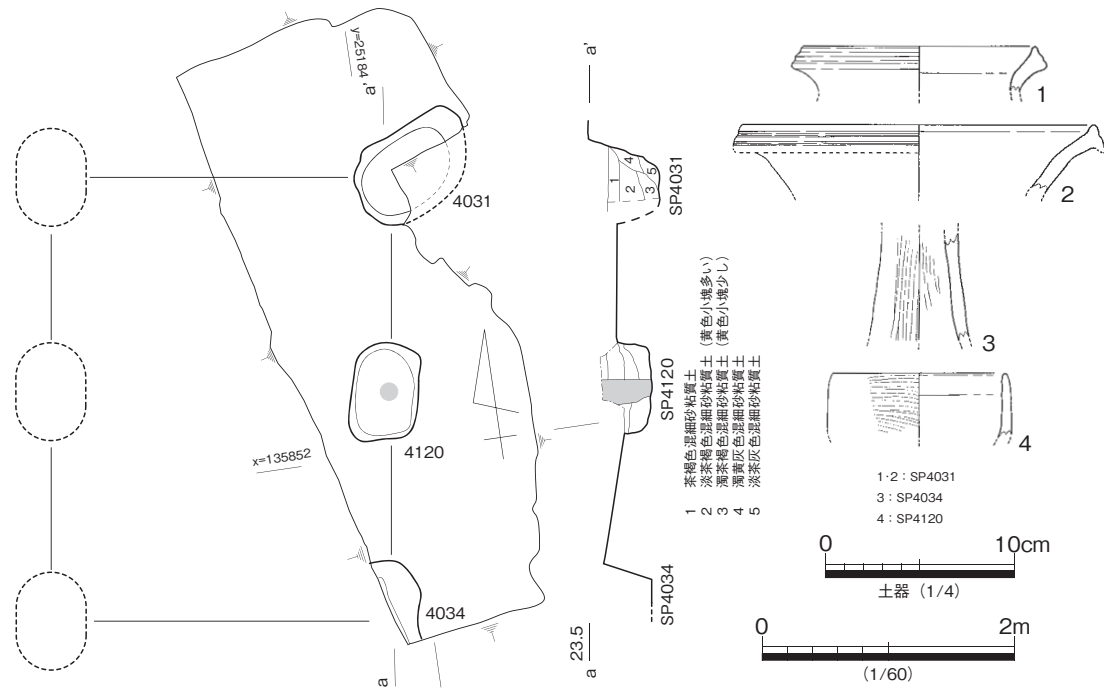


図 383 W 区 SB4002 平・断面・出土遺物

半中段階に廃絶したものと推定しておきたい。

W 区 SB4002 (図 383)

W 区西端で検出した掘立柱建物である。調査区壁際において、大形の柱穴 SP4031.4120.4034 が直線的に並ぶ状況を確認し建物の符合を与える。対面する桁行柱列が東西どちらに存在するのかについては、確定できない。西側に想定すれば 28 次調査地に存在していることから、今後の報告によって、この想

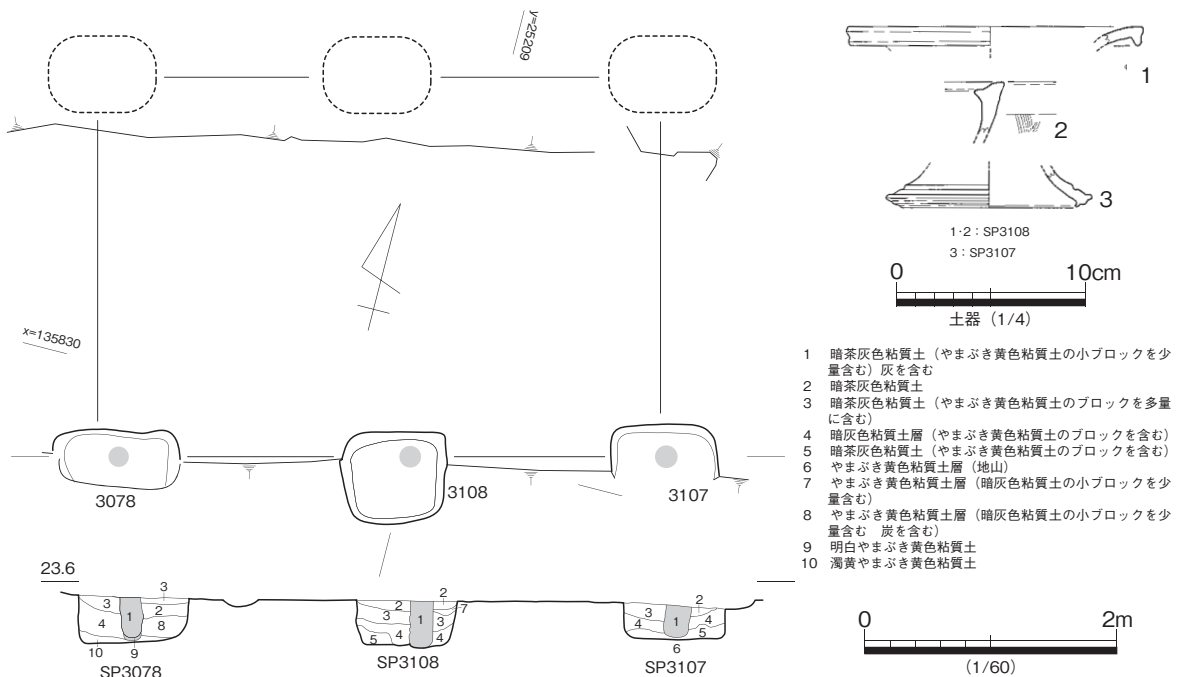


図 384 I -3 区 SB3001 平・断面・出土遺物

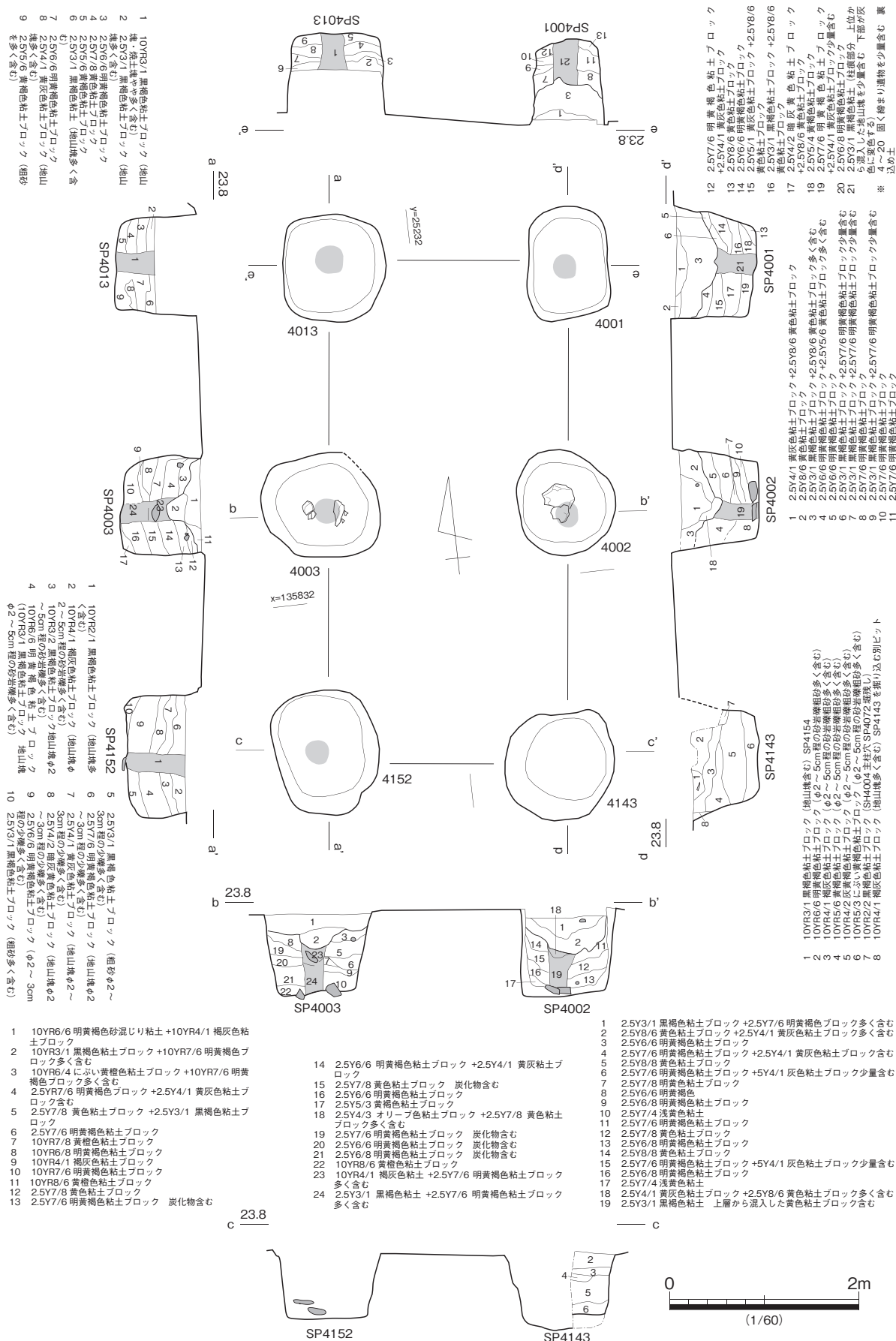


図 385 I-4 区 SB4001 平・断面

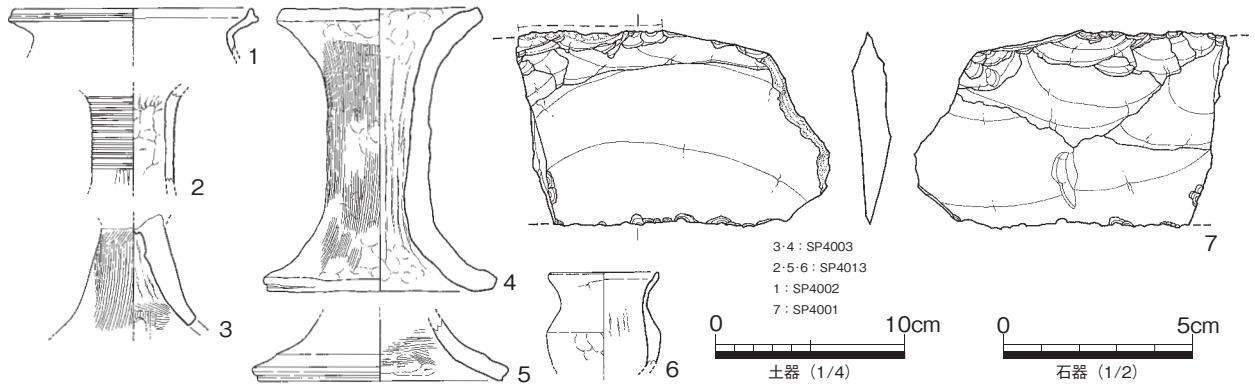


図 386 I -4 区 SB4001 出土遺物

定の妥当性が検証されるだろう。裏込土は基本層序IV層に由来した黄灰色シルトから成る単位の粗いブロックであり、SP4120 は直径約 20cmの柱痕が確認される。

図 383-1 ~ 4 は出土遺物である。広口壺 (図 383-2) の形態や退化した凹線文から、本建物は弥生後期前半古段階に帰属するものと考えておきたい。

I -3 区 SB3001 (図 384)

I 区北部で検出した掘立柱建物であり、古墳中期の SH3001 に切られる。隅丸方形の柱穴列を確認したが、南側で対応する柱列が見られないため、北側の攪乱坑に存在するものと推定し、現状の柱穴列は南側桁行として提示する。この場合の梁行は、3m 以上と推定される。全ての柱穴で直径約 20cmの柱痕を確認し、基盤層 (IV層) に由来する細かなブロック土を裏込土としている。

出土遺物の内、広口壺 (図 384-1) の形態から、弥生後期前半期でも中段階に属する建物と推定しておく。

I -4 区 SB4001 (図 385・386)

I 区北東部で検出した掘立柱建物である。弥生後期後半期の SH4004 に切れ、弥生前期埋没の SD4002 を切り込む。現状で梁行 1 間 (2.5m) × 桁行 2 間 (5.2m) の柱構造をもち、想定される床面積は 13 m² である。南北に攪乱坑が迫るが、現状の柱間から推測して、建物規模や柱構造は確定できる。各柱穴は、一辺が 1m 超える大形の隅丸方形を呈し、残存深度も約 0.8m と深いものの、柱痕は直径約 20cm と他の弥生時代の掘立柱建物と変わらないものである。

全ての柱穴で、中位まで柱材の抜き取り及び、その下部に柱痕が遺存する。柱痕下部に板状流紋岩の根石をもつピットや、黄色粘土ブロックから構成される裏込土中にそれが詰石として含まれるピットがある。また、SH4005 と重複する南東・南西隅柱は、構築面が砂礫層 (V層) となっており、裏込土も砂礫を多く含むものとなっている。本建物は、出土遺物から弥生後期前半期に位置付けられるが、弥生中期後半期の掘立柱建物と比較して、柱間が長く、柱穴規模が大きいなど相違点が指摘できよう。

出土遺物の内、SP4003 の柱抜き取り穴から出土した高杯脚 (図 386-3) 器台 (図 386-4) の形態から、本建物は弥生後期後半新段階に廃絶したものと推定しておく。

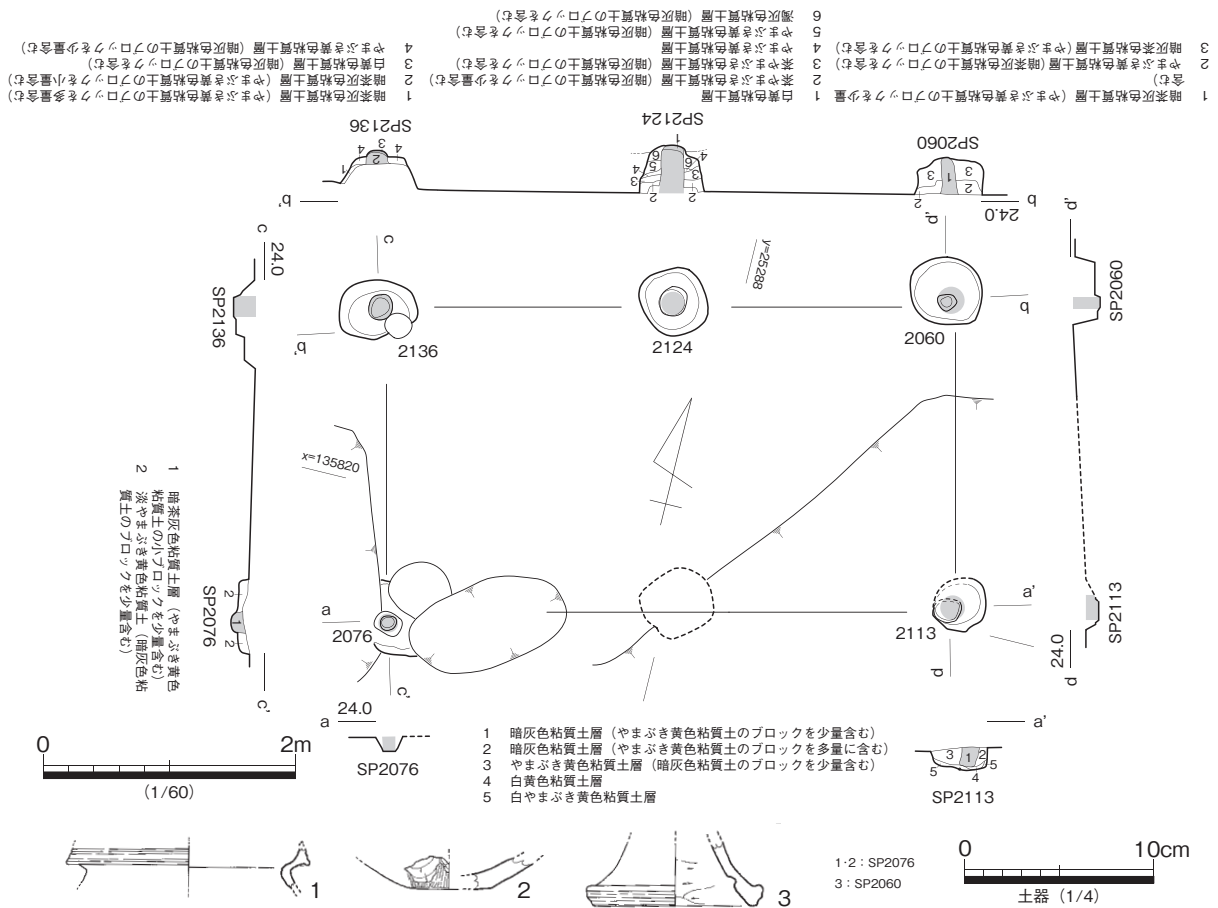


図 387 II -2 区 SB2002 平・断面・出土遺物

II -2 区 SB2002 (図 387)

II -2 区南東部で検出した掘立柱建物である。古墳後期の SB2001、2005 と平面的に交錯し、SB2005 に切られる。梁行 1 間 (2.4m) × 桁行 2 間 (4.5m) の柱構造をもち、床面積は 10.8m² を測る。各柱穴の平面形は隅丸方形を基調とし残存深度はやや浅いが、本建物周辺は後世に極度の削平を受けていることを考慮する必要がある。

図 387-1 ~ 3 の出土遺物の内、図 387-1.2 は南西隅柱 SP2076、図 387-3 は北東隅柱 SP2060 から出土した資料である。壺底部 (図 387-2) は、外面に焼成破裂痕が確認できる。甕口縁 (図 387-1) や壺底部 (図 387-2) の形態から、本建物は弥生後期前半中段階に帰属するものと推定しておきたい。

II -2 区 SB2007 (図 388)

II -2 区北東部で検出した掘立柱建物である。弥生後期後半の SH4025 を切り込む。北東隅柱を攪乱坑で滅失することや柱穴の残存深度が浅いなど否定的な要素もあるが、現状の柱穴配置を優先し現地調査の段階で建物復元を行った。各柱穴の平面形は概ね円形を呈しているが統一性はみられず、弥生中期後半期の掘立柱建物と比べ弛緩した状況となる。

出土遺物 (図 388-1 ~ 4) は全て北西隅柱 SP2030 から出土した資料である。甕 (図 388-1.2)、壺底部 (図 388-3)、香東川下流域産の甕 (図 388-4) の形態からみて、本建物は弥生後期前半新段階に帰属するもの

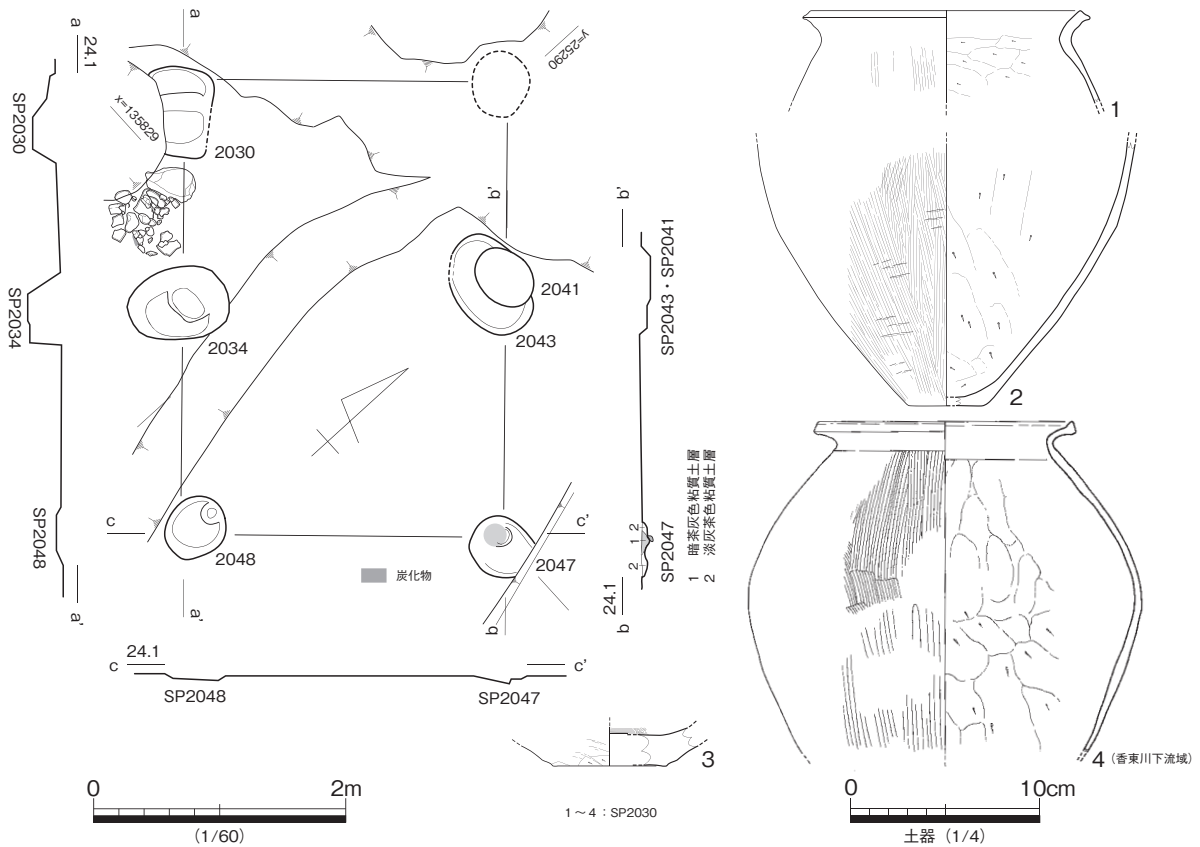


図 388 II -2 区 SB2007 平・断面・出土遺物

と推定しておきたい。

II -4 区 SB4004 (図 389)

II -4 区北部で検出した掘立柱建物である。古墳後期の SH4008.4022、弥生後期後半期の SH4021 に切られる。現状で梁行 1 間 (3.0m) × 桁行 2 間 (4.5m) の柱構造をもつ。各柱穴は一辺が 1m 前後を測る大形の隅丸方形を呈し、IV 層に起因する黄褐色シルトのブロックを多く含む硬く締まった裏込土をもつ。確認が可能であった隅柱の柱痕は、直径約 0.3 ~ 0.35m を測るもので、大形の柱材が使用されたことが窺い知れる。現状での柱穴深度は約 0.7m を測るが、後世の遺構形成に伴う削平を考慮すれば、構築時には 1m を超える柱穴掘り方を有していたことが想定できよう。

図化可能な出土遺物には、図 389-1 ~ 5 に示す弥生土器がある。SP4636 から出土した焼成破裂土器である壺胴部 (図 389-2) や SP4484 から出土した広口壺 (図 389-1) など大半は弥生中期後半期の所産とみられるが、SP4384 から出土した甕頸部片 (図 389-3) は形態からみて弥生後期前半期に下る資料である。甕 (図 389-3) の特徴から、本建物は弥生後期前半古段階に帰属するものと推定しておきたい。

II -4 区 SB4005 (図 390)

II -4 区東部で検出した掘立柱建物である。現状で梁行 1 間 (1.8m) × 桁行 2 間 (3.4m) の柱構造をもつ。柱穴の小形の円形を基調としており、直径約 0.15m の柱痕がみられる。

図化可能な出土遺物がないけれども、小片を含めて須恵器・土師器片がみられない。埋没土の特徴か

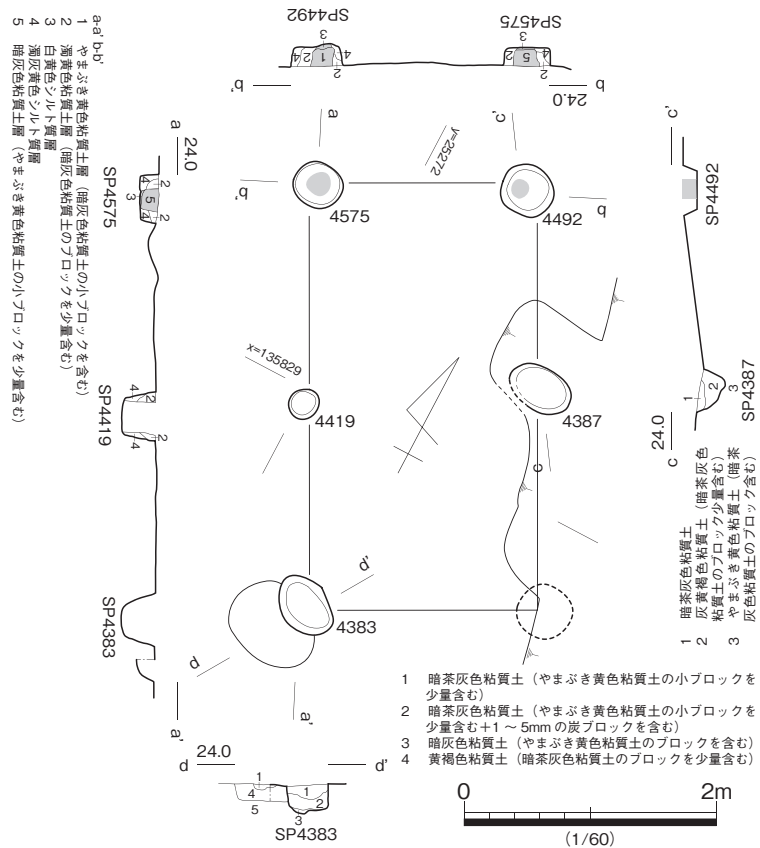


図 390 II -4 区 SB4005 平・断面

ら、弥生時代に帰属する可能性が高く、小形円形の柱穴掘り方をもつことなどから、概ね弥生後期前半期と推定しておきたい。

II -4 区 SB4006 (図 391)

II 区東部で検出した掘立柱建物である。現状で梁行 1 間 (3.6m) × 桁行 3 間 (7.3m) の柱構造もち、床面積は約 26.3m² を測る。柱穴は大形の隅丸方形を基調としており、直径約 30 ~ 35cm の柱痕が遺存するもので、弥生時代の掘立柱建物の中では柱穴・柱痕規模が大形の部類に属するといえる。柱穴の残存深度が浅いのは、後世の削平を考慮する必要がある。後述するように、出土遺物から本建物は弥生後期前半期の所産とみられ、やや長い梁行長や大形の柱穴掘り方など、同時期に見られる掘立柱建物と共通する点が多い。

出土遺物 (図 391-1 ~ 5) は、弥生中期後半期のものが主体を占めるが、北西隅柱 SP4388 から出土した甕 (図 391-3) が含まれることから、本建物の帰属時期を弥生後期前半古段階と推定しておきたい。焼成破裂痕が確認できる直口壺 (図 391-1) や甕 (図 391-4) は、弥生中期後半期の所産であり、先行遺構からの混入品と考えられる。高杯脚 (図 391-6) は、脚端上方を外側に摘み出し外面に列点を施すもので、吉備からの搬入品と考えられる。時期的には中期末葉の所産であろう。

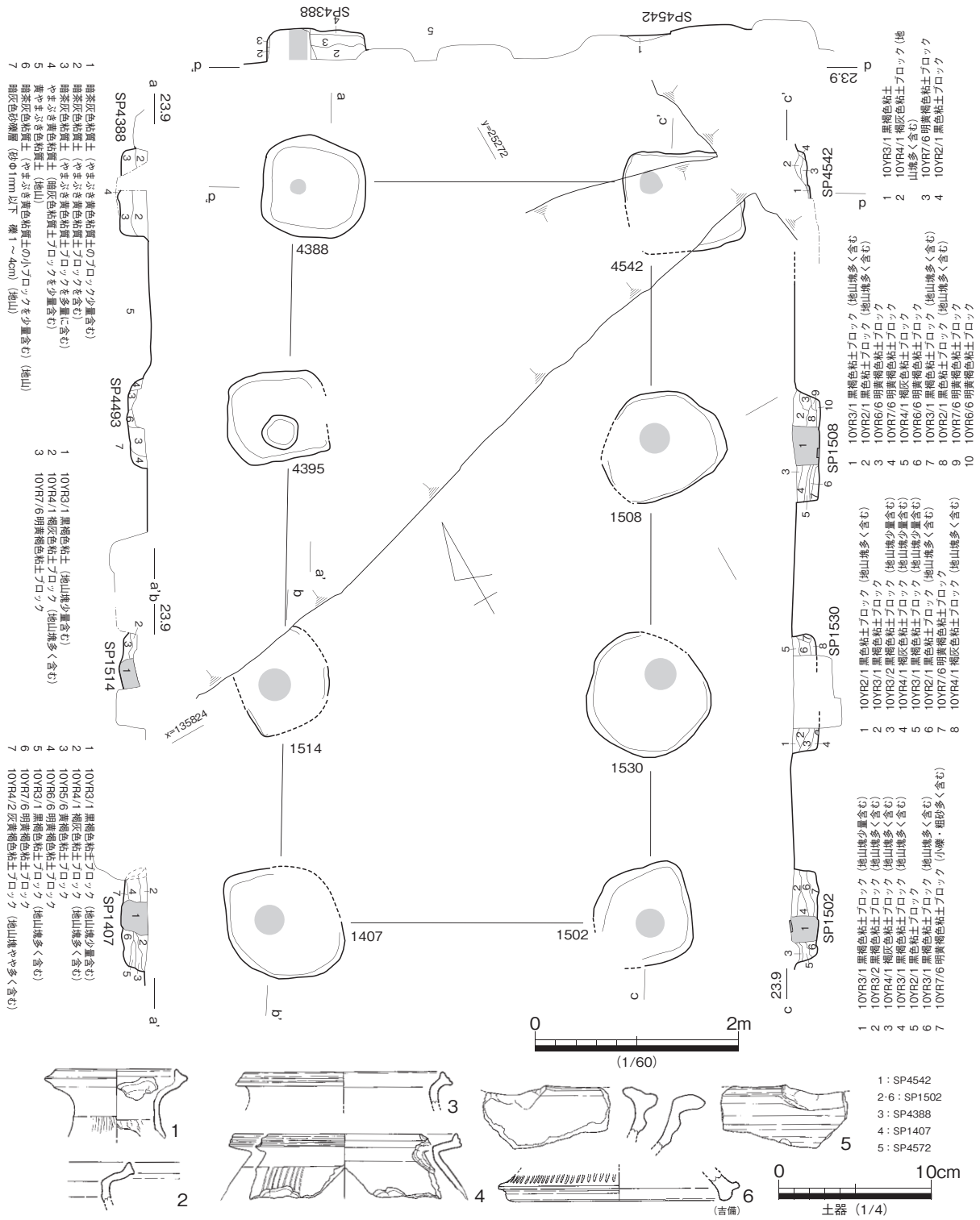


図 391 II-4 区 SB4006 平・断面・出土遺物

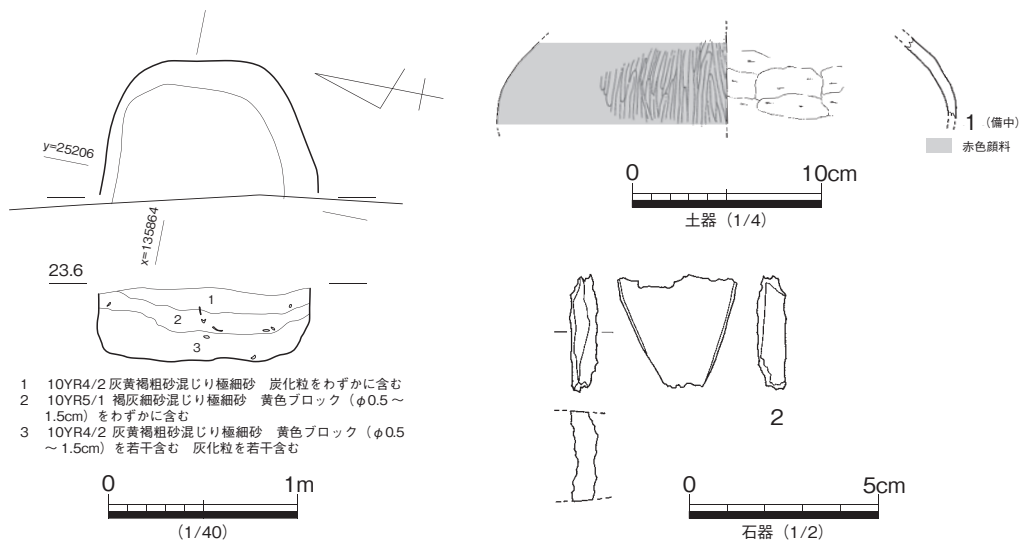


図 392 N 区 SK7301 平・断面・出土遺物

N 区 SK7301 (図 392)

N 区南西部で検出した土坑であり、弥生後期後半期の SH7005 に切られる。西半分が攪乱坑で滅失するが、楕円形を呈する平面形をもつものと考えられ、残存深度は約 0.4m を測る。埋没土は黄色粘土のブロックと炭化物を僅かに含み、断面形は箱形に近い。

図 392-1.2 は出土遺物である。壺胴部 (図 392-1) は胎土中に雲母・角閃石粒を多く含み、外面をベンガラにより赤彩するもので、備中地域からの搬入品と考えられる。図 392-2 は結晶片岩製の柱状片刃石斧の刃部片であり、刃部面以外は剥離し残存しない。

S 区 SK1014 (図 393・394)

S 区北部で検出した土坑である。弥生終末期の SH1068 に切られ、弥生中期後半期の SH1064 を切り込む。上層と下層で平面形態が異なり、上層は約 2.5 × 2.4m の隅丸方形、下層は直径約 2m の円形となり、残存深度は約 1m を測る。下層は黒褐色粘土を主体とした滞水状況を示す自然堆積層であり、部分的に崩落土が混入する。IV 層に起因したブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。深度や断面形態と下層の滞水層の存在から井戸である可能性が高い。

遺物は上層と下層の二つに大別して一括して取り上げたが、下層出土の椀形高杯 (図 393-14) 以外は全て破片化している状態であった。図 393-1 ~ 19 は下層出土資料である。椀形高杯 (図 393-14) は円錐脚をもち、口縁端部外面に波状文を施すもので、弥生後期後半古段階以降に出現する新しい型式である。図 394-1 ~ 36 は上層出土遺物である。高杯 (図 394-23) は口縁端部を主に外側へ拡張する形態をもつも

地区	遺構名	時期	長軸 (m)	短軸 (m)	深度 (m)	断面形	備考
M 区	SK6001	弥生終末期古段階	1	0.6	0.4	U 字形	
M 区	SK6005	古墳前期前半古段階	直径 1.3	-	0.2	逆台形	
N 区	SK7301	弥生後期前半古段階	-	1.2	0.4	箱形	搬入土器 1 (備中)
S 区	SK1014	弥生後期前半古段階	2.5	2.4	1	U 字形	搬入土器 2
W 区	SK4006	弥生後期前半古段階	-	0.7	0.35	逆台形	搬入土器 1
Z 区	SK7002	古墳前期前半新段階	0.8	-	0.15	逆台形	
II -4 区	SK4003	弥生終末期	2.3	0.7	0.2	逆台形	

表 11 土坑一覧

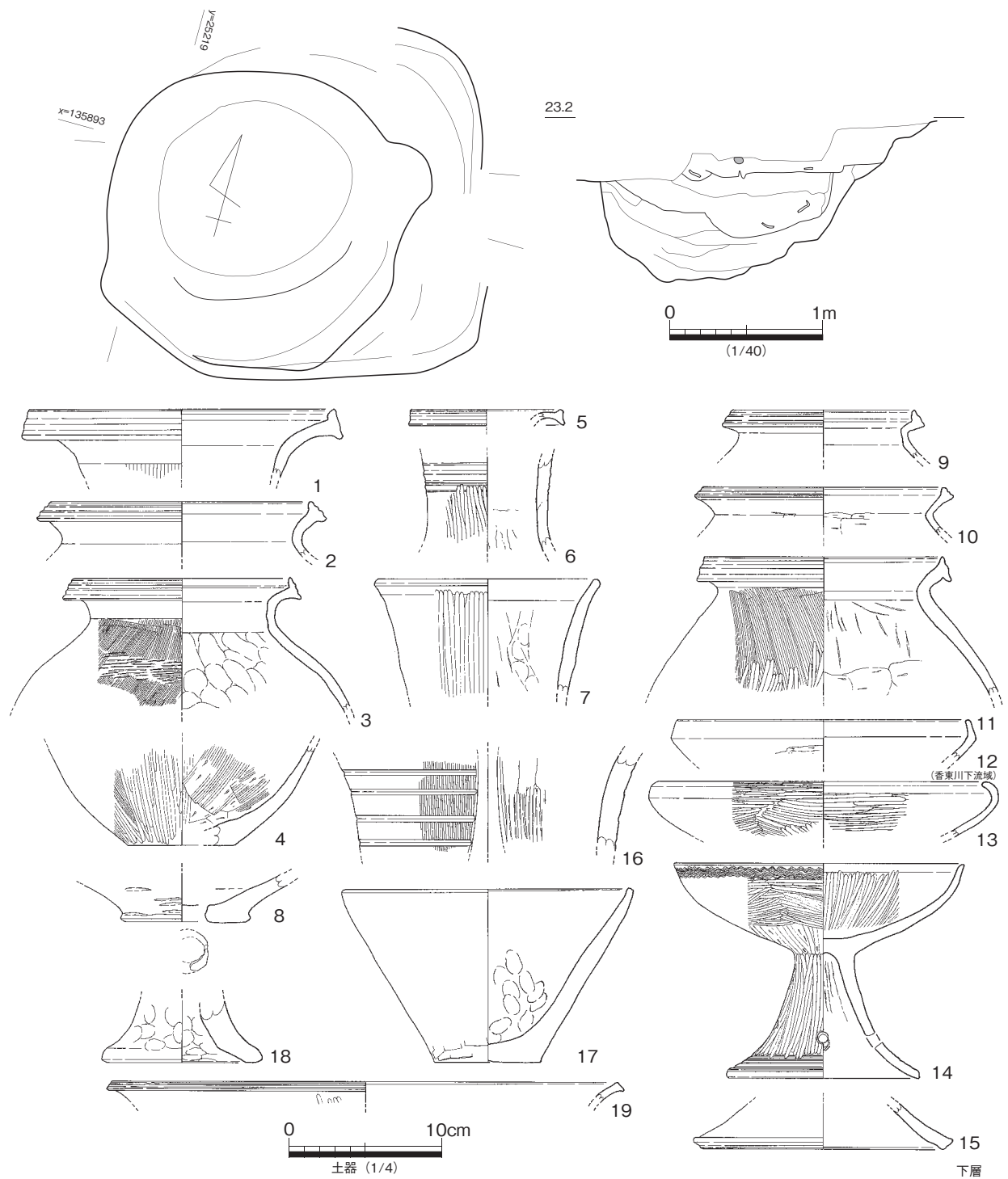


図 393 S区 SK1014 平・断面・出土遺物 (1)

ので、吉備地域からの搬入模倣土器と考えられる。高杯(図 394-28)は、外面に複数の凹線文帯をもつもので、備後北部地域からの搬入・模倣土器の可能性が高い。また、脚部の径がやや大きく、内面削りが確認できないことからみて、台付鉢となる可能性もある。

これらの出土遺物の型式学的な特徴は、上層と下層で顕著な違いは見られないことから、本遺構は弥生後期前半古段階に掘削され埋め戻されたものとする。

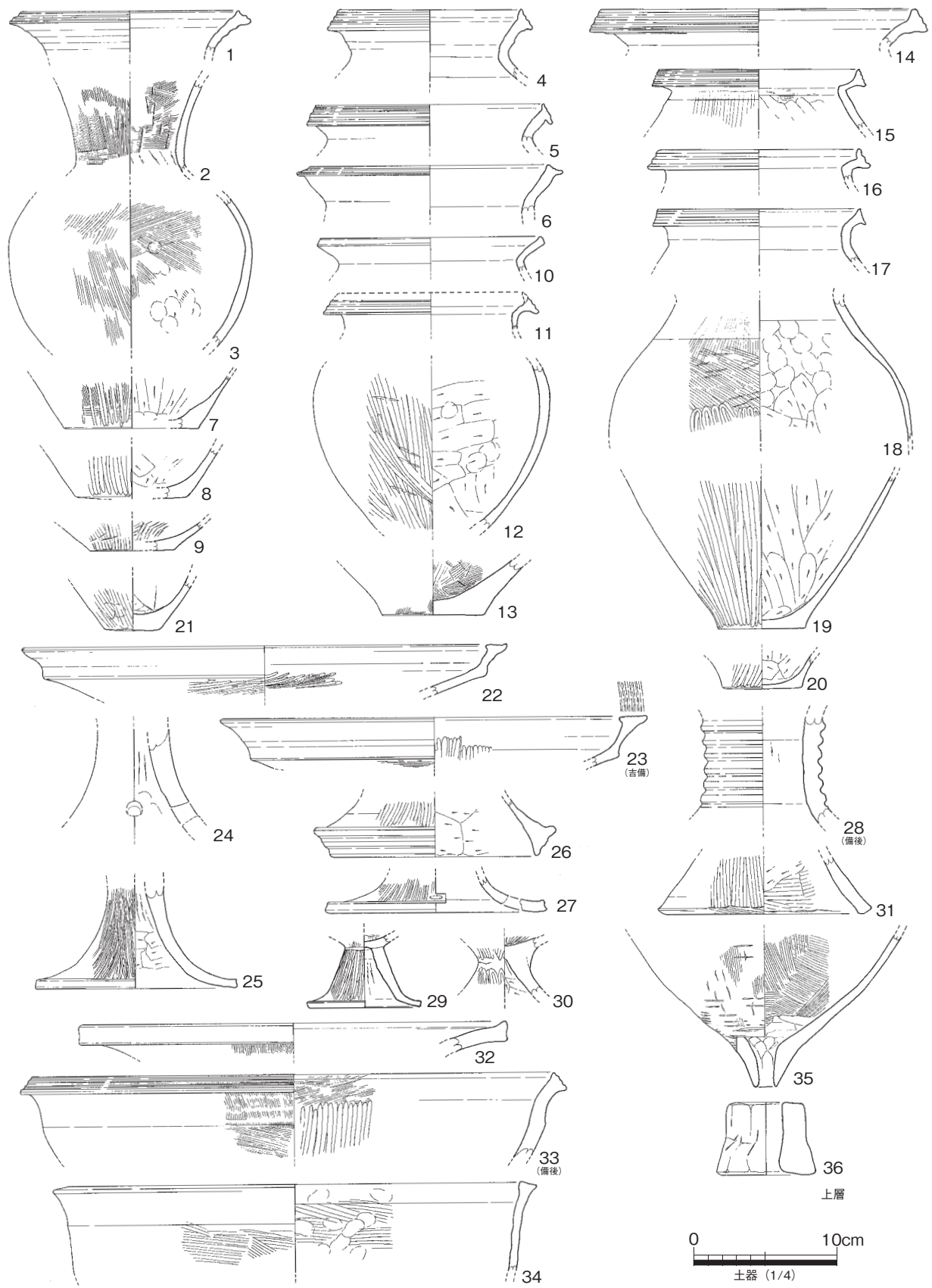


图 394 S 区 SK1014 出土遺物 (2)

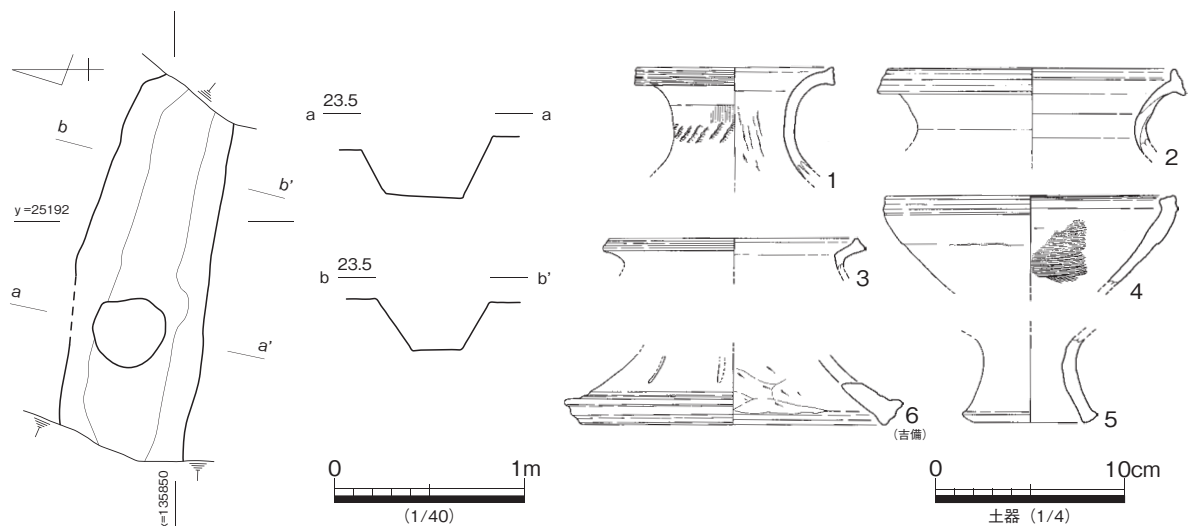


図 395 W 区 SK4006 平・断面・出土遺物

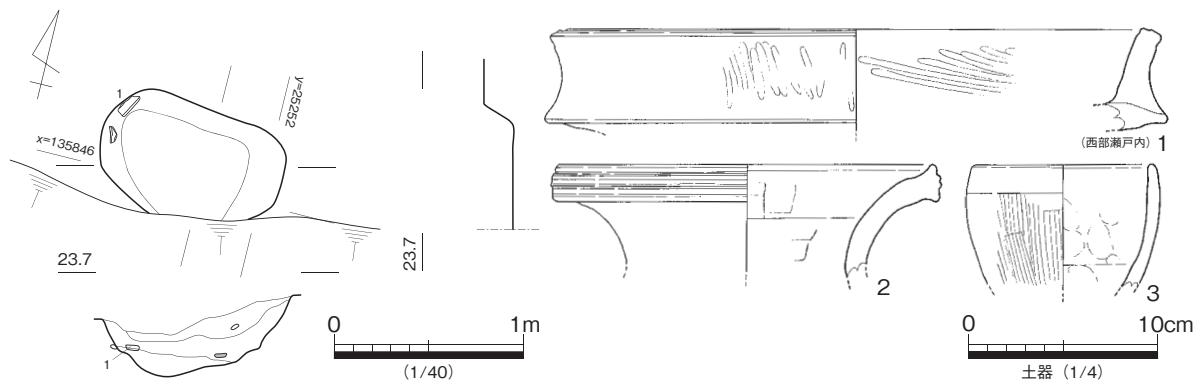


図 396 M 区 SK6001 平・断面・出土遺物

W 区 SK4006 (図 395)

W 区南西部で検出した舟形土坑である。現状で長さ約 1.9m 幅約 0.7m 残存深度約 0.35m を測る。埋没土はⅣ層起源の黄灰色粘土のブロックを多く含むシルトで満たされており、掘削後の早期に埋め戻しが行われたとみられる。

図 395-1～6 は出土遺物である。器台脚(図 395-6)は、縦位のスリット状の透かし孔を施し、脚端部上面を斜め上方に拡張するもので、吉備地域からの搬入・模倣土器と考えられ、他の資料に比較して弥生後期前半古段階まで下の資料とみられる。

M 区 SK6001 (図 396)

M 区南東部で検出した土坑である。長軸約 1m を測る楕円形を呈し、上層にみられる黄色粘土から成るブロック土で埋め戻される。下層に顕著な炭化物層は認められなかったが、規模的な点からみて竪穴住居の炉跡の可能性も考えられるが、島状に取り残された遺構面で検出しており明確にはできなかった。

出土遺物(図 396-1～3)から弥生終末期古段階に廃絶したものと推定される。複合口縁壺(図 396-1)は、形態から西部瀬戸内系と考えられる。

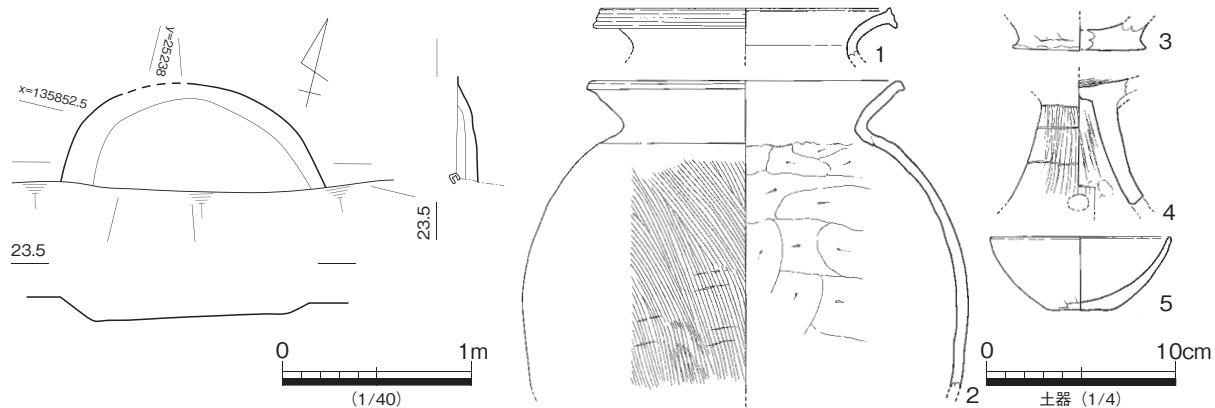
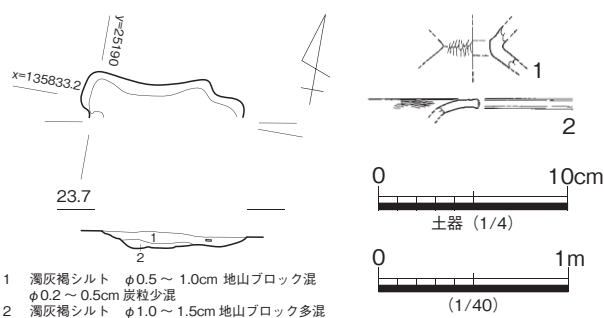


図 397 M 区 SK6005 平・断面・出土遺物



- 1 濁灰褐シルト φ0.5～1.0cm 地山ブロック混
φ0.2～0.5cm 炭粒少混
- 2 濁灰褐シルト φ1.0～1.5cm 地山ブロック多混

図 398 Z 区 SK7002 平・断面・出土遺物

M 区 SK6005 (図 397)

M 区中央部で検出した土坑であり、古墳後期の SH6028.6029.6030 に切られる。南半分を攪乱坑により滅失するが、直径約 1.3m の円形土坑と推定でき残存深度は約 0.2m を測る。出土遺物は弥生後期前半から終末期にかけての時間幅が認められる土器群が伴うが、組み合わせは明確にはできなかった。

出土遺物の内、甕 (図 397-2) の形態から古墳前期前半古段階に廃絶したものと考えられる。

Z 区 SK7002 (図 398)

Z 区南西部で検出した土坑である。現状で長軸約 0.8m 残存深度約 0.15m を測り、南辺を攪乱坑で滅失するが小型の楕円形を呈するものとみられる。埋没土には炭化物が含まれることや規模的にみて堅穴住居に伴う炉跡である可能性が高い。

出土遺物には、精製品の土師器直口壺 (図 398-1) と甕 (図 398-2) がある。いずれも時期比定に難があるが、甕 (図 398-2) の大きく間延びした口縁部形態から、本遺構は古墳前期前半期に帰属するものと考えたい。

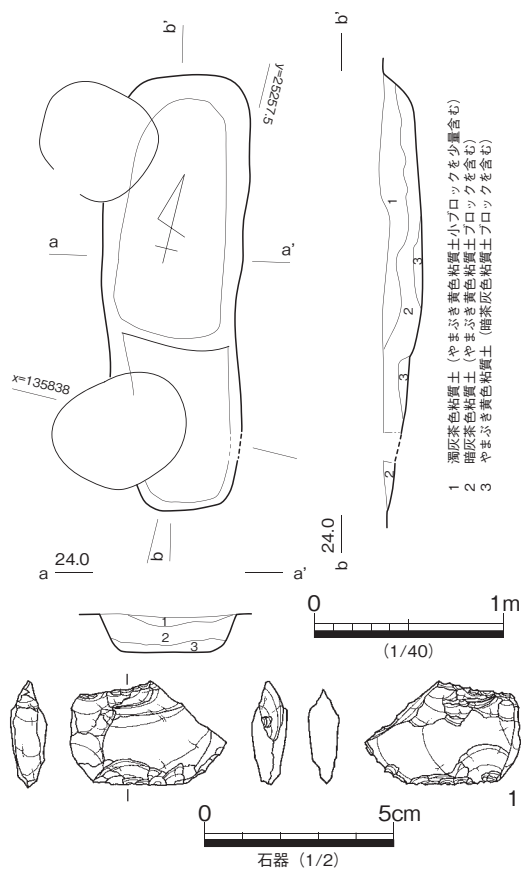


図 399 II -4 区 SK4003
平・断面・出土遺物

II -4 区 SK4003 (図 399)

II -4 区北東部で検出した土坑である。古墳後期のSH4011に切られる。長軸 2.3m 短軸 0.7m の隅丸長方形を呈し、断面は比較的緩やかな逆台形を呈する。

出土遺物は、弥生土器とみられる土器碎片の他に、サヌカイト製楔形石核(図 399-1)がみられるのみである。時期決定に課題を残すが、須恵器・土器器片がみられないことや遺構の切り合い関係を考慮して、弥生終末期の年代を想定しておきたい。

K 区 ST3001 (図 400・401)

K 区南部で ST3002 と並列する形で検出した土器棺墓である。掘り方の南部を攪乱坑で滅失するが、直径約 0.65m の円形の墓壇に、棺身となる大型壺を西へ傾斜させる形で埋置する。断面図作成のラインから外れているが、東寄りの底面付近に大型壺の底部が残存している。検出状態からみて、棺身の一部と棺蓋の多くは、削平により消失したものと考えられるが、図 401-2 の大型鉢は棺

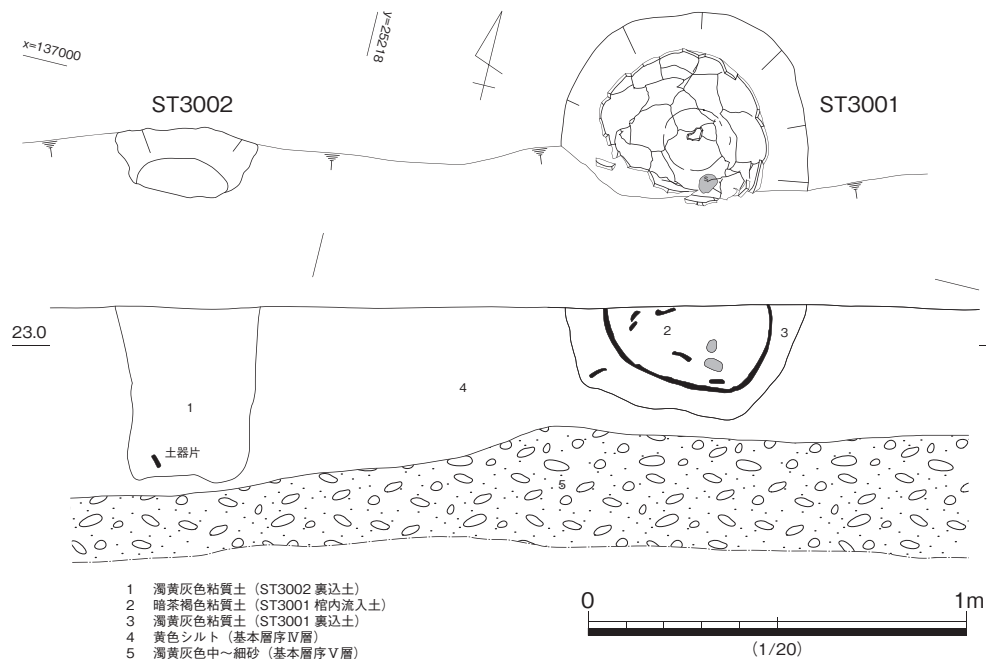


図 400 K 区 ST3001・ST3002 平・断面

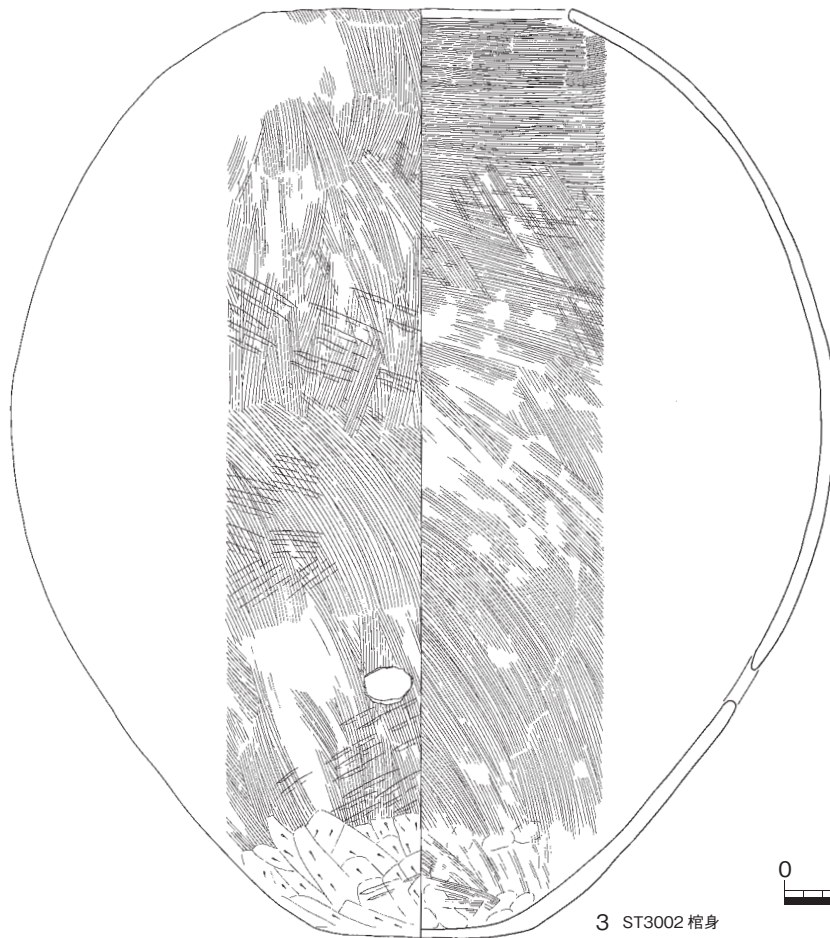
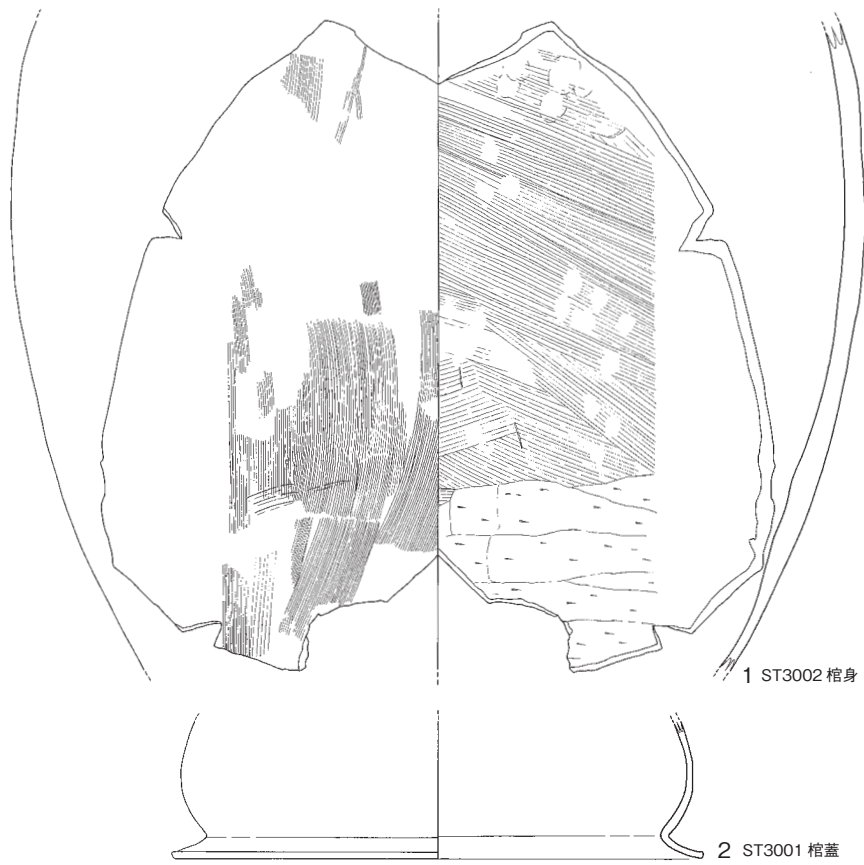


图 401 K区 ST3001·ST3002 出土遺物

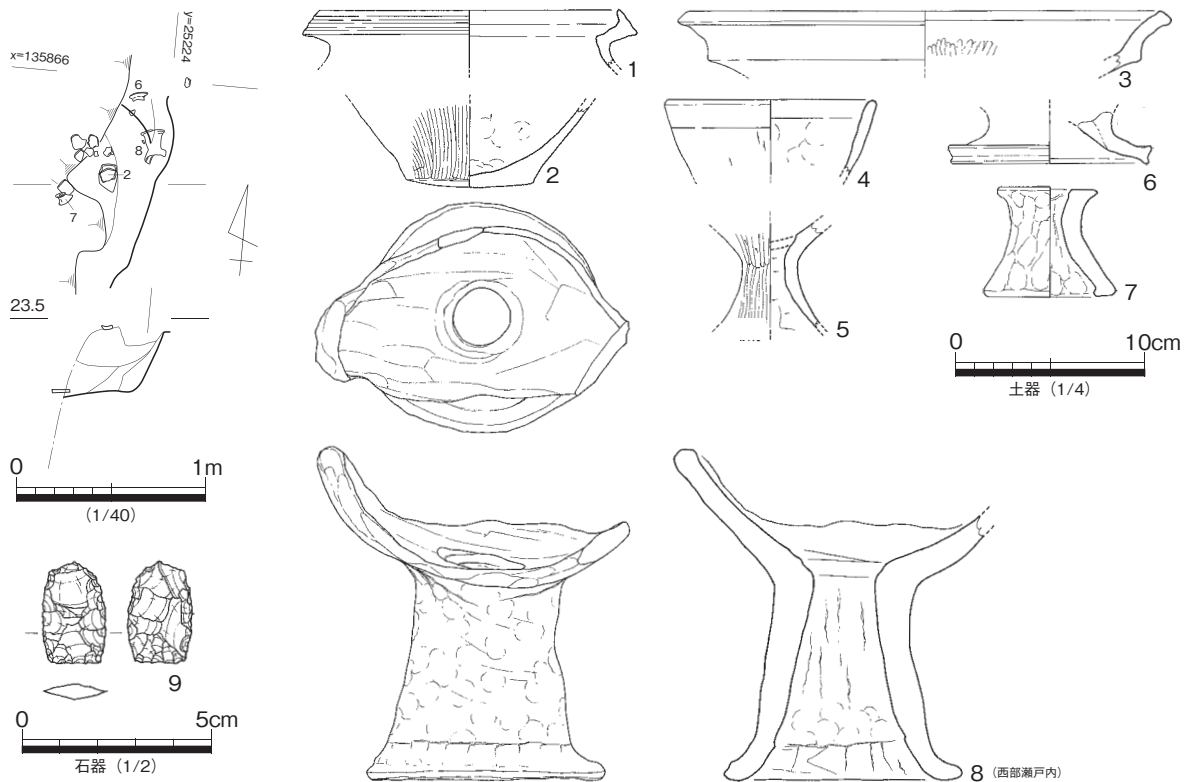


図 402 O 区 SX8201 平・断面・出土遺物

身内部の流入土から出土しており、法量からみて棺蓋の一部であった可能性が高い。

棺身の大型壺（図 401-3）は、頸部より上位を欠損するが、埋設時に打ち欠かれた可能性が高い。また、内部の拳大の砂岩礫は構築当初から封入されていた可能性もある。

棺身の大型壺（図 401-3）は、平底を辛うじて留めるものの、外面を削り込むことで丸底に仕上げていることや、棺蓋（図 401-2）の鉢の口縁形態から、弥生終末期の新段階の埋設時期を想定しておきたい。

K 区 ST3002（図 400・401）

K 区南部で ST3001 と並列する形で検出した土器棺墓である。攪乱坑によって大きく破壊されるため、北側掘り方の一部が辛うじて残存するに過ぎない。掘り方内において大型壺の胴部片が壁面において直立した状態で検出されたが、精査を行った段階で遊離し、棺身の傾斜角等の十分な出土状況の記録が取れていない。出土位置や破片の状況から見て、棺身の可能性が高いと考える。

図 401-1 は胴長の大型壺の胴部片であり、胎土中に雲母片を多く含む。全体系は不明ながら ST3001 と同じく弥生終末期に帰属するものと考えられる。

O 区 SX8201（図 402）

O 区南部で検出した土坑で、攪乱坑によって東側の壁面と底面の一部を残すのみとなっており、全体形状は不明である。SH8206 と重複する位置にあるが遺構での切り合い関係は明確にはできなかった。

出土遺物には時間幅が認められるが、図 402-2 の甕底部や図 402-3 の高杯の形態から、弥生後期前半期の所産と推定しておく。図 402-8 の支脚は、やや太い脚部をもち、上端部に双方向の突起を施すもの

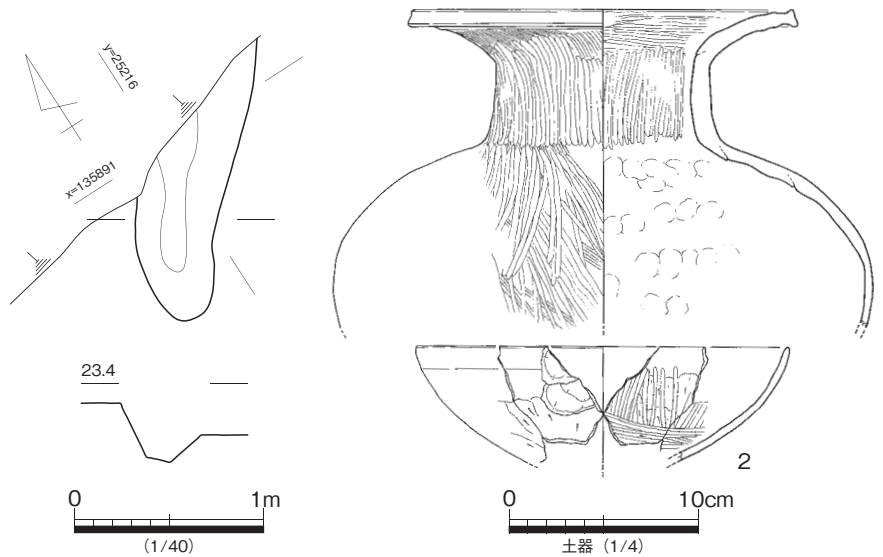


図 403 S区 SX1032 平・断面・出土遺物

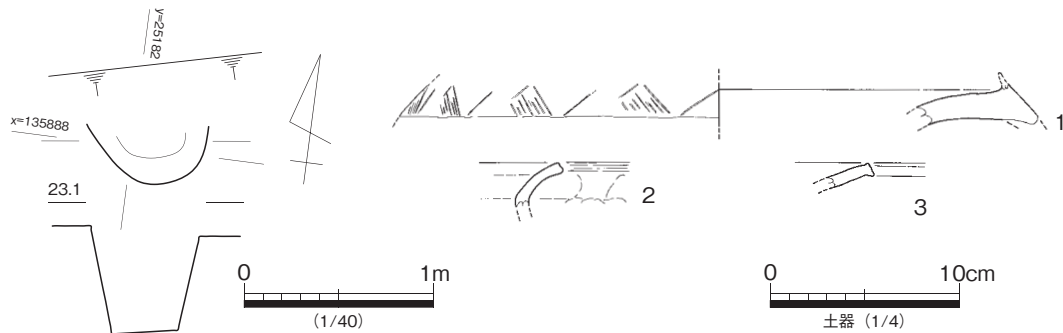


図 404 V区 SX6006 平・断面・出土遺物

であり、周防など西部瀬戸内地域に散見される形態をもつ。

S区 SX1032 (図 403)

S区中央部北寄りで検出した土坑である。弥生後期後半期のSH1040を切り込む。幅約0.5m長さ約1.5m以上を測り、北側を攪乱坑で滅失するが、舟形の平面形をもつと考えられる。出土遺物には、広口壺(図403-1)と鉢(図403-2)がある。いずれも弥生終末期中段階に位置付けることができ、鉢(図403-2)の外表面には焼成破裂痕が確認できる。

V区 SX6006 (図 404)

V区北西部で検出した遺構である。直径約0.6m残存深度約0.6mを測る中型の柱穴となる可能性が高い。調査区際で確認していることもあり、組み合わせの検討ができなかった。

出土遺物の内、広口壺又は複合口縁壺(図404-1)は、古墳前期前半古段階の時期を示しており、当該期に確認されていない掘立柱建物や大型住居の柱穴となる可能性がある。

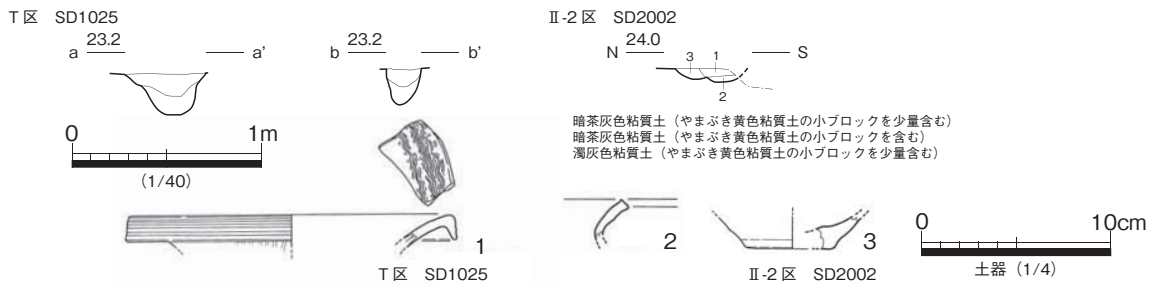


図 405 T 区 SD1025, II -2 区 SD2002 断面・出土遺物

T 区 SD1025 (図 405)

T 区東部の弥生終末期に属する SH1022 の下層で検出した溝である。上面幅約 0.2～0.5m 残存深度約 0.2m を測り、断面形は U 字形を呈する。延長約 3m に亘って検出しているが、他の同時期の溝や遺構との連絡関係は不明な点が多いが、南西方向に近接してする SH1096 に伴う周溝の可能性もある。

出土遺物は、広口壺の口縁部片 (図 405-1) があり、内面に施文される波状文や口縁部形態などの属性から、弥生後期前半期に比定されるが、詳細な時期比定は困難である。

II -2 区 SD2002 (図 405)

II -2 区南部で検出した溝である。規模や断面形からみて、竪穴住居の残欠の可能性はあるが、特定には至らなかった。出土遺物 (図 405-2.3) から、弥生後期後半新段階の遺構と考える。

地区	遺構名	時期	上面幅 (m)	下面幅 (m)	深度 (m)	断面形	遺物
T 区	SD1025	弥生後期前半	0.2～0.5	0.1～0.2	0.2	U 字形	
II -2 区	SD2002	弥生後期後半新段階	0.3	0.1	0.2	U 字形	

表 12 溝状遺構一覧



付図 旧練兵場遺跡Ⅲ 遺構平面図 (S=1/250)